バカと俺たちの召喚獣

直井刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと俺たちの召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ８０９２Ｔ

【作者名】
直井刹那

【あらすじ】
この小説は『バカとテストと召喚獣』の二次創作です。
オリ主が幼馴染の明久や秀吉、雄二、ムッリーニ等のＦクラスメンバーや翔子や愛子、優子などのＡクラスメンバーとまた、木下優子と秀吉にもう１人の妹がいたり
楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。
明久×瑞樹・明久×美波じゃなきゃダメだ、という人はバックしてください。。
一応原作に沿うようにはしたいと思います。

オリキャラ説明（1）改2（前書き）

この小説は『バカとテストと召喚獣』の二次創作です。オリ主が幼馴染の明久や秀吉、雄二、ムッリーニ等のFクラスメンバーや翔子や愛子、優子などのAクラスと楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。
ほかにもオリ主の妹や木下優子・秀吉に妹がいたりします。また後々新キャラも加わって行く予定です。
明久×瑞樹・明久×美波じゃなきゃダメだ、という人はバックしてください。処女作のため誤字脱字があるかもしれないので見つけた場合指摘してくださるとうれしいです。なるべく原作沿いで行きたいと思っています。
感想お待ちしていますm（＿＿）m

オリキャラ説明（1）改2

〜　オリキャラ設定　〜

主人公

名前　織村（おりむら）　貴浩（たかひろ）

・２－Ｆ所属

・誕生日９月１０日　Ｂ型

・明久とは小学生のころからの親友。交通事故にあい、足に障害を受けている

（手術したので現在は普通に歩けたりする）ただし、走るのは得意ではない。

本人はそのことは気にしていない

そのため、学園から『特別処遇者』になっている。

※観察処分者とほぼ同じであるが、体に受ける痛みのフィードバックが

少しばかり小さい

・現在は、一戸建ての家で双子の妹と二人暮らし。

両親は共に仕事で海外にいる。

家事はでき、料理は明久以上の腕前（特に和食。中華もできる）。

・身長は１６３ｃｍ、脂肪は少なく少し筋肉質

・ポジティブな性格で面白いことが好きでよく明久たちをからかっている。

また競うこと戦うことが好きなので召喚戦争は率先して戦う。

食べることが大好き（特に甘いものや楓のデザート）

・趣味はアニメ鑑賞、料理、ゲーム、写真撮影（デジカメ）

・人当たりが良いが妹を侮辱されることが大嫌い。（ちょっ

とシスコンぎみ）

また、友達思いで侮辱されたりすると怒る

・シスコン気味なので妹へ対する恋愛対象には鋭いが、自分への恋愛感情には疎い

・ちなみに彼女いない歴＝年齢なので本人曰く彼女は欲しい

・力はそこそこ強いが妹や友達が侮辱されたりすると滅茶苦茶強くなる（雄二並）

・写真の技術はムッリーニには勝てないがそこそこの腕を持つ

・朝に弱く妹の楓に起こしてもらっている。睡眠を邪魔されると機嫌が悪くなる。

時には暴走したりする。行事や妹の体調不良などがおきた時は早起きできる

・明久・雄二・秀吉・ムッリーニ・島田とは去年クラスメイトで友達

・高校入学する直前に秀吉の家の近所引っ越した（父親の気まぐれで）

・得意科目は数学と日本史と保健体育、苦手科目は英語

※本来ならＡクラスに入ることができる成績だが隠していたほうが

面白そうという理由で実力を出していない

現在はＣクラス程度の点数にしている

〈召喚獣〉

服装：黒い甲冑（日本風）

武器：日本刀と拳銃（総弾数８発）の各１つ

※拳銃はリロードに１０秒かかる

またリロード１回につき１０点消費

腕輪：重力変化（重力を付加または軽減）

・１立方メートル：１０点消費して発動できる（１分間）

例）３立方メートルを５分間なら

３×１０×５＝１５０点消費

・敵単体に重力を変化（１分間）：１０点消費

・武器に重力付加：１０点消費（一度エリアを出るか任意で）

・重力の玉を放つ（人間の握り拳ぐらいの大きさ）：５０点消費

名前　織村（おりむら）　楓（かえで）

・２－Ｆ所属

・貴浩の双子の妹

・誕生日９月１０日　ＡＢ型

・アイドルなみの容姿、胸は美波より少しばかし大きい。黒髪のロングヘア

身長は１６０ｃｍと女性にしては高いほうなのでコンプレックスを抱いている

・生まれつき体が弱い

・演劇部に所属（小さい頃に母と劇を見に行った時感動し、興味を持ったから）

・将来の夢は演劇俳優になること

・趣味は劇を見ること。読書、料理（デザート中心）

・普段は優しいが怒ると物凄く怖い

兄や友達が侮辱されることが大嫌い

・しっかり者で家事は一通りできる。料理も得意（特に洋食やデザート系）

・命と優子、翔子、愛子とは去年クラスメイトで友達

・得意科目は文系一般と英語、苦手科目は物理

※本来ならＡクラスのトップ１０内に入る成績だが、試験前日から

熱を出してしまい試験を受けていない

〈召喚獣〉
服装：着物
武器：弓
・剛烈：通常より威力のある弓を放つ（5点消費）
・五月雨：複数の矢を同時に放つ（1羽に10点消費）
・ワイルドギース：剛列と五月雨を組み合わせたもの（150点消費）
腕輪：銀翼（銀色の翼を出して空を飛ぶ）
・空中浮遊：30点消費（3分間）
※他の召喚獣を抱えて飛ぶことも可能だが1体のみその場合は2倍点数を消費
・羽撃（羽を飛ばし攻撃する）：20点消費
※1回で20発飛んで行く

名前　木下（きのした）　命（みこと）
・2－F所属
・木下優子・秀吉の妹
・誕生日10月25日　A型
・見た目は優子や秀吉そっくりだが胸は翔子と同じ位ある
・優子と秀吉を自慢の姉と兄と思っている
・一度決めたことは貫きとうす意思が強い（少し頑固者）
・勉強は得意ではないがそこそこでき（Cクラス並）、料理は得意
・生まれつき体が弱く病気になりやすい。そのことで優子や秀吉に迷惑かけて
いることがコンプレックスで、2人の前では無理をしていまうことがある。
・趣味は読書や料理、ぬいぐるみ収集（部屋にたくさんある）

・楓や翔子、愛子とは去年クラスメイトで友達
・明久の事が好き
・得意科目は家庭科や現国、苦手科目は数学

〈召喚獣〉
服装：巫女服
武器：十文字槍
腕輪：回復
・範囲内（２ｍ）の召喚獣の点数を全回復できる（自分は含めず）
※１回の召喚戦争で３回使用できる
回復は召喚戦争始まった時の点数
効果発動中は本人の召喚獣は動くことができない
回復には自分を除く召喚獣の数×２０秒＋３０秒
例）召喚獣　５体
５×２０＋３０＝１３０（２分１０秒）
・自分の回復は１回の戦争で１度のみ（全回復）

オリキャラ説明（1）改2（後書き）

はじめまして。直井刹那っす。
この小説を読んで頂きありがとうございます。
処女作のため誤字脱字があるかもしれないので見つけた場合指摘してくださるとうれしいです。
また今後オリキャラを増やす予定なので、こんなキャラを作ってほしいとかの要望もあったら教えてください。
時々、キャラについて更新することがあるのでご了承ください

プロローグ

「ゴホッゴホッ」
「やっぱり俺、学校休んむよ」
「駄目だよ兄さん、学校行って試験受けてきて」
「いや、でも」
「私のことは気にしないで」
「・・・・・わかったよ。じゃあ学校に行くけど何かあったらすぐ連絡しろよ」
「・・・うん、兄さんいってらっしゃい。試験頑張ってね」
「ああ、じゃあ行って来る」
今日は文月学園のクラス分けの振り分け試験がある日である。
そして妹の楓が高熱を出してしまい昨日から寝込んでいるのである。
俺も休んで看病しようとしたのだが楓からのお願いで試験を受けることにした。
振り分け試験はA～Fクラスに分ける試験でF↓Aになるほど成績が良いとなっている。
しかし、試験を休むあるいは途中退出してしまうと0点となってしまい
自動的にFクラスとなってしまう。よって楓は自動的にFクラスとなってしまった。
「貴浩おはようなのじゃ」
「「貴浩君おはよう」」
「ああ、おはよう秀吉に優子に命」
と後ろから木下姉妹に声をかけられた。
「朝からどうしたのじゃ、暗い顔して」
「ああ、昨日から楓が熱を出して寝込んでてな」
「楓ちゃんは大丈夫なんですか？」
「一応昨日よりは熱は下がったけどまだ微熱だから今日は休ませて

きた」
「そうねんですね」
と命は少し残念そうにしていた
「大丈夫だよ。多分明日には治っていると思うから」
「そうですよね」
「ちなみに楓ちゃんは体調大丈夫なの？　顔色が少し優れないような気がするけど」
楓は生まれつき体が弱く体調を崩しやすいのだ
「はい、大丈夫です」
「何かあったらすぐ言うのよ」
「そうじゃよ、すぐに教えるのじゃぞ」
「優姉・秀兄大丈夫だって」
「まあ、俺は命と同じ試験教室だから何かあったら知らせるよ」
「ごめんね。貴浩君お願いするわ」
「すまぬの。よろしく頼むのじゃ」
「ああ、まかせて」
俺と命は同じ試験教室で優子と秀吉は別の教室なのである
教室前にたどり着くと
「「じゃあ悪いけど命のこと頼むわね（じゃ）」」
「了解」
「じゃあ、命試験頑張ろうな」

午後の試験中
まあなんとかできているな。
午前中もできてるからCクラスには行けるかな?そうだ命ちゃんはどうだろうか、
午前中は大丈夫そうだったけど、そう思い命のほうを見てみると、いきなり命は倒れてしまった。
「命、大丈夫か！?」

俺はすぐ命の元へと駆け寄った。
「織村！！試験中だぞ、席につけ　席につかないのなら試験を0点にするぞ。
　そうなりたくなかったら早く席につけ」
「友達が倒れたままにするのは嫌なんで0点でいいですよ」
「織村！！」
「じゃあ、自分命を保健室に連れて行くので」
そういうと俺は命を抱えて教室を出て行った。

キーンコーンカンコーン♪
今試験最後のチャイムがなった。優子と秀吉にはメールをしているのでもう少ししたら来るだろう。
ガラッと扉が開く音がしたので扉のほうを振り返ると
試験が終わって1分も経っていないのにそこには優子と秀吉が息を荒げて入ってきた。
そこで俺と目があい、2人は命に駆け寄って行って
「「命は大丈夫なの（かの）！？」」
「ああ、先生に見てもらったら貧血だって」
「「そ、そうなの。よ良かった無事で」」
そう言うと2人は安心したようだった。
「優姉・秀兄ごめんね。心配かけて」
「ううん、良いのよ。でも今度からはちゃんと言うのよ」
「貴浩君もごめんね。私のせいで試験が」
「ああ、気にしないで良いよ。正直俺、クラスは楽しければどこでもいいだ。
　それより本当にごめんな。気がつかなくて。優子も秀吉もごめん。命のこと頼まれたのに」
「ううん、気にしないで。それにこちらこそ、ごめんなさいね」
「そうじゃ、気にしないでくれなのじゃ。逆にありがとうなのじゃ」

そう言われ後は2人に任せて俺は保健室を出た。

第1問目～1学期の始まり～

俺たち兄妹がこの文月学園に入学して二度目の春が訪れた。
「兄さん早く行こう、遅刻するよ」
と声をかけて来たのは俺の双子の妹の楓である。

「そうだな」
と玄関を出て妹と一緒に学校に向かう。
学校へと続く坂を登って行っていると見慣れた人たちがいた

「おはよう」

「おはようございます」
と俺と楓は前を歩いていた木下姉妹に声をかける

「おお、貴浩・楓おはようなのじゃ」

「貴浩君・楓おはよう」

「貴浩君・楓ちゃんおはよう」
と秀吉・優子・命の順に挨拶してきた

「相変わらず3人とも仲が良いな」

「「当たり前よ（じゃ）」」
と息を合わせたかのように優子と秀吉は答えた

「2人から愛されてるね」

「うん・・・／／／」

そうして俺たち5人は話しながら学校のほうへ向かって行った。
そうして校門の前にたどり着くと

「おはよう。木下姉妹・織村兄妹」
ドスの聞いた声が聞こえる。声のした方を見ると、
そこには浅黒い肌をしたいかにもスポーツマン然とした男が立っていた。

「「「「「おはようございます西村先生」」」」」

「おはようございます鉄じ・・・西村先生」
と軽く頭を下げ挨拶した。

「織村兄、今、鉄人って言わなかったか？」

「ははっ気のせいですよ」

「ん、そうか」
ふうやばかった。危うく『鉄人』と呼ぶところだった。

「まあいいか。ほら、受け取れ」
先生が俺たちに自分の名前が書かれた封筒を渡してきた。一応頭を下げながら受け取り、
その封を開けてなかを見てみると『Fクラス』と書かれた紙が入っていた。

「ま、わかっていたけどな」

俺と命は途中退出、楓は欠席したので自動的にFクラスなのである

「優子と秀吉、どうだった？」

「Aクラスよ」

「Fクラスじゃな」

「優子すごいなAクラスかよ。さすがだね。秀吉はFクラスかじゃあ今年1年も同じだな。よろしく」

「そうじゃな、よろしくなのじゃ」

「秀吉君よろしくね」

「秀兄よろしくね」

「じゃ、行こうか」

俺たちは靴を履き替え教室のある3階に向かった

3階にあがると『Aクラス』と書かれたプレートがあった

「ここが姉上の教室じゃな」

「大きいですね」

「中も凄い設備だなこれは」

「じゃあ私はここで」

「優姉、また後でね」

「うん、そうね。また後で。秀吉、命のこと頼むわよ」

「わかっているのじゃ」

「じゃあ俺たちも教室に行くか」
そして俺たちが『Fクラス』と書かれたプレートの教室の前に着いた。

「・・・・・・ここだよね」
と命が不安そうに尋ねてきた

「・・・そうじゃろうな。Fクラスと書かれているからの」
Aクラスと比べると本当にひどい状態である。廃屋ではないかと思ってしまうくらいやばい

「まあ、とりあえず中に入ろうか」
そう言い、俺は扉を開けて中を見ると、畳にちゃぶ台そして座布団が置いてあった。
そして教卓の方を見てみると、前に1人の男が立っていた。

「おはよう雄二」

「ん、おまえらか。おはよう」

「おはようなのじゃ雄二」

「「坂本君おはよう」」

「そういや何で貴浩と楓と命がここにいるんだ?」

「ああ、楓は試験を休んで、俺と命は途中退出したから、Fクラスなんだ」

「そういうことか」
そう言って雄二が納得すると

「で、雄二はそんな所で何をしとるのじゃ？」

「ああ、暇だったんでここにクラスの奴らを見ていた」
そこで教室の中を見いてみると、結構な数のクラスメイトが座っていた。

「何でそんなことしとるのじゃ？」

「それはな、俺がここの代表だからだな」

「へぇ～、雄二がFクラスの代表なんだ」

「そういうことだ。だからお前たちは俺の兵隊ってことだ」

「話は変わるけど席ってどうなってんの？」

「適当で好きな所に座れば良いんじゃねえか。決まってないみてえだしな」

「そうなんだ」
そういい俺たちは適当に座った。
秀吉が廊下側の後ろから2番目の席で、命はその前の席、俺は秀吉の後ろの席で、
楓は命の隣の席に座った。

そしてしばらく秀吉たちと話していると明久が入ってきて、担任と思われる先生が入ってきた。

「えーおはようございます。2年F組の担任の・・・福原慎です。よろしくお願いします」

といい、黒板に名前を書こうとしたいようだがチョークがないらしい。

（チョークすら置いてないのか）

「まず設備の説明をしましょう」

「卓袱台と座布団。えー不備があれば申し出てください必要なものがあれば自分で調達してください」

・・・・・何このAクラスとの雲泥の差は

「せんせー、俺の座布団綿がほとんど入っていません」

「我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れてます」

「木工ボンドが支給されますので自分で直してください」

「センセ、窓が割れてて風が寒いんですけど」

「わかりました。後でビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

（おいおい、ここって本当に教室かよ）

第1問目～1学期の始まり～（後書き）

Fクラス自己紹介前まで書いてみました
質問・ご意見があれば教えていただけると恐縮です

～簡単キャラ紹介～（前書き）

今作品ではこちらの勝手な都合でキャラクターの自己ＰＲを変えたり付け加えたりしています。
なるべくは原作に沿うようにしたいと思っていますのでご了承願います。

～簡単キャラ紹介～

［Ｆクラス］　学園最底辺のバカ達が集うクラス。男子４５名、女子４名、「秀吉」１名在籍

吉井（よしい）　明久（あきひさ）

・誕生日：３月６日　Ｏ型
・外見は本人曰く「３６５度」どこから見ても美少年。身長は１７５ｃｍ
・学園創設以来初めての「バカ」の代名詞である「観察処分者」
・自己保身の為には悪知恵が働き不意打ちなどの卑怯な手段も躊躇わないが、
　良くも悪くもバカ正直で（雄二以外の）他人のために
　真剣に怒れるまっすぐな心根の持ち主
・召喚獣の操作の腕は学園１とも言われる・・・・・かも
・文月学園には試験校の為学費が安いことから入学した
・料理はそこらの家庭料理では相手にならないほどの腕前。
得意料理はパエリア
・好きな食べ物はパエリアと肉じゃがなど
・得意科目は日本史、世界史、英語にして行く予定

〈召喚獣〉
・服装：改造学ラン
・武器：木刀
・腕輪：？？？

坂本（さかもと）　雄二（ゆうじ）

・Ｆクラス代表
・誕生日８月７日　ＡＢ型

・１８７ｃｍの長身と精悍な顔立ちを持つ不良少年
・幼少時代には「神童」の異名をとり、現在学年首席の地位を誇る翔子よりも
　高い学力を持っていたが、中学生時代に勉強を全くせず体を鍛えていたため
　現在はその面影は微塵にも感じられない。
　中学生時代は喧嘩で鳴らしていたため今も尚「悪鬼羅刹」の名で
　他校の不良達に恐れられている
〈召喚獣〉
・服装：改造学ラン
・武器：メリケンサック
・腕輪：？？？

木下（きのした）　秀吉（ひでよし）
・誕生日１０月２５日　Ｂ型
・身長１６０ｃｍ
・優子の弟で命の兄（３つ子）
・演劇部に所属
・特技は声帯模写で女声も男声も自由自在
・将来の夢は演劇俳優
・妹の命を溺愛している
・一人称は「わし」で、語尾に「じゃ」をつけるなど古風な言い方が特徴
・可憐な外見に似合わずジャガイモの芽を食べても平気な「鉄の胃袋」を持っている
・得意科目は現国や世界史、古典にする予定
〈召喚獣〉
・服装：袴
・武器：薙刀

・腕輪：？？？

土屋（つちや）　康太（こうた）
・誕生日2月22日
・身長１６３ｃｍ、体重４８ｋｇ。ＡＢ型
・「ムッツリーニ（寡黙なる性識者）」と呼ばれる
・ほぼ全ての台詞の頭に「……」が付くほど寡黙な性格
・明久と同等のバカだが性に関する知識だけは豊富かつ貪欲で、

しかし実際には妄想ですら致死レベルの鼻血を噴くほどウブ
・料理や裁縫などが得意で「紳士の嗜み」だが全ては下心の副産物
・現代に蘇った忍者と称される「情報屋」で諜報（盗撮＆ａｍｐ；盗聴等）・探索・暗殺・ピッキング技術に優れ裏方のエキスパート
・得意科目は保健体育、家庭科にする予定

〈召喚獣〉
・服装：忍装束
・武器：小太刀二刀流
・腕輪：加速

姫路（ひめじ）　瑞希（みずき）
・誕生日5月5日　ＡＢ形　身長１５２ｃｍ
・身体は弱いが発育は良好でスタイルが良く巨乳の持ち主。胸のサイズはＦカップ
・本来の学力は学年次席の才女
・明久のことが好き
・料理を食材ではなく化学的なイメージで作るためその出来は味云々を

通り越した「最終兵器」「死の御使い」と評される必殺料

理人

・得意科目は数学や物理、苦手科目は家庭科

〈召喚獣〉

・服装：西洋風の鎧

・武器：巨大剣

・腕輪：熱線

島田（しまだ）　美波（みなみ）

・誕生日１０月１０日　身長１５６ｃｍ　Ｏ型

・ドイツ育ちの帰国子女

・勝気な目と髪に大きな黄色いリボンで束ねられたポニーテールがトレードマーク。

美形で長身・美脚のモデル体型だが胸は絶壁。

・「明久を殴る事」が趣味

・両親が仕事で不在がちな為家事全般を引き受けており、料理は上手

・明久のことが好き

・得意科目は数学、苦手科目は古典

・本来ならＢクラス以上の学力を持つもドイツ育ちで漢字が読めないため

問題文を理解できず、結果として殆どの教科の点が低い

〈召喚獣〉

・服装：軍服

・武器：サーベル

・腕輪：？？？

須川（すがわ）　亮（りょう）

・陽動作戦が得意

・中華料理に並々ならぬこだわりがある

・Ｆクラスの異端審問会・通称ＫＭＦ団の会長
・召喚獣の装備は道着（白帯）に棍

［Ａクラス］　学園最高成績者５０人のクラス。男子２４名、女子２６名在席

霧島（きりしま）　翔子（しょうこ）
・誕生日１１月１１日　ＡＢ型　身長１５８ｃｍ
・Ａクラスの代表で学年首席
・長い黒髪が印象的な寡黙な美少女で、神々しささえ漂うその美しさから
　男女問わず人気がある
・幼馴染の雄二を想い続けている
・家はかなりの資産家であり別荘やホテルの経営などをしている
・料理の腕はかなりある
・Ａクラストップ１０の１人
・学年首席の名に恥じない学力を誇り、
　一度学んだことは決して忘れない程の記憶力を持つ

〈召喚獣〉
・服装：武者鎧
・武器：日本刀
・腕輪：？？？

工藤（くどう）　愛子（あいこ）
・誕生日７月２８日　Ｂ型　１５５ｃｍ　スリーサイズは７８・５６・７９
・ベリーショートでボーイッシュな容姿のボク少女
・１年生の終盤に転校してきた

・水泳部に所属
・Ａクラストップ１０の１人
・奔放かつ賑やかな性格で他人をからかうのが好き
・得意科目は、保健体育
〈召喚獣〉
・服装：セーラー服
・武器：大斧
・腕輪：電撃

木下（きのした）　優子（ゆうこ）
・誕生日１０月２５日　ＡＢ型
・身長１６０ｃｍ
・妹の命を溺愛している
・明るく社交的で愛想の良い優等生
・Ａクラストップ１０の１人
・家ではかなりのズボラで常に下着かジャージ姿
・隠れ腐女子（家には大量のＢＬ本が溜め込まれている）
（上記の２つは家族と楓しか知らない）
・料理は下手
・楓とは去年クラスメイトで友達、貴浩とは家が近所なのと、秀吉との友達ということもあって友人の関係にある
・得意科目は現国、英語、日本史
〈召喚獣〉
・服装：西洋鎧
・武器：ランス
・腕輪：？？？

久保（くぼ）　利光（としみつ）
・学年次席でＡクラスにおける男子の代表格
（ただし姫路が途中退席したためであり、実質的には第３

位）

・メガネをかけており冷静と、典型的なガリ勉男子
・Ａクラストップ１０の１人
・冷静で落ち着いた性格のクールガイ。決して人当たりは悪くない
・同性愛者で明久に惚れている
・得意科目は日本史に世界史、現国

〈召喚獣〉

・服装：鎧と袴
・武器：二振りの大鎌
・腕輪：？？？

佐藤（さとう）　美穂（みほ）

・外見はボブカットのメガネっ子
・Ａクラストップ１０の１人

〈召喚獣〉

・服装：ネイティブアメリカン風の衣装
・武器：鎖付鉄球
・腕輪：？？？

～簡単キャラ紹介～（後書き）

と、ＦとＡクラスのメンバーをピックアップしました。
変更してほしい点などがありましたら教えていただけると恐縮です。

また、Ａ・Ｂクラスで新キャラを作りたいと思っているのですが
何か出してほしいキャラがいれば教えてください。
もちろん、Ａ・Ｂクラス以外のキャラでもかもいません

第1問目～Fクラス～

「では自己紹介でも始めましょうか。そうですね、廊下側の人からお願いします」

「き、木下命です。趣味は読書と料理です。Aクラスに私の姉の優子と兄秀吉がいます。
3人共々よろしくお願いします」

「先ほど紹介のあった木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。先ほど命が自己紹介したと思うが、
ワシの妹じゃから妹共々よろしく頼むのじゃ。
それと妹は体が弱いので　無理をさせないでほしいのじゃ。
もう1つ、あらかじめ言っておくことじゃが、ワシは男じゃからの、決して女ではないからの」

（木下姉妹は3人とも身長も顔つきも似ているからな。秀吉はよく女と間違えられるからな）

「次の方お願いします」

（おっと俺の番か）

「織村貴浩です。楓の双子の兄です。趣味はアニメ鑑賞や料理です。
あらかじめ言っておきますが

妹の楓を泣かせたり、手を出したりしたら血祭りにあげるつもりなのでよろしくお願いします」

「・・・・・土屋康太」

（お、康太だ。相変わらず口数が少ないな）

康太とは去年同じクラスになってからの友達だ

「先ほど兄さんから紹介があった織村楓です。私も秀吉君と同じ演劇部に所属しています。
試験前日に体調を崩してしまい試験を受けることができなかったのでFクラスになりましたが、
皆さん優しそうな方々なので兄さん共々よろしくお願いします」

本当にできた妹だなぁ。

「楓ちゃん良い子やなぁ」

「楓ちゃんかわいいなぁ」

「楓ちゃん結婚してほしい」

おい誰だ、今楓にラブコールしたやつ。後でシバく。

「・・・・です。海外育ちで日本語は読み書きが苦手です。趣味は吉井明久を殴ることです☆」

（お、この趣味は島田美波か。相変わらずの趣味だな。）

明久はっと、お、少し怯えてるや

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

「「「「「ダァアーリィーン！！」」」」」（２－Ｆ男子全員一秀吉）

「・・・・・失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願い致します」

俺も言ってみたが吐き気がする。

その後も名前を告げるだけの単調な作業が続いていた時、

ガラリと教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん・・・・・・」

「「「「「えっ」」」」」

誰からというわけでもなく、教室全体から驚いた声が上がる。

そりゃそうだろう。普通はビックリするだろう。

「ちょうど自己紹介をしている所なのであなたもお願いします」

「はっ、はい。あの姫路瑞希といいます。よろしくお願いします」

「はい！質問です！」

「あっはっはい、なんですか？」

「えーと、何でここにいるんですか？」
その質問はおそらく全員が聞きたいことである。姫路さんは確か学年次席レベルだったはずだが

「そ、その・・・試験の最中に高熱を出してしまいまして・・・」

「あぁ、なるほど俺も熱（の問題）が出たせいでＦクラスに・・・」

「あぁ化学だろ？アレは難しかった」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いてそれどころじゃなくてな・・・」

「黙れ１人っ子」

「前の晩彼女が寝かせてくれなくてさぁ」

「今年１番の大嘘をありがとう」
・・・これは想像以上に馬鹿ばっかりだな

「でッでは１年間よろしくお願いしますッ！」
そう言って姫路さんは楓の隣に座った。

（おっ明久が姫路さんに話しかけようとしているな）
俺も行ってみるか

「あの姫「姫路」」
雄二が割って入っていった

「はっはい！何ですか？えーっと」

「坂本だ坂本雄二」

「俺は織村貴浩だ。よろしく」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

「もう体調は大丈夫なのか？」

「あっそれは僕も気になる」

「よ・・・吉井君！？」

「明久がブサイクですまん」

「そして馬鹿ですまん」

「そ、そんな！目もパッチリしてて顔のラインも細くて綺麗だし・・・そのむしろ・・・」

「まぁ悪くはないか・・・そういや興味がある奴がいた気がするな」

「え？誰『そッそれって誰ですか！？」

「あぁなんかそんな人がいるって聞いたことがあるな。確か・・・久保…・・・利光（♂）だったかな」

「おい明久さめざめと泣くな」

「はいはいそこの人たち静かに・・・」

そう先生が教卓を叩いて俺達に注意すると教卓が崩れて壊れた。

（…本当に大丈夫なのか、この教室。俺は大丈夫だけど楓や命には少しばかしヤバイかもしれないな）

第1問目～Fクラス～（後書き）

あともう少しFクラスの自己紹介が続きます。

また、A・Bクラスで新キャラを作りたいと思っているのですが
こんなキャラを作ってほしいというキャラがいれば教えてください。
もちろん、A・Bクラス以外のキャラでもかもいません

第1問目～Fクラス（2）～

「え～替えを用意してきます」
俺は先生が教室を出て行くのを確認して
「・・・雄二。少しいいか」
「あ？」
「あ、僕も良いかな」
俺達はこっそり廊下に出た
「んで、話ってなんだ」
「ああ、先に明久からで良いよ」
「この教室のことだよ」
「Fクラスか想像以上に酷いな」
「Aクラスは見た？」
「あぁ凄かったな。あんな教室は見たことないな」
「そこで僕からの提案、『試召戦争』をやってみない？」
「「戦争・・・だと（だって）？」」
「うん！しかもAクラス相手に・・・」

「・・・何が目的だ？」

「いや、だってあまりに酷い設備だからさ！」

「嘘だ！！」（ひぐらし風に）

「勉強に興味がないお前に設備なんて関係ないだろ」

「それに明久はこの文月学園が『試験校だからこその学費の安さ』に興味があったんじゃないか？」

「あーえーっとそれはその・・・」

「・・・姫路のためか？」

「ベッ別にそんなワケじゃ！」

「気にするな。俺もＡクラス相手に試召戦争をやろうと思っていたところだ」

「で、貴浩はどうした？」

「あぁ、俺も明久と同じで試召戦争を提案しようとしたんだ。今のままだと楓と命の２人が体調を崩すかもしれないしな」

「そういうことか」

「そういう雄二は何で試召戦争をやろうと思ったんだ？」

「世の中学力が全てじゃないってそんな証明をしてみたくてな。
それにAクラスための秘策も思いついた」

そういうと雄二は教室に入って行ったので俺と明久も教室に入った。

そして先生が戻ってきて再び自己紹介を再開した

「須川亮です。よろしくお願いします。さて、ここで皆さんに聞いてもらいことがあります。
俺はここにＫＭＦ団を設立することを宣言する！」

「は？」

「ＫＭＦ団？なんだそれ？」

「では、説明しようＫＭＦ団とは、織村楓・木下命の両名を我らＦクラス一同、全力で崇高し、
他の男子から両名を守ることを目的とする。もちろん我がクラスの姫路さんや島田さん、
木下秀吉などの女性に手を出した者は　異端者と認め我らの手によって正義の鉄槌を
落とすことを宣言する」

と須川は意気揚揚に宣言した。

〜※簡単に言うと異端審問会・通称ＦＦＦ団の元々の憲章に付け加え、容姿端麗な織村楓・木下命を
崇めるために設立したもの〜

「そんなもの誰もやらないだｒ・・・」

「流石だぜ。須川」

「あぁ、俺も仲間に入れてくれ」
「楓様と命様は我らのクラスの聖母だ」
「皆ＫＭＦの設立に協力してくれるか？」
「「「「「当たり前だ！！」」」」」
「皆、ありがとう。後で詳しく説明しよう」
・・・Ｆクラスって本当に馬鹿ばかりかよ。その時の楓と命はというと
「「・・・／／／／」」
照れくさそうに下をむいていた。　それを聞いていた秀吉は
「これでよいのかの？確かに命のことを守ってはくれるみたいなのじゃが、
　しかし、命に変な噂がついたりでもしたら・・・」
1人にブツブツ囁いていた
「えーと、坂本君キミが最後ですよ。クラス代表でしたよね？前に出てきてください」
「了解」
そう言い雄二は立ち上がり教卓の前に向かった

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」
え、良いのじゃあ
「ん、ゴホン。さて皆に1つ聞きたい」
「Aクラスは超豪華待遇らしいが・・・・・・不満はないか？」
「「「「「大ありじゃあッ！！！」」」」」
「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ」
「いくら学費が安いからってこの設備はあんまりだ！」
「Aクラスだって同じ学費だろ！？」
「改善を要求する！！」
「そこで代表としての提案だがFクラスはAクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う！」

第1問目～Fクラス（2）～（後書き）

次回から試験召喚戦争編に入ります。

頑張って更新させていきたいと思っています。

・・・さて新キャラどうしようかな？

第1問目～試召戦争開始～

「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

「そんなの勝てるわけがないだろ？」

「これ以上設備が落ちたらどうなるんだ」

「姫路さんがいたら何もいらないい」

「命タンがいるだけで僕は満足です」

「楓ちゃん結婚してください」

（（誰だ〔なんじゃ〕また楓〔命〕にラブコールした奴、血祭りにしてやる〔のじゃ〕））

「そんな事はない、必ず勝てる。いや俺が勝たせて見せる」

「無理に決まってやるじゃん」

「そう言われても何の根拠もないしなぁ・・・」

「根拠ならあるさ。このクラスには勝つことのできる要素が揃っている」

雄二は自信ありげにそう宣言した

「それを今から証明してやる！」

「おい康太、いつまで姫路と楓、命のスカートを覗いているんだ」

「・・・・・・！！」

そういうと康太は素早く立ち上がり首を横に振った。

「「「えっ」」」

姫路さんと楓、命は素早くスカートを押さえた。

「土屋康太　こいつがあの有名な寡黙なる性職者（ムッリーニ）だ」

そういうと康太（ムッリーニ）は首を横に振った

「馬鹿な・・・奴がそうだというのか？」

「見ろ！まだ証拠を隠そうとしているぞ・・・」

「あぁ、ムッツリの名に恥じない姿だ」

（さすがムッリーニだな。その名に恥じない姿だ。
でも楓のスカートを覗いたんだから後でオシオキだな）

「それに姫路と織村楓の事は皆その実力をよく知っているはずだ」

「「え？私ですか？」」

そうなのだ。この２人は学年トップ１０に入っているほどの実力がある。

「ああ、ウチの主戦力だ期待している」

「そうだ！俺達には姫路さんと楓さんがいる！」

「彼女達ならＡクラスにも引けをとらない！」

「ああ楓ちゃんさえいれば何もいらない」

（本当に誰だ、さっきから楓に熱烈なラブコール送っている奴は）

「それに木下秀吉だっている」

「ワシもか？」

「演劇部のホープ！」

「確かＡクラスに木下優子っていう姉がいただろ」

「そのほかにも島田と木下命もいる」

「えっウチ？」

「わ、私もですか？」

「島田は数学だけならＡクラスにも匹敵する。
木下命も現国と家庭科ならＡクラスに匹敵するだけの実力がある」

「当然俺も全力を尽くす」

「坂本って小学校の頃『神童』とか呼ばれてたんだろ」

「確かになんかやれそうな気がしてきたぞ」

「これはいけるんじゃないか！？」

「よし！やってやろうじゃねーか！！」
今教室の士気が高まっていったが

「それに吉井明久と織村貴浩だっている」
というとシーンと教室内は静まりかえった。

「誰だよその吉井明久と織村貴浩って」

「それ以前にそんな奴らこのクラスにいたか？」

（もう忘れられてる！？）

「おい雄二。何でそこで俺らの名前をだした！？せっかく上がった士気が台無しじゃねえか！！」

「だいたい僕らは普通の人なんだから普通の扱いを・・・」
俺と明久が文句を言うと、雄二が睨み付けてきた。

「そうか、知らないのなら教えてやる。
こいつらの肩書きは『観察処分者』と『特別処遇者』だ！！」

第1問目～試召戦争開始～（後書き）

現在、新キャラ募集中です。

他作品ベースでもかまいません。

また、完全オリキャラでも大丈夫です。

色んな案を出してもらえると恐縮です

次回更新頑張りたいと思います。

第1問目～試召戦争開始（2）～

「こいつらの肩書きは『観察処分者』と『特別処遇者』だ！！」

「確か観察処分者って「馬鹿の代名詞』じゃなかったっけ？」

「ちっ違うよ！！ちょっとお茶目な16歳の愛称で・・・」

明久は慌てて否定するが、

「そうだ『馬鹿の代名詞』だ」

「肯定するなバカ雄二！！」

「あのそれってどういうものなんですか？」

姫路さんが雄二に尋ねてきた

「観察処分者っていうのは具体的には教師の雑用係だな。

力仕事とかの雑用を特例として物に触れるようになった召喚獣でこなすんだ」

「それって凄いですね！試験召喚獣って見た目と違って力持ちらしいですしね」

命は、期待の眼差しを明久に向けた

「あはは。そんな大したものじゃないよ。確かに僕なんかの点数でも召喚獣の力はかなり強いけど、

その時受ける召喚獣の負担の何割かは僕にフィードバックされるんだ。

皆と同じで教師の監視下でしか呼び出せないし、僕にメリットも

ないしね」

「おいおい・・・じゃあ召喚獣がやられたら本人も苦しいって事だろ？」

「だよな・・・それならおいそれと召喚できないヤツがいるって事じゃん」

「気にするな！明久はいてもいなくても大して変わらん雑魚だ」
雄二は気にもせず明久をズバッと捨てた

「・・・雄二そこは僕をフォローするところだよね」

「そうですよ坂本君。あんまり明久君の事悪く言ったら駄目だよ」
そこへ命がフォローを入れた

「命、・・・ありがとう」
明久は本当にありがたそうに命に礼を言った。

「んで、今度は特別処遇者の事なんだが、貴浩説明しろ」

「え、面倒くさいな。はぁ～。いいよ、じゃあ説明するよ。
簡単に言うと、俺って足に障害があるって事で学園側が召喚獣の実験もかねて特別に
用意してもらった制度なんだけど、効果は明久の観察処分者とほとんど同じで、
召喚獣の負担のフィードバックが少しばかし軽減されるぐらいで後は、ほとんど変わらないよ」

「それじゃあ、あんまり使えないじゃん」

と、あちこちで不安そうに囁き始めた。

「いや、そうでもないぞ。　明久・貴浩お前ら何回ぐらい召喚獣を操作した？」

「えっと僕は１００回はあるかな」

「俺もそれぐらいはあるはず」

「聞いたか、こいつらは召喚獣を使っていろんな雑用や実験をしてきている。

要するに、何度も召喚獣を使ってるから操作に慣れてるんだ。だから、細かい操作もできる。

相手の防御してないところを攻撃したり、攻撃をいなしてカウンターを掛けたりとかな。

細かな操作ができれば点数が上のやつとでも十分渡り合えるんだ。

余程のことがない限り、

同学年では攻撃が当たらない筈だ」

そうなんだよな。去年なんか訳もわからない実験に付き合わされたよなぁ。

「なるほど…」

「それって凄く有利じゃないか」

雄二の説明に納得するＦクラスメンバー

「とにかくだ！俺達の力の証明としてまずＤクラスを制圧しようと思う。

皆この境遇に大いに不満だろう？」

「「「「「当然だ！！」」」」」

「なら全員筆を執れ！！出陣の準備だ！」

「「「「「「おぉーーーーーッ！！」」」」」」

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Ａクラスのシステムデスクだ！！」

「「「「「「うおぉーーーーーッ！！」」」」」」

「「「「「「おッおーー／／／」」」」」」

姫路さん・楓・命の３人も恥ずかしげに腕を振り上げていた。

そして、俺たちの戦いの幕が開いた。

召喚戦争のルールと各科目について（前書き）

召喚戦争のルールは原作を元に作りました。

各科目については、自分が思いついた教科にしたので、

あらかじめ、ご了承ください。

召喚戦争のルールと各科目について

〜　召喚戦争のルール　〜

1、原則としてクラス対抗戦とする。各科目担当教師の立会いにより試験召喚システムが起動し、
召喚が可能となる。なお、総合科目勝負は学年主任の立会いのもとでのみ可能。
2年学年主任：高橋洋子
※西村　宗一に関しては全教科、総合科目での勝負の立会いを可能とする

2、召喚獣は各人1体のみ所有。この召喚獣は該当科目において最も近い時期に受けたテストの
点数に比例した力を持つ。総合科目については各教科最新の点数の和がこれにあたる。

3、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減算され、戦死に至ると0点となり、
その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。

4、召喚獣はとどめを刺されて戦死しない限りは、テストを受けなおして点数を補充することで
何度でも回復可能である。

5、相手が召喚獣を喚び出したにもかかわらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄とみたし、
戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける。

6、召喚可能範囲は、担当教師の半径１０m程度（個人差あり）。

7、戦闘は召喚獣同士で行うこと。召喚者自身の戦闘行為は反則行為として処罰の対象となる。

8、戦争の勝敗は、クラス代表の敗北をもってのみ決定される。
この勝敗に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。
あくまでもテストの点数を用いた『戦争』であるという点を常に意識すること。

～　試験科目について　～

【　科目　】

・現代国語　・数学　・保健体育
・古典　・化学　・英語
・世界史　・物理　・日本史
・生物　・現代社会　・選択（家庭科・美術）

以上、計１２科目に設定しています。

総合科目は上記の全ての点数の和とし、

召喚獣の腕輪は各教科４００点以上の時に装備される。

総合科目では４８００点の時装備される。

召喚戦争のルールと各科目について（後書き）

現在、まだまだ新キャラ募集中です。

他作品ベースでもかまいません。

また、完全オリキャラでも大丈夫です。

色んな案を出してもらえると恐縮です

その他、ご感想や注意点や気づいた点がございましたら

教えてくれるとありがたいと思います

次回、更新頑張りたいと思います。

1問目～　Dクラス戦　～

「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になってもらう」

「ねぇ雄二今字が間違ってなかった？
それに下位勢力の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。騙されたと思って行って来い」

「あ、あの。心配なので私も明久君と一緒に行きます。」
命が立ち上がってそう言った。

「えっ？命、良いの？」

「はい。一緒に行かせてください」

「命よ、そう無理を言うものじゃないのじゃ」

「でも秀兄、明久君が心配で」

「そうかもしれぬが・・・」

「命、明久と行ってくれれば良いさ」

「なッ！貴浩よ。いきなり何を言いだすのじゃ？」

「だって命って一度言い出したらもう意思は変わらないだろうよ」

「し、しかしじゃな」

「それに何かあっても絶対明久が自分の命に代えても命を守るはずさ。だろ明久？」
明久に尋ねるようにきいた
「うん、そうだね。絶対守るよ！」
「だってさ、秀吉」
「うぅ。・・・わかったのじゃ。では明久よ、命をよろしく頼むのじゃ」
「うん。じゃあ命ちゃん行こうか」
「はい！」
そして2人はDクラスに向かって行った。
しばらくすると
「ただいま雄二、Dクラスに宣戦布告してきたよ」
「大丈夫じゃったか命よ？怪我はないか？」
「うん、大丈夫だよ秀兄。Dクラスの人たち優しかったよ」
秀吉は心配そうに命に駆け寄って行った
「おい、明久ちょっといいか？」
「ん？どうしたの雄二？」

「いや、ぶっちゃけお前が酷い目に遭うと思っていたんだが…」

「あぁ、うん。僕1人なら絶対酷い目に遭ったね。でも命ちゃんがいてくれたから無事ですんだんだ」

明久が無事だったのは、明久がやられる前に命が涙目でやめるようにしたらしい。

「……ちッ（無事だったか）」

「ねぇ今、舌打ちしなかった？」

「さて、今からミーティングを行うぞ」

「あれ、今スルーされた？」

「じゃあ行こうぜ。明久もブツブツ言ってないで行くぞ」

「あぁそうじゃな」

「……了解」

「おい、ムッリーニもう畳の後なら消えてるぞ」

「……！！（ブンブン）」

「いや、今さら否定されてもの」

「……！！（ブンブン）」

「大丈夫だ。ムッリーニがHなのはよく知っているから」

「……！！（ブンブン）」

「……ちなみに何色だった？」

「みずいろ・しろ・ピンク」

・・・即答かよ

「答えたって事は楓のを見たってことだな」

「命のもじゃな」

「……！！（ブンブン）」

「さて、今はさすがにまずいだろうから。後でちょっとＯＨＡＮＡＳＩいいかな？」

「そうじゃな、ワシも後で一緒によいかの？」

「……！！（ブンブン）」

1問目～　Dクラス戦（2）～

俺たちは屋上に集まってミーティングをはじめていた

「明久、宣戦布告してきたんだな」

「一応、今日の午後に開戦予定と告げてきたけど」

「じゃあ先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな明久今日ぐらいはまともな物食べろよ？」

「そう思うならパンでもおごってよ」

「「えっ明久君（吉井君）ってお昼食べないんですか？」

命と楓は驚いたように明久に尋ねた。

「いや…一応食べてるよ」

「…あれは食べてると言えるのかの？」

「明久の主食って水と塩だろ？」

「失礼な！！僕をバカにするのも程がある！きちんと砂糖も食べてるよ！」

「そッそれは食べるとは言わないと思うよ明久君」

「……正確には舐めるが正解」

「……」
そこで皆が明久を見る目が同情の眼差しになった
「まっ飯代を遊びに使い込むお前が悪いな」
「しッ仕送りが少ないんだよ！」
「……趣味ってお金かかるから」
「…あの…明久君、もしよかったら私がお弁当作ってきましょうか？」
「ゑ？いいの命？」
「はっはい明日のお昼でよければですが…」
「なッなら私もお弁当作ってきましょうか？」
「え？姫路さんまで？塩と砂糖以外のものなんて久しぶりだよ！」
「良かったな明久。２人の手作り弁当じゃないか」
「うん！」
「…ふ～ん。命と瑞希って優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」
「えっあッいえ！その皆さんにも…」

「俺たちも？良いのか？」

「はい。嫌じゃなければ」

「なら人数が多いからデザートは私も作るよ」

「楓も？」

「うん、だから命ちゃんと姫路さんはメインのほうをお願いします」

「「はい、わかりました」」

「おぉ、明日の昼は豪華になりそうだな」

「そうじゃな命の料理はおいしいからの」

「……楽しみ」

「じゃあ明日の昼は3人に任せるとして。さて話を戻すぞ。試召戦争についてだ」

「雄二よ。1つ気になったんじゃがどうしてAでもEでもなくDクラスなんじゃ？」

「色々理由はあるんだがEクラスは相手じゃないからだ。明久見てみろ。ここにいるメンバーを」

雄二が明久に集まったメンバーを見ろと言い、明久は全員の顔を見回し言うと、

「えーと、美少女が４人、バカが２人にムッツリが１人とシスコンが１人いるね」

「誰が美少女だと！？」

「どうして、雄二が美少女に反応するの！？」

「……（ポッ）」

「ムッツリーニまで！？　どうしよう！？僕だけじゃツッコミ切れないよ！？」

美少女に雄二と康太が反応して明久は声を上げる。

「まぁまぁ皆落ち着くのじゃ」

「そうだよ。一度落ち着け」

俺と秀吉で明久たちを落ち着かせると

「ま、要するにだ」

コホンと咳払いして雄二が説明を再開する。

「姫路や楓に問題のない今、正面からやりあってもＥクラスには勝てる。

Ａクラスが目標である以上、Ｅクラスなんかと戦っても意味がな

いってことだ」

「？　それならＤクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のＡクラスに挑もうよ」

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？
それに、さっき言いかけた打倒Ａクラスの作戦における必要なプロセスだしな」

「あ、あの～」

「ん？　どうした姫路」

「えっと、その。　さっき言いかけたって・・・・・・吉井君と坂本君は、
前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。　それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されて――」

「それはそうと！」

明久タイミングが悪いぞ。少し聞こえたんじゃないか？

「さっきの話、Ｄクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

明久を笑い飛ばす雄二

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる・・・・・・いいか、お前ら。
　ウチのクラスは――最強だ」

「良いわね。　面白そうじゃない！」

「秀兄、明久君一緒に頑張りましょうね」

「そうじゃな。　Ａクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「・・・・・・・・・・・・（グッ）」

「が、頑張りますっ」

「兄さん一緒に頑張ろうね」

「まぁ面白そうだしな」
（楓の為だしちょっと本気でやるかな）

「そうか。　それじゃ、作戦を説明しよう」

そして、俺達は勝利のため雄二の作戦に耳を傾けた

1問目～　Dクラス（3）～（前書き）

やっと、Dクラス戦に入ることができました。

1問目～　Dクラス（3）～

開戦時間になり、Fクラス対Dクラスの試召戦争の火蓋は切って落とされた

貴「ついに始まったようだな」

試召戦争の火蓋は切って落とされたのだが、俺と楓、命、姫路さんの4人は
振り分け試験を欠席・途中退出したので0点扱いになっているので、
回復試験を受けて点数を確保しなければならない。

貴「さっさと試験受けて戦線に加わらないとな」

楓「そうですね兄さん」

命「待っててくださいね。秀兄と明久君」

姫「頑張ります」

「それでは、回復試験を始めます。準備はよろしいですか？」

「「「「はい」」」」

「それでは、始めてください」

試験を受けてる最中

《ピンポンパンポーン》

《船越先生、船越先生》

貴（この声は須川か。放送を使ってどうするんだ）

《吉井明久が体育館裏で待っています》

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

貴（…明久。グッドラック）

「須川あああああああ！！」
遠くで明久が叫んでる声が聞こえた

貴「さて回復試験も受けたし戦線に行くとするか」

「「「はい」」」

Fクラスに戻ると雄二が護衛をつれて立っていた

雄「よし、試験は終わったか。そろそろこちらも出るとするか」

するとそこへ明久が戻ってきた

明「雄二、校内放送聞こえてた？」

雄「ああ、バッチリな！」

明「それよりも、須川君がどこにいるか知らない？」

貴「もうすこししたら、帰ってくるんじゃないか？」

雄「ちなみにだが、さっきの放送を指示したのは俺だ。」

明「シャァァアッ！」

雄「お、船越先生」

凄いな。言った瞬間に明久が掃除用具のロッカーに入って行ったぞ。

雄「さて、バカは放っておいて、そろそろ決着をつけにいくか」

秀「そうじゃな、ちらほらと下校している生徒の姿も見え始めたし、頃合じゃろう」

ム「・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

雄「おっしゃ！Dクラス代表の首を取りに行くぞ！」

F『『『『応っ！』』』』

やっと、戦えるぜ！　せっかく回復試験を受けたんだから、戦わないとな！

命「あのー、明久君。船越先生が来たっていうのは嘘みたいですよ」

そう命が言うと同時に

明「キシャアアアアッ。　逃がすか雄二ぃッ！！」

明久は奇声をあげて雄二を追いかけていった。

貴「・・・じゃあ俺たちも行こうか」

楓「・・・そうですね兄さん」

命「う、うん」

俺たちは苦笑いしながら戦場へ向かった。

1問目～　Dクラス（3）～（後書き）

今回、バカと俺たちの召喚獣を読んでいただきありがとうございます。

少し今回は前回までと少し変え、セリフの前にキャラ名を入れて、誰がどのセリフを言っているかわかりやすくしてみたのですがいかがでしたしょうか。

何か意見などがありましたら教えていただけると幸いです。

まだまだ、新キャラは募集していますので、

既存キャラ・オリジナルキャラなんでもかまいませんので

意見・要望がありましたら教えてください

1問目～　Dクラス（4）～

貴「あそこいるのはDクラス代表の平賀か。
　じゃあ作戦道理に俺たちは周りの近衛部隊を相手にするか2人とも準備はいいか？」

楓・命「「はい」」

貴「Fクラス織村貴浩がDクラス近衛部隊に勝負をしかける」

楓「Fクラス織村楓がDクラス近衛部隊に勝負を挑みます」

命「Fクラス木下命がDクラス近衛部隊に勝負を挑みます」

「「「試獣召喚（サモン）」」」

叫んだ直後、足元に現れる魔方陣。
そして現れる黒い甲冑をまとい日本刀と拳銃を装備した召喚獣が

楓「それが兄さんの召喚獣？かっこいいね」

貴「ありがとう楓。楓の召喚獣はかわいいね」
楓の召喚獣は着物を着ていて弓を装備していた。

貴「命の召喚獣もかわいいな」
命の召喚獣は巫女服と十文字槍を装備した召喚獣だった

命「ありがとうございます」

貴「じゃあ、やろうか」
今はフィールドには現代国語が展開されている

現国

現国
Fクラス　織村貴浩　１４３点　ＶＳ　Dクラス　近衛部隊×５人　平均　１００点
織村楓　３９５点
木下命　３５５点

D「げぇ、なんでFクラスなのにこんなに点数高いんだよ」
D「ひるむなっ！取り囲んで一気にたたくんだ！」
貴「じゃあ俺が前に出るから、２人共援護頼むよ」
楓「了解だよ兄さん」
命「わかったよ貴浩君」
今回の戦闘の目的は平賀から近衛部隊を引き離すこと。
もう１つは楓と命が召喚獣の操作に慣れることの２つだ。

（さて予定通りに近衛部隊はこちらに向かってきたな）
なぜ、引き離したかというと。Fクラスの切り札の１つである・・・
貴「姫路さんそっちは任せたよ」

D「は？」

やっぱりこいつ何を言ってるんだ、みたいな顔されるよな普通。

姫「あ、あの・・・・」

平「え？あ、姫路さん。どうしたの？Aクラスはこの廊下は通らなかったと思うけど」

姫「いえ、そうじゃなくて・・・・・・・Fクラス姫路瑞樹です。

Dクラス平賀君に現代国語勝負を挑みます。」

平「・・・・はぁ。どうも」

姫「あの、えっと・・・・・さ、試獣召喚（サモン）です」

Fクラス　姫路瑞樹　　VS　　Dクラス　平賀源二

現代国語　３３９点　　１２９点

平「え？あ、あれ？」

姫「ご、ごめんなさいっ」

相手に反撃を一度も許さずにに一撃でDクラス代表を倒し、Dクラス戦は終わった。

F「「「「「うぉおおおおッ！！」」」」」

F「凄ぇよ！！本当にDクラスに勝てるなんて！」

F「これで畳や卓袱台ともおさらばだ！！」

1問目～　Dクラス（4）～（後書き）

今回、バカと俺たちの召喚獣を読んでいただきありがとうございます。

現在、新キャラは募集していますので、

既存キャラ・オリジナルキャラなんでもかまいませんので

意見・要望がありましたら教えてください

1問目～　Dクラス戦後～

F「やっぱり坂本は凄い奴だったんだな！！」

F「坂本万歳！！」

雄「あーまあなんだ。そう褒められるとなんつーか・・・」
そういうと雄二は頭をポリポリかいて照れていた。

F「坂本！！握手してくれ！」

F「俺も」

明「雄二！！」

雄「ん？明久か」

明「僕も雄二と握手を！！」
そう言って明久は雄二に駆け寄っていき手を掴もうとする前に雄二が明久の手首を押さえた

明「雄二・・・握手なのに手首を押さえるのかな・・・！」

雄「押さえるに決まっているだろうが・・・ッ！　　フンッ！！」
そう言って明久の腕を捻り上げると

明「ぐあッ！！」
明久が悲鳴をあげると同時に包丁が床に落ちた

明「・・・・・・・」

雄「・・・・・・・」

明「・・・雄二皆で何かをやり遂げるって素晴らしいね」

雄「・・・・・・・」

明「こんな素敵な事だなんて今まで知らな関節が折れるように痛いいッ！！」

明久が言っている途中で力強く腕を捻りあげた

雄「・・・今何をしようとした？」

明「もッもちろん勝利を祝うための握手を手首がもげるほどに痛いいッ！！」

雄二はさらに力強く関節を捻りあげた

雄「おーい誰かペンチを持ってきてくれー」

貴（さて面白そうだけどそろそろ止めるか）

そう思って雄二を止めようとしたら

命「もう坂本君、明久君をいじめちゃ駄目ですよ。それにペンチなんて何に使うんですか？」

そこへ命が明久を助けに行った

雄「簡単だ。爪をはがす。すぐに終わるから少し待て」

命「だ、駄目ですそんなことしちゃ駄目です。明久君が可愛そうで

す」

雄「しかしな命、こいつは俺を刺そうとしたんだぞ」

命「明久君がそんな酷いことするわけありません」

貴（いや明久ならするだろうな）

命「もうやめてあげてください。お願いします」

と命が雄二に涙目かつ上目使いで頼み込むと

F「「「「「「ぐはッ」」」」」」

とそれを見た男子達（俺・秀吉・雄二・明久）が鼻血をだしながらバタバタ倒れて行った。

それでも俺・秀吉・雄二・明久も倒れてはいないが顔を真っ赤に染めていた。

命「駄目ですか？」

そう言ってもう一度頼み込む

雄「わッわかったわかった。命に免じて今回は明久のことを許してやる／／／」

雄二はそう言って顔を背けた。

雄二が命に押し負けた

命「よかったね明久君♪」

うれしそうに明久のほうに振り向いた

明「う、うん。ありがとう／／／」

秀「・・・なぜ。命は明久に・・・（ボソ）」

秀吉が何かブツブツ言っていたがあえてスルーすることにした。

しばらくして落ち着き、雄二とDクラスの平賀が戦後対談している。

1問目～　Dクラス戦後～（後書き）

今回、バカと俺たちの召喚獣を読んでいただきありがとうございます。

現在、新キャラは募集していますので、

既存キャラ・オリジナルキャラなんでもかまいませんので

意見・要望がありましたら教えてください

第2問目～ひとまずの休息～

雄二達が戦後対談している中、
もう俺達は必要ないみたいなので楓や秀吉、命と共に帰る支度をしている所だった。

貴「さて帰るとするか。皆はどうするんだ？」

秀「ワシは今日は部活が休みじゃから帰るとするかの」

楓「兄さん、私は明日皆さんにデザートを作る予定なので買い物してから帰るよ」

命「なら楓ちゃん私も一緒に買い物に行っても良いかな？」

楓「うん、もちろんですよ」

貴「なら楓、俺も行くよ。荷物大変だろ？」

秀「ならワシも行くとするかの。良いかの？」

楓「はい、ではお願いします」
楓の了承がとてたので、帰り支度を済ませ教室を出ようとすると、

命「あっ貴浩君待ってください。多分、優姉も一緒に行くと思うから」

楓「そうですね、なら兄さんＡクラスに寄ってからですね」

秀「ではまず、Aクラスに行って姉上と合流するとするかの」
そう言うと俺達は優子がいるAクラス前にたどり着くと

秀「さて姉上はいるかの？」
扉を開けると優子は黄緑色の髪の女性と話しているようだったので
俺たちはAクラスへと入って行った。

命「失礼します。優姉、迎えにきたよ」
と命は優子に向かって入って行った。俺達も命を追うようにAクラスに入った。
入ってみても思ったがFクラスと比べると凄いというか格が違うと改めて実感する

貴「やっぱりAクラスって凄いな」

秀「そうじゃな。流石Aクラスという所じゃな」
そう会話しながら優子の所に近づいて行った

優「あら命、わざわざ来てくれたの」
優子は俺達を見渡して聞いてきた

優「で、どうしたの？皆して来て？」

秀「それはじゃな。明日命と楓が明日ワシらに弁当を作ってくれることになっての。

帰りにその買い物に皆で行こうという風になったのじゃ」

優「そういうこと」

命「優姉大丈夫だよ。ちゃんと優姉の分を作るから」

優「ありがとう命」
そういうと優子は命を抱きしめた。

命「優姉。恥ずかしいよ」
優子は命の言葉に気づき抱きついた手を緩めた

貴「ところで優子、隣の方は？」

優「ん？あぁこの子は、私のクラスメイトで友達の工藤愛子よ」

工「今、優子から紹介があった工藤愛子だよ。よろしくね♪　えっとキミ達は？」
凄い可愛い子だな。こんな人が同学年にいたんだ

秀「ワシは２－Ｆの木下秀吉じゃ。よろしくなのじゃ」

工「木下って事は優子と命の姉妹？」

秀「そうじゃ、先に言っておくがワシは男じゃからな」

工「えっ男の子なんだ。女の子かと思っちゃたよ。ごめんね」

秀「いや、気にするでない。今度から間違えないでほしいのじゃ。・・・本当に」
そういう秀吉にはなんか悲壮感が漂っていた

工「・・・うん、わかったよ。気をつけるよ。それでソコのキミは？」

貴「俺は２－Ｆの織村貴浩だ。そこにいる楓の双子の兄なんだ、よろしく」

工「楓のお兄さんなんだ。よろしくね」

貴「ん、楓のこと知っているのか？」

楓「兄さん、愛ちゃんとは去年同じクラスだったんだよ」

貴「あれ、でも何回か楓のクラスには顔だしたけど工藤さんのこと見た記憶がないな？」

工「それはそうだよ。僕は１年の終わりごろ転入してきたんだもの。その時に楓と優子、命と知り合ったんだ」

貴「それはどおりで、見かけたことないなと思ったんだ」

楓「兄さん、愛ちゃんと話すのも良いけど買い物に行かないと」

貴「おっとそうだった。ごめんごめん」

工「へぇー皆で買い物に行くんだ。僕もお邪魔して良いかな？」

楓・命「「良いですよ」」

貴「俺も良いと思うよ」

秀「ワシも良いのじゃ」

優「私も良いと思うわ、さてじゃあ行きましょうか」
そういって俺達は6人で買い物に行くことになった

優「とりあえず、私達の家の近くスーパーに行くってことでいいのかしら?」

貴「俺達は良いけど、工藤さんは大丈夫なの?家ってこっち方面にあるの?」

工「うん、僕の家は優子の家の割と近くに住んでいるんだ。貴浩君と楓ちゃんの家は近くなの?」

貴「あぁ高校に進学した時に俺らの親父が秀吉たちの両親と知り合いで、

秀吉たちの家のすぐ近くに引っ越したんだ。

っていうか、俺のこともう名前で呼ぶんだ?」

工「うん、だって楓も同じ苗字なんだし名前で呼んだほうがわかりやすくないかな?

それに皆、名前で呼んでたから、呼んだんだけど、駄目だった?」

工藤さんは上目遣いでそう聞いてきた。

（その上目遣いは反則だろ）

貴「うっいや、・・・そんなことないよ。いきなり名前で呼ばれたから驚いただけだよ」

俺は慌てて答えた。

楓「・・・兄さん。照れてるの？」

貴「い、いやいや。照れてなんかいないよ／／／」

命「貴浩君、顔が真っ赤だよ」

秀「そんな顔で否定されてものの」

貴「・・・／／／」

それから俺は皆から茶化されながら買い物をし、帰宅した。

そしてこれが不幸の始まりだったとは今の俺は思いもしなかった。

第2問目～朝からの波乱～

そしてこれが不幸の始まりだった

貴「はぁ、はぁ・・・撤けたか？」

F『いたぞ、貴浩だ。捕まえろ』

F『『うおぉおおお！！』』

貴「げっ見つかった」

そう言うと俺はすぐ様逃げ出した。

貴（はぁ～、走るのは苦手なのに。何でこんなことになったんだ？）

楓「兄さん朝だよ起きないと遅刻するよ」

貴「・・・あと１０分だけ」

楓「もう、そんな事言ってちゃんと起きたことないよね兄さん」

楓はそう言うとお玉とフライパンをどこからか取り出し

楓「秘儀『死者の目覚め』」

とフライパンとお玉を叩き鳴らした

＜カンカンカンカン＞

貴「うおぉおおお！」
いきなりの爆音？に俺はベットから転げ落ちた
と俺に言い、俺の部屋から出て行った。
耳元で鳴らされたのでもう眠気が覚めしまったので着替えて顔を洗いに行った。

楓「あ、兄さんおはよう。顔洗ってから来てね」

楓「兄さん、ご飯の用意できたからお皿とか準備してもらってもいいですか？」

貴「了解」

俺は皿を並べるとそこに楓が料理を乗せていった。
今日の朝食は、食パンとトマトのスープとスクランブルエッグだ。
朝食はほとんど楓が作る。本当は当番制だったんだが俺の寝起きが悪いので
いつのまにか楓が作るようになっていた。もちろん楓の体調が優れない時は俺が作る。

家での家事は、食事は朝食は楓が作るが夕食は当番制で俺が作る時は和食中心で、楓が作る時は
洋食中心となる。洗濯は楓がやっている。っというか俺にやらせてくれない、何故だろう？
よって、ごみを捨てたり部屋の掃除は俺がやっている（楓の部屋以外）となっている。
食器を洗うのは2人で分担して行っている。

楓「兄さん学校行こう」

貴「了解」

俺達はいつも通り一緒に学校に向かった。

ここまでは普段通りだったのだが・・・

扉をあけ教室に入ってみると・・・

紫色の衣装と覆面を身につけた奴らが凶器を持って教室の中に居座っていた

貴「・・・何?これ?どういうこと?」

俺は恐る恐るそこにいる奴等に話しかけてみると・・・

須『諸君。ここはどこだ?』

F『『最後の審判を下す法廷だ』』

須『異端者には?』

F『『死の鉄槌を!』』

須『男とは』

F『『愛を捨て、哀に生きるもの!』』

須『命様と楓様とは?』

F『崇めるもの。そして我らがクラスの聖母様だ』

須『宜しい。これより、ＫＭＦ団による異端審問会を開催する』

貴「は？」

Ｆ『とりあえす、・・・デストロイ』

いきなりそんなことを言いだし怪しい奴が殴りかかってきた。

俺は身の危険を案じて、ひとまず距離をとった。

貴「いきなりなんだよ！俺が何をした！？」

須『こいつの罪状を読み上げよ』

Ｆ『はっ。須川会長。えー被告、織村貴浩は我が文月学園第２学年Ｆクラスの生徒であり、

この者は我らが教理に反した疑いがある。昨日未明、この者は我が文月学園の女子生徒５名と

一緒に楽しそうに帰るだけでなくスーパーで買い物を共にするという不埒な事を我らが同胞が

目撃しています。今後充分な調査を行った後、甲に対する然るべき対応を・・・』

須『御託はいい。結論を述べたまえ』

Ｆ『デートしてたので羨ましいであります』

須『うむ。実にわかりやすい報告だ』

貴「それって昨日秀吉達と一緒に帰って・・・」

（シュッ）

今、何かが横を通り過ぎて行きゆっくりその方向を見てみるとカッターが壁に突き刺さっていた。

貴「・・・・・」

須『判決の時間だ』

貴「楓、荷物頼む！」

そう言い、俺は楓に鞄を投げ渡し教室から逃げ出した。

須『追え！逃がすな』

Ｆ『我らＫＭＦ団の名にかけて貴浩を捕まえろ』

そんなこんながあり今現在に至る

貴（さて、どうするかな？まだＨＲの時間まで結構あるしな。

それにこのまま逃げつづけても俺の足じゃいずれ捕まりそうだからな。さてどうするか？）

そう考えながらＫＭＦ団の奴らから逃げていると

工「あれ？貴浩君？」

誰かに呼ばれた気がして振り返ると、そこには工藤さんが立っていた。

工「僕達の教室前で何しているのかな?まさか僕に会いに来てくれたとか。」

貴「え、いや。そんなんじゃｎ・・・」

貴（待てよ。このままＡクラスで時間を稼ごうかな。まさかＡクラスにいるとは思わないだろうし、

よしそうしよう）

貴「・・・うん、そうなんだ、工藤さんに少し用が会って来たんだ。ここじゃちょっとあれだから

Ａクラスに入らせてもらっても良いかな?」

工「え、本当なんだ。冗談でいったんだけどな（笑）」

貴「駄目かな?少しでいいからお願い！」

（早くしないと見つかってしまう）

工「えっ?うーん、まぁいいよ。なら行こうか」

貴「ごめんな。ありがとう」

そうして俺は工藤さんとすぐにＡクラスに向かい中に入らせてもらってすぐ扉を閉めた。

すると遠くのほうから

F『そっちにいたか？』

F『こっちにはいねぇぞ！どこに行きやがった』

F『必ず奴を見つけ出せ！』

と俺を探す声が聞こえてきた。危機一髪だった。そこで俺はようやく一息ついた。

工「で、貴浩君。僕に何の用が会ってわざわざ来てくれたのかな？」

貴（あっそうだった。えっーとどうするかな？とりあえず何か話さないと）

貴「・・・えっとな、昨日一緒に皆で帰って買い物に付き合ってくれただろ、

そのお礼といってはなんだけど今度、弁当でも作ってこようかなぁみたいに

思ったんだけど、どうかな？」

工「え？」

貴（苦し紛れに1番無難な話かと思ったんだけど、失敗したかな？）

貴「やっぱりいきなりこんな事言ったら迷惑かな？」

工「え、いや迷惑じゃないけど。

でも昨日の事だったら僕がお願いして一緒に行ったんだから気

にしなくてもいいのに」

貴「まぁそうなんだけどね。一応、感謝の気持ちとこれから仲良くしようという意味を込めてな」

工「う～ん。・・・じゃあ、そこまで言うのならお願いしようかな」

貴「了解。それと弁当の中身なんだけど、和食中心でも大丈夫かな？」

工「うん、大丈夫だよ」

貴「そうだ。ついでに携帯の番号とメアド教えてくれないか？」

工「わかったよ。赤外線で良いよね」

そしてお互いに携帯の番号とメアドを交換した。

【貴浩は工藤愛子の携帯の番号とメアドを獲得した】

貴「じゃあ、携帯の番号とメアドありがとな。弁当、早速明日作ってくるな」

工「楽しみにしてるね」

俺はそう言い残しＡクラスを出てＨＲが始まる直前に教室に戻った。

教室に戻ると楓と秀吉と命が昨日の事について説得してくれていたので
何事もなく午前の授業を送ることができた。

だが、まだ不幸は終わってはいなかった・・・

第2問目～地獄の昼休み～（前書き）

すみません。

少し、オリキャラの設定を変更しました。

もしかしたら、たびたび変更するかもしれないのでご了承ください

第2問目～地獄の昼休み～

貴（やっと午前中の授業が終わったな。今日は命と姫路さんが皆に弁当を作ってきてくれたんだよな。

それに楓のデザートだってあるしな。何を作ってきてくれたんだろうな？

朝、楓に聞いても内緒とか言われて教えてくれなかったしな）

俺がそんなことを考えていると

雄「よしッ昼飯食いに行くか！」

島「あッウチも一緒していい？」

明「じゃ僕はソルトウォーターでも・・・」

姫「あ、あの皆さん」

姫路さんが恥ずかしそうに話し掛けてきた

姫「え、えっと。おッお昼なんですけど、そのッ昨日の約束の・・・・・」

秀「おお、もしや弁当かの？」

姫「はッはい、迷惑じゃなかったらどうぞ！」

明「迷惑なもんか！ねッ雄二！」

雄「あぁそうだな、ありがたい」

命「明久君、皆さん。あの私もお弁当作ってきたので皆で食べてくれないかな?」

楓「私もデザート作ってきたので皆さんがよろしければ、どうぞ」

貴「楓のデザートは俺が保証するよ!本当においしいから!」

命「命の料理もじゃよ。我が家で1番料理が上手いからの」

ム「・・・・・・楽しみ」

明「本当楽しみだなぁ。ありがとね命ちゃん」

命「／／／」

島「むー・・・ッ瑞希も命も楓も意外と積極的なのね・・・」

秀「せっかくのご馳走じゃしこんな教室ではなく屋上にでも行くかのう」

雄「だったらお前ら先に行っててくれ」

明「ん?雄二はどっか行くのか?」

雄「飲み物でも買ってくる。全員お茶で良いよな?」

貴「ああ、良いと思うよ」

島「あッウチも行く！1人じゃ持ちきれないでしょ？」

雄「きちんと俺達の分とっておけよ」

貴「大丈夫だって」

明「じゃあ僕らも行こうか」

秀・楓・命・姫「「「そうですね（じゃな）」」」

俺達は屋上に向かって行った

秀「天気が良くてなによりじゃ」

楓「そうですね」

貴「人もいないから貸切状態だな」

楓「それに日差しと風が気持ち良いですしね」

そう楓がいうと、姫路さんと命が料理を入れた重箱を中央に置いた

姫「あんまり自信はないんですけど・・・」

そう言いつつ姫路さんは蓋を開けた

明・秀・貴「「「おぉッ」」」

俺らは一声に歓声をあげた。

旨そうだ。姫路さんのにはから揚げやエビフライにおにぎりなど定番のメニューが入っていた。

命「わ、私のも」
そう言うと命も重箱の蓋をあけると

明「こッこれは！！」

ム「・・・・・こちらもおいしそう」
命の弁当も凄く旨そうだ。命のにはアスパラ巻きや卵焼き、ポテトサラダ、おにぎりなどのメニューが入っていた。

明「すごいよ2人共！！塩と砂糖以外の物がたくさん入っているよ」

命・姫「「よッ喜んでもらえて良かったです・・・」」

普段、明久はどんな食生活で過ごしているんだ・・・。

命「明久君や皆に栄養をつけてもらおうと思って張り切っちゃいましたっ」

貴「命は良い嫁になりそうだな」

命「／／／」

秀「なんじゃと！！命はまだ誰にもやらんぞ！！」

貴「い、いや・・・本気にするなよ。ただの褒め言葉だよ」

秀「む、すまぬ。つい動揺してしもうた」

明「じゃあ、雄二たちには悪いけどお先にっと」

そう言い明久は箸をのばしていくと、不意に横から先にムッリーニが姫路さんのエビフライを口の中に入れた

パクッ

明「あッずるいぞムッリーニ！！」

明久は先にムッリーニ食べられたのが嫌だったのか文句を言っていたが、

バタン　　ガタガタガタ

貴・明・秀・楓・命・姫「「「「「「！？」」」」」」

エビフライを食べた直後、ムッリーニが豪快に倒れ、小刻みに震えだした。

貴・明・秀「「「・・・・・・」」」

秀吉と明久と顔を見合わせる。

姫「わわっ土屋君！？」

姫路さんが慌てて、配ろうとした割り箸を取り落とす。

ム「・・・・・・・・・（ムクリ）」

ムッリーニが起き上がった。

ム「・・・・・・・・・（グッ）」

そして姫路さんに向けて親指を立てる。多分『凄く美味しいぞ』と伝えたいんだろう。

姫「あっお口に合いましたか？良かったです」
でもなムッリーニ、それならなぜ足が未だにガクガク震えているんだ？
俺にはＫＯ寸前のボクサーにしか見えないんだけど
姫「良かったらどんどん食べてくださいね」

姫路さんが嬉しそうに勧めてくれると断れない。
むしろ、どんなにまずくても残さず食べてやる、という気にさえなってくる。
・・・でも俺には目を虚ろにして体を震わすムッリーニが忘れられない。

貴（・・・・・なぁ秀吉。あれ、どう思う？）
俺達は姫路さんに聞こえないくらい小さい声で話し掛ける。
秀（・・・・・・どう考えても演技には見えん）
明（・・・・・・だよね。ヤバイよね）
楓（・・・兄さんどうするの？）
命（・・・秀兄ぃ）

貴（じゃあまず、楓は姫路さんがこちらの会話に気づかれないようにしてほしい。
　命はムッリーニを見ててくれるかな。こっちは俺達でどうにかしてみるから）
楓・命（（わかりました））
そう言うと２人は言われた通りに動いてくれた
秀（で、貴浩よ。どうするつもりじゃ？）
貴（・・・・・明久。お前、身体は頑丈なほうか？）

明（・・・正直胃袋には自信がないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるから）
秀（・・・ならば、ここはワシに任せてもらおう）
勇気ある秀吉の台詞が囁かれる。
明（そんな、危ないよ！）
秀（大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋をしていてな。
　ジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせんのじゃ）
見かけによらずタフな内臓だなあ。ジャガイモの芽は毒だったはずだが
明（でも秀吉が・・・）
秀（安心せい。ワシの鉄の胃袋を信じて――）
とても男らしい台詞を言おうとしたところで、

雄「おう、待たせたな！へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」
雄二登場。

貴「おい！雄二。待ｔ――」
止める間もなく素手で姫路さんのから揚げを口に放り込み、

パク　　バタン・・・ガシャガシャン、ガタガタガタガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

島「さ、坂本！？ちょっと、どうしたの！？」

遅れてやってきた島田が雄二に駆け寄る。
・・・・・・間違いない。コイツは本物だ・・・・・・。
激しく震える雄二を見ると明久と目線で会話していた。

これはいつも一緒にいる俺達だからこそできる技だ。

雄「あ、足が攣ってな・・・・・・」

姫路さんが傷つかないようにウソをつく雄二。

貴「そうだな。ダッシュで階段を昇り降りしたんじゃないか」

秀「うむ、そうじゃな」

島「そうなの？坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど」

貴（やばい、島田をどうにかしないと）

明「ところで島田さん。その手をついてるあたりにさ」

明久がビニールシートに腰を下ろしている島田さんの手を指差した

島「ん？何？」

明「さっきまで虫の死骸があったよ」

島「えぇっ！？早く言ってよ！」

明「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきたほうがいいよ」

貴（ナイスだ明久！！）

島「そうね。ちょっと行ってくる」

そうして島田が手を洗いにここを離れて行った。

雄（明久今度はお前がいけ！）
明（む、無理だよ！僕だったらきっと死んじゃう！）
秀（流石にワシもさっきの姿を見ては決意が鈍る・・・）
貴（・・・よし、なら俺が逝くよ）
明（た、貴浩！？）
貴（・・・雄二・明久・秀吉貸し１つな）
明・雄（（あぁわかった））
貴（最後に楓が作ったデザート、俺の分は残しておいてくれよ）
秀（了解なのじゃ）
貴（よし、いくぞ）

明「あっ姫路さん、アレはなんだ！？」
明久が姫路さんの気を引いた瞬間、俺は姫路さんの弁当を口の中に流し込んだ。

貴（２－Ｆ織村貴浩。逝っきまーす）

グフッ　　バタ

貴「・・・・・・」

貴「・・・」
そして雄二と秀吉の背に隠れて逝った。

そうして俺は目の前が真っ白になった

第2問目～地獄の昼休み～（後書き）

さすが、姫路さんの料理です。

ムッリーニと貴浩が犠牲になりました。

次回、更新頑張ります

第2問目～昼の一波乱後～

そして、俺が目を覚ましたのは、倒れてから３０分たった後だった

楓「あっ？兄さん目が覚めた？」

秀「おぉ大丈夫じゃったか。うわ言を言ってた時は心配したのじゃ」

雄「貴浩、もう大丈夫なのか？」

貴「あぁ・・・多分大丈夫だと思う」

姫・島「「？？」」

姫路さんと島田さんの２人はわけがわからず首を傾げていた

雄「さて、それじゃあ次の作戦を伝えるぞ」

島「次ってＢクラスなの？」

雄「ああそうだ」

島「何度も聞いてるけど目標はＡクラスじゃないの？」

雄「正直に言おう。どんな作戦でもうちの戦力じゃＡクラスには勝てやしない」

雄二らしくもない降伏宣言か・・・。無理もないか、Ａクラスは格が違うしな。

それに、優子も含めトップの１０人は格が特に違うらしいからな。

雄「どんな作戦でも代表を倒せない限り勝利はない・・・」

楓「それでは最終目標はＢクラスに変えるって事ですか？」

雄「いいや、そんな事はない。Ａクラスをやる」

姫「それってどういうことですか？」

雄「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎討ちに持ち込もうと思う」

明「一騎討ちに？どうやって？」

雄「Ｂクラスを使う」

雄「下位クラスが負けたらどうなるか知っているな？」

明「え！？えーと・・・」

そこへ命が素早く明久の耳元でどうなるか説明しているようだ。

雄「つまりはＢクラスならＣクラスの設備になるわけだ」

命「逆に上位クラスが負けると設備が入れ替わるんですよね？」

雄「そうだ。そのシステムを利用して交渉する」

秀「交渉なんぞに応じてくれるかのう・・・」

雄「交渉内容については考えてある。俺に任せてもらう」

秀「じゃがそれでも問題はあるじゃろう。そもそも一騎討ちで勝てるのじゃろうか？」

貴「そうだな。こちらに楓や姫路さんがいることは既に知られているだろうしな」

雄「それに関しても考えがある・・・心配するな。

とにかくＢクラスをやるぞ！細かいことはその後だ」

貴「了解だ。雄二に任せる」

雄「で、明久」

明「ん？」

雄「今日のテストが終わったらＢクラスに行って宣戦布告して来い。時間は明日の正午からだ」

明「こｔｌ」

命「駄目ですよ坂本君。この前、明久君が行ったんですから今度は坂本君が行ってください！」

明久が断る前に横から命が軽く雄二を睨んで口出ししてきた。

雄「し、しかしだな」

命「駄目です！」

涙目になりながらも命は一歩も引こうとはしなかった。

貴「雄二、行って来い。命がここまで言ってんだ。今回くらい聞いてやれよ」

秀「雄二よ、命が泣いてまで言っておるのじゃ。まさか、雄二は命の願いを無碍にはせぬよの」

秀吉、笑っているけど目が怖んだが。
それになんか後ろから黒いオーラが見えるんだが・・・

雄「わかった。わかった。俺が行ってくる」

命「ほ、本当ですか！？」
そういうと、命はすぐ泣き止んだ。嘘泣きか？

雄「はぁ～。じゃあひとまずは教室に戻るとするか」

そうして俺達は教室に戻り、俺は楓が作ってくれたデザートのアップルパイを食べ午後の試験を受けた。

オリキャラ（2）改2　＋　文月学園教師（前書き）

新たにオリジナルキャラクターを作ってみました。

次はBクラス戦なのでBクラスのキャラを作ってみました

・6／19日に獅子川の設定を変更しました

ご了承願います

また、文月学園の教師を作りました。

元々いるキャラととあるゲームから抜粋しました。

一応、私が設定した科目の教師をそろえてみました

もしかしたらネタバレを含む可能性があるのでご了承ください

オリキャラ（2）改2　＋　文月学園教師

〜　オリジナルキャラクター　〜

獅子川（ししがわ）　一子（かずこ）

・２－Ｂ所属

・誕生日８月１０日　身長１４８ｃｍ　Ｏ型

・胸は優子より少し大きいくらい。茶色の髪を肩まで伸ばしている。

・一人称は「僕」

・普段から男勝りな性格で試召戦争が始まると点数消費を度外視して敵の撃破のみに重きを置く

戦闘狂になる乱戦状態で熱くなると敵味方区別なく撃破してしまう

だが凄く友達思いで、友達には攻撃しない

・卑怯な戦法は大嫌い（よって根本や根城のことが大嫌い）

・得意科目は保健体育と生物、苦手科目は古典

〈召喚獣〉

・服装：着物

・武器：ホッケースティック

・腕輪：反発

・相手召喚獣本体以外の相手の召喚獣の武器や床と自分の召喚獣を

任意に反発させる（床とは反発するが武器とは反発しないなど）

床と反発させることによる高速移動や、相手の武器と反発させる

ことによる緊急回避が可能。

〔相手の武器（攻撃）を１回反発させる毎に５０点

消費、

床を1回反発させる毎に10点消費する」

五十嵐（いがらし）　きらり

・2－B所属

・誕生日5月8日　身長143ｃｍ　A型

・見た目は癒し系。髪は薄い青色にショートヘア

・温厚な性格でみんなに優しく面倒見が良い。大抵の事は謝ればすぐに許し後に引きずらない。

人からの頼みをあまり断らない（断れないではない）。少し悪く言えばお人よし。

・このように人が良すぎるので親友は心配でよく注意されたりする

・親友には同じクラスの獅子川一子やAクラスの砂原鈴歌などがいる

・保健委員所属

・教師からの雑用を嫌な顔一つせず引き受け、委員会のお願いも良く引き受ける。

人がいいので頼まれた以上のことをするのもしばしば。

・手伝いを行うときはそれの延長上にあるような職業の制服を着て行う。

保健委員の仕事ではナース服、生活指導の先生の見回りの手伝いなら婦警服等。

嫌な顔せず手伝ってくれて、仕事も正確で早いので先生も強く注意できない。

・学校には勉強用具入れとは別の鞄（部活用みたいな）を持ってきており、

その中には職業コスプレ用の衣装が数点入っている。使用頻度が高いナース服と婦警服は

常に入れているが、その他は必要かもしれないと思ったものを何点か毎日入れ替えている。

そのため、相応しい服が鞄にないこともある。そんなときは鞄を一生懸命あさったあと、

露骨にがっかりした様子を見せる。

コスプレ癖の理由は将来なりたい職業が多くあるが全部になれないことは分かっているので、

その職に就いたつもりで仕事することで擬似的に夢を叶えたいため。

・自分はコスプレとは思っておらず、周りにコスプレを頼まれても（ムッツリーニの撮影等）

恥ずかしいからと断る。それでも、普段のコスプレの影響で写真のバリエーションが多く

ムッツリ商会の売り上げでは上位に位置する。

・戦争中は軍服を着ている。召喚獣の装備とはミスマッチである

・得意科目は現国、苦手科目は物理

〈召喚獣〉

・服装：ナース服

・武器：注射器（召喚獣の半分くらいの大きさ）

・腕輪：注射（他の召喚獣に注射し、点数を吸収する）〔1刺しで50点消費〕

根城（ねじろ）　敦（あつし）

・2－B所属

・目標のためには手段は問わない

・狡賢く姑息。予想外な展開には弱い。根本とは気が合う仲

・雄二とは中学が同じで何かとけんかを売ってくる

・得意科目は、現代社会

〈召喚獣〉

・服装：改造学ラン

・武器：ハンマー
・腕輪：？？？

〜　学園関係者　〜

藤堂　カヲル
・文月学園の学園長にして試験召喚システムの開発者。
狡猾で年の分だけ駆け引きに長けており、
自分の目的の為には教師や生徒をも欺く食わせ者。
もともと研究者であるため教育者にあるまじき言動が目立つ。
・学園の性質上イメージの低下を極力避ける必要があるため、
問題が起きたら解決よりも隠蔽を優先する。
学園を自身の開発した発明品の実験場のように考えており、
特に召喚システムに関してはトラブルで生じた事でも目新しい要素があれば
データ収集と称して生徒に試運転させたり、行事にかこつけて衆目へ
それを披露したがる子供のような面がある。
・「教える側にも相応の学力が必要」という教育理念を持ち教師にも試験を
義務付けるなど意外と教育者らしいところも見せる

西村（にしむら）　宗一（そういち）
・生活指導の鬼として恐れられる教師で、
Ａクラス戦後にＦクラスの担任教師となる予定。
・通称「鉄人」
・趣味がトライアスロンという超肉体派教師

・生活指導室を根城にしており、「規律を乱すものには鉄拳制裁」という
教育方針から全学年のほぼ全生徒に恐れられている
・試召戦争の時は補習室の管理をしており、戦死者は鬼の補習によって
「趣味が勉強。尊敬するのは二宮金次郎」という理想的な生徒へ洗脳される
（この補習は拷問であると恐れられている）
・またそのイメージとは裏腹にかなりの秀才でもあり、教師用テストでは学年主席や担当科目の教師以上の点数を取っている
（前述の運動神経に加え、英語や物理の授業をしている描写もあるので、
完全なる全科目対応オールラウンダーである）。その力は学年主任の高橋をも上回る。
そのため試召戦争時は、通常の教師が自分の担当科目のフィールドを展開するのに
対して学年主任同様に、いかなる科目のフィールドの展開が可能
・非常に厳しい反面、教師という職業に誇りを持ち生徒とは常に真摯な気持ちで
向き合っている。また意外と几帳面で時間にも正確。生徒相談なども受け持つ
気さくな面もある

高橋（たかはし）　洋子（ようこ）

・学年主任にして２－Ａ担任。
・通称「高橋女史」。総合科目で７８００点弱
・野球については全く知らない
・召喚獣の装備は軍服に鞭

大島（おおしま） 武（たけし）
・【保健体育】担当の教師
・体育教師だけあって並外れた行動力を持つ

福原（ふくはら） 慎（しん）
・Ｆクラス担任
・マイペースでうだつの上がらない初老の男性
・【現代社会】担当の教師

布施（ふせ） 文博（ふみひろ）
・【化学】教師

船越（ふなこし）
・【数学】教師
・４５歳独身。婚期を逃しついには単位を盾に生徒に交際を迫るようになった危険人物

木内（きのうち）
・【数学】教師

長谷川（はせがわ）
・【数学】教師
・他の先生より若干召喚フィールドが広い

竹中（たけなか）
・【古典】教師
・カツラをつけている

向井（むかい）

・【古典】教師

遠藤（えんどう）

・【英語】教師

・おおらかな性格で多少のことは見逃してくれる心優しい女性教師

竹内（たけうち）

・【現国】教師

寺井（てらい）　伸介（しんすけ）

・【現国】教師

・学生時代に野球をやっていた

竹原（たけはら）

・教頭

＜オリジナル教師＞

烏丸（からすま）　真紅朗（しんくろう）

・【世界史】の教師

・３５歳独身・身長１７０ｃｍ。

・見た目はＴＯＶのレイブン

・胡散臭さが服を着て歩いているような教師だが生徒からの信頼は高い（主に男子）

・生徒からは「レイブン先生」と呼ばれている

・体育教師ではないが並外れた行動力を持つ

・実の正体は国から文月学園の監視・捜査を目的に潜入したが、今では

逆に学園を守るため学園長につくしている。

仕事でのコードネームは「シュヴァーン」
・ジュディスに片思い中
・召喚獣の装備は騎士甲冑に変形機構をもつ弓を操り近距離と遠距離を器用にこなす

ジュディス・クリスティナ
・【英語】の教師
・フランス出身でフランス語・英語・日本語をしゃべれる
・２９歳独身・身長１７５ｃｍ
・見た目はＴＯＶのジュディス
・抜群のプロポーションをもつ美女
・活動的で好戦的な性格。気まぐれで奔放であり料理上手で特に手の掛かる料理が得意。ギャンブルにも滅法強い
・召喚獣の装備はＴＯＶのジュディスと同じ（槍）

森田（もりた）　璃香（りか）
・【物理】の教師
・２５歳・身長１５０ｃｍ
・見た目はＴＯＶのリタ
・教師としては優秀だが典型的な偏屈
・学園の召喚システムの管理の手伝いをしている
・召喚獣の装備はＴＯＶのリタと同じ（鞭）

鈴村（すずむら）　瀬名（せな）
・【保健体育】担当の教師
・水泳部の顧問
・年齢：２７歳　／　身長：１７１ｃｍ

・見た目はＴＯＬのセネル
・召喚獣の装備はＴＯＬのセネルと同じ（拳）

千葉（ちば）　琥珀（こはく）
・【美術】の教師
・２８歳・身長１４３ｃｍ
・童顔で低い身長なのがコンプレックス
・見た目はＴＯＨのベリル
・帽子（かぶり物）マニア。学校にいる時は帽子をかぶっている
・召喚獣の装備はＴＯＨのベリルと同じ（巨大な筆）

スタン・デュナメス
・【生物】の教師
・イギリス出身で英語・日本語をしゃべれる
・２９歳　／　身長１７２ｃｍ
・見た目はＴＯＤのスタン
・性格は純粋な正直者で熱血漢
・同僚のルーティとは夫婦でリリスとは兄妹の関係
・どの先生よりも親しみやすく生徒からの信頼は高い
・特技はどこでも寝ることができる
※非常に低血圧で寝起きが悪く、一度眠ると起こすのは至難の業
・召喚獣の装備はＴＯＤのスタンと同じ（武器はディムロス）

ルーティ・デュナメス
・【日本史】の教師
・イギリス出身で英語・日本語をしゃべれる
・２８歳　／　身長１５７ｃｍ
・見た目はＴＯＤのルーティ

・スタンの妻
・優しく面倒見の良い性格。ツンデレ的性格でもある（スタンに対して）
　生徒からの相談を聞いたりもする
・特技は骨董品の鑑定ができる
・召喚獣の装備はＴＯＤのルーティと同じ（武器はアトワイト）

リリス・デュナメス
・【家庭科】の教師
・イギリス出身で英語・日本語をしゃべれる
・２７歳　／　身長１５５ｃｍ
・見た目はＴＯＤのリリス（髪型がポニーテール）
・スタンの妹
・料理が得意でプロ顔負けの腕前を持つ
・料理に対してだけは妥協しない（姫路の料理を断固否定）がそのほかのことに関しては優しく面倒見も良い
・召喚獣はエプロン姿にお玉とフライパンを武器にしている

オリキャラ（2）改2　＋　文月学園教師（後書き）

テイルズキャラを文月学園の教師にしてみました

ご意見・ご感想があれば教えていただけると恐縮です。

また、まだオリジナルキャラクター（生徒ｏｒ教師）は

募集していますので案がありましたら教えてください

第2問目～協力～

午後はDクラス戦で消費した教科で化学と現国の試験を受けていた
試験が終わると俺は荷物をまとめ、いつものメンバーと帰ろうと仕
度をする。

貴「ふぅ～。おわったー」

貴「明久、雄二、秀吉、ムッリーニ帰ろうぜ」

メンバーに声をかける。だいたいいつもこのメンバーで帰る。
たまに、楓や命たちと帰ったりもする。

雄「悪いな。俺は今日は用事があってな」

明「あっ僕もちょっと用事があって先に帰らないと行けないんだ」

ム「・・・・・・同じく」

秀「すまぬの、今日は部活があって一緒には帰れんのじゃ」

貴「そうか。ってことは楓も部活か」

楓「うん、兄さん。部活があるから帰り遅くなるね」

貴「了解。夕飯作って待ってるよ。秀吉、帰り楓のこと頼むな」
楓は秀吉と同じ演劇部に所属しているのと、帰り道が同じなので、
秀吉に一緒に帰ってもらっている。

本当は俺が迎えに行こうと思ってたのだが楓が来ないでなんて言うから仕方が無く・・・

秀「わかっておる。無事に家まで送り届けるとする」

貴「じゃあ、命ちゃん一緒に帰る？」

命「そうですね、じゃあお願いしますね」
そう言って、秀吉と楓は部活に、明久とムッリーニと雄二は用事があって帰って行った

貴「じゃあ、俺達も帰ろうか？」

命「はい」
そうして2人は教室をでた

貴「そういえば、今日は優子が一緒じゃないけど良かったの？」

命「あっ、えっと。優姉今日は用事があるみたいで先に帰っちゃったんだ」

貴「そうなんだ。いつも一緒に帰ってるんだと思った」

俺と命は他愛もない会話をしながら帰宅した。
帰宅後、俺は着替えて明日の弁当の買い物に出かけた。
いつものスーパーに向かって弁当の材料を買って帰っていると、先ほど別れた命が荷物を持っていたので声をかけることにした。

貴「よぉ。先ほどぶり」

命「あ、貴浩君」

貴「どうした。買い物帰りか？」

命「うん、そうだよ。貴浩君は？」

貴「俺も買い物帰り、明日の弁当の材料とついでに学校で食べようと菓子を買ってきた」
俺はそう言って命が持っている買い物袋をみた

貴「命は随分と買ってるけど、明久にでも弁当を作るつもりか」
と俺は冗談で言ってみたのだが

命「え？え？なんでわかったんですか？貴浩君エスパーですか？」

貴「え、いや。ただ冗談で言ってみただけなんだけど・・・明久に弁当ねぇ（ニヤニヤ）」

命「な、なんですか？」

貴「明日、試召試験戦争やるから、明久に栄養をつけさせようとしてるんだな」

命「は、はい。そうですよ。栄養をつけて頑張ってもらおうと思ってるんです」
命はそう言いながら目は泳いでいた

貴「そっか。明久の奴、喜ぶだろうな。

そういえば、明久の奴確か、パエリアとか肉じゃがが好物だっ

たよな」
俺はさりげなく明久の好物を口にした。すると
命「ほ、本当ですか？」
貴「あぁ、確かそう言ってた」
命「・・・よし（ボソッ）」
貴「ん、何か言った？」
命「いいえ。なんでもありません。そ、そういう貴浩君もなんか買った物やけに多くありません？」
貴「ん？ああ、３人分の弁当を作ろうとしてるからな」
命「３人分？貴浩君と楓ちゃん、あれ？あと１人誰ですか？」
貴「あぁ工藤さんだよ」
命「愛ちゃん？どうして愛ちゃんに作るの？」
貴「昨日、俺達の買い物につきあってもらっただろ。そのお礼に」
命「そうなんですか。・・・本当にそれだけですか？（ニヤニヤ）」
命はニコニコ笑いながらに聞いてきた
貴「それだけって？うーん後はそうだな、これから宜しくの意味もかねてかな」

命「宜しくって?まさか付き合うってことですか」
命は迫力ありげにこっちに迫ってきた

貴「いやいや、友達としてだよ。会って2日で告白とか、どんだけ無節操なんだよ俺は」

命「なんだ。そうなんですか・・・・・つまんない（ボソッ）」

貴「おい、今なんか最後に言わなかったか?」

命「いいえ。なにも言ってませんよ」

貴「そうか?ていうか、俺のことより命はどうなんだよ」
さっきの仕返しだといわんばかりに俺は質問した。

命「え?ど、どういうことですか?」

貴「明久のこと好きなのか、と聞いているんだ」
俺は直球で聞いてやった。
ぶっちゃけ女性にこんなこと聞くのはどうだろうかとも思ったが、まあいいや。

命「わ、私が、明久君を、ｓｎこｔｔｎあｒｗｋｎいよ／／／」
顔を真っ赤にして否定しているが、もう何言っているのかが滅茶苦茶だ。
ここまで動揺するか・・・。

貴「最後、なんて言ってるかわからん。が、まあ態度見てたらわかるけどな」
俺はニヤニヤしながら答えると

命「うっう／／／」
顔を真っ赤に染めて既に少し涙目になってる。これ以上やると泣き出しそうだ。
やばい、やり過ぎた。このままじゃあの過保護姉妹?に殺される（汗）

貴「な、泣くなよ」

命「な、泣いてなんかいません」
そう言って俺から顔を背けた

貴「悪かったって、だから怒るなよ」
俺は手を合わせて謝る

命「怒っていません!」
完璧に怒っているな。
仕方が無いか・・・

貴「はぁ～、わかった。じゃあ命に協力してあげるから。もう怒るなよ」
・・・明久すまない

命「協力?」

貴「そう、協力。明久をおとすための」

命「お、おとす!?」
俺がそういうと命の顔が一瞬でゆであがった。

貴「そうだ、明久のこと好きなんだろ？」

その後、しばらくして無言で、

命「・・・・・・（コクン）」

と命はあきらめたようにうなずいた。

貴「なら俺が、命が明久の彼女になれるよう少しだけ手助けしてあげるよ」

命「え？いいの？本当に？」

先ほどまで目に涙をためていた顔が一瞬で笑顔に変わった。

貴「あぁ、男に二言はない」

命「じゃあ、じゃあ！お願いします！！」

貴「わかった。ただし、できるのは手助けするだけだぞ」

命「はい、もちろんです」

貴「・・・だから、今さっきのことはくれぐれも優子と秀吉には内緒の方向でお願いします」

俺は両手を合わせお願いする。

命「はい、わかりました。絶対に言いません。ですのでよろしくです」

貴「了解です」

命「貴浩君約束ですよ」
さっきと打って変わって凄い嬉しそうに命は帰っていった

・・・・・明久悪いな。俺はまだ死にたくなかったんだもの（泣）
俺は明久を売るという事で自分の命をつなぐ事ができた。

そうして今日という1日は終わった。

【貴浩は命の恋路に協力することになった】

そして翌日
俺は珍しく早起きして、朝食と弁当の準備をしていた。
そこへ楓が起きてきた.

楓「兄さんおはよう」

貴「おはよう楓、お皿準備してもらって良いかな。もうできるから」

楓「うん、わかったよ」
そして、並べられた皿に料理を乗せて行った。

貴「じゃあ食べようか。いただきます」

楓「いただきます」

今日の朝は、ごはん、味噌汁、卵焼き、シャケの塩焼きだ。
俺が作ると大抵は和食になる。
ちなみに、昨日の夜に楓には工藤さんに弁当を作ることを伝えてある。

楓「兄さんのお弁当か。久しぶりだね」
そうなのだ。弁当は作る時は作るがほとんど命が作る。理由は簡単、俺が朝弱いからだ。
そんな雑談をしながら朝食を食べ、学校へ出かけた。

その登校途中、秀吉たちを見かけ共に学校に行くことにした。
そして、俺は命に近づいて秀吉たちに聞こえないような声で話し掛けた

貴（命、明久に弁当作ってきたのか？）
命（はい、でもどうやって渡せば良いのかわからなくて）
貴（そこは、俺に任せて）
昨日言った通り、俺は命の恋を応援することになったのだ。
貴（そういえば、１つ気になったんだけど聞いていいかな？）
命（はい？何ですか？）
貴（命が明久のこと好きなの、２人は知ってるのか？）
２人とは優子と秀吉のことである。
２人は命のことを溺愛しているから、気になってしまった。
命（い、いえ。教えてはいません。優姉も秀兄も優しいんですが・・・）
貴（あの２人だからな・・・）
お互い苦笑いした。
貴（わかった。なら今は２人には知られないようにするよ）
命（すみません。お願いします）

そうしないと俺もだけど明久も2人からの制裁を受けるかもしれないしな。
時間の問題だろうけど・・・
その時はその時だ。
すると

秀・優「「2人でいったい何を話しておるのかしら（の）？」
そこで優子と秀吉から声をかけられ振り返ると、笑顔だが目が恐ろしかった。

貴「い、いや今日の試召戦争について話していたんだよ。なあ？」
俺はそこで命に同意を求めた

命「そ、そうだよ」

秀「そうであったのか？」

貴「うん、そうだよ。ほら、命って体弱いから大丈夫なのかなって思ってさ」
俺は2人にばれないように適当に話をした。

優「そういえば、そうよね。Fクラスって新学期早々に試召戦争を始めたんですものね」

貴「そうそう、それで今日の午後からBクラス戦だからな」

秀「そういえば、そうだったかの」

命「うんうん。だから、そのことで貴浩君が心配してくてたんだよ」

優「そうなの、ならいいんだけど」
そこから、会話をしながら学校へ向かった。助かった・・・。
そして、教室に着くとすぐ俺は工藤さんにメールした。

貴〔おはよう、もう教室にいるのかな?弁当作ってきたんだけど居るなら持って行くよ〕
とメールを打ち送信した。その数分後に返信がきた

工〔居るよ。待ってるね！（ｂ＾ー。）〕
顔文字をつけて返ってきた。
そして俺は弁当を持ってＡクラスへと向かった。

貴「失礼します。工藤さんはいますか?」
Ａクラスの扉を開け、近くの女子生徒に尋ね、工藤さんを呼んでもらった
まぁいることはわかっているけど。

貴「おはよう工藤さん。はい、これ約束の弁当」
そう言い工藤さんに弁当を渡す

工「わぁ、本当に作ってくれたんだね。うれしいな」

貴「じゃあ放課後、弁当箱取りにくるな」

工「うん、わかったよ」
俺は話短めにし、教室に戻っていった。だって周りからの目線が怖かったんだもん・・・。

第2問目～Bクラス戦開戦～

午前中、試験を受け終えFクラスは最後の打ち合わせをしていた

雄「さて皆、総合科目テストご苦労だった。

午後はBクラスとの試召戦争に突入するが殺る気は充分か？」

F「「「「「「おぉおおおおおおお」」」」」」

Fクラス男子の雄たけびが教室内に轟いた。

雄「今回の戦争は敵を教室に押し込むことが重要になる。

その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対負けるわけにはいかない。

それで、前回はそこまで部隊というのを決めてはいなかったが今回からは部隊を決めようと思う。

今から言う奴らは部隊の隊長とその副隊長だ。一度しかいわないから良く聞けよ」

雄二はそう言うと一度周りを見渡し、部隊を告げて言った。

雄「まず、1番隊隊長は吉井明久、その副隊長に木下命、部下として7名加えた計9名、

2番隊隊長は木下秀吉、副隊長に織村楓、部下として7名加えた計9名、

次に3番隊隊長は織村貴浩、副隊長に近藤、部下として7名加えた計9名、

４番隊隊長は須川亮、副隊長に島田美波、部下として7名加えた計9名、

最後に俺を総大将にし、その近衛部隊として１１名をおき、

姫路とムッリーニはその戦況に応じて使い分ける」

F「「「「「「了解」」」」」」

雄「なら、早めに飯を食べ、戦争に備えろ。開始３０分前に集合しろ。解散」

そして皆、飯を食べに散らばっていった。

そして俺は命に目で合図し明久に話し掛けた。

明「さて、今日は贅沢にシュガーウォーターでも食べるとするか」

いやいや、シュガーウォーターって、それよりも

貴「おい、明久」

明「ん？どうしたの貴浩？」

貴「お前そんなものなんか飲まずにちゃんと栄養つけろよな」

明「だってそうは言っても今月お金がなくて」

俺は一度ため息をついた

貴「もうちょっと趣味にかかる金減らせよ。そんなことより、今日は午後からBクラス戦なんだから
　栄養があるもの食べろよ」
明「そういうなら、何かおごってよ」
貴「奢りはしないが、別のものを用意しておいた」
明「なんかくれるの？」
明久は目を輝かせて、こっちに迫ってきた。
貴「俺がじゃない。命がだ」
明「え？命が？」
貴「あぁ、俺が昨日頼んでおいた。どうせこんなことになると思ってな」
命「はい、貴浩君に昨日頼まれて作ったんですけど・・・食べてくれますか？」
明「も、もちろんだよ！命ありがとね」
命「い、いえ。明久君あの、一緒に食べても良いですか？」
明「え、うん、もちろんだよ」
明久は物凄く上機嫌だった。命も明久に弁当を食べてもらえるみたいで嬉しそうだった。

貴「それじゃあ、俺はここで」
俺は明久と命と離れ、自分の席で飯を食べた.

雄「さて、皆集まったな。開戦前に最終確認だ。まず姫路に前線に出てもらい、

　渡り廊下を俺達の手中に入れ、敵を教室に押し込む。姫路しっかり頼むぞ」

姫「がッ頑張ります」

雄「野郎共、きっちり死んで来い！」

《キーンコーンカーンコーン》
そこで開戦のチャイムが鳴り響いた

雄「よし、行ってこい！！！目指すはシステムデスクだ」

F「「「「「うおぉおおおおおおお」」」」」
Fクラスの雄たけびのもと、Bクラスとの戦争が開始された

第2問目～Bクラス戦開戦～（後書き）

さて、Bクラス戦が始まりました

貴浩たちFクラスがどのようにBクラスと戦うか楽しみにしていてください

第2問目～Bクラス戦（1）～

今回は敵を教室内に押し込むのが目的なのでとにかく勢いが重要となる。
俺たちはほぼ全力でBクラスへと向かう廊下を駆け出した。

今回のこちらの主武器は数学。
Bクラスは比較的文系が多いのと、数学の長谷川先生は召喚フィールドが広いというのが理由だ。
一気に勝負をかけたい時にはありがたい先生なのだ。
他にも家庭科や物理などの先生も連れてきている。
現在、明久率いる1番隊と俺が率いる3番隊の2つの部隊が先行してBクラスに挑もうとしている。

F「いたぞ、Bクラスだ！」

F「高橋先生をつれているぞ！！」

貴（FクラスとBクラスじゃ総合点数に差があるから相手は一気にかたをつけるつもりか）

B「生かして帰すなッ！！」

物騒な台詞を皮切りにBクラス戦が始まった。

Bクラス相手にFクラスの仲間が戦いを挑んで行った。

Bクラス	野中長男	VS	Fクラス　横溝浩二
総合	1943点		762点

Bクラス　金田一祐子　　ＶＳ　　Ｆクラス　武藤啓太
数学　　１５９点　　６９点

Bクラス　里井真由子　　ＶＳ　　Ｆクラス　君島博
数学　　１４２点　　７２点

なっ！？なんて強さだ。仲間がごみのようにやられていっている。
これ以上の損害を出さない為、俺は部隊長としてまわりに指示を出す

明「貴裕、このままじゃやばいよ」

貴「わかっている。皆、絶対１人で戦うな。３～４人で挑むんだ」

俺が部隊に指示を出していると

姫「お、遅れ、まし、た・・・。ごめ、んな、さい・・・」

息を切らして姫路さんがやってきた。

Ｂ「来たぞ！姫路瑞樹だ！」

明「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど・・・」

姫「は、はい。行って、きます」

Ｂ「長谷川先生、Ｂクラス岩下律子です。Ｆクラス姫路瑞希さんに
数学で勝負を挑みます！」

姫「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

早速勝負を仕掛けられてるな。向こうとしては早く潰しておきたい相手なんだろうな

B「律子、私も手伝う」

その後ろから、さらにもう一人Bクラスの女子が召喚を始めた。

『試獣召喚（サモン）！』

すると、お互いの召喚獣が召喚された

明「あれ？姫路さんの召喚獣アクセサリーなんてしてるんだね？」

姫「あっはい数学は結構解けたので・・・」

B「そッそれって！？」

B「私たちで勝てるわけないじゃないっ！！」

姫「じゃいきますね」

姫路さんがそう言うと、姫路さんの召喚獣は左手を相手に向け熱線らしきものを照射し

相手を1人焼き殺し、熱線を運良くかわした相手は大きな剣で切り捨てた。

そこで俺は、秀吉率いる2番隊に指示を出した

秀「２番隊出るぞ。楓よ、よろしく頼むのじゃ」

楓「はい、秀吉君。２－Ｆ織村楓です。Ｂクラスに家庭科で勝負を挑みます」

Ｂ「Ｂクラス金田一祐子と里井真由子が勝負を受けます」

『試獣召喚（サモン）！』

さて、ここで何故家庭科の教師を連れてきたのか説明しよう。

家庭科は進学して行く上ではあまり成績に関係ないので皆あまり力を入れていない。

だけど、俺の妹は料理が得意という事もあり家庭科の成績も良い。

しかも家庭科は筆記試験（上限なし）と実技試験（１００点満点）の両方で

採点がつくので点数が高いのだ。

どの位かと言うと

Ｆクラス	織村楓	ＶＳ	金田一祐子・里井真由子
家庭科	５７８点		１４４点　１５３点

Ｂ「何あの点数！？」

Ｂ「私たちで勝てるわけないじゃないっ！！」

楓「では、いきます」

そういうと楓の召喚獣は2人の召喚獣に狙いを定め弓を放ち一撃で倒した。

そこで、Bクラスが慌てふためいた。

1分も経たないうちに4人も戦死してしまったのだから仕方がない。

楓・姫「「皆さん頑張ってくださいね」」

F「やってやるでぇーッ!!」

F「姫路さんサイコーッ!!」

F「楓様好きだー!!」

貴（誰だ今ドサクサにまみれて告白したやつ。後で八つ裂きにしてやる）

秀「楓、お疲れ様なのじゃ」

命「楓ちゃん。お疲れ様」

楓「はい、ありがとうございます」

明「姫路さん。ありがとう、とりあえず下がって」

姫「あっはい」

姫路さんを一度下げさせる理由は簡単、
いくら姫路さんが強いといっても何度も戦いつづければ傷を負い点数も下がってしまう。
それに、召喚獣の腕輪（特殊能力）はその威力の分消耗も激しいからだ
貴「楓と姫路さんが敵を倒して今流れはこちらにある。今のうちに3人1組で敵を倒すんだ」
F「「「「「「うおぉおおおおおお！！」」」」」」
今の勢いを持続させれば、このまま徐々にBクラス内に追い込めるだろうと考えていると
秀「貴裕と明久よ。ワシらは一旦教室に戻るぞ」
明「え？なんで？」
秀「それは、Bクラスの代表じゃが・・・『あの』根本らしい」
貴「根本って『あの』根本恭二（ねもときょうじ）か？」
秀「うむ。それにBクラスには根城敦（ねじろあつし）もおるらしいからの」

根本恭二と根城敦というのはとにかく評判が悪い。噂ではカンニングの常連だとか・・・。

目的のためなら手段を選ばないらしいが用心にこしたことはないな・・・。

貴「・・・根っこコンビか。なるほどな。戻ったほうがいいかもな」

根本と根城苗字の最初に根がつくので根っこコンビと呼んでいる

楓「兄さん教室にもどるの？」

貴「ん？ああ。ちょっとな」

楓「私もついて行っても良いですか？」

命「楓ちゃんが戻るなら私も」

秀「じゃあ、一緒に戻るとするかの」

明「そうだね」

俺たちは部隊を近藤と須川にまかせ一度教室へと引き返した

第2問目～Bクラス戦（1）～（後書き）

まず1人目の新キャラ登場です（名だけですが）

まだ新キャラが出てくるのでお楽しみにしていてください

楓「今回久しぶりに活躍しました。

次回も頑張れるよう皆さん応援お願いします」

第2問目～Bクラス戦（2）～

貴「・・・うわ、これは酷いな」

秀「まさかこうくるとはのう」

明「卑怯だね」

教室に引き返した俺たちを迎えたのは、
穴だらけになった卓袱台とヘシ折られたシャーペンや消しゴムだった。

明「酷いね。これじゃ補給もままならない」

秀「うむ。地味じゃが点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

俺たちは再び教室を見渡していると、楓と命がしゃがみ込んでいる
姿が目に見えた

貴「楓・命どうしたんd・・・」

俺が2人に話し掛けようとして言葉が途切れた。

秀「ん？2人ともどうしたのじゃt・・・」

秀吉も心配に2人に声をかけると途中で言葉に詰まった。

なぜなら2人が泣いていたのだ。

楓「に、兄さん。・・・私の鞄が・・・」

命「ひ、秀にい・・・」

見ると楓と命の鞄がズタズタに引き裂かれていたのだ。
よく見ると周りの何人かの鞄も引き裂かれていた。

明「ここまでやるのか」

雄「まさか、ここまでされるとはな」
すると雄二が教室に入ってきた

貴・秀「「楓（命）を泣かせるとはあいつら（あやつら）覚悟できているだろうな（の）」」

明「・・・雄二。どうして教室がこんなことになっていることに気づかなかったの」

雄「Ｂクラスから、４時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは

　明日の午前９時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止するっていう

　協定の申し込みがあってな。調印の為に教室を空にしてしまった」

明「それ、承諾したんだ」

雄「そうだ」

明「でも、体力勝負に持ち込んだほうがウチとしては有利じゃないの？」

雄「楓・命・姫路以外は、な。

あいつらを今日の戦闘は終了だろう。そうすると、作戦の本番は明日になる。

その時はクラス全体の戦闘力より、楓と姫路の戦闘力のほうが重要となる」

貴「明久。とりあえず俺たちは前線に戻るぞ。向こうでも何かされているかもしれないしな。

秀吉と雄二はは2人を頼む」

秀「了解した」

俺はそう言うと駆け足で戦場に戻って行った。

・・・Bクラスの奴らを八つ裂きにしてやる

少しすると明久も追いついてきた。

明「なんか、まだまだ色々やってそうだね」

貴「そうだな。この程度で終わるとは思えないしな。気を引き締めて行くぞ」

そういい戦場に戻ってみるとやはり問題が起きていた。

明「待たせたね！戦況は！？」

須「かなり不味い事になっている」

やはりこちらにも何かやっていたのか。根っこコンビめ。覚えていろよ。

ひとまず現状を聞いてみると島田さんが人質にされているらしい。

今度は人質か！どこまで卑怯なんだ！

貴「・・・ひとまず状況をみたい」

須「それなら前に行こう。そこで敵は道を塞いでいる」

俺たちは須川に着いていき、部隊の人垣を抜けると須川が言った通りの状況だった

明「島田さん！」

島「よ、吉井！」

B「そこで止まれ！それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにするぞ」

島田を捕らえている敵の1人が俺たちを牽制してくる。

あいつら、わかっていないな島田に止めを刺した瞬間、お前らもす

ぐに補習室に送ってやるよ。
それに早くBクラスのヤツをぶちのめしたい。
楓を泣かせたんだ、覚悟はできているんだろうしな。ふっふふ・・・

明「総員突撃用意ぃーっ！！」

F「隊長それでいいのか！？」

貴（お、明久も俺と同じ考えか？）

B「ま、待て、吉井！コイツがなんで捕まったと思っている？」

明「馬鹿だから」

島「殺すわよ」

貴（ち、違ったみたいだな）

貴「・・・おい、お前ら。俺たちの教室や筆記道具を壊しておいて、次には人質をとるのか。

覚悟はできているんだろうな？」

俺は殺気を込めて言った。

？？？「その話本当か？」

人質をとっているやつ等の後ろのほうから女性の声が聞こえた。
そうすると、２人の女性が姿を現した。

第2問目～Bクラス戦（2）～（後書き）

貴「楓を泣かせたやつは八つ裂きにして殺してやる」

明「・・・貴浩怖いよ」

（ガタガタブルブル）

第2問目～Bクラス戦（3）～（前書き）

ついにオリキャラ登場です

第2問目～Bクラス戦（3）～

？？？「その話本当か？」

人質をとっているやつ等の後ろのほうから女性の声が聞こえた。
そうすると、2人の女性が姿を現した。
1人は茶髪の女性、もう1人は薄い青色にショートヘアの女性なんだが何故か軍服を着ている。
え？何この人？どこかの軍の関係者か何か？
俺が疑問に思っていると

B「獅子川と五十嵐か。ちょうどいい。あいつらをやっつけてくれよ」

獅「ちょっと待て。僕は獅子川一子だ。そこの君、今言ってた話は本当かな？」

貴「あぁ本当のことだ。先ほど教室に戻ってみたら随分とやられていたよ。

それに現に今、俺達の仲間を人質にしているだろ」

獅「・・・嘘は言ってないみたいだね」

五「カズちゃん。どうするの？」

獅「僕に任せて。先生。２－Ｂ獅子川一子。物理で勝負を仕掛けます『試獣召喚（サモン）』」

獅子川さんと言う女性が召喚獣を召喚したので対抗しようと俺も召喚する

貴「２－Ｆ織村貴浩召喚します『試獣召喚（サモン）』」

お互い召喚獣を召喚した。

俺は相手の召喚獣の動きに注意して様子を見ていると
獅子川さんの召喚獣が思ってもみない行動に出た。

それはなんと、人質をとっている味方の召喚獣を攻撃したのだ。

Ｂ「な、何するんだ！？」

Ｂ「俺たちは味方だろう！？」

相手も獅子川さんの行動に驚いていた

獅「簡単な事だ！僕はな、戦う事が大好きなんだ。

でもな、卑怯な事をする奴は大嫌いでね。だから殺ったんだよ」

Ｂ「そ、そんなことで」

獅「邪魔だ。さっさと消えろ」

獅子川さんがそう言うと人質をとってた仲間に有無を言わさずとどめを刺す

するといずこからか

鉄「戦死者は補習！！」

鉄人が現れた

B「げぇ」

鉄「人質をとった挙句に戦死するとは情けない、この戦争が終わるまで特別講義だ！

何時間かかるかわからんがたっぷりと指導してやる」

B「たッ頼む！見逃してくれ！あんな拷問は耐えられない！」

鉄「あれは立派な教育だ。終わる頃には趣味が勉強で尊敬する人が二宮金次郎と

いった理想的な生徒に仕上げてやろう」

B「鬼だ！誰か助けッ、イヤァアア・・・」

2人は叫び声を残し、鉄人に連れて行かれた。

獅「悪いな。僕らのクラスの者が無礼な事をしてしまったな」

そう言うと島田さんを解放し、俺たちに謝ってくれた

獅「クソっ、根本と根城のやろう。ふざけた事をしやがって。
本当にすまないな。謝ってすむ問題じゃないだろうが、ただこれだけはわかってくれ。
Bクラスが根本みたいなクズしかいないと思わないでくれ」

五「私からも謝らせてもらいます。本当に申し訳ありませんでした」

そういうと獅子川さんと五十嵐さんが頭を下げて謝ってくれた
俺は明久達と顔を見合わせる

明「い、いえ。気にしないでほしい。
それより島田さんを助けてくれてありがとうございます」

島「先ほどはありがとうございました」

獅「元々こちらに非があるからな。すまなかった。
戦争終了後にあいつらにちゃんと謝らせに行かせる」

貴「了解です。で、どうします?このまま勝負を続けますか?」

獅「あぁ、それは続けさせていただく。先ほども言ったが
僕は戦う事が大好きでね。さぁ何人でもかかって来ると良いさ!!」

貴「了解です。後ろにいるあなたはどうしますか?」

獅「きらりは下がっていてくれ。僕1人で戦いたい」

五「わかったよ。カズちゃん」

お互いそう言うと少し距離を取り武器を構えた

明「なら皆。これは戦争なんだ複数で取り囲んで戦うんだ！」

貴「・・・明久悪い。1対1でやらせてくれ」

明「え!?」

明久は驚いたように俺を見る

貴「悪いな。先ほど島田を助けてもらった礼もあるし、それに俺も戦う事が好きだしな」

明「・・・わかったよ。任せる」

明久はそういうと皆を下がらせてくれた

貴「と言う訳だけど、良いかな獅子川さん?」

獅「いいぜ、じゃあやろうぜ!!」

貴「じゃあ、あらためて2－F　3番隊部隊長　織村貴浩」

獅「2－B　獅子川一子」

貴・獅『勝負を挑みます』

２－Ｂ　獅子川一子　　ＶＳ　　２－Ｆ　織村貴浩
物理　　１８７点　　２９３点

俺の召喚獣は黒い和風の甲冑を身にまとい、左腰に日本刀右腰に銃を装備している。
対する獅子川さんの召喚獣は着物にアイスホッケーのスティックの装備だった

獅「あんた、本当にＦクラス？」

貴「そうですよ。まぁ試験日に色々あってＦクラスに行ったんですけどね」

明「・・・貴浩って成績良かったんだ」

貴「お前と比べたらな」

獅「さてなら、楽しむとするかい！！」

貴「そうですね！なら行きますよ」

そう言うと俺は召喚獣に刀を抜かせて相手に向かって突っ込ませた。
相手も俺の召喚獣に向かって走らせた。そして、お互いの武器がぶつかり合った。
俺は武器がぶつかったと同時に、相手の召喚獣に向かって蹴りを入れて間合いを取る

獅「やるね。ぶつかり合ったと同時に蹴りを入れるなんてな」

そこで少し獅子川さんの点数が減った

獅「でも、まだまだ」

獅子川さんの召喚獣が再び俺に向かってきたので、紙一重で避け横っ腹に蹴りを入れる。

そこで、獅子川さんが武器を横振りしてきたので、今度はしゃがんで避ける

貴「そう簡単にはやられないよ」

獅「まだまだ!!」

もう一度獅子川さんの召喚獣が迫ってくる。

俺は相手の攻撃を紙一重で避け相手の召喚獣の首を切り落とし決着をつけた。

貴「俺の勝ちだね」

獅「強いな。まさかこうも一方的にやられるなんて思わなかったぜ」

貴「でも、楽しかったよ獅士川さん」

獅「一子でいい」

貴「え?」

獅「名前だ、お前は確か貴浩だったよな。これからは名前で呼ぶ。
　だから、お前も僕のことを名前で呼べ。いいな」

貴「え?ああ」

獅「よし、じゃあな貴浩。今度は絶対負けねぇからな」

貴「ああ、またやっても負けねぇから」

五「では、私も下がらせてもらいますが宜しいでしょうか」

貴「ああ、良いよ。皆、五十嵐さんには攻撃するなよ」

F「了解」

明「よし、貴浩が獅子川さんを倒したし、僕たちもこのまま続くよ。
　このまま、一気にBクラス教室前まで行くよ」

F『うぉおおおお!!』

そして、俺たちはBクラス前まで攻め入り今日の戦争は終わった

第2問目～Bクラス戦（3）～（後書き）

獅「初めましてだ。僕は獅子川一子だ。
好きなことは戦うこと。嫌いなことは卑怯なことだ
これからよろしくな」

五「五十嵐きらりといいます。これからよろしくお願いします」

今後も2人は出して生きたいと思います。

感想・意見がありましたら教えてください

第2問目～Bクラス戦（4）～

協定通りBクラスとの試召戦争は4時で一度やめ、
戦況をそのままにして明日の午前9時に持ち越しとなった。
一応予定通りBクラス前まで進撃できたので明日はそこからとなる。

今は明日の事で話し合っている所だった。

すると、ムッリーニがやってきて話に加わった。

今日の戦争ではムッリーニは戦線に出ず情報収集を任務としていた。

雄「Cクラスが試召戦争の用意を始めているだと?

相手はAクラスか・・・いやそれはないだろうから。

漁夫の利を狙うつもりか・・・いやらしい連中め」

つまり、この戦争の勝者と戦うつもりなのか。

疲弊している相手ならやりやすいだろうしな

明「雄二どううするの?」

雄「そうだな・・・。Cクラスと協定を結ぶか。

Dクラスを攻め込ませるぞと脅せば俺たちに攻め込む気もなくなるだろ」

明「それに、僕らが勝つなんて思ってもいないだろうしね」

雄「よし、それじゃ今から行って来るか。秀吉と姫路は念のためここに残ってくれ」

姫「はい、わかりました」

秀「なんじゃ？ワシは行かなくて良いのか？」

雄「お前の顔を見られると万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんでな」

秀「よくわからんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

素直に引き下がる秀吉。まぁ雄二の事だ何か策があるのだろうな。

明「じゃ行こうか。ちょっと人数が少なくて不安だけど」

秀吉と姫路を残して、俺、明久、雄二、楓、命、ムッリーニというメンバーでCクラスに向かう

島「あれ？吉井に坂本？どこか行くの？」

廊下に出ると島田と須川、近藤に会った

貴「島田さんと須川、近藤。ちょうど良い。Cクラスまで付き合ってくれないか」

まさかとは思うけど、念のためにボディガードは多いほうがいいだろう。
命と楓を守る人材も必要だからな。

島「んー、別にいいけど？」

須「ああ、俺も大丈夫だ」

近「俺もいいぜ」

【貴浩は盾もとい仲間をゲットした】

秀「急がんとCクラス代表が帰ってしまうぞい」

明「うん、そうだね。急がないと」

こうして更に島田さんと須川、近藤を加えた9人でCクラスへと向かう事になった

雄「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

教室の扉を開くなり、雄二がそこにいる全員に告げる。
Cクラスにはまだかなりの人数が残っていた。ムッリーニの情報通り漁夫の利を狙って
試召戦争の用意を始めているのだろう。

小「私だけど、何かようかしら？」

俺たちの前に出てきたのはCクラスの代表の小山さんだった

雄「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

小「クラス間交渉？ふぅん・・・・・・」

小山さんは雄二の言葉を聞いてなんだかいやらしい笑みを浮かべている

貴（何か嫌な予感がするな）

雄「ああ。不可侵条約を結びたい」

小「不可侵条約ねぇ・・・。どうしようかしらね、根本君？」

小山さんは振り返り、教室の奥にいる人たちに声をかけた

するとそこには、Bクラスの根本と根城がいた

根本「当然却下。だって必要ないだろ？

それに酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。

試召戦争に関する行為を一切禁止したよな？」

根城「先に協定を破ったのはソッチだからな？これはお互い様、だよな」

根城が告げると同時にその取り巻きが動き出す。

その後ろには先ほどまで戦場にいた長谷川先生の姿があった

B「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚を――」

須・近「「させるか！Fクラス須川（近藤）が受けて立つ！試獣召喚（サモン）！」」

Bクラスが雄二に攻撃を仕掛ける前に、間一髪で須川と近藤が身代わりとなる

ファインプレイを見せてくれた。

明「僕らは協定違反なんてしていない！これはCクラスとFクラスの――」

貴「無駄だ明久！あいつらは条文の『試召戦争に関する行為』を盾にしらを切るに決まっている。だから、ここは逃げるぞ」

戦闘を行っている須川と近藤に背を向け、俺たちはCクラスから離脱しようと駆け出す

根本「逃がすな！坂本を討ち取れ！」

背後から根っこコンビの指示と複数の足音が聞こえる

はっきり言ってマズイな。

明日の戦争があるから楓と命は今は使えないし、2人の体力では追いつかれてしまう。

楓・命「「はぁ、はぁ、ふぅ・・・」」

貴「2人とも大丈夫か?」

廊下を走っていると、やはり楓と命が遅れだした。

体の弱い2人にこの全力疾走は厳しそうだ。とか言う俺もキツい・・・

命「あ、あの、さ、先に・・・行って、ください・・・」

息も絶え絶えに命が言うと楓も同じ事を口にした。

このままだと追いつかれてしまう。でもここで置いて行くわけにはいかない。

明日の戦争のこともあるが、何より2人を置いて逃げる事なんてできないな。

貴(仕方ないか、もう少し力を隠しておきたかったけど・・・)

俺は明久と目線を合わせると明久も俺と同じ考えらしい。

貴・明「「雄二！」」

雄「なんだ2人共！」

明「ここは、僕と貴浩が引き受ける！雄二は命と楓を連れて逃げてくれ」

俺たちはその場に立ち止まり振り向いて雄二に向かって親指を立てた

命「あ、明久君、私の事は、気に、しないで」

雄「・・・わかった。ここは2人に任せる」

雄二が俺たちの要望に応じる。さすが雄二だな。感情に流されず、今必要な処置を正しく把握している。

ム「・・・・・・（ピタッ）」

明「いや、ムッリーニも逃げてほしい。明日はムッリーニが戦争の鍵を握るから」

一瞬立ち止まったムッリーニ。気持ちはありがたいが明日は重要な役割があるはずだ。
ここで失うわけにはいかない。

ム「・・・・・・（グッ）」
ムッリーニは俺たちに親指を立てて走り去って行った。

貴「・・・さて、どうする明久？」

明「うん。僕に考えがあるんだ。僕だって補習室に行きたくないしね」

貴「じゃあ、お前の策を信じてやるよ」

B『いたぞっ！Fクラスの吉井と織村だ』

B『ぶち殺せ！』

正面から追っ手がやってきた。長谷川先生も一緒だ。

明「Bクラス！そこで止まるんだ」

相手の気勢を削ぐように、明久は強い口調で呼び止める

B「いい度胸だ。たった2人で食い止めようってか？」

Bクラスからの追っ手は5人ほどいる。

さて、明久の策とやらを信じてみますかね

明「その前に長谷川先生に話がある」

貴（長谷川先生に？何か脅迫するネタでもあるのか？）

長「なんですか、吉井君？」

明「Bクラスが協定違反していることはご存知ですか？」

長「話を聞く限り、休戦協定を破ったのはFクラスのようですが」

貴（まあ、あの根っこコンビのことだからうまく言っているだろうしな。

さて明久の考えってヤツに期待するかな」

明「・・・・・・万策、尽きたか・・・・・・・」

貴・B『こいつ馬鹿だぁーっ！』

なんだよあんなの全然策じゃないだろうが、
コイツに期待した俺が馬鹿だった・・・Ｏｒｚ

～　Ｓｉｄｅ　命　～

命「坂本君、明久君と貴浩は大丈夫なんですか？」

雄「もちろんだ。他のヤツならともかく、あの2人ならなんとかなる」

命「でも・・・」

雄「貴浩はそこそこ勉強できるが、明久は確かに勉強はできない。

でもな、学力が低いからといって、全てが決まるわけじゃないだろう？」

命「そ、それは、どういうことですか？」

私が首を傾げると

雄「明久も伊達に《観察処分者》なんて呼ばれないって事だ」

第2問目～Bクラス戦（4）～（後書き）

原作なら明久と島田が残るシーンですが
貴浩と明久に変えてみました

感想・意見がありましたらぜひ教えてください

第2問目～Bクラス戦（5）～（前書き）

総合ＰＶが１００００アクセス超えました。

うれしい限りです

これからも『バカと俺たちの召喚獣』を続けていくので

よろしくお願いします

第2問目～Bクラス戦（5）～

B『試獣召喚（サモン）！』

Bクラスの追っ手が4人とも声を揃えて召喚獣を呼び出した

走って逃げてはいるがこの先は行き止まりだ。俺たちが戦闘に入るのは時間の問題だ。

貴「明久どうするんだ？」

明「ど、どうするたって、どうしよう？」

貴「お前に期待した俺が馬鹿だったよ・・・」

明「よし、こうしよう！まず貴浩が4人引きつける。そしてb」

貴「却下だ！！」

明「なんで？僕まだ途中までしか言ってないよ」

貴「どうせお前の事だ俺がアイツらを相手している時に逃げるつもりだろ」

明「（ギクッ）・・・・・そ、そんなことないよ」

っと、そんな馬鹿な話をしてたら行き止まりだ。

壁を背にして振り返るとBクラスの連中が走ってくるのが見えた

B「ちょろちょろ逃げ回りやがって。疲れるだろうが！」

B「というか別にこいつらを追いかける必要はなかったんじゃないか？」

B「仕方ないだろ？こいつらに付き合ってて坂本達に逃げられちまったんだから」

B「さっさと片付けて帰らない？」

俺たちが逃げ切れないことがとわかると、４人はやる気なさそうに好き勝手なことを言い始めた。

貴「・・・仕方がないか。もう少し秘密にしておきたがったが無理そうだな」

明「え？貴浩どうしたの？」

貴「明久、今からの戦闘での俺の点数を周りの奴等に秘密にしておいて欲しいんだが・・・」

明「え？う、うん。わかったよ」

貴「よし、なら明久！あいつらを迎え撃つぞ！！」

B「Ｆクラスごときが生意気な」

貴・明『試獣召喚（サモン）！』

Fクラス　吉井明久　＆　織村貴浩　ＶＳ　Ｂクラス　モブ×４
数学　５１点　５８７点　１３４点・１５９点・１６６点・１４３点

Ｂ『はぁ！？』

Ｂ「な、なんだよあの点数！？Ａクラスレベルじゃないか！？」

Ｂ「なんであんなのがＦクラスにいるんだよ！？」

明「貴浩って？頭良かったの？」

貴「お前と比べたらな。それに数学は得意だしな。

明久は１番点数の低い奴を殺ってくれ、できるだろ？」

俺は笑みを浮かべながら明久に尋ねると

明「ふっ余裕だね。貴浩もしくじるなよ」

貴「言ってろ。さて殺ろうかＢクラスの諸君、死にたいやつからかかってこいや！！」

そう言うと俺と明久は敵に向かって走っていった

Ｂ「ふ、ふざけるな。こっちは３人がかりだぞ。取り囲んで叩け」

貴「甘い！」

俺は右腰に掛けられている銃を抜き相手に向かって放った。
そこで、点数さもありまず1人倒した。

B「え?え?」

貴「次は誰だ?」

敵は一瞬で倒された事に驚いていた。
次は馬鹿正直に真正面から向かってくる敵の攻撃を横にとんで避け、
銃で頭を打ち抜いた。
これで、2人目。

B「一瞬で2人を倒しただと・・・」

もう1人は俺の背後から襲ってきたが余裕でかわし敵の背後に回り、
蹴りを入れ
相手がバランスを崩したところで後ろから背中に伸びのり銃を向け
ると

貴「バイバイ♪」

ゼロ距離で胸を打ち抜いた。
この戦闘にさすがのBクラスの奴らも呆然と立ち尽くしていた。

その頃明久は―

B「ちっ仲間が全員やられちまったか。仕方がないコイツだけでも」

相手の召喚獣が明久の召喚獣に向かってきた。

明「えい、足払いっ」

明久は召喚獣を走らせ、横から敵の足を引っ掛けた

明「更にっ！」

敵に木刀を叩き込み、完全に体勢を崩させる。

明「もういっちょう！！」

明久の召喚獣が勢い良く倒れこむ敵の召喚獣の後頭部を掴み地面に叩きつけた。

すると、ゴン、と硬い音が廊下に響いた。

B『・・・え？』

その場にいたBクラスの奴らの口から驚きの声が漏れる

Bクラス　モブ　　ＶＳ　　吉井明久

数学　　８７点　　５１点

先ほどの戦闘での点数が表示される。

B「なんでだよ！俺のほうが点数が高いはずだろ！？

なんであんな雑魚に一方的に点数が引かれてるんだよ！」

理由は簡単だ。俺と明久は特別処遇者と観察処分者だ。

だから他の人達と違って召喚獣の細かい動きが可能なんだ。

まあ俺より明久のほうが操作が上手いがな。

そこで明久の召喚獣はまだ倒れている敵の召喚獣を踏みつけ

明「とどめ」

喉に木刀を突き刺して敵の召喚獣を倒した。

貴「余裕だったな」

明「うん、そうだね」

貴「戦う前にも言ったがこの事は秘密にしとけよ。

もし他の奴に言ったりばれたりしたら・・・」

明「・・・したら?」

貴「お前のあの写真をばら撒く」

明「そ、それだけはやめて!」

貴「大丈夫だ。バレなかったらいいんだよ。・・・そうだなAクラス戦まで秘密にしとけばいいや」

明「わ、わかったよ。だから、あの写真は・・・」

貴「わかってる。じゃあ契約終了だな。さて教室に戻ろうぜ」

明「う、うん」

あの写真とは去年明久が色々あって女装させられた時の写真など明久にとって恥ずかしい写真を俺が隠し持っているので交渉の時用いている。

もちろん、明久だけじゃなく他の人や女子の写真もある。

ただし、ムッリーニとは違いローアングルとかからは撮ってはいない。

撮った写真は売りもしている。いい小遣い稼ぎになるからね。

もちろん、楓の写真は売っていない。だれが売るものか。

命の写真も売っていない。理由は優子と秀吉にばれた時が恐ろしいから。

ムッリーニの商会にも2人の写真は売られていない。

俺が売るのをやめさせた。

最初は抵抗していたけど少しＯＨＡＮＡＳＩしたら聞いてくれたよ。

ということでムッリーニ商会と同じようなものである。

まあ、ムッリーニと比べると良くはないけどな。

そして、盗撮や隠しカメラ・マイクなどは用いていない。

デジカメただ1つだけだ。

明久と教室に戻ると

明「ただいま！」

命「あ、明久君！無事だったんですね！」

戸を開けると命が明久に駆け寄ってきた。

明「うん。これくらい余裕だったよ」

命「そ、そうなんですか。無事でよかったです」

貴「・・・命さんや、俺もいるんだけど・・・」

命「え？あ、えっと、貴浩君も無事で良かったです」

貴「・・・俺はついでか」

わかっている事なんだけどなんか無性に悲しいのだが・・・

良いんだけどさ別に・・・・・・

雄「お。戻ったか。お疲れさん」

秀「無事じゃったようじゃな」

楓「兄さん。大丈夫だった？」

貴「ただいま。ああ大丈夫だよ」

すると楓と雄二と秀吉もやってきた。

楓が心配してくれただけで俺は嬉しいよ（泣）

雄「さて、お前ら」

明「ん？」

その場にいる全員を見渡して雄二が告げる

雄「こうなった以上、Ｃクラスも敵だ。同盟戦が無い以上連戦という形になるが、

　正直Ｂクラス戦の直後にＣクラス戦はきつい」

まあ向こうもそれが狙いだろうからな。俺たちが勝ったらまず間違いなく攻めて来るだろうな

そこで皆がどうするか悩んでいると

雄「心配するな。向こうがその気ならこっちにだって考えがある」

明「考え？」

雄「ああ。明日の朝に実行する。目には目をだ」

この日はそれで解散となり、楓と秀吉は部活へ向かった。

俺は命とともに帰ることにし、命が優子と帰るらしいのでAクラスへと向かった

第2問目～Bクラス戦（5）～（後書き）

明「ねぇ貴浩？なんで点数のこと隠すの？」

貴「簡単だ！そちらの方が面白そうだからだよ」

もうそろそろ根っこコンビが登場しますかね・・・多分

意見・感想があれば教えてください

第2問目～Bクラス戦（6）～（前書き）

すみません。オリキャラ説明（1）を少しばかし変えました。
またこちらの都合で付け加えたりすることがありますので
ご了承願います

第2問目～Bクラス戦（6）～

――――翌日

雄「今から昨日言っていた作戦を実行する！」

貴「作戦？」

明「でも開戦時間より４０分も前だよ？」

雄「Ｂクラスじゃないクラスの方だ」

明「あっなるほど。それで何するの？」

雄「秀吉にコレを来てもらう」

そう言いだすと雄二はそばにあった紙袋から女子の制服を取り出した・・・ところで雄二。それをどうやって手に入れたんだ？

秀「別にかまわんがそれでどうするんじゃ？」

雄「秀吉には『木下優子』としてＡクラスの使者を装ってもらう」

そういうことか、秀吉と優子は良く似ているからな。

命も同じ事がいえるが、ある部分だけ決定的に違うからなあ・・・

雄「というわけで秀吉用意してくれ」

雄二が秀吉に女子の制服を秀吉はその場で着替えを始める
着替えはとても早くなれているみたいだな。
秀吉は一瞬で着替えを終わらせた

貴「秀吉、着替えるの早いな」

ム「・・・・・着替えるなら言って欲しかった」

明「しっかり目に焼きつければ良かった」
ムッリーニやF男子（俺と雄二以外）は泣きながら床を叩いていた
写真を撮れなかったことがよほど悲しかったのであろう

島「秀吉はずるいわ」

姫「秀吉君は大胆すぎます」
なんか姫路さんと島田さんが言っていたが無視するとしよう

秀「早く着替えるのは役者の基本じゃからの」

楓「そうですね。私も秀吉君には劣るけどそこそこ着替えるのは早いよ」

貴「そうなんだ。

　でもさ、秀吉。普通この場で着替えるか？人数は少ないが女子もいるんだぞ」

秀「それはすまなかったのじゃ。次からは気をつけるとしよう。

じゃが部活の演劇の時、舞台裏で着替えたりするから人目はあまり気にしていないのじゃ。

演劇中の舞台裏は色々大変じゃからの」

貴「それでも今度からは気をつけろよ・・・・・・・・

ん?ちょっと待った。

今の話を聞く限りじゃ楓も秀吉と同じように舞台裏で着替えてるのか?」

楓「うん、そうだよ」

貴「ごめん雄二。俺、急用ができた。少し出てくるな。・・・・・・・

秀吉、

演劇部の男子メンバーの事教えてくれるかな。少しＯＨＡＮＡＳＩしてきたいからさ」

秀「貴浩よ。落ち着くのじゃ。その禍々しいオーラをしまうんじゃ」

貴?「ダイジョウブダヨヒデヨシ。

カエデノキガエヲミタヤツラノコトニツイテオシエテクレレバイイカラサ」

秀「本当に落ち着くのじゃ!」

楓「兄さん落ち着いてよ。男子には見られないようには対策ちゃん

ととっているから」

貴？「ホントウカ？」

秀「本当じゃ。女子にはちゃんと着替える場所を確保しておるから落ち着くのじゃ」

貴「そ、そうか。それなら安心した」

秀「こっちこそ安心したのじゃ」

ふぅ安心したよ。
もし楓の着替えを見たヤツがいるならころｓ・・・ＯＨＡＮＡＳＩしないといけないからな。

雄「おい、そこ漫才してないでさっさと行くぞ。時間がなくなる」

明「僕も行くよ」

楓「私も一緒に行きたいです。秀吉君の演技は勉強になりますから」

雄「じゃあ来たい奴は行くぞ」
そして、雄二達はＣクラスへと向かった

今、教室に残っているのは明久・雄二・秀吉・ムッリーニ・楓・命・姫路さん・島田さん以外である。

俺は向かってはいない。

理由は今からわかる。

俺は雄二達が教室を出て行ったのを確認すると教卓の前に立った

貴「さて、楓たちは行ったな。開戦前にFクラスの皆に聞く」

須「ん？なんだ？」

貴「皆はあの『根本』のことを知っているだろうか？」

須「あの、クソ野郎のことだろ」

貴「ああそうだ。あのクソ野郎はなんとCクラス代表の小山さんと付き合っているそうだ」

F「「「「「何ぃいいいい！？」」」」」

貴「あのクソ野朗がCクラスの代表と付き合っている事は許される事だろうか？」

F「「「「「「断じて許してはいけない！！」」」」」」

貴「それと昨日、教室がBクラスの奴等に荒らされたのは知っているな」

F「ああ、それがどうしたんだ」

貴「1つ聞くがKMF団は、楓と命を泣かせた奴らはどうなるんだ？」

近「簡単だ。我々KMF団によって断罪されるに決まっているじゃないか」

須「それがどうしたん・・・・・・ま、まさか・・・」

貴「そのまさかだ。須川会長。

昨日の件で楓と命の筆記道具はともかく鞄までボロボロにされたのだ。

鞄についてだがムッリーニが一応直しておいてはくれたが、

その件で2人は涙を流したのだよ。それは許される事か！」

F「許すべからず」

F「断罪するべし」

貴「そうだ。許してはおけない。

その諸悪の根源はBクラスの根本と根城の2名だ」

F「なんだと。あいつらが」

F「許してはおけねぇな」

貴「そうだ。くしくも今日はBクラスとの戦争だ。

その戦争中にもし『事故』がおきても問題ないよな」

F「戦争中なので問題ありません」

F「戦争中に『事故』は付き物です」

貴「そして多分、雄二の事だ。今回も設備は交換しないだろう。

それは俺たちの目標がAクラスだからだ。Bクラスの設備は今は必要じゃない。

ただ、それだけでは皆の気は収まらないだろう。

そこで俺は戦争終了後にあのゲス野郎2人には

OHANASIが必要だと思うのだが皆の意見はどうだろうか？」

F「「「「「意義なし！！！」」」」」

貴「また、その報酬として楓に頼んで皆にクッキーを作ってくれるよう頼もうじゃないか。

だからFクラスの皆、俺に力を貸してくれないか？」

F「「「「「イエスマイロード」」」」」

貴「ありがとう。皆の協力に感謝する」

そこで俺はFクラスの皆と友情を深めた
さすがFクラスこういう時は頼りになる

しばらくして雄二達が戻ってきた。

第2問目～Bクラス戦（6）～（後書き）

貴「さて、これから楓たちを泣かせた根っこコンビを懲らしめてやらないとな

フフフフ・・・・・・・」

貴浩が少しずつ壊れてきました

多分これからも壊れていくんでしょうね

貴「コワレテナンカイナイヨ」

次回の更新も頑張りたいと思います。

感想や意見などどしどし送ってくださいね

第2問目～Bクラス戦（教室前攻防戦）～（前書き）

Bクラス教室前の攻防戦が少し話が長くなったので
2話ぐらいに分けて載せたいと思います。

第2問目～Bクラス戦（教室前攻防戦）～

そして午前9時よりBクラス戦が開始された

俺たちは昨日中断されたBクラス前という位置から進軍を開始した。

秀「ドアと壁をうまく使うんじゃ！戦線を拡大させるでないぞ」

秀吉の指示が飛ぶ

雄二曰く『敵を教室内に閉じ込めろ』とのこと。

そういうわけで指示どおり今は敵を閉じ込めている

貴「皆、絶対1人で戦うな！周りと協力して敵を叩くんだ」

秀「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！補給も念入りに行うんじゃ！」

貴「無理をしすぎるなよ。危ないと感じたら下がるんだ」

秀「そうじゃ。いざとなったら命に回復してもらうのじゃ」

命の腕輪の能力は点数の回復ができるのだ。

なので、Bクラスから少し離れたところに護衛を数名つけて待機し

てもらっている。

最初は教室左側を秀吉率いる2番隊が、右側を明久率いる1番隊、
その後ろに俺が率いる3番隊と4番隊。

本来ならば4番隊は須川が隊長なのだが昨日のBクラスの不意打ち
を受け、殿(しんがり)を
引き受けてくれ、戦死してしまい今日の戦争には参加できないので
姫路さんが率いる事になっているのだが、
先ほどから様子がおかしいので今は秀吉に隊を頼み、
姫路さんの所に明久を向かわせ様子を見てもらっている
なので現在は秀吉が2・4番隊を俺が1・3番隊を指揮し敵を教室
に押し込めている。

しばらくして

F「左側出入り口押し戻されています！」

F「古典の戦力が足りない！援軍を頼む」

そう聞こえ左側を見てみると少しずつ押し戻されている。
Ｂクラスは文系が多いので強力な個人戦力で流れを変えないと一気に突破されてしまう

明「姫路さん、左側に援護を！」

姫「あ、そ、そのっ・・・！」
先ほどから姫路さんの様子がおかしく動いてくれない

秀「楓よ、援護を頼めるか」

楓「はい、わかりました。

織村楓、古典で勝負を仕掛けます『試獣召喚（サモン）！』」

２－Ｆ　織村楓　ＶＳ　Ｂクラス　モブ×３
古典　４３０点　平均１９０点

楓「一気に狙い撃ちます『五月雨（さみだれ）』」
そう言うと楓の召喚獣が敵の召喚獣に向かって無数の矢を放った。

２－Ｆ　織村楓　ＶＳ　Ｂクラス　モブ×３
古典　４００点　０点

秀「楓よすまぬがもう少し頼めるかの」

楓「はい！もう一度狙い撃ちます『五月雨（さみだれ）』」
再び矢が敵に刺さり倒れて行く。

だがそう何度も撃てるものではない。

秀「すまぬのじゃ。楓は一度下がるのじゃ」

秀吉は一度楓を下がらせる

楓のあの技は点数を消費するのであまり乱用できないからだ。

貴「明久！左の援護頼む」

明「了解」

明久は返事すると共に古典の竹中先生に近づいていき耳元で

明「・・・・・・ヅラ、ずれてますよ（ボソッ）」

竹「ッ！？」

頭を押さえて周囲を見渡す竹中先生。

いざと言う時の為の脅迫ネタの１つだ。まさかここで使う事になるとはな

竹「少々席をはずします！」

狙いどおり竹中先生がその場を離れ古典のフィールドが解除される

秀「森田先生、物理のフィールドお願いするのじゃ」

そこで古典から物理へとフィールドが変わった

秀「ここで２番隊から４番隊へと交代するのじゃ。

そして2番隊で古典の消耗が激しいものは回復してくるんじゃ」

ひとまず左翼は大丈夫そうだな。
と俺が安心しているとと

F「隊長！」

貴「なんだ？どうした？」

F「右側の出入り口が数学から現国に変更されました！」

貴「数学教師の木内先生はどうした？」

F「Bクラス内に拉致された模様です」
やばいな。理系から文系の科目に切り替えられたか

貴「1番隊と島田さんは交代、3番隊前に出るぞ」
先ほどまで1番隊と島田さんの数学でこちらが若干押していたが、
現国に変わった事で島田さんの点数が大幅に下がってしまった。

F『了解』

貴「出撃する前にあえて言わせてもらう3番隊の皆、死ぬなよ」

F『はっ！！』

貴「3番隊突撃！！」

F『了解』

・・・でもこのままじゃやばいな。自力の差で破られるな。
秀吉の方もきついだろうしな

貴「姫路さんこちらの援護頼めるか？」

姫「は、はい。行きま・・・あっ・・・・」

姫路さんが返事の途中でうつむいてしまった。

先ほどからずっとこの調子だ。何かがおかしいな。

そう思いＢクラスの教室内を覗いてみると、

窓際に腕を組んでこちらを見下ろす卑怯者である根本と根城の姿があった。

そこでようやく気が付いた。

おそらく姫路さんはあいつらに何か弱みを握られているんだろう。

だがどうする。今の状況ではこちらは何もできない。

すると明久から声をかけられた

明「貴浩、秀吉！ちょっとここを任せるよ！」

貴「え？」

秀「どうしたんじゃ明久？」

明「ちょっとね。姫路さん調子が悪いんだったら命の所まで下がって良いよ」

姫「・・・・・・はい」

おそらく明久も気づいたのだろう。なら明久に任せるとするか

貴「わかった。こっちは任せろ」

明「じゃあ頼むよ」

明久はそう言うとFクラスの教室へ向かって行った。

秀「どうしたというのじゃ」

貴「何か策があるんだろうよ。秀吉、今は戦場に集中しよう」

今の明久の顔は久しぶりだな。頼れる時の顔だ。

こういう時の明久は頼れる。

さて、明久が戻ってくるまで粘りますか

秀「ここが踏ん張りどころじゃ。皆頑張るんじゃ」

秀吉が皆に指示する

俺も明久に答えるため隊を指揮する。

だが時間が経つにつれ状況は悪くなってきた

F「隊長こちらの右翼が突破されそうです」

貴「何だと？クソッ。

後ろにいる1番隊から数名援護に出す。それまで持ちこたえろ。

ＫＭＦ団の意地をみせてやるんだ」

F「「「「「うぉおおお！！」」」」」

横「隊長！」

貴「どうした横溝？」

横「開戦前の約束は大丈夫でしょうか？」

貴「約束？ああ、クッキーの事か？」

俺はそこでこの戦に勝利したら楓のクッキーをあげると約束した

横「そうです」

貴「ああ、約束は守る」

横「わかりました。その言葉を信じます」

貴「それが、どうしたんだ？」

俺が聞き返すと横溝は答えた

横「我々ＫＭＦ団５名はこれより敵右翼に向け突攻をしかけます」

貴「な！？そんなことしたらお前らは地獄（ほしゅうしつ）に行ってしまうじゃないか！」

横「それは覚悟の上です。

　我らの聖母様を悲しませたＢクラスのクズ野郎を隊長たちがやってくれるなら

　ここで地獄（ほしゅうしつ）に行こうが、本望です！！」

Ｆ『私達も同じ意見です』

貴「お前ら・・・」

横「約束もありますしね。

　これより我々５名は敵右翼に突攻をしかける。俺に続けぇ！！」

Ｆ「「「「うぉおおおお！！」」」」

Ｂ「なんだ、こいつら補習が怖くないのか」

Ｂ「まさか相打ち覚悟なのかよ」

Ｆ『我らが聖母様のためにぃいいい！！』

・・・・・・

F「隊長報告します。先ほどの横溝たち5名の突攻により敵のダメージは大きい模様です」

貴「わかった。・・・あえて言っただろうに死ぬなと。

・・・・・横溝達の死を無駄にするな！この気を逃すな！！

1番隊・3番隊全員突撃だぁ！！」

F「「「「「「うぉおおおおおおおお！！！」」」」」」

貴「俺も出る。『試獣召喚（サモン）！』」

２－Ｆ　織村貴浩　ＶＳ　Ｂクラス　モブ男

現国　１６６点　１７８点

俺は点数では負けてはいるが、操作なら負けていないので少しずつ点数を減らして敵を倒した。

第2問目～Bクラス戦（教室前攻防戦）～（後書き）

ひとまず、Bクラス前攻防編でした

楓「今回は結構活躍する事ができました」

秀「そうじゃな。楓のおかげでこちらの左翼は助かったのじゃ」

貴「それに横溝たち5名のおかげでこちら右翼も何とかなったよ」

次回はついに根っこコンビとの決着をつけると思います。

ぜひお楽しみに。

また、感想をお待ちしています

第2問目～Bクラス戦（決着！根っこコンビの事故と不幸は蜜の味）～

しばらく教室前で攻防戦を続けていると明久が戻ってきた。
そこには大将の雄二も一緒のようだ

明「ごめん。待たせたね」

楓「明久君が来たよ」

秀「遅いのじゃ」

貴「待ちわびたぞ明久。でどうするんだ」

明「それは・・・・・・（ゴニョゴニョ）・・・・・・・・と言う訳なんだ」
俺達は明久の策を聞く

貴「わかった。なら俺も協力するとしよう」

秀「そうじゃな。ならばここはワシらに任せるのじゃ」

貴「楓も来てもらえるか？」

楓「はい」

雄二「命、一度明久たちのたちの回復を頼む」

命「はい、わかりました」

俺たちは一度軍を雄二に預け、命がいる所まで下がり点数を回復してもらった
その前に俺は根っこコンビの立ち位置を確認してから命のところへ向かった

そして、俺・明久・島田さん・楓・あとFクラスメンバー×3名はBクラスの隣にあるDクラスに集まった。

そして

明「貴浩、僕と勝負して欲しい」

貴「ああ、いいぜ」

明「レイブン先生お願いします」

レ「2人とも本気なのかい？」

明「もちろんです」

貴「この馬鹿とは一度決着をつけないといけないんです」

レ「それなら、Dクラスでやらなくてもいいじゃない？」

島「仕方ないんです。この2人の召喚獣は特別だから。
Fクラスだと教室が壊れちゃうんで」

レ「でもなぁー」

楓「お願いします。先生」

レ「しょうがない。可愛い女子高生の頼みじゃ断れないねぇ。承認するよ」

貴・明『試獣召喚(サモン)！』

明「行けッ！」

そう言うと明久の召喚獣は壁を背にした俺の召喚獣に向かって走り出した。
俺はその攻撃を避けると、その攻撃が壁にあたった。

明「ぐーぅッ！！」

貴「今度はこっち番だ」
そして、俺は壁を背にしている明久の召喚獣を殴ろうと攻撃すると、避けられ壁を殴りつけた。

貴「つぅ・・・ッ！」

貴・明「「まだまだぁ！！」」
お互いそう言うと先ほどと同じ行動を繰り返した

――作戦開始まであと少し

根本「お前らいい加減あきらめろよな。
　　教室の出入り口に群がりやがって暑苦しい事この上ないって
の」

雄「どうした？軟弱なＢクラス代表はそろそろギブアップか？」

根城「はぁ？ギブアップするのはそっちだろ？」

雄「無用な心配だな」

ドンドン

根本「そうか？頼みの綱の姫路も調子が悪そうだぜ？」

雄「お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ」

根城「けっ！口だけは達者だな負け組み代表様よぉ」

雄「負け組？それがＦクラスのことならもうすぐお前が負け組代表
だな」

ドンドン

根本「・・・さっきからドンドンとうるせぇな」

根城「それにこの暑さはなんだ。エアコンきいてんのか？おいッ窓

全部開けとけよ！」

雄「・・・・・態勢を立て直す！一旦下がるぞ！」

根城「なんだよ！散々ふかしておきながら逃げるのか！」

根本「全員で一気に畳み掛けろ！！誰一人生きて帰すな！！」

雄「頼むぞ2人共！！」

秀「根っこコンビの立ち位置は変わっておらぬのじゃ」

雄二と秀吉の声が聞こえる

貴「明久そろそろだ」

明「うん、わかっている」

レ「お前さんらは何をしようとしてるんだね？」
レイブン先生が俺たちの行動に疑問に思い尋ねてきた

雄「後は任せたぞお前等！！」

貴「明久、時間だ！」

明「だぁあ――っしゃぁ――ッ！！！」

貴「くたばれや！！根っこコンビ！！」

お互い気合を入れ同時に壁を殴りつけた

ドゴッ！

物凄い音と共にBクラスとDクラスとの間の壁をぶち破った。

根本「ンなッ！？」

根城「ぐはっ」

F「くたばれ根本恭二」

根本「壁をぶっ壊すとかどういう神経してんだ！？」

俺たちは壊した壁を通りBクラスへと入っていった。

その壊れた破片が根城に直撃しているのを確認すると

島「レイブン先生！Fクラス島田が――」

B「Bクラス近衛部隊が受けますッ！！」

根城「・・・痛ぇな」

ちっ意識が残っていたか。運のいいやつめ

根本「はッはッはッ！残念だったな。驚かせやがって！！」

明「くっ僕たちは周りの近衛部隊をやるよ」

貴・楓「Ｆクラス織村貴浩（楓）が
根城（君）に勝負を挑む（挑みます）『試獣召喚（サモン）！』」

Ｆクラス　織村貴浩　＆　楓　　ＶＳ　　Ｂクラス　根城敦
世界史　１１２点　　３９７点　　１７３点

根城「な！？」

貴「楓は後ろから俺と皆の援護をお願い。あのゲス野郎は俺が殺るから」

根城「お前ごときにやられるかよ」

敵の召喚獣が俺の召喚獣目掛けて突っ込んできた。
俺は武器を抜き対抗する

根城「お前等ごときが俺に勝てるかよ」
根城の召喚獣が武器を振るう

貴「そんなのやってみないとわからないぜ」

俺はその攻撃を後ろに飛んでかわし、右手に持った武器を左手に持ち替え
空いた右手で銃を取り出し敵の召喚獣に向かって発砲した

貴「狙い撃つ」

すると敵の召喚獣の足にあたり体勢をくずした。

貴「お前らはやってはいけないことをやったんだ。
さぁお前の罪を数えるんだ！」

体勢を崩した敵の召喚獣に体当たりを食らわし、左手の刀で首をはねとどめを刺した

根城「馬鹿な。この俺がＦクラスの雑魚にやられただと・・・」

そして俺は召喚獣を操り落ちている壁の破片を根城に向かって蹴飛ばした

根城「グハっ」
根城に破片がぶち当たり倒れた。

根本「・・・根城がやられたか。だがまだ近衛部隊がいるんだ。
残念だったな。お前らの奇襲は失敗だッ！！」

根本までの距離は約２０ｍ・・・。

俺たちの周りには近衛部隊。全員に取り囲まれた以上今、根本に近

づく事はできない

・・・・だが目的は達した。

ここで少し教科の特性について説明しよう

各教科の先生によってテストの結果に特徴が現れるんだが・・・

例えば、数学の木内先生や物理の森田先生、日本史のルーティ先生は採点が早い。

世界史の田中先生や生物のスタン先生は点数のつけ方が甘く、

数学の長谷川先生や英語のジュディス先生は召喚範囲が広い。

また、英語の遠藤先生や世界史の烏丸先生（通称レイブン先生）は多少の事は寛容で見逃してくれる。

じゃあ保健体育の先生は、採点が早いわけでも甘いわけでもなく召喚可能範囲が広いというわけでもない。

保健体育の特性、それは教科担当が体育教師であるが為の『並外れた行動力』である

すると、屋上よりロープを使って2人の人影が飛び込み、根本の前に降り立った。

スタッ

ム「・・・・・Ｆクラス、土屋康太」
現れたのは同じＦクラスのムッリーニと保健体育の鈴村先生だ

根本「き、キサマは・・・・・・！」

ム「・・・・・・Ｂクラス根本恭二に保健体育で勝負を申し込む」

根本「ムッリィニィーーッ！」

ム「――試獣召喚（サモン）」

Ｆクラス　土屋康太　　ＶＳ　　Ｂクラス　根本恭二
保健体育　４４１点　　２０３点

ムッリーニの召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てる。

今ここに、Ｂクラス戦は終結した。

第2問目～Bクラス戦（決着！根っこコンビの事故と不幸は蜜の味）～（後書き

Bクラス戦決着がつきました。

貴「さて、次回はＯＨＡＮＡＳＩの時間だな。楽しみだなぁ」

貴浩怖いよ。そしてあまりやりすぎるなよ・・・

次回の更新もお楽しみに

第2問目～Bクラス戦（決着！根っこコンビの事故と不幸は蜜の味？）～

秀「明久に貴浩よ。随分と思い切った行動じゃったのう」

明「うぅ・・・痛いよう痛いよう・・・」

貴「明久よりはフィードバックは少ないが・・・痛いなこれは」

命「明久君じっとしていて下さい。治療ができませんよ」

秀「なんとも・・・お主らしい作戦じゃったな」

明「でしょ？もっと褒めて！」

明久それ多分褒められてないぞ

秀「後先考えず自分を追い詰める男気あふれる素晴らしい作戦じゃな」

明「・・・遠まわしに馬鹿って言ってない？」

雄「ま、それが明久の強みだからな」

命「で、でもかっこよかったですよ明久君」

明「褒めてくれるのは命だけだよ（泣）」

雄「さて、それじゃ嬉し恥ずかしの戦後対談といくか。な、負け組

代表？」

そして雄二は根本の前に立って言った。
俺もこのクズ野郎には恨みがあるので近づいた

雄「本来なら設備を明け渡してもらいお前らに素敵な卓袱台をプレゼントするところだが
　特別に免除してやらんでもない」

雄二がそう言いだすとBクラスのメンバーはざわつき始めた。
Fクラスには俺があらかじめ伝えてあるので動揺は無い。

根本「・・・条件はなんだ」

雄「条件？それはお前さんとそこにいる根城次第だ」

根っこ「「お、俺たちだと？」」

雄「ああ、お前らには散々好き勝手やってもらったし正直去年から目障りだったんだよな。
　そこでお前らBクラスに特別チャンスだ。
Aクラスに試召戦争の準備ができていると宣言して来い。
そうすれば今回は設備は見逃してやる。
ただし宣戦布告ではなく戦争の意志と準備があるだけ伝えるんだ」

根本「・・・それだけでいいのか」

雄「あ――」
貴「それと」

雄二が何か言う前に俺が遮った

貴「今回の戦争で随分やってくれたからな。その分も入れて・・・
そうだなぁ・・・
　根本と根城がコスプレして今さっき雄二が言った通りにしてくれたら良いよ」

雄「お、おい」

貴「雄二。・・・イイヨネ？」

雄「ああ・・・もちろんだ」

根っこ「「ばっ馬鹿なことを言うな！！この俺がそんなふざけた事を・・・ッ！」」

B「「「「「Bクラス全員で必ず実行しよう！」」」」」

B「任せて必ずやらせるから！」

B「それだけで教室を守れるならやらないては無いな！！」

どんだけこの2人は人望が無いんだ。まあいいけど

雄「んじゃ。決定だな」

獅「待て！」
そこで1人の女性から声が上がった
その人は昨日、俺と戦った獅子川一子だった。

雄「どうした?まだ不満があるのか?」

獅「不満はない。ただそれで良いのか?こちらは昨日随分と卑劣な手段を使ったらしいからね」

雄「そうだな。だ、そうだが貴浩どうする?」

貴「そうだな。それだけじゃやっぱり生緩いよな。
ならAクラスへ行った後に写真撮影会をしてから
その後少しFクラス男性陣とOHANASIするということで良いかな」

獅「わかった」

根城「まっ待て。勝手に決めるな」

獅「だまれ!このゲス野郎」
そう言って獅子川さんが根城の鳩尾に拳を叩き込むと、根城が沈黙した

貴「んじゃ、Bクラス代表も」

根本「くっやめろ!よっ寄るな!!」

獅「黙ってろ」
そう言いまた鳩尾に拳をぶち込み沈黙させた

貴「ありがとう獅子川さん」

獅「おい、貴浩。昨日僕の事名前で呼べと言ったよな」

貴「あっ、そうだったな一子」

獅「そうだ。僕はお前を次こそは倒すんだからな」

貴「その時はお手柔らかに。さて、着替えさせるか。明久、根本の方を頼む」

そう言うと俺は朝秀吉が着ていた女子の制服を明久に渡した。

明「了解ッ」

貴「さて、根城の方はどうするかな。着替えは雄二が持ってきた制服1つしかないからな」

獅「ならきらりの衣装を借りるか？」

貴「え？持ってるの」

獅「ああ。きらりはコスプレが趣味だからな」

五「コスプレじゃないよ。将来のために着ているんだよ」

すると昨日、一子と一緒にいた五十嵐さんだったっけ？がこちらに向かってきた

獅「まあそんなのどっちでもいいだろ。で貴浩に何か衣装貸してやれ」

五「うー、わかったよ。えっと織村君だったかな？」

貴「ああ」

五「どんな衣装がいいのかな？」

貴「・・・ちなみにどんな衣装があるんだ？」

五「今日はナース服に軍服や婦警服、学生服あとチャイナ服を持ってきています」

貴「今日はって・・・」

五「毎日中身を変えているんです」

F「まさか彼女があのコスプレ姫なのか」
そこで周りがざわつき始めた。主にFクラス男子だが

貴「今はひとまず学生服でいいや」

五「わかりました。ついでにですが私が着替えさせておきますね。
カズちゃん手伝ってもらってもよろしいですか」

獅「了解だ」

貴「じゃあ折角だし可愛くしてあげて」

五「それは土台が腐りすぎてますから無理でしょうね」

貴「やっぱり。じゃあよろしく頼むよ。その後撮影会だからね」

獅「わかった。気絶させてでもやらせる」

その後、根本と根城の2人は女装させられた状態でAクラスに行き、俺とムッリーニによる撮影会を行い、その後KMF団とOHANASIをした。
おそらく2人は一生忘れられない素敵な思い出を背負う事になるだろう。

俺は撮影会が終わった後、根っこコンビをKMF団に任せた。
その後、明久と共に職員室で先生方の親身な指導を受けたのは言うまでも無いだろう。

そして、最近の日課になりつつある明久と共に楓に勉強を教わり今日と言う1日が終わった。

Bクラス戦終了です

貴「ふぅーすっきりしたな」

随分と爽やかな顔つきだな。

貴「そりゃあね」

深くまでは聞かない事にしとくよ

貴「次回はいよいよAクラス戦だね」

そうだな。

では次回の更新も楽しみにしていてください

第3問目～Aクラス戦前～（前書き）

皆さんがバカと俺たちの召喚獣を読んでくれたおかげで
ＰＶが２００００アクセス、ユニークアクセスが３０００人を越えました

これからもバカと俺たちの召喚獣をよろしくお願いします。

皆さんの感想もお待ちしています

また最近活動報告をするようにしたので気が向いたら

見に来てください

第3問目～Aクラス戦前～

Bクラスとの戦争から3日後の朝――
いよいよAクラス戦を残すのみとなった俺たちは、
もうじきお別れになる予定のFクラスで最後の作戦の説明を受けていた。

雄「まず皆に礼を言いたい。不可能だと言われていたのにも拘らずここまで来れたのは
　他でもない皆の協力があってのことだ感謝している」

明「ゆっ雄二どうしたの？らしくないよ？」

明久の言う通りだ。気味が悪い。明日は嵐か？

雄「ああ自分でもそう思う。だがこれは偽らざる俺の気持ちだ」

やっぱり気味が悪いな

雄「ここまで来た以上絶対Aクラスにも勝ちたい・・・
　勝って生き残るには勉強が全てじゃない現実を教師どもに突きつけるんだ！！」

F『おおーーッ！！』

F「そうだぁーーッ！！」

F「勉強だけじゃねぇんだーーッ！！」

最後に勝負に皆の気持ちが1つになっている。そんな気がした。

雄「皆ありがとう。
そして残るAクラスだがこれは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

F「どういうことだ?」

F「誰と誰が一騎討ちするんだ?」

F「それで本当に勝てんのか?」

雄二が教卓を叩いて黙らせる

雄「落ち着いてくれ。それを今から説明する。一騎討ちをやるのは俺と翔子だ」

明「馬鹿の雄二が学年主席の霧島さんに勝てるわけがな――」

シュッ

明久の顔のすぐ横をカッターが通り過ぎ畳に刺さっていた

雄「次は耳だ」

明久を狙ってやったみたいだな

雄「まあ明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目は無いかもしれない。

だがそれはDクラス戦も同じだったろ？まともにやりあえば俺たちに勝ち目はなかった」

確かにそうだな。最初は勝てないと思っていた戦争を勝利に導いてきた雄二の言葉だ。
それを否定する人間はこのクラスにはいない

雄「俺を信じてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

F『おおおぉーーーっ！！』

今Fクラス全員が雄二を信じている

雄「具体的なやり方だが、一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

秀「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

雄「日本史だ、ただし内容を限定する。
レベルは小学生程度方式の百点満点の上限あり。
召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負となる」

小学生程度の満点ありだって？
それだと満点前提の勝負だから集中力が先に切れた方が負けになるな

明「でも同点だったら延長戦だよ？
そうなるとブランクのある雄二には厳しくない？」

雄「おいおいあまり俺を舐めるなよ。

いくらなんでもそこまで運に頼り切ったやり方を作戦と言うものか」

貴「どういうことだ？」

雄「アイツなら集中なんかしなくてもこの程度のレベルのテストなら何の問題も無いだろう。
俺がこのやり方をとった理由は１つ。
『ある問題』がでればアイツは確実に間違えるからだ」

なんだ？ある問題って？

雄「その問題は『大化の改心』だ」

貴「小学生レベルとなると何年に起きたとかか？」

雄「そうだ。その年号を問う問題が出たら俺たちの勝ちだ。
大化の改心が起きたのは６４５年。
こんな簡単な問題だって明久ですら間違えない」

明「そうだよ。雄二そんな問題なら僕だって間違えないよ」

雄「だが翔子は間違えるこれは確実だ。
そうすれば俺達は勝って晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

姫「あの坂本君」

雄「ん？なんだ姫路」

姫「霧島さんとはその・・・仲が良いんですか？」

そういえばさっきから名前で呼んでたりしたな

雄「ああアイツとは幼馴染だ」

明「総員狙えぇっ！！」

雄「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？
それに貴浩までどうした！？」

明「黙れ男の敵！！」

貴「そうだ！霧島さんと幼馴染だとなんて羨ましい！！俺の幼馴染はこの馬鹿なんだぞ！！」

俺だって男だ。幼馴染は女の子が良かったよ（泣）

明「Ａクラスの前にキサマを殺す！」

雄「俺が一体何をしたと！？」

貴「遺言はそれだけか？」

明「待つんだ須川君靴下はまだ早い、それは押さえつけた後に口に押し込むものだ」

須「了解です。隊長」

我らが仇敵め。Ｆクラスの男子高校生４４人分の靴下をとくと味わうがいい。

・・・俺だって女の子の幼馴染が欲しかったよ。

そしたら、フラグが立つじゃないか。

姫「あの、吉井君」

明「ん？なに、姫路さん」

姫「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

明「そりゃ、まぁ。美人だし」

そうだな。霧島さんは学園内でも上位の美しさだろうしな。

まぁ妹の楓の方が綺麗だがな

明「え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの？

それと島田さんも僕に向かって教卓なんて物を投げようとしているの！？」

・・・なんか最近姫路さんが壊れてきたな。

命は床に手をついて落ち込んでるし・・・

秀「まあまあ。落ち着くのじゃ皆の衆」

パンパンと手を叩いて場を取り持つ秀吉

明「む。秀吉は雄二が憎くないの？」

秀「冷静になって考えてみるが良い。相手は霧島翔子じゃぞ？

男である雄二に興味があるとは思えんじゃろうが」

え？なんで？

秀「むしろ、興味があるとすれば・・・」

明「・・・そうだね」

明久達の目線が女子（島田さん以外）に集まる

姫「な、なんですか？」

楓「どうかしましたか？」

まさか、霧島さんが同姓愛かなにかと思ってるのか？
雄二の幼馴染で名前で呼んでるんだぞ。
おそらくフラグが立ってるに決まっているだろうよ

雄「とにかくっ俺と翔子は幼馴染で小さい頃間違えて嘘を教えていたんだ。
　アイツは一度教えた事は忘れない。だから今学年トップの座にいる」

それって凄くないか。一度教えた事は忘れないって・・・

雄「俺はそれを利用してアイツに勝つ。
　そしたら俺達の机は『システムデスクだ！』」

第3問目～Aクラス戦前～（後書き）

いよいよ、Aクラス戦開幕です。

貴「やっとここまできたな」

楓「そうですね。最後まで頑張ります」

次回の更新も楽しみにしていてください。

皆さんの感想待ってます

第3問目～Aクラス戦（宣戦布告）～（前書き）

バカと俺たちの召喚獣更新しました。

今日はなんとなく夕方ぐらいにもう1話更新したいなと考えています

読んでる方は楽しみに待っていてくださいね

第3問目～Aクラス戦（宣戦布告）～

Aクラス――

優「一騎討ち？」

雄「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

恒例の宣戦布告
今回は代表である雄二を筆頭に俺や明久、秀吉、ムッリーニ、楓、命、
姫路さん、島田さんという首脳陣勢揃いでAクラスに来ていた。

優「何が狙いなの？」

現在、俺たちと交渉の席についているのは優子だ。

雄「もちろん俺たちFクラスの勝利が狙いだ」

まあ優子が訝しいのも無理は無い。
底辺に位置する俺たちが一騎討ちで学年トップの霧島さんに挑む事自体が不自然なのだから
当然何か裏があると考えるだろう

優「面倒な試召戦争を手軽に終わらせる事ができるのはありがたいけどね、
だからと言ってわざわざリスクを犯す必要もないかな」

雄「賢明だな」

予想通りの返事だ

雄「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった?」

優「時間は取られたけど、それだけだったよ?何の問題もなし」

秀吉の挑発に乗り昨日Aクラスに乗り込んだCクラス。
その勝負は半日で決着がつき、CクラスはDクラスと同等の設備で授業を受けている

雄「Bクラスとはやりあう気があるか?」

優「Bクラスって・・・昨日来ていた『あの』・・・・・・」

雄「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだが、
　さてさて。どうなることやら」

優「でも、BクラスはFクラスと戦争して負けたのだから
　試召戦争はできないはずよね」

試召戦争の決まりごとの1つ、準備期間。
戦争に負けたクラスは準備期間を経ない限り戦争を申し込む事ができないのである。

雄「知っているだろ?事情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』って
　事になっていることを。規約にはなんの問題も無い」

これは設備を入れ替えなかったからこそできる方法だ。

優「・・・・・それって脅迫？」

雄「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

なんだか雄二が悪役に見えるよ

優「うーん・・・・・わかったよ。何を企んでいるか知らないけど、
代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるわ」

貴「本当か？」

優「だってあんな格好した人達がいるクラスと戦争なんて嫌よ・・・」

よほど昨日の根っこコンビの女装が気持ち悪かったんだろうな・・・
同感するけど

優「でも、こちらからも提案代表同士じゃなくて・・・
お互い7人ずつ選んで一騎討ちを7回で4回勝った方が勝ちって言うのならいいよ」

雄「なるほど。こっちから姫路が出てくる可能性を警戒しているんだな？」

優「多分大丈夫だと思うけど代表の調子が悪かったら問題次第では万が一があるかもしれないし」

貴「わかった。それで良いよ」

雄「お、おい貴浩。勝手に・・・」

貴「ぶっちゃけ俺も戦争したいしな」

雄「ふぅー。わかった。そちらの条件を呑んでもいい。
ただし、勝負の内容はこちらで決めさせてもらう。
それくらいのハンデがあってもいいはずだ」

優「え?うーん・・・」

霧「・・・受けてもいい」
と優子の後ろからAクラス代表の霧島翔子があらわれた

霧「・・・雄二の提案を受けてもいい」

優「あれ?代表いいの?」

霧「・・・その代わり条件がある」

貴「条件?」

霧「・・・うん」
霧島さんが軽く頷く

霧「・・・負けたら何でも1つ言う事を聞く」

ん?どういうことだろう?

まあ何か霧島さんにもあるのだろう
俺が疑問に持ってると明久とムッリーニが何か騒いでいたが無視する事にした。
良い予感がしなくてね・・・

優「じゃこうしましょう。勝負内容は7つの内4つ決めさせてあげる。
　3つはうちで決めさせて」

貴「雄二それでいいんじゃないのか」

雄「ああ、そうだな。交渉成立だ」

明「ゆッ雄二！！まだ姫路さんと楓が了承してないのにそんな勝手な！」

明久はさっきから何を言ってるんだ・・・

雄「心配すんな。絶対姫路と楓に迷惑はかけない」

霧「・・・勝負はいつ？」

雄「そうだな。10時からでいいか？」

霧「・・・わかった」

霧島さんって独特の雰囲気を持つ人だな。
話し方だけならムッリーニと似ているし。

雄「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

貴「そうだな。皆にも報告しておかないとな」

交渉が終了し、Ａクラスを後にする。

――Ｆクラス

雄「――――ということだ。
Ａクラスとは7対7の勝負で4勝した方が勝ちとなる。
そこで今から相手の情報についてムッリーニから報告がある」

雄二がそう言うとムッリーニが教卓の前に立ち1枚の紙を見せてくれた

雄「この紙に書いてあるのはＡクラスの成績上位のヤツについてだ」

そこに書かれているのは

Ａクラス上位成績者（新学期当初）
1）霧島　翔子
2）久保　利光
3）八神　なのは
4）木下　優子
5）砂原　鈴歌
6）工藤　愛子
7）不知火　刀麻
8）佐藤　美穂

と書かれていた。
あら?3番目にある人の名前どこかで見たことがあるな・・・
おそらく気のせいだよな・・・。

雄「9番と10番を載せてないのは8番との差が大きいからと
　姫路と楓が去年の成績でこの上位に入っていたからだ。
　おそらくAクラス戦ではこの8人から選ばれて出て来るだろう」

貴「1つ質問なんだが3番目に位置する人は学校では初めて目にする名前だが
　確か去年はそんな人いなかったような気がするんだが」

ム「・・・・・・・・今年転入してきたらしいから情報が無い」

楓「・・・あの兄さん?」

貴「何だ?」
楓が俺に近づいてきて話し掛けてきた

楓「多分、私の気のせいだと思うんだけど・・・」

貴「やっぱり楓も気になるあの3番の八神さんって人」

楓「もしかしたら私たちの従妹(いとこ)のなのはちゃんじゃ無いのかな?」

貴「俺もそうは思ったけど、
　もしこっちにくるならアイツか親父からは連絡がくるはずだろ。
　でも、そんな連絡受けてないだろ?」

楓「確かにそうだよね。やっぱり私の勘違いだよね」

貴「まあAクラス戦になったらわかるよ」

楓「そうだね」

俺が楓と話していたら

雄「こちらのメンバーはAクラスに行ってから言う。
さあAクラスに乗り込むぞ！」

F「「「「「うぉおおおお！！！」」」」」

そしてFクラスとAクラスとの戦争がついに始まる

――俺の携帯に

【1件のメールを受信】

俺はそれに気づかずAクラスへと向かった

第3問目～Aクラス戦（宣戦布告）～（後書き）

ついにAクラス戦開始です

貴「よし頑張るかな」

誰が誰と戦いどう勝利するのか楽しみにしていてください

オリキャラ紹介（3）（前書き）

Aクラスに新キャラを出しました。

ネタバレを含むかもしれませんがご了承ください

オリキャラ紹介（3）

八神（やがみ）　なのは

・２－Ａ所属
・誕生日3月１５日　身長１５２ｃｍ　Ｏ型
・見た目は某魔法少女のなのはさんです
・織村兄妹の従妹（いとこ）
・２年の新学期から数日遅れて引っ越してきて文月学園に転入してきた。

織村家に一緒に住むことになるが、このことを織村兄妹は会うまで知らなかった。

・明るく優しい性格で強い正義感を持ち前向き
・家庭的で料理が得意だが運動が少し苦手
・怒った時は、静かで鋭く重い怒り方をする（精神攻撃）
・貴浩と楓とは小さい頃夏休みとかで一緒に遊んでいた
・貴浩と楓のことが好きで２人を傷つける人は嫌い
・成績はよくＡクラスのトップ１０に入る実力を持つ
・得意科目は数学、物理、家庭科、苦手科目は古典
※理数系はかなり高いが、文系は理数系に比べると低い

〈召喚獣〉

・服装：黒い騎士甲冑
・武器：杖
・腕輪：砲撃
・ホーミングシュート〔１発５点消費〕
ホーミング性能を持ち一度に数５発打つことができ、またアクションしながら同時制御が可能。
低威力、チャージ時間１発１秒、連射可能
・ディバインストライク１発５０点消費〕
直射砲撃で防御しても貫通力を持つせいで、点数が

削られる。
しかし威力に比例してチャージ時間（1分）も長いのが欠点。

２０分経てばもう一度砲撃可能
中範囲で高威力、連射不能
・セイクリエッドブレイム〔1発３０点消費〕
複数の弾を一気に発射、着弾（目標）地点から周囲を巻き込んで炸裂、
一定範囲を「制圧」するが、移動ができず、無防備状態になる。

２０分経てばもう一度砲撃可能
高範囲で中威力、チャージ時間３０秒、連射不能
・ルシフォリオンブレイカー〔1発８０点消費＋反動による負担で２０点消費〕
特大の一撃を放つ集束砲撃。一撃で必ず５０００点削る
威力はとても大きいが反動・負担もでかい
1回の試召戦争で1度のみ使用可能
高範囲で超高威力、チャージ時間2分、連射不能

不知火（しらぬい）　刀麻（とうま）
・２－Ａ所属
・誕生日１１月２５日　Ａ型　身長１６８ｃｍ
・ツンツンした短めの黒髪をしており、それ以外にはこれと言って特徴が無い平凡な容姿
・体格は中肉中背だがやや筋肉質
・とても友達思いで他人のために真剣に怒れるまっすぐな心根の持ち主
・料理の腕は上々で家庭的な面を持つ

・成績はよくＡクラスのトップ１０に入る実力を持つ
・得意科目は現国や日本史、苦手科目は英語
〈召喚獣〉
・服装：袴
・武器：刀
・腕輪：能力封じ〔１回１００点消費〕
　フィールド内全ての召喚獣の腕輪の能力を封じる（敵、味方含め）

砂原（さはら）　鈴歌（すずか）
・２－Ａ所属
・誕生日５月２２日　ＡＢ型　身長は１５８ｃｍ、胸はＤカップ
　髪の色は茶髪でツインテール。
・いつも明るく陽気で親しみやすい感じ
・いつも凄いニックネームをつけて呼んでいる
・裏の顔は文月学園の情報屋。新聞部の取材ノートと情報屋ノートを
　常に持ち歩いている。情報料は現金ではなく依頼人本人の情報と交換したりする
・新聞部に所属
・将来の夢は世界に通用するジャーナリスト
・好きなもの：情報収集、友達
・嫌いなもの：友達を傷つける人
・ムッリーニのライバル的存在
・成績はよくＡクラスのトップ１０に入る実力を持つ
・得意科目は英語と現国、苦手科目は化学
〈召喚獣〉
・服装：スーツ
・武器：スナイパーライフル（総弾数６発）

※リロードに１０秒かかる
　リロード１回につき５点消費
・腕輪：科目書換え〔１回１００点消費〕
　現在の召喚フィールドの科目を任意に書き換えることができる
　ただし、味方クラスが自分しかいないときは発動できない

オリキャラ紹介（3）（後書き）

ひとまず3名の新キャラを出してみました。

この3人が今後どのように活躍するか楽しみにしていてください

第3問目～Aクラス戦（第1試合目）～（前書き）

さて、これからいよいよAクラス戦開幕です

ただ思ったより話が長くなりそうなので

1戦ずつの更新となります。

第3問目～Aクラス戦（第1試合目）～

――Aクラス

高「では、両名共準備は良いですか？」
今日はここ数日、戦争で何度もお世話になっている
Aクラス担任かつ学年主任の高橋先生が立会人を務める。

雄「ああ」

霧「・・・・・・問題ない」

一騎討ちの会場はAクラス。
こちらの方が広いし、廃屋のFクラスでは締まらないしな

高「それでは1人目どうぞ」

優「あたしから行くわよっ」
向こうは秀吉と命の姉の木下優子
対するこちらは

秀「ワシがやろう」
その弟の秀吉だ。
さてどういう戦いになるかな

優「ところでさ、秀吉」

秀「なんじゃ？姉上」

優「Cクラスの小山さんって知ってる」

秀「はて誰じゃ？」

あれ？Cクラスの小山さんってこの前秀吉が・・・

優「じゃあいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

秀「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

秀吉が廊下につれてかれる。

何か嫌な予感がしたので、楓を手招きして呼び廊下に近づいて行くと

秀「姉上、勝負は・・・・・どうしてワシの腕を掴む？」

優「アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？

どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしている事になっているのかなぁ？」

廊下から2人の話し声が聞こえる

秀「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して・・・・・

あ、姉上っ！ちがっ・・・・・・・その関節はそっちには曲がらなっ・・・！」

ガラガラガラ

扉を開けて優子が戻ってくる。

優「秀吉は急用ができたから帰るって」

この時俺はガタガタと震えていた。

それは、1年の時少し命をからかい過ぎて涙目にさせてしまった所を姉の優子に見つかり
関節と言う関節を曲げられたからだ。

今でもあの時の事を覚えている・・・

ちなみにではあるが貴浩は優子が腐女子であることは知らない。
知っているのは学園では家族である秀吉と命あと楓の3名だけである。
楓は去年から命と交友があり木下家に訪れたことがあり、その時偶々知ってしまったのである

優「まったく秀吉も演劇なんて遊びばっかりしないで勉強していれば
成績だってもう少し上がったでしょうに。
演劇なんてくだらないことばかりしているから」

プチッ

あれぇ？
今どこかで血管が切れる音がしたような気が・・・・・・

俺は恐る恐る後ろを振り返ると俺の後ろには・・・・・・

優「さて秀吉の代わりの人出してくれる？」

雄「い、いや・・・。こちらの不戦ｐ『待ってください』で・・・？」

楓「私が秀吉君の代わりに出ます」

俺の後ろには笑顔なのに目が笑ってない楓さんがいらっしゃった・・・

もしかして怒っていらっしゃる？・・・・・・・

雄「ま、待て。楓には・・・」

楓「良いよね。坂本君？」

雄二の台詞途中に目線で「私がやる」といわんばかりに雄二を見た

雄「・・・・・ああ。任せる」

雄二は楓に反論する事ができず試合に出る事を認めた。

俺はこの時に廊下で倒れている秀吉を抱えＡクラスに戻った

優「楓が相手ね」

楓「優子さん。今さっきあ演劇の事をくだらないとか言いませんでした？」

優「ええ、言ったけど。それが何か？」

楓「秀吉君に謝ってください。

確かにＣクラスのことで秀吉君はやりすぎたかも知れませんが

それでなんで演劇の事まで侮辱されないといけないんですか！

？」

優「え？」

優子が楓の行動に驚いているようだ。

俺も正直驚いている。

楓がここまで怒ることなんて滅多にないからだ。

するとそこで気絶していた秀吉が目を覚ました。・・・・・・復活がはやいな

楓「私もですが秀吉君は演劇に力をいれて頑張っています。
将来も演劇の俳優になるという夢を私に教えてくれました。
夢のために頑張ってる人を馬鹿にするのはたとえ優子さんでも許しません」

優「許さないって、じゃあどうするの？」

楓「先ほども言いましたが秀吉君に謝って下さい」

優「い、嫌よ。何で私がアイツに」

楓「それは優子さんが秀吉君の夢を馬鹿にしたからです。
私は秀吉君の演技に憧れています。
そして私も将来は演劇に関わる仕事に就きたいと思っています。
では、逆に聞きますが優子さんは何か夢を持って勉学に挑んでいるんですか。
夢を持たない人が夢に向かって努力している人を馬鹿にしないでください！」

優「うっ・・・」

そこで優子は詰まった。
俺は楓がここまで怒るのを久しぶりに見たし、
初めて楓の夢についても知った

楓「だから、優子さんに勝って秀吉君に謝ってもらいます」

優「わ、わかったわ。楓が勝ったら謝るわよ」

高「教科は何にしますか？」

優「総合科目でお願いします」

楓・優子『試獣召喚（サモン）！』

Aクラス　木下優子　　VS　　織村楓
総合科目　３７４１点　　３９４６点

優「え？」

F「点数高いな」

A「学年次席レベルの点数じゃないか」

楓「優子さん行きます『剛烈』ッ！」
楓の召喚獣は優子の召喚獣に狙いをさだめ強烈な一発を放つ
優子の召喚獣はランスで矢を弾こうとするが矢の勢いが強く
反らすだけで精一杯で矢は肩に命中した。
あたった分点数が下がる

木下優子　３２２１点

楓「まだです『五月雨』！」
再び優子の召喚獣に狙いを定め今度は複数の矢を同時に放った。
矢の範囲が広く逃げ出せないとわかると優子は目の前の矢を弾いていったが
矢が多すぎて何発かが命中する

木下優子　２６８６点

優子「クッ。今度はこちらの番よ」
すると優子の召喚獣はランスを楓の召喚獣に向けて突進してくる。
楓は牽制に矢を何発か放ちあたるがが優子の召喚獣の勢いは止まらず
楓の召喚獣の横腹に掠ってしまった

木下優子　２２５４点
織村楓　３４２３点

楓「まだです」
楓は優子の召喚獣から距離を取り矢を放つ
優子も矢の攻撃を食らいながらも致命傷は避け楓に攻撃を入れていく
それが何度も続いていき

木下優子　８５４点
織村楓　２１８０点

優子の召喚獣が楓の召喚獣にランスを振り上げた
優「これで！！」

楓「ま、まだです」
楓は間一髪避ける。
すると優子の召喚獣が先ほどの攻撃がよけられてしまい体勢を崩した。

楓「そこです。凄いのいきます『ワイルドギース』！！」
楓の召喚獣が至近距離で楓の召喚獣の持つ弓の技で最強の一撃を食らわせる。

そこで決着がついた。

Aクラス　木下優子　　VS　　織村楓
総合科目　0点　　2030点

高「勝者Fクラス」

F「「「「「うぉおおおお」」」」」

こうして楓の活躍により先に1勝を獲得した

楓「私の勝ちです。約束どおり秀吉君に謝ってください」

優「わかっているわ。・・・・・秀吉、ごめんなさいねあなたの夢を馬鹿にしてしまって」
優子はそう言うと秀吉に頭を下げた

秀「い、いいのじゃよ姉上。今回の事はワシにも非があるからの。
今回の事はお互い水を流そうではないか」

優「ありがとうね。
楓もごめんなさいね。
まだ夢を持っていないあたしが夢に向かって頑張っている人を
馬鹿にするなんていけなかったわね」

楓「い、いえ。わかってくれたなら良いんですよ・・・」

とその後も3人は話しているようで
俺が入る隙間が無かったので次の戦いに集中する事にした。

第3問目～Aクラス戦（第1試合目）～（後書き）

まず1回戦は優子ｖｓ楓でした。
そして、Fクラスがまず1勝をあげました。
次は誰と誰が戦うのか楽しみにしていてください。

第3問目～Aクラス戦（第2試合目）～（前書き）

Aクラス戦2試合目です

第3問目～Aクラス戦（第2試合目）～

高「では、次の方どうぞ」

命「次は私が行きますね」

？「じゃあ私が行こうかな」

Fクラスからは命が

Aクラスから出てきたのは見たことのある人物だった。

貴・楓「「なのは（ちゃん）！？」」

それは俺と楓の従妹（いとこ）である八神（やがみ）なのはだった。

な「久しぶりだね2人とも。正月ぶりかな？」

明「貴浩？あの人の事知ってるの？」」

明久が俺達の事情を知らないので尋ねてきた

貴「知ってるも何も俺と楓の従妹だ」

するとFクラスの男子が騒ぎ出した

F「「「「「何ぃいいいい！？」」」」」

須「あんな可愛い子がお前の従妹だと！そんなの信じられるか」

確かになのはは可愛しスタイルも悪くないしな

楓「いつ来たの？」

な「来たのは今日の朝だよ」

貴「転入してくるなら連絡入れろよな。叔父さんたちも来てるのか？」

な「お父さん達は来てないよ。私だけこっちに来たんだよ」

貴「そんなのか？なら何処に住むんだ？」

な「あれ？叔父さんから聞いてない？私2人と一緒に住むことになってるんだよ。
　放課後荷物が家に届くはずだけど」

楓「え？そんな事父さんから聞いてないよ。ねぇ兄さん？」

貴「ああ。今初めて聞いたんだが・・・」

な「あれ？叔父さんはメールするって言ってたんだけどな」

俺は何か嫌な予感がし、高橋先生に許可をもらい携帯を開くと
一件のメールが受信していた。
そのメールを開くとそこに書かれたいたのは

＜我が息子よ元気にしているかね。
突然だが、今日からお前の従妹である八神さん家のなのはちゃんが
一緒に住むことになったからよろしく。
その分の生活費をいつものように振り込んでるからよろしく！
追伸：奈乃羽ちゃんに無理やり手を出すなよ。じゃあ、後の事は

よろしく頼む。
楓ちゃんによろしく〉

楓「兄さん？なんて書かれていたの？」

楓が俺に聞いてくると俺は携帯の画面を楓に見せてあげた

楓「あっ、本当だ。今日からなのはちゃん私たちと一緒に住むんだ」

俺は携帯を閉じてからしまうと

貴「あのクソ親父ぃいいいいいいいいいいい！！
こういうことはあらかじめ言っとけや！！」

俺は心の底から叫んだ

楓「ちょっと兄さん落ち着いてよ。父さんの事は今に始まったことじゃないでしょ」

俺の親父はいつも気まぐれで家を引っ越したのも理由が『飽きた』だからだ。
そんな理由で住んでた家を売り、木下家近くに家を建てたのだし。
今海外にいるのも『海外に住んでみたい』という理由で母と共に海外に行った。
俺達はもう高校生になったこともあり海外には行かずに今の家に住んでいるのである。

な「ということでよろしくね2人共♪」

楓「よろしくねなのはちゃん」

貴「はぁー、まあこうなった以上は仕方がないか」

俺があきらめため息をついた時、
不意に後ろから殺気を感じ横に飛んで避けると
先ほどまで俺がいたところにはカッターが無数に刺さっていた

貴「な!?」
俺は慌てて後ろを振り向くとそこには例の奴らがいやがった

須『諸君。ここはどこだ?』

F『『最後の審判を下す法廷だ』』

須『異端者には?』

F『『死の鉄槌を!』』

須『男とは』

F『『愛を捨て、哀に生きるもの!』』

須『宜しい。これより、KMF団による異端審問会を開催する』

やはりやつらがいやがりましたよ

須『こいつの罪状を読み上げよ』

F『はっ。須川会長。
　えー被告、織村貴浩は我が文月学園第2学年Fクラスの生徒であり、
　この者は我らが教理に反した疑いがある。本日未明、
　この者は我が文月学園に新しく転入してきた女子と・・・』

須『御託はいい。結論を述べたまえ』

F『同棲するので羨ましいであります』

須『うむ。実にわかりやすい報告だ。
　さて被告よ、何か最後に言い残す事はあるか？』

貴「なら、1つ・・・・・そんな事で殺されてたまるものか！」
俺はそう言い残すとAクラスを飛び出し逃亡した

須「逃がすな！！」

F『了解！！』

KMF団も俺を追いかけるためAクラスを出て行ったのでAクラスには、
Aクラスの人達と雄二、明久、秀吉、ムッリーニ、楓、命、島田さん、姫路さん達が残った

・・・ここからは兄の貴浩が帰ってくるまで妹の私の視点です。
兄さんが帰ってきしだい元に戻します

高「・・・えー多少のアクシデントがありましたが続けます」

命「じゃあ行って来ます」

な「タカ君はあいかわらず面白いね。
じゃあ、高橋先生科目は物理でお願いします」

なのは・命『試獣召喚(サモン)！』

Aクラス　八神なのは　　ＶＳ　　木下命
物理　　５９６点　　１３２点

明「何!?あの点数」
明久君をはじめAクラスのメンバーの方々もなのはちゃんの点数に驚いてます。
もちろん私も驚いてます。
成績が良いのは知ってましたがここまで高いなんて驚きました

な「じゃあ行くよ。

たしか４００点以上の点数を取ると特殊な攻撃ができるんだったよね」

そういうとなのはちゃんは早速、腕輪能力を使っていました。
なのはちゃんの召喚獣の杖から命ちゃんの召喚獣に向けて砲撃を放ち命ちゃんの召喚獣はその光に飲み込まれて消えてしまいました

高「勝者Ａクラス」

な「私の勝ちだね。えっと木下さんだったよね？」

命「はい、あ、私の事は名前の命で呼んでください。
私には姉と兄がいて苗字だとわからなくなっちゃうから」

な「ほんとう！なら私もなのはって呼んでね命ちゃん」

命「あっはい。なのはちゃん」
そこで軽くお話した後命ちゃんが私たちの所に帰ってきました

命「ごめんなさい皆さん。負けてしまいました」

明「仕方ないよ。あの点差だとね」

秀「そうじゃぞ。明久の言う通りじゃ」

楓「そうですよ。気にしちゃ駄目だよ命ちゃん」

ガラッ

すると兄さんが帰ってきたみたいです

貴「ふぅー、ただいま。あ、試合終わったんだね。で結果は？」

命「すみません。負けてしまいました」

貴「そうか。ドンマイドンマイ」

明「そういえばFクラスの皆は？」

貴「・・・・・さあ知らないな？」

逃げてる最中に鉄人に出会い押し付けてきたのだが黙っておく事にする

さてここまでで2戦終了して1勝1敗の戦績だ。

お互い後3勝した方が勝ちとなる

第3問目～Aクラス戦（第2試合目）～（後書き）

Aクラス戦2戦目終了です

命「うわーん。一瞬で負けちゃったよ。せっかく明久君の前で頑張ろうと張り切ったのに（泣）」

貴「ドンマイ命。相手が悪かったよ。でも気にするなよ。次頑張ればいいんだから」

命「はい、次は頑張ります」

2戦目は命は負けちゃいましたね。

さて3戦目はいよいよFクラスからはあいつが出ます。

次回の更新楽しみにしていてくださいね。

皆さんの感想お待ちしています。

たいしたことでもかまいませんので感想待ってます

第3問目～Aクラス戦（第3試合目）～（前書き）

Aクラス戦第3試合開始です

第3問目～Aクラス戦（第3試合目）～

高「次の方どうぞ」

佐「私が出ます」

雄「・・・・・よし。頼んだぞ、明久」

明「え!?僕!?」

次は明久か

雄「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

自信たっぷりに言う雄二。だけどおそらく信じてないだろうな

貴「明久、お前なら大丈夫だ」

楓「そうですよ明久君。頑張ってくださいね」

命「明久君頑張ってね」

明「ふぅ・・・・・・やれやれ僕に本気を出せってこと?」

貴「ああ。今まで隠してきたんだ。お前の本気見せてやれ」

A「おい、アイツって実は凄い奴なのか?」

F「いや、ジョークだろ?」

まあ普通は疑われるよな。

明「じゃあ、科目は日本史でお願いします」

高「はい、わかりました」

明久・佐藤『試獣召喚（サモン）！』

Aクラス　佐藤美穂　　VS　　吉井明久
日本史　326点　　137点

雄「何！？どういうことだあの明久があそこまで点数が高いなんて」

ム「・・・・・・ビックリ」

島「まさか吉井カンニングでもしたんじゃ・・・」

命「あの皆さん言い過ぎでは・・・」

雄「だが、あの明久だぞ」

明「雄二！それどういう意味！？」

貴「言いすぎだぞ。そりゃあいつだって勉強すれば成績も上がるさ」
まあ覚えさせるのにとても苦労したが・・・・・・

雄「あいつが勉強するなんて思えない」

貴「まあ。俺たちと一緒に勉強したからな。それに俺や楓達が教えたんだから

成績が上がってなかったらＯＨＡＮＡＳＩする必要があったよ」

雄「何？どういうことだ」

貴「いや、夜に俺の家で夕飯つきで一緒に勉強したんだよ。この試召戦争に勝つために」

楓「そうですね。ここ毎日は一緒に勉強しましたね」

命「私も時々一緒に勉強しました」

貴「だからアイツの点数が高いんだよ」

明「そういうこと。じゃあ佐藤さんだったかな。行くよ」

明久はそう言うと佐藤さんの召喚獣に突っ込んでいく。

明久の武器は木刀、佐藤さんの武器は鎖つきの鉄球だ。

懐に潜り込めば明久の方に部がある。

相手もがそれがわかっているみたいで

明久を近づけさせないように武器をを振るうがあたらない

その隙に明久は自慢の召喚獣の操作で近づいていき少しずつ点数を減らしていく

雄「まあ今の明久はメタルスライムぐらいの回避率があるからな」

明「そんなに弱くないよ」

とツッコんできた。

そんなことをしたせいで佐藤さんの攻撃があたってしまった。

ギリギリ木刀で防御したおかげで戦死はしなかったが点数が減ってしまった

佐藤美穂　２３１点
吉井明久　７８点

明「クッ、しまったな」
佐藤さんは明久の召喚獣に向かって攻撃してくる。
明久はその攻撃をしゃがんだり横に飛んだり木刀でそらしながら近づいていく

明「だけどまだまだ」
明久は引かずに木刀で攻撃を入れていく

佐「そこです」
佐藤さんは大きく鉄球を振りあげた

明「今だッ！」
それを好機だと思い明久が近づいて攻撃する
佐藤さんもやらせまいと鉄球を急いで振り下ろす。

・・・・・・そして決着がついた。

明久の召喚獣の木刀が佐藤さんの召喚獣の胸を貫いている

・・・・・・そして

佐藤さんの鉄球が明久の召喚獣を踏み潰していた

高「そこまで、両者０点につき引き分けとします」

明久と佐藤さんとの試合は引き分けと言う形で幕を閉じた

明「・・・・・・い、痛い。
ごめん。貴浩に雄二勝てなかったよ」

雄「いや、気にするな。負けると思っていたのに
引き分けに持ち込んだのだからこちらの儲けだ」

貴「ドンマイ明久。次は頑張れよ」

明「うん、そうするよ」

命「明久君お疲れ様です。惜しかったですね」

明「ごめんね。勝てると思ったんだけどな」

命「いえ、今日の明久君はかっこよかったですよ」

秀「そうじゃぞ明久。まさかあそこまで点数が上がっておるとは驚きじゃ」

島「それはウチも思った」

ム「・・・・・・・・・凄かった」

明「うん。貴浩と楓、命たちのおかげだよ」

楓「いえ、私は少しアドバイスをしてだけですよ」

命「そうですよ。私は何もしていないよ」

貴「これからも頑張らないとな」

明「そうだね。負けて悔しかったしね」

3戦目が終了し、今の成績は1勝1敗1分だ
残り4戦ある。次の戦いが重要になるだろう

第3問目～Aクラス戦（第3試合目）～（後書き）

今回の3試合目は明久がでました。

残りは4戦ですがどうなるか楽しみにしていてくださいね

第3問目～Aクラス戦（第4試合目）～（前書き）

Aクラス戦4戦目更新です

今日、やっとバカテス9．5巻が出たので買いました。
アニメイトで予約して買ったので
秀吉と明久のファスナーチャームもついてました
今回もとても面白い内容でした。

雄二や高橋先生が・・・

第3問目～Aクラス戦（第4試合目）～

いつのまにかにFクラスのメンバーが戻ってきていた。

高「4人目の方どうぞ」

ム「・・・・・・・・（スック）」

ムッリーニが立ち上がった。

ムッリーニは科目選択に保健体育を選ぶだろう。

保健体育だけでムッリーニは総合科目の点数のうち80%を占めている。

その単発勝負ならAクラスにだって負けはしないだろう

工「じゃ、僕が行こうかな」

Aクラスからは工藤さんが出てきた。

そういえば工藤さんの成績ってどうなんだろう?

Aクラスだから高いとは思うけど・・・

工「1年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

俺と目が会うと手を振ってきたので俺も手を振り返した

高「教科は何にしますか?」

高橋先生が尋ねてくる

ム「・・・・・・保健体育」

ムッリーニの唯一にして最強の武器が選択される

工「土屋君だっけ?随分と保健体育が得意みたいだね?」
工藤さんがムッリーニに話し掛ける。

工「でも、僕だってかなり得意なんだよ?
・・・・・キミとは違って、『実技』で、ね♪」

ム「・・・・・・・・じ、実技・・・(ブシュー)」

貴・明『ムッリーーーニィ!!』
俺と明久は鼻血をだして倒れたムッリーニに駆け寄る。
・・・ってか、工藤さんってこう言うキャラだったの?

明「な、なんてことをするんだ」

工「そっちのキミ、吉井君だっけ?勉強苦手そうだし、保健体育でよかったら僕が教えてあげようか?
もちろん『実技』でね♪」

明・ム「・・・・・・・・(プシュー)」
明久とムッリーニがかなりの量の鼻血を出して倒れた。
とか言う俺も明久達ほどではないが少しだけ鼻血を出してしまった。
・・・ムッリーニの鼻血の量はさすがにやばくないか

命「あ、明久君!?」

島「吉井には永遠にそんな機会来ないから保健体育の勉強も要らないわよ!」

姫「そうです!永遠に必要がありません!」
と明久の後ろの方から島田さんと姫路さんが反論してきた。

命は鼻血を出している明久に対してどうして良いのかわからず
周りをキョロキョロ見渡していた

明「・・・・・・・・・・・・」

貴「・・・2人とも。明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが・・・」

工「じゃあ貴浩君が一緒に勉強する？
もちろん、『実技』で、ね♪」

ム「・・・・・・・・・・（プシュー）」
次は俺に矛先が向いた。
ムッリーニは鼻血で再び倒れてしまった。

俺がどうするかってそんなの決まっている・・・・・・

貴「よろしくお願いします」
勢い良く頭を下げお願いしましたよ。
だって俺も男だもの。しょうがない反応だよね

楓「・・・・・・兄さん」
後ろからあきれられたような楓の声が聞こえた

貴「はっ！？いや、違うんだ楓。男ならこんな申し出を断れなくて・・・」

高「そろそろ召喚してください」

あれだけのハプニングにも関わらず、高橋先生は冷静だった。

高「はーい。試獣召喚(サモン)っと」

ム「・・・・・試獣召喚(サモン)」

ボトボトボトボト・・・・・。

比重の高い液体の落ちる音。

ムッツリーニの鼻血だ。

それに気づいた雄二が顔色を変える。

雄「マズイ！　ムッツリーニの奴、今さっきの発言で軽い貧血を起こしかけてやがる」

明「えええーっ！」

貴「ムッツリーニ無理するな。棄権するんだ」

ム「・・・・・大丈夫だ、俺は、まだやれる」

拳を握って宣言するムッツリーニ。しかし、力んだ分、鼻血の勢いが増した。

その様子を見て、工藤さんが笑う。

工「フフッ、もうフラフラみたいだね？　ムッツリーニくん？」

ム「・・・・・俺は、負けない！」

不敵な態度の愛子に負けじと、胸を張るムッツリーニ。

だが、その胸元は、すでに鮮血で染めあがっていた。

工「・・・もう降参したら？」

ム「・・・・・・断る！」
毅然とした口調。鼻血が無ければさぞかし凛々しく見えるだろうに。
・・・・・・鼻血がなければ。

そこで召喚獣の点数が表示された。

Ａクラス　工藤愛子　ＶＳ　土屋康太
保健体育　４４６点　５７２点

驚愕するＡクラスの面々。確かに、あんな点数は普通目を疑うだろう。
でもまあムッツリーニだしな、仕方ない。この一言で済ませられる
・・・本当に大した奴だと思うよ。

工「こ、こんなことって・・・！？」

ム「・・・・・・工藤愛子。お前では、俺には勝てない」

工「くっ・・・！ボ、ボクにだってプライドがあるんだよ！負けられないんだから！！」

肩を震わせる工藤と、勝利宣言をするムッツリーニ。
本来なら、ムッツリーニが圧倒的に有利だ。
だが今のムッツリーニは軽い貧血を起こしているから話は変わってくる

貴「やはり、ムッツリーニ棄権するんだ。今は立っているだけでもキツいんだろ」
俺はムッツリーニの前に立ち棄権するよう言う。

ム「・・・・・・・大丈夫だ」

工「・・・ムッツリーニ君」

工藤がムッツリーニに話かける。
なんか嫌な予感がする・・・
そこで俺は工藤さんが何かする前に俺はムッリーニの前に立った

ム「・・・・・・貴様の言う言葉など、聞く気は――」

工「ボク、今ノーブラだよ」
すると、工藤さんは制服のネクタイを取りそれを胸ポケットに入れ
制服の一番上のボタンを開けた

ぷぱっ！

貴「し、しまった！」

鼻血を出したムッツリーニを見て驚愕した
まずい！ムッツリーニの弱点をついてくるとは

工「あ、あはは！やっぱりムッツリーニ君ってば案外ウブなんだね
！！悪いけど、
この勝負勝たせてもらうよ！！」

ム「・・・貴様の、胸など…！！（ブシャアアァッ）」

貴「ム、ムッリーニ！？」

俺はすぐにムッリーニと工藤さんの間に入り、
ムッリーニが工藤さんを見ないようにした

雄「高橋女史！工藤を止めろ、あれは精神的な攻撃だ！ルール違反だろう！？」

高「え！？えーとその・・・どうするべきなんでしょう？」
さすがの高橋先生も困惑していてストッパーにはなれそうもないな

秀「しっかりするのじゃムッツリーニ！！」

工「ボタン開けちゃったりして。あ、もう一つ開けてみようかな♪」

ム「・・・っ！！（ドバシャアアアッ）」

F男「「「「「ムッツリーニィィィ！！」」」」」

見えていないのに想像だけでこれか。
やばい、鼻血の擬音が人間から出る音じゃなくなってきた！？
これは勝敗どころじゃない、このままだとムッツリーニの命が！！

工「ごめんね。勝てば官軍って奴だから、恨まないでねムッツリーニ君！・・・あっ」

変なテンションから、急に工藤さんの声が素に戻る。

ん？なんだ？何かあったのか？
ムッツリーニから工藤のほうへ目を向けると、
工藤さんの胸ポケットから落ちたネクタイ（制服の一部）を
拾おうとしていたところだった。

・・・あれ？待てよ？この状況、やばくない？

今の工藤さんの状態を思い出してみよう。
彼女は今ノーブラで、制服のボタンを２つ外している状態だ。
元々上着の前は開いており、首元が見えていることからシャツも着ていない。

そして俺の状態は？

ムッリーニを少し下がらせ工藤さんを直に見せないようにムッリーニと工藤さんの前に立っている

そこで彼女が、前かがみになったらどうなる？
気づいた俺だったがもう遅かった。

前かがみになりながらこちらを向いて『？』という顔をしている工藤。

そしてその胸元から僅かにのぞいた隙間から、

生のおっ○い

ブシュー

今度は俺が鼻血を噴出し倒れた。

明・雄「「貴浩!?」」

今度はいきなり倒れた俺を心配して明久と雄二が近づいてくる。

明「どうしたんだよ貴浩。いきなり倒れて」

貴「・・・・・・あ、明久、雄二」

雄「どうした?何が起きたんだ!?」

どうやら俺以外には見えなかったそうだ。
工藤さんも何が起きたかわからないと?を出していた
そこで優子が気が付いたみたいで

優「あ、愛子!?その制服!」

工「え?」
そこで工藤さんも気づいたみたいで慌ててボタンを閉じた
雄二もその行動でで気づいたみたいだ

雄「まさか、お、お前」

貴「・・・・・・り、理想郷はあったんだな」

明「理想郷？雄二、何の事かわかる？」
明久は気づいてないみたいだ
雄「ああ・・・工藤は今さっきネクタイを拾おうとしたよな。
　で工藤はノーブラと言ってたよな。
明「そうだね」
雄「その時工藤は前かがみになったよな。その時の工藤の制服はどうなっていた？
　その時、貴浩はどこにいた？」
明「えっと、工藤さんはボタンを2つ外してて貴浩は・・・・・・ま、まさか」
雄「そのまさかだ。コイツは工藤の胸を生で見てしまったんだよ」
雄二がそう言うと工藤さんの顔が茹で上がったみたいに真っ赤になった。
明久も同じように顔が赤くなった。
・・・・・そして問題が起きた。
その話をしていたのがムッリーニの近くで話していたことだ。
そんな話を聞いていたムッリーニは普通の人より想像力がある男だ。
どうなるかなんて簡単だ。
ぶぱっ

鼻血を噴出した。

F男「「「「「ムッツリーニぃいいいいいい！！？」」」」」

鼻血を噴出したムッリーニはまだ意識があるようだ。
だが、もう立ってはいられない様だ。
俺は鼻血を拭き立ち上がり何とか立ち上がり明久と雄二を見て目線で会話した
おそらく俺の意図がわかったように雄二と明久はムッリーニを抱えた

貴「高橋先生。４戦目は棄権します」
と俺は宣言した。
もうムッリーニも限界に見えるからだ。
これ以上は命が危ないと雄二と明久と共に判断し言った。
ムッリーニはまだやれると言わんばかりにこちらを見ていたが
無理やり雄二に担がれて下がらせた。

高「わ、わかりました。勝者Ａクラス」

俺もすぐムッリーニのところに駆け寄り手伝いをした。
ムッリーニが輸血パックを大量に持っていたので大事には至らなかった
何故そんなものを持っているのかは気にしないでおくが・・・・・・
ムッリーニは今は奥のほうで眠っている。
命には問題ないようだ。

F「坂本！頼む、奴の敵を討ってくれ！」

F「俺の購入予定の写真の敵も！」

F「俺なんて抱き枕買ってたんだぞ！？それをAクラスの連中・・・
許せねぇ！！」

F「「「「俺達が消えちまった奴等にできるのは、
Aクラスの設備を手に入れることだけだ！！」」」」

うわぁ。こいつら最低だな。Fクラスではムッリーニは死んだ扱い
になってるな。
ちゃんとムッリーニは生きてるし少しは心配しろよ。
ムッリーニが不憫に思えた

工「・・・な、なんかボクが悪いみたいになってるけど
・・・ボクだって、そ、その・・・貴浩君に見られたんだから
（ボソッ）」

そして工藤さんがうつむいて顔を赤らめながらそんなことを呟いて
いるのが聞こえた。
それを優子やなのはが励ましているようだ。

やばい、可愛いな。

さっきの生チチの威力も凄かったがこれもかなりの破壊力だ。

ひとまずデジカメで写真とっておこう
そして俺はカメラを取り出し工藤さんの顔を撮ったのだった。

ってか、俺事故とはいえ生チチを見たんだし謝らないといけないな

・・・というか謝るタイミング逃しちゃったしな。

後で謝るとしよう・・・・・・うんそうしよう。

そうして４戦目はこちらの棄権によりＡクラスの勝利になった

第3問目～Aクラス戦（第4試合目）～（後書き）

今回は第4戦目を載せました。

今回はいつもの比べると内容が長くなって読みにくかったかなと少し反省しています。

今後も頑張りますのでよろしくお願いしいます

第３問目～Ａクラス戦（第５試合目）～（前書き）

皆さん『バカと俺たちの召喚獣』を読んでいただきありがとうございます

皆さんのおかげでＰＶが３００００アクセス、ユニークが４５００人を
超えました。

これからもよろしくお願いします。

では、これよりＡクラス戦第５試合目始めます

第3問目～Aクラス戦（第5試合目）～

高「これで2勝1敗1分ですね。次の方どうぞ」
高橋先生はまた先ほどのアクシデントを気にせず淡々と作業を進める
先ほどのアレを気にしないのか。
生徒1人が死ぬ寸前までいったのだが・・・

姫「あ、は、はいっ。私ですっ」

こちらからは当然姫路さんが出る。
唯一Fクラスにいながら、Aクラスとまともに戦える人材だ。
？「それなら僕が相手をしよう」
Aクラスから歩み出たのは久保利光だ！

雄「やはりきたか、学年次席」

そう。彼は姫路さんに次ぐ学年3位の実力の持ち主で、
振り分け試験を姫路さんがリタイアした今、彼は俺たちの学年で次席の座にいる。

雄「ここが一番の問題どころだな。
　ここで負けると俺たちの勝利はなくなる」

確か久保の実力は姫路さんとほぼ互角だった気がする・・・
総合科目の点差だと確か・・・・・・20点程度しか差が無かった

気がする。

姫路さんの体調次第では負ける可能性があるな

高「科目はどうしますか？」

久「総合科目でお願いします」

高「それでは始めてください」

久保・姫路『試獣（サモン）召喚！』

それぞれの召喚獣が呼び出されて・・・・・・一瞬で決着がついた。

Aクラス　久保利光　　VS　　姫路瑞希

総合科目　３９９７点　　４４０９点

A「マ、マジか！？」

A「いつの間にこんな実力を！？」

A「この点数、霧島翔子に匹敵するぞ・・・！」

F「姫路さん最高！！」

F「凄ぇ！学年次席を瞬殺かよ」

Ｆ「姫路さん好きだーーーー」

至るところから驚きの声が上がる。

姫路さんの成績が良いのは知っていたが、４００点も差をつけるなんて・・・

最後何か別のアレがあった気がするが気にしないことにする。

久「ぐっ・・・！姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ？」

久保が悔しそうに姫路さんに尋ねる。

つい最近まで拮抗していた実力がいつの間にかここまで離されたんだ気になるのも当然だろう

姫「・・・私Ｆクラスの皆の事が好きです人の為に一生懸命な皆がいる、Ｆクラスが」

久「Ｆクラスが好き？」

姫「はい。だから、頑張れるんです」

姫路さんが嬉しそうに答える。

高「これで２勝２敗１分です」

高橋先生の表情にも若干の変化が見られた。これは珍しい。

よほど姫路さんの急成長に驚いたのだろう。

あるいは、ＦクラスがＡクラス相手と渡り合ってる事に戸惑いも感じているのだろう。

残りは2戦を残すのみとなった

第3問目～Aクラス戦（第5試合目）～（後書き）

ここは、姫路の圧勝で終わらせました。

今回はいつもと比べると短かったのですみませんでした。

あと残るは2戦です。

次回の更新を楽しみにしていてください

第3問目～Aクラス戦（第6試合目）～（前書き）

Aクラス戦6試合目です。

第3問目～Aクラス戦（第6試合目）～

高「次の方どうぞ」

不「次は俺が行くよ」

Aクラスからは不知火刀麻（しらぬいとうま）が出てくる。
この不知火刀麻もAクラスの成績トップ10に入る実力がある

雄「クッ！次は誰を出すか・・・・・・」

雄二は悩んでいるようだった。
雄二の当初の計画では、
楓・ムッリーニ・姫路さん・雄二の4人で勝つつもりだったらしい。
そこでムッリーニが棄権した事で決め手に欠けている。

科目の選択はFクラスにはあるが・・・・・・
島田さんは数学はBクラス並だが他の教科はFクラス並、
須川や近藤などのFクラスメンバーはやはりFクラス並だ

雄「・・・・・・仕方がない・・・島田頼めるか」

島「えっ？ウチが！？ウチの数学でもAクラスの上位には勝てないわよ」

そうだ島田さんの数学は良くて200点前半なのだ。
Aクラスのしかもトップ10相手だと不安である

雄「すまない。きつい事をいうが勝ってきてくれ」

島「吉井ぐらいの操作性があれば別だけどウチじゃ勝てないわよ」

雄「そこを何とか頼む」

雄二もそれを承知で言ってきていることが顔を見ればわかる。

するとそこで明久と目が合うと俺は明久に向かって頷いた

貴「Fクラスからは俺が出ます」

と雄二の意見を聞かず勝手に出て行った。

雄「ちょっと待て貴浩。勝手に――」

明「大丈夫だよ雄二。貴浩なら絶対勝てるよ」

と俺を止めようとした雄二を明久が止める

雄「何故そう言いきれる。アイツの成績は良くてCクラス並なんだぞ！」

雄二がそういうのも当たり前だろう。

俺は実力を隠していたのだからな　（※詳しくはオリキャラ説明1で）

明「大丈夫。貴浩を信じてよ」

明久が自信満々に答えた

不「吉井だっけ？この人が俺に絶対勝てるって何を根拠に言っているだ？」

明「まあ、そこは戦う時のお楽しみにね。そうだろ貴浩」
明久がこちらを見て言った
貴「ああ、そうだな」
明「絶対勝てよ！」
楓「兄さん頑張ってね」
明久と楓の声援を受け、不知火の前まで来る
貴「高橋先生。科目は数学でお願いします」
高「数学ですね。わかりました」
貴「えっーと、不知火だっけ？よろしく」
不「ああ、よろしくな。キミがどこまでやるか楽しみだ」
貴浩・不知火『試獣召喚（サモン）！』
Aクラス　不知火刀麻　VS　織村貴浩
数学　３５６点　６３９点
A「何あの点数！？」
A「なんでFクラスにアレだけの点数持っている奴がいるんだよ」
優「え？貴浩君って。あんなに成績良かったの？」

な「いや、私もはじめて知ったよ」

工「ビックリだね」

F「アイツって凄かったんだ」

秀「なんじゃ！？あの点数は」

姫「す、凄いですね」

島「ウチの倍以上あるわね」

ム「・・・・・・・・・驚いた」

命「貴浩君って凄かったんだね」

雄「まさか、貴浩がここまで成績が良いとは・・・明久と楓はこのことを知っていたのか？」

明「僕もこの前までは知らなかったよ」

楓「私は知っていましたよ。
兄さんは元々Aクラス並みの成績を持ってましたから。
兄さんは黙っていた方が面白そうだからっと言って隠してましたけど」

Aクラス・Fクラスの両方から驚きの声が聞こえる

不「織村だっけか？お前凄いんだな」

貴「貴浩で良いよ。妹がいるからわかりにくいから。
　成績に関してはこんなに良いのは数学ぐらいだと思うよ」

不「思うってなんだよ。他にもあるってことか。あと、俺も刀麻で良いよ」

貴「わかったよ刀麻。成績については秘密って方向で」

刀「わかった。でも簡単には勝たせないぜ」
そういうと刀麻の召喚獣が向かってきた。刀麻の召喚獣は袴に刀という装備をしていた

お互いの召喚獣がぶつかる。

貴「行くよ！」

おれはそう言うと

貴「足払い！」

刀麻の召喚獣の召喚獣の足をはらい体勢を崩したところを斬りかかる

刀「なんの！」

刀麻の召喚獣は無理やり体を捻り攻撃の直撃を防いだ。

貴「まだだよ」

刀麻の召喚獣は体勢を崩した状態で体を捻り俺の攻撃を避けたので、床に倒れた状態になっている。

俺はすかさず蹴りを入れ、刀麻の召喚獣を遠くに蹴り飛ばした

刀「グッ」

刀麻の召喚獣の召喚獣は蹴られた反動で体勢を立て直し、
俺の召喚獣に向かって斬りつけていた。
俺はすれすれで攻撃をかわして腕輪の能力を発動した。

貴「『グラビトン！』」

俺がそう言うと刀麻の召喚獣は何かに押しつぶされるかのように
物凄い勢いで地面に倒れこんだ。
刀麻の召喚獣はその威力分点数が減った

刀「な！？」
いきなり自分の召喚獣が何かに押しつぶされたように倒れたので
刀麻は驚いているようだ

貴「俺の腕輪の能力は重力変化だよ」

刀「重力だと？」

貴「そう、重力」
俺が話していると刀麻の召喚獣が何とか立ち上がりゆっくりとだが
こちらに向かってきた

刀「少し召喚獣に負荷がかかっているだけだろ。それぐらいなら何
とかなるさ」

そこで、スピードを上げてこちらに武器を構え突っ込んできた。

俺はそれを横に移動して再び腕輪を使用した。

貴「『グラビトン』」

すると刀麻の召喚獣は止まる事ができずそのまま通り過ぎて行った

刀「今度は何をしたんだ？」

貴「簡単だよ。今さっきは重力を加えたけど今回はその逆、弱めたんだよ」

刀「そ、そんなこともできるのかよ」

雄「ってか、なんで貴浩はあそこまで腕輪の能力を知っているんだ。あの腕輪は結構集中力を使うと思うんだが・・・」

すると雄二の疑問が聞こえたのでそれに答える

貴「それは、学園長の実験や先生達の手伝いの時に使っていたからね。

その時に操作になれたんだよ。特別処遇者の利点の１つだよ」

俺は去年から主に学園長の実験を手伝ってきたからここまで操作ができるのだ

貴「じゃあ終わらせようか」

刀「な、なんだと」

貴「行くよ」
俺は武器をしまい刀麻の召喚獣に向かって行った
刀「な！？武器をしまっただと。なめているのか！」
貴「いやいや、なめてなんかいないよ」
俺は刀麻の召喚獣の近くまで近づき、武器である刀を蹴飛ばした。
そして
貴「『飛天御〇流奥義、天駆龍閃（あまかけるりゅうのひらめき）』！」
刀「え？その技って・・・」
ズバッ
俺は神速の抜刀術で刀麻の召喚獣を切り裂いた。
刀麻の召喚獣は胴から下を切り裂かれて消滅した。

Ａクラス　不知火刀麻　ＶＳ　織村貴浩
数学　０点　５１４点

貴「俺の勝ちだな」
高「勝者Ｆクラス」
刀「はあ。ここまで一方的に負けるとは思わなかったよ。次やる時は勝たせてもらうよ」

貴「そのときはお手柔らかに」

俺と刀麻は互いに握手した

貴「そうだ。戦争終わったら携帯の番号教えてよ。これから連絡するからさ」

刀「そうだな。貴浩のも教えてくれよな」

貴「もちろんさ」

そして俺は皆の所に戻った

明「勝ったね」

貴「ああ、約束通り勝ったぞ」

そこで明久とハイタッチをした

雄「まさか、あそこまで点数が高いとは思わなかったぞ」

秀「本当じゃ。驚いたぞい」

ム「・・・・・・驚いた」

貴「まあね／／／」

皆の所に戻ると何度も驚きの声や褒められたりしたので少し照れくさかった

第3問目～Aクラス戦（第6試合目）～（後書き）

6試合目は貴浩と刀麻との勝負でした。

戦闘シーンが下手ですみません。

主人公補正入りすぎたかな・・・・・・

次回はお互いの代表戦です。

どうなるのか楽しみにしていてくださいね。

第3問目～Aクラス戦（最終戦）～（前書き）

シュレ猫様、カトラス様、怪盗黒炎龍様感想ありがとうございます。

これからもバカと俺たちの召喚獣をよろしくお願いします

第3問目～Aクラス戦（最終戦）～

高「最後の1人どうぞ」

霧「・・・・・はい」

Aクラスからはやはり代表の霧島さんが出てくる

そして、俺たちのクラスからは当然

雄「俺の出番だな」

坂本雄二。コイツしかいない

高「教科はどうしますか」

雄「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ」

ざわ・・・・

雄二の宣言で先ほどまで静かだったAクラスにざわめきが起きる

A「上限ありだって？」

A「しかも小学生レベル。満点確実じゃないか」

A「注意力と集中力の勝負になるぞ」

高「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。
　少し待っていてください」

高橋先生はノートパソコンを閉じ、教室を出て行った

そんな先生を見送りつつ俺たちは雄二に近づく

明「雄二、あとは任せたよ」
明久と雄二が手を握る。

雄「ああ。任された」

ム「・・・・・後は任せる」
ムッリーニが歩み寄り、親指を立てる

秀「ここが正念場じゃ。頑張るのじゃよ」

島「頑張りなさいよ」

楓「頑張ってくださいね坂本君」

命「頑張ってね」

雄「お前らには随分助けられた。感謝している」
雄二は皆から応援されそれに答える

姫「坂本君、あのことは、教えてくれてありがとうございました」

雄「ああ。明久の事か。気にするな。後は頑張れよ」
うん？雄二と姫路さんが明久の事で何か言ってるな

貴「しくじるなよ雄二」

雄「ああ。わかっている。もう少ししたらシステムデスクだ」

高「では、最後の勝負、日本史を行います」

高橋先生がそう言うと雄二と霧島さんは教室を出て試験会場である
の視聴覚室に行った。

あと俺たちにできることは『あの問題』が出てくれることを祈るだ
けだ。

試験の様子はモニターで見ることができる。

いよいよ試験が始まりそうだ。

楓「兄さんいよいよだね」

貴「そうだな」

命「これで、あの問題が出なかったら坂本君は・・・」

明「負けるだろうね」

秀「もし出たならば」

明「うん」

もし出たなら勝てるはずだ

試験が開始された。

誰もが固唾を飲んで見守る中、ディスプレイに問題が表示される

さて問題が出ているか・・・

《次の（　）に正しい年号を記入しなさい》

（　　）年　平城京に遷都

（　　）年　平安京に遷都

流石に小学生レベル今の明久でもこれぐらいは解ける

（　　）年鎌倉幕府設立

（　　）年大化の改新

F『あ・・・・・！』

出ていた

命「あ、明久君っ」

明「うん」

秀「これで、ワシらは・・・・・・」

貴「ああ。これで俺たちの卓袱台が」

F『システムデスクに！』

揃ったＦクラス皆の言葉

明「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

Ｆ『うぉおおお！』

教室を揺るがすようなＦクラスの歓喜の声が上がる。

Ａクラスの皆はそれが何かわからず戸惑っているみたいだ。

試験の結果は雄二と霧島さんが教室に帰ってきた時に開示されるらしい。

俺たちＦクラスの皆は雄二の帰りを待ちわびた。

しばらくして雄二と霧島さんが戻ってくる。

２人が戻ってきた事で得点が表示された

＜日本史勝負　限定テスト　１００点満点＞

Ａクラス　霧島翔子　９７点

ＶＳ

Fクラス　坂本雄二　５３点

俺たちFクラスとAクラスの戦争は「３勝3敗1分」という形になった

そして雄二の元に流れ込む俺たち

雄「・・・・・殺せ」

明「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食いしばれ」

姫「吉井君、落ち着いてください！」

姫路が吉井を食い止める

貴「覚悟はできているんだろうな」

俺は雄二の元に行く前にムッリーニからスタンガンを借りて手に持っている

明「だいたい、５３点ってなんだよ！０点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと・・・」

雄「いかにも俺の全力だ」

明「この阿呆がぁーっ！」

貴「そうだ！今の明久でも１００点は取れるぞ」

命「明久君も貴浩君も落ち着いてよ」

明「くっ！なぜ止めるんだ命！この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」

楓「それって体罰じゃなくて処刑だと思いますが・・・」

楓と命が身体を張って俺たちを止める。

チッ楓と命に救われたな雄二

高「7対7の対戦結果は、3勝3敗1引き分けとなりました。」

クールヴォイスの高橋教諭の声が響いた。

高「この後どうするのか、双方の代表者で話し合い、決めてください」

第3問目～Aクラス戦（最終戦）～（後書き）

これで7戦全部終了です

このあとの話し合いがどうなるのか楽しみにしていてください

第3問目～Aクラス戦（試合後）～（前書き）

シュレ猫様、カトラス様、怪盗黒炎龍様感想ありがとうございます。

これからもバカと俺たちの召喚獣をよろしくお願いします

他の皆さまからも感想をいただけるとうれしいです

第3問目～Aクラス戦（試合後）～

高「7対7の対戦結果は、3勝3敗1引き分けとなりました。」
クールヴォイスの高橋教諭の声が響いた。

高「この後どうするのか、双方の代表者で話し合い、決めてください」

雄「とにかく行こう。みんな来てくれないか？」
雄二は、主だったメンバーを伴って、中央へ向かった。

雄「待たせたか？」

優「大して待ってないわよ。で？どうするの？続ける？それとも降伏する？」
開口一番に挑発してきたのは優子だ。

雄「やれやれ、攻撃的だなAクラスは」
雄二はあきれたように肩をすくめる。そして射るように優子をにらんだ。

雄「降伏はしない」

優「じゃあ、続行ね」
優子も強気に出る。

雄「それは・・・」

貴「Fクラスは、Aクラスに和平交渉を申し込む」

雄「おい、貴浩！」
言葉を遮られた雄二が俺をにらむ。
しかし、俺はそれを無視して続ける。
貴「この提案は、双方にとって意味があると思うんだけどな」
優「はあ？　そんなものないわよ。こっちが譲歩する必要なんて・・・・・」
貴「本当にそれで良いのか？よく考えた方が良いと思うんだけどな？」
俺の言葉にいらつく優子
霧「・・・・・・少しいい？」
霧島さんが尋ねてきた。
霧「・・・・・・なぜ、和平交渉を？」
貴「この状況での戦争続行は、お互いにデメリットしかないからな」
優「デメリット？私達に何のデメリットがあるというの？」
貴「現状で戦争を続行した場合、正直どちらが勝ってもおかしくないだろう」
その内容に優子が噛みついた。
優「何言ってるの？私達Ａクラスが勝つに決まってるでしょ？」
なにをバカなと鼻で笑う

貴「よく分かっていないようだから詳しく説明するよ」
しかし俺はは動じることもなく続けた。これに優子は腹を立てる。
優「なっ?!貴浩君私をバカにしるの!?」
霧「・・・・・・優子落ち着いて」
霧島さんに注意され優子は黙った。
貴「高橋先生。確認したい事があるんですがよろしいですか?」
俺は高橋先生の方に振り向き質問する
高「はい、何でしょうか?」
貴「先ほど私達は7試合したと思うんですが、その内の1戦で
Fクラスの土屋君が棄権しましたがそれは敗北して0点扱いになったという事でしょうか?
それでもし、このままAクラスと戦争を続けるとなると補習室送りになるんですか?」
高「いえ、あの場合は違いますね。
あの時は色々ありましたし、戦う前に棄権の宣言がありましたので、
土屋君が補習室に行く事は無いでしょう」
貴「わかりました。高橋先生ありがとうございます。
まず、木下優子、佐藤美穂、久保利光、不知火刀麻、木下命、吉井明久」
俺は先ほどの勝負に出場したAクラス、Fクラスの一部の人間の名

前を挙げた。

優「・・・・・私達が何？」
落ち着いた声で優子が聞いた。

俺は、特に感慨もなく答える。

貴「いま挙げた6人は戦死者だ。つまり、戦争が終わるまで補習室行きだな」

優「あ・・・」
優子は声が出ない。

貴「加えて、Aクラスのなのは腕輪を使って一部点数を消費しているし、
先ほどなのは本人が言ってたけど
今日転入した来たのだから基本的なことしか戦争についてわかっていない」
言われて、何かに気づいたように口を開く優子。

優「楓だって・・・」
優子は突破口を開こうと口を開ける。

貴「確かに楓は優子との勝負で点数を減らしいる。でも、
俺たちFクラスは姫路さんは一瞬で決着をつけたし、
ムッリーニは先ほど高橋先生が言ったように戦死扱いじゃないから無傷。
俺だって数学は少し減ったけど他の教科は減っていない」
優子が何か言おうと口を開けるが
優「ぐぅ・・・・・」

何も言えなくなる。

貴「そして、一番致命的なのは霧島さんだよ」

優「代表が？　なんで・・・・・」
いまいち掴めず聞き直すが、そこで優子が聞き返してきた

貴「優子、代表の日本史の点数は何点だ？」

優「え？　さあ、暗記ものは得意だって聞いたから４００点くらいは・・・」
軽く思案して答える優子。

霧「・・・・・・優子」

優「代表？」
ここで霧島さんが口を挟んだ。

霧「・・・・・・今の私の日本史の点数はそんなにない」

優「だ、代表？何を言って・・・」
優子は意味が分からないようで、首を傾げる。
見かねた俺がヒントを出す。

貴「優子、代表が受けた最新の日本史のテストはいつだ？」

優「振り分け試験の・・・」

貴「いや、さっき受けていただろう？」

優「・・・あ」
優子の顔が青くなる。
霧「・・・・・・今の私の日本史の点数は１００点。
　総合科目も３００点ほど減っている。たぶん、今の姫路とあまり差はない」
霧島さんが淡々と述べる。
貴「加えて、Ａクラス戦開始した時から、今この場に砂原さんはいないよね？
　何か理由があって休んでいるんだろ」
優子は何かに気づいたように口を開く
貴「だから今、２年生の成績上位１０人の内Ｆクラスに楓と姫路さんが２名いるから、
　残り８人はＡクラスにいるわけだけだ、もしここで戦争を続行するのなら
　その８人の内、優子を含め４人が補習室送りになるし砂原さんが欠席でいなくて、
　なのははまだ召喚獣の操作には慣れていない。
　代表の霧島さんは先ほど言ったけど点数が減っている。
　その上位成績の中で無傷なのは工藤さんただ１人だけだ」
俺がそう言うと優子は黙り込む。
優子だけではなくＡクラス全員が黙り込んだ
貴「わかった？今なら俺たちにも、他のクラスにも勝機がある」
優「でも、私たちは駄目でもまだＡクラスにはたくさんメンバーが

いるわ。
　Fクラスには負けないわよ」

貴「普通なら勝てないだろうね。
　でもさ、ウチのクラスの奴らが相打ち覚悟で挑んだらどうなるかな？」

優「どういうことよ」

貴「俺達は相打ち覚悟でAクラスに勝負を挑む事ができるからな」
Fクラスには相打ちできたら楓のクッキーをあげるみたいな事を言えば
やってくれるだろうしな。

貴「それに、まだ俺の数学やムッリーニの保健体育はAクラス相手でも負けやしない。
　島田さんの数学だってAクラスの上位にはかなわないだろうけど点数は減らせる。
　それに、無傷の姫路さんがいるからね。
　そして雄二が考える策がある。その策のおかげで俺たちは上位クラスの
　B・Dクラスに勝つことができたんだからな。
　だから、戦ったらこちらが勝つ可能性だって充分にあるんだよ」

明「貴浩。勝てる可能性があるなら戦えばいいんじゃないの」

雄「それは無理だ明久」

明「なんで？」

貴「理由は簡単だ。もしAクラスに勝ったとしても、その直後に
　他のクラスから戦争を挑まれると、こちらも疲労があって負け
るだろうからな。
　Eクラス相手でも負けるだろう。それはAクラスにとっても同
じ事だよ」

優「私たちがEに負けるわけが無いじゃない！」

貴「確かにAクラスならEクラス相手なら疲労してても勝てるかも
しれないけど・・・
　他のクラスには別だろう？」

優「他のクラス？」

貴「そうだよ。俺たちFクラスはB・Dクラスと戦って勝利したけど
　和平交渉にて終結という形になっているから、
　Aクラスに負けたCクラス以外のクラスが戦争を申し込む事が
できる」

優「だ、だけど」

工「優子！」
工藤さんの大きな声に圧倒され、優子は黙った。

工「そう言って、僕たちはFクラスにここまで追い込まれたんだよ
？」

霧「・・・・・愛子の言う通り」
霧島さんと工藤さんがうなだれる
それを見た俺のの目が光る。

そして俺は先ほどムッリーニから借りたスタンガンをこっそり左手で持った。

貴「このまま和平交渉になればB・Dクラスは
Fクラスが睨みをきかせることができるからおいおいと戦争はできないだろうしね。
ただまあ、こちらからケンカふっかけておいて、戦争止めましょうじゃ
お互い納得いかないよな？」

そこで今までの雰囲気を壊すかのように俺が話し出す。

俺「そこで俺から3つ程提案なんだけど・・・」

俺はヘラヘラ笑いながらそんなことを言い出した

第3問目～Aクラス戦（試合後）～（後書き）

Aクラス戦交渉でした。

この後貴浩がどう行動を起こすのかお楽しみに

第3問目～Aクラス戦（和平交渉）～（前書き）

皆さん『バカと俺たちの召喚獣』を読んでいただきありがとうございます

皆さんのおかげでＰＶが４００００アクセス、ユニークが５５００人を
超えました。

これからもよろしくお願いします。

第3問目～Aクラス戦（和平交渉）～

貴「そこで俺から3つ程提案なんだけど・・・」

俺はヘラヘラ笑いながらそんなことを言い出す。
雄二は怪しい気配を感じたみたいで、しかめっ面で俺に訊ねる。

雄「なんだ？貴浩、何を・・・・・・」
俺は近づいてきた雄二に対して
先ほど用意したスタンガンを食らわせた

ビリッ

すると雄二は感電し気絶した

霧「・・・・・提案って何？」

貴「1つ目は霧島さんが戦争前に言っていた事を聞く。
確か『何でも1つ言う事を聞く』だったよね？」

明「そ、そんな事勝手に決めたら駄目だよ貴浩。
ちゃんと姫路さんや楓にも聞かないと・・・」

貴「大丈夫だ。おそらく2人には何の被害は出ない」

明「そ、そうなの？」

貴「ああ、まあ俺の話を聞いといてよ」

霧「・・・・・・・いいの？」

貴「ああ。かまわない。そして２つ目は俺たちＦクラスは１ヶ月間はどのクラスにも
　戦争を持ち掛けない。またＡクラスに至っては３ヶ月は持ち掛けない事にする」

優「・・・・・・それで３つ目は？」

貴「３つ目は、毎回とは言わないがＦクラスのメンバーをＡクラスの人たちと
　一緒に勉強させて欲しい。また、勉強をＦクラスに教えに来て欲しい。っていうのがある」

優「何それ？どういうこと？」

貴「ぶっちゃけ、俺が戦争を始めた理由は楓と命、姫路さんの体調を思って始めたんだ。
　それにＦクラスの奴らが成績向上することは学園としても良い事だろ。
　だからＡクラスに行って一緒に勉強させてもらうか、
Ａクラスから数名Ｆクラスに来てもらい勉強を教えて欲しいって事」

優「それだと私たちにはメリットが無いと思うのだけど。
　それにＦクラスの人達がきたら授業が妨害されると思うのだけど」

貴「それはメリットはあると思うよ。

まず、Fクラスのメンバーが Aクラスの授業を妨害したら、今後Aクラス代表の許可なしには
Aクラスへの入室を許可しないようにすればいいし、
Aクラスの人達がFクラスの奴等に勉強を教えるのは大変だろうけど、
勉強は人に教えた方がより理解できるからAクラスの人達の成績向上にも繋がるからね。
それに、個人的だけど、優子は自分の目で秀吉や命の監視ができると思うけど
Aクラスの人達はどうかな？」

俺が良い終わると周りが静まった

そして

霧「・・・・・・私は織村の提案を受け入れてもいいと思う」

優「だ、代表！？」

霧「・・・・・・もしこのままFクラスと戦って勝っても
他のクラスとの連戦になっていずれは負けてしまうし、1ヶ月も経たない内に
私達Aクラスが負けたとならばAクラスの威厳を失ってしまうから、
織村の案に乗った方がいいと思う」

工「僕も代表の意見に賛成かな」

霧「・・・・・・優子」

優「代表、アタシたちは代表の決めたことなら従いますよ？
　アタシたちは代表のことを、霧島翔子を信じてますから。ねえ！？　みんな！」

優子の声に、次々賛同の声をあげるＡクラス生徒。

霧「・・・・・・ありがとう、みんな」

霧島さんはお礼を言って、小さく微笑んだ。

Ａクラスが話し合っている間に雄二が目を覚ます。
そこで俺は今まであった事を話した。

そして俺は頃合いを見て、口を挟んだ。

貴「交渉成立で良いのかな？」

霧「・・・・・・それでかまわない」

貴「じゃあ、霧島さん１つ目の提案をどうぞ」

俺がそう言うと霧島さんが頷いた

するとムッリーニがカメラを取り出していた

霧「・・・・・それじゃあ・・・雄二、私と付き合って」
皆がいる場で霧島さんは雄二に告白した。

雄「やっぱりな。お前、まだあきらめてなかったのか」

霧「・・・・・私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

やはりか・・・。
俺は楓から何となくはそういう風な感じだと聞いていたので大きくは驚かなかったが、
やはり多少は驚いてはいる

雄「その話は何度も断っただろ?他の男と付き合う気は無いのか?」

霧「・・・・・私には雄二しかいない。他の人なんて興味ない」

雄「・・・拒否権は?」

霧「・・・・・ない。約束だから」

工「代表よかったね」

優「おめでとう代表」

楓「翔子ちゃんおめでとう」

命「翔子ちゃん良かったね」
工藤さんや優子、楓や命が霧島さんに近づいてきた

霧「・・・・・ありがとう／／／」

霧島さんは少し照れくさそうだった。

貴「霧島さんおめでとう。雄二と仲良くね、2人の仲を応援するよ。
それに、俺でよかったら相談でもアドバイスでもするよ。
・・・まあ俺にはそんな経験無いけどね」

霧「・・・・・・織村もありがとう」

貴「あと霧島さん。俺のことは名前でいいよ。
じゃあ3つ目の提案は来週からの実行でいいかな?」

霧「・・・・・・わかった。それで良いと思う」

貴「了解です。何かあったら俺に連してくれるかな。
俺の電話番号は雄二が知ってるから」

霧「・・・・・・わかった」

ガラッ

すると教室の扉が開く音がする

鉄「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」
そこには生活指導の西村先生（鉄人）が立っていた

明「あれ?西村先生どうしたんですか?」

鉄「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようかと思ってな」

貴「西村先生。今我がFクラスと言いましたが・・・」

鉄「ああ、今度から福原先生に変わって俺に担任が変わるそうだ。
　これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ」

F「「「「「何ぃいいいいいい！？」」」」」

クラスの男子生徒全員から悲鳴があがる

鉄「いいか。確かにお前等はよくやった。Fクラスがここまでくるとは正直思わなかった。
　でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では
　強力の武器の1つなんだ。だからないがしろにしてもいいものじゃない」

うわぁ、全て正論だから何も言い返せないな。これは・・・

鉄「特に吉井、坂本、織村兄は念入りに監視してやる。
　なにせ、開校依頼は初の《観察処分者》とA級戦犯、要注意人物だからな」

貴「ちょっと待ってくださいよ。俺が何をしたというんですか！？」

鉄「お前はこの間、吉井と一緒にBクラスとDクラスとの間に大きな穴を作っただろうが！！」

言い返せない

明・貴「「だけど、そうはいきませんよ（いかない）！
　なんとしても監視の目をかいくぐって今まで通り楽しい

学園生活を過ぎしてみせる！」」

鉄「・・・お前らには悔い改めるという発想はないのか」

鉄人のため息混じりの台詞。

鉄「とりあえず明日・明後日は休日だから仕方ないとして
来週からは授業とは別に補習の時間を設けてやろう。
まあ休日はゆっくり休むといい」

鉄人は言い終わると教室を出て行った。
俺は鉄人に用があるので追いかけていった。

鉄人にあることの許可をもらい戻ってくると、
明久は島田さんと姫路さんと何か話しているのが聞こえた。
どうやらこの後どこかに行くらしい。
そして雄二はというと・・・

霧「・・・・・・じゃあ雄二今からデートに行く」

雄「な！？ま、待て翔子」

霧「・・・・・・待たない」

貴「あ、ちょっと待って霧島さん。もう少しだけ雄二貸して」
俺は雄二に用があるので少しだけ待ってもらう

雄「た、貴浩ありがとう」

霧「・・・・・・」
霧島さんが俺を睨む。

貴「ちょっとだけだからさ」
俺は霧島さんにそう言うとFクラスのメンバーがいるほうに振り返る。

そしてFクラスのメンバーにある事を聞いた

貴「Fクラスの男子メンバーに聞くんだけど、明日教室の大掃除をしようと思うんだが
明日来れる奴はいるか？これは強制じゃないからな。
来れる人だけ来て手伝って欲しいんだけど。
ちなみに今決定している参加者は俺と明久、雄二、秀吉、ムッリーニの5人だけだ」

俺がそう言うと、明久、雄二、秀吉、ムッリーニは驚いた表情でこちらを振り向いた。

明「ねえ貴浩。今初めて聞いたんだけど僕」

雄「俺もだな」

秀「ワシもじゃ」

ム「・・・・・（コクコク）」

貴「それは、今初めて言ったんだもの。手伝ってくれるよな」

秀「まあ良いがの」

ム「・・・・・・（コクコク）」

明「まあ僕もいいけど」

雄「・・・・・・翔子に付き合わされるよりはマシか（ボソ）」

貴「雄二は？」

雄「まあ良いだろ。許可もらっているのか？」

貴「ああ。先ほど鉄人に許可をもらった。他は誰か手伝ってくれるか」

俺がＦクラスのメンバーに聞くと須川君と近藤君が手伝ってくれると手を上げてくれた。

他のメンバーはやってはくれないようだったが・・・・・・。

第3問目～Aクラス戦（和平交渉）～（後書き）

一応和平交渉はすみました・・・

さて次回からは少しオリジナル話をしたいと思います

第3問目～Aクラス戦（和平交渉後）～

貴「じゃあ明日の午前１０時にFクラスに集合って事でよろしく」

明・雄・秀・ム・須・近『わかった（のじゃ）』

そう言うとFクラスのメンバーは帰っていった。

明久は島田さんと姫路さんにどこか連れてかれそうになっていたので一声かけた

貴「明久。今日も飯食いに来い。そうだな。7時ぐらいまでには来いよ」

最近は明久と勉強しているので夕飯も一緒に食べる事が多くなっているので

今の行動は俺にとっては当たり前のようになった。

ついでに一応助けておく

明「わ、わかった。7時だね。ちょっと姫路さん、島田さん引っ張らないd―」

明久が2人に連れられて教室を出て行った.

貴「霧島さん悪いけど明日は旦那借りるね。利子つけて返すから」

霧「・・・・・・別にいい。明日私も手伝う」

貴「え?良いの?手伝ってもらって」

霧「・・・・・・良い。雄二と一緒に居たいから」

貴「じゃあお願いするね」

霧「・・・・・・わかった。じゃあ雄二今からデートに行く」

雄「し、翔子。ま、まて」

雄二は霧島さんに引きずられて出て行った

貴「悪いけど秀吉。明日手伝ってな」

秀「任せるのじゃ。掃除は得意な方じゃからの」

命「私も手伝うよ」

楓「兄さん私も」

貴「じゃあ2人には皆の分の弁当作ってきてもらってもいいかな?材料費は俺が出すから」

楓「はい、わかりました」

命「任せてください」

秀「そういえば姫路達は呼ばなくて良かったのかの?」

楓「そういえばそうですね」

貴「ああ。姫路さんを呼ばなかったのはただ単に明日の掃除は酷かなと思ってな。
だってあのFクラスの教室の掃除だからな。
体の弱い姫路さんや楓に命にはきついと思ってな。
それで島田さんを呼んだら姫路さんだけ仲間はずれみたいで悪いじゃない。
だから、2人は呼ばなかったんだよ」

命「それで私たちは掃除ではなくて弁当を作るんですね」

貴「そういうこと」

優「なら、姫路さんや島田さんにも料理を作らせたらいいじゃない」
優子がそう言うと、俺、秀吉、楓、命は震えだした。

秀「姉上よ。恐ろしい事を言うのではない」

命「そ、そうだよ優姉」

秀吉と命は優子にいいそる
俺はあの時のフラッシュバックで物凄く身体を震えていた

楓「に、兄さん。落ち着いてよ。大丈夫だから明日は私と命ちゃんで作るから」
と俺を励ましていてくれた。
あの時の料理はもう凄いとしか言いようがなかった

優「う、うん。わかったから、もうその話はしないから2人とも落ち着いてよ」

優子や周りにいた工藤さん、なのは、刀麻は
なんのことだかわからないといったように首を傾げていた。

良いんだよ。皆はあの味を知らなくて・・・

刀「俺も明日手伝おうか？男手がほしんだろ？」

貴「マジで！じゃあ頼むよ！」

工「僕も手伝うよ。Ｆクラスって面白そうだしね」

優「私も手伝ってあげるわ」

貴「本当に。助かるよ」

な「私も午後からで良かったら手伝うよ。午前中は今日届く荷物の整理したいから」

貴「良いのか？そっちは大変だろ？」

な「いざとなったらタカ君や楓ちゃんに手伝ってもらうから」

貴「ん？ああ！？そういえば今日から一緒に住むんだったな。忘れてた」

楓「に、兄さん・・・」

な「そうだよ。これからよろしくね」

貴「なんか俺の周りの女子率が高くなった」

工「良かったね。ハレームだよ」

秀「もしかしてワシは入っておらぬじゃろうな」

貴「当たり前だろ。秀吉は男だろ」

刀「え!?この人は女性ではないのか?」

な「え?女の子じゃなかったんだ」

するとなのはと刀麻が秀吉の性別に驚いているようだ

秀「ワシは男じゃ!!」

秀吉が大声をあげて宣言した

な「ごめんごめん。あまりに可愛くてね」

刀「わ、悪い」

秀「良いじゃよ別に言われ慣れておるからの」

秀吉がいじけてしまった。秀吉が不憫だなと感じてしまった

な「そういえば、同じ木下って名前だけど姉妹なの?」

となのはが質問してきたのでそちらは優子達に任せ、

俺は秀吉を励ましに行った。

そして秀吉を励ました後、
俺は工藤さんの前に行った。そして
貴「すみませんでした！！」
俺はすぐさま頭を床に擦り付けながら土下座した
工「な、なに？どうしたの？」
工藤さんは何の事だかわからず驚いているようだった。
貴「今さっき偶然にも工藤さんの胸を・・・／／／」
工「ッ！？／／／」
工藤さんも俺に言われて思い出したらしく顔を真っ赤にしている
貴「その見たってことで何か責任をとりたいのだけど・・・」
工「いや、いいよ別に。アレは僕の方にも責任があったし・・・」
貴「そういうわけにはいかないよ」
優「なら貴浩君は愛子の言う事を１つ何でも聞くってのはどうかしら？
　さすがに女子の胸を見ておいて何もないっていうのは虫がよすぎるから」
貴「俺は工藤さんがそれで良いならそれで良いよ」
工「じゃあ優子の言った僕の言う事を何でも聞く事で許してあげる

よ。

だけど、今すぐじゃなくて良いかな？」

貴「ああ。それは工藤さんに任せるよ」

俺は工藤さんの言う事を１つ聞くという事であの件について責任をとるという事になった。

そして俺たちは一緒に明日の弁当の買い物をしてから帰った。

その前にに刀麻の電話番号などを登録しておいたがな

皆と別れてからはなのはの荷物がちょうど届き、

空いてる部屋に荷物を運び、なのはは楓と一緒に荷解きをしてから

明久が夕飯を食べに来てからなのはに明久の事を紹介したりして１日を過ごした

【刀麻の電話番号・メールアドレスを獲得した】

【なのはが一緒に住む事になった】

オリジナル　～　Fクラス掃除　～（前書き）

今回はオリジナルの話になります。

オリジナル　～　Fクラス掃除　～

――休日の朝

貴「楓、じゃあ学校に行ってくるな。命と一緒に弁当頼むな。
　なのはも出来たらで良いからな。無理はするなよ」

俺は楓となのはに一声掛けてから荷物を持って学校へ向かった。
今日は昨日放課後に言ったようにFクラスの教室の大掃除をするのである。
あの教室のままではいずれ楓と命が倒れてしまう危険性があるからなという事で、俺は皆より早めに学校へと向かった。

貴「失礼します。鉄じ・・・・西村先生いますか？」

俺は職員室の扉を開けて鉄人を呼んだ。
今日は休日にも関わらずかなりの先生が職員室の中にいた。

鉄「どうした織村兄」

貴「いえ、昨日放課後に言ったようにFクラスの掃除をするという事で
　学校に来たということを伝えに来ました」

鉄「わかった。まあ頑張る事だな。
　というかお前はいつもこうだと良いのだがな」

貴「自分はいつもこうですよ」

鉄人は今の俺の態度に呆れてため息をついた。

鉄「まあ帰るときは俺に一言いれてから帰るんだぞ。
あと、何か困った事があれば言って来い。先生達は職員室にいるからな。
ただし、馬鹿な事だけはするなよ」

鉄人はそう言い終わると職員室の中に戻って行った。
俺もFクラスに向かって行った。

そして10時になると皆揃っていた。今日手伝ってくれるのは、
Fクラスからは明久に雄二、秀吉、ムッリーニ、須川、近藤の俺を入れて7人、
Aクラスからは霧島さんに優子、工藤さん、刀麻、そして何故か久保や、椎名さん
昨日いなかった砂原さんの7人が参加してくれた。

貴「砂原さんどうして手伝ってくれるの？
昨日いなかったから話すら聞いてなかったと思うんだけど」

久保や椎名さんは昨日あの場にいたから手伝ってくれることはわからないでもないんだが
昨日いなかったはずの砂原さんがここにいることが気になる

砂「ター君そんなことは簡単だよ。私はツッチンほどじゃないけど情報網があるんだよ。

そして、こんな面白そうな情報をほおって置く事なんてしないさ。

だから来たのさ」

相変わらず砂原さんは凄いニックネームで呼ぶなぁ。

ター君⇒俺、　ツッチン⇒ムッリーニ

貴「・・・わかった。じゃあ今日はよろしくな。

そして、久保もわざわざありがとうな」

久「いや、気にする事はないよ。今日は頑張らせてもらうとするよ」

久保がそう言うとチラチラと明久の方を見ていたが気にしないことにした

貴「えっと、確か椎名さんだよね。今日はよろしくね」

と俺がそう言いながら近づくと何故か砂原さんの後ろに隠れてしまった。

あれ?俺何かしたかな?

俺は不思議に思って砂原さんを見ると

砂「ごめんね。ユッキーは恥ずかしがり屋でね」

砂原さんがそう言うと

椎「・・・・・今日はよろしくです」

砂原さんの後ろの方でオドオドしながら挨拶してくれた。

須・近「「儚げな美少女来たぁあああああ！！」」
といきなり須川と近藤が叫んだので椎名さんが怯えてしまった
秀「これ、２人とも静かにするのじゃ。
　椎名が驚いているではないか。椎名よ大丈夫かの？」
そこで秀吉が出てきて先ほどの２人に注意すると
椎名さんを心配して近づいた
椎「ありがとう。えっと・・・」
秀「ワシの名前は木下秀吉じゃ。そこにいる木下優子はワシの姉じゃ」
とそこで秀吉が椎名さんに名前を教える
椎「ありがとう。秀吉さん」
貴「そうだな。掃除をする前に軽く自己紹介ぐらいしとくか」
そこで今いるメンバーで自己紹介をする事にして、
自己紹介が終わると、俺は持ってきていたゴム手袋とマスクを人数分配った。
多分大丈夫だと思いたいが念のために健康面に考慮してマスクを用意した。
貴「じゃあ、掃除を始めますか」
皆『おおぉ！！』
まず教室の窓を全開に開けてから教室内にある卓袱台や座布団教卓

などを廊下に出した。
そして、女性陣には座布団を屋上で干してもらうように頼んで、
男性陣は教室に残ってもらった。

貴「じゃあ男性陣はこれから、このいかにもやばそうな畳をどかしてみようと思う」

明「ねぇ大丈夫なの？腐ってなんかないよな」

雄「さすがに。それは無いと信じたいな」

やはり皆心配しているようだ
じっとしていてもしょうがないので俺たちは一斉に畳を持ち上げた。
すると・・・

秀「腐っておるのじゃ」

ム「・・・・・・酷い」

貴「なんか、今日掃除を実行して良かったと思うよ」

雄「だな。まさかここまでとは・・・」

案の定というか畳は１／３程度腐っていた

明「このまま教室を放置してたら姫路さん達じゃなくても体調を崩したと思うな」

明久がそう言うと皆頷いた。

貴「じゃあひとまず腐っている畳は処分するという事にして、残りの畳は一度干すか。

で、教室の床を箒ではわいてから雑巾で拭くみたいなみたいな感じで良いかな?」

俺が確認をとるように皆の方を振り向くと同意したように頷く。

貴「じゃあ分担するとしますか。

まず腐った畳を何処に処分すれば言いか先生に聞いてから処分する人が2人

次に、畳を屋上に持っていくのは2人、これは悪いけど女性陣に手伝ってもらおう。

で、次に教室を箒ではわく人が2人いればいいだろう。

窓を拭く奴が1人コイツは他のサポートもしてもらうかな。

最後に雑巾で拭く人が2人になるかな。

誰がどれするかはジャンケンで良いよな」

俺が皆に確認するとと皆頷いてくれた。

多分、役割の中で一番嫌なのが雑巾で拭く係りだろうな。

皆おそらくしたくないんだろうな。

貴「じゃあ、行くよ。　最初はグー、じゃんけん」

おれのかけ声のもとじゃんけんをした。そこで役割が決定した。

畳の処分をする係：ムッリーニ、刀麻

畳を干す係：俺、秀吉

箒ではわく：明久、雄二

床雑巾で拭く：近藤、須川

サポート：久保

という風に決まった。
須川と近藤は絶叫していたがじゃんけんに負けたのが悪い。

貴「さてと分担してやりますかね」

皆（須・近以外）「了解！」

貴「須川に近藤。まあドンマイ。後でいい事あるよ」
俺はそう言い残すと秀吉と一緒に畳を屋上に運ぶため教室を出た。

畳の数は全部で６０畳ぐらいある。そして畳が腐ってあるのを除くと

貴「持っていくのは４０畳位か」

秀「結構あるのう」

貴「そうだな。じゃあ運ぶとするか」

秀「そうじゃな」

自慢じゃないが俺も秀吉も力はあまり無い。俺は少し筋肉質ではあるが
これは楓を守る時だけ発揮されるので通常時は非力なんです・・・・
という事で俺は秀吉と一緒に１畳づつ運ぶことにした。

まず１畳、屋上に畳を運ぶと、屋上にはＦクラスの座布団が干されていた

工「貴浩君に秀吉君。こっちは終わったよ」
と工藤さん達がこちらに寄ってきた

霧「・・・・・終わった」

砂「それで次は私たちは何をすれば良いのかな?」

貴「じゃあ俺と秀吉が畳を屋上に運んでくるからそれを運んで干してくれるかな」

優「それは良いけど。教室の方は手伝わなくて良いの?」

貴「それは、良いよ。ってか行かない方が良いよ。・・・・・本当に」

秀「そうじゃな。女性陣は教室には行かない方がよかろう」

工「どうしたの?もしかして畳が腐っていたりして」
工藤さんが笑いながら言ってくる

優「流石にそれはないでしょ」

貴・秀「・・・・・・・」
俺たちは工藤さん達から目を背けた

優「え?うそ。本当だったの?」

砂「流石だね。やっぱり面白い事が起きたよ」

椎「鈴ちゃん。いいすぎだと思う」

霧「・・・・・・それ本当？」

俺と秀吉は頷いた。

そこで、その話を止めて霧島さんと優子、椎名さんは屋上で畳を干すように頼んで、

工藤さんと砂原さんは俺と秀吉と一緒に畳を屋上に運ぶのを手伝ってもらった。

そんな事をしていたら楓と命となのはが弁当を持ってきてくれたので休憩として全員で屋上で食べる事にした。

食事中、須川と近藤が涙を流しながら食べていたがそんなに嬉しかったのか・・・

食後は楓と命、なのはも加えて掃除を行い、ある程度は綺麗にする事ができた。

掃除が終わった所で解散した。

後の不備は俺がまとめて後日学園長のところに持っていく予定だ。

オリジナル　～　Fクラス掃除　～（後書き）

一応これで掃除編は終わりです。

最後の方はすみません・・・・・・

次回からももう少しオリジナル話になります。

ある1日の勉強会（オリジナル）（前書き）

今回の話はオリジナルの話になります

ある1日の勉強会（オリジナル）

――2年になって試召戦争中のある日

貴「今日も勉強するぞ」

今日は俺の家で明久と勉強している。最近ではこれが日課になっている。
理由としては簡単で明久の成績向上が目的としている。

今日は木下3姉妹と一緒に勉強をしている。
今、成績がやばいのは明久と秀吉の2人なので重点的に上げている最中だ。

楓と優子はAクラスの成績で、俺と命はCクラス並の成績。
（俺は楓以外には点数を隠している状態。理由はオリキャラ紹介1で）
そして今は明久に勉強を皆で勉強を教えている最中だ。秀吉は休憩中である。

明「じゃあ、皆よろしくお願いするよ」
教師役として俺、楓、優子、命の4名で教える事にしている

命「私からは社会について教えるね」

明「お願いします」
命が教えている間は俺たちも一緒に考える事にしている

命「まず簡単な所から、794年に日本で起きた事はなんですか？」

これは語呂さえ覚えていれば簡単だろう。

明「えっと、なくよ！泣くよだ！」

命「そうです」

明「泣くよヒ〇ラー理想郷！」

貴「どういう事！？」
思わずツッコんでしまった

明「ヒトラーが日本に理想郷を作って泣いた年だよね」

優「すっごい歪んだ歴史ね」　ちなみに正解は【平安京遷都】

命「それじゃあ１１９２年は？」

明「いい句になったね松尾芭蕉」

貴・優・楓『・・・・・・・』　正解【鎌倉幕府成立】

命「・・・・・・・うん、歴史は止めて地理にしようか」

貴・優・楓（（（諦めた！？））））

命「じゃあ都道府県からいくね。ここはどこですか？」
そして命が日本地図を指差して北海道を指差した。

明「北海道」

命「安心しました。では次はここは？」
次は日本の東京を指差した

明「ＴＯＫＩＯ」

命「発音としては間違っていないんですがジャ〇ーズ事務所っぽいですね」

命は続けて問題を出す

命「気を取り直してここは？」
次は四国の香川県を指差した

明「この島の中で１番勢力が小さいけど大逆転を狙ってる所だよね」

命「香川県です」

明「頑張るんだ香川！！」

優「大きなお世話よ！！」

優子がツッコむ。

命「では次は世界に目を向けたいと思います。この国は？」
日本を指差した

明「ジャぱん！」

貴「・・・正解だけど一流のパン屋を目指す人が多そうなイントネ

ーションだな」

命「じゃあここは？」
命はあきらめずオーストラリアを指差した

明「ムー・大・陸っ！」

楓「伝説の大陸が地図に載っちゃいましたね・・・」

命「最後にここは？」
命は最後に南米のチリを指差した

明「ちょっと待ってね。今、語呂を思い出すから・・・」

命「地図に語呂なんてあるんですか？明久君は凄いですね」

貴「そんなの無いからな。正気に戻るんだ命」

命がトリップしかけている

明「思い出したよ。『運命をも貫く鋭い一撃で灰燼へと帰すがいい！』だからチリだね！」

命「そうです。凄いですよ明久君！」

貴「・・・合ってるけど語呂は合ってないよなそれ・・・」

・・・・・命の様子がおかしくなったので教師役交代です。

楓「では今度は私が国語を教えます」

次は楓が教師役だ。ちなみに優子と秀吉は命についている。

楓「では漢字の読みについてです。これは〔将軍〕なんて読みますか？」

明「バカにしないでよ。〔ショーグン〕でしょ」

楓「あっ正解です。普通の読みは大丈夫そうですね」

明「モチのロン！」

楓「では次はこれです〔流石〕」

明「えっと、流れる石だから、〔ストーンストリーム〕！」

貴「何だ！？その魔法の技みたいな読み方は！」

楓「正解は〔さすが〕です。じゃあこれは〔五月雨〕はどうですか？」

明「５月？」

楓「５月には不思議がいっぱいですから。ヒントは天気です」

明「わかった。〔ハルマゲドン〕だね！」

楓「ヒント聞いてましたか！？」

明「ハルマゲドンっと言えば５月の風物詩だよね？」

貴「終末戦争のオンパレードってどんな季節だよ！？」

楓「正解は〔さみだれ〕です」

明「さみだれ、さみだれ・・・？さみ　だれ？」

楓「五月雨そのものを知らなかったんですね・・・キミ誰？みたいに言われましても・・・」

楓はそう言うと白旗と言わんばかりにこちらを見た。

優「しょうがないわね。吉井君。次は私が数学を教えるわ」

明「４６４９！」

優「いいわよっ！わざわざ数字に答えなくても。
今までの流れを見るからに吉井君は重要な基礎が抜けちゃっている傾向があるわね。
だから、まずは九九を暗唱して貰いましょうか」

明「優子さん！？僕だって九九ぐらいは余裕だよ。じゃあ言うよ。
いんいちがいち、いんにがに、いんさんが・・・・
・・・・いんくがく、にいちがに、にぃにぃが死―」

優「何か今、お兄さんが死ななかったかしら？」

明「何言ってるの？」

優「あ・・・ごめんなさい続けてちょうだい」

明「えっと・・・にぃにぃが死、兄さんがろくでもない―」

優「やっぱりお兄さんに何か合ったわよねぇ!?」

明「さっきから何言ってるの?」

優「ごめんなさい・・・何でもないわ・・・」

明「兄さんがろくでもない、妊娠が発覚、にーごじゅう・・・にはちじゅうろく、
　肉重要、さんいちがさん、さんにがろく、サザンクロス」

優子・・・ツッコむの耐えてるな・・・
優子は自分の太ももをつねりながらツッコむのを耐えていた

明「三枝が師匠、産後駐屯、さぶろく懲役１８年・・・新一が死、死人が８、
　資産が銃に獅子注目、死後移住――」

明久以外（（（（かなりの確立で物騒になってきてる!?））））

明「ろくに職につかずに奥さん１８なんですって、
　ロックシンガーに純真ささげているんですって、老後も散々ご苦労されたそうね」

明久以外（（（（と思ったら今度は会話になった!?））））

明「・・・七三分けって２１からだよね、死地に親戚が２８人、七五三　十五・・・

発破６４人に被害、はっくしょーい・・・そして最後は『くくっ　８時祐一を殺す』
どうかな。僕のオリジナル九九(くく)覚えやすいでしょ」

優「その文章を覚えている明久君の頭脳は確かに評価に値するかもしれないわね・・・
では、次は普通に問題出すわよ。問題、Ａ君は千円札を持ってコンビニに買い物に行きました」

明「待って！Ａ君は千円で買い物なんて羨ましいよ」

貴「そんなことはどうでもいい！！」

優「わかったわよ。５００円で、Ａ君はコンビニで１００円のジュース２本と
１２０円のパンを２つ買いました！さてお釣りはいくらでしょうか？」

明「もったいないな。ジュースなんて買わず水道水で良いじゃないか」

優「黙って計算しなさい！」

明「わ、わかったよ・・・・・・えっとここで繰り上がって因数分解して・・・」

優「因数分解！？」

明「Ｘが７万５千になるからＹは４万２千と思いきやここで一度全て０になる！」

優子はその計算方法が気になって明久の後ろから覗いていた。

明「答えは６０円だね」

優「！！・・・・・・・・・正解」

優（ねえ貴浩君なんで今ので正解するのよ！凄く間違ってる気がするのに正解されたら
　ツッコメないじゃないのよ！？）

優子は小声かつ涙目で俺に突っかかってきた。

貴「よし、数学はこの辺にしておこうか」

明「そうだね。数学は教わる事もなさそうだしね」

明久以外「「「「「・・・・・」」」」」

貴「じゃあ俺が保健体育について教えるぞ。では問題です。
　人体の感覚機能について一般的に五感と呼ばれるものを言え」

明「なんだ。そんなの簡単だよ。透視、サイコメトリー、テレパシー、予知、霊能力だよ！」

貴「何その多才能力（マルチスキル）！？いや、そんなのはいいから味覚とか一般的なのを頼む」

明「あ、そういう事。じゃあ、味覚、視覚、聴覚、触覚、嗅覚、金角、銀角、牛角」

貴「西遊記の敵キャラ潜んでた！？そして焼肉屋の名前も！？
　・・・まあいいや。ではそれらはそれぞれ何処で感じますか？」

明「舌、目、耳、肌、鼻、第六感だね！」

貴「超感覚（タネワレ）で敵の存在に気づいたんだな・・・」

俺は一度ため息をついて明久に言った

貴「お前よく進級できたよな」

明「え？どういうこと！？」

貴「今日教えてわかった事はお前がとてもバカだってことだな。
もう時間が無いから、日本史に絞ってやるぞ。
語呂は覚えているらしいからな。その語呂をひとまず直す」

そうして秀吉は楓と命に任せ、俺と優子が明久に夜遅くまで日本史を叩き込んだ。

本当に戦争に勝てるのかがこの時だけは物凄く不安だった

ある1日の勉強会（オリジナル）（後書き）

今回は生徒会シリーズとのコラボでした

優「なんかとても疲れたわね・・・」

貴「ああ・・・」

明「2人ともありがとう」

命「成績上がっていると良いね明久君」

次回もオリジナルになります。

Aクラスとの戦争後のある日の授業での事（前書き）

今回もオリジナルの話になります

今回はAクラスでおきた話を書きました

Aクラスとの戦争後のある日の授業での事

Aクラスとの戦争が終わってから数日が経ったある日
俺たちFクラスのメンバーは時々Aクラスと合同で授業を行う事になった
これは、Aクラスとの和平交渉で決めた事なので批判はない。

そして今日もAクラスで授業をさせてもらっている。
といっても俺たちはAクラスの教室の後ろの方で卓袱台と座布団といった
Aクラスにはミスマッチな状態で授業を受けている。

さすがにFクラス総勢50人と元々いるAクラス50人のシステムデスクはないので
こういう扱いとなっている。

Aクラスと授業を一緒にはじめてまだ2日と立っていないがFクラスのメンバーは
授業の妨害をせず静かに授業を受けていた？（ほとんどが寝ているが・・・）

そんなある日、Aクラスでは自習の時間だった。
俺たちFクラスのメンバーも一緒に自習している。

Aクラスの人達はそれぞれ先生からもらっている問題集を解いていたりしている。
一方Fクラスのメンバーはその一部を除くメンバーは寝ていた・・・
・・・

雄二は霧島さんに勉強を教えてもらっているらしい。
最初は雄二は断っていたがAクラス戦でのあの点数だったことで
本人曰く「嫌だが仕方がなく教えてもらう」らしい。
しかし、こちらから見ると嫌そうには見えないのだが・・・・・・

秀吉は楓から現国について学んでいるようだ。
元々楓はAクラス級の実力があるから秀吉に勉強を教えているようだ

命は優子に捕まり、勉強を教えられている。
優子曰く、「私のそばにいれば害はないでしょう」らしい。
命はドンマイだな。優子の前では俺はサポートできない。怖いから・・・

ムッリーニは最初は工藤さんと保健体育の話をしていたが、
ムッリーニが色んな意味で危なそうだったのでなのはと代わって貰い
保健体育以外の勉強を教えてもらっている

島田さんは姫路さんに現国を教えてもらっている。
島田さんは日本語さえちゃんと読めれば成績は伸びるからな

そして俺と明久は2人で日本史の勉強をしている。
日本史は明久の得意科目になっているので重点的に伸ばしている。
俺も日本史は得意な方なので明久に教える事で点数を伸ばそうと考えている。

俺が明久と勉強しているとと

砂「ヤッホーお2人とも!!勉強頑張っているかい?」
そこへ砂原さんが明久に抱きついてきた

明「さ、砂原さん!?」
明久はいきなり後ろから抱きつかれて驚いているようだ

砂「なんだいアッキー?」

明「な、何って、なんで僕に抱きついているのかな?///」
明久は顔を真っ赤にしながら尋ねる。なんて羨ましいんだ明久め・・・

砂「ただのスキンシップだよアッキー!それとも私以外の女の子の方が良かったのかな?」
砂原さんは明久に抱きついたままからかうように言った。

工「何々?何か面白いことしてるの?」

そこへ工藤さんまで現れた。

砂「アイアイ、今はアッキーとお話しているだけだよ」
アイアイって工藤さんのことか?

明「えっと工藤さんだっけ?」

工「そうだよ。キミは吉井君だったよね?」
工藤さんはニッと歯を見せて笑う。
ボーイッシュな雰囲気と相まって、その仕草はとても爽やかだった。

工「じゃあ、改めて自己紹介をさせてもらうね。Ａクラスの工藤愛子です。
　趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは７８・５６・７９、
　特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ」

なんだ!?今最後に魅力的な言葉があったような。工藤さんＢは７８なのか。
生で見たが・・・・・・俺があの時のことを思い出していると

工「ねぇ?貴浩君。今何考えているのかな?まさか僕のを見た事でも思い出しているのかな?」

貴「ま、まさか。そんな事はしないよ（何故わかったんだ!?）」

工「そうだよね。そういえばあの時のお願いまだしていなかったね」

貴「え?あ、ああ」

俺は工藤さんのアレを見てしまったのでその責任をとって
工藤さんの頼みを何でも聞くという事になったのだ。

工「じゃあね今度の休日に僕の買い物に付き合ってよ」

貴「え?そんな事で良いのか」

工「それとももっと凄いのが良いのかな?」

貴「買い物に付き合せてください!!」

砂「おっ!おもしろそうだね。ならアッキー今度の休日私たちもデ

ートしよう！」

砂原さんが工藤さんに便乗して明久にまだくっつきながら大きな声でデートに誘う。

・・・砂原さんそんな事言ったら・・・・・・

須『諸君。ここはどこだ？』

F『『最後の審判を下す法廷だ』』

須『異端者には？』

F『『死の鉄槌を！』』

須『男とは』

F『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』

須『宜しい。これより、ＫＭＦ団による異端審問会を開催する』

やはりやつらがいやがりましたよ

須『こいつの罪状を読み上げよ』

F『はっ。須川会長。えー被告、吉井明久と織村貴浩の両名は我が文月学園第２学年Ｆクラスの生徒でありながら我らが教理に反した疑いがある。

本日未明、この者はＡクラスの女子と・・・・・・』

須『御託はいい。結論を述べたまえ』

F『デートするので羨ましいであります』

須『うむ。実にわかりやすい報告だ』

やはりＫＭＦ団が出てきた。さっきまで寝てたはずなのになんで起きているんだ？

姫「吉井君。先ほどの話詳しく教えてくれませんか？」

島「そうね。キッチリ教えてほしいものね」

明久のすぐ後ろに姫路さんと島田さんの姿があった。
２人の後ろから禍々しいオーラが見えるのだが気のせいだろうか

須『さて被告。何か言い残す事あるか』

明「えっと・・・」

須「ヒモなしバンジーか鉄人に愛の告白をするか、
　俺たちからジャーマンプレッシャーを受けるか、さあどれか選べ」

明「どれも選んだら死んじゃうような・・・・・・」

貴「・・・そうだな」

姫「大丈夫ですよ吉井君。私たちとＯＨＡＮＡＳＩするだけですから」

島「そうよアキ。さあこちらに来なさい」

砂「駄目だよアッキーはこれから私とイチャイチャするんだから」

須『総員かかれぇえええええ！！』

砂原さんの余計な一言で須川たちが一斉に明久に飛び掛って行った。
俺は明久を守るべくムッリーニから借りたスタンガンを片手に立ち向った

貴・明「「ハァハァ・・・」」
俺と明久は暴走したFクラスメンバーを静かにした（気絶させた）

姫「明久君～♪」

島「アキ～♪」

2人が明久に近づいていこうとする

命「美波ちゃん、姫路さん落ち着いてください。
明久君やAクラスの皆さんの邪魔になっちゃいますよ」

島「どきなさい命！ウチ達はアキに話があるんだから！！」

姫「そうです！邪魔しないでください」

貴「2人共うるさいぞ。Aクラスとの協定を忘れたのか？」

Aクラスとの協定の1つにAクラスで勉強する時は勉学の妨げになる行動をしない。
これを破ると今後許可なくAクラスに入る事が禁止されるのである

島「これはアキのせいなんだから」

姫「そうです。ですから織村君も邪魔しないでください」

貴「・・・お前らいい加減にしとけよ」

2人が明久に近づこうとする

優「あなたたち静かにしなさい！！」
そこへ優子がやってきた

貴「ごめん優子。自習の邪魔をしてしまったな。
約束どおり俺達は今後許可なくAクラスへの入室をやめるよ」

優「そうね。でも貴浩君と明久君は今回は不問とするわ」

明「え？良いの？」

優「ええ。元はといえば鈴歌と愛子の2人に原因があるのだから。
でも姫路さんと島田さんたちは約束通りAクラスへの入室を禁止するわよ」

姫「な、なんでですか！？」

優「何でってそれは、あなた達が騒いだからでしょう。

それに貴浩くんが一度止めたのにかかわらずやめたなかったでしょう」

そう優子が言うと姫路さんと島田さんは黙り込んだ。

そうして自習が終わると約束どおりFクラスのメンバーは許可なくAクラスへの入室が禁止になった
そして今、AクラスにいるFクラスのメンバーは明久や雄二、秀吉、ムッリーニ、
楓と命、そして俺を含めた7名にのみになった。

貴「悪かったな。自習の邪魔をしてしまって」

優「良いわよ。元はといえば鈴歌と愛子の2人に原因があるのだから」

工「ごめんね。少しやりすぎたよ」

砂「ごめんごめん」

明「い、良いよ。気にしてないから」

工「話は変わるけど貴浩君。今度の休日買い物に付き合ってね」
いきなり工藤さんが話を戻してきた。

貴「ああ。わかったよ」
まあ約束だからな

命「あの明久君。今度の休日私と買い物に付き合ってもらえませんか？」

明「え?僕と?」
と命が明久にお願いしていた

優「な、なに言っているの命!?」

秀「そ、そうじゃ!?買い物ならワシらが付き合うのじゃ!!」

命「料理についての買い物がしたいから料理がうまい明久君に付き合ってもらいたいの」
秀吉と優子が反対しているが命がそういうと言葉につまってしまった
2人とも料理についてはあまりうまくないからな

明「そういうことなら僕は良いよ」

命「本当ですか!?じゃあお願いします」
明久がそういうと命は嬉しそうに答えた。

まあまだ秀吉と優子の2人が納得していないようだったが・・・

そして向こうの方では雄二が霧島さんと何か言い争っているようだが気にしない事にしておく

貴「今度の土曜日の10時にデパート前に待ち合わせで良いかな」

工「うん良いよ。じゃあよろしくね」

明「僕達も貴浩たちと同じで良いかな?」

命「うん!!」

俺は土曜日に工藤さんの買い物に付き合う事になった。
明久と命も俺達と同じ場所に行くみたいだから命のサポートができたらするとしよう。

まあ何も起こらないと良いけど

Aクラスとの戦争後のある日の授業での事（後書き）

貴「命。今回は自分から誘うとは頑張ったな」

命「う、うん／／／」

貴「まあ頑張れよ。できたらサポートしてやるから」

次回はデートの様子を出したいと思います

ある日のお買い物（デート？）

今日は以前工藤さんと約束した買い物に付き合う日だ。
まるでデートみたいだがそんなわけないだろうな
そんなわけで俺は文月デパートに向かっているところだ。
その向かっている最中に明久を見つけた

貴「よう明久！お前もこれから命と買い物か？」

明「あっ貴浩おはよう。うんそうなんだ」

そして俺達は一緒に文月デパートまで行く事にした。
一応１０時に待ち合わせにしているがさすがに遅刻するわけには行かないので
余裕を持って３０分前には着くようにしている。
そして明久と向かっているとデパート前に工藤さんと命の姿が目に入った。
しかし２人の様子がおかしい。明久もその事に気づいたらしい

ナンパ男１「ねえお嬢さん方これから俺達とお茶でもしない？」

命「ひ、人を待っていますので」

ナンパ男２「まあそんな事いわずにさ」

工「や、やめてください」

ナンパしている男が２人の腕をつかんで逃がさないようにしているのがわかった。

貴「おい！俺達のツレに何か用か？」

明「そうだね。さっさと手を離してもらえるかな」

俺達はすぐさま2人の元に駆け寄った。

ナンパ男1「ちっ。男づれかよ」

そういうとナンパしていた男達は手を離してどこかに行った

明「大丈夫命？」　貴「怪我とかはない工藤さん？」

俺達は2人の安全を確認する

工「う、うん。大丈夫だよ」

命「う、うん。なんともないよ。あ、あの明久君助けてくれてありがとう」

明「そう。それなら良かった。ごめんね怖い思いさせちゃって」

命「い、いえ。気にしないでください。そ、それより明久君。早く買い物に行こうよ」

工「そうだね。貴浩君行こう」

貴「そうだね。じゃあ行くとするかな。

あ、そうだ。どうせだし。昼はどこかで4人で食べないか？」

明「え？僕は良いけど・・・」

命「私も良いですよ」

工「僕も良いよ」

貴「なら、昼ごろ連絡するな」

俺はそういうと工藤さんと一緒に向かっていった。明久も命と行ったみたいだ。

貴「で？工藤さん買い物って何を買うの？」

工「うーんとね。まあ服とかかな」

貴「了解。じゃあ行こうか」

ちなみに今の工藤さんの服装は薄い緑色のTシャツに紺色のショートパンツという格好だ。

そして女性用の服が置かれている場所に着くと工藤さんと一緒に服を見て回る。

正直俺に服の事を聞かれても困る。

俺は服は着れれば良いので大体の服がユ○クロの服だ

工「じゃあ貴浩君試着してくるね。覗いたら駄目だよ」

貴「な！？覗かないよ！！」

工藤さんはそういうと服を持って試着室に向かっていった。

試着室の前に男が1人でいるのは非常に気まずいのだが・・・

そんなことを考えていると工藤さんが試着を終えて出てきた

工「どうかな?僕に似合うかな?」

工藤さんは薄い黄色のシャツに薄ピンクのチェックのスカートという服だった

貴「・・・・・に、似合ってると思うよ／／／」

工「本当に!なら次のやつに着替えるね」

その後も工藤さんのファッションショーは続いた。
その中から良かったものを買って丁度昼になったので明久たちと合流し食事にする事にした。
ちなみに工藤さんが買った服は俺が買ってあげた。

〜 Ｓｉｄｅ 命 〜

貴浩君と愛子ちゃんと別れて私は今
明久君と一緒にお話しながら色々なお店をみて回っていた

命「明久君は料理うまいですよね」

明「そうかな。命の料理もかなりおいしいと思うけどな」

命「そ、そんな事ないですよ／／／」

明「命はよく料理とかするの?」

命「はい、そうですね。両親が共働きで帰ってくるのが遅かったりするので
私が作る事が多いですね」

明「そうなんだ。優子さんと秀吉が羨ましいよ。命のおいしい料理が食べられるなんて」

命「そ、そんな／／／」

明「僕も食べたいよ」

命「そ、それなら今度よろしければお弁当作ってきますよ」

明「え?そんな悪いよ。気持ちはとても嬉しいけど大変でしょ」

命「そんなことありませんよ。優姉や秀兄にお弁当を作るから人増えても変わりませんし」

明「そ、そう?な、なら今度お願いしようかな」

命「はい。その時は頑張りますね」

やった!よし少しずつで良いから頑張るぞ!
その後も明久君と一緒にお話しながら色々見て回った。

昼ごろになると貴浩君から連絡があったので一緒に食事をすることになった

〜　Ｓｉｄｅ　貴浩　〜

昼は工藤さんの要望で中華という事になった。食事は皆で色々つつきながら食べた。
食事後は４人でどこかに行こうということで俺達は映画を見る事にした。
映画館に着くとそこには見た顔の人物達がいた

霧「雄二、今日は何見る？」

俺・明「「えっ？」」

雄「・・・俺の希望は、叶うのか？」

霧「・・・・・・じゃあ、『戦争と平和』―」

雄「おい、それ昨日も見ただろ！」

霧「２回見る」

雄「いい加減に無駄だってことを覚えろ！」

霧「・・・・・・嫌なら、寝てても良い」

雄「それは気絶って言う―」

霧「・・・・・・ずっと一緒にいるのは同じだから、大丈夫」

そういうと霧島さんは雄二にスタンガンを押し当て気絶させると

霧「・・・・・・学生２枚２回分」

店「はい。学生1枚気を失った学生1枚、無駄に2回分ですね」

貴・明「「・・・・・・」」

工「代表達も来てたんだ」

明「・・・雄二も大変だね」

貴「・・・ああ本当だな」

命「で、何見ようか？」

工「じゃあ、これ見る？1時間45分だよ」

貴「ああ、そうだな。それにしようか」

明「学生4枚ください」

店「はい」

工「あ、お金。」

貴「俺が出すからいいよ」

工「ありがとう！」

明「僕も命の分は出すよ」

命「え、でも・・・」

明「お弁当のお礼だと思って。ね」

命「ありがとうございます」

俺達は券を買い中に入った

～　Ｓｉｄｅ　??　～

？１「〇〇。お待たせ、状況は？」

？２「あ、〇〇ちゃん。映画を見に入りました」

？１「ＯＫ。どうする？一緒に入る？」

？２「そうですね、入りましょうか」

？１「学生２枚ください」

店「はい」

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

工「面白かったね」

貴「そうだな」

明「次はどこ行く？」

工「う～ん、じゃあ『ラ・ペディス』行く？なんかおいしいって有名らしいよ」

命「そうなんですか。少し気になります」

明「なら、そこに行ってみようか」

工「ここのクレープって美味しいね！」

命「うん。おいしいね明久君」

明「本当だね（パクパク）」

貴「ああ。ここのは本当においしいな」

ちなみに明久には俺が金を貸しているので映画代や食事代などが出せるのである

貴「明久。そんな慌てなくても良いだろ」

明「いや、久しぶりにクレープを食べたからつい」

工「吉井君っておもしろいね」

命「あの明久君。私の分のクレープ少し食べてみますか？」

明「え？良いの？」

命「はい。食べ過ぎると・・・お肉がついちゃうから・・・」

明「え?そうかな?命はスタイルが良いから気にしなくて良いと思うけどな」

命「え、ええ!?／／／」

明久の言葉に命は真っ赤になる

工「吉井君って女たらしだね」

明「え!?そんなことないよ」

明久は慌てる。命はまだ顔が真っ赤になっていた。

貴「で、そこに隠れてる2人は何してんだ?」

?1・?2「「（ビクッ）」」

明「え?美波に姫路さん?何で?」

姫「いつから気づいたんですか?」

貴「映画館に入るころからかな?」

島「（ガシィッ）」

明「美波?なんで僕の腕を掴むのかな?」

島「ねえアキ。こんなところで何をしているの?」

姫「そうですね。何をされているんですか？」

明「え？2人共？」

島「今、命からクレープを食べさせてもらおうとしてなかった？」

姫「そうですね。そんな不埒な事をしてはいけませんよ」

島「じゃあそんなアキにはお仕置きが必要ね」

貴「ストップだ2人共！」

明久今のうちに。俺はアイコンタクトで明久に伝える

姫「何ですか？織村君？今取り込み中なんですが」

島「そうよ。今忙しいから後にして」

俺が2人の注意をこちらに向けていると

明「命！逃げるよ！！」

明久は命の手を握り店を出て行った

島「な！？待ちなさいアキ」

貴「こらこら。何をしているだ。店では静かにしないと」

島「ちょ。織村邪魔よ。どきなさい」

工「駄目だよ。それはできないよ」

俺と工藤さんは2人の前に立ち、明久たちのところに行かせない様にする

姫「なんで私達の邪魔をするんですか？」

このままじゃラチがあかないな。・・・そういやこの店って確か。
工藤さんが2人を引きとめている間に
俺は近くにいた店員を捕まえてある人物を呼んでもらった。

島「とにかくどきなさいよ」

貴「そんなことより島田さんはここにいて大丈夫なの？」

島「どういう意味よ？」

貴「どういう意味ってそれは・・・」

清「お姉様～」

貴「やっぱり清水さんがいたか」

なんか色々清水さんについては明久から聞いた事があったんだよな。

島「げ！？み、美春」

清「お姉様。美春に会いに来てくれたのですね」

島「そ、そんなわｋ」

貴「そうらしいな。良かったね清水さん」

清「確かあなたは・・・・・Fクラスの・・・
　それよりお姉さまが来ていることを教えてくれてありがとうですわ」

貴「いえいえ。ではでは2人ともごゆっくり」

俺はそういうと工藤さんを連れて店を出て行った。

島「明日、覚えておきなさいよ!!」

店を出る時そんな声が聞こえた・・・怖すぎるわ！2人はFクラスに染まってきたな。

その後俺は工藤さんを家まで送り届けて今日は家に帰った

〜　Ｓｉｄｅ　命　〜

まさか、2人がいるなんて驚きました。
でも貴浩君のおかげで何とか明久君のピンチを脱する事ができました。

そして今は私達は家の前にいます。

命「ふぅ、疲れたました」

明「大丈夫命。ごめんね。ゴタゴタしてて」

命「い、いえ気にしないでください」

明「・・・とりあえず、今日は終わりだね」

命「うん。ありがとう明久君。今日は楽しかったよ」

明「僕も楽しかったよ。また機会があったら誘ってね」

命「あ、はい！！じゃあ、また学校で」

明「うん。また学校で」

そう言って、明久君と別れました。
帰ってくるまで明久君に手をつないでもらっちゃった／／／

ちなみに優姉と秀兄が着いて来なかったのは、
秀兄は楓に頼んでどこかに連れて行ってもらって、
優姉はついてきたら口をきかないといっておいたのでついてこなかったりします

ある日のお買い物（デート？）（後書き）

命「えへへ。明久君に手を繋いでもらっちゃった。
よし、今度お弁当を作ってあげようっと」

命ごきげんですな・・・

明久がいつ命の思いに気がつくのかお楽しみに

文月学園オリエンテーリング（前書き）

皆さん『バカと俺たちの召喚獣』を読んでいただきありがとうございます

皆さんのおかげでＰＶが５００００アクセス、ユニークが７０００人を
超えました。

これからもよろしくお願いします。

文月学園オリエンテーリング

命「文月学園主催お宝争奪オリエンテーリング大会？」

張り紙に表示された情報に命が首をかしげる。

雄「なんか豪華な賞品が出るらしいぞ」

雄二が賞品が書いてある紙をプリントアウトして持ってきた。

明「結構豪華だね、学食の食券一年分とか、新作ゲームの引換券なんてのもあるね」

明久が賞品の一部を読み上げていく。

姫「このシークレットアイテムってなんでしょう？」

姫路さんがシークレットアイテムの所を指さす。

島「さあ？取ってからのお楽しみってことじゃない」

貴・楓「「おはよう（ございます）」」

貴「ところで皆何の話をしてたんだ？」

明「それはね・・・・・・」

直人にオリエンテーリング大会の事を話た。

貴「オリエンテーリングね、何か裏がありそうだな」

明「裏って？」

貴「予感がするだけだよ。気にすることもないだろうけど」
あの学園長が変な事考えてなければ良いけど

その後鉄人が教室内に入ってきてＨＲが始まった。

鉄「え～お前たちもすでに知ってるだろうが、今日はこれからオリエンテーリングがある
　念のためルールを復唱しておくぞ。ルールは、三人ひと組でチームとなり、
　謎をといて座標をわりだすと、引換券入りのカプセルがみつかる」

三人チームか、だれと組むかな？

鉄「それとオリエンテーリング中は携帯電話は使用禁止なので覚えておくように」

カンニング防止のためかな

鉄「それではグループを発表する」

グループはもう決めてあったのか。さて誰とペアかな

Ｆ『神よ、どうか姫路さんとペアに』

Ｆ『楓様愛してる！』

F『命様抱かせてくれ！』

F『姫路さん結婚して！』

クラス内から祈りが聞こえる。

そろそろ皆に熱烈アッタクをしている奴を付きとめたほうがよさそうだ。

そして鉄人がにグループをかいてある紙を貼りつける。

えーと俺は・・・明久と命とか。他には雄二、秀吉、楓チームと美波、姫路さん、ムッツリーニチームか。

F「「「「畜生ォォ！！」」」」

クラスメイトの絶叫が響わたる。

鉄「問題児は一ヶ所に集めておいた。何をするかわからんからな」

そんな理由で決めたのか！？なんて失礼な！俺らが一体何をしたっていうんだ。

鉄「それではこれが問題用紙だ」

F「「「「なにぃーーっ！！？」」」」

まさかの問題用紙にクラスメイトが驚く。

これじゃあ問題が解けなきゃ景品が手に入れられないというわけか。

鉄「これも授業の一環だ！真面目に取り組むように」

強制的にＨＲを終わらせられ、オリエンテーリングが開始された。

明「貴浩の嫌な予感当たったね」

命「謎ってこういう事だったんですね」

今僕らは教室内で机を囲んで問題を解こうとしている最中だ。

貴「問題のＸ座標が横でＹ座標が縦、Ｚ座標が高さを表しているってことか」

命「一様、全部選択問題みたいだけど難しそうだね」

明「なんだ、選択問題なのか。それなら簡単だね」

貴「なんだ明久、お前選択問題得意だったのか？」

明久が選択問題を得意としてるとは知らなかったな。

明「まかせてよ。自称、選択問題の魔術師と言われている僕に」

自称なら言われてるんじゃないだろ。不安が残るな。

明「いくぞ！ストライカーシグマＶ！」

明久が鉛筆を構え転がす。

明「・・・わかった！Ｘ座標６５２、Ｙ座標２３７、Ｚ座標は５！

発見！

ターゲットはあそこだ！！」

そう言って明久は窓の外を指さす。

命「おもいっきり空中ですけど」

明「あれ？」

貴「明久・・・その鉛筆はもう使うな！」

ボキッ！！

明「ああ！ストライカーシグマⅤゥゥ！！」

貴「先が思いやられるな」

それから一時間経つがいまだに当たりは見つからない。

明「なかなか当たりは出ないね」

貴「そうだな、今度はこれでどうだ？」

俺が数学の問題を囲み場所を導き出す。

命「ここは・・・体育倉庫みたいですね」

明「それじゃあ行ってみようよ」

俺達は体育倉庫に向かった。

明「えっと、座標だとここだけど・・・あった！」

命「やったね明久君♪」

貴「中身見てみようぜ」

明「そうだね、えっと・・・如月グラウンドパークプレイオープンチッケトだって」

今度オープンするっていうテーマパークのチケットか。

貴「ちょうどペアようだし2人で行って来たらどうだ？」

命「え！？私が明久君と・・・」

貴「でも貴浩はいいの？誰かと行かないの？」

貴「俺には相手がいないからな。だから二人で行って来いよ。
明久は命に勉強とか色々世話になってるんだからな」

明「・・・・・命一緒に行く？」

命「う、うん。明久君がいいなら」

中睦ましいことで。さて頑張れ命！

すると一つのグループが体育倉庫に入ってきた。
それは、砂原さんとなのは、椎名さんのチームだった

砂「おお、ター君♪ここで会うとはなんという運命♪」

貴「なのはたちもここに取りにきたのか？」

な「そうだよ。ここで２つ目だよ」

明「１つ目はなんだったの？」

砂「学食の食券一年分だったぜ♪」

な「ところでここの景品はなんだったの？」

貴「如月グラウンドパークプレイオープンチッケトだよ」

な「そうなんだ。それはどうするの？」

貴「明久と命が行くつもりだけど」

な「そうなの・・・それなら見逃さないとね。２人の邪魔はしないよ！」

貴「助かるよ。お前らと戦っても勝つのが難しいからな」

なのはが砂原さんたちを引き連れて出ていこうとする。

砂「バイバイミコりん♪アッキーとお幸せに♪」

命「鈴歌ちゃん！」

砂原さんが最後に命をからかいながら出ていく。

貴「気を取り直して次行くか」

明・命「「うん」」

あれから3問ほど解いたがすでに景品は取られた後だった。
今は理科準備室に向かっている。

明「今度こそ2つ目の景品を手に入れるよ！」

命「気合い入ってるね明久君」

貴「自分で解いた問題だからじゃないか？」

命「そうかもですね」

明「・・・・・あった！合ったよ！」

明久が手を振ってアピールしてくる。

貴「なにがでたんだ？」

明「えっとね・・・商店街の商品券二万円分だって。貴浩いる？」

貴「いいのか？せっかく明久が自分で解いたのに」

明「うん、僕たちはチケット貰ったしね。命もいいよね」

命「うん、大丈夫だよ。いつも貴浩君にはお世話になってるもん」

貴「それなら貰うとするよ」

少しは食事代の足しになるかな。

C「早く早く、準備室ここだよ」

C「待ってよ」

C「・・・あ、貴方達Fクラスの」

ちっ、鉢合わせしちまったかめんどくさいな。

C「お宝を持ってるわね。出入口はここだけだし渡してもらうわよ」

貴「そう簡単にはやれないな」

C「言ってなさい、ルーティ先生丁度良いところに。召喚許可を願います」

ル『わかったわ、承認します』

日本史のフィールドが張られる。

C「「「サモン！！！」」」

かけ声に答えて、三体の試験召喚獣が姿を現した。

貴「フィールドが日本史だったのを呪うんだな、いくぞ明久、命！」

明「了解！」

命「うん！」

貴・明・命「「「サモン！！！」」」

俺たちの召喚獣も召喚される。

Cクラス×３　１０５＆１３２＆１２２点

Fクラス織村貴浩＆吉井明久＆木下命　４５３＆１７５＆１５５点

遅れて全員の点が表示される。

C「なっ！？なんなのあの点数！」

C「ホントにFクラスなの！」

貴「さっさとおわらせるか」

明「そうだね」

C「やあ！」

明久に向かって剣が振り下ろされる。

明「ほっと」

それをかわして、逆にその突進力を利用して相手の召喚獣の首に木刀を突き立てた。

C「なんですって！？」

明久のやつさらに召喚獣の使い方が上手くなってるな。
Aクラスとの戦いで経験値たくさんもらったか？
他の二人も俺と命に一撃でやられて景品を守ることに成功した。
その後はとくに景品を得ることができず終了の時間になってしまった。

現在俺達は景品を引きかえて教室内にいた。

貴「はー、結局手に入ったのは2つだけか」

島「まだいいじゃない、ウチらなんて1つよ」

秀「ワシたちも2つだったのじゃ」

姫路さんたちは1つ、雄二たちは終了直前に屋上で見つけて2つ手に入れたようだ。

島「ところであんたたちのそれ、？」

島田さんが箱を指さす。確かにさっきから気になってたんだよな。

雄「取りあえず開けてみるか」

秀「そうじゃな」

雄二が箱を開けて景品を取り出す。残った箱の中には3つの指輪が入っていた。

楓「何でしょうこれ？」

明「もしかしてこれがシークレットアイテムって奴かな？」

楓が指輪をとり眺めてみる。

秀「ん？そこに説明書らしきものがあるぞい」

秀吉が両方の箱の中から紙を取り出した。

雄「何々・・・こっちは緑盾の指輪って言うみたいだな」

貴「こっちは黒纏の指輪っていうらしいな」

楓「こちらは白盾の指輪って言うらしいですね」

雄二たちが手に入れた指輪の名称らしい

雄「何々・・・この黒纏の指輪を使用すると召喚獣の周りにフィールドが張られて
　相手からの攻撃を防ぐ事ができる。
　起動ワードは、フィールドリング。・・・だそうだ」

つまりこの腕輪を使えば召喚獣が強化されるみたいだな。

雄「ほーそりゃあ便利な腕輪だな。設備を守るのに一役かいそうだな」

明「指輪にはどういう力があるの？」

雄「今読む…この緑盾の指輪と白盾の指輪を使用すると召喚獣の周りに遠隔操作ができる
　シールドをおく事ができ敵の攻撃を防いだり、モードをかえると攻撃できたりするらしいな」

他2つはシールドビットみたいなものか。結構便利そうだな。

姫「あっそうでした。私タルト作ってきたんですけど3つしかないんですが
　皆さんいかがですか？」
そこで周りの空気が凍った。

貴「第1回！！」

明「ガチンコ」

雄「じゃんけん対決！！」

秀・ム「「いえーーーい！！」

俺たち男性陣は目を合わせじゃんけんで負けた3人が犠牲になる事を確認した。
もちろん、楓と命は参加させません。

雄「いくぞ！！」

貴「最初はグーじゃんけん！！」

じゃんけんが終わると3人の屍があった。
明久、雄二、秀吉の3人がじゃんけんに負けたのだ。

楓と命に頼んで島田さんと姫路さんの気をそらしてもらい
俺とムッリーニは3人の蘇生作業をしていたのは言う必要が無いだろう。

しばらくして、
貴「大丈夫か？」
俺は3人に買ってきたお茶を渡す
明「僕、死んだおじいちゃんにあったよ」
雄「・・・本当に凄い威力だな。あれは」
秀「今回はじめて姫路の料理を食べたがあれは凄いとしか言えんの」
3人は何とか蘇生に成功して蘇った。
そして、よろよろと歩く明久たちを家に送り届けて帰宅した。

文月学園オリエンテーリング（後書き）

今回はアニメ版のオリエンテーションについてのお話でした

オリジナルの指輪を出してみました。

この指輪が今後どう使われていくのかお楽しみに

清涼祭（1）　～祭は大好きだから～（前書き）

今回からは清涼祭編を書いていきたいと思います

では皆さんよろしくです

清涼祭（1）　～祭は大好きだから～

俺たちが通う文月学園は、新学期最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。
色々な出し物の準備をすすめているクラスがほとんどである。
そして、２－Ｆクラスはと言うと――
須「吉井！こいっ！」

明「勝負だ、須川君！」
準備もせず野球をしていた。

その頃２－Ｆの教室では秀吉や楓、命、姫路さん、島田さんの５名がゆっくりと読書をしていたりと自由にしていた。

鉄「お前ら、清涼祭の準備は・・・」
そこで教室の扉を開けて入ってきたのは鉄人こと西村先生と俺だった。

貴「秀吉。皆は？」
俺は先ほどまで色々と合って鉄人の所に行っていたのだ。訳は後ほど・・・

秀「皆はグランドで野球をしておるぞ」

貴「何だと！？俺もやりたかった・・・」
俺が膝をついて落ち込む

鉄「お前も、あいつらもまったく・・・」
鉄人はあきれるようにため息をつく

貴「・・・じゃあ先生。すみませんが呼んできてもらってもいいですか？
　呼んでいる間に清涼祭の準備をしときますので」

俺は鉄人にそう頼んだ。
実はと言うと俺はこのクラスの学園祭の実行委員をしている。
理由は雄二がやる気が無かった事と俺が祭りとかが好きな事で俺が立候補してなった。
楽しい事大好きですから

しばらくすると、鉄人が皆を連れて戻ってきた

鉄「この時期になって清涼祭に向けて動いてないのはウチのクラスだけだぞ！
　まったくお前達は・・・少しはまじめにやったらどうだ。
　今は織村兄が動いているだけじゃないか！」

明「ん？貴浩。今何かしているの？」
今の鉄人の言葉に明久が疑問を持ち俺に尋ねてきた。

貴「ああ。今から言おうと思ってたんだが・・・」
俺は一息つくと

貴「今年、俺たちのクラスはＡクラスと一緒に出し物をすることになった」

Ｆ「「「「「何いいいいい！？」」」」」

Fクラス全員から驚きの声が上がる

雄「どういうことだ？」

貴「簡単に言うと、前にこの教室を掃除した時なんだけど、
この教室があまりにもヤバいんで、さすがに客を入れて商売するのはまずいと
思って、西村先生たちと相談してAクラスと一緒に出し物をする事になった」

雄「理由はわかったが、何故Aクラスなんだ？」

貴「頼みやすかったから。まあ他にも色々とあるけど・・・・・・」
優子とか霧島さんとか・・・・・久保とか

明「それでAクラスと一緒にするの？」

貴「ああ。頼んだら了承をもらえたからな」

雄「よく了承をもらえたな」

貴「それは、簡単だったよ。Fクラスと合同になれば休憩時間も増えるから
清涼祭をより楽しむ事ができるからだって」
Aクラスの人達でもやっぱり高校生なので勉強ばかりではなく楽しみたいらしい

雄「そんなこと独断で決めるなよ」

雄二はこの決定に不満があるらしい

貴「だって俺このクラスの学園祭実行委員だし。それに皆もいいと思うんだけどな。
だってこれを理由にAクラスの女子と会話できたりするんだから皆にとっても悪くは無いと思うけどどうかな？」

F『意義なし！！』

貴「というわけで、俺たちは特別にAクラスと合同で出し物をします。
そんでもって、もう出し物は決まっています」

秀「もう決まっておるのか！？」

貴「ウチのクラスがモタモタしているからもうAクラスで決めてもらった」

明「で、何をするの？」

貴「確か、メイド・執事喫茶だったはず」

F「メイドだと！？」

F「最高だな」

貴「で、もう時間が無いからこっちでだいたいの役割とか決めたからな。
ちなみに、この中の男子で料理が作れる奴は挙手してもらっていいか？」

俺が尋ねると、約１０名ぐらいの男子が手を上げた

貴「今手を上げた男子は全員厨房担当で、その他の男子はホール担当で、
　ただ、明久と雄二と俺は両方とも担当で、そして雄二は俺の補助よろしく」

Ｆ男『了解』

雄「ちょっと待て。何で俺が」
雄二が反抗してきたけど

貴「・・・・・・やってくれたら霧島さん対策するよ」

雄「喜んでやろう」
一瞬で俺についてくれた

貴「で、女子は姫路さんと島田さんはホール担当で、
　楓と命は悪いけど両方担当してもらって良いかな」

島「わかったわ」

楓・命「頑張ります」

姫「あの私も料理のお手伝いできますけど・・・」

貴「いや、姫路さんも島田さんも美人だからホールオンリーで頼みたいんだ」

姫路さんが爆弾発言してきたのでやんわりと断りを入れた。

そこで明久達から『ナイス』というアイコンタクトが目に入った。

貴「それに、楓と命を厨房に入れるのには訳があるんだ」

姫「訳ですか？」

貴「ああ。メイド服の楓と命の姿を名前も知らないような男達に見せたくない！！
　これは優子も同じことを言ってたからな」

俺はきっぱりと宣言した

秀「それはそうじゃな」

貴「と言う事で、姫路さんはホールだけを必ずお願いするな」

姫「はい、そういう事なら」

貴「じゃあ今からひとまずＡクラスと合流するから、
　男性陣は装飾などの力仕事よろしく。ここで良い所見せるんだぞ。
　女性陣は優子の指示に従ってな。
　で、明久と雄二と秀吉は俺のサポートで、ムッリーニは衣装についてよろしく頼む」

俺はそう言うと雄二と明久を連れて学園長室に向かった

この間行ったＦクラスの不備について言いにいくのだ

清涼祭（1）　～祭は大好きだから～（後書き）

さてさていよいよ清涼祭編スタートです

まあ原作とは変わっていますが気にせず楽しんでいただければ光栄です

次回の更新も頑張りたいと思います

清涼祭（2）　～学園長（ババア）との交渉～（前書き）

ついに　バカと俺たちの召喚獣　５０話目いきました

これも皆様のおかげです。

ありがとうございます。

これからもよろしくお願いします

清涼祭（2）　～学園長（ババア）との交渉～

そして俺達は学園長室へと向かった。

『……賞品の……として隠し……』
『……こそ……勝手に……如月ハイランド……』

学園長室前まで来ると、部屋から誰かが言い争っている声が聞こえてきたが
あまり関係なさそうなので気にしないことにした。

雄「失礼しまーす！」

明久と雄二がドアをノックして学園長室に入っていく。

学「本当に失礼なガキどもだねぇ。普通は返事を待つものだと思うんだよ」

俺もずっと廊下に立っている訳にもいかないので中に入る。

教「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。
　これでは話を続けることもできません・・・・・・まさか、貴女の差し金ですか？」

そう言ったのは教頭の竹原先生だ。
鋭い目つきに眼鏡をしていて、クールな態度で一部の女子生徒に人気が高いらしいが、

俺はコイツの事が嫌いだ。コイツの目は俺たちを見下しているような感じがするからだ

学「馬鹿を言わないでおくれ。
　どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。
　負い目があるというわけでもないのに」

教「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

学「さっきから言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

教「・・・・・そうですか。
　そこまで否定されるならこの場はそういうことにしておきましょう」

そういって、竹原先生は部屋の隅を一瞬見てから、

教「それでは、この場は失礼させて頂きます」

なんだろう？　盗聴でもしているんだろうか？
まあ気にしないでおこう

学「んで、ガキども。アンタらは何の用だい？」

雄「今日は学園長にお話があって来ました」

流石の雄二もここは敬語なんだな、ま、当たり前か。
俺でも一応敬語を使っているんだ。本当は嫌だけど・・・

学「私はそれどころじゃないんでね。学園の経営に関することなら、教頭の竹原に言いな。
　それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀ってモンだ。覚えておきな」

雄「俺は2年F組代表の坂本雄二。それでこちらにいるのが織村貴浩
　最後に紹介するのは――」

雄二は名前を名乗ってから明久を示して紹介する。

雄「――2年生を代表するバカです」

学「ほぅ・・・。そうかい。アンタたちがFクラスの織村と坂本と吉井かい」

明「ちょっと待って学園長！　僕はまだ名前を言ってませんよね！？」

そりゃあ、一応これでも学園長なんだから観察処分者の事ぐらいは知ってるだろうよ。
まあ俺は去年から実験とかに付き合っているから覚えているだろうけど

学「気が変わったよ。話を聞いてやろうじゃないか」

雄「ありがとうございます」

学「礼なんか言う暇があったらさっさと話しな、ウスノロ」

雄「わかりました」

この性格は前から知ってたから特に気にしないが、
それよりもこれだけ罵倒されているのに落ち着いている雄二に驚いている。

雄「Fクラスの設備について改善を要求しにきました」

学「そうかい。それは暇そうで羨ましいことだね」

雄「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、
　隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

さすが雄二少しずつメッキがはがれてきた

雄「学園長のように戦国時代から生きている老いぼれならともかく、
　今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常高いと思われます」

結構きれてるな

雄「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、
　さっさと直せクソババァ、というワケです」

さすがだぜ雄二。期待を裏切らない男だ

学「・・・ふむ、丁度いいタイミングさね・・・・・・」

何か言ったか、丁度いい？

学「よしよし。お前たちの言いたいことはよくわかった」

明「え？　それじゃ、直してもらえるんですね！」

学「却下だね」

明「雄二、このババァをコンクリに詰めて海に捨ててこよう」

貴「明久。何を言ってるんだ。そんなことしたら今後魚が食べられなくなるじゃないか。
　だからここはこんがり焼いてから埋めるんだよ」

もう俺も我慢しない。疲れた

雄「まったく、このバカ共が失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか？　ババァ」

明「そうですね。教えて下さい、ババァ」

貴「理由を教えてください　ババァ」

学「お前たちは本当に聞かせてもらいたいと思っているのかい？」

学園長も呆れているが知った事ではない

学「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。
　ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちょろいガキども」

明「それは困ります！　そうなると、僕らはともかく身体の弱い子が倒れて」

学「――と、いつもなら言っているんだけどね。可愛い生徒の頼みだ。
　こちらの頼みも聞くなら、相談に乗ってやろうじゃないか」

さっきの呟きからしてこうなるのは想定内だ。
それにババァが俺たちを可愛い生徒だって、気持ちが悪い。どうせ何かあるんだろう。

明「その条件とはなんですか？」

黙っている雄二は気にせずに話を進めた。

学「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

貴「そうなんですか。今知りました」

学「まあ清涼祭で単体戦と2人1組のタッグマッチの召喚大会が行われるんだよ」

明「そうなんですか」

学「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

明「え？　優勝賞品？」

学「優勝者には正賞に賞状とトロフィーで、単体戦の優勝者には

『深紅の腕輪』と『如月ハイランド　プレオープンプレミアムペアチケット』、
　タッグマッチには
『白金の腕輪』と『如月ハイランド　プレオープンプレミアムペアチケット』を
　渡すつもりだよ」

ペアチケットで雄二が反応していた。

明「はぁ・・・。それと交換条件に何の関係が」

学「話は最後まで聞きな。慌てるナントカは貰いが少ないって言葉を知らないのかい？」

明「知りません」

貴「威張って言うことじゃない」

学「まあいいさ、この副賞のペアチケットなんだけど、
　ちょっと良からぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」

貴「回収？　それなら、賞品に出さなければいいじゃないのか」

学「そうできるならしているさ。けどね、この話は教頭が進めたとは言え、
　文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆すわけにはいかないんだよ」

確かに学園長は召喚システムの開発に手一杯だから
経営に関しては教頭に一任しているみたいだったな。

貴「契約する前に気付けよ。学園長なんだから」

学「うるさいガキだね。白金の腕輪と深紅の腕輪で手一杯だったんだよ。
　それに、悪い噂を聞いたのは最近だしね」

学園長が眉をしかめます。
口調はアレですが、責任は感じているようだ。

明「それで、悪い噂ってのは何ですか？」

学「つまらない内容なんだけどね、
　如月グループは如月ハイランドに一つのジンクスを作ろうとしているのさ。
　『ここを訪れたカップルは幸せになれる』っていうジンクスをね」

貴「それのどこが悪い噂なんだ？　良い話じゃないか」

学「そのジンクスを作る為に、プレミアムチケットを使ってやって来たカップルを
　結婚までコーディネイトするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

雄「な、なんだと！？」

雄二が大声を上げた。

明「どうしたのさ、雄二。そんなに慌てて」

雄「慌てるに決まっているだろう！　今ババアが言ったことは、
　『プレオープンプレミアムチケットでやってきたカップルを
　　如月グループの力で強引に結婚させる』ってことだぞ！？」

貴「いや、言い直さなくてもわかっているが」

学「そのカップルを出す候補が、我が文月学園ってわけさ」

雄「くそっ。うちの学校は何故か美人揃いだし、試験召喚システムという話題性も
　たっぷりだからな。学生から結婚までいけばジンクスとしては申し分ないし、
　　如月グループが目をつけるのも当然ってことか」

学「ふむ。流石は神童と呼ばれているだけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか」

学園長だからか、さっきから雄二や明久に詳しいな。
試召戦争とかで有名になったからか？

明「雄二とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪いことでもないし、
　第一僕らはその話を知っているんだから、行かなければ済む話じゃないか」

雄「・・・絶対にアイツは参加して、優勝を狙ってくる・・・。
　行けば結婚、行かなくても『約束破ったから』と結婚……。俺の、将来は……」

霧島さんは雄二に何て言ったんだ?そして雄二は何を約束したんだ?

学「ま、そんなワケで、本人の意思を無視して、
うちの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

本当は生徒を可愛いと思っていないだろ・・・

貴「つまり交換条件って言うのは――」

学「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それができるなら、
教室の改修くらいしてやろうじゃないか」

明久のことだから強奪とか考えているんじゃないだろうな

学「無論、優勝者、準優勝者から強奪なんて真似はするんじゃないよ。
譲ってもらうのも不可だ。私はお前たちに優勝をしろ、と言ってるんだからね」

出るからには優勝したいしな

明「僕たちが優勝か準優勝したら、教室の改修と設備の向上を約束してくれるんですね?」

学「何を言ってるんだい。やってやるのは教室の改修だけ。
設備についてはうちの教育方針だ。変える気はないよ」

明久。それは流石に欲張りすぎだ?

学「ただし、清涼祭で得た利益でなんとかしようっていうなら話は別だよ。
　特別に今回だけは勝手に設備を変更することに目を瞑ってやってもいい」

貴「わかりました。この話引き受けます」

学「そうかい。それなら交渉成立だね」

雄「ただし、こちらからも提案がある」

話がまとまったから教室に戻ろうとしたら雄二が学園長に話しかけていた。

学「なんだい？　言ってみな」

雄「召喚大会は形式はトーナメント制で、1回戦が数学だと2回戦は化学、
　といった具合に進めていくと聞いている」

学「それがどうかしたかい？」

雄「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

学「ふむ・・・。いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、
　それくらいなら協力しようじゃないか」

雄「・・・・・ありがとうございます」

雄二には何か考えがあるんだろうな

学「さて。そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝できるんだろうね？」

雄「無論だ。俺たちを誰だと思っている？」

２年の最低クラスの代表とバカ代表と戦バカだな

まあ冗談はさておいて、雄二はやる気全開のようだな。

明「絶対に優勝して見せます。そっちこそ、約束を忘れないように！」

貴「やるからには優勝を狙わないとな」

学「それじゃ、任せたよ」

貴・雄・明「「「おうよっ！」」」

そういって俺達は学園長室を後にしてＡクラスへと向かって行った。

清涼祭（3）　～皆で案を出そう～（前書き）

皆さん『バカと俺たちの召喚獣』を読んでいただきありがとうございます

皆さんのおかげでＰＶが６００００アクセス、ユニークが８０００人を
超えました。

これからもよろしくお願いします

清涼祭（3）　～皆で案を出そう～

俺たちがAクラスに着くとAクラスでは少しずつ準備が進められていた。

優「遅かったわね」

貴「ごめんな。遅くなった」

優「まあいいわよ。じゃあ手伝ってもらっても良い？」

貴「了解。じゃあさっき言った通りによろしく」

俺がそう言うと皆仕事しに行った。

霧「・・・・・・・雄二遅い」

するといきなり雄二の背後から霧島さんが現れた

雄「待て翔子。なぜ俺の頭を掴むんだ」

霧「・・・・・・・遅かったからお仕置き」

霧島さんが雄二にアイアンクローしていた

貴「霧島さんストップ！ひとまず手を放そうか」

霧「・・・・・・・このままじゃ駄目？」

貴「駄目です。今は雄二が必要なので手を放してあげてください」

そういうと霧島さんは嫌そうだったが雄二から手を放した

雄「あ、ありがとう貴浩」

明「僕たちは何をすればいいの？」

優「それなんだけど。色々とやって欲しい事があるのでけど
　まずは喫茶に出す料理を決めようと思うんだけど」

明「喫茶とかだとケーキとかクッキーが定番かな？」

優「そうね。ただケーキといっても色々あるからね」

命「クッキーにも色々ありますしね」

貴「なら、一度このクラスでアンケートを取ってみるか。
　で、その中から案を絞ってみるよ」

優「それがいいかもね」

貴「なら優子達は中の装飾や服のデザインを決めてもらってもいいかな？
　ウチからはムッリーニと秀吉、それに女性陣をそっちに入れてもらってもいいかな？
　こっちは俺と明久がやるから、雄二は力仕事の方を指示してもらってもいいか？」

皆『問題なし』

そう言って皆各自の仕事に散って行った

明「じゃあ僕達も動こうか」

明久がそう言うと俺たちも動き出した。

俺たちは喫茶店に出す料理が何がいいか案を聞く係りだ。

俺と明久は分担して聞く事にした。

周りの人達に案を聞いて最後に優子達に所に行った

貴「なあ?喫茶店に出す料理は何が良い?」

優「やっぱり無難にショートケーキかしらね」

楓「そうですね。私はショコラケーキとかも良いかなと思いますけど」

霧「・・・・クッキーも良いかもしれない」

命「私はシフォンケーキが良いかな」

皆が案を出してくれているので俺は言われたものをメモしていった。

そこで、椎名さんと目が合った。

貴「椎名さんは何かあるかな?」

椎「・・・そうですね」

椎名さんは人見知りで最初合った時は砂原さんの後ろに隠れたりしたけど、

今では時々Aクラスに授業を受けに行くので話す回数も増えたこともあり、

そこまでは避けられなくはなったけどある一定の距離に近づくと離

れてしまうんだよな。
そんな事を考えていると椎名さんが案を出してくれた

椎「・・・うまい棒」

砂「ユッキーは面白い案をだすねぇ」

椎「おいしくてて安いですから」

優「でも、上手い棒って・・・・・・」

椎「なら・・・・・・うまい棒パンなんてどうでしょうか?」

貴「まあ案だからな。一応入れておくよ。他にはあるかな?」

砂「じゃあね。あんぱんなんてどう?」

楓「あんぱんですか?」

砂「ただのあんぱんじゃないよ。あんぱんエクスタシー（18禁版）」

優「どういう意味よ!?」

工「面白そうだね」

ム「・・・・・・・・18禁（ブシュー）」

秀「ムッリーニよ。しっかりするのじゃ」

砂「皆も知っての通り最近全年齢版から１８禁版に転化することがあるよね。
　その例に則ってあんぱんにも革命を――」

命「そんなことしたら大人以外の人売れないと思いますが・・・」

砂「そこはほら駆け引きだよ。見つかるか見つからないかの」

優「いろんな意味での刺激なの！？」

貴「まあ、案だからメモはとるけど」

優「とるの！？」

工「僕はシュークリームが良いな」

貴「シュークリームか。それは良いな」

命「そうですね」

優「なら、貴浩君。その中の案からいくつか絞ったものを
　皆に試食用に作ってきてくれるかしら」

貴「全員に！？」

優「当たり前じゃない。じゃないと皆も納得しないでしょうし」

貴「いや、全員って今このクラスには１００名ほど居るんですが、
　そしたら、プチサイズでもさすがに費用がかかるんですが・・・」

それだけの量だと時間も費用もかかるんですけど・・・・・・

優「それなら安心して費用なら多めに用意してあるから」

そこで優子から費用の金額が書かれた資料を見せてもらった。

それはまあ凄い。俺たちFクラスの当てられた金額の倍以上の金額だよ

優「そこから、費用が出るから材料費は大丈夫よ。
　じゃあ今度にでも作ってきてもらっても良いかしら。その時は命を貸すから」

楓「その時は手伝うよ兄さん」

貴「わかったよ。その中から案を絞って作ってくるよ」

俺はそこ優子達と別れ明久と合流し案をまとめた。

清涼祭（3）　～皆で案を出そう～（後書き）

清涼祭編　第3話目更新しました

皆さんからの感想お待ちしております

清涼祭（4）　～皆で食べてみよう～

今日も俺たちはAクラスで清涼祭の準備をしていた。
俺と明久は昨日作ってきた喫茶店に出す用の食べ物を持っていた。
明久にケーキ系を頼み、俺はそれ以外のものを作ってきた。
正直俺もケーキは作れるが楓や明久に比べると味が劣ってしまう。
貴「優子。昨日言われた通り試食用に作ってきたよ」
優「もう作ってきたの！？早いわね」
砂「おぉ！ター君とアッキーが作ってきたんだね！」
貴「まあ楓と命、なのはにも手伝ってもらったけどな」
砂「それは楽しみだねぇ♪」
優「なら、一時休憩としようかしら」
優子はそう言うと皆は一時作業を止め集まってきた
明「じゃあ僕はケーキを作ったから皆食べてみてよ」
貴「じゃあ俺も最初はクッキーを」
明久はそういうとショートケーキとショコラケーキ、シフォンケーキのプチサイズを出し、
俺はココアやオレンジ風味のクッキーなど5種類ぐらいのクッキーを出した

砂「じゃあター君にアッキーいただくね」
砂原さんがそう言うと明久が作ったケーキを食べた

砂「おいしいよこれ」
砂原さんは感動したように声を出す。そういうと周りの人達も食べ始めた

「おいしい」

「美味いなこれは」

と周りから美味しいと言う声が聞こえた。作ってきて美味しいと言われるのは嬉しい。
周りがまだケーキやクッキーを食べているところで俺は椎名さんに近づいた

貴「椎名さんが言ってたう○い棒パン野菜サラダ味だよ。さあ椎名さん食べてみて」
俺はそう言うとコッペパンの真中を開いたところにうま○棒をそのまま乗せたものを
椎名さんに渡した。

椎「これをですか・・・どうしても食べないといけませんか・・・？」

優「・・・うま○棒パンも作ってきたんだ」

工「これはさすがに・・・」

貴「椎名さん。そりゃ試食してくれないとね。
　一応案だったからね。それにコストもかからないし。皆も食べてみる？」

俺が周りにいた優子や工藤さんなどに尋ねるが首を振って断られた。

椎「・・・・・・えーい。
　こ・・・これはッう○い棒のパサパサとパンのもふもふ、２つの交じりあった
　食感にパンの甘味と相反するうま○棒の濃い味が・・・・・・
　やっぱり駄目です。流石にこれのリピーターにはなれません」

貴「だろうね。まあそうなると思って今度はお口直しにこれを」

椎「これは・・・？」

貴「まあいいから食べてみてよ」

俺はコッペパンを開いたところに何かを入れたものを１口大の大きさにしたものを
椎名さんに渡した

椎「美味しい・・・・・・・なんですか？これ」

貴「それもう○い棒パンだよ」

優「私も食べてみていい？」

工「僕も」

雄「俺も気になる」

と皆このう〇い棒パンの味がきになり食べはじめた

命「これは美味しいですね」

椎「まさかここまで美味しくなるとは思いませんでした。
これは狙える美味しさですよ織村君！」

貴「じゃあ一応候補入りだね。
次は砂原さんが言っていたあんぱんエクスタシー（18禁）を作ってきたよ。
これは2種類作ってきたから食べてみて」

砂「おお！本当に作ってきたんだね。ギャグで言ってみたんだけどな。
ではいただくとするよ」

優「あなた、これ本当に作ってきたのね・・・・・でも、どこが18禁なの？」

貴「まあ食べてみてよ」

皆は少し不安ながらもあんぱんを口に入れた

刀「これは何処が18禁なんだ？」
刀麻があんぱんを食べてみたがわからないらしい

ム「・・・・・・・・・これ赤ワインが入っている」
ムッリーニがそう答えた

貴「よくわかったな。そうだよ。煮立てる時に入れる塩を減らして代わりに
赤ワインを少しだけ混ぜたんだ。
アルコールは完全に飛んでるから学生が食べても問題ないしな。
あと、もう1種類の奴には、女性がデザートとして食べられるように
パン生地もホットケーキ粉を元に甘めに作っているんだ」

雄「これは凄いな。高校生にはちょっとした刺激になるかもな」

砂「これはウケると思うよ！」

貴「よし。これも候補の1つだね。最後に工藤さんが言ってたシュークリームを作ってみました。
まあこれは普通のシュークリームなんで」

そう言うと俺はプチシューを皆に渡した

「おいしい」

「もう1個ほしいな」

「うまいなこれは」

あちこちで評判があがる。

貴「工藤さん」

工「何？」

貴「はい、これ。昨日買い物に付き合ってくれたから」
俺はそう言うと普通サイズのシュークリームを工藤さんに渡した
実はあの後工藤さんが買い物に付き合ってくれたのだった

工「え？いいの？ありがとう」

そう工藤さんは言うと美味しそうに食べてくれた

優「どれも美味しかったわね。でもそれだけに自信無くすわ・・・・・」
と優子が言うと周りにいた女子もため息をついていた。
その後は俺と明久が作ってきたものを食べ終わると作業を開始した。

しばらくして
貴「そういえば優子とかは召喚戦争に出るのか？」
俺はふとそう思い優子たちに聞いた

優「私は代表と一緒に出るわよ」

霧「・・・・・・優子と一緒に出る」

島「ウチも瑞希と出るわよ」

姫「はい、頑張りたいと思います」

刀「俺は単体戦の方に出るな」

な「私は出ないかな。出し物の方を頑張りたいしね」

砂「私もだね。その日は色々とあって忙しくてね」

椎「私も出ません。人目が多いところはどうも・・・・・・」

工「僕は出ないかな。で貴浩君は？」

貴「俺は単体戦の方に出るよ。明久と雄二はタッグマッチの方に出るしな」

島「あれ？アキ達も出るんだ」

明「え？あ、うん。色々あってね」

島「もしかして、賞品が目的とか・・・・・・？」

明「うーん。一応そういう事になるのかな」

島「・・・・・・誰と行くつもり？」

明「ほぇ？」

島田さんの目付きが鋭くなった。

姫「吉井君。私も知りたいです。誰と行くつもりなんですか？」

命「明久君・・・・・・」

気づけば姫路さんまで戦闘モードになっている。
もうFクラスの空気に染まってきているな・・・・・・
命も明久が誰と行くのか気になるみたいだな。

明「誰と行くって言われても・・・・・・」
明久が困ったように俺を見た。仕方ない。ここは助け舟を出すとするか

雄「明久は俺と行くつもりなんだ」
俺が明久に助け舟を出そうとすると雄二が答えた。
ただ雄二そんな事言って良かったのか?後でどうなっても知らないぞ。

姫「え?坂本君とですか?」
それを聞いた姫路さんや島田さん、命は目を丸くして驚いていた。

霧「・・・・・・・雄二。浮気は許さない」
やはりそこで霧島さんが出てきた。
雄二は凄いな。霧島さんがいる前でそんな事を言うなんて

雄「し、翔子。落ち着け。まずは話をきk　ぎゃあああ」
雄二は霧島さんにスタンガンを押し付けられて気絶した。
そして雄二は霧島さんに引きづられて教室から出て行った。

島「アキ。アンタはやっぱり木下よりも坂本の方が・・・」

姫「吉井君。男の子なんですから、できれば女の子に興味を持った方が・・・」

命「明久君、私は信じてますから・・・」

明「ちょっと皆待ってよ」
明久が皆をなだめようと頑張っている。
優「やっぱり吉井君が受けなのかしら（ボソッ）」
何か優子がブツブツ言ってるが深入りしない方が身のためだろうな・・・
そして俺は明久を助けるべく明久の元に行き誤解を解いてから再び作業へと戻って行った。

清涼祭（4）　～皆で食べてみよう～（後書き）

今回は皆にお菓子を作ってきました

そして大会に出る参加者を聞いてみました。

今後の展開をお楽しみに

清涼祭（5）　～清涼祭スタート～（前書き）

カトラス様感想ありがとうございます

これからもよろしくお願いします

皆様からの感想もお待ちしております

清涼祭（5）　～清涼祭スタート～

清涼祭当日・・・・・・

優「さてもうそろそろ始まるけど皆準備は出来てる？」

皆『おおー！！』

貴「忙しいと思うけど皆頑張ろうな。じゃあ皆今日は頑張っていこうか！」

皆『おおー！！』

そして清涼祭は始まった

『『お帰りなさいませ、ご主人様・お嬢様』』

Ａクラスでは優子の言ったとおりメイド・執事喫茶をおこなっている。

始まったばかりだが凄く盛況のようだ。

明「ふぇー、凄い客だね。」

現在、明久は俺やムッリーニ、雄二とともに厨房で働いている。

この間採用されたものを作らされているようだ。

貴「そりゃあそうだろうな。Ａクラスは清涼祭のパンフの１ページ

を丸々使ってるんだから、
　どんなところなのか見に来ようとするのは当たり前だろうよ。
　それに美女・美男子も多いからな。」
俺は手を動かしながら説明する。

刀『6番テーブル、プチシュークリームセット2人前よろしく』

秀『こちら17番テーブル、ふわふわシフォンケーキ追加よろしく頼むぞい』

な『9番テーブル、うまい棒パンセットとクッキーセットをお願い』

工『こっちの15番テーブル、アンパンエクスタシーセットよろしく頼むよ』

貴「了解、っとそうだムッリーニ。もうすぐ俺大会の時間だから。
　これ作り終わったら行くな。くれぐれも姫路さんをキッチンに入れないようにな」

雄「了解っと。プチシュークリームセット2人前出来たぞ、持っていってくれ。
　ついでに俺も明久も大会があるから抜けるから楓と命をこっちにまわしてくれ」

ム「・・・・・・了解」

どんどん注文が来る中、俺たちは仕事をこなしていっている。
今キッチンにいるのは俺と明久や雄二、ムッリーニ後はA・Fクラスが数名居て、
ホールに秀吉や楓、命、姫路さん、島田さんや

霧島さんや優子、工藤さん、砂原さん、椎名さんなどである

そして、俺たちは区切りをつけ大会の会場まで行った。
ちなみに大会は決勝戦を含め６回戦までである

会場につくと俺は明久と雄二と別れた。

ジュ「えー。それでは。試験召喚戦争大会シングルス戦１回戦を始めるわ」
校庭には大会用に作られた特設ステージ。そこで召喚大会が催される。

ジュ「３回戦までは一般公開されないから、リラックスして戦うのよ」
今回立会いを務めるのは英語のジュディス先生。当然英語の勝負となる。
対戦相手は男子だった。確かＥクラスの西郷だったかな・・・？

ジュ「では召喚してください」

貴浩・西郷『試獣召喚（サモン）！』

Ｆクラス　織村貴浩　　ＶＳ　　西郷武
英語　　８７点　　１０２点

向こうは俺と同じ黒の甲冑で双剣を武器にしている。

ジュ「では、始めてください」

そう告げると、ジュディス先生は俺たちから距離を取った。

対戦相手と向かい合い、勝負が始まる。

西「行くぞ！」

相手はこちらに武器を構え迫ってきた。俺も武器を抜き突っ込ませる。

西「はあぁ！」

敵が手にしている剣を振り下ろしてくる。

俺はその動きに合わせ召喚獣を1歩だけ横に動かした。

西「このっ！」

避けられた為、もう片方の剣で横に振るってきた。

俺は距離を良く測り、小さく1歩後退した。

西「クソっ！」

ムキになり武器を振り回してくる。俺はそれを小さい動きでかわしていく。

相手は召喚獣の扱いに慣れていないようだ。

貴「そろそろやるか」

俺は相手の攻撃を避けざま刀を握り締め攻勢に転じた。

西「なぁ！？」

俺は峰で相手の甲冑の隙間を狙って攻撃する。

今回相手がEクラスで助かった。俺は英語が大の苦手だからな。
あと、今回は明久と話していたある実験をしてみたかったのでちょうど良かった。

そこで俺は相手と距離を取った。
俺は相手がすぐに近づいてこないのを確認すると実験を開始した。

まず刀に集中してからっと

貴「行くぞ。魔人剣！」
俺がそう言って刀を振るうとそこから斬撃が相手に向かっていった。
相手はその斬撃に切り裂かれ戦死した。

ジュ「勝者、Fクラス織村君」
ジュディス先生が勝者の名を告げる。とりあえず1回戦は突破だ。

ちなみに今俺がしたことは、刀に点数を集中する事で斬撃を相手に向けて放ったのだ。
多分これは同学年では俺か明久じゃないとできないだろう。
俺たちは他の人達と違って召喚獣を扱ってきているのでこう言う操作もできたのであろう。
これはフィードバックの作用があるので何処に力をためればいいのかがわかるのだ。
これを最初に明久が気づき今回試してみたら出来たと言うわけだ。
・・・簡単に言うとハ〇ター×ハ〇ターの念能力の操作みたいなものだ。

俺の試合が終わったので明久達の試合を見に行こうと行ってみると試合は終わっており何故か2人は殴り合っていた。

貴「おい、そんなことしてないで教室に帰るぞ」

秀「3人ともここにおったのじゃな。
　殴り合いなんてしておらんで、急いでAクラスに戻ってくれぬかの？」

すると秀吉が大会の会場までやってきた

貴「どうしたんだ？何かあったのか？」

秀「うむ。少々面倒な客がおっての。すまぬが歩きながらで頼む」

明「あ、うん。了解」

先を急ぐ秀吉に続き俺と明久と雄二。
どうやらトラブルが発生したと見て間違いないな

清涼祭（5）　～邪魔するヤツにはＯＨＡＮＡＳＩが必要だよな～（前書き）

カトラス様、シュレ猫様、柏崎せもぽぬめ様感想ありがとうございます

これからもよろしくお願いします

今日は頑張って2話更新したいと思っています

もう1話は夜になるとおもいますのでよろしくお願いします

清涼祭（5）　～邪魔するヤツにはＯＨＡＮＡＳＩが必要だよな～

雄「・・・・・営業妨害か」
歩いている雄二の目が鋭くなる。学園長室に行った時と同じ目をしている。
何か思うところがあるのだろうか。

明「まさか。そんなこと誰もしないよ」

秀「いや、それが雄二の言ったとおりなんじゃ」

貴「マジでか。優子や久保、なのは、砂原さんはどうしたんだ？
あいつらがいれば解決するだろうに」

秀「姉上は大会に出ているのでおらぬ。久保となのはは今は休憩中で居らぬし、
砂原に至っては何処にいるのかわからぬ」

貴「そうか。なら他の人には難しいな」

雄「相手はどこのどいつだ」

秀「うちの学年の３年じゃな」

しかもよりによって３年生か。まったく生徒の中では１番大人なくせに・・・
すると教室近くとは言え、廊下までに響く大声が聞こえてきた。

秀「む。あの連中じゃな」

貴「あいつらか」

そこで営業妨害していたのは3人。いずれも男だ
1人は中肉中背の一般的な体格と小さなモヒカンという非一般的な髪型をしている。
もう1人は、175cmぐらいの普通の体格で、こちらは丸坊主だ。
最後の1人は中肉中背の一般的な体格でオールバックの髪型をしていた。

そこであの3人が大声で何か言っていた

3年「なんだ!?このまずい料理は」

3年「こんなものを出すなんて信じられねぇよ」

とクレームをつけていた。そこに

楓「兄さん戻ってきたんだね」

貴「ああ、今戻ったところだよ」

命「さっきからあのお客がクレームをつけててね。
でもおいしくないわけないのにアレは楓が作ったんだから」

貴「何!?・・・楓の作った料理にクレームを・・・」

楓「ごめんね。兄さん私の料理のせいでお店に迷惑をかけてしまって」

楓が申し訳なさそうに誤る。

貴「大丈夫だよ楓。楓の料理が不味いわけあるものか。気にするな。
・・・そうだな。じゃあ少し早いけど休憩してきなよ。
秀吉。順番が変わるけど楓と一緒に休憩してきてくれ」

楓「で、でも・・・」

秀「そうじゃな。楓よ。せっかく祭りじゃから一緒にいろいろ見てこようぞ」
秀吉に楓をまかせ休憩に行かせた。
・・・さて、あいつらにはＯＨＡＮＡＳＩしないとな

貴「命とムッリーニは厨房を頼むよ。明久と椎名さんはホールを頼む。
雄二は今から俺とアレを殺るよ（ニコッ）」
俺は親指をあの3人組のほうへ向ける

皆「了解！」

3年「まったくここの責任者は誰いないのか！ここの責任者をだゴペッ！」

貴「私が責任者の1人の織村貴浩です。何かご不満な点はございましたか？」
俺はホテルのウエイターのように頭を下げる。ただし殴りつけた後にだが

3年「不満も何も、今連れが殴ｒゴペッ！」
次は雄二が殴りつけた

貴「それは私達のモットーの『パンチから始まる交渉術』に対する冒涜ですか？」

３年「ふ、ふざけんなよこの野郎・・・・・！何が交渉術ふぎゃあっ！」

３年「おい常村！この野郎。何をぎゃああ！」

雄「そして『キックでつなぐ交渉術』です」

貴「ここの料理が口に合わないようなので、
もしかしたら頭を強打すれば味覚が元に戻ると思いましたので」
楓の料理を不味いとかぬかしやがったんだ。味覚がおかしいに決まっている
って言うか万死に値する

雄「さて最後には『プロレス技で締める交渉術』が待っております」

常「わ、わかった！こちらからはこの夏川と島村を出そう！
俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」

島「ちょ、ちょっと待てや常村！お前、俺達を売ろうと言うのか！？」
慌てる坊主頭の夏川と呼ばれた男とオールバックの島村と呼ばれる男

貴「さて、まだ交渉を続けますか？」

常「い、いや、もう充分だ。退散させてもらう」
常村（モヒカン）先輩が撤退を選ぶ。懸命な判断だけど・・・

貴「そうですか。それなら――」
俺は大きく頷いた後、島村先輩の腰を掴む
島「おいっ！俺もう何もしてないよな！？どうしてそんな大技をげぶるぁっ！」
貴「――これで交渉は終了だな」
俺はバックドロップを決めて何も無かったように立ち上がる。
雄二も夏川（ボウズ）先輩に交渉を終わらせたようだ。
常「お、覚えてろよっ！」
倒れた2人も引きずりながら去っていくモヒカン先輩。これで問題は片付いたな。
貴「明久、あいつらの特徴覚えているか？」
明「うん。あの常夏島トリオの事だね」
明久にしてはいいネーミングセンスだな
優「なに！？何があったの！？」
そこで優子と霧島さんが帰ってきた。
霧「・・・・・・・何があったの？」
命「営業妨害が起きたので貴浩君と雄二君が対処してくれたんです」
椎「さっきから困ってたんです。
そこで秀吉君に頼んで織村君たちを呼んできてもらったんです」

優「そうだったの。私たちがいない間大変だったわね」

貴「さあもう終わった事だから仕事に戻ろう。
お客様大変騒がしくして申し訳ありませんでした。
ごゆっくりとお食事をお召し上がりくださいませ」

俺は一度客に頭を下げると他の皆も俺と同じように頭を下げた

客『これが不味いって・・・・・あいつら舌がおかしいんじゃないのか？』

客『美味しいのにね』

客『あ、こっちに紅茶とシフォンケーキお願い』

あ、注文だ

命「紅茶とシフォンケーキできましたよ」

明「早いね！？」

霧「・・・・・今行く」

貴「雄二、楓、桐嶋さんは厨房をお願い。俺と明久よ優子はホールをやるよ。
ムッリーニは撮影の方を頼む」

俺は皆に指示を出す。そして、そのまま注文を取る人、運ぶ人それぞれ仕事に戻った。

ちなみに撮影とは、お客が一緒に写りたいメイドか執事を選んで撮影すると言うもの

１回５００円とぼったくりのような値段だが、ウチは美男子・美少女が多いので
かなりの人気が出ている。
今のところ男子では久保や刀麻、明久などが撮られている。
まあ女子のほうは皆同じぐらい呼ばれているけど
楓と命の場合は何かと理由をつけて写真を撮らせない様にしている。
ちなみに俺も少しは呼ばれているよ・・・・・本当だよ

それからは次の試合が来るまで仕事をしながら周りに
休憩の指示や材料の補充などの指示を出しながら仕事を進めた。

ホールは優子が中心となって指示しており、
厨房は俺か雄二が中心となって指示している。

途中で明久と雄二が大会に行ったので、配置を換えながら仕事をこなして行った。

清涼祭（6）　～ある人物の休憩～

――――　Ｓｉｄｅ　楓　――――

時間は少しさかのぼる

今私は、兄さんから休憩をもらい秀吉君と一緒にいる。
それは先ほど私が作った料理にクレームが付けられたので
落ち込む私を気遣って休憩をくれたのだろう

秀「楓よ。先ほどのことは気にするでないぞ。
　楓の料理はとても美味しいのじゃのからな。それはワシが保証するぞ」

秀吉君は落ち込んでいる私を励まそうと声を掛けてくれた

楓「本当ですか？」

秀「本当じゃ！こんな事でワシは嘘はつかぬ」

楓「秀吉君ありがとうございます」
私は励ましてくれた秀吉君に感謝を言う

秀「／／／／それよりもせっかくの清涼祭じゃ。今は楽しもうではないか」

楓「そうですね」
何故か秀吉君の顔が赤くなっていますがどうしたんでしょうか？

秀「そうじゃよ。さて何処に行くとするかの？」

楓「たくさんお店がありますからね」

秀「では、歩きながら決めるとするかの」

そう言って私と秀吉君は色々なお店を回っていきました

――Ｓｉｄｅ　貴浩――

俺は仕事をこなして行くと明久と雄二が大会に行っていた２人が帰ってきた。

貴「おかえり、２人とも。試合はどうだった？」

明「もちろん。勝って来たよ」

明久から試合について聞くと相手はBクラスの根本だったので、
前回撮った根本の女装写真集を盾に勝ったそうだ。

楓「すみません。今戻りました」
そこで楓と秀吉が休憩から帰ってきた。
話を聞くと2人で色々出店を回ったらしい。

あれ?俺が2人を休憩にさせたけどこれってデートじゃないのか?
まあ秀吉だから大丈夫だろうけど・・・

貴「なら2人が帰ってきたから今度は明久と命が休憩してきて」

明「え?僕が?僕はまだ良いよ。それなら先に雄二が休むと良いよ」

貴「そうはいかないんだ。もう問題が起きんとも限らないから
せめて厨房には俺か雄二がいないとまずいからな。
で、俺はもう少ししたら大会でないといけないから今の内に
明久に休憩してもらう。
命は楓と交代だな。今までホールと厨房を交代しながらやって
もらったからな。
疲れてきているだろうしな。・・・・・・・・まあ他にも理由
はあるけど(ボソッ)」

明「わかったよ」

命「なら、明久君。私と一緒に休憩がてらどこか回りませんか?」
命がチャンスと思い明久に声を掛ける

秀「命よ。いきなりそう言うのではない。
明久は大会で疲れているのじゃからゆっくりさせるのじゃ」

優「そうよ命。無理を言っては駄目よ」

秀吉と優子は命が自分達以外の人間。特に男と一緒に回らせたくないのだろう。

まあそうはさせないが・・・

明「優子さんに秀吉。僕なら大丈夫だから」

貴「そうだよ。2人とも。もしこれで命が1人で回って命の身に何かあったら嫌だろう。

明久と一緒だったらボディガード役になるだろうしな」

優「むぅ・・・それは嫌だけど」

貴「なら、今回は2人で休憩にさせる。良いな」

俺は有無を言わさず決定する

命「なら、明久君お願いするね」

明「そうだね。なら一緒に回ろうか。

優子さんに秀吉安心してよ。何か起きても絶対命の身は守るから」

そう言って明久と命は休憩に入った。

まだ優子と秀吉の2人は納得してないようだけど・・・・・・

貴「で!!そこの2人!!抜け出そうとするな!」

俺がそう言うと島田さんと姫路さんは驚いたようにこちらを見た

島「ウチも休憩が欲しいんだけど」

姫「私もです」

貴「2人の休憩はまだだ。仕事に戻れ！あとでちゃんと休憩は用意しているんだから」

姫「で、でも。命ちゃんが心配で・・・」

貴「大丈夫。明久がいるからな。2人は心配しないでいいから仕事に戻って。

・・・・・もし仕事を抜け出して2人の所に行ったら

今後、俺とムッリーニからは商品は二度と売らないからな」

島・姫「「わかりました。仕事に戻ります」」

貴「で！優子もだぞ！

俺はこれから大会で抜けるからホールはお前がいないと回らないからな！

だから、俺が戻るまで勝手に抜けるなよ！」

俺は念のため優子にも釘をさしておいた

ハァ

俺はそこでため息が出る。

工「何か大変そうだね」

な「頑張ってタカ君」

砂「本当にキミ達といると面白いよね」

椎「もうそんな事を言ったら駄目だよスズちゃん。えっと、織村君も色々と頑張ってね」

貴「ああ、何か疲れたよ・・・・・・
皆、あの2人と優子と秀吉を見張っていて置いてもらえるかな。なんか不安でね」

工「うん。わかったよ。それぐらいなら僕たちに任せてよ」

砂「了解でありますよ」

貴「じゃあ悪いけどお願いするな。なのはは厨房の方にまわってもらっても言いか」

な「わかったよ」

貴「雄二！厨房の方は任せるな」

俺は厨房を雄二となのはに任せ、大会へと、向かって行った

清涼祭（7）　～俺の相手はアイツか～

～明久ＳＩＤＥ～

今僕は貴浩に言われて休憩に入り命と一緒に
出店などを見て回っている

命「ごめんね明久君。せっかくの休憩だったのに
私に付き合ってもらっちゃって」

明「そんな事ないよ。命といると楽しいからね。
それにせっかくのお祭りなんだから楽しもうよ」

命「わ、私といるとた、楽しい／／／／」

僕がそういうと命の顔が赤くなった

明「どうしたの命？もしかして具合が悪くなったの？」

命「い、いえ。何でもないよ！」

命は顔を横に振りながらそう答えた

命「そんな事より明久君！時間も長くないから楽しもうよ！」

命はそういうと僕の手を掴んだ

明（命の手やわらかいな／／／／）

明「う、うんそうだね。じゃあどこに行こうか？」

その後は僕は命と手を繋いだまま占いやお化け屋敷などの出し物を見て回った。

お化け屋敷では命がビックリして
僕に抱きついてきた事は皆に内緒にしないと・・・・・

でも命と一緒に見て回れて楽しかったな

そういえば僕確かオリエンテーリングの時のチケットで
命と一緒に行く予定だったよね。
その時も今日みたいに楽しかったらいいな

～貴浩ＳＩＤＥ～
試合会場に向かっている最中

考えたら俺は忙しくて対戦相手のことを知らなかったので
次は誰が対戦相手なのか考えながら向かっていると、
会場には先ほど明久と話していた根っこコンビの片割れである根城がいた

貴「なんだ？次は誰が対戦相手なのかと思ったら根城だったのか」

根城「げぇ！？織村か！？お前が相手か！」

俺の顔を見て顔を引き攣っている。まあ、根本同様に色々やったからなぁ・・・

木「それでは、試験召喚大会2回戦を始めてください」
今回の立会人は、数学の木内先生だ。

貴浩・根城『試獣召喚(サモン)!』

Fクラス　織村貴浩　　VS　　根城敦
数学　　６３０点　　１７４点

互いの点数が表示される。

根城「な!?なんだよその点数は!?」
俺の数学の点数を見て驚く根城
そういえばコイツは俺の数学の点数は知らなかったな。

貴「さて、今回も恥ずかしい目にあわせるかな」
俺が冗談交じりにそう告げると

根城「や、やめろ。せ、先生!俺は棄権する」

根城は俺と戦う前に棄権したので俺の勝利となった。

根城を見ると少し震えているように見えたが、前回少しやりすぎたかな・・・・・
いや、楓を泣かせたんだからあれぐらいはまだぬるいよな・・・・・
・うん

木内先生が勝利宣言をあげたので俺はＡクラスへと戻って行った。

清涼祭（7）　～チビッ子現る～

貴「ただいま―・・・ってあれ？あんまり客がいないな」
俺が大会に行った時にはかなりの数の客がいたのに、戻ってみると客があまりいなかった

秀「お、戻ってきたようじゃの」

あまり仕事が無いようで皆暇そうだ。

優「で？勝ってきたの？」

貴「もちろん。そういえば雄二は？見当たらないのだけど」

ム「・・・・・・・・トイレに行った」

貴「それより、この客の少なさはどういう事だ？」

優「わからないわ。あなたが試合に行って少ししてから客足が減ったのよ」

工「そうなんだよ。あの迷惑な客が来てからは妙な客は来てないしね」

貴「ってコトは、教室の外で何かが起きているということか？」

秀「かもしれんのう」

そうやって皆で悩んでいると

？「お兄さん、すみませんです」

雄「いや。気にするな、チビッ子」

？「チビッ子じゃなくて葉月ですっ」

雄二と小さな女の子の声が聞こえた

秀「雄二が帰ってきたようじゃな」

すると雄二は小さい女の子を連れて戻ってきた

貴「雄二、お帰り。その子は霧島さんとの間の子か？随分と大きいな」

砂「なに、なに。ユウヤンとキリキリの子だって？」

刀「お前・・・子持ちだったのか・・・！？」

雄「な！？そんな訳あるか！？」

工「え？違うの？」

雄「違うわ！！このチビッ子はここに戻る途中にあってここまで連れて来ただけだ」

貴「え？雄二ってロリコンだったの！？」

砂「スクープだね。２－Ｆ坂本雄二はロリコンだった！？ってね」

雄「何でそうなる!?おい砂原!俺はロリコンじゃねぇ!!」

須「これより異端審問k・・・」

霧「雄二。浮気は許さない」

須川が異端審問会を開く前に霧島さんが割って入った。
さすがの須川も霧島さんのオーラの前には黙るしかないようだ

雄「待て翔子。あいつらの言う事を信じるな」

霧島さんがドンドン雄二に迫って行く。
少しやりすぎたか・・・・・流石にフォローするか
止めないとやばい事になるしな

貴「ごめんごめん雄二。ちょっと悪ノリしすぎたよ
霧島さん落ち着いて雄二はロリコンじゃないから」

霧「・・・・・・・本当?」

霧島さんは雄二に迫るのを止めてこちらを振り向いた

貴「本当だよ。だって雄二は霧島さんにしか興味もってないよ」

雄「△■○〒$□&(なにいってるんだ)!?」

秀「雄二よ何を言っているのかわからぬぞ」

霧「・・・・・・・・・雄二///////」

さてこっちはもういいとして

貴「さてキミはどうしてここに来たのかな？」
俺は小さい女の子に尋ねてみる。
すると周りにいた人達が集まってくる

葉「あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ」

な「お兄ちゃん？そのお兄ちゃんのお名前わかる？」

葉「あぅ・・・わからないです・・・・・・」

刀「家族の兄じゃないのか？それなら、特徴はわかるか？」

特徴がわかれば探し出せるかもしれないな

葉「えっと・・・・・・バカなお兄ちゃんでした！」
俺は周りを見渡して該当する人物を捜すが

貴「そうか・・・・・・たくさん居るんだが」

そうこのクラスにはＡクラスのほかにＦクラスの人達もいるからバカはたくさんいる

葉「あ、あのそうじゃなくて、その・・・・・・」

工「まだ他に特徴があるのかな？」

葉「その・・・すっごくバカなお兄ちゃんでした！」

F全員『『『吉井だな』』』
Fクラスの俺と秀吉を除く全員の男子が宣言する
貴「ああ・・・もしかしたら明久かな？
　ごめんな葉月ちゃん。今そのお兄ちゃんここに居ないんだよ」
葉「あぅ。そうなのですか・・・」
葉月ちゃんが落ち込む。
島「あれ？葉月じゃないの？こんなところにどうしたの？」
そこへ島田さんが葉月ちゃんの元へやってきた
楓「美波ちゃんその子と知り合いなんですか？」
島「知り合いも何もウチの妹よ」
貴「島田さんの妹なのか？」
島「そうよ」
葉「お姉ちゃん！」
島「どうしたの葉月？何かあったの？」
貴「葉月ちゃん曰く明久に会いに来たらしいよ」
島「アキに？そうなの葉月」
葉「はい、そうです」

貴「まあ葉月ちゃんの件は明久が帰ってきてからとして、
まずこの客の少なさがどういう事なのか調べないとな。
ムッリーニと砂原さん何か知ってる？」

砂「私の情報だとどこかで私たちの料理がまずいって噂が流れているらしいよ」

ム「・・・・・・その情報は新校舎の何処かから流れている」

貴「そうか・・・それが何処から流れているかわかるか？」

俺が2人に尋ねると2人は首を横に振った

貴「どうする？優子、雄二」

優「今の情報だけじゃ何も言えないわね」

雄「そうだな。情報が少なすぎる」

俺たちがどうするか考えていると

葉「お兄ちゃん。葉月ここに来る途中で色々な話を聞いたよ」

と、そこで思わぬところから助け舟が出る

貴「葉月ちゃん。それを何処で聞いたかわかる？」

葉「えっと確か色んな服を来ていて綺麗なお姉さんがいるお店――」

ム「・・・・・・急いで行くべき」

雄「そうだな。それはすぐに行くべきだな」

刀「土屋と坂本の言う通りだな」

それを聞いた瞬間、雄二とムッリーニ、刀麻は教室を飛び出していった。

後それを聞いていたA・Fクラスの男子全員（俺と秀吉、明久以外）も飛び出していった。

俺は行きたかったが少し気になる事があり考えていたら出遅れた。

明久にいたってはまだ命とデート中だが・・・・・・

清涼祭（7）　～チビッ子現る～（後書き）

今回　葉月登場です

原作とは違い葉月は明久とすぐには出会いませんでした

これが今後どうなるのかお楽しみに

もしかしたらスルーかも・・・・・・

清涼祭（8）　～妨害者はどこに？～

皆が出て行った教室では

秀「驚いたぞ。まさか皆行ってしまうとはの・・・」

優「男って全く・・・」

な「にゃははは・・・」

霧「・・・・・・雄二許さない」

でもあいつら場所はわかるのか？

貴「うーん、ねぇ葉月ちゃんそれってどの変で聞いたの？」

葉「ここのお部屋の近くです」

貴「ってことは同学年の教室ってことか」

優「そういうことになるわね」

砂「そういえばワンちゃんの所がコスプレ喫茶するって言ってたよ」

貴「ワンちゃん？犬？」

椎「スズちゃん。ワンちゃんじゃわからないよ。
　ごめんね織村君。ワンちゃんって言うのはＢクラスの獅子川一子ちゃんのことなの」

貴「ああ。一子のところか」

砂「ワンちゃんのこと知ってるの？」

貴「ああ。Ｂクラスと戦争した時１対１で戦って勝ってからはライバルみたいなものかな」

砂「そうなんだ。ター君が噂のライバルだったのかい？」

貴「噂がどうなのか知らないけど多分そうだよ」

優「その話は後にしなさい。今はお客をどうにかしないと」

貴「そうだな。砂原さん一度、一子か五十嵐さんに連絡とってもらっていいかな？」

砂「了解さ！」

俺は砂原さんに頼んでＢクラスに噂を流している奴がいるか確認してもらっている

貴「そうだ島田さんと姫路さんは今のうち休憩して来て良いよ。
葉月ちゃんと一緒に遊んできなよ」

島「え？良いの？」

優「良いわよ。葉月ちゃんを1人にしちゃ可愛そうよ」

島「じゃあお言葉に甘えるとするわね」

葉「わーい。お姉ちゃんと遊べるです」

姫「私も一緒で良いんですか？」

貴「良いよ。今のうち休憩してきなよ。大会もあって休めないだろ」

優「そうよ。島田さんと一緒にいってらっしゃい」

楓「こちらは私たちにまかせてください」

姫「じゃあお言葉に甘えさせていただきます」

そうして島田さんと姫路さんは休憩に入り、
俺は雄二とムッリーニ、刀麻を呼び出してどうするか考える事にした

雄二と霧島さんとの間に一騒動あったのは言うまでもないが・・・・

砂原さんが一子に連絡をとってみるとBクラスに噂を流しているやつらが居る事がわかった。

貴「じゃあひとまず俺と雄二、刀麻の3人でBクラスに行って来るから、

ここは、優子達に頼むよ」

優「わかったわ。でもこの客の数じゃ接客といってもね・・・」

貴「そうだな。・・・なら、ここにいる何人かに呼子になってもらって
客を連れてきてもらえば良いんじゃないのか」

優「それしかないわね。でも誰がするの？」

貴「そうだな・・・・・女子では工藤さんとなのはと砂原さん
男子では久保のが適任じゃないかな」

優「そうね。その４人なら問題ないでしょうね」

工「僕は良いよ」

な「私も」

砂「いっぱい呼んできちゃうぜ♪」

久「僕も頑張るとしよう」

貴「お願いするな。厨房はムッリーニと楓、霧島さんにお願いできるかな？
明久と命が帰ってきたら厨房に入るように言ってな」

ム「・・・・・（コクン）」

楓「任せてよ兄さん」

霧「・・・・・・わかった」

貴「後の人はホールをお願い」

優「わかったわ。そっちは頼むわね」

貴・雄・刀「「「任せろ！」」」

俺達3人は妨害したヤツを排除するためにBクラスへと向かった

清涼祭（8）　～妨害者はどこに？～（後書き）

Bクラスはコスプレ喫茶を行っています
ついに次回犯人が誰なのかわかります

清涼祭（9）　～これもあいつ等のせいだぁ！！～

俺たちは優子達に任せ、噂を流しているやつらがいるBクラスへと向かった

獅「おお。貴浩か。鈴歌から聞いてる。今ちょうど中央の席に座った」

俺たちは一子の後ろをついて行き中央の席を見た
一子は警官のコスプレをしていた

雄「やはりあいつらか」
そこに居たのは先ほど交渉？したばかりの常夏島トリオだった

刀「よし、行くか」

雄「待て、不知火」
雄二が行こうとする刀麻を止める

刀「どうした坂本。早くあいつらを止めないと」

雄「駄目だ。こんなところで殴れば悪評がより広まってしまう」

刀「だが、こうやって指をくわえて待つわけには行かないだろう」

雄「わかっている。なあ獅子川って言ったよな」

獅「何だ？」

雄「予備のコスプレの制服とかあるか？」

獅「あるが、どうするんだ」

雄「あいつらを追い払う」

獅「あいつらは迷惑だからな。追い払ってくれるならありがたいが・・・」

雄「ああ。追い払うから何か衣装を貸してくれ。女性物の衣装なら何でも良い」

獅「わかった。今準備しよう
おいきらり！予備の衣装あったよな？ちょっと持ってきてくれないか？」

五「うん、あるよ。じゃあ持ってくるね」

一子がそう言うと近くにいた五十嵐さんが衣装を取りに行った
五十嵐さんは初〇ミクのコスプレだった。
その衣装どうやって手に入れたんだ？
ってか何のためにいるんだ？

貴「雄二。その衣装をどうするんだ？」
Aクラスから誰か来てもらって着て貰うのか？

雄「簡単だ。着てもらう」

貴「誰が？」

雄「お前だ」

貴「は？俺？」

あら？耳が悪くなったのかな。俺が女装するって。
いやいやいやいや、無いだろう。うん。俺の聞き間違いに違いない

雄「貴浩お前が着るんだ」

やっぱり俺の聞き間違いじゃなかった

貴「嫌だよ。雄二か刀麻が着れば良いじゃないか！」

雄「俺たちは着れないな。こんな体の女子は居ないだろうが！
体格からみたらお前が適任なんだ。楓の為だと思い我慢しろ」

そこで楓の名を出すか。この野郎断れないじゃないかｏｒｚ

貴「・・・・・・・・・わかったよ。俺がやれば良いんだろう」

雄「そうだ。よろしく頼むな」

俺はしぶしぶ了承し、男子更衣室へと向かいそこで雄二から連絡を
受けた秀吉と
五十嵐さんの手により女装させられた。

女装した俺の姿はｆａｔｅに出て来るセイバーだった。

刀「よく似合ってるじゃないか」

雄「ああ。やらせた俺が言うのも何だがセイバーそっくりだぞ」

五「お似合ですよ、織村君」

女装が褒められたってうれしくないやい。ヅラやパッドまでつけられてしまったＯｒｚ

何故か本格的な衣装があり、セイバーの武器までついているから驚きである。

貴「この剣って本物じゃないよな？」

この衣装は正直重い。剣だけでも結構な重さがある

五「それはレプリカだよ。衣装と剣も重さとは本物そっくりにしてあるんだよ」

本当になぜ、こんな衣装を持っているんだ

五「でも、こだわりすぎて私も他の人も重すぎて着れなかったんだよ」

貴「だろうな。俺だって着ているだけで結構きつい」

雄「無駄話はやめて行くぞ」

俺は雄二の作戦どおりに行うためセイバーの衣装で常夏島トリオに近づいた。

常「とにかくマズイ料理だったよな」

島村「そうだな。あんな料理を出すなんて信じられないよな」

あの連中、まだそんな会話を続けているのか。
お前らのせいで楓が傷ついたんだ。この聖剣でお前らを斬ってくれる

貴「お客様（裏声）」
俺は静かに近づいていきこのクラスのウエイトレスであるかのように声を掛ける。
俺が近づいていくとき周りで何かざわめきが起きているが何かあったのだろうか？

夏「なんだ。へぇー。こんな子もいたのか」

島村「セイバーのコスプレか。そっくりじゃねえか」

貴「お客様、申し訳ありませんが足元を掃除しますので、少々よろしいでしょうか？」

常「掃除？さっさとすましてくれよ？」
3人が席から立ち上がる。

貴「きゃっ」
俺はそれと同時に常村とかいう先輩にわざとぶつかり倒れこむ
我ながら気持ち悪い悲鳴だな

雄「おい、こんな可愛い少女を突き飛ばすとは何てやろうだ！」
そこで、雄二と刀麻が暴漢退治という名目で姿を現す

常「何言ってんだ。ソイツが勝手にぶつかって倒れｔ――」

刀「何てやろうだ！女の子の所為にするなんて男としてあるまじき行為だな」

客「そうだそうだ」

客「その女の子に謝れ」

客「俺たちが成敗してくれる」

本当はここで雄二と刀麻があいつらをやっつけるはずだったのだが、ここに居たお客さんが雄二達と加わって一緒に制裁してくれている。

さて、じゃあ俺も参加しよう

貴「あの私も参加して宜しいですか？」

客『もちろんですとも』

そういうとお客さんが島村先輩の両手両足を逃がさないように拘束する

貴「ありがとうございます。それじゃあ」

俺は衣装に備え付けられている剣を抜く

島「おい、ま、まさか。それで攻撃するわけじゃないよな・・・・・・」

俺は一度微笑んで

貴「じゃあ。『約束された聖剣（エクスカリバー）』！！」

俺は剣を振りぬいた。

ドゴン

物凄い音がしたな。もはや剣で斬る音ではなかったな・・・・・・
流石に普通に斬るのはやばいと重い剣の腹で叩いたが1撃で島村先輩は気絶してしまった。

貴「皆さんありがとうございました」

一応協力してくれたので例を言い、雄二達の元へ行こうとすると、まだ常夏コンビは健在していて、今さっき気絶した島村先輩を抱え出て行った。
雄二と刀麻も3人を追いかけて出て行ってしまった。

貴「先ほどあの3人の方が言っていた喫茶店のことですが、
私はあそこの料理は美味しかったと思いますのでよろしければ皆さんも
一度召し上がりに行ってみてくださいね」

俺は一応自分の店の宣伝をしてから一子達の所へ行った

獅「お疲れ！ありがとうな。あいつらを追っ払ってくれて」

貴「こちらこそ、協力してくれてありがとう。
一度こっちの喫茶に顔出してよ。その時はサービスするから」

獅「おう、わかった。行けたら行ってやるよ」

貴「さて、じゃあ着替えるとしますか。・・・・・・俺の着替えは何処だ？」
あたりを見渡しても俺の着替えが見当たらない。
あれ？雄二達は俺の着替えを何処に置いたんだ？
五「着替えでしたら坂本君がＡクラスに持っていきましたよ。
そこの更衣室においておくとか言っていましたが」
へ？
ってことは俺はこの衣装のままＡクラスへと向かわないといけないのか・・・
五「あと、その衣装ですが織村君に差し上げますね。
衣装は着れてなおかつ似合う人が着ないといけませんから。
織村君はその条件に当てはまりますので」
貴「え？い、いや、で、でも」
五「大事にしてくださいね。あっ私これから仕事なのでここで失礼しますね」
獅「お、僕もだ。じゃあ貴浩。後は頑張れよ」
２人はそう言うと俺の前から去って行った。
俺にこの衣装をどうしろと・・・・・・
それに俺はこの衣装のままＡクラスへと戻らないといけないのかＯｒｚ
しかもＡクラスの男子更衣室（中に作った）に行くにはホールを通

らないといけない。
これも全て雄二のせいだ。
覚えていろよ坂本雄二。この恨みは必ず晴らしてやる・・・・・・・・・

結局ここに居ても仕方がないので俺は泣く泣くAクラスへと戻って行った（泣）

清涼祭（9）　～これもあいつ等のせいだぁ！！～（後書き）

まさかのセイバーコスプレでした

そしてまさか貴浩が着ることになるとは

貴「これというのもあいつらが邪魔なんかするからだ・・・・・・」

あら？貴浩の周りに黒いオーラが・・・・・・

さて次回の更新も頑張りたいと思います

清涼祭（１０）　～俺は・・・・・・～

俺はセイバーのコスプレをしたままＡクラスの教室の前まできた
正直入りたくはない。だが入らないと着替えれない。
俺の周りでは色々ざわついて来たので意を決して扉を開けて入った。
Ａクラスへと入ると先ほどまで客が全然居なかったのに
今は溢れんばかりの客が来ている。
今なら誰にも気づかれずに更衣室にいけるか
俺がそう思い更衣室まで行こうとすると
砂「おかえりなさいませお嬢様」
早速見つかってしまった。
砂「お席に案内しますね」
そう言うと砂原さんは席まで案内しようとする。
お、もしかしてばれていない。それなら席に近づいて更衣室に駆け込めばいいか。
俺がそんなことを考えながら砂原さんの後をついていく。
周りからは俺のコスプレが珍しいのか、俺を見てくる客が多い。
席に案内されている途中

楓「兄さん。戻ってきたんだ？」

すると俺の前には楓いた

楓「あの兄さん。どうしてそんな格好されているんですか？」

バレた！？

貴「に、兄さんとは誰の事でしょうか？私は――」

楓「何で裏声で話してるの？今忙しいから遊んでないで手伝ってください」

・・・楓にはごまかせないらしい

秀「お？貴浩戻ってきたのかの」

あげくの果てに秀吉まで来てしまった。もう完璧にばれてしまった・・・・Ｏｒｚ

砂「え！？この子。ター君なの？へぇーわからなかったよ」

優「え？これが貴浩君なの？」

明「え？これ貴浩なの？セイバーそっくりだよ」

やっぱり気づかれてなかったんだ。

霧「・・・・・・・・・・可愛い」

か、可愛いって・・・・・・・全然嬉しくないな

椎「セイバーさんが来たぁあああああ!!」

椎名さんに至っては興奮しているし。

ム「・・・・・・・・・・・・・・・（パシャパシャ）」

貴「おい！ムッリーニ！俺の惨めな姿の写真をとるな」

この後も皆から何故か質問をくらってしまった。早く着替えたいのに・・・・・・

客「すみません」

そこでお客さんから声がかかる。

優「はい、どうされましたかお嬢様？」

客「そこにいらっしゃる方と写真を取らせていただきたいのですが・・・」

客から思わぬ要望が入る。

確かにウチは喫茶のほかに写真撮影（５００円）を行っているので頼めばできるのだが・・・

優「わかりましたお嬢様。今すぐ準備いたしますので少々お待ちくださいませ」

優子はお客にそう言うとこちらに振り返った

優「じゃあ貴浩君。悪いけど今からその格好で仕事してね。
　これで今さっきの客が途絶えた分を取り戻すから」

貴「え？い、いや。ちょっとまｔ――」

優「土屋君は撮影の方に専念してもらって良いかしら」

ム「・・・・・・・・・了解（コクン）」

優「楓と命、八神さんそして代表は厨房をお願いできるかしら」

優子はどんどん皆に指示を出していく。
もうこれは決定だな・・・・・・この衣装のまま仕事をしないといけないのか
この後は俺はこのセイバーの衣装のままウエイターとして働いたり写真を撮られたりした。

清涼祭（11）　～VS獅子川～

優「貴浩君。確かもう大会の試合の時間だから行って来て良いわよ」

そう優子が言うと俺は時間を見る。
あと5分もしたら俺の試合じゃないか

貴「優子!?何故もうちょっと早目に言わなかった!!
　着替える時間が無いじゃないか」

優「ご、ごめんなさい。着替える時間を入れるの忘れてたのよ」

優子は目をそらしながら言った
本当は着替えたいが着替えたら試合に間に合わないので、この衣装のままで向かった。

会場へ向かうとそこには一子の姿があった

獅「今度の相手はやはり貴浩だったか。ってか。何でその衣装のままなんだよ!」

貴「・・・・・着替える時間が無かったんだよ・・・」

3回戦まで観客が居なくて良かったよ。いたら心が折れてたよ・・・

竹「織村君はその格好でよろしいですか?」

貴「・・・先生もう早く始めてください」

竹「わ、わかりました。それでは3回戦始めてください」

獅「試獣召喚(サモン)！」

貴「・・・・・・試獣召喚(サモン)」

Fクラス　織村貴浩　ＶＳ　獅子川一子
現国　２７０点　１８７点

お互いの召喚獣が召喚される。

俺はもうAクラス戦で点数を見せたのでもう点数を隠す事はしなくなった。

獅「さうがだな貴浩。だが負けねえぞ」

貴「悪いけど早く終わらせてもらうよ」

獅「できるものならやってみろ！？」

一子の召喚獣が武器を構え迫ってくる。

俺は武器を抜き、刀にに向けて集中すると

貴「魔人剣！！」

1戦目でやったように斬撃を飛ばす。

一子はその攻撃にあたり点数を減らす

獅子川一子　現国　１５０点

貴「まだだよ。剛魔人剣！！」

先ほどの魔人剣より威力がある斬撃を放つ。

一子はその攻撃を防御して防ぐが威力が高く点数を減らしている

獅子川一子　現国　１３０点

貴「悪いな一子。早く終わらせて着替えたいんだよ。・・・俺の心が折れる前に」

獅「ちっ。さすが貴浩だな。召喚獣をここまで操作できるなんて」

俺は一子の攻撃をジャンプしたりしゃがんだりしてかわしていく、今だ一子の攻撃は当たっていない。

獅「だが、このままじゃ終われないな」

一子は再び俺に攻撃を仕掛けてくる。

俺はその攻撃を避けつづける。相手が武器を大きく振りかぶる。

貴「これで終わりだ」

俺はその攻撃を避け、一子の召喚獣を叩き切った。

貴「グゥ！？」

俺は一子の召喚獣を倒した。

だが、一子もただではやられてはいなく。俺の召喚獣の左腕を切り

落としていた

Ｆクラス　織村貴浩　ＶＳ　獅子川一子
現国　１５７点　０点

竹「勝者Ｆクラス織村君！」

獅「また勝てなかったか」

貴「まさか、左腕を切り落とされるなんて思わなかったよ」

獅「でも、負けは負けだ」

貴「今度戦う時は俺も危ないかもな」

俺は一子と少し会話した後、今度こそ着替えるためＡクラスへと戻った

清涼祭（１２）　～見つけたぞお前ら～（前書き）

今回も２話更新したいと思っています

おそらく今日の夕方か夜には更新できると思います

清涼祭（１２）　～見つけたぞお前ら～

俺がＡクラスへと戻るとそこには明久が女性と一緒に写真撮影している姿が見えた。

明「あっ貴浩。おかえり。試合はどうだった？」
ホールで写真撮影をされていた明久がやってきた。

貴「少し危なかったよ」

こっちが焦っていたのもあり最後の攻撃を急ぎすぎて左腕を切り落とせれた。
運が悪けりゃ負けていたかもしれない。

貴「明久はホールで仕事か？今さっき写真撮られてたみたいだけど？」

明「うん。何か結構多くてね。何でだろう？」

今の台詞を聞くと少し腹が立つな。
俺も写真はお願いされたが、その多くはこのセイバー衣装のおかげだからな・・・

貴「そういえば明久。雄二と刀麻が何処にいるか知らない？」

明「え？雄二と刀麻ならあそこにいるよ」

明久はホールを指差した。
どうやら２人は今ウエイターの仕事をしているらしい。

貴「ありがとう明久。俺ちょっと用があるから行くな」

明「え？貴浩？」

俺は明久にそう言うと雄二と刀麻の元に歩み寄った。

貴「雄二、刀麻。あの常夏島トリオは？」

雄「ああ、貴浩か。まだ着替えていなかったんだな。
あの3人ならすまないが取り逃がしてしまった」

貴「そうか・・・・・ならここでくたばれやぁ！！」

俺はそう言うと『約束された聖剣』を抜き雄二に向かって斬りかかる。

雄「おわっ！！」

間一髪のところで雄二が避けてしまう

貴「ちっ、外したか・・・・・・次は外さない・・・・・」

刀「どうしたんだ貴浩？」

貴「お前も同罪じゃぁあああ！！」

今度は刀麻に向かって斬りかかる。

刀麻もすんでのところでかわしてしまう

雄・刀「「俺たちが何をしたって言うんだよ！？」」

貴「2人がそれを言うか・・・・・お前らの・・・・・お前らのせいで俺はぁあああ！！」

再び俺は2人に斬りかかろうとするが、
近くにいた優子となのはに止められてしまう。

貴「何故止める！こいつらを八つ裂きにしないと俺の気がすまないのに」

楓「止めてよ兄さん。お客さんがいるんだよ」

クッ仕方がないな楓とお客の為だここは引いてやる。
だがこれですむと思うなよ。

優「私もやりすぎたと思うわ、だけどここは抑えて欲しいの」

工「貴浩君・・・・・」

貴「・・・・・わかった。
まず着替えてくるよ」

俺はこの場を優子に任せ着替えに行った。

俺が着替えている間に優子がお客に謝ってくれて、
秀吉が雄二たちに事情を説明してくれたようだ。

貴「悪い皆。気が動転してた・・・・・・」
俺は先ほどのことを謝った
優「本当よいきなり暴れだすからビックリしたわよ」
貴「大変申し訳なく思っております」
霧「・・・・・・優子もうそれぐらいにする」
工「まあまあ優子もそれぐらいにしてあげなよ。
僕達も調子に乗ってあの衣装のまま仕事をさせてしまったんだから仕方がないよ」
優「そ、そうね。私たちも悪かったわね。ごめんなさいね」
貴「いや、もういいよ。もう終わった事だし・・・・・・」
な「じゃあこれで今さっきの件はおしまいってことで良いよね」
貴「ああ。じゃあ仕事に戻るとするよ」
優「そうして頂戴」
貴「楓、命。今日のシフト表みせてもらってもいい？」
俺は命からシフト表を受け取りまだ休憩していないメンバーを見た。
まだ休憩に入っていないのは
Aクラスだと霧島さんと優子、なのは、工藤さん、砂原さん、椎名さん、刀麻の7名、

Fクラスだと雄二とムッリーニ、俺の3人だった。

清涼祭（１３）　～これで許したと思うなよ～（前書き）

本日２話目更新しました

清涼祭（13）　～これで許したと思うなよ～

俺はシフト表を確認すると

貴「じゃあ、霧島さん休憩入ってきて良いよ」

霧「・・・・・・・・良いの？」

貴「うん、もちろん。こっちは俺がやるから大丈夫だよ。
だから雄二と2人で休憩してきて良いよ」

雄「な、なんで俺と！？」

俺が許したと思っているのか

貴「雄二もまだ休憩してきてないだろ。
2人は試合もあるんだから今のうちに休憩しないとな。
だから雄二。ちゃんと霧島さんをエスコートしてあげるんだよ」

霧「・・・・・・・・・織村はいい人」

貴「じゃあ楽しんできてね」

雄「な！？、ま、翔子。あぁあああああああ」

雄二は霧島さんに連れられて行った

貴「ムッリーニも休憩してきて良いよ。今までずっと大変だっただろ？」

俺や明久は試合などがあってここから離れたりしたが
ムッリーニはずっとここで働いていたんだ。
さすがに疲れるだろう

ム「・・・・・・・・わかった」
ムッリーニは頷くと休憩に入っていった

貴「じゃあ厨房は明久と楓、命、なのは、刀麻で頼む。
後の主要メンバーはホールでよろしく」

俺は両方兼任で行うとするか

姫「あ、私が厨房に入りましょうか」

貴・明・秀「「「ホールでお願いします（するのじゃ）！！」」」

姫路さんが厨房に入ろうとしたので3人で断りを入れた。
姫路さんが入ったらせっかく戻ってきた評判がまた悪くなってしまう

葉「あの馬鹿なお兄ちゃん。葉月もお手伝いしたいです」

明「え？葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

葉「うん！手伝うから、お姉ちゃん達が着ている服ちょうだい！」

あの年でなんていい子なんだ。涙が出てくるよ

明「けど、ごめんね。気持ちは嬉しいけど、葉月ちゃんの分の制服

は・・・」
明久が申し訳なさそうに言っていると、
ム「・・・・・・・・・・・・・・・!!（チクチクチクチクチク）」
休憩に入っていたはずのムッリーニが凄い勢いで裁縫していた
明「ム、ムッリーニ!?確かさっきまでいなかったよね」
ム「・・・・・・・・・・・・・・俺の嗅覚をなめるな」
秀「なぜじゃろう。物凄いかっこいい台詞なのじゃが、
凄くかっこ悪い気がするぞい」
貴「じゃあ、葉月ちゃんの分の制服はムッリーニに任せるとして俺たちは仕事に戻ろう。
島田さんは葉月ちゃんと一緒にいてあげて」
島「え?ウチたちはこれから試合で出ないといけないから難しいかも」
貴「そうなのか。なら砂原さん一緒にいてあげて」
砂「了解なのさター君!」
俺たちは砂原さんに葉月ちゃんを任せ仕事に戻った。
しばらくしてから

俺たちは仕事を手伝っていたが試合の時間がきたので
大会の会場へと向かった。

４試合目の試合は対戦相手が腹痛のため棄権したので俺の不戦勝となった。

明久と雄二のペアは４試合目で姫路さんと島田さんのペアとあたった
その勝負は雄二の１人勝ちで終わった。
内容は古典の勝負で明久が姫路さんを抑えている間に雄二が明久もろとも
姫路さんを倒し、残った島田さんを倒したらしい

次の俺の試合までには時間があるので仕事に専念する事にした。
俺の次の試合は５試合目なので、
準決勝ということなので少し準備が必要なので時間がかかるらしい。

仕事では俺と明久の２人がホールと厨房を交代しながら仕事し、
試合から戻ってきた姫路さんと島田さんにはホールに入って貰う。
ムッリーニと雄二には厨房に入ってもらい、
霧島さんもホールに入ってもらった。

そして次になのはと刀麻の２人に休憩に入ってもらった。
途中で試合に出る人がいたら場所を交代させながら仕事をこなして

いった。
（もちろんの事、姫路さんは絶対厨房に入れないようにしている）
しばらく仕事をこなしていき、一通り客足が減ってきたので一度店を閉めて
全員で掃除をする事にした。

掃除だけなので教室には
工藤さん、楓、命、なのは、椎名さんたちに任せて
後の人は在庫の整理や確認などの作業にまわってもらった。

そして俺達はその間に試合となり会場へと向かっていった

先に明久と雄二の試合があるらしいので俺は試合を見ることにした

清涼祭（１４）　～雄二と翔子～

～　明久ＳＩＤＥ　～

瀬「お待たせしました！　これよりタッグマッチ戦準決勝を開始したいと思います！」

僕らが到着すると、審判を務める日本史の鈴村瀬名先生のアナウンスが流れた。

瀬「出場選手の入場です！」

まるで格闘技の入場みたいだ、と思いながらお客さん達の前に立つ。

僕らの向かいからは対戦相手の霧島さんと優子さんがやってきた

明「雄二、作戦はどう？」

雄「任せておけ。　抜かりはない――頼むぞ秀吉っ！」

雄二が目の前の木下さんに向かって秀吉と呼びかける

何を言っているんだろう？確かに外見は秀吉に見えるけど、

中身はＡクラスに所属している秀吉のお姉さんのはず

―って、そうか！

秀吉と木下さんが瓜二つだということを利用した、二人の入れ替わり作戦か！

やるじゃないか雄二！

優「ああ、秀吉なら・・・・・・」
と、優子さんがステージ脇の一角を指差す
明「ひ、秀吉!?　どうしてそんな姿に!」
そこには手足を縛られた秀吉がいた
雄「バ、バカな!」
霧「・・・・・・雄二、邪魔しないで」
雄「そうは行くか。俺はまだやりたい事がたくさんあるんだ!」
明久・雄二ペア　ＶＳ　翔子・優子ペア
ペアチケット目当ての翔子は、その相手となる雄二を前にして悲しい顔をする。
霧「雄二の考えてる事くらい、私にはお見通し」
秀「くっ・・・・・・すまぬ、雄二。ドジを踏んだ・・・・・・」
ム「・・・・・・・・・!!（パシャパシャパシャ）」
明「撮影なんかしてないで、早く秀吉の縄をほどいてあげてよ!
（その秀吉の写真、後で売って欲しい）」
雄「明久、本音が混ざってるぞ?」

優子の降伏勧告があり、その間にムッツリーニは即座に秀吉の縄を解いた。
僕はそこで貴浩と目線で会話しある行動に出る事にした

（雄二、僕に考えがあるから、指示通りの台詞を言ってほしい）

と言った後に、多少のやり取りをして明久は雄二の背に身を隠す。

明（翔子、俺の話を聞いてくれ）
雄「翔子、俺の話を聞いてくれ」
明（お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ）
雄「お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ」

明久の指示通りに、雄二は棒読みにならない様気を付けてセリフを合わせる。

霧「・・・・・雄二の考え？」

明（俺は自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして、胸を張ってお前と幸せになりたいんだ！）
雄「俺は自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして、胸を張ってお前と幸せになりたい……って、ちょっと待て！」

霧「・・・・・雄二」

雄二が明久の方を慌てて向こうとするが、明久が強引に頭を押さえつける。
一方、翔子は雄二の台詞に、うっとりとした表情を浮かべ始めた。

明（だから、ここは譲ってくれ。そして、優勝したら結婚しよう）
雄「だっ、誰がそんな事言うかボケぇッ！！」

貴浩がスタンガンを取りだし、僕に放り投げる。
それを受け取ると雄二の首に最大出力でおしつけた。

明「くたばれ」

雄「くぺっ！？」

霧「・・・・・・雄二？」

続きの台詞を待ち望む翔子に、明久と貴浩は目配せ。

貴（おい、秀吉）
秀（うむ、了解じゃ）

貴浩の指示に従い、秀吉がゆっくりと深呼吸。

雄（秀）「だからここは譲ってくれ。そして、優勝したら結婚しよう。愛している、翔子」

本人と区別がつかない声真似で、最後の台詞が紡がれた。
指示していないセリフまで追加となっていたが、この際、誰も気にしなかった。

霧「・・・・・・雄二、私も愛している」

雄「ま、待て……俺は、愛してなど……こぺっ！？」

明久が雄二の首をひねり、そのまま黙らせた。

明「ふはははは！　これで最強の敵は封じ込めた！　残るは優子さんだけだよ！」

優「ひ、卑怯な・・・・・・！」

翔子は雄二の亡骸に抱きつき、戦意喪失。

だが雄二の方も力なく項垂れており、とても戦える状態にない。

清涼祭（１４）　～雄二と翔子～（後書き）

ここは原作通り雄二の策が見破られてしまうが
明久の機転により翔子を抑える事ができました
この後どうなるかお楽しみに！

清涼祭（１５）　～明久ＶＳ優子！？～（前書き）

大会準決勝
明久・雄二ＶＳ翔子・優子の対決の続きです

清涼祭（１５）　～明久ＶＳ優子！？～

貴「おーい明久、明日の決勝は頑張れよ！」

俺は霧島さんを抑えることができた明久を応援する

優「貴浩君、バカにしないで！　アタシ１人でも吉井君に負けないはず！
　行くわよ試獣召喚（サモン）！」

明「僕だって負けられないよ試獣召喚（サモン）！」

２－Ａ　木下優子　ＶＳ　吉井明久
保健体育　３２１点　１５３点

優「あら？吉井君成績上がったわね」

明「それはそうだよ。ほぼ毎日貴浩たちに勉強を教えてもらってるもん」

まあ、あれだけ教えてあげて点数が上がってなかったらＯＨＡＮＡＳＩが必要だったけど
伸びているみたいだし、よしとするか

優「でも容赦しないわ。行くわよ」

明「僕だって負けられないよ！！」

優子の召喚獣が向かってくる。僕はその攻撃をかわし反撃に出る

明「魔人剣双牙（まじんけんそうが）！！」

２つの斬檄が優子さんの召喚獣に向かっていく

優「え？　きゃあ」

斬撃は優子さんの召喚獣を切り裂いていく

さすが明久だな。俺の魔人剣と比べると斬撃の早さが違うな。

優「何？今の攻撃」

明「まだだよ。獅子戦吼（ししせんこう）！！」

今後は物凄い衝撃波を解き放ち攻撃する。

優「きゃあ！」

優子は防御するが吹っ飛ばされてしまう

明「これでとどめだよ！爪竜連牙斬（そうりゅうれんがざん）！！

明久の召喚獣は優子の召喚獣に近づき木刀で切りつけていく。

明「僕の勝ちだね優子さん」

明久がそういうと優子の召喚獣が消えていく

瀬「勝者！坂本・吉井ペア！！」

瀬名先生が勝者をコールする。

この瞬間、試合を見ていた人たちから歓声があがる

貴「さすが明久だな。まさかあそこまで技を出せるなんて」

秀「凄いのじゃ明久。まさか姉上に勝ってしまうとわの」

優「ええ。本当に驚いたわ。あの技は凄かったわよ明久君」

明「いや、貴浩や秀吉のおかげで霧島さんを抑えてくれたから
優子さんに集中して戦う事ができたからだよ」

秀「それでもあの点差なのに勝てたのは明久が凄かったからじゃぞ」

貴「そうだな。あの技のキレは凄かったぞ」

明「皆ありがとう。・・・・・ところで雄二は？」

優「坂本君ならあそこで代表と一緒にいるけど？」

優子が指差したほうを見ると雄二が霧島さんに何か薬か何か飲まされるところだった

貴「ちょ！？霧島さんストップ！！」

明「まだ雄二はこの後も必要だから薬は止めてあげて！！」

俺と明久はすぐさま2人に近づき薬を飲ませる事を止めさせた。

危ない危ない、さすがにあんな薬を飲ませたらさすがの雄二でもやばいな

秀「さて、次は貴浩の番じゃぞ」

貴「ああそうだな。頑張るとするかな」

そして俺は舞台にあがる
ちなみに明久と雄二、秀吉は俺の試合を見ていくことになり
霧島さんと優子は教室に戻り掃除の手伝いをするらしい

清涼祭（１５）　～明久ＶＳ優子！？～（後書き）

次回は貴浩の準決勝です

相手は誰でしょうか？お楽しみに

清涼祭（１６）　～貴浩　黒化！？～（前書き）

皆さん『バカと俺たちの召喚獣』を読んでいただきありがとうございます

皆さんのおかげでＰＶが１０万アクセス、ユニークが１万人を超えました。

これからもよろしくお願いします

清涼祭（１６）　～貴浩　黒化！？～

貴「さて、俺の相手は誰かな？」

刀「俺だよ」

俺の目の前に現れたのは刀麻だった。

貴「刀麻が俺の相手か」

よし先ほどのコスプレの恨みを晴らしてやる

刀「そうだ」

瀬「お待たせしました！　これよりシングルス戦準決勝を開始したいと思います！」

貴・刀『試獣召喚（サモン）！』

Ａクラス　不知火刀麻　ＶＳ　Ｆクラス　織村貴浩

保健体育　２８６点　４３９点

瀬「それでは始めて下さい」

刀「貴浩は保健体育まで高いのかよ」

貴「・・・・・・さてヤルカ」

刀「なあ、貴浩？お前何か雰囲気違わないか？」

貴「ソンナコトハナイヨ。
ジャアサッサト殺ルヨ！」

刀「やっぱりおかｓ・・・」

俺は刀麻がしゃべっている途中に攻撃をしかける

刀「な！？」

貴「・・・・ヨケルナヨ。アタラナイダロ」

刀「どうしたって言うんだ！？」

貴「いやいや先ほどのコスプレの恨みとかじゃないからな。
ってことで『グラビトン』！」

俺が腕輪を発動させると刀麻の召喚獣は床に倒れこんだ

貴「『グラビトン』『グラビトン』『グラビトン』『グラビトン』『グラビトン』
『グラビトン』『グラビトン』『グラビトン』『グラビトン』『グラビトン』・・・」

俺は何度も腕輪を発動させる。
もう刀麻の召喚獣は床に埋まりこんでいる

雄「や、やりすぎだろ・・・」

明「そうだね・・・・」

貴「マダダ、マダダヨ。マダオワッテイナイヨ」

秀「もう刀麻の点数は0に近いのに・・・・・」

刀「ギブアップだ」

俺がまだ続けようと思っていると刀麻が降参した

瀬「勝者Fクラス織村！」

貴「・・・・・もう終わり？」

明「もう終わったよ。じゃあみんなのところに帰ろうよ。
楓が待ってるよ、きっと」

貴「そうだな。じゃあ戻るとするか」

俺から少し離れたところでは

秀「今回の貴浩は怖かったのじゃ」

雄「ああ、そうだな」

刀「これからは貴浩は怒らせないようにしないとな・・・・・」

秀・雄「「そうだな（じゃな）」」

清涼祭（17）　～誘拐!?～

明「それより、早い所戻ろうよ」

雄「そうだな。ところで、姫路や島田は教室にいるのか?」

明「え?　まだ確認してないけど、いるんじゃないの?」

いきなりの話題に、明久は少々戸惑う。俺も少し戸惑う

雄「多分、そろそろ仕掛けて来る筈だと思うんだが・・・・・・」

貴「え!?　まっまさか、楓や命達に!?」

ム「・・・・・・雄二」

教室の前に行くと、ドアの前に立っていたムッツリーニが俺達にに駆け寄る

雄「ムッツリーニか。何かあったのか?」

ム「・・・・・・ウェイトレスが連れて行かれた」

貴・刀「「なっ!?」」

明「えぇっ!?　姫路さん達が!?」

予想外の事態に、俺も明久、秀吉も驚きの声を上げた。

ムッリーニが言うには攫われたのは
楓と命、なのは、優子、霧島さん、島田さん姉妹、姫路さん達らしい

雄「やはりな」

雄二は今回の事が予想できていたみたいだ

明「ってそんな事より、命達は大丈夫なの!?　どこに連れて行かれたの!?
　相手はどんな連中!?」

雄「落ち着け明久、これは予想の範疇だ」

明「え?　そうなの?」

雄「ああ。もう一度俺達に直接何か仕掛けてくるか、
あるいはまた喫茶店にちょっかい出してくるか、
そのどちらかで妨害工作を仕掛けてくると予想できたからな」

“俺たちに”という言葉に、明久も秀吉も疑問を持つ。
だが、それよりも今回の事態を解決するのが先と、決定づけた。

明「何だか、随分と物騒な予想をしてたんだね?」

刀「全くだ。誘拐なんて、流石に洒落じゃ済まないぞ?
　下手すれば警察沙汰だって言うのに」

ム「・・・・・・行先はわかる」

と言って、ムッツリーニが取りだしたのはラジオの様な機械。

明「何それ？　ラジオみたいに見えるけど？」

ム「・・・・・・・盗聴の受信機」

耳を疑ったが、まあここは気にしない事に。
これで楓たちの居場所がわかるなら今はそれでいい

秀「あえて何でもっておるかは聞かないのじゃ」

雄「さて、場所が分かるなら簡単だ。
　かる～くお姫様達を助け出すとするか」

貴「さて誰を誘拐したのか相手には後悔させないとな」

秀「そうじゃな。貴浩の言うとおりじゃな」

明「命たちにさん達に何かあったら、正直召喚大会どころの騒ぎじゃないからね」

雄「・・・・・・それが向こうの目的だろうがな」

明「え？」

貴「少し待っててくれ。荷物を待ってくる」

俺は更衣室に行き、スタンガンと今日五十嵐さんから貰ったエクスカリバーを
持ってきて明久達と合流した。

清涼祭（17）　～誘拐！？～（後書き）

秀「ところで貴浩よ。何をとりに行ったのじゃ？」

貴「五十嵐さんからもらったエクスカリバーとムッリーニからもらった
　スタンガンをとりに戻った。これで誘拐犯たちをブチのめす！！」

秀「その時はワシにも貸してくれぬか？」

明「あっ！僕にも貸して」

貴「もちろんだとも！これで誘拐犯を血祭りにあげよう」

雄「貴浩だけじゃなくまさか明久と秀吉までもが黒いオーラを纏うとはな」

刀「ああ、少し誘拐犯が気の毒に思えるぞ」

次回は皆で女性陣を助け出します

清涼祭（１８）　～誘拐犯フルボッコ～

雄「さて、作戦だが、ムッツリーニはタイミングを見て裏から助けてやってくれ」

ム「・・・・・・・・・・わかった」

刀「となると、俺達がやる事は１つだな」

雄「ああ。そう言う事だ」

貴「あいつらに死ぬ程後悔させてやる！！」

秀「いやいや、貴浩よ！いっそ海に沈めぬか？」

明「それも良いね。コンクリにつめて沈めようよ」

雄「・・・・・・お、お前ら殺すなよ」

貴・秀・明「「「なるべくそうするといいな？」」」

雄「何故疑問系なんだ！？」

『さて、どうする？　坂本と織村と・・・・・吉井だったか？

そいつら、この人質を盾にして呼びだすか？」

『待て。吉井ってのは知らないが、坂本と織村は下手に手を出すとマズい。
坂本は中学自体は、相当鳴らしていたらしいしな』

『それに織村って、あの織村だろ？　俺たちだけでそんな奴ら、どうやれってんだよ？』

『ああ。出来れば、事を構えたくはないんだが……』

『気持ちは分かるがそうもいかないだろ？　依頼はその3人を動けなくする事なんだから』

ムッツリーニの持っていた受信機からの、音楽に混じって聞こえる会話。
それを聞いて、3人は顔を見合わせる。

明（雄二に貴浩、この連中って）
雄（黒幕に依頼されたその辺のチンピラじゃないのか？）
貴（しかし、俺達を狙ってって・・・・・・）

ムッツリーニに案内された先は、文月学園から歩いて5分程のカラオケボックス。
そのパーティールームに、連れていかれたらしい。

葉『お、お姉ちゃん・・・・・・』

島『アンタ達！　いい加減葉月を離しなさいよ！！』

優『そんな小さな子を人質にするなんて、恥ずかしいと思わないの！？」

泣きそうな葉月の声と、島田さんと優子の怒鳴り声が次に響いてきた。

『お姉ちゃん、だってさ！　かっわいぃー！』

その声を聞いて、明久が今にも部屋に入りそうな勢いになる。

雄（待て明久、勝手に行動するな）

刀（まずは人質の救出が優先だ。ムッツリーニがうまくやってくれるから、

　それまで待とう）

明……わかったよ

ム『・・・・・・灰皿をお取り換えいたします』

『おう。で、このオネーチャンたちどうする？　ヤっちゃっていいの？』

『だったら俺は、コッチの巨乳チャンがいいなー！』

『あっ、ズリー！　それなら俺、２番目ね！』

『俺はこっちの女がいいな。見た目が病弱そうでいいじゃん！』

『それにしても笑えたよな。特にこの黄緑の髪の奴とか散々注意してきたくせに

　軽く一発殴っただけで気絶しちまったんだぜ』

『他の奴もそうだったろ、ハハッ』

明久のボルテージが上がる中、刀麻と雄二が抑える。
俺とて、手に持っているスタンガンをギリッと握りつぶしかねない勢いで握りしめていた。

『しかし、まさか似た顔が居るとは思わなかったな』

『ああ、木下命だろ？　ビックリするほど瓜二つだわ。
しかも姉と一緒して可愛いと来たもんだ』

命『やっ！　触らないで！』

優『ちょっと、やめなさいよ！』

楓『やめてください！』

『あーもう、うっせェ女だな！』

ドン、という突き飛ばした音と、楓の悲鳴。
そのあと、まるで何かがテーブルを巻き込んで倒れたような音。

ガチャッ！

貴・明・秀「「「おじゃましまーす」」」

俺達はそのままドアを開け放ち部屋へ。

命「あ、明久君に、秀兄に貴浩君？」

島「アキ・・・・・・それに、織村も」

優「貴浩君・・・・・・・」

楓「兄さん、秀吉君・・・・・・・」

不良に腕を掴まれている命と優子、そして倒れたテーブルの近くで尻もちをついている楓。
その突然の出来事に、皆驚いている様子。

「はァ？　お前ら誰よ？」

明「それでは失礼して・・・・・・死にくされやぁぁっ！」

「ほごあぁぁぁぁっ！」

明久は思いきり近づいた奴の股間をけり上げた。

「てっ、てめぇ！　ヤスオに何しやがる！」

明「イィッシャァァーー！！」

「ごぶぁっ！！」

その近くにいたチンピラが明久の顔面を殴り、
そのあと明久がハイキックを顔面に叩き込んだ。

明「テメェら、良くも命たちに手をあげてくれたな！　全員ぶち殺してやる！！」

「コイツ、吉井って野郎だ！」

「どうしてここが！？」

「とにかく、来ているならちょうど良い！　ぶち殺せ！！」

貴・秀「誰をぶち殺すって（じゃと）！？」

貴「よくも楓を。それに工藤さんにも。
　そしてとっととその汚い手を優子から離しやがれ！！」

秀「命、姉上、楓よ無事か！？
　よくもワシの大事な人たちに手をだしおったの」

殴りかかってきた奴の1人の顔面を、秀吉が思いきりエクスカリバーで殴りつけた。
俺は素手で相手を殴り付ける。

「げっ！　くっ、織村か！？」

「ん、何！？こいつがあの文月の『赤き死神』か！？」

懐かしいな。アレは確か昔楓にナンパしてきた男達を殴りなおした時についたんだったな

雄「やれやれ・・・このアホウが、少しは頭を使って行動しろってーーのっ！！」

「げぶっ！」

雄「翔子！無事か！？」

霧「・・・うん大丈夫」

その傍らで、向かって来た相手を壁に叩きつける雄二。
そう言いながら、更に他の奴に拳をたたき込み、今度は膝を鳩尾にめり込ませる。

「で、出たぞ！　坂本だ！」

「坂本まで来ていたのか！」

雄二を見て、チンピラが浮足立つ。

「坂本よぉ、この女がどうなってもいいのかぁ？」

向こうの1人が、なのはを羽交い絞めにしていた。

「良いか？　大人しくしていろよ？　さもないと、ヒデェ傷を・・・」

ム「・・・・・・「負うのはお前」だ」

ビシッ！　ビリッ！

「あがぁっ！」

羽交い絞めにしていた男は、腹を抑えると同時に白目をむいて倒れた。

バイトのフリして先に侵入していたムッリーニは瞬時に相手に詰め寄り腹を蹴り
なのはを助け出すと、スタンガンを押し当てたのだ

ム「・・・・・大丈夫か八神」

な「あ、ありがとう土屋君」

命「明久君っ！」

命が腕を広げて駆け寄っていく。

明「命！」

「吉井ぃ！　ヤスオをよくも！」

それに備え、明久が腕を広げて構えた所に来たのは、チンピラのパンチだった。

刀「うわーっ・・・」

「な、何だこいつ？　血の涙流してるぞ……？」

鬼気迫る雰囲気で、そのチンピラをしばき始める明久。

明「命、ちょっと待ってて！　こいつをシバき倒した後でもう一度・・・」

雄「命に島田に姫路、お前らもそこでにじっとしていろ！」

明「雄二！　キサマまで僕の邪魔をするのか！？」

貴「落ち着け明久、この場合しょうがないだろ？
　刀麻女子を守れよ！そしたらさっきの件を許してやる！！」

刀「任せろ！」

雄「くははははは！　それにしても、ちょうど良いストレス発散の相手が出来たな！
　生まれて来た事を後悔させてやるぜぇぇッ！！」

刀「あーあ、雄二の奴完璧キレてやがる。タイミングが悪かったな」

明「確かに、霧島さんに追い詰められてるこのタイミングで、雄二とケンカするなんてね」

同情するような言葉だがその中に情はこめられていない。
なぜなら言葉とは裏腹に自分達も今痛めつけている相手に容赦の念を込めず殴りつけているからである。

清涼祭（１８）　～誘拐犯フルボッコ～（後書き）

貴「ふぅ～スッキリした」

秀「そうじゃな。命たちに手を出したのじゃ当然の報いじゃな」

明「そうだね。命や楓たちに手を出したのが悪いんだよ」

貴「雄二も霧島さんが無事で良かったな」

雄「な！？」

明「本当だね。良かったね雄二」

霧「・・・・・・雄二ありがとう」

雄「・・・・・・／／／」

清涼祭（19）　～誘拐事件後～

誘拐騒ぎも一段落。
喫茶店の1日目が終了したAクラスにて、俺と明久と雄二と秀吉とムッリーニ。
そして・・・・・。

優「で、いつまで待たせる気？」

優子が貸し切り状態の教室でお茶を飲んでいた。
巻き込まれた以上、事情を聞かないと帰らないと言ってきかないためである。
そして楓や命、なのは、霧島さんも一緒に居る状態だ。
さすがに島田姉妹と姫路は刀麻に頼んで家に帰ってもらった
葉月ちゃんがいるので早めに帰らないと親が心配するだろうからな

雄「まあ待て。もうそろそろ来る頃だ」

秀「？　来るって、誰がじゃ？」

雄「ババァだ」

明「学園長（ババア）がかわざわざここに来るの？」

貴「あの学園長（ババア）がか！？」

優「ちょっと待ちなさい、アンタ達なんて事を言うの！？」

普通に考えてその場にいないとは言え学園長をババア呼ばわりなど褒められた事ではない。
というより、普通にババア＝学園長で通じる事に、流石に優子に驚いた。

貴「そう言えばさっき、雄二が何か話してたな？　あれはその事か」

明「話ねぇ・・・ダメだよ雄二、一応相手は妖怪といえど目上の人なんだから、
　用事があるならこっちから行かないと」

優「明久君、一応は余計よ？」

貴「そうだぞ明久！一応じゃないアレは完全に妖怪だぞ」

明「あっ、そっか！」

楓「突っ込むところはそこじゃないと思いますが・・・・・」

敬意もくそもない態度に、優子はツッコむ。
だが、誰一人気にする事もなく、話は続く。

雄「用事もくそもこの一連の妨害の原因はあのババァにある筈だ。
　事情を説明させないと、気がすまん」

明「ババァに原因が・・・・・・えぇぇっ！？」

秀「何じゃと！？　」

貴「やっぱりか・・・・」

優「ちょっと待ちなさいよ。それに学園長がらみって、アンタ達一体何をしてるの！？」

明「あ、あのババァ！　僕等に何か隠してたのか！」

貴「まあ、それは妖怪ババア長が来ればわかるだろうさ」

雄「貴浩の言うとおりだ。ひとまず落ち着け明久」

明「早く来い妖怪め！」

命「もう完全に妖怪よばわりなんですね・・・・」

な「にゃはははは」

明久も怒りを隠せなかった。

その所為で命や楓達が危険な目に遭い、喫茶店の経営は苦労の一途。

仲間の命運がかかっている以上、文句を言わないと気が済まなくなった

清涼祭（１９）　～誘拐事件後～（後書き）

少し長くなりそうだったのでババアとの話は２話に分けての更新となります。

ですので明日はいつもどおり２話更新したいと思っています

清涼祭（２０）　～再びババア登場～

学「・・・・やれやれ、態々来てやったのに、随分と御挨拶だねぇ、ガキ共が」

優「あっ、がっ学園長！」

優子達女性陣と秀吉は立ち上がって礼をする。

雄「来たかババァ」

貴「さて、どういう事か説明して貰うぞ？ババァ」

明「出たな、諸悪の根源め！」

学「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？」

雄「ねえ秀吉、アタシがおかしい訳じゃないわよね？」

秀「奇遇じゃの、ワシもそう思っておった処じゃ、姉上」

蚊帳の外の優子と秀吉は、そのまま黙る事にした。

雄「確かに黒幕ではないだろうが、
俺達に話すべき事を話してないのは十分な裏切りだと思うが？」

学「ふむ・・・・・やれやれ、賢しい奴だとは思っていたけど、
まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかったよ」

雄「最初に取引を持ち掛けられた時からおかしいとは思っていたんだ。
あの話だったら何も俺たちに頼む必要はない。
もっと高得点を例えばそこにいる翔子や木下優子の様な高得点をたたき出せる
優勝候補を使えば良いからな」

雄二の言葉を聞いて、学園長は周りを見回し霧島さんや優子の姿に気がついた。

学「ん？　ああ、あんたが霧島翔子で木下優子かい？　何でここにいるさね？」

貴「騒動に巻き込まれたんだよ。それで事情を聞かせろってうるさくてね」

学園長は成程ねと頷いた。

貴「話に戻るが、そうだな。優勝者に後から事情を話して譲って貰うとかの手段も取れた筈だし」

雄「なのに、俺達を擁立するなんて効率が悪すぎる」

雄二の言葉に、学園長は頷いた。それを見て俺は皆に事情を説明。

優「成程ね、教室の改善ね・・・・・それで、教室の改修を条件に副賞の回収を？」

貴「まあ表向きはな？　考えてみたら教育方針の前にまず生徒の健康状態が重要な筈だ。

教育者側、増して学園の長が反対するなんてありえなかった」

明「という事は、僕等を召喚大会に出場させる為に、ワザと渋ったと言う事だね？」

雄「そう言う事だ。あの時俺がババァに１つの提案をしたのを、覚えているか？」

話が終わった処で、雄二が割り込んできた。提案とは・・・・・・

学「科目を決めさせろってヤツかい？　成程ね、あれでアタシを試したってわけかい？」

雄「ああ。めぼしい参加者全員に、同じような提案をしている可能性を考えてな。
　もしそうだとしたら、俺達だけが有利になるような話には乗ってこない」

明「そうだよね。僕たちにとっては破格過ぎる条件だ。なのに、ババァは提案を呑んだ」

つまり、この３人が決勝に出なければ学園長が困ると言う事。
そして、学園長が困らなければならない連中が居る事につながる事も、
その３人の周りに起きている。

貴「じゃあ学園祭の喫茶店ごときで営業妨害が出たりして
　俺達が勝ち上がっては困る奴がいるってことか？」

雄「ああ。それに何より、俺達の邪魔をしてくる連中が

翔子たちを連れだしたのが決定的だった。ただの嫌がらせなら、ここまではしない」

優「私も巻き込まれた事ね？　・・・正直、どうなる事かわからなかったわ」

幼い少女も巻き込まれたと言う事もあり、流石に優子も悪寒を感じた。
下手をすると警察沙汰であることゆえに、尚更に。

学「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったのか・・・・・すまなかったね」

と言うと、突然学園長が明久達に頭を下げて来た。
その姿に、明久達も驚きを見せる。

学「アンタ達の点数だったら、集中力を乱す程度で勝手につぶれるだろうと
　最初は考えていたのだろうけど目論見が完全に潰されて、焦ったんだろうね」

雄「さて、ここまであった以上話して貰いますぞ？あんたが俺達を選んだ真の目的を」

学「はぁ・・・アタシの無能をさらすような話だから、
　出来れば伏せておきたかったんだけどね・・・・・・」

だから、誰にも公言しないでほしい。そんな前置きをする学園長。

雄「無能？　じゃあアンタの目的は、チケットじゃなくて腕輪か？」

学「そうさね。アタシにとって、企業の目論見なんてどうでもいいのさ」

腕輪とは、優勝者に贈られる3種類の腕輪。

優勝者にはテストの点数を二分して2体の召喚獣を同時の呼びだせる腕輪。
そして教師なしで立会人になり科目指定をした上での召喚用フィールドを形成できる腕輪。
その2種類の“白金の腕輪”
そして召喚獣の能力を向上させる腕輪の”深紅の腕輪”

学「そうさ。その腕輪を、アンタ達3人に勝ちとって貰いたかったのさ」

明「僕たちが勝ち取る？　回収してほしい訳じゃなくて？」

雄「あのな・・・・・回収が目的だったら、俺たちに依頼する必要ないだろ？
　そもそも、回収なんてマネは極力避けたいだろうし、な？」

明「ねぇ雄二、どういう事？」

理解できなかったのか、明久が疑問を投げかける。

雄「新技術は使って見せてナンボだってことだろ？
　デモンストレーションもなしに回収なんてしたら、
新技術の存在自体疑われるだろうから、このババァにしてみれば避けたいってことだ」

学「・・・・・欠陥があったからさ」

貴「やっぱりか」

苦々しく顔をしからめる学園長。
技術屋にとって新技術の欠陥は耐え難い恥でありそれを生徒に明かすのだから無理もない。

ちなみに何故俺が予想できたのかはその腕輪の開発の実験台になったからだ

明「欠陥？　どんな欠陥です？」

学「入出力が一定水準を超えると、暴走を引き起こすんだよ。
だからアンタ達が使うなら、暴走は起らずに済む」

雄「成程な、だから得点の高い優勝候補を使わず俺達みたいな“優勝の可能性を持つ低得点者”が
ババァにとっては一番理想的だったってことか」

優「じゃあ、アタシ達がもし決勝に出てたら・・・・・・」

知らないとは言え、自分達が暴走の引き金を引こうとしていた・・・
その事に、優子は顔を青ざめさせた。

明「えーっと、つまり・・・・・？」

貴「つまり白金の腕輪はバカにしか使えないってことだ。
そしてババアが選んだバカが俺達って事」

明「何だとババァ！！」

秀「説明されぬとわからん時点で、否定できないと思うんじゃが？」

秀吉のツッコミで、明久は苦々しい顔をした。

学「とりあえず、召喚フィールド作成用の方はある程度まで耐えられるんだけどねぇ
　もう片方の同時召喚用と召喚獣融合用は、現状だとBクラス程度で暴走する可能性がある。
　だからそっちは出来れば吉井専用にと」

明「あのさ、これはほめられてると取っていいんだよね？」

貴「何を聞いてたんだよ明久は？Bクラス程度で暴走する可能性があるって事は、
　それ以下のバカにしか使えないってことだろ？」

明「何だとババァ！！」

雄「いい加減自分で気づけ！！　それより、そうなると黒幕の正体は大体絞れてくるな」

貴「そうだな。明久にもわかりやすく言ってやると、腕輪の暴走を阻止されたら困る奴ら。
　つまり文月学園に生徒を取られた他校の経営者が絡んでると見ていい。
　後これは個人的な直観だけど、教頭の竹原も関与してる思う」

その言葉に、全員の視線が俺に集まった。

学「やはりそうだったかい・・・近隣の私立校に出入りしてたなんて話を聞いたが、
　最早間違いないさね」

明「となると、僕等の邪魔をしてきた常夏島トリオや、例のチンピラは・・・・・・」

雄「教頭の差し金だろうな」

明久はふむふむ、と頷いてみてふと思う。

明「あのさ・・・じゃあ僕たちは、文月学園の存続が掛かった問題に巻き込まれてたって事？」

雄「そうなるな。試召戦争と試験召喚システムは、
　その特異な教育方針と制度で存在自体の是非が問われているシロモノだ。
　そんな状態で暴走なんて問題が起きたら、学校その物の存在意義も問われる」

学「騙していた事はすまなかったね。だが、目的は既に達成はされているんだ。
　このまま何もなければ、全てはまるく収まるんだよ」

確かに表向きは、既に目的は達成された。
だが、このまま向こう側が黙っているとも思えない以上、用心に越した事はない。

優「はぁっ・・・まさかアンタ達が、こんな事に巻き込まれてたなんてね」

明「ごめんね、優子さん。でも・・・・・・」

優「良いわよ。事情はよくわかったから・・・それに皆の事、しっかり助け出したでしょ？
だから良いわよ、それは」

と、優子は明久の肩をバンと叩いて、俺に駆け寄る。

貴「それじゃ、聞きたい事は聞けたし、もう帰ろう」

雄「そうだな。家に帰ってやる事もあるし・・・それに明日も早いしな」

学「それじゃアタシは学園長室に戻るとするかね」

学園長が静かに椅子から立ち上がる。

学「3人とも、学園長としても個人としても、礼と謝罪をさせてもらうよ」

明「はい」

そう言うと、学園長は出て行った。

貴「さて、俺達も帰るか」

雄「ああ。そうだな。今日は俺達が女子を送って帰るか。

もう何もないとは思うが用心しておいたほうがいい」

明「そうだね」

貴「それじゃ優子に工藤さん、俺で悪いけどエスコートさせてもらうよ？」

言わずもがな楓と命、なのはは一緒に帰る。

優「ええ、そうさせてもらうわ」

工「うん、お願いするね」

貴「気にするなよ。困った時はお互い様さ。明久も一緒に帰ってくれるか」

明「え！？僕も？」

貴「こっちは女子の人数が多いからな。秀吉もいるが心もとなくてな」

明「そういうことなら良いよ」

貴「頼むな」

そうして俺達は家に帰り、学園祭初日は幕を閉じた。

清涼祭（２０）　～再びババア登場～（後書き）

正直かなり長くなりました

予告どおり今日も２話更新したいと思います

今日の夕方か夜には更新したいと思います

清涼祭（２１）　～雄二の提案～

誘拐事件から一夜明けた翌日の朝、俺は楓となのは、木下３姉妹と工藤さん、
と共に学校に向かっていっている。
そこへ、

明「おーい、貴浩！」

貴「明久！？どうしてこんな時間に学校に！」

明「何でって、今日の大会のためにテストを受けにきたに決まってるじゃん。
　それより木下さん達、朝大丈夫だった？」

優「私は、貴浩君と一緒に登校してきたけど特に問題なかったわ。
　それに何かあっても貴浩君と秀吉が守ってくれるだろうし」

工「僕も途中で貴浩君たちとあって一緒にきたよ。
　護衛されてるようで結構面白かった」

な「そうだね。タカ君が守ってくれるもの」
三者三様の答えが返ってきた。みんなあんな事があったのに強いな

明「それなら良かった。」ニコッ

貴「明久、今日の大会の為にしっかり勉強してきたのか？」

明「もちろんだよ！」

命「さすが明久君です！」

意外そうな顔でみんなが明久を見ている（命以外）。

確かに前の明久だったらそんな事絶対しないと思うから無理もないけどな・・・・

そのまま明久と一緒に学校へと向かった

Ａクラスに着くと

優「さあ皆、清涼際２日も頑張りましょう！」

Ａ・Ｆ「「「「「「うおぉおおお！！」」」」」」

貴「今日のシフトの組み分けを発表するな」

雄「それはちょっと待ってほしい」

俺がシフトを発表しようとすると雄二が間に入った

明「どうしたの雄二？」

雄「いやな、シフトの事でな」

な「シフトがどうかしたの？」

雄「昨日はほぼ全員が一度は休憩に入っているんだが、

貴浩と木下長女、工藤の３人だけは昨日休憩に入っていない」

明「え!?そうなの。てっきり休憩に入ってたんだと思っていたけど」

雄「昨日は色々ゴタゴタしていてコイツらは休憩に入っていないんだ。
だから3人には今から休憩に入ってもらってほしいんだ。
さすがに昼の忙しい時間帯は手伝ってほしいからな。
それに貴浩と俺と明久は午後から大会の決勝戦があるから
それまでに1回休憩に入ってほしい」

貴「そんなの良いよ、別に。今日は忙しくなると思うし」

明「駄目だよ貴浩。昨日休憩に入っていないなら今から休憩に入ってゆっくりしてきてよ。それまでは僕達で頑張るからさ」

楓「そうだよ兄さん。明久君の言うとおりだよ」

貴「でもな・・・・・」

優「でも皆に悪いし・・・・」

工「そうだね・・・・」

霧「・・・・・大丈夫優子、愛子。
こっちは私達がいるからゆっくりしてきて」

命「そうですよ。こちらは私達に任せてください」

雄「そういう事だ、ひとまず今はゆっくりして来い」

貴「・・・・・わかったよ。じゃあお言葉に甘えるとするよ」

優「そうね。じゃあ代表、皆。お願いするわね」

工「じゃあ優子、貴浩君！せっかくだから一緒に周らない？」

優「私は良いわよ」

貴「2人が俺なんかで良いならいいけど」

明「じゃあ3人ともいってらっしゃい！」

命「貴浩君！ちゃんと優姉と愛ちゃんをエスコートするんだよ！」

俺は明久たちに見送られながら教室を出て行った

清涼祭（２１）　～雄二の提案～（後書き）

次回は貴浩と優子、愛子と清涼祭をまわります

今まで命ばかりだったのでようやく貴浩のほうができます（笑）

これからもよろしくお願いします

清涼祭（２２）　～両手に花～

俺は休憩時間を用いて優子と工藤さんと一緒に清涼際の出し物を見て周っている最中だ。

でもなんで俺なんだろう？

２人ならモテるだろうから彼氏が居てもおかしくないのに

それに俺でなくても男はいるはずなのになんでだろ？

工「ねぇ、あそこのクレープでも食べない？」

貴「そうだな。じゃあ買いに行くか」

そこで俺達は１年生がやっているクレープ屋にいきクレープを頼んだ。

俺がチョコバナナで優子がストロベリー、工藤さんがピーチのクレープを頼んだ

工「良いの貴浩君？クレープ代出してもらって？」

貴「気にしないでよ工藤さん」

優「ありがとうね」

貴「どういたしまして優子」

工「・・・・ねぇ貴浩君」

貴「どうかしたの工藤さん？」

俺達がクレープを食べ終わって歩き回っていると工藤さんが話しかけていた

工「何で僕は苗字でさんづけで呼ばれているのに
　優子の事は名前で呼び捨てなのかな？」

貴「え！？それは優子とは1年のときから知り合いだし、
　それに秀吉と命だけ呼び捨てで優子だけさんづけじゃ
　仲間外れみたいで嫌じゃない。だから呼び捨てで呼んでいるんだ」

工「そうなんだ。なら僕の事も名前で呼んでよ！」

貴「え！？」

工「何？僕の事は名前で呼びたくないの？」

貴「そうじゃないけど」

優「そうね。このままだと愛子を仲間はずれにしているみたいね」

貴「わ、わかったよ！じゃあ愛子　でいいよな」

愛「そうそう、それで良いよ」

貴「で、次はどこに行く？」

愛「それなら僕、お化け屋敷に行きたいな」

貴「お化け屋敷？そんなのもやっているのか？」

優「確か3年生がやっている見たいらしいね。それに結構人気があるらしいわよ」

貴「なら、そこに行って見るか」

愛「うん！」

お化け屋敷をやっているところで受付のお姉さんにお金を支払う

3年「いらっしゃいませ。あら？あなた両手に花で羨ましいですね」

貴「え！？」

3年「3名様ですね。ゆっくり楽しんできてくださいね」

そうして俺達は中に入っていく

貴「かなり凝ったお化け屋敷だな。遊園地とかにあるお化け屋敷そのものだぞ」

愛「貴浩君、僕怖いよ♪」

とそこでいきなり愛子が俺の右腕に抱きついてきた

貴「な！？何してるんだ愛子！？」

愛「何って、怖いから貴浩君の右腕に掴まっているんだよ」

貴「いや、そうじゃなくてだな。
　ってか優子もなんで俺の左腕にくっついているんだ？」

優「私も愛子と同じ理由よ。何？愛子は良くて私は駄目なのかしら？」

貴「そうじゃないけど」

優「ならいいわよね」

工「貴浩君。両手に花状態だね」

貴「ははは・・・・・」

その後も腕に抱きつかれた状態でお化け屋敷を見て回った。
正直途中から殺気みたいなのがあったが気にしないでおこう。
さっきから2人が俺の腕に抱きついているから2人の胸があたっていて
今は理性を働かせるだけで精一杯なんだから。

でも2人ともとても可愛いんだけど
楓や命、なのはに比べると胸が少し物足りないような気が・・・・・・

優「ねぇ貴浩？今何か失礼な事を考えなかったかしら？」

愛「そうだね貴浩君？僕もそう思ったんだけど気のせいかな？」

貴「き、気のせいだよ。2人が可愛いなと思っていただけだよ」

嘘は言ってない嘘は

優・愛「「え!?／／／／」」

2人を見てみると何故か顔を真っ赤に染めていた

貴「どうしたんだ2人とも?体調でも悪いのか?」

優「な、なんでもないわよ!」

愛「そ、そうだよ。何でもないから!」

貴「そうか?なら良いけど。でも気分が優れないならすぐに言ってな」

その後も色々な出し物を見て回り

Aクラスへと戻り喫茶に手伝いをして大会の試合が来るまで働いた

清涼祭（２２）　～両手に花～（後書き）

貴浩が工藤さんの事を名前で呼ぶようになりました

今後貴浩は島田と姫路の事はさんづけしないようになります。

清涼祭（２３）　～シングル戦決勝～

《さあついに始まりました召喚大会決勝戦！
なおこの試合から実況を務めさせていただくよん♪
２－Ａ所属、の砂原鈴歌です。皆さんよろしくね♪》

『『『鈴歌ちゃーーーん愛してるーーーー！！』』』

へぇ～５回戦から実況がつくんだ。ってか砂原さんって人気あるんだな

ル『さて皆様。長らくお待たせ致しました！
　これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

決勝の立会いを務める日本史のルーティ先生がアナウンスが鳴り響く。
大会は先にシングルス戦を行い、その後でタッグマッチ戦を行うみたいだ

砂『出場選手の入場だよ！』

砂原さんの言葉で俺と明久雄二が舞台へと上がる。
先に俺達を紹介するみたいだ

ル『まずはシングルス戦では２年Ｆクラス所属・織村貴浩君、
　そしてタッグマッチ戦では２年Ｆクラス所属・坂本雄二君と、
　同じくＦクラス所属・吉井明久君です！皆様拍手でお迎えください！』

盛大な拍手。さすがの決勝戦だからお客さんが多いなぁ。

ル『何と、最高成績のＡクラスを抑えて決勝戦に進んだのは、
２年生の最下級であるＦクラスの生徒です！
これはＦクラスが最下級という認識を改める必要があるかもしれません！』

貴「ルーティ先生は嬉しいことを言ってくれるな」

明「そうだね！」

ル『そして対する選手は、シングルス戦では３年Ａクラス所属島村辰彦君
タッグマッチ戦は３年Ａクラス所属夏川俊平君と、
同じくＡクラス所属・常村勇作君です！皆様こちらも拍手でお迎え下さい！』

拍手を受けながら入場。コールを受けて僕らの前に姿を現したのは、昨日散々迷惑をかけてくれた例の常夏島トリオだ

ル『出場選手が少ない３年生ですが、
それでもきっちりと決勝戦に食い込んできました。
さてさて、最年長の意地を見せることができるでしょうか！』

同じように拍手を受けながら、３人はゆっくりと俺達の前にやってきた

ル『それではルールを簡単に説明します。試験召喚獣とはテストの点数に比例した――』

アナウンスでルールの説明が入る。俺達ははそれを無視して先輩たちと睨みあった

雄「ようセンパイ方。　もうセコい小細工はネタ切れか？」

腕を組んで、小馬鹿にしたような雄二の態度。こういった仕草が様になる男だ

夏「お前らが公衆の面前で恥をかかないように、という優しい配慮だったんだがな。
　Ｆクラス程度のオツムじゃ理解できなかったか？」

貴「残念ながら、あんたらの言葉なんてＡクラス所属でも理解できないだろうな。
　まずは日本語を覚えてくるんだな。　サル山の坊主大将」

常「て、テメェ、先輩に向かって・・・・・！」

観客には聞こえない程度の小声で挑発合戦が行われている。

明「先輩。　１つ聞きたいことがあります」

島「ぁんだ？」

明「教頭先生に協力している理由はなんですか？」

そう聞くと、先輩たちは一瞬驚いた顔をした

島「・・・・・そうかい。　事情は理解してるってコトかい」

明「大体は。それでどうなんですか？」

島「進学だよ。上手くやれば推薦状を書いてくれるらしいからな。
　そうすりゃ受験勉強とはおさらばだ」

明「そうですか。そちらの２人も同じ理由ですか？＞」

夏「まぁな」

常「そういう事だ」

明「・・・・・そうですか」

明久は小さく頷いて会話を打ち切る。

常「本当は小細工なんて要らなかったんだよな。
　Ａクラスの俺たちとＦクラスのお前らじゃ、そもそもの実力が違い過ぎる」

雄「そうか。それなのにわざわざご苦労なことだな。そんなに俺と明久、貴浩が怖かったのか？」

夏「ハッ！言ってろ！お前らの勝ち方なんて、相手の性格や弱味につけこんだ騙し討ちだろうが。
　俺たち相手じゃ何もできないだろ！」

ル『それでは試合に入りましょう！ではシングルス戦からです。選手の方は前に、どうぞ！
　それ以外の方はリングから一度降りてください』

説明も終わり、審判役の先生が俺たちの間に立つ

貴浩・島村「「試獣召喚（サモン）」」

掛け声をあげ、それぞれが分身を喚び出した。

向こうの装備はオーソドックスな斧と鎧。

高得点者の召喚獣らしく、質はかなり良さそうなものに見える

日本史　３－Ａ　島村辰彦　３２３点　ＶＳ　２－Ｆ　織村貴浩　４９２点

砂『おっと何だ？あの点数？さすがター君だね♪』

島「な、なんだよその点数は！？」

貴「日本史は得意だからね」

島「チッ、理数系の教科なら問題ねぇのに」

貴「さあ、せっかくの祭りを邪魔をしたんだ。覚悟しろよ！」

俺は先輩の召喚獣に切りかかっていく

島「そう簡単に当たるかよ！」

さすがは先輩だ。俺達より１年早く操作しているだけある。だけど

俺や明久には負けるな

貴「魔人剣！」

俺の斬撃が先輩の召喚獣にあたる

砂「おっと！ター君の召喚獣から何か斬撃みたいなのが飛んで行ったぞ」

島「何ぃ！？それがお前の腕輪の力か！？」

・・・違うけど

貴「もういっちょ、魔人剣！！」

今度は斧で斬撃の直撃を防ぐ

島「そう何度も直撃するか」

貴「なら近づいて斬るだけだ」

そういうと何度か斬りつけ鍔迫り合いになった

島「なら仕方ねぇ。２年相手に大人げないが、経験の差ってやつを教えてやるよ！」

先輩の召喚獣が距離をとった

島「確かお前は特別処遇者とかいって物に触れられるんだよな」

なんだ？何をするつもりだ？

そういうと先輩は足元に落ちているリングの破片を蹴った。

貴「ッ！？」

その蹴った破片が俺の召喚獣の頭の部分にあたりよろめく

砂「おっーとター君どうした？急に動きが鈍ったぞ。その隙にシマタツ先輩が攻撃に行ったぁ！」

島「だれがシマタツだ！？まあ今のうちに！」

貴「グゥ！？」

俺は咄嗟に後ろに下がったが胸のあたりに痛みが生じる。胸に少しかすったみたいだな。
まさか物に触れられるという発想からああいう攻撃をしかけてくるとは

島「チッ、仕留められなかったな。だが今で点数がかなり減ったぜ」

日本史　３－Ａ　島村辰彦　２１０点　ＶＳ　２－Ｆ　織村貴浩　２２６点

砂「今の攻撃で点数が大幅に減ってしまったぞ！このままシマタツ先輩が勝ってしまうのか？
それともター君が反撃に出るのか？」

貴「そっちがそういう手を使うならもう容赦はしない」

俺は先輩の召喚獣に突っ込んでいく

島「はっ！何を言ってやがる。また同じようにやってやるよ！」

貴「『グラビトン』」

俺は先輩を中心に重力をかける。俺の召喚獣は物に触れることができる。

つまりは物理的に干渉が出来るという事だ。なら腕輪の効果も同じ事が言える。

よって腕輪の能力により島村先輩自身に重力がかかっている状態だ

島「な！？何だこれは！？体が重い・・・・」

貴「さっきのお返しだ！行くぞ！！『殺劇舞荒剣（サツゲキブコウケン）』」

島「グッ！」

貴「おりゃりゃりゃりゃりゃ、おりゃぁ！！」

俺は剣や格闘による連続攻撃の後、敵を気で大きく吹き飛ばす

日本史　３－Ａ　島村辰彦　ＶＳ　２－Ｆ　織村貴浩

０点　２０６点

ル「勝者　２年Ｆクラス　織村貴浩！！」

そこで会場から歓声があがる

砂「シングルス戦の勝者は２年Ｆクラスの織村貴浩だよ♪

皆、勝者に拍手を送ってあげてねん♪」

再び歓声と拍手が鳴り響く

明「やったね貴浩」

雄「よくやったな」

貴「当たり前だ！！」

俺は明久と雄二にハイタッチする

貴「次は2人の番だぞ。必ず勝てよ！」

雄「わかっている」

明「もちろんだよ」

貴「最後にあいつらの行動に注意しろよ」

清涼祭（２４）　～タッグマッチ戦決勝～

～　ＳＩＤＥ明久　～

ル『それでは次の試合に入りましょう！次はタッグマッチ戦です。選手の方は前に、どうぞ！
　それ以外の方はリングから一度降りてください』

明久・雄二・常夏「「「「試獣召喚（サモン）」」」」

掛け声をあげ、それぞれが分身を喚び出した。向こうの装備はオーソドックスな剣と鎧。
高得点者の召喚獣らしく、質はかなり良さそうなものに見える

≪日本史　Ａクラス・常村勇作　２０９点　＆　１９７点　夏川俊平・Ａクラス≫

砂『さすがＡクラスですね。やはり点数が高い』

確かにＡクラスに所属しているだけのことはある。点数はかなりのものと言えるだろう

夏「どうした？　俺たちの点数見て腰が引けたか？」

常「Ｆクラスじゃお目にかかれないような点数だからな。　無理もないな」

誇らしげにディスプレイを示す先輩達。反論はしない。確かに誇っても良いくらいの点数だ。

けど、こんな点数が取れるなら、自分たちの実力で受験したらいいじゃないか。
それなのに、僕たちの人生で一度しかない高校2年生の学園祭を壊そうとした
――僕の大切な人たちに取り返しのつかないような酷いことをしようとした

夏「ホラ、観客の皆様に見せてみろよ。　お前らの貧相な点数をよ」

常「夏川。　あまり苛めるなよ。　どうせ直ぐに晒されるんだぜ？」

明「・・・・・・前に」

常「ぁん？」

明「前に、クラスの子が言っていた」

夏「何だ？　晒し者にされた時の逃げ方でも教えてくれたのか？」

ギャハハハ、と笑う坊主先輩。
試召戦争の時、姫路さんが言ってくれた言葉が頭に浮かぶ。
そう・・・・・・あの時、彼女はこう言っていた

明「『好きな人の為なら頑張れる』って」

常「ハァ？　コイツ何言ってんだか」

明「――僕も最近、心からそう思った」

≪日本史　Ｆクラス・坂本雄二　２１５点　＆　２３１点　吉井明

久・Fクラス≫

常夏「「なっ！？」」

砂「おっと！これは驚き！まさかアッキーとユウユウがここまで点数が高いとは！？
　私も驚きだよ」

点数に表示されたディスプレイを見て、2人の顔色が変わった

明「アンタらには小細工なしの実力勝負でブッ倒してやる！」

試験召喚獣が獲物を構える。　戦闘開始だ

明「雄二。点数が上がったね」

雄「まあ翔子に負けてから勉強しているからな
　それよりまさか明久が俺よりも点数が高いとはな。驚いたぞ！
　なおさら負けられないな」

明「分かってる。貴浩たちのおかげでここまで頑張れたんだ。
　絶対負けるものか！！」

雄「そうだな――行くぞっ」

先に動いたのは雄二の召喚獣だった。　装備が軽い分、動きが速い

常「夏川！　こっちは俺が引き受ける！」

明「それじゃ、僕の相手は先輩ですね」

夏「上等じゃねぇか！　多少ヤマが当たったくらいで良い気になるなよ！」

正面から坊主先輩の召喚獣が剣を構えて突っ込んでくる

明「先輩、取り乱しすぎですよ？ただの突撃じゃ避けてくれと言ってるようなもんですよっと。
　魔人剣！」

半身を右にずらし、小さな動きで相手の身体を避け、そのまま攻撃する

夏「っと、この・・・・・・！」

攻撃をくらって体勢を崩した相手は、振り向きざまに横薙ぎの一撃を見舞ってきた

明「ふっ！」

その一撃を小さく屈んでかわし、一呼吸の間に三度木刀を振るう

夏「くぅっ！」

何とか剣で防御した坊主先輩は仕切り直すように大きく一歩下がった

夏「テメェ、試召戦争じゃ１００点程度だったくせに・・・・・・！」

明「今でもそんなもんですよ。　この教科以外は、ね？」

夏「野郎・・・・・・！最初からこの勝負だけに絞ってやがったな・・・・・・！」

明「その通り。　よく分かりましたね、先輩」

歯噛みする敵に対して木刀を四方から叩きつける。
これだけの点数を取っていたら木刀だって十分強い。
向こうの剣とぶつかり合っても折れたりはしない

雄「どうした？　顔色が悪いぜセンパイ？」

常「お前ら、Ｆクラスのくせに・・・・・・！」

近くから雄二とモヒカン先輩のやり取りが聞こえてくる。
身軽な雄二の召喚獣は素早く動き回ることで相手と互角に渡り合っているみたいだ

夏「仕方ねぇ。　二年相手に大人げないが、経験の差ってやつを教えてやるよ！」

そう告げた坊主先輩は召喚獣を大きく飛び退って、
僕だけじゃなく坊主先輩本人からも距離を取らせた。
使役する本人からも距離を取るなんて、一体何をしようと言うんだ？
見辛くなった分、戦闘がし難くなるはずなのに

夏「お前の知らない戦い方があるんだよ」

戸惑う僕に対して意味ありげな坊主先輩の台詞。
そこまで言われると、嫌でも向こうの召喚獣の動きが気になる

夏「おおおぉぉっ！」

坊主先輩が力を込める。何をしてくるのか分からないけど、
とにかく相手を牽制ｓ――あっそういえば貴浩が

貴『召喚獣ばかり目で追うと使役者の動きが読めないぞ。
　全体を見た方が召喚獣との戦いにおいて有利だ
　それにあいつらはセコイ手を使うかもしれないから注意しろよ』

そうだった。召喚獣ばかり注意してちゃマズかった。
意識を坊主先輩に向けるとこっちに向かっているのが分かった
・・・・・恐らく、僕に対して何かをするんだろう。ようし、それ
なら・・・・・・

明「いけっ！」

誘いに乗ったふりをして僕の召喚獣を敵に向かって走らせる

夏「そら、引っかかっｔ――なっ！？」

と、からかうような声を出そうとした坊主先輩は僕が目潰しをしよ
うとする。
けど、僕がそれを手で制したので、驚愕の表情になった

明「先輩、卑怯ですね？」

夏「くそっ！」

坊主先輩はその場を離れて召喚獣を持ち場に置こうとする

明「させるか！！　舞い踊れ！桜花千爛の花吹雪！彼岸！霞！八重！枝垂！」

貴浩の攻撃と似たように木刀と格闘を用いて連続で攻撃する

明「これが僕のッ『殺劇舞荒拳（サツゲキブコウケン）』だぁ！！」

僕は最後に先輩の召喚獣を木刀で吹き飛ばす。
僕の声と会場の歓声が重なった瞬間だった

常「っ！？　邪魔――！」

雄二の召喚獣に剣を振り下ろそうとしたモヒカン先輩の召喚獣の動きが一瞬鈍る。
その原因は、吹き飛ばされた坊主先輩の召喚獣。それがモヒカン先輩の視界を遮ったのだ

明「雄二！！」

雄「おう！」

常「くそぉぉっ！　お前ら如きに三年の俺が・・・・・・！」

雄「吹き飛べやぁあ！」

大威力の拳が叩きこまれて、モヒカン先輩の召喚獣が吹き飛んだ

ル「坂本・吉井ペアの勝利です！」

モヒカン先輩の召喚獣の点数も０点になった

砂『優勝はアッキーとユウユウペアの２人だよぉ！！』

明「いぃぃよっしゃぁああー！！」

先生と砂原さんの勝利宣言を受け、僕は最高の気分で叫んでいた

～ＳＩＤＥ　ＥＮＤ～

清涼祭（２４）　～タッグマッチ戦決勝～（後書き）

決勝戦終了です

ちなみに貴浩の『殺劇舞荒剣（サツゲキブコウケン）』は
ＴＯＤのスタンの奥義を真似したもので、
明久の『殺劇舞荒拳（サツゲキブコウケン）』は
ＴＯＨのコハクの奥義をまねしたものでした。

違いとしては１つ１つの威力は貴浩のほうが大きいが
手数は明久のほうが多いです。
まあこれは点数と操作技術の差ですかね

清涼祭（２５）　～大会表彰～

大会会場・・・・

今表彰式が行われている。
ババァの話とかは軽く飛ばし俺と明久、雄二の３人は舞台の上に上がる。

学「まずはあんたからだね。シングルス戦優勝おめでとう、
これが賞状と賞品の『深紅の腕輪』さ。発動キーは『ブラスト』だよ。
これは召喚獣の能力を向上させることができる。
では次にタッグマッチ戦優勝おめでとう、
これが賞状と賞品の『白金の腕輪』さ。坂本のは『召喚フィールド形成型』、
発動キーは『アウェイクン』これは教師の立会いがなくても召喚獣を召喚させるフィールドを形成する事ができる。
そして、操作者も召喚できる腕輪だね
吉井の方は『召喚獣同時召喚型』発動キーは『ダブル』
この腕輪は自分の操作する召喚獣の数を２体増やす事ができるね」

へぇこの腕輪かなり便利そうだな

学「じゃあ、３人共デモンストレーション頼んだよ」

貴・明・雄「「「はい！」」」

雄「まず俺だな『アウェイクン！』」

雄二を中心に召喚フィールドが展開される。

貴・明「じゃあ召喚するよ「「試獣召喚（サモン）！」」」

貴「ブラスト！」

明「ダブル！」

キーと唱えると明久の召喚獣が2体に増える。
俺の方は召喚獣の体が少しピンク色に染まり
表示されている俺の点数が元の1，2倍上昇しているな

現国

『2年Fクラス　吉井明久　５６×２　点
2年Fクラス　木下秀吉　１５７→１８８点』

パチパチパチと拍手が鳴りデモンストレーションは見事成功した。

葉「お兄ちゃん！　すっっっごい格好よかったよ！」

明「ぐふっ！　は、葉月ちゃん・・・・・・今日も来てくれたんだね」

表彰式が終わって舞台から降りると葉月ちゃんが明久めがけて突っ込んできた

優「3人とも、お疲れ様。凄かったわね」

明「あはは。　そうでもないよ」

葉「お兄ちゃん、凄いです～っ！」

島田「葉月ってば。　アキが困ってるわよ？」

島田が明久にグリグリと頭を押し付けている葉月ちゃんを見て苦笑をしている。

これ以上鳩尾を圧迫されると致命傷になりかねないので、

やんわりと葉月ちゃんの身体を遠ざける明久
葉月ちゃんは不満げな表情を浮かべながらも大人しく従う

命「あの、明久君」

明「あ、命。僕の活躍見てくれた？」

命「はいっ！とっても素敵でしたよ！
今度土屋君にビデオをコピーしてもらおうと思うくらい！」

明「ビデオねぇ・・・・・・ムッツリーニ、撮影なんかしていたの？」

命「はい。ずっと熱心に撮っていましたよ。ね？」

ム「・・・・・・・・・・・・（プイッ）」

目を逸らすムッツリーニ。試合そっちのけでミニスカートの観客とかを撮影していたんだろうな

霧「・・・・・・雄二も凄かった。前と比べたら点数が上がってた」

雄「試召戦争の時に散々だったからな。あれ以来、
特に日本史は重点的にやってきたからな」

霧「・・・・・・さすが雄二」

愛「貴浩君も凄かったね」

優「そうね。まさかあそこまで強いなんて驚いたわ」

砂「そうだね。ター君に勝てる生徒なんていないんじゃないかな？」

な「そうだね。あの点数に加えてあの操作技術だもんね」

秀「そうじゃの、貴浩に勝てるモノはおらぬじゃろうな」

明「そうかな？僕は少なくとも貴浩に勝てる方法を知ってるよ」

秀「ム、なんじゃその方法は？」

愛「それは気になるね」

命「それってどんな方法なんですか？」

貴「・・・・・・明久言うなよ」

明「良いじゃん貴浩。簡単だよ。貴浩の苦手科目で戦えば勝てるし、貴浩の相手を楓にすれば貴浩は攻撃できないだろうから勝てるはずだよ」

優「そうね、楓相手だったら貴浩は攻撃できないものね」

愛「ねぇ吉井君？貴浩君に苦手科目とかあるの？」

明「あるよ。それは・・・・」

貴「明久それ以上言ったら今後お前には飯は出さんぞ」

明「ごめん！僕忘れちゃった！」

雄「身代わり早すぎだろ！！」

明「だって僕の食事が・・・・」

貴「まあもう雑談はやめて仕事に戻るぞ」

優「そうね。じゃあ戻って仕事をするとしましょう」

姫「あ、あの吉井君」

明「ん？何、姫路さん？」

姫「あ、あの、ですね・・・・・・」

明「ん？　ああ、何かな？」

明久と話している姫路がが身体の前で指をもじもじと動かしている

姫「後夜祭の時、お話があるので駐輪場まできてください！」

顔を真っ赤にしてそう告げると、姫路はダッシュで業務に戻っていった

あら？姫路に一歩先を越されたみたいだな

貴「命。姫路さんが行動を起こしたけどお前はどうするんだ？」

命「わ、私は・・・・」

貴「まあ、どうするかは任せるけどサポートだけはしてやるから」

俺はそういうと命の頭に一度手を置いてそういった

そして仕事へと戻っていった

清涼祭（２６）　～一応報告に～

〔ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了します。
各生徒は速やかに撤収作業を行ってください〕

明「お、終わった・・・・・・」

命「終わりましたね」

秀「さすがに疲れたのう・・・・・・」

楓「お疲れ様です秀吉君」

ム「・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

優「さすがに疲れたわね」

愛「もうクタクタだよ」

放送を聞いて皆、足から力が抜けている。流石に疲れたな。
料理を作ったり、ホールにも出たりして

明「そう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだろう？」

貴「ん？お養父さんって何だ？」

明「あれ？貴浩には言ってなかったっけ？」
そして俺は明久から姫路の転校の話を聞いた。
明久こういう大事な事は早めに話しておけよ

秀「後夜祭の後で話をしにいくと言っておったのう。結論はその時じゃな」

島田「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」

女性陣達が更衣室に向かおうとします

明「ええっ!?　どうして!?」

貴「そうだ!何故着替えるんだ!?うちあげまでその服装でいるんだ!!」

ム「・・・・・・・（コクコク）」

優「どうしてって言われても・・・・・・恥ずかしいからに決まってるでしょう!」

楓「さすがにこの服装でうちあげは・・・・・」

愛「僕はさすがに恥ずかしいな」

命「すいません。　すぐに戻りますので」

明「待って!　皆、考え直すんだ!カムバーック!」

俺達の必死の説得?も虚しく、女性達は着替えのため去っていった。

ちなみに、葉月ちゃんはそのままの格好で帰っていったが正直、将来が不安だ

優「おい明久と貴浩。遊んでないで学園長室に行くぞ」

雄二が呆れたような目で見てきます。

貴「ちぇ、わかったよ」

秀「学園長室じゃと？　３人とも学園長に何か用でもあるのか？」

雄「ちょっとした取引の精算だ。喫茶店が忙しくて行けなかったからな。
　遅くなったが今から行こうと思う」

一応、取引だからな。報告しに行かないとな

貴「秀吉とムッリーニも一緒に行くか？」

ム「・・・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

秀「そうじゃの。では行くとするかの」

そして、俺達は学園長室に向った。

明「失礼しまーす」

雄「邪魔するぞ」

貴「失礼」

ノックと挨拶をして学園長室の扉を開けます

秀「お主ら、全く敬意を払っておらん気がするのじゃが・・・・・・・」

明「そう？　きちんとノックをして挨拶したけど？」

あの学園長先生に敬意を払えるだけの威厳はないから別にいいだろ

学「アタシは前に返事を待つようにいったはずだがねぇ」

明「あ、学園長。　優勝の報告にきました」

学「言われなくても分かっているよ。
　アンタ達に賞状を渡したのは誰だと思ってるんだい」

貴・明「「妖怪」」

こんな学園長先生に敬意を払う意味はない

雄「さて、これで問題は解決したな？」

学「ああ。感謝するよ、おかげでデモンストレーションも無事終わったからね」

来賓も満足していたと、嬉しそうに言う学園長。

明「それで、腕輪は返却した方が良いですか？」

学「いや、それは後で良いさね。どうせすぐに不具合は直せないんだ」

ふと横にいる雄二を見るとが疑問符を浮かべていた。

貴「ん？　どうした雄二」

雄「そう言えば、
　どうしてあいつら俺達がババァと繋がっている事を知っていたんだ？」

貴「え？・・・・・・そうだ！何であいつら・・・・・・まさか！？」

明「それじゃ学園長。これをゲットするっていう取引は成立しましたので、
　教室の改修をお願い・・・・・・」

雄「待て明久！　その話はまずい！」

「え？」

俺と雄二は、それぞれ窓とドアに向け駆け出す。

ム「・・・・・・盗聴の気配」

雄「やられたか！」

ドアを開け放った雄二が、逃げていく例の常夏コンビを発見。

雄「あいつら・・・・・・追うぞ明久、貴浩！」

明「ちょっ・・・どういう事！？」

雄「常夏島トリオが、学園長室を盗聴してやがったんだ！」

明「なんだって！？」

先程の会話を聞かれ、それを録音されていたら・・・それこそ文月学園は終わり。

その為、ムッツリーニと秀吉、俺と明久と雄二の2組に分かれ、捜索に走る。

雄「それじゃまずは放送室を抑えるぞ！」

貴・明「「了解！」」

清涼祭（２６）　～一応報告に～（後書き）

次回は常夏島トリオ追撃戦です。

珍しく明日明後日が休みなので調子に乗って2話更新していきたいなと思っています

でもあくまで予定なのであまり期待しないでください

皆さんのご感想お待ちしています

清涼祭（27）　～常夏島追撃～（前書き）

今日は仕事が休みなので頑張って2話更新できたらと思っています

清涼祭（２７）　～常夏島追撃～

～放送室～

雄「邪魔するぞ！」

「なっ、何だおまえらは！？」

明「ダメだ！ここにいるのはタバコ吸ってるバカだけだし、
　置いてあるのは密かに学園祭で取引されてたアダルトＤＶＤくらいだよ！」

雄「よし、とりあえずタバコとＤＶＤを押収して、先を急ぐぞ！」

明「そうだね！　校則違反だもんね！」

「ど、どろぼう！　泥棒！！」

～廊下～

島田「あれ？　アキに坂本、それに織村？そんなに急いでどうしたのよ？」

優「ねえ貴浩、話が・・・・・・」

霧「・・・・・雄二」

明「ごめん美波、優子さん、霧島さんちょっと急ぐんでまたあとで！」

貴「悪いな！」

優「あ、待って！何か落としたわよ？えっと『女子高生緊縛物語』・・・・・・何コレ？」

明「逃げよう貴浩、雄二！何だか美波と優子さん、霧島さんを中心に、
　闘気の渦が見えるんだ！」

貴「いや、違う！あれは殺意だ、全力で逃げるぞ！！」

雄「もちろんだ！」

優「待ちなさい！アンタ達何でこんなものを持っているのよ！！」

島田「話を聞かせなさい、アキ！！」

霧「・・・・・・雄二詳しく聞かせて」

貴・明「「うわぁっ！　追って来たぁ！！」」

～２－Ａ教室～

愛「あっ！貴浩君。もしかしてボクに会いに来てくれたのかな？」

貴「ごめん、先急ぐから」

愛「そうなの？　残念だなあ、折角貴浩君の為に着替えようとしたのに」

貴「え!?　そっそれって・・・・・」

明「雄二、貴浩、ここにはいないから先を急ごう!」

貴「待て明久、こっちはこっちで大変な事になろうとしているんだ!」

明「早く次行くよ」

貴「ま、待って」

校舎を探しても見つからず、俺、明久、雄二の3人は主に人目のつきにくい所へ。

雄「マズいな・・・・・随分と時間をロスした」

明「そうだね。あいつら一体どこに・・・・・ん?」

貴「何かあったのか?　ってこれって?」

そこにあったのは、良くテレビに出てきそうな布に包まれた玉。
俗に言う、打ち上げ花火である。

貴「なんだ、ただの打ち上げ花火じゃないか」

明「あれ?　打ち上げのための大砲みたいなのがないけど?」

雄「おいおい、花火も火薬の塊なんだから手違いで爆発なんてしゃれにもならないぜ?」

明「流石試験校、お金があるね。こんなに大きな打ち上げ花火を用意しているなんて」

大きさから、2尺位ある。

雄「感心してる場合か！？　そろそろ向こうも何か動きだす筈だと……」

Ｐｒｒｒｒｒ！

貴「もしもし？　・・・・・っ！　新校舎の屋上！」

新校舎の屋上を見始める。

貴「やべぇ！　あいつら、屋上の放送設備を準備してやがる！！」

明「なんだって！？」

現地点から屋上までは、流石に明久たちどころか鉄人でも不可能。

雄「貴浩、秀吉達は？」

貴「部室連だ！　そこからじゃ5分はかかる！」

雄「・・・だったら！」

雄二が腕輪をつけた腕を2人に突きつける。

そして、視線を二尺玉に向けてにやりと笑みを浮かべる。

貴「そうだな。やっぱりお前も考えたか？」

明「だよね。他に方法はないよね？」

貴「よし、雄二。頼む！」

雄「ああ・・・・・アウェイクン！」

貴・明「「試獣召喚（サモン）！」」

一方、屋上にて。

島村「夏川、そっちの準備は大丈夫か？」

夏「大丈夫だ。へへっ、これが流れりゃ俺達の逆転勝利だな」

常「そうだな。これで受験勉強なんかしなくても……おぉぉぉっ！！？」

夏「なんだよ常村、何をそんなに驚いて……ゲぇッ！？　ウソだろぉっ！？」

島村「とにかく伏せろぉぉっ！！」

ドォーーーン！！　パラパラ……

貴「よし、スピーカー命中を確認！」

明「流石は貴浩！」

雄「続けていくぞ！」

雄二が2尺玉を運びライターを導火線に近づける。

そしてその2尺玉を、俺と明久の召喚獣は物質干渉能力を持っているので担ぎあげる。

没収品のライターで火を付け、そのまま……

明「発射！」

召喚獣の投擲により、目標物へ。それは放送器具に直撃し、向こうの無力化を確認。

雄「よし、これで向こうは何もできなくなったはずだ！」

明「そっか！　それじゃ、いい加減ここにいるのも危ないし……」

貴「そうだな。常夏島トリオに一発ブチ込んだら逃げるか？」

悪をやっつけるなら徹底的に。俺は2人が用意した玉を、召喚獣に担がせる。

貴「えーっと、少し動きまわってやがるな……よし、それじゃとどめの一撃！」

西「貴様等ァッ！　何をやっているかァッ！」」

貴「うわあっ！」

その声は、自身達の天敵、鉄人のドスの利いた怒鳴り声。

それにより制御を誤り……

ドォーーーンッ！！！

雄「た、貴浩！　学校にぶち当たったぞ！？」

明「ああっ！校舎がゴミの様だっ！？」

貴「しっ、しまった！　俺とした事が！？」

砲弾は見事なまでに校舎の一角に命中し、もはや部屋の主壁も見当たらない。

布「き、君たち！　よりにも寄って、教頭室になんて事をしてくれたんだ！！」

貴「教頭室！？・・・・ある意味ラッキーか」

西「吉井に織村兄、坂本ぉっ！　貴様ら、無事に帰る事が出来ると思うなよ！！」

3人にとってお馴染みの怒鳴り声。それを聞くなり、3人は散り散りに逃げだした。

西「逃がすか！　今日は絶対に帰らせん！！」

明「違うんですよ先生！　僕等は学園の存続のために！」

西「存続だと！？　バカを言え！　たった今お前らが破壊したばかりだろうが！！」

貴「これには深い事情があるんだ！だからせめて話くらい聞いてくれ！！」

鉄人が大声を出すからなのだが、結局は逃げ回るしか手はなかった。

雄「恩に着るぞ明久、貴浩！　鉄人を引きつけてくれるとは！」

貴「なっ！　テメ雄二！こうなったら・・・誰か助けて！変態教師が襲ってくる！！」

明「ひいいいっ！　服をはがしてどこかに連れ込もうとしてくる！！」

西「貴様らはよりにもよって、何という悲鳴を上げるんだ！！」

こうして彼らの学園祭最後の夜は、恐怖と耐久マラソンで飾られる事に。

そして彼らは学園中にその悪名を轟かせ、畏怖と軽蔑を持って挙げられる名となった。

清涼祭（２８）　～うちあげ～（前書き）

本日２話目です。

今回はＡクラスとＦクラス合同のうちあげです

清涼祭（２８）　～うちあげ～

明「痛てて・・・随分と殴られたよ・・・・」

雄「くそっ、鉄人め。あの野郎は手加減を知らないのか？」

貴「やった事が事とはいえ、流石にこれはきつ過ぎだろ。あの鉄鬼が」

雄「斬新なニューネームだな」

結局逃げきれず、捕まってしまった３人。
本当なら停学か最悪退学の筈だが、処分は厳重注意という拍子抜けするような内容。
ただし、相手が相手だけに、３人の顔の面積が倍になっていた。

雄「ババァが手をまわしてくれたんだろうな」

明「今回の処分の事？　そうだろうね。
　そうじゃなければ、こんな軽い処分な訳ないもんね」

貴「まあババァに借りを作れたし、お互い助かった訳だからまあ良しとするか？
　まあ感謝する気なんてないけどな」

明「そうだよね。学園長が僕らを助けてくれるのは、ギブアンドテイクって奴だよね」

早めに解放されたのにも命中先が教頭室というのもある。

その修繕という理由でがさ入れが始まっている。
でも教頭はすでに行方をくらましているみたいだけどな

明「とにかく、問題は全部解決だね」

雄「そうだな」

貴「さて、打ち上げに早く混ざろう。最後位は楽しく過ごす記憶が欲しい」

と、打ち上げが行われている公園へと急ぐ3人。

秀「む。やっと来たようじゃな？　遅かったのう」

ム「・・・・・先にはじめておいた」

明「ああ、ごめんごめん、ちょっと鉄人がしつこくてさ」

A・Fクラスの面々で、お菓子やジュースを持ちこんでの打ち上げ。
店でのそれと違い金はかからないが、これはこれで楽しい物。

秀「お主ら、もはや学園中で知らぬ者はおらん程の有名人になってしまったのう」

ム「・・・・・・（コクコク）」

優「あれだけの事をやっておいて、退学どころか停学にすらならないんですもの。
　妙な噂が流れて当然でしょう？　わたしだって気になるし」

と、話に割り込んできた優子が、明久と俺にジュースの入った紙コップを手渡す。

明「ん、ありがと」

貴「ああ、サンキュ。それで、店の売り上げはどうだった？」

優「そうね。すごいって程じゃなかったけど、
　たった2日間の稼ぎとしては、結構な額になったんじゃないかしら？」

雄「ふむ、どれどれ・・・？」

優子が収支の書かれたノートを取り出し、雄二がそれを覗き込む。
それを見て、少々顔をしかめる。

雄「この額だと、机といすは苦しいな。畳と卓袱台がせいぜいだ」

貴「やっぱりな・・・あの常夏島トリオさえいなけりゃ、
　もう少しましだったかもしれないけど」

明「確かに、それが痛いよね・・・ところで、姫路さんは？」

周りのバカ騒ぎの中に、姫路の姿はいない。
彼女が転校する可能性もまだ否定しきれない以上、
早く確かめたいと言うのが明久の考えだろう。

貴「大丈夫だろ。俺達の3人の決勝の事があるし、
　多少だけど設備と環境の改善も行われるんだ」

雄「そうだぞ明久、お前はただドーンと構えてればそれで良いんだ」

姫「すいません。遅くなりました～！」

俺と雄二とのフォロー直後に、姫路の到着。
その嬉しそうな様子からみて、結果はわかりきっていた。

島田「あ、瑞樹。どうだった？」

姫「はいっ！　お父さんも分かってくれました！美波ちゃんの協力のおかげです！」

その言葉を聞いて、ホッと一息つく明久。

雄「ほらな？」

どうやら姫路は転校しなくていいらしいな

砂原「これより、『清涼祭Ａ・Ｆクラス人気投票ランキング』の結果を
　発表するよォ！覚悟はいいかな皆ぁ！！」

Ａ・Ｆ『イエーーーーーーー！』パフパフパフ

明「なんかノリいいね。想像してたＡクラスと全く違うんだけど！」

楓「そうですね。少し驚きました」

今、俺の周りには明久と楓、命、、秀吉、優子、愛子、島田、姫路がいる

雄二は霧島さんに捕まっている

貴「ああ、Ａクラスとの今回の交渉の時、
こういうときぐらい楽しめ、みたいなこと言ったら大体の奴が吹っ切れた」

優「そうだったわね」

Ａ『勉強なんてやってられかぁ！』

明「何かとてつもない事いってる人もいるね」

貴「ああ、色々抱えてたんだろうな。
発散できるとこが出来て完全に吹っ切れたみたいだな」

砂『・・・・メニューについてはここまでよ。
次、お待ちかね、人気のあったウエイター、ウエイトレスのランキング
行くよォ！まずウエイターから。１０位――――』

明「何かこれだけ見てるとＦクラスを想像するよ」

命「そうですね。私たちのクラスはにぎやかですからね」

貴「実際、Ｆクラスじゃなくてもこのくらいならやると思うけどな。
・・・命、今のうちに明久ともっと話しかけたらどうだ？
もっと仲良くなれるかもしれないぞ」

命「そうだね。じゃあ早速明久君に話しかけて――――」

砂『第４位はアッキーだ！話も掛け易く笑顔がたまらないと評判だったそうだよ♪』

Ａ・Ｆ『うおおおお！』

命「おめでとうございます明久君」

明「・・・何か呼ばれたけど行った方がいいのかな？」

貴「うるせぇ！さっさと行って友達でも彼女でも作ってこいよ！
　そんでもう帰ってくんな！」

明「ひどっ！どうしたのいきなり」

まさか明久がこれほどまで人気があるとはな

砂『第３位はヒデヒデだ！笑顔が可愛くてたまらないと評判だったそうだよ♪』

秀「おっ！ワシもか？」

楓「凄いですね秀吉君」

優「やるじゃない秀吉」

秀「じゃが可愛いとは少し複雑じゃのう」

貴「いいから秀吉もさっさと行って来い！」

秀「どうしたのじゃ貴浩は？」

こ、これでいつもいるメンバーは俺以外呼ばれたな。
雄二は８位で、刀麻が７位、ムッリーニは５位だったしな。何故俺だけ・・・・ｏｒｚ

砂『第２位はター君だ！カッコよくて頼りになりそうと評判だったそうだよ♪』

貴「マ、マジでぇえええ！？」
やべ、超嬉しいんだけど

楓「兄さんおめでとう」

愛「よかったね貴浩君」

優「おめでとう」

な「よかったねタカ君」

砂『そして念願の第１位は――――久保利光ゥうう！
　理性にあふれる姿に女子はみんなメロメロだァ！次ウエイトレス行くぞ¥よォ！』

Ａ・Ｆ『うおおおおお！！』

そんなこんなで数十分後・・・・
ちなみに女子の順位は
１位砂原さん、２位愛子、３位なのは　４位楓　５位命
６位優子　７位椎名さん　８位姫路　９位はＡクラス女子、１０位島田となった

やはり楓は人気があるな。あまりホールに出してないのにこれか・・・

清涼祭（２８）　～うちあげ～（後書き）

次回で清涼祭編は終了です

皆さんのご感想おまちしています

清涼祭（２９）　～鈍感貴浩と酔った命～

貴「はぁー、つっかれた。」
でも、Ａクラスとの仲良くなれたしいい１日だったな。
さて明日からも頑張らないと。
明久は命と話しているみたいだし俺はどうするかな

愛「ねぇってば！」

貴「うわっ！びっくりした。驚かすなよ愛子」

愛「さっきからずっと呼んでたんだけど」
愛子がムスっとした顔をしてこっちを見ている。

貴「ごめんごめん、で何か用？」

愛「怖い人たちに攫われた時、助けてくれたの貴浩君たちなんでしょ。
　だからお礼がしたくて」
そういうことか。確かに助けに行ったけど・・・
頭に血が上っていたからなあまり覚えていないんだよな

貴「別にお礼なんていいよ。
　それにその時頭に血が上ってたみたいであんまり覚えていないんだ」

愛「そうなんだ。じゃあ『俺の工藤によくも手を出してくれたな、ぶっ飛ばしてやる！』
　って言ったのも覚えてないの？」

貴「な!?俺そんなこといったのか!?」
みんなに聞かれてたら恥ずかしくてもうあわせられる顔がない！
愛「あはは、冗談だよ冗談。本当にからかいがいがあるね貴浩君は。
それより優勝したけどグランドパークのチケットどうするの？」
優「あっ!?私も気になるわね」
すると優子も俺のもとへやってきた
貴「チケットは人にあげるかな。俺は使い満ちないしな」
優「ふ、ふーん。そうなの」
愛「そうなんだ」
優「・・・・・・私を誘ってくれないのかしら（ボソッ）」
愛「・・・・・・僕を誘ってくれないのかな（ボソッ）」
どうしたんだろ2人共?落ち込んでいるみたいだけど
ま、いいか。さて明久から雄二と明久の分のチケットをもらってくるか。
もちろん明久から貰うのは大会の分であってオリエンテーションのチケットは貰わないがな
ＳＩＤＥ　ＩＮ　明久

命「駄目れすっ！明久君は渡しません！」

姫路「命ちゃんこそ放してください！」

明久「痛たたたっ腕がぁっ！」

命と姫路さんに両腕を引っ張られてる。何でこんなことに…

―5分前―

命「お待たせ～」

姫路さんがジュースを買いに行っている間に命がやってきた

島田「お疲れ命。はい、ジュース」

命「ありがとう美波ちゃん」

美波から紙コップを受け取り、それを一気に飲む

美波「そういえばアキ。1つ言っておきたいことがあるんだけど…」

明久「ん？何？」

美波「昨日、変な連中から助け――」

命「明久君♪！」

美波「み、命！何してるのよ！」

突然命に抱きつかれた

命「んにゅ～」

命が僕の胸に顔をうずめて気持ち良さそうにしてる。やばい…可愛い。

姫路「命ちゃん！何をしてるんれすかっ！」

姫路さんがジュースを抱えながら走ってきた。ん？れすって…まさか2人共酔ってる？

姫路「放してくらさい命ちゃん！」

命「いやらよ！引っ張らないれよ！」

そんなこんなで今に至る。こういう時は…

明久「止めて2人共！僕の為に争わないで！」

これで…

A・F男子『『『『何だとぉぉぉっ！』』』』

あれ？

A『姫路さんと木下三女が吉井を巡って争ってるぞ！』

F『くそぉっ！堂々と二股かけやがって…異端審問会の準備をしろ！』

A・F『『『Ｙｅｓ！！　Ｂｏｓｓ！！』』』

逆効果だったようだ

命「邪魔れすぅ！」

A・F『『『『『みぎゃぁぁぁっ！』』』』』

命がそこらにあった棒を振りまわすとと皆が断末魔の悲鳴をあげて倒れた。

あれ？美波と姫路さんまで倒れてる。これって…2人っきり？

命「明久君～」

明久「ん？何？」

命「私ね…明久君の…ことが…スゥ」

明久「み、命？何？僕が何？って寝てるぅぅっ！？」

寝ちゃったのか……なんて言おうとしたのか気になるなあ…この後どうしよう？

その後は貴浩に助けてもらいました

清涼祭（２９）　～鈍感貴浩と酔った命～（後書き）

今回で清涼祭編終了です

次回からもがんばっていきたいと思います。

皆さんの感想お待ちしております

『腕輪』や『指輪』設定（前書き）

今回は物語ではなく
オリエンテーション・清涼祭で入手した腕輪・指輪の
設定をかきました

『腕輪』　や　『指輪』　設定

＜　腕輪　＞

白金の腕輪

【同時召喚型】

・使用者の点数を二分してもう一体召喚獣を呼び出す機能を持つ。
　ただし主獣（メイン）と副獣（ダブル）2体の動きを1人で制御しなければならないため操作には多大な集中力を要し長時間の使用は厳しい。
・欠点：Bクラス並みの点数程度（総合で）で暴走する。
・起動キーは「二重召喚『ダブル』」
・所有者：明久

【代理召喚型】

・使用者の点数によって範囲が変る召喚可能場（フィールド）を作成する機能を持つ。
　そのため教師の立ち合い無く召喚獣を召喚することが可能。
　操作者も自分の召喚獣を召喚することができる。
　また、操作者の任意でフィールドを形成できたり消すことができる。
・欠点：使用する教科はランダムで設定される。
　　起動するためには点数を消費する。
　※1回の召喚フィールドを召喚するのに30点消費。
・起動キーは「起動『アウェイクン』」
・所有者：雄二

深紅の腕輪

【召喚獣開放型】

・召喚獣の力を解放することで３０分間、全ての能力（力やスピード）を
２倍に上げることができる。また、その点数は１．２倍上がる

ただし、一定時間経過後は元々の点数に戻り
それから元々の点数の１／４引かれる
例）元々の召喚獣の点数：４００点
開放すると４２０点になり、一定時間経過後は３００点となる

・起動キーは「起動『ブラスト』」
・また、もう１段階、力を開放する事ができる。
それは１０分間、全ての能力を４倍まで上げることができる
そして、点数も２倍上がる
ただし、一定時間経過後は元々の点数に戻り、
元々の点数の半分が引かれる
・起動キーは「起動『フルブラスト』」
・欠点：点数による制限はないが
召喚者のフィードバックの作用が現れる
そのフィードバックは２倍程度上昇
・普通の生徒ならフィードバックの作用：２０％
（明久と同等のフィードバック）
・明久：４０％　、貴浩：２０％
※ただしこれは『ブラスト』の場合で
『フルブラスト』だとその２倍上昇する。
操作者にとって諸刃の刃の腕輪
・所有者：貴浩

＜　指輪　＞

【黒纏の指輪】

・召喚獣の周りにフィールドを展開し一定時間召喚獣への攻撃を防いだり、
　軽減したりする事ができる
　※某ガン○ムのＧＮフィールドと思ってください
・起動キーは「起動『フィールドリング』」
・発動時に点数の消費はない
・発動持続時間は最長で５分間、
　ただしフィールドを展開している時は攻撃する事ができない。
　できても体当たりぐらい
・所有者：坂本雄二

【緑盾の指輪】

・召喚獣の周りにシールドを展開し召喚獣への攻撃を防ぐ事ができる
　※某ガン○ムのシールドビットと思ってください
・起動キーは「起動『シールドリング』」
※発動時に点数の消費はない。
　全部で８基のビットが展開可能
・モードを切り替える事で強力なビームを発射することができる
　この場合は１発撃つごとに５点消費する
・起動キーは「起動『アサルトリング』」
・所有者：木下秀吉

【白盾の指輪】
・召喚獣の周りにシールドを展開し召喚獣への攻撃を防ぐ事ができる
※某ガン〇ムのシールドビットと思ってください
・起動キーは「起動『シールドリング』」
※発動時に点数の消費はない。
全部で１２基のビットが展開可能
・ビットを連結させることでより広く攻撃を防ぐ事が可能
・所有者：織村楓

『腕輪』　や　『指輪』　設定（後書き）

以上５つの指輪・腕輪を紹介しました

感想・ご意見をおまちしています

西村「まずＨＲを始める前に転入生を紹介する」

須川「質問です！女子ですか？」

西村「男子だ」

Ｆ『なんだ男子か』

一瞬で転入生に興味がなくなったようだ。さすがＦクラス

西村「入ってきていいぞ」

ガララ

教室に入ってきたのは見知った顔だった

貴・明「「光一か！？」」

楓「光一君？」

光一「お久しぶりです。貴浩殿、明久殿、楓殿」

光一は軽く俺達に挨拶をすると皆のほうに振り返った

西村「今日からＦクラスのメンバーになる、では羽鳥、自己紹介を」

光一「羽鳥光一だ。よろしく頼む。まずはじめに言っておく。
明久殿、貴浩殿、楓殿に手を出す輩は容赦はしない」

光一は相変わらずだな

命「あの質問なんですが良いですか？」

光一「何だ？」

命「え、えっと・・・・」

貴浩「おい光一。怖がらせるな。命は俺や明久の友達だ」

光一「む、それはすまなかった。すまない」

命「い、いえ。気にしてませんから」

光一「で命だったか？質問とは何だ？」

命「あ、えっと。明久君たちとはどんな関係なんですか？」

光一「3人は俺の恩人だ」

命「お、恩人ですか」

明久「恩人だなんて大げさだよ」

貴浩「そうだ。俺達は当たり前の事をしただけだ」

光一「俺にそれがとても嬉しかったんだ」

明久「そうなんだ。じゃあこれからよろしくね」

貴浩「そうだな。よろしく」

楓「光一君よろしくね」

光一「よろしく頼む」

西村「じゃあ羽鳥は吉井の前に座れ」

鉄人がそういうと光一は明久の隣に座った

ちなみに今の席順は（多少省略させてもらってます）

教卓

○　○　○　○

―　　―

○姫路○島田○　○　廊下

―　　―

○　○　○楓　○命　―

―　　―

○　○　○光一○秀吉―

―　　―

○　○雄二○明久○俺　―

昼休み

貴浩「光一。お前に皆を紹介しておく」

光一「わざわざすまない」

俺は軽く光一に紹介する

命「木下命です。羽鳥君よろしくね」

光一「よろしく頼む」

秀吉「次はワシじゃ。木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。
命はワシの妹じゃ。兄妹ともどもよろしくなのじゃ。
言っておくがワシは男じゃからな」

光一「嘘だろ？女じゃないのか。女ぽいから女かと思った」

秀吉「・・・やはりか。わかっていても落ち込むの」

光一「仕方ねえだろ。見た目が女ぽいんだから。ってかもうあきらめてんじゃないのか」

雄二「おい、少し言いすぎだろうが」

光一「なんだお前は」

雄二「俺は坂本雄二だ。一応ここのクラスの代表だ」

光一「ああ。お前が元神童の坂本か、今ここにいるって事は落ちぶれたな」

雄二「なんだと!?」

光一「事実だろ」

命「ねえ明久君。良いの?このままで。さすがに言いすぎだと思うけど」

明久「うん、大丈夫だと思うよ。光一は根は優しいからね」

楓「そうですね。今も2人のことを思って言ってるんだと思うし」

貴浩「でも、さすがに今のままはやばいな。おい光一。ちょっと言いすぎかな」

光一「はっ。申し訳ありません」

貴浩「もうその態度には慣れたからそれでいいけど。
まず光一は秀吉をどうすれば男に見えると思うか?」

光一「簡単な事です。おそろく髪型を変えるだけで男らしくなると思います」

貴浩「なら、そう言おうよ。だってさ秀吉」

秀吉「髪型を変えるか・・・どのように変えれば良いのじゃろうか?」

貴浩「光一」

光一「はっ」

光一は秀吉を連れて出て行った。その間に雄二のほうを

貴浩「雄二」

雄二「なんだ？」

明久「多分、光一が言いたかったのは今のままで良いのかって言いたかったんだと思う」

雄二「どういうことだ？」

貴浩「今の現状に甘えて勉強しなくて堕落していってていいのかって事。

雄二は元々神童とか言われてたんだから勉強すればＡクラスのトップ並の点数が取れると思ったから光一はあんな事を言ったんだと思う」

雄二「そうか」

明久「光一は他人にはほぼ無関心だけど、根はいいやつで友達思いだしね。

そのため自分が毒舌を吐いて悪役になることで友達のためになるのなら

平気で友達の方を優先する人だからね」

楓「そうだね」

そこへ光一が秀吉を連れて帰ってきた。
秀吉の髪型はバカテス９．５巻のカラー絵の髪型になっていた

貴浩「随分雰囲気が変わったな」

楓「前よりもかっこよくなりましたね」

秀吉「そ、そうかの／／／／」

光一「木下、坂本。先ほどは言い過ぎた。すまない」

雄二「もう気にするな」

秀吉「そうじゃぞ。逆にありがとうなのじゃ」

その後は何の問題もなく自己紹介は進んだ

貴浩「次は光一の番だ」

光一「俺は朝の朝礼で言ったとおりだ」

明久「いや、もうちょっとさ・・・」

雄二「なぁ、１つ聞いていいか？羽鳥って、まさかあの羽鳥か？」

貴浩「多分雄二が思っているとおり光一は
あの世界で有名な電機メーカーの羽鳥グループの息子だ」

雄二「げ!?マジか!?」

康太「・・・・・・・・・俺のカメラも羽鳥のものだ」

明久「やっぱり皆ビックリするよね」

光一「まあそういうことだ。何か欲しい物があれば相談したいではくれてやる」

楓「私達の家にある電化製品は全て光一君からもらったんですよ」

雄二「全部か!?」

秀吉「先ほどから気になったのじゃが何故羽鳥は3人に対しては態度が違うのかの?」

光一「貴浩殿と楓殿は俺の命の恩人だからな」

島田「命の恩人?」

光一「ああ、そうだ。まあ俺は羽鳥の息子だから正直金には困らない。
それで中学の時にいじめられていてな」

雄二「いじめられた?お前を見ていると強そうに見えるが?」

明久「まあ光一は中学の時は今とは全然違っていたからね」

貴浩「そんな体でしかも気も小さかったからいじめの標的にされていたんだ」

光一「それでいじめられている時に貴浩殿と明久殿が助けてくれたんだ。
　他のヤツらは見て見ぬフリをしていたのに3人は俺を助けてくれた。
　それからも3人が俺の事を守ってくれたから、俺には恩があるんだ。
　3人がいなかったら俺は生きていなかったと思う。
　だから今度は俺が3人のことを助けるんだ」

貴浩「まあ、あまり無茶するなよ」

明久「そうだよ。僕たちは友達なんだから」

楓「そうだよ。これからよろしくね」

光一「わかりました」

貴浩「ま、そういうことだ」

秀吉「そうじゃったか。改めてよろしくなのじゃ。
　ワシのことは名前で呼んでほしいのじゃ」

命「よろしくね。私のことも名前で呼んでください」

康太「・・・・・・・・よろしく」

雄二「まあ、よろしくな」

姫路「よろしくお願いします」

島田「よろしくね」

光一「こちらこそよろしく頼む」

余談

貴浩「なあ光一」

光一「何でしょうか?貴浩殿」

貴浩「お前のところで・・・・・・（ゴニョゴニョ）・・・・って用意できるか?」

光一「任せてください。必ずご期待にそえる様尽力を尽くします」

貴浩「よろしく頼むな」

放課後、貴浩と光一の2人は何か話しているようだったがその事がわかるのは後の話でという事で

オリジナル　～転入生～（後書き）

今回は新キャラ登場です

怪盗黒炎龍様からいただいた案を元に作成してみました。

このキャラが今後どのように明久たちと話を盛り上げていくかお楽しみに

明久ラブレター事件（前編）

～ＳＩＤＥ　ＩＮ　明久～

明久「う～ん・・・・・ありえない登校時間だ」

晴れ渡る空。　澄んだ空気。　暖かな日差し
いつもより一時間早いだけで、混み合うはずの通学路はガラリと様相を変えて、
人気のない爽やかな散歩道のような雰囲気になってます

明久「早起きは三文の徳って言うし、何かイイコトがあるといいなぁ～」

今朝、僕は2時間も早く目を覚ましたため、
早めの朝食をすましてジョギングがてら学校へと向かっている。

明久「さてさて、こんな時間から何をしようかな――ん？」

校門の近くに見知った後ろ姿があった。
刈り揃えられた髪に浅黒い肌、無骨なシルエット。あれは鉄人だ

明久「先生、おはようございまーす」

西村「おう、おはよう！　部活の朝練か？　感心だ――」
僕を見て、動きが止まった

明久「先生？」

西村「――すまん。　間違えた」

明久「人違いですか？　いやそんな、別に謝る必要なんて」

西村「吉井、こんな早朝に学校に来て、今度は何を企んでいる」
そう言って爽やかな笑顔から一転、警戒心をあらわにした表情になりました

明久「鉄人・・・・・・間違えたのは接する態度ですか？」

西村「すまん、すまん。だが、警戒するのは教師として当然のことだ勘弁してくれ」

明久「もう良いですよ」

西村「それはそうと、丁度良かった。『観察処分者』のお前がいるなら手間が省けるからな」

明久「げ。『観察処分者』ってことは、また力仕事ですか？」

西村「そういうことだ。古くなったサッカーのゴールを撤去してくれ」

明久「やれやれ。早起きなんてするんじゃなかったなぁ・・・・・・」

西村「後悔するのは早起きではなく、
　観察処分を受けたお前の態度だということに気づくべきだと思うがな」

西村先生は呆れたように僕の顔を見てため息をつきます

明久「うぅ・・・・・・僕はそんなに悪いことなんてしていないのに・・・・・・・」

西村「・・・どの口でそんなことが言えるんだ。　いいからグラウンドにこい」

明久「へーいへい」

僕は鉄人について行き校庭へと向かう。

西村「吉井、頼んだ」

明久「了解です――――試獣召喚（サモン）」

明兄は西村先生の立会いの下、試験召喚獣を喚び出す

西村「それじゃ、そのゴールを持たせて」

明久「はいよ」

西村「街外れの産廃場まで行ってこい」

明久「何キロあると思ってんですか！？」

西村「もちろん冗談だ」

西村「吉井、ゴールネットを外して校門前に邪魔にならないように置いておけば良い」

明久「何だ、ビックリした～」

西村「お前が破壊した校舎の修繕費用を考えれば、その程度の罰も当然だと思うがな」

明久「ぅぐ・・・・・・・」

西村「外したネットは別口で処分するから、とりあえずは体育用具室にでも置いといてくれ」

明久「はぁ・・・・・・今日も一日イイコトなんてなさそうだなぁ・・・・・・」

僕はそう呟きながら召喚獣を操作してネットを外していく。
ゴールを運び終えると朝のＨＲの時間寸前になってしまった。
外したネットを体育用具室に運んでいる時間はないから、
一旦教室にもっていくことにしよう。僕は少し遅れて昇降口へ行き
靴箱を開くと

明久「なっ、何じゃこりゃぁぁっ!?」
これはもしやラブレターなのかな？

雄二「どうした、明久」

明久「おわぁぁっ！」

雄二に声を掛けられて、咄嗟にをポケットに隠す。

明久「あ、ああ。　雄二か。　おはよう」

雄二「おう。で明久どうしたんだいきなり奇声をあげて」

やばい。これは雄二に知られるわけにはいかない

明久「あ、時間がぎりぎりだね。雄二急ごう」

雄二「お、もうそんな時間か。　校内にいるのに遅刻にされても癪だな」

明久「そうだね」

僕と雄二はチャイムがなる前に教室に行くことができた。
その後すぐにチャイムがなり鉄人が入ってきて出席を取り始めました。

～　ＳＩＤＥ　ＯＵＴ　明久　～

「工藤」「はい」

「久保」「はい」

「近藤」「はい」

「斉藤」「はい」

淡々と進む毎朝の恒例行事。鉄人の呼び声にクラスの皆さんは眠そうに返事をしている

「坂本」

雄二「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・明久がラブレターを貰ったようだ」

F『『『『『殺せぇぇっ！！』』』』』

明久「ゆ、雄二！　いきなり何てことを言いだすのさ！」

雄二は小声だったのにもかかわらず、クラスの皆さんは聞こえていたようだ。
その証拠に怒号が飛び交ってますからね。ここの奴等は他人の幸せを許さないみたいだな。

西村「お前らっ！　静かにしろ！」

すぐに西村先生の一括が入ります。だが・・・・・・男子は殺気ダダ漏れだ

西村「それでは出席確認を続けるぞ」

出席簿を捲る音が教室内に響きます

「手塚」　「吉井コロス」

【ピクッ】

「藤堂」　「吉井コロス」

【ピクピクッ】

「戸沢」　「吉井コロス」

【ピクピクピクッ】

明久「皆落ち着くんだ！　何故だか返事が『吉井コロス』に変わっているよ！」

西村「吉井、静にしろ！」

明久「先生、ここで注意すべき相手は僕じゃないでしょう！？
　このままだとクラスの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！？」

鉄人は俺の殺気に気づいたのか何も言わずに、出席確認を続けます

「新田」　「吉井コロス」

【ピクピクピクピクッ】

「布田」　「吉井マジ殺す」

【ピクピクピクピクピクッ】

「根岸」　「吉井ブチ殺す」

【プッツン】

「織村兄」　貴浩「お前らをコロス」

俺は五十嵐さんから貰ったエクスカリバーを取り出す

「羽鳥」　光一「皆殺しにしてやる」
光一は隠し持っていたクナイや手裏剣などを取り出す
F『『『『『・・・・・・・・・・・・（忘れてたぁぁぁぁ！！！！）』』』』』
殺気を出していた男子達は殺気の代わりに冷や汗をだらだらと流し始めます
西村「よし。　遅刻欠席はなしだな。　今日も一日勉学に励むように」
出席簿を閉じて教室を後にしようとする西村先生
『『『『『待って先生！　行かないで！　可愛い生徒を見殺しにしないで！』』』』』
皆は必死に鉄人を呼びとめる。死にはしないよ、皆
西村「お前ら、勘違いするな」
鉄人が扉に手をかけたまま告げます
西村「自業自得だ」
『『『『『そんなぁぁぁぁぁ』』』』』
西村「授業は真面目に受けるように」

『『『『先生待って！　せんせーい！』』』』

そう告げると鉄人は教室を出ていった。皆、絶望した顔をしているな。
とりあえず

貴浩「皆。こっちにいらっしゃ～い」

俺と光一は立ち上がり武器を構えて手招きする。
その後教室で何があったか言うまでもないだろう

貴浩「まったく、あいつらメンドくさいな」

光一「まったくですね」

秀吉「ご苦労様なのじゃ」

雄二「あいつらもバカだな。２人がいる状態でこんな事をするなんて」

明久「仕方ないよ。このクラスにいるんだもの」

雄二「明久にしては正論だな」

貴浩「元々は雄二のせいだろうが」

雄二「だが明久がラブレターをもらったんだぞ。なんか悔しいじゃねえか」

貴浩「確かに」

明久「え?そこ納得しちゃうの!?

貴・雄「「当たり前だろ」」

明久「2人して酷いよ!!」

雄二「まあ冗談は半分として、明久ラブレターもう見たのか?」

明久「半分冗談って残り半分は?」

貴浩「で?もう読んだのか?」

姫路「明久君もう読んだんですか?」

島田「どうなのアキ!?」

明久「まだ読んでないよ。昼休みに読もうと思ってるよ」

貴浩「そうか」

むぅ複雑だな。俺としては命を応援している分なぁ

光一「そうでした貴浩殿。例の物が出来ましたので持ってきました」

貴浩「マジでか!!ありがとうな光一」

俺は光一から風呂敷を受け取る

光一「いえ、このような事であればいつでも言ってください」

明久「ん？貴浩、光一どうかしたの？」

貴浩「いや、なんでもないぞ明久。気にするな。そうだ明久。ちょっといいか」

明久「ん？なに？」

俺は明久を連れて皆から離れる

貴浩「お前いつ命とグランドパークに行くんだ？・・・まさか忘れてはないよな」

明久「あ！？」

貴浩「やっぱり忘れてたか」

明久「うっ」

貴浩「まあいいや。今週の休日に行って来い」

明久「そうだね。さすがにこれ以上伸ばすのは拙いよね。今週の休日に行くとするよ」

貴浩「そうしろ。まあ命には俺のほうから言っておくから」

明久「いつもありがとう。貴浩は涼祭の時にあげたチケットで誰かと行くの？」

貴浩「これはあげる人がいるからその人にあげるんだ。それに俺にはそんな相手いないしな」

明久「そうなんだ」

貴浩「まあ気にするな」

そういうと俺は自分の席へと戻った。

俺は1枚チケットを取り出して眺めていた。しかし、このチケットどうするかな？
明久にはああ言ったけど霧島さんに1枚あげてもう1枚はなのはがほしいっていってたからあと1枚残ってるんだよな

秀吉「浮かない顔しておるがどうしたのじゃ」

貴浩「ああ、秀吉か」

姫路「どうしたんですか？」

島田「どうしたの織村？」

貴浩「姫路に島田か。ちょっとな」

姫路「それってグランドパークのペアチケットですか？」

貴浩「そうだよ。これをどうしようか考えているところだ」

姫・島「「もしよろしければ（良かったら）そのチケットｍ・・・」」

秀吉「そのチケット、ワシにくれぬか？」

姫路と島田の言葉をさえぎり秀吉が尋ねてくる

貴浩「ん？ほしいのか。良いけど誰と行くんだ？」

秀吉「ぶ、部活のメンバーとじゃ」

貴浩「そうか。ついに秀吉にも好きな女性ができたか。
良いよ。チケットあげるよ。その人と楽しんでこいよ」

俺はチケットを秀吉にあげる。それが後で後悔することになるとは今は思わなかった。

姫・島「ああ！！」

秀吉「ありがとうなのじゃ貴浩よ」

貴浩「まあ気にするな。そのかわりうまくいったらその人のこと紹介してくれよ」

（これで明久と命がくっついてもこれを使えば秀吉を抑える事ができるかな）

秀吉「（お主が知っておる人物なのじゃが今は黙っておくとするかの）わかったのじゃ」

何故か姫路と島田がうな垂れていたがどうしたのであろうか？

おそらく明久と行きたかったんだろうがそうさせるわけにはいかない。
明久は命と行くからな。２人には今回はあきらめてもらおう

明久ラブレター事件（前編）（後書き）

今回、明久が誰かからラブレターをもらいました。

さて誰からもらったのか？

次回の更新もお楽しみに。

応援よろしくお願いします

明久ラブレター事件（後編）

～ＳＩＤＥ　ＩＮ　明久～

Ｆクラスのやつらの嫉妬はまだ続いていた。
僕たちはそれに気づかずにいた。
授業が終わり教師が教室を後にすると今から昼休みとなるので
命や楓、雄二、秀吉、ムッリーニ、光一は屋上で昼を食べるという
事で教室を出て行った。
貴浩は少しばかし用事があるので皆とは別行動となるって言ってた。
僕は少し遅れてからいく。もらったラブレターを見たいしね。
そして皆の姿が見えなくなった瞬間、僕はクラスメイトに取り囲まれた。

明久「え・・・えっと？　みんなどうしたの？」

須川「なあ吉井。やっぱ納得いかねえんだよ、おまえがラブレターを貰うなんてな」
クラスメイトの皆からそういう声が聞こえてくる。

明久「えっ！？みんな、僕を殺すのあきらめたんじゃ……」
僕は焦り始める

近藤「あれは、織村と影沼がいたからできなかっただけだ！」
周囲から殺気が膨れ上がる。

須川「俺達は気づいたんだよ。あいつらに気づかれなきゃ問題ないってな……」
すべて屁理屈だよね。

姫路「みなさんやめてくださいっ！」
割り込む声は、姫路さんだった。

明久「姫路さん、君は味方なんだね？　ありがとう」
さすが姫路さんだ理解してくれるんだね。
僕は姫路さんを味方と思い手紙を取り出し、席を立とうとすると

姫路「いえ、先に私と美波ちゃんとＯＨＡＮＡＳＩをしてからですよ。皆さん良いですよね？」

明久「え！？」
あれ？おかしいな。もしかして・・・・・・
姫路「・・・・・・明久君、それが例の手紙ですか？」

明久「え？何のことかな？僕は手紙なんて持っていないよ」
僕はすぐポケットに手紙を隠してとぼけてみた。
そして立ち去ろうとする僕の肩を誰かが掴んでいた。

島田「アキ？どこにいくつもり？」
げぇ！美波だ

明久「な、なにかな？僕はこれから命や雄二たちと昼飯を食べに行くだけよ」
僕は美波の腕を振り払い教室から飛び出た

島田「待ちなさいアキ！逃がさないんだから」

姫路「明久君にはそんなもの必要ありません。それをこっちに渡し

て下さいっ！！」

須川「ハッ？！　ターゲットが逃げたぞ！　追うんだっ！」
いち早く復帰した須川が叫ぶと、男子たちは即座に再起動し、雄叫びをあげて追跡をはじめた。

F『逃がすな！　追撃隊を組織しろ！』
F『手紙を奪え！』
F『サーチアンドデェースっ！』

姫路「待ってください明久君。ＯＨＡＮＡＳＩ中ですよ」

島田「待ちなさいアキ！」

僕の逃亡劇が始まった。なんか2年になってから逃げ回る回数が増えたような気が・・・・・・

『G班！そっちに逃げたぞ！』

『C斑とF斑もやられたそうだ、敵が1人だとしても甘く見るな！』

「「「「了解！！」」」」

『隊長！先回りしていたA班とE班との連絡が途絶えました』

『なにぃ！？ならB班とH班を回せ』

『いたぞ！吉井だ！用具室に逃げ込んだぞ！』

団員の1人が僕を発見したようだ。

ガララッ！

おもむろに扉が開けられる。

『へへへ…追い詰めたぞ吉井』

『貴様だけ幸せになろうなんて不届きせんばん』

『今ならその手紙を引き裂いたあと、紐無しバンジーの刑で済ませてやる。
わかったら手紙を渡すんだ』

今の言葉を聞いて素直に渡すと思っているのだろうか。

明久「嫌だね、欲しかったら自力で奪って見れば？」

「「「「いい度胸だ！！」」」」

挑発に乗って一カ所しかない扉から侵入してくる団員たち。

明久「……今だ！！」

「「「「ッッ！！？」」」」

ふふ、驚いたところでもうおそい。

団員の頭上からサッカーゴールのネットがふってくる。

『くっ…このネットビショビショに濡れてやがる』

『落ち着け！ネットのはじに近いほうから脱出して行くんだ！』

そんな隙は与えない！

明久「バイバイみんな♪」

明久はそう言うと、僕は貴浩から貰ったスタンガンを皆に向けて投げつけた。

『お、お前たち急いで……』

叫び声を上げるが時すでに遅い。無情にも投げられた物体は濡れたネットに着弾した。

「「「「ギャアアァァッッ！！」」」」

クラスメイトの叫び声が用具室に響き渡る。

明久「ふん、人の幸せの邪魔をするからさ」

そう言うと明久はその場を後にした。

『どこだ？確かにこっちに来たはずだが』

『気をつけろ。きっと近くに潜んでいるぞ』

『A、C、E、Fに続きG部隊もやられたそうだ。油断はするなよ』

明久「人の恋路の邪魔をしようとするからそんな目にあうのさ！」

『おのれ吉井！裏切りものめ！』

『覚えていろ！お前の幸せを必ずぶち壊す！』

そのころ命たちは……

命「おそいですね明久君」

秀吉「そうじゃの」

雄二「何か起きたんだろうな。ムッリーニわかるか？」

ムッツリ「・・・・・・・・・・朝のラブレターの件で追いかけまわされている」

光一「何だと！？」

命「明久君は無事なんですか？」

ムッツリ「・・・・・・・・・・今のところは大丈夫」

光一「あいつら、今度はもっと痛めつめてやる」

楓「落ち着いてください光一君」

雄二「さてしょうがないな。明久を助けに行くか」

光一「当たり前だ」

雄二「秀吉と楓、命はここにいてくれ。ムッツリーニ、光一いくぞ」

光一「言われなくてもいくさ」

ムッツリ「・・・・・・・・・（コクン）」

そのころの明久は……

「「「「くたばれ吉井ィィ!!」」」」

明久「だれがくたばるか！」

現在食堂内を逃げ回っていた。

明久「くそ、食堂内なら襲ってこないと思ったのに」

明久は人が多くいる食堂ならば、
襲ってくることを自重するだろうと予想したが、それは間違いだった。

『きゃあ！』

『おわあ！』

『俺のカレーが!!』

周りの人に迷惑かけすぎだ!ごめんなさい、関係のない皆さん。

ガッシャーン

『ああ！！俺のパフェが！！』

ん、なんか聞き覚えのある声が。

「なんてことしてくれたんだ！俺のパフェが全部丸々毀れたじゃねーか！！
週2でしか食べる事ができないんだぞ！！」

「「「「ちょ、まっ、ギャアアァァァ！！」」」」

アレ、今のは銀さん？・・・・・・・・・まあ気のせいだよね

明久「ふ～だいぶ片付いたかな……」

ＦＦＦ団の追撃を逃れた僕は現在旧校舎から屋上にあがる階段の前にいた。

明久「やっぱりここは屋上に……ッッ殺気！！」

殺気を感じ明久が飛びのいた所には、シャーペンなどが付き刺さっていた。

明久「やっぱりムッツリーニか」

ムッツリーニは再びシャーペンなどを投げつける

・・・ただしそれは僕ではなく後ろから追ってきていた人たちにあたる

ムッツリ「・・・・・・早く行け屋上なら安全だ」

明久「え!?ムッリーニ?」

ムッツリ「・・・・・・・異端審問会は他人の幸せを許さない。
だがお前に手を出すと後が怖い（ガクガクブルブル）だからここは俺に任せろ」

F「チッ、なら覚悟しろムッツリーニ!!」

シュッ　　相手の目の横をカッターが通過する

ムッツリ「次は目を狙う……」

F「よ、よし、撤退だ」

ここにいた追跡部隊はムッリーニのおかげで何とかしのげた

ひとまず屋上に向かった。他のFクラスのメンバーは雄二と光一がやっつけてくれたらしい

秀吉「大変じゃったの明久」

命「明久君無事ですか?怪我とかない?」

秀吉と命が慰めてくれる。ああ、癒されるよ。この2人は僕の心のオアシスだよ

雄二「ところで明久、ラブレターはどうした?」

明久「え？もちろんここに……あれ、あれ！あれれ！！ない！ないよ！」

まさか逃げ回ってる最中に落とした！嘘初めてもらったラブレターなのに・・・

雄二「結局明久は報われない運命なんだな」

明久「ううう……（シクシク）」

光一「落ち込まないでください明久殿、次がありますよ」

明久「……うん」

その後僕は命に弁当を分けてもらい昼休みを過ごしたその時命がほっとしていたのは言うまでもないだろう。

明久ラブレター事件（後編）（後書き）

明久へのラブレターは一体誰からの物だったのでしょうか？

次回は明久が異端審問会に追いかけられている間、
貴浩がどこにいて何をしていたのかの話になります。

次回の更新も頑張りたいと思います。
応援よろしくお願いします。

明久ラブレター事件（裏）（前書き）

今話は明久が異端審問会に追いかけられてる時
貴浩が何をしてたのかの話になります。

明久ラブレター事件（裏）

明久が異端審問会の連中に追いかけられている時、貴浩はＡクラスにいた

愛子「あれ貴浩君だ。どうしたの？もしかして僕に会いに来てくれたのかな？」

貴浩「えぇ！？ち、違うよ」

優子「愛子、貴浩をからかわないの」

愛子「はーい」

貴浩「霧島さんいる？」

優子「代表？代表なら・・・」

霧島「・・・・・・なに？」

貴浩「うわっ！？」

俺の後ろからいきなり現れるとは、本当にムッツリーニに行動が似ているな。

霧島「・・・・・・・・どうしたの織村？」

貴浩「ああ、霧島さんにプレゼントがあってね」

砂原「何々？プレゼント？駄目だよター君。

キリキリにはユウユウという旦那さんがいるんだからね。
は!?まさか愛人関係になるとか?」

椎名「ちょっと鈴ちゃん落ち着こうよ。ごめんね織村君」
すると霧島さんだけでなく、砂原さんや椎名さん、なのは、刀麻まで俺の所に来た

貴浩「残念ながら雄二の奥さんだから取りもしないし愛人になりたいわけでもないよ」

砂原「なーんだつまんない」

刀麻「・・・・・・つまらないって」

優子「・・・・・・貴浩×坂本君もありね（ボソッ）」
何か優子がブツブツ言ってるが

貴浩「そんな事より。はい、霧島さんこれあげる」
俺はグランドパークのチケットをあげる

椎名「これって如月グランドパークのペアチケットですよね?」

貴浩「そうだよ。俺には使い道ないから霧島さんにあげるよ。これで雄二と行ってきなよ」

優子「良かったわね代表」

なのは「良かったね翔子ちゃん」

霧島「・・・・・・ありがとう。本当に織村はいい人。

困った事があったら私に言うといい、手伝うから」

貴浩「その時は頼むとするよ」

砂原「でもター君良かったの？ター君ならもてそうだから
声掛けたら誰か来そうだけどねん♪特にあの2人はねん♪」

貴浩「でも誰も俺なんかといかないだろ。ってか2人って誰のこと？」

優子「あ、あなたが気にする必要はないわよ」

愛子「そ、そうだよ。気にしちゃダメだよ」

優子「・・・・・・・私なら行くのに（ボソッ）」

愛子「・・・・・・・僕に言ってくれたら一緒に行くのに（ボソッ）」

なのは「タカ君って鈍いね」

貴浩「え？なに？なのは」

なのは「なんでもないよ」

貴浩「それにその日は霧島さんのサポートする予定だからな。
おそらく雄二のヤツは逃げ出そうとするからな。それを阻止してやる」

刀麻「それはおもしろそうだな。俺も手伝うよ」

砂原「なら私も手伝うよん♪」

椎名「・・・鈴ちゃんが手伝うなら私も」

愛子「なら僕も手伝うよ」

優子「アタシも手伝うとするわ。代表の為よ」

霧島「・・・・・・・皆ありがとう」

貴浩「なら霧島さんは雄二と腕を組んだりしないとな」

霧島「・・・・・・・どうすればいいの？」

愛子「こうな風にやるんだよ」
愛子がそういうと俺の腕に手を回してきた

砂原「そうそう。それで胸を押し当てると喜ぶよん♪」
その逆側では砂原さんが俺の腕にくっついて胸を押し当ててきた。
やべ、気持ちいい。前に優子と愛子に抱きつかれたけどそれ以上に凄いな

優子「貴浩。今、失礼な事考えてたわよね」

貴浩「え!?い、いえ、そんなことは、ぎゃあああああ」
俺の腕の関節をはずされた。

優子「ふん、失礼な事を考えていたからよ」

貴浩「うぅ、い、痛い。・・・・・・よっと」
俺は自分で関節をはめなおす

刀麻「・・・・・・お前凄いな。自分で関節はめなおすとは」

貴浩「え!?これって皆できるんじゃないのか?
Fクラスの男子は全員できるぞ。秀吉だってできるしな」

刀麻「普通そんな事できねえよ」

砂原「さあキリキリ。ター君相手に実践してみよう」

霧島「・・・・・わかった」

貴浩「え?何故俺?」

砂原「おもし・・・・ゲフン。言いだしっぺだからだよん♪さあキリキリ行くんだ!」

霧島「・・・・・・・・（コクン）」

貴浩「絶対面白そうって言おうとしt痛ぁいたいいたい」
霧島さんが俺の腕の間接を決めてきた

なのは「ちょっと翔子ちゃん、違うよそうじゃなくて」

貴浩「た、助かったよ。なのは」

霧島「・・・・・・・難しい」

愛子「代表練習しようよ」

霧島さんは俺から離れてなのはと椎名さん砂原さんに教えてもらっているみたいだ。

その間に俺は愛子や優子、刀麻と昼飯をたべることにした

刀麻「何か廊下のほうが騒がしくないか？」

愛子「そうだね。何かあったのかな？」

そこで愛子が教室の扉を開けてみると

『吉井は見つかったか！！』

『どこに行きやがった吉井のヤツ』

『探せ！必ずヤツを見つけ出すんだ！！』

『A班とE班は回り込んで挟み撃ちにするんだ！』

Fクラスのやつらが明久を探していた。おそらくラブレターの件で探してるんだろうな

優子「アレってFクラスの人たちよね」

貴浩「ああ」

刀麻「いつもああなのか？」

貴浩「そうだな。ってか今日の朝も俺は追いかけられたよ」

刀麻「なんで？」

貴浩「楓と木下3姉妹となのは、愛子と登校しているのを奴らに見つかってな。
男1人で美少女と朝から一緒に来るなんて羨ましいとか言ってな。
まあ可愛いのは否定しないが秀吉は男だから男1人じゃないんだが」

刀麻「・・・大変だな」

優・愛「「・・・・・・・か、可愛い／／／／」」

貴浩「ああ・・・・・・さてなら行くか」

愛子「どこに行くの？」

貴浩「あいつらを始末する」

俺は廊下にでると

貴浩「おいお前らまだ懲りてないようだな」

F「げぇ！？織村だ」

F「死神がきやがった」

F「俺達は吉井に用があるんだそこをどけ！」

姫路「そうです。私たちは吉井君に用があるんです！」

島田「そうよ。今アンタは関係ないわよ！」

貴浩「うるせぇな。昼休みぐらいゆっくりさせろや！」

バキッ　俺はすぐ近くにいたヤツを殴る

F「グベラッ」

F「ひぃ」

F「おくするなあいつは今、武器を持ってない」

F「そ、そうだな」

貴浩「誰が武器を持っていないって？」

俺は今日、光一からもらった風呂敷をとるとそこには頼んでおいた武器があった。

F「ト、トンファーだと！？」

貴浩「そうだ。これからお前らを始末するための武器だ」

F「ひ、ひるむな。全員でかかれ！！」

貴浩「うざい！」

ドコッ　バキッ

それから5分後

貴浩「さてまだやるか？」

F「て、撤退だ」

そこでようやく諦めて逃げていった。

いつの間にか姫路と島田の姿がなかったがまあいいだろう。それに女子に手を出したくないし

俺はトンファーを学ランにしまうとAクラスへと戻った

砂原「さすがター君だね。ター君の周りは話題がいっぱいだよ。今度ター君に密着取材するかな。面白そうだしねん♪」

貴浩「・・・・・・やめてくれ」

優子「あなたも大変なのね」

愛子「・・・・・・ははははは（苦）」

その後もゆっくりAクラスで過ごす事はできなかった。

砂原さんからからかわれ、再び異端審問会の介入などで全然ゆっくりできなかった。

Aクラスの女子といるが見つかったからだ。

明久ラブレター事件（裏）（後書き）

貴浩は光一に頼んで特注のトンファー×2を作ってもらいました。

仕込みトンファーで
リボーンの雲雀が持っている仕込みトンファーです。
鎖がでるようになっていて広範囲に攻撃できるようにしてます。
それプラススタンガン機能も搭載してます。
なので取っ手部分には特殊なゴムで覆われています。

如月グランドパーク編1　～何故お前がここに！？～（前書き）

さて今話から如月グランドパーク編です。

少し長くなりますがよろしくお願いします

如月グランドパーク編1　～何故お前がここに!?～

坂本家
～　ＳＩＤＥ　ＩＮ　雄二　～

とある休日の朝。俺が目を覚ますと、

霧「・・・・・雄二、おはよう」

目の前に翔子がいた。

霧「・・・・・今日はいい天気」

雄「ん?ああ、そうみたいだな」

カーテンを開けると強い光に目を細める
そして再びと幼なじみの姿を見る。
今日は休日だからか、さすがにいつもの制服姿ではなかった。
寝ぼけているのかもしれない。眠気を振り払うように頭を大きく振って、
翔子に向き直る。

雄二「あらためて、おはよう。翔子」

翔子「・・・・・うん。おはよう雄二」

雄「よいしょ、っと――――」
そういえば、どうして翔子が俺の部屋にいるんだ?
今日はコイツと何かの約束をしていたっけ?

寝起きのためか本調子ではないが頭で記憶をさかのぼる。
ダメだ。全く覚えがない。なら約束ではないだろう。だとすると・・・・・。
ほかの理由を考えて、１つの結論にたどり着く。そうか、そういうことか。

雄二「悪い翔子。俺の携帯とってくれ」

翔子「・・・・・電話でもするの？」

雄二「ああ、そうだ」
翔子が渡してくれた携帯を操作し、番号を押す。
コイツがここにいること。それは・・・

雄二「あああもしもし？警察ですか？」

不法侵入しかない。

ドドドドドドドド！　ガチャッ！

雄二「おふくろっ！どういうことだっ！」

雄二母「あら雄二。おはよう」
キッチンに駆け込むと、おふくろは洗い物をしながら朝の挨拶をしてきた。

雄二「おはようじゃねぇっ！どうして翔子が俺の部屋にいるんだ！
おかげで俺は警察のオッサンに二次元と三次元の区別が出来

ない

妄想野郎と思われちまっただろうが！」

幼なじみが無断で俺を起こしに部屋に入ってきた、と告げたときの相手の反応は俺の心に深い傷を残してくれた。寝ぼけていたとはいえ、一生の不覚だ。

雄二母「・・・え？」

俺の言葉をうけて、おふくろが何度か大きな瞳を瞬かせる。

雄二母「翔子ちゃんが・・・・・・？」

おふくろが頬に手を当てて困ったような顔をしている。

この態度だと、もしや翔子単独の行動か？おふくろの手引きじゃなかったのか？

もしそうだとしたら、いきなり朝から怒鳴るのは悪かったかもしれない。

雄二「ああ、いや、怒鳴って悪かった。俺はてっきりおふくろがアイツを勝手に俺の部屋に上げたものだと――――」

雄二母「もう、翔子ちゃんってば奥手ねぇ。

折角お膳立てしてあげたのに何もしないでいるなんて勿体な――――あら雄二、どうしてお母さんの顔を鷲掴みにするのかしら？」

雄二「やっぱり、アンタのせいか・・・！」

この母親には一度きっかり常識を教えてやるべきだろう。

翔子「・・・・・雄二。お義母さんを虐めちゃダメ」

雄二「止めるな翔子。俺は息子としてこの母親の再教育をしないといけないんだ」
遅れて現れた翔子が俺の腕を掴んで邪魔してくる。
なんとなく、翔子の言う『お母さん』の発言が普通と違うような気がするが、
今は気にしてはいけない。というかツッコんではいけない気がする

翔子「・・・・言うことを聞かないと、この本をお義母さんと一緒に読む」

雄二「ま、待てっ！それは女子の読むものじゃない！早くこっちに寄越すんだ！」
翔子が取り出したのはＡ４サイズの冊子。
くっ、よりにもよってあの本か！
ムッツリーニですら唸らせた至高の１冊が見つかるなんて最悪の事態だ！
っていうかどうやって見つけ出したんだ！？
一緒に暮らしているおふくろでさえわからないような場所に隠したはずだぞ！？

雄二母「あら翔子ちゃん。それは雄二が日本史の資料集の表紙をかぶせて
　　机の２番目の引き出しの２重底の下に隠してある秘密の本じゃない？」

雄二「わ、わかった。おふくろは開放しよう」
言われた通りアイアンクローを取りやめる。なんて汚い脅迫なんだ。
てかおふくろにもバレていたのか

翔子「・・・・そう。それなら、この本は――――――」

くそっ。取り返したら今度こそ絶対に見つからないように隠してやる。
鍵でもつけて厳重に――――

翔子「燃やすだけで許してあげる」

雄二「すまん翔子。どう考えてもそれは許された時の対応じゃない」
普通は許してくれたらその本を返してくれるはずだ。

翔子「・・・・・じゃあ、この本を燃やしても許さない」

雄二「燃やさないという選択肢はないのか！？」

雄二母「ふふっ。相変わらず二人は仲良しねぇ」
小学校からの付き合うになるが、たまにコイツの考えについていけなくなる。
解放したおふくろはおふくろで特に慌てた様子もなく、
最後の洗い物を終えてエプロンで手を吹いていた。なんともマイペースな母親だ。

雄二「俺にはこれが仲の良い光景とは全然思えないんだが・・・・・」

雄二母「あら、そうかしら？」

雄二「やれやれ・・・・。んで、どうして翔子が来てるんだ？」

翔子「・・・・・約束」

雄二「約束？今日俺となにか約束をしていたか？」
そんなもの俺はした覚えがないんだが

翔子「・・・・・うん」
いつもの調子で頷いてポケットから小さな紙切れを取り出す翔子。
どうやら何かのチケットのようだ。え～っと・・・・・

雄二母「あら。如月グランドパークのオープンチケット？
　しかもプレミアムって書いてあるから特別なチケットなんじゃないの？
　凄いわ翔子ちゃん、よくこんなもの手に入ったわね～」

翔子「・・・・・優しい人がくれた」

雄二母「そう。良かったわね。あら、雄二？どこに電話してるの？」

雄二「ちょっと最低のゲス野郎に用ができたんだ」
携帯電話の番号通知をＯＦＦにして明久の番号を呼び出す。
呼び出し音の後、敵は軽快な声で電話に出た。

明久『はいもしもし？どちらさまですか？』

雄二「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・キサマヲコロス」

明久『えっ！？なになに！？本当に誰！？メチャクチャ怖――――』
電話の向こうで狼狽する声を聞きながら通話を切ると、少しだけ気分が晴れた。

ちなみにこの件は明久は全く関係なしです。犯人はもちろんあの人です。

翔子「・・・・・・・・雄二、行こう？」

雄二「絶対に嫌だ」

翔子が俺の手をそっと握ってくる。
これが普通のアミューズメントパーク程度なら考えても良かったのだが、
これは如月グループの企みが裏に存在する危険な企画だ。
そんなものに翔子と参加なんて言ったら、そのまま結婚まで持ち込まれてしまう。
なんとしてもそれだけは避けなければならない。

雄二母「あら。どうしてそんなに嫌がるの？
翔子ちゃんと一緒に行ってきたらいいじゃない」

雄二「・・・・・・・色々と事情があるんだ」

翔子「・・・・・・・私は、雄二と一緒に行きたい」
とはいえ、いい加減ビシッと断っておかないといけないな。
今日こそはっきりと『翔子、俺のことは諦めてくれ』と言ってやろう。
俺は大きく息を吸うと

雄二「翔子」

翔子「イヤ」

雄二「俺のこと・・・」
早い！早すぎる！まだ名前の部分しか言ってないというのに！

雄二「だ、だがな、翔子」

翔子「・・・・どうしても行きたくないなら・・・」
俺の言葉を遮り、翔子はバックから何かの冊子を取り出した。
それは――――

翔子「選んで」
――結婚式場案内のパンフだった。

雄二「すまん。話の流れがさっぱりわからない」

翔子「・・・・・約束を破ったら即挙式って誓ってくれた」
なんか契約の内容が変わっていないか？

雄二母「お母さんはハワイとかの海外がいいな」

雄二「おふくろ。アンタはどうしてそんなにマイペースなんだ」

翔子「・・・・・雄二。早く選んで、予約するから」

雄二母「あっ！ヨーロッパもいいわね。雄二、どこがいいかしら？」

雄二「くっ！」
どちらを選んでも結婚の話がチラつくという恐ろしいこの状況。
だが、この程度の困難に屈する俺ではない！
なんとかして脱出をしなければ俺の人生が・・・・・・・

如月グランドパーク編1　～何故お前がここに！？～（後書き）

今回は雄二編でした。

この話で雄二と翔子の仲がどうなるのか、お楽しみに

如月グランドパーク編1　～始まり！？～

雄二「・・・・・・俺は・・・・・・無力だ・・・・」
電車とバスで2時間ほどかけ、俺と翔子は如月グランドパークの前にいた。
こ、これは仕方がなかったんだ！翔子1人だけならまだしも、おふくろまで面白がって結婚の話を進めだしたのが悪いんだ！
あの妙な雰囲気から逃れるために出かけてしまった俺を誰が責められようか！
明久の野郎覚えてやがれぇ！！

翔子「・・・・・・やっとついた」
嬉しそうにアミューズメントパークを見ている翔子。
・・・・・・ふむ。そんな姿を見ると連れてきた甲斐もあるかもしれないな。
うん、そういうことにしよう。

雄二「よし。それじゃ、翔子」

翔子「・・・・・うん」

雄二「帰ろう」

ミシッ。

翔子「・・・・ダメ。絶対に入る」

雄二「はっはっは。翔子、俺の肘関節はそっち側に曲がらないぞ？」
肘を極めてきた翔子に脂汗を流しながら笑いかける。まずい。指先

の感覚がなくなってきた。

翔子「・・・・・恋人同士は皆こうしてる」

雄二「待て翔子！お前は腕を組むという仲睦まじい行為と
　　サブミッションを同様に考えてないか！？」

そこへ

明久「あれ？雄二。雄二たちも来てたんだね」

命「翔子ちゃんたちも来てたんですね、ってなにやってるの翔子ちゃん！？」

そこには、明久と命がいた。命セリフからするにこいつらはどうやら客としてきたようだ。

・・・・だとしたら、翔子にチケットを渡したのは・・・・貴浩か。

・・・あの野郎、ただじゃおかねぇ。

命が翔子を向こうに連れて行き、腕組のやり方を教えている。

雄二「明久、お前も命と一緒に来たのか
　（話を結婚まで確か進められるんだろ、こいつと来てよかったのか）」

明久「いや、僕のはオリエンテーションのチケットだからその話はないよ。
　その時チケットは貴浩が僕達にくれるって言うから2人できたんだ」

しまった、その手があったのか！

命からのレクチャーが終わったのか翔子は俺の隣に戻ってくる。
・・・・良かった、今度は普通に手を組んでいる・・・・まあ少し恥ずかしいがな／／／

命「うん、似合ってるよ2人とも。あれ?坂本君どうしたの顔赤くして、もしかして照れてる?」
命が冷やかしてくる、それに明久の野郎も後ろの方でニヤニヤしてるし。
・・・・こいつら

雄二「なんだ、お前らはやらなくていいのか?お前、翔子をうらやましそうに見てるが・・・」

明久「えぇっ!／／／／い、いやその僕達はそんな関係じゃないし／／／」
命と明久は俺の言葉に驚いていて、動揺している。いい気味だ。
ちなみに、翔子は命に対して踏ん反り返っている。
こういうときに合わせてくれるのは翔子のいいとこだな。

雄二「じゃあな明久、命。俺達は先に行ってる。」

翔子「・・・・・中でまた会えたら、よろしく」
俺と翔子はそれだけ行って、入場口のほうへ向かう。
プレオープンという限定的な期間であるため、特に待つ事もなく入り口の方へ行けた。

～　ＳＩＤＥ　ＯＵＴ　雄二　～

時間は少しさかのぼる

さて今日は雄二と霧島さんが如月グランドパークに行く日だ。
そして明久と命も行く事になつている。さて４人をサポートするように頑張るかな

貴浩「じゃあ楓、なのは俺は出かけるな」

楓「兄さん、いってらっしゃい」

なのは「いってらっしゃーい」

貴浩「２人も今日は出かけるんだろ？」

楓「はい、今日は部活の友達と遊びに行くんです」

貴浩「気をつけてな。何かあったらすぐ連絡するんだぞ」

楓「大丈夫ですよ兄さん。心配しすぎです」

貴浩「そ、そうかな」

なのは「さて私も行くとしようかな」

貴浩「なのはも楽しんでこいよ」

なのは「そうするね」

貴浩「じゃあいってくる」

さて、じゃあ待ち合わせ場所に行きますか

～　ＳＩＤＥ　ＩＮ　明久　～

僕は今日、命とグランドパークまで一緒に遊びに行く。
貴浩に言われたとおりさすがに遅れるわけには行かないからね
お金だって今日はある。
最近は貴浩の家でご飯を食べたり勉強してるからあまりゲームを買ってないんだよね

明久「もう駅までついちゃったな。まだ時間は８時２０分か」
９時に待ち合わせだったからね。もう命はいるかな？

明久「流石にまだ来てないよね」
僕は駅の前にある噴水の前で命を待つ。・・・・・・待つ事２０分

命「明久君、ごめんね待たせちゃって」
僕をみつけた命が駆け寄ってくる。
走ると危ないよと言おうとすると命が地面に躓いてこけそうになっていた。
僕は命がこける前に手を掴んで起こしてあげる

明久「大丈夫命？怪我とかない？でも急に走ったら危ないよ」

命「明久君のおかげで怪我はないです。だって楽しみで・・・・つい、」
まあ、しょうがないか。命もそれだけ楽しみだったって事だし悪い

気はしないしね
ハッ殺気!?気のせいだよね。

明久「少しぐらい早く行っても問題ないだろうし、行こうか命」

命「う、うん／／／／／」
僕は命の手を握りながら駅へと向かった。
僕はこのとき思っても見なかった。これから起こる事を・・・・・・

??「・・・・・チラリと見えたチケットから如月グランドパークと思われます。
・・・後は頼みます」

～　ＳＩＤＥ　ＯＵＴ　明久　～

今俺達は雄二と霧島さんを応援するため影からサポートしようとしている
今回手伝ってくれるのは、優子・愛子・光一・刀麻・砂原さん・椎名さんだ

しかし参ったな。まさかこんな事になるなんて、

光一「どうかしましたか貴浩殿?」

貴浩「・・・・・光一、あっちを見てみろ」
ちなみに光一・刀麻には命が明久に好意を向けている事を教え、
俺が手助けしていることを教えた上で手伝ってもらっている

だから今日、明久と命がデートなのは俺と光一、刀麻の3人しかいない

刀「どうした貴浩？あっちに何かあるのか？」
刀麻と光一は俺が指差したほうを見る

刀麻「げぇ！？・・・・・・・・そういうことかよ」

俺たちが向いているほうには、Fクラスのメンバー、島田、姫路がいる。
変装して準備は万全といったところだ。
はぁ、とにかく明久が命の邪魔をさせないようにしないとな・・・・
ただあの中にムッツリーニがいないのが気になるが

貴浩「・・・・・・・・光一」

光一「なんでしょうか？」

貴浩「Fクラスのやつらを消せ」

光一「はっ！」

俺は光一に指示を出すと光一は俺達の前から姿を消した

刀麻「消せって・・・・」

貴浩「雄二と霧島さん、明久と命たちのためだ」

おっ、光一があいつらの前にいくと

須川「うっぎゃあああああああああああ！！」

おお凄い。流石光一だ。お得意の武器でFクラスのやつらははノックアウトだ。

いつの間にか姫路と島田の2人はどこかに行ってしまったが、良いか・・・

貴浩「じゃあ俺達も移動するか」

俺達は光一が手配した車でグランドパークへと向かった。

ちなみにヘリで・・・・

如月グランドパーク編2　～あらがえない雄二～

「いらっしゃいマセ！如月グランドパークへようこソ！」
その男は日本人ではないのか、若干訛りの混じった口調で俺たちに笑顔を振りまいた。
顔立ちはアジア系っぽいので日本人かどうかはよくわからないが。

「本日はプレオープンなのデスが、チケットはお持ちですか？」

翔子「・・・・・はい」
翔子がポケットから例のチケットを取り出す。

「拝見しマース」
係員はそのチケットを受け取って俺たちの顔を見ると、笑顔のまま一瞬固まった。
翔子がそんな係員の様子を見て不安そうに表情を曇らせる。

翔子「・・・・そのチケット、使えないの・・・？」

「イエイエ、そんなコトないデスよ？デスが、ちょっとお待ちくだサーイ」
係員はポケットから携帯電話を取り出し、俺たちに背を向けてどこかに電話をし始めた。

「――――私だ。例の連中が来た。声が違うからこっちだ。
ウエディングシフトの用意を始めろ。確実に仕留める」

雄二「おいコラ。なんだその不穏当な会話は」
この係員、急に目の色が変わりやがったぞ。まさか例のジンクスを

作るための工作員か？
・・・・・ん？明久以外にも来ているヤツらがいるのか？

翔子「・・・・ウエディングシフト？」
翔子が首をかしげている。
如月グランドパークの企みを知らないコイツにはよくわからない単語だろうな。
ってか知らないでいて欲しい

「気にしないデくだサーイ。コッチの話デース」

雄二「アンタ、さっき流暢に日本語話してなかったか？」

「オーウ。ニホンゴむつかしくてワカりまセーン」
取り繕ったように元の雰囲気に戻る係員。あからさまに怪しい。

雄二「ところで、そのウエディングシフトとやらは必要ないぞ。
　入場だけさせてくれたらあとは放っておいてくれていい」
もはや潔いとも言えるネーミングのおかげで、向こうのやろうとしていることはよくわかった。
だが、そんなものに乗る気はない！そうしないと、俺の人生がっ！

「そんなコト言わずニ、お世話させてくだサーイ。
　トッテモ豪華なおもてナシさせていただきマース」

雄二「不要だ」

「そこをナントカお願いしマース」

雄二「ダメだ」

「この通りデース」

雄二「却下だ」

「断ればアナタの実家に腐ったザリガニを送りマース」

雄二「やめろっ！そんなことされたら我が家は食中毒で大変なことになってしまう！」

あの母親は間違いなく伊勢海老だと勘違いして食卓にあげるだろう。

なんて恐ろしい脅迫をしてくれんだ、この似非外国人め・・・・！

「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」

翔子「・・・・記念写真？」

「ハイ。サイコーにお似合いのお二人の愛のメモリーを残しマース」

翔子「・・・・・・・・雄二と、お似合い・・・・・（ポッ）」

翔子は似非外国人の言葉に頬を赤らめていた。

？？？「お待たせしました。カメラです」

そこに帽子を目深にかぶったスタッフがカメラを片手に現れた。

うん？なんだか見覚えのあるヤツだな。帽子で顔を隠しているのが怪しいが……

「アナタが持ってきてクレだのデスか。わざわざありがとうございマス。助かりマース」

似非野郎が礼を言いながらカメラを受け取る。やはり妙だ。

こういった場所のスタッフが客の前で同僚に丁寧な礼を言うだろう

か?
ってかコイツ帽子を深く被っているが見たことあるような気がする
――――――ふむ。少し試してみるか。

雄二「悪いがちょっといいか」

「わかりまシタ」

雄二「そういえば今日、翔子と電車に乗ってる時に
楓がいたな。そして楓は変な男にナンパされていたな」

貴浩「なんだとぉ!!ソイツはドコのどいつだ!!おい雄二そいつらの事詳しく
・・・・・・・・・し、しまった」

やはりコイツか。楓のことを出せばすぐわかると思ったからな。

雄二「今の話は嘘だ。で貴浩よなんでテメェがここにいるんだ?」

「彼はココのスタッフのエリザベート・ハナオ（三十五歳）通称スティーヴでース。
あなたの言うオリムラナントカさんではありまセーン」

雄二「黙れ!人種性別年齢氏名全てにおいて堂々と嘘をつくな!
しかもどう考えてもその名前で通称スティーヴはないだろ!!」

貴浩「チッ、もうバレたか」

雄二「おいこの野郎。テメェ何してくれてんだ?」

俺は貴浩の胸倉を掴む

貴浩「おいおい、そう怒るなよ。それに今さっきまで霧島さんに
腕を組まれていて悪い気分じゃなかっただろ（ニヤニヤ）」

雄二「ッ！！」
コイツいつから見てやがった

貴浩「まあ今日は楽しめよ雄二。じゃあ霧島さん彼氏と仲良くね」

霧島「・・・・・・（コクン）」

そういうと貴浩は走り去って言った。
貴浩がいたって事は他のヤツらもいるな。なら・・・・

雄二「翔子、すまんがちょっと我慢してくれ」

翔子「・・・・・・？？？」
きょとんとしている翔子のスカートを掴み、軽く捲り上げる。
下着が見えるか見えないかというギリギリの高さまでスカートが持ち上がった。

雄二「……何！？ムッツリーニがいないだと。ヤツなら今のに反応するはずなのに！」

翔子「・・・・・・雄二、えっち」
翔子が少し怒ったような顔で俺を見ていた。

雄二「なっ！？ち、違うぞ翔子！俺はお前の下着になんか微塵も興

味がないっ！」

翔子「・・・・・それはそれで、困る」

雄二「ぐぁあああああっ！理不尽だぁあっ！」
翔子の握力で俺の頭蓋が軋む音が聞こえてきた。

「でハ、写真を撮りマース」

翔子「・・・待って」
翔子は係員にそういうと俺の頭の頭から手を離すと手を組んで俺にくっついた

翔子「・・・・・もういい」

「はい、チーズ」
近くでフラッシュが焚かれ、ピピッという電子音が聞こえてきた。

「スグに印刷しマース。そのまま待っていてくだサイ」

翔子「・・・わかった。このまま待ってる」

正直恥ずかしいんだが／／／

「――――はい、どうゾ」
ほどなくして似非野郎が写真を持ってきた。それと同時に開放される俺。
翔子は嬉しそうに写真を受け取った。

翔子「・・・ありがとう。・・・雄二、見て。私たちの思い出」

翔子が俺に写真を見せてくれる。

雄二「…なんだ、この写真は」

写っているのは俺と腕を組んで写っている翔子。そして――――

「サービスで加工も入れておきまシタ」

その2人を囲うようなハートマークと『私達、結婚します』という文字。

未来を祝福する天使が飛び回っている。

この写真をみると本当に結婚してしまうみたいじゃないか！

「コレをパークの写真館に飾っても良いデスか？」

雄二「キサマ正気か!?コレを飾られたら俺はもう言い逃れが出来ないじゃないか！」

翔子「・・・雄二、照れてる？」

雄二「うっ／／／」

印刷された写真を見てると、

『あぁっ！写真撮影してる！アタシらも撮ってもらおーよ！』

『オレたちの結婚の記念に、か？そうだな。おい係員。オレたちも写ってやんよ』

いかにもチンピラのようなカップルがやってきた。

「すいまセン。こちらは特別企画でスので……」
似非野郎が断ろうとする。どうやらあの写真撮影は例のウエディングシフトとやらの一環で、
俺たちだけが対象なのだろう。

『あぁっ!?いいじゃねーか!オレたちゃオキャクサマだぞコルァ!』

『きゃーっ。リョータ、かっこいーっ!』
男が下から睨みつけるように似非野郎を威嚇し始める。
絵に描いたようなチンピラだな。その姿を見て喜ぶ女もどうかと思うが。
あいつらを見ていると本当に翔子が良く見えてくる。
・・・・・・・・・・はっ!俺は何を考えていたんだ

『だいたいよぉ、あんなダッセぇジャリどもよりも
オレたちを写した方がココの評判的にも良くねぇ?』

『そうよっ!あんなアタマの悪そうなオトコよりもリョータの方が
１００倍カッコイイんだからぁ!』
とりあえずチンピラカップルが係員の注意を引いている間に逃げるとするか。

翔子「・・・・（ツカツカツカ）」

雄二「っておい翔子。どこに行くんだ」
急に勢いよく歩きだした翔子の腕を掴んで引き止める。

翔子「・・・・・あの2人、雄二のことを悪く言ったから」

雄二「あのなぁ・・・その程度のことでイチイチ目くじら立てていたらキリがないぞ？」

正直あんな連中に何を言われても気にならないし、何より視界に入れておくだけでも不愉快だ。
まあ、翔子怒ってくれた事に悪い気持ちはしなかったがな

雄二「行くぞ、翔子」

翔子「・・・・雄二がそう言うのなら」
翔子もその光景は嫌だったようで、促すと渋々ついてきた。

雄二「さて。それじゃ、テキトーに回ってみるか」

翔子「・・・・楽しみ」
園内には前評判通りの最新アトラクションが沢山あった。
３Ｄの体感アトラクションから絶叫マシーン、
コーヒーカップやメリーゴーランド、観覧車など、
知っているアトラクションは全て揃っているようだ。
中には見た目だけでは想像もつかないようなものまである。

雄二「映画館でもあれば楽なんだがな」

翔子「・・・・・折角一緒にいるんだから、そんなのはダメ」
翔子に却下されたので、仕方なく面倒が少なくて
妙な雰囲気にならないようなアトラクションを探す。
すると、そんな俺たちにヒョコヒョコと着ぐるみが近寄ってきた。
確か命が持っていたキツネのキーホルダーのキャラクターだ。

『お兄さんたち、フィーが面白いアトラクションを紹介してあげる

よ？』

着ぐるみから聞こえてくるのは若い女の声。

ボイスチェンジャーなどを搭載していないのか、その声は普通の人間の声だった。

雄二「じゃあ、フィーとやら。お前のオススメを教えてもらえるか？」

『あ。う、うんっ。フィーのオススメはねっ、向こうに見えるお化け屋敷だよっ』

フィーとかいう狐の手が噴水を挟んだ向こう側に見える建物を示す。

ふむ。廃病院を改造したとかいう例のアレか。

雄二「そうか、ありがとう」

『いえいえっ。楽しんできてねっ』

翔子「よし翔子。お化け屋敷以外のアトラクションに行くぞ」

翔子の背中をおして歩き出す。すると慌てたように俺の腕をつかんできた。

『ままま待って下さいっ！どうしてオススメ以外のところに行くんですか！？』

雄二「どうしてもクソもあるか。お前もあの似非外国人の仲間だろう？

だったら、お化け屋敷には余計な仕掛けが施されているのは明白だ。

わざわざそんなところに行く気はない」

『そ、そんなの困りますっ！お願いですからお化け屋敷に行ってください！』

雄二「断る」
そのお願いとやらの為に残りの人生を捧げる気はない！
断固として否定し、俺は自由を謳歌するんだ！・・・・今更だが、なんか聞き覚えのある声だ。
気のせいか、クラスメイトの優等生に思えてならない。こいつも確認しておくか。

雄二「そういえば、明久が命と一緒にここに来ていたぞ」

姫路『えぇっ、明久君が！？それはどこで見たんですか！？』
本当にこいつらは、揃いも揃って・・・。

雄二「おい姫路。アルバイトか？」

姫路『そんな事より、明久君をどこで見たんですか！教えてください！！』
姫路からはいつも以上の強い殺気が感じられる。
まさか姫路までここまで堕ちるとはさすがＦクラスというべきか・・・・
少し明久に同情するな

そんな姫路の対応をしていると、姫路の方から携帯の音が鳴る。

姫路『もしもし、美波ちゃんですか。・・・・・明久君が！？
・・・・はい、分かりました！すぐ行きます！』
こいつ等はまともに仕事を行う気はないのか！？
姫路は電話を切るとすぐにこの場から消え去った。

・・・・あいつ、確か運動苦手なんじゃなかったのか？

「ハイ、すいまセーン。お待タせしまシタ。チョッと撮影二手間取ってシマいましタ」

そうこうしていると、さらに面倒なヤツが現れた。さっきの似非野郎だ。

もう追いついてきたのか。ん？撮影？

「なんだ？さっきのバカップルでも撮影したのか？」

「イエ。アノあと、モウ2組みのプレミアムチケットの方タチがキテ、

そちラの方々ヲ撮影しまシた」

雄二「は？何だと。俺達以外に2組来ているのか？いったい誰が・・・」

「お話はソレで終わりですカ？では坂本雄二サン、お化け屋敷に行って下サイ」

雄二「前後の文に脈絡がないからな。それにイヤだと言っているだろうが」

そんな危険地帯に自ら踏み込む気はない。

「断れバ、アナタの実家にプチプチの梱包材を大量に送りマース」

雄二「やめろっ！そんなことされたら我が家の家事が全て滞ってしまう！」

あのおふくろは全ての梱包材を潰し終わるまで他のことは何もしないだろう。

なんて地味かつ微妙な嫌がらせをしてくれるんだ・・・・・！

俺は翔子のほうをみてみると

貴浩「霧島さんお化け屋敷は雄二に抱きつき放題だよ?」

貴浩のヤツが翔子に何か吹き込んでいた

翔子「・・・・雄二。お化け屋敷に行きたい」

雄二「汚いぞ貴浩、翔子を罠にハメようなんて!!」

翔子「・・・・・大丈夫」

油断している隙に翔子に腕を組まれた。これじゃあいろんな意味で抵抗できない！

貴浩「計画通り（ニヤッ）」

「では、こちらにサインして下サーイ」

似非野郎が取り出したのは何かの書類とボールペン。なんだコレは?

「ただの誓約書デース」

誓約書が必要なお化け屋敷ってなんだ。そんなに危険なのか?

雄二「だがまぁ、面白そうではあるな」

誓約書が必要ということはスリルに満ちているということでもあるだろう。

それはそれで面白いかもしれない。

少し楽しみになってので、ボールペンを受け取って書類に手をかける。

【誓約書】

1．私、坂本雄二は霧島翔子を妻として生涯愛し、苦楽を共にすることを誓います。

2．婚礼の式場には如月グランドパークを利用することを誓います。

3．どのような事態になろうとも、離縁しないことを誓います。

翔子「・・・・はい雄二。実印」

貴浩「朱肉はこちらです」

雄二「俺だけかっ!?俺だけがこの状況をおかしいと思っているのか!?」

こいつらは全員正気じゃない。

「冗談でス。誓約書はいいので中に入って下サイ」

翔子「・・・・・・うん。冗談」

貴浩「もちろん冗談だよ」

雄二「カーボン紙を入れて写しまで用意しているくせに冗談と言い張るのか」

色々といってやりたいことはあるが、この連中に常識を求めるのも酷というものだろう。

「それデハ、邪魔になりそうなノデその大きなカバンをお預かりしマース」

翔子「・・・・お願い」

翔子が似非野郎にバックを渡す。そういえばヤケに荷物が大きいな。

翔子「・・・・零れちゃうから、横にしないで欲しい」

「このカバンをですカ？わかりまシタ。気をつけマース」

零れる？あの鞄に何が入っているんだ？

「デハ、行ってらっシャいマセ」

翔子「・・・・・雄二、行こう」

雄二「く、クソ！」

抵抗空しく、お化け屋敷の扉の前に立たされる。演出なのか、

その扉は横開きの自動ドアでありながら電気が入っていないようで

手動で開けるようになっていた。

『私だ。お化け屋敷にターゲットが入った。あの人達考案の作戦を

実行しろ』

あの人達と言うと、貴浩達のことか？

いや、あいつはそういうところは正常だからきっとの島田や姫路た

ちだろう。

あいつらは俺と翔子の関係を見ていて羨ましがっていた奴らだから

な。

いったいどんなものになっているかはわからんが、

あいつら如きの策に引っかかってたまるか！

如月グランドパーク編2　～恐怖のお化け屋敷～

お化け屋敷内

薄暗い廊下を翔子と二人で歩く。
カツン、カツンと廊下は足音を必要以上に大きく鳴らしているような気がした。

雄二「さすがに廃病院を改造しただけのことはあるな。雰囲気満点だ」

翔子「・・・・ちょっと怖い」

雄二「こういうのにあまりビビらないお前が怖がるなんて、珍しいな」

翔子「・・・・そうかも」
時折、壁に貼られている《順路》というポスターに従って進んでいく。
一階は特に何が起こるというわけでもなく、二階に上がり、
少し進んだ廊下で初めて何かの演出が顔を出した。

【――じの方が――――――よりも――――――】
冷たい風に乗って幽かに聞こえる声。ふむ。怨嗟の声の演出か？

翔子「・・・・・この声、雄二・・・・・？」

雄二「ん？そうなのか？」
これは俺の声そっくりだな。秀吉に声真似でもさせたのだろうか。

確かに自分の声が聞こえてくるなんて怖いといえば怖いが、
あいつらにしては普通の演出だと――――――

【姫路の方が翔子より好みだな。胸も大きいし】

翔子「・・・・雄二。覚悟、できてる？」

雄二「怖ぇっ！翔子が般若のような形相に！確かにこれはスリル満点の演出だ！」
なんて恐ろしいことを考えてるんだあいつら！！
まさか俺を生かしてここから出さないつもりか！？
と言うか、今の翔子はこないだの貴浩並の迫力だぞ！？

なんてビビっていると、バンッと背中で何かの仕掛けが作動する音が聞こえた。
よっしゃ！ナイス演出！助かったぜ！

雄二「翔子！何か出てきたぞ！」
音のしたほうに首を向けると、そこにはさっきまで何もなかったはずなのに、
突如あるものが現れていた。それは――――――

翔子「・・・・気がきいてる」
・・・釘バット？

雄二「畜生っ！よりにもよって処刑道具まで容姿してくるとは！
全く趣旨は違うが最強に恐ろしいお化け屋敷だっ！」

翔子「・・・・雄二。逃がさない」
釘バットを持った幼なじみに追いかけられるという斬新なアトラク

ションを
1時間あまり楽しむ羽目になった。
しかし、島田と姫路はコレで俺と翔子がくっつくと思っているのか・・・？
貴浩はあいつらを止めようとしなかったんだ・・・・・
なんとか落ち着いた翔子を連れて俺はお化け屋敷を出た。

「お疲れサマでシタ。どうでシたカ？結婚したくなりまシタか？」

雄二「アレで結婚を結びつけて考えることが出来るのはお前と島田と姫路ぐらいだろうな」
絆どころか溝が深まった気分だ。

「オカしいデスね？危機的状況に陥っタ二人の男女ハ、
強い絆デ結ばれルという話なのデスが・・・・」

雄二「襲い来る危機が結ばれるべき相手自身でなければそうなるかもしれないが・・・・・」
この似非野郎、きっと前の明久となら同レベルのアレなヤツだろう。

貴浩「すまない雄二。まさかあの2人がこんな事をしてるとは思わなかった。
一応霧島さんには説明しておいたからこれからはまた楽しんでくれ」

雄二「なんだ貴浩？やけに素直だな」

貴浩「そりゃ、今回は楽しんでもらえるように仕組んでるんだからな。

それに今日は霧島さんからはあまり暴力はうけてないだろ」

そういえばそうだな

貴浩「ということで2人で楽しんでくれ」
そうか貴浩のおかげで翔子が大人しいのか。おかげで少し安心した部分もある。
これなら死にもの狂いで脱出するような真似はしなくてもよさそうだ。

・・・面倒なので、できればすぐにでも帰りたいが。

翔子「・・・そろそろ、お昼」
翔子が噴水の上の法を見ながら呟いた。
そこにある大時計は午後1時過ぎを示していた。そろそろ昼飯か。

翔子「・・・・・あの、私のバッグ・・・」

「デハ、豪華なランチを用意してありマスので、こちらにいらして下サイ」
似非野郎がスタスタと歩き出す。昼飯も用意してあるのか。
さすがはプレミアムチケットだな。

雄二「翔子、どうした?」

翔子「・・・・・なんでも、ない」

雄二「???」
一瞬寂しげな顔をしていたような・・・・・?

翔子「・・・・・雄二。急がないとはぐれる」

雄二「お、おう」
俺たちがついてくるという自信があるのか、似非野郎の姿が随分と遠くに見える。
まぁ、豪華な昼飯と聞いたからにはご馳走になるつもりではあるが。

あれ？俺だけ1独り身？？

時間は少しさかのぼり、

雄二と別れた僕は命とどこを回るか相談していた

明久「さて、どこから回る命？」

命「えっと、いっぱいあるから迷うね？
あっそういえば乗ってみたいのがあったんだけどそれでもいいかな？」

明久「もちろん！それじゃいこうか」
と、言ってそのアトラクションに行く前に外国人の男が近づいてくる。

「オーウ、そこのカップルさん？写真なんかどうですか」
僕達はカップルなんかではばいんだけど／／／／
でもカップルに見られるのか／／／／

命「写真だって！記念だし撮ろうよ明久君」

明久「そ、そうだね。って命！？／／／なにやって――」

「でハ、撮りマース。はい、チーズ」
その瞬間、ピピッというシャッター音がなる。
撮った写真を見せてもらうとそこには、腕を組んででカメラに向かってピースしている命と
突然腕を組まれて顔を赤くしている僕が写っていた。

「スグに印刷しマース。そのまま待っていてくだサイ」
外国人の男はどこかにいってしまう。あれを印刷するのか・・・・
恥ずかしい／／／／
というか、もしあれが姫路さんや美波、優子さんや秀吉の手に渡ったら
・・・・僕はその場で死ぬのかもしれないな。
写真撮影って来た人達全員にやってるのかな？
そうとしか考えられないよね、だって僕達は結婚の件はないはずだし・・・・・

「お待たせしまシタ――――――サービスで加工も入れておきまシタ」
どれどれと僕達は写真を覗きこむ。
その写真に写っているのは先ほど説明した状態の２人と
その２人と囲うようなハートマークと『私達、結婚します』という文字、
それに未来を祝福する天使が飛び回っている。
・・・・どうしてこうなったんだ・・・・・・・・ｏｒｚ

明久「あのすいません。結婚までのプロデュースはこのチケットではないはずですが」

「アア。それはアチラにいる方カラ頼まれたので。
この写真とアト、ウエディングドレス、タキシードを着ての撮影をおこなう事にシマシタ。
それとこの写真をパークの写真館に飾っても良いデスか？」
向こうには貴浩が見えた。
しかも命の姉である優子さんまで、・・・・・・・・僕殺されるのかな？
それにこの写真を飾るだって？思い出としてとっておくならともか

く冗談じゃない！！
死へのカウントダウンじゃないか！！

明久「やめてください。それとそのフレーム――」
命「いいですよ。ただそのりのフレームは恥ずかしいので外してくださいね」
明久「ってなにいってるの命！？」

「ＯＫ、分かりました。ありがトウございマース。（貴浩さんの言うとおりでしたね、ニヤニヤ）
それでは、後ほどウエディング体験の方に移りタイト思うので、後でスタッフを向かわせマス」

命「はい♪（明久君とウエディング体験ヤッタ♪）」
明久「命・・・どうしたの？ちょっと浮かれてるみたいだけど」
命「えっ！／／／い、いやなんでもないよ／／／気にしないで明久君」

すると

秀吉「明久ではないか。それに・・・・・・命じゃと！？」
優子さんの次には秀吉が現れた。アレ？今日で僕死ぬのかな
命「ひ、秀兄！？どうしてここに？それに楓ちゃんも」
明久「楓もいるんだ！？」

アレ？これって拙くない。確か近くに貴浩が・・・・・
貴浩がいたほうを見ると、
貴浩は、光一と刀麻に、優子は、工藤さんによって押さえられていた

楓「命ちゃんも明久君と来てたんだね」

命「うん、まさか楓ちゃんも来てるなんて驚いたよ」

楓「私もだよ。ところでこの事、優子ちゃんと秀吉君には話してるの？」

命「うぅ・・・・話していないよ」

秀吉「そうじゃ！どういうことじゃ命よ！ワシと姉上は聞いておらぬぞ！！」

楓「落ち着いてください秀吉君。
それなら私たちも兄さんに黙ってきてますからお相子ですよ」

秀吉「そ、そうじゃな」

明久「あ、あの秀吉と楓？」

秀吉「なんじゃ！？明久よ？」

明久「凄い言いにくんだけど・・・・」

楓「どうしたんですか明久君？」

明久「いや、あちらをご覧ください」

秀吉「なんじゃ？あちらになにか――」

僕は貴浩たちがいるほうを指差した

楓「に、兄さん」

秀吉「・・・た、貴浩じゃと」

命「優姉・・・」

明久「ごめん。さっきから居たんだけど言い出せなくて」

～　ＳＩＤＥ　ＯＵＴ　明久　～

貴浩「やあ秀吉君。どうしたのかなこんなところで（ニコ）」

優子「こんにちは明久君。どうしたのこんなところで（ニコ）」

貴・優「「で？もしかして楓（命）とデートなのかな？」」

俺と優子は黒いオーラを纏いながら質問する

明・秀「「え、えっと・・・・・」」

ああ、僕と秀吉はここで死ぬのか

楓「・・・・・あ、あの、に、兄さん・・・」

貴浩「・・・・・・・・・まあいいや。今は見逃してやる。ただし秀吉!!」

秀吉「は、はい!!」

俺は秀吉の肩をＫＡＲＵＫＵ掴んで

貴浩「帰ったら説明よろしく!」

秀吉「も、もちろんじゃ!!」

貴浩「で?楓も後で話聞くからな」

楓「・・・・・・・はい」

貴浩「秀吉!!」

秀吉「はい!!」

貴浩「今日は楓を頼むな」

秀・楓「「え!?」」

貴浩「どうした?任せては駄目なのか?」

秀吉「任せるのじゃ!楓と楽しんでくるのじゃ」

貴浩「・・・・・そうしてくれ」

愛子「あれ?それで良いの?」

貴浩「・・・・・良いよ。せっかく遊びに来てるんだ。楽しまなきゃ損だろ」

愛子「へぇーそうなんだ。貴浩君って優しいね」

貴浩「なぁ！？／／／／　そ、そんな事より優子を止めるぞ」

愛子「了ー解！」

優子「明久君。これはどういうことかしら？」

命「えっと優姉？落ち着いて」

優子「命は少し黙ってなさい！私は今明久君と話しているの！！で、どういうこと明久君？」

明久「えっと、オリエンテーションの景品でペアチケットが当たったので
同じ班だった命と行こうと思いまして誘いました」

優子「・・・・・そう・・・・・」

明久「えっと優子さん？」

命「優姉？」

貴浩「さあ2人さっさと楽しんで来い！」

明久「え?でも・・・・」

貴浩「なにか?秀吉たちにも言ったけどせっかく遊びに来ているんだ。楽しんで来い!」

愛子「そうだよ2人共。今は楽しまなきゃ損だよ」

貴浩「良いだろ優子」

優子「・・・・・わかったわよ。明久君。ちゃんと命のことを楽しませてね」

明久「はい!!行こ命!」

命「はい!!」

明久と命、秀吉と楓を見送ると

貴浩「行ったか。さてこちらも仕事にm・・・・・」

愛子「どうしたの貴浩君?」

優子「どうしたって言うの?」

俺が見た方向にはなのはと・・・・・

・・・・・・ムッツリーニがいた

貴浩「ムッツリーニ！？」

ムッツリ「！？」
ムッツリーニが逃げようとしたので

貴浩「逃がすか！！」
俺はすぐさま仕込みトンファーで捕まえる

愛子「なのはちゃんがムッツリーニ君と来てるとは驚きだよ」

優子「本当よ。どうしたの？」

なのは「えっと、清涼際の時私たち誘拐されたでしょ、
その時に私を助けてくれたのが土屋君なの。だからそのお礼にと思って誘ったの」

貴浩「そういやそうだったな。それでか今回の事、誘ったのに来なかったのは」

ムッツリ「・・・・・・・・・・・・・・八神がどうしてもと言ったからだ」

貴浩「ふーん。なのはとのデート楽しんでこいよ」

ムッツリ「・・・・・・・・・・・・・・デートじゃない」

貴浩「手を繋いでいたのに？」

ムッツリ「・・・・・・・・・・それは仕方がなくだ」

貴浩「まあそういうことにしとこうか。
悪いな2人の邪魔をして、じゃあ楽しんでこいよ」

なのは「うん。そうするね。じゃあいこう土屋君」

ムッツリ「・・・・・・（コクン）」

なのはとムッツリーニを見送る。

貴浩「まさかの組合せだったな」

愛子「そうだね。さすがにアレは驚いたよ」

優子「そうね。まさか土屋君とは驚きね」

貴浩「そうだな。さて俺達も仕事に戻るか」

俺は優子と愛子と別れ雄二達の元へと向かった

・・・アレ？いつものメンバーで1人身って今俺だけじゃないかＯｒｚ

その後、俺は落ち込みながらもお化け屋敷へと向かった

あれ？俺だけ1独り身？？（後書き）

今は一応秀吉と楓が遊ぶ事を許した貴浩でした。
明久も後で優子に説明しないといけませんね。

そしてまさかの康太となのはのデートでした。

幸せと不幸と救世主

～　ＳＩＤＥ　ＩＮ　明久　～

僕と命はグランドパークの中にあるパーティー会場のような所に来ていた。
そこで僕はタキシードに命はウエディングドレスに着替えさせられてる。

「あの、大丈夫ですか？」

明久「ああ、すいません。ありがとうございます」
たまにスタッフとこんな感じで話す。
・・・流石にこの年で着せられるというのは恥ずかしいけど。
着方が分からないのだからしょうがない。

そうこうしているうちに終わったみたいだ。

椎名「とってもお似合いですよ」
といってスタッフの１人が鏡を持ってきてくれる。
あのスタッフってＡクラスの椎名さんだよね？
そこに写っているのは純白のタキシードを着た僕だった。

その後、椎名さんに隣のスタジオに連れて行かれる。

椎名「それではここでお待ち下さい」
そう言われ僕はここで待つ。待っている間にいろいろな事を考えていた。
これからの事、優子さんと秀吉の事、

皆がいるということから美波たちも来ているということ
・・・・・・・・・・・ああ、もう考える事が多すぎて上手くまとまらない！
って僕本当に今日で死ぬのかも

優子「あら、明久君。もう着替え終わってたの？」

明久「げぇ！？ゆ、優子さん、丁度今来たところだよ。
・・・・・・それよりどうしたの？ボーイの格好なんかして」

優子さんが奥の方からやってくる。そんな事より1つ疑問が出てくる
・・・・どうしてボーイの格好をしているんだろうか

優子「これね、本当は秀吉が着るはずだったんだけど秀吉が楓とデートしているから。
それで秀吉の変わりにこれを着て、代表たちのところに行くのよ。
と言ってもまだ時間はあるんだけどね」

と、木下さんは少し困った顔をして事情を説明してくれる。
そういえば秀吉は楓とデートしてるんだった。
ってアレ？僕は今、命とデート？してるのに大丈夫なのかな？

優子「あ、そうだ明久君。今、命を見てきたけど羨ま（ゲフン）、
可愛くなってたわよ。さすがは命よね、それじゃあね。」

明久「え！？優子さん？」

命「明久君！！」

僕は後ろから聞こえてきた声に反応する。そこにいたのは・・・・・

命「・・・・・・・・・・・・に、似合うかな／／／／／」
そこには純白のドレスを着た命がいた。

明久「・・・・・・・・・・・・ぜ、全然変じゃないよ、むしろ似合ってるよ」
ふぅー・・・・・・もうアウトだよ、完全に見蕩れていたよ僕。

命「ホント!?良かった」

「ソレでは、とりマース。二人ともモット近づいてクダサーイ」
写真を撮るのは、先ほどここに案内したあの外国人らしい。
・・・どうもこの人しっかりした日本語話せそうなんだよなぁ
外国人の人に言われ、僕達は少しくっつく。
でも命はなぜか僕に密着してきた

「でハ撮りマース。はい、チーズ。・・・・・OKでース。
次は・・・・新郎さん、新婦さんをお姫様抱っこしてクダサーイ」

ええ!?何でそこまでやるの!?・・・・・・・・・貴浩か!カクゴシテオイテネ

命「明久君どうしたんですか?やってくれないの?」

明久「って、命はいいの!?」
僕なんかとこんな写真を撮って恥ずかしくないのかな?

命「う、うん。少し恥ずかしいけど／／／記念ですし／／／／」

明久「・・・・・・・・分かったよ。僕も男だ、覚悟を決めるよ」

命「きゃあ／／／／・・・・・あ、明久君私重くない？」

明久「うん。全然大丈夫」
そう言うと、命が僕の首に手を回してくる／／／／／／
・・・やばい、恥ずかしさとか色々あってこのまま倒れそう

「でハ撮りマース。はい、チーズ・・・・・・・OKでース。
印刷をしてくるのでその間に着替えて置いてください」
それだけ言って外国人はどこかに行ってしまう。
あれは流石に写真館に飾らないよね・・・・

明久「分かりました。それじゃ着替えよっか、命」

命「うん、そうだね。」

あの後、あの外国人に印刷した写真を見せてもらった。
あれは本当に他人には見せられない／／／／／／
あの写真には流石に命も顔が真っ赤になっていた。
2人のポーズはさっき説明したとおり、ちなみに今回撮った写真は全部、1枚ずつ手渡された。
・・・持って帰ったら、絶対に誰にもに見つからないところに保管しておかないと！！
これは僕の宝物だ

明久「・・・・・・・早く行こうか命」

命「・・・・・・・そ、そうだね」

今、２人とも顔が真っ赤になっている。
・・・・・うう、気まずい。もしこんなところを雄二たちに見られたら

貴浩「おお、明久と命！どうだった？写真撮影」
からかわれる事間違いなしだろう。とにかく、貴浩たちに見つからないうちに

貴浩「その様子だと・・・ある意味大成功って訳だな。良かった良かった」

明・命「「貴浩（君）！？」」

貴浩「ったく、今頃気づいたのか」
命も貴浩がいたことに驚く。どうやら命も何か考え事をしていたようだ。
とりあえず目の前の貴浩に思いっきり殺意をぶつける。

明久「貴浩、一体僕に何の恨みがあってこんな事をやったのかな？」

貴浩「いや、おもしr（ゲフン）、２人の記念にと思ってな。
写真は見たが２人ともお似合いだな（ニヤニヤ）」

明久「っ！？／／／／／／／」
すでに見られていたの！？貴浩に弱みを握られてしまったじゃないか！

貴浩「まあ良いじゃないか。正直まんざらでもないだろ。
それに俺がいなかったらお前、優子と秀吉に殺されているぞ」

明久「ッ！！」
そうだった

貴浩「まあ俺が今来た理由はな、襲いかかってくる奴らが来るだろうから、
それからお前らを守るためにきたんだ。
・・・・・ああ、ちなみにあの写真は写真館に飾るってさ」

明久「なんだって！？それじゃあもしここに友達が来たときとか困るよ」
それに僕を襲う人っていったらFクラスに皆じゃないか！！
なおさら飾るわけにはいかないよ

島田「アキ？命とあんな写真を撮るなんて覚悟は出来てるわよね」

明久「ってもう来た！？」
しかもよりによって美波！？・・・・このままじゃ姫路さんもここに来て、
この場で処刑されるのも時間の問題か！・・・・・何とか命だけでも逃がさないと！

島田「アキ、もう瑞希なら電話で連絡したわよ。
さあ覚悟しなさいアキ！」

姫路「待ってください美波ちゃん！・・・・私にも殺らせてください！」
あ、姫路さんまで来た。もう終わりだｏｒｚ。
・・・・どうして僕はこんなにも２人に嫌われているんだろう、
僕何かやったかな？

貴浩「ちっ、もうきやがったのか。仕方ない明久！
命を連れてここから逃げろ！ここは俺が食い止める！」

明久「貴浩もいきなり何言ってるの！？そのセリフ完全に死亡フラグだよね！？」

貴浩「1度言ってみたかったんだ」

とは言え、確かにここは逃げないと僕には死しか訪れない。
でも貴浩を見捨てるしかないのか！？

光一「安心してください、俺もいますから」

明久「光一！」
貴浩の隣にいつのまにか光一が現れていた。

貴浩「ここは俺達に任せろ。だからいけ！明久！！生き延びるんだ明久！！」

明久「・・・・・大げさすぎる気もするけどありがとう、2人とも！・・・・命逃げるよ！」

命「う、うん」
僕は命の手を引っ張ってその場から逃げる。

幸せと不幸と救世主（後書き）

次回は　貴浩&光一　ＶＳ　姫路&島田

どのようになるのかお楽しみに。

退治

貴浩「明久たちも逃げたみたいだし、どうする？島田、姫路ここは通さないぞ」
ここで倒せばおそらく今日は邪魔できないだろう

姫路「ど、どうして織村くんは、私達の邪魔をするんですか」

島田「そうよ！命の味方ばっかして、それに羽鳥も！」
目の前の女子２人は抗議してくる。
全くこいつらは・・・少しは自分達の行動から明久がどう思ってるかとか
想像できないんだろうかな

貴浩「どうしてってお前らが先に明久たちの邪魔をしたからだろうが！
　しかも今回の件は前のオリエンテーションで手に入れたチケットで
　遊びに来ているんだ！それをお前らがどうこう言ういわれは無い！」

光一「俺は命の味方はしていない。俺は明久殿に害なす者を排除するだけだ。
　今回はお前らがそれに当たるから邪魔をしているんだ」
こういうとき光一は頼りになるな

島田「・・・・・・どうしてもどかないのね」

姫路「そこをどいてください。今ならまだ追いつけますから」

貴浩「行かせる訳無いだろ。光一やってくれ」

光一「はっ」

俺は光一に指示を出すと光一は姫路に向かって吹き矢を飛ばした。

俺は光一特製のトンファーを取り出し

島田に押し付けるとスタンガン機能を発動させ、気絶させた。

バタン×2

光一の吹き矢によって姫路は倒れて眠っていた。

吹き矢には睡眠薬がつけられていたのであろう

貴浩「じゃあ光一2人をしばってどこかに放り込んどいて。

明久たちの邪魔にならないように」

光一「了解いたしました」

さてこれで明久たちは大丈夫かな。では次の持ち場に移動するかな

～　ＳＩＤＥ　ＩＮ　秀吉　～

ワシと楓はグランドパークの中にあるパーティー会場のような所に来ておる。

そこでワシはタキシードに楓はウエディングドレスに着替えさせら

れておる。

「とってもお似合いですよ」
といってスタッフの1人が鏡を持ってきてくれる。
とりあえず、着させてくれたスタッフにお礼を言う。
その後隣のスタジオに連れて行かれる。
まだ楓は来ておらぬがカメラの方の準備はできてるみたいだ

「それではここでお待ち下さい」
スタッフの人にそう言われワシはここで待つ。

貴浩「あれ、秀吉。もう着替え終わってたのか?」

秀吉「貴浩!?・・・・それよりどうしたのじゃ?こんな所で?
しかもボーイの格好をしておるが」
貴浩が奥の方からやってくる。やばいの貴浩と2人きりか・・・・・・

貴浩「これか、本当はお前が着るはずだったんだけどな。
楓とデートしてるみたいだから俺が着てるんだ。
この後雄二と霧島さんが来るからなと言ってもまだ時間はあるんだが」
と、貴浩は少し困った顔をして事情を説明してくれる。
なおさら気まずいのじゃが・・・・・

貴浩「そう気をはるな。今は何もしないよ。今秀吉に手を出したら
楓が悲しむからな。今さっきも言ったけど今は楽しめ」

と貴浩がワシの今の状況に気がついたようじゃ。

貴浩「あ、そうだ秀吉。今、楓を見てきたけど可愛くなってたぞ。
（あまり見蕩れないようにな♪）それじゃあな」

秀吉「ブッ!?いきなり何言っておるのじゃお主は!?」

楓「秀吉君」
ワシは後ろから聞こえてきた声に反応する。そこにおったのは・・・
・・

楓「・・・・・・・・・・へ、変じゃないでしょうか?／／／／／」
そこには純白のドレスを着た楓がいた。

秀吉「・・・・・・・・・・・・ハッ!
ぜ、全然変じゃないのじゃ、むしろ似合っておるぞ」
完全に見蕩れておったなワシは・・・・・。
凄い威力じゃの

楓「本当ですか!?良かったです」

「ソレでは、とりマース。二人ともモット近づいてクダサーイ」
写真を撮るのは、入場ゲートにおった外国人らしい。
・・・・どうもコヤツはしっかりした日本語話せそうなんじゃが・・
・・・。
外国人の人に言われ、ワシ達は少しくっつく。
・・・な、なんで楓はこんなに密着してくるのかの!?

「でハ撮りマース。はい、チーズ。・・・・・OKでース。
次は・・・・・新郎さん、新婦さんをお姫様抱っこしてクダサーイ」
ええ!?そこまでやるのかの!?

向こうを見てみると姉上と工藤の姿が見えた。
おそらくあの2人の差し金じゃろうか。

楓「どうしたんですか秀吉君？やってはくれないんでしょうか？」

秀吉「って、楓は良いのか！？」
ワシとこんな写真を撮って恥ずかしくないのか？

楓「は、はい。さすがに恥ずかしいですけど／／／／」

秀吉「・・・・・・・・分かった。ワシも男じゃ、覚悟を決める。・・・よっと」

楓「ひゃあ／／／／・・・・・・ひ、秀吉君重くないですか？」

秀吉「全然大丈夫じゃ」
そう言うと、楓はワシの首に手を回してくる／／／／／／
・・・やばいの、恥ずかしさとか色々あってこのまま倒れそうじゃ

「でハ撮りマース。はい、チーズ・・・・・・・ＯＫでース。
印刷をしてくるのでその間に着替えて置いてください」
それだけ言って外国人はどこかに行ってしまう。
あれは流石に写真館に飾らない・・・・。うん、そう願おうとするかの

秀吉「了解したのじゃ。それじゃ早く着替えるとするかの楓」

楓「はい、そうですね」

あの後、あの外国人に印刷した写真を見せてもらった。
あれは本当に他人には見せられない／／／

秀吉「そうなのか？どうする楓？」

楓「どうせですし行ってみましょうよ秀吉君」

秀吉「そうじゃな」

優子「なら今から案内するわ」

そしてワシと楓は姉上の後についていった

雄二と明久の行動

～　ＳＩＤＥ　ＩＮ　雄二　～

しばらく歩くと、小洒落たレストランが見えてきた。

「コチラでランチをお楽しみ下サイ」
そう言って似非野郎が案内したのはパーティー会場のような広間だった。
そこら中に丸テーブルが設置されており、前方にはステージとテーブルが用意されている。
この雰囲気、レストランというより――――

翔子「・・・・・クイズ会場？」
そう。一応丸テーブルの上には豪華な料理が用意されているが、ＴＶでよく観るクイズ会場のような雰囲気になっていた。

「いらっしゃいませ。坂本雄二様、翔子様」
スタッフが現れ、俺たちを席に案内する。
・・・・コイツも見覚えのある面だな、オイ。

雄二「秀吉。スタッフの真似事か？」

秀吉？「秀吉？なんのことでしょうか？」
顔色一つ変えずに切り返してくるクラスメイト。
こいつ、役者モードになってやがるな。こうなるとそう簡単に化けの皮は剥がせない。
それならば、貴浩の時とは別に道具を使うとしよう。

雄二「違うと言うなら、確認させてもらうぞ」
携帯電話を取り出し、アドレス帳から『木下秀吉』を呼び出す。
着信音は・・・・違うところから鳴った。
向こうのほうに秀吉と楓の姿が見えた

雄二「なっ!?どういうことだ!?」

優子「ふっ甘いわね、坂本君。いくらボーイの格好をしてたって男とは限らないでしょう?」
この声、秀吉の姉の木下優子か!

翔子「・・・・・・・・・優子?」

秀吉「そうよ代表。全く秀吉が楓とデートだからって何で私がこんな役を・・・・・」
なにやらぶつぶつ言っている、ん?デート?・・・・・貴浩のヤツ良いのかこれは?

雄二「おい、木下姉。お前は貴浩たちみたいに誤魔化したりしないのか?
それに、秀吉がデートってどういうことだ?」

優子「当たり前じゃない、貴浩や姫路さんがばれているのにわざわざ隠す必要も無いわ。
あらやだ、代表が隣にいるのに秀吉か楓の事が気になるの?」
おい、やめてくれ。そんな言い方をしたら・・・・・・

翔子「・・・・・・雄二は友達思いだから大丈夫」
と思ったら貴浩のおかげで今日は大丈夫そうだな。今回は感謝だな・・・

優子「代表、坂本君。席に案内するわ」
木下姉に連れられて会場の中を移動する。

愛子「お客様は未成年だということなので、こちらを用意させて頂きました」
席に着くと、今度は工藤がグラスにノンアルコールのシャンパンを注いでくる。
ラベルが見えるように持っているあたり、勉強しているみたいだ。
さすがＡクラスだ。

刀麻「オードブルでございます」
グラスを置くと、すかさず運ばれてくる料理。
豪華な、という前置きは間違いないようで、
慣れない料理に苦笑しながらナイフとフォークを手に取ることになった。
もっとも翔子や光一はこういった席にはなれてるかもしれないが。
って今度は刀麻か。Ｆクラスのやつより Ａクラスのメンバーのほうが多いじゃないのか？

そしてデザートも食べ終え、ここには特に何の仕掛けもないのか、と安堵しかけたその時。

砂原《皆様、本日は如月グランドパークのプレオープンイベントにご参加いただき、
　誠にありがとうございます！》
会場に大きくアナウンスの声が響き渡った。この声は砂原とかいうヤツだったか

砂原《なんと、本日ですが、この会場には結婚を前提としてお付き合いを始めよう
　としている高校生のカップルがいらっしゃっているのです！》
飲んだ水が少しだけ鼻から逆流した。

砂原《そこで、当如月グループとしてはそんなお二人を応援する為の催しを
　企画させて頂きました！
　題して、【如月グランドパークウエディング体験】プレゼントクイズ！》
出入口を封鎖する重々しい音が聞こえてくる。退路を断つとは・・・・貴浩め。
俺の行動パターンは予測済みということか・・・・・！

砂原《本企画の内容は至ってシンプル。こちらの出題するクイズに答えて頂き、
　見事5問正解したら弊社が提供する最高級のウエディングプランを
　体験して頂けるというものです！
　もちろん、ご本人様の希望によってはそのまま入籍ということでも
　問題ありませんが》
大問題だバカ野郎！

砂原《それでは、坂本雄二さん&翔子さん！前方のステージへとお進み下さい》
ご丁寧にも司会が俺たちの席を示してくれたおかげで、
レストランにいる観客が一斉にこちらへと目を向けた。

翔子「・・・・・ウエディング体験・・・・・頑張る・・・・・！」

雄二「落ち着け翔子。そういったものはだな、
きちんと双方の合意の下に痛だだだだだっ！
耳が千切れるっ！行く！行くから放してくれっ！」

ただの体験だと自分に言い聞かせ、渋々と壇上に上がる。
スタッフ（椎名と貴浩）の誘導の下、俺と翔子は解答者席へと案内された。

～　ＳＩＤＥ　ＯＵＴ　雄二　～

～　ＳＩＤＥ　ＩＮ　明久　～

明久「ここまで来ればもう大丈夫かな。命大丈夫？」

命「う、うん何とか。」

貴浩たちが姫路さん達の足止めをしてくれたお陰で、なんとか逃げ切れた。
貴浩と光一には本当に感謝するべきだよね

明久「とりあえず、貴浩の言ってた僕達のあの写真が飾られてるっていう
写真館にいってみようか（あの写真はさすがに他の人に見せたくないし）」

命「そ、そうですね・・・・・・」

写真館に来て、スタッフさんにその写真が飾られているところに連れて行くよう頼む
・・・・・はずだったのだがその必要は無かった。なぜなら・・・・・

明久「なにこの大きさ・・・・・・」

命「これ、絶対に来た人の目に付くよね・・・・・・」
僕らのあの写真は、写真館の入り口にでっかくしたものを飾られていた。
僕だけじゃなく秀吉と楓の写真も張られていた。

「どうかなさいましたか、お客様」

明久「どうかなさいましたかじゃないですよ！どうして写真が大きく飾られているんですか！？
　そもそも僕達カップルとかそういうんじゃないんですから、
　今すぐ取り外してください！」
隣で命がなんかうな垂れてるけど今はそんな事気にしない！

「私はこの写真を担当したわけではないので良くは知りませんが
お二人とも、どちらもそう嫌がってるようには見えないのですが
・・・・・・むしろ、うれしそうな」

明・命「「／／／／／／／／／／」」
僕と命は顔が真っ赤になる。

「・・・・・・わかりました。少々惜しいですが、
この写真はすぐこちらで撤去させていただきます。」

明久「ほ、本当ですか！？」

その後お礼をいい外に出る・・・・・・これからどうしようかな。
雄二たちのウエディング体験までにはまだ時間があるし、
だったら命の言ってたアトラクションでにでも行こうか。

明久「ねえ命、この辺で命が遊びたいって言ってたアトラクションある？」

命「うーんと、ね。・・・・・・あれ！」
僕は命の指差した方を見る。そこにあったのは・・・・・・・
ジェットコースターであることは間違いなさそうだ。

命「このジェットコースターはね、１回宙返りしてる間には
コースターが５回転するんだって。
それに７万本の米松で組み上げた壮大な美しさを誇る、
日本初の木製コースターなんだよ！！」

明久「ちょ、何！？その多さ！？気持ち悪くなる事間違いなよね！？
それに木製って色んな意味で怖いよ！」
普通の絶叫系なら乗れない事は無いけど、そんなものに乗れるはずが無い！

命「早くいこうよ明久君♪」

明久「ま、まって、まだ心の準備が――――」
命に無理やり引っ張られる形になってそのジェットコースターに乗る事になった。

命・明「「キャアアアアア♪（ギャアアアアアア！？）！？」」

・・・・・・・・・

命「明久君、大丈夫？」

明久「な、何とか」
正直、あれはきつかった

命「まだ、翔子ちゃんたちのには時間あるからもう１つ何かやっていかない？」

明久「・・・・今のと同じような絶叫系を乗るのだけは勘弁して」

命「明久君って意外と絶叫系駄目だったんだね。
　折角来たんだから２人で楽しまなきゃ意味ないし
　・・・・・あ、だったらあれならどうかな？」

明久「・・・・観覧車？」
男女２人で乗るって絶対カップルとかがする事だよね？
それと、どうして命はこんなにも積極的なの？いつもの命とは思えないよ・・・・・・

命「・・・・・まだ『ヴィーナス』とか『メリーゴーランド』色々ありますがどれがいいですか？」

明久「観覧車がいいです。さぁ行こうか命」

命「はい♪」
そういうことで、僕達は観覧車に乗る事になった。

観覧車の結果はある意味では最高で最悪だった。
なぜかというとなぜか命が僕の隣に座って腕を組んで来るんだもん、
・・・・・・・恥ずかしさというものを考えないならここまではよいのだが、
それを降りた時に楓と一緒にいた秀吉や貴浩と一緒に仕事をしていた優子さんに
見られてしまった。僕もう今日で死ぬのかな？

明久「そろそろ昼時だし雄二達のウエディング体験、見に行こうか」

命「うんっ！」
命は元気よくうなずいてくれる、本当にこの笑顔はかわいいな。
ん？なんか向こうの方で騒いでいる人たちがいる、どうしたんだろう？

『今このアトラクションに乗れないってのはどういうことだ！
俺達オキャクサマだぞ、なめてんのかコルァ！』

『きゃーっ。リョータ、かっこいーっ！』

『で、ですから本日はプレオープンなので乗れる時間が決まっているんです！』
あのスタッフさん大変そうだなぁ。あのバカップルは・・・・

命「ん？どうかしたの明久君？」

明久「いや、ちょっとね」

その場であのバカップルのことを話し、僕たちは雄二たちのいるパーティー会場に向かった

雄二と翔子のウエディングクイズ

～ＳＩＤＥ　ＩＮ　雄二　～

砂原《それでは【如月グランドパークウエディング】プレゼントクイズを始めます！》

俺と翔子の間に大きなボタンが１つ設置されている。

コレをおしてから解答するというオーソドックスなシステムのようだ。

正解したらプレゼント、ということは、間違え続けたら無効になるのだろう。

それなら俺が間違え続けるとするか・・・

砂原《ではあ、第一問！》

ボタンに手を伸ばす用意をし、問題を待つ。さて、どんな問題が来るんだ？

砂原《坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうかっ？》

・・・・・おかしい。問題文の意味がわからない。

――――――ピンポーン！

し、しまった。油断しているうちに翔子が勝手にボタンを！

だが、いくらコイツでも正解の存在しない問題に答えなんて――――

砂原《はいっ！答えをどうぞっ！》

翔子「・・・・毎日が記念日」

雄二「やめてくれ翔子！恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ！」

砂原《お見事！正解です！》
しかも正解！？砂原を睨みつける。
すると、砂原は観客に見えない角度で、俺に向かって片目を瞑ってきた。
さては・・・・出来レースかっ！
そこまでして俺たちにウエディング体験とやらをさせたいのか！？
いいだろう。それならば俺は間違えて見せよう！

砂原《第二問！お二人の結婚式はどちらで挙げられるでしょうかっ？》
――――ピンポーン！と素早くボタンを押し、マイクに口を寄せる。
不正解を出すなんて、造作もないこと！

砂原《はいっ！答えをどうぞっ！》

雄二「鯖の味噌煮！」

砂原《正解です！》

雄二「なにぃっ！？」
馬鹿な！？場所を聞かれたのに鯖の味噌煮が正解なのか！？

砂原《お２人の挙式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、
別名【鯖の味噌煮】で行われる予定です！》

雄二「待ていっ！絶対その別名はこの場で命名しただろ！強引にも程があるぞ！」

砂原《第三問！お２人の出会いはどこでしょうかっ？》

ダメだ、聞いてねぇ・・・・・！だが、向こうのやり口はわかった。
今度は確実に間違えてみせる。翔子が動くより早くボタンを押し、
間違った解答を――――

翔子「・・・・・させない」

ブスッ

雄二「ぎゃあぁぁぁ！？目が、目がぁっ！」
――――ピンポーン！

砂原《はい、解答をどうぞ！》

翔子「・・・・小学校」

砂原《正解です！お２人は小学校からの長い付き合いで
今日の結婚までに至るという、なんとも仲睦まじい幼なじみ
なのです！》
今、俺が目を突かれたのは見えてないのか！？
どこをどう見たら仲睦まじいという言葉が出てくるんだ！
問題を聞いてから動き出すようでは遅すぎるようだ。
翔子の妨害が間に合わないタイミングで解答する必要がある。

砂原《第四問に参ります！》
――――ピンポーン！
問題文が読み上げられるよりも先にボタンを押し、
妨害が入る前に解答を済ませる！どんな問題が来るかはわからんが、
【わかりません】と解答したら１００％間違いになるはず！

雄二「――――わかり」

砂原《正解です！それでは最終問題です！》
うぉっ！？俺の解答を無視したぞ！？問題を無視した仕返しか！？
もはや間違えることは不可能だ、と諦めそうになったその時

『ちょっとおかしくな～い？アタシらも結婚する予定なのに、
どうしてそんなコーコーセーだけがトクベツ扱いなワケ～？』
不愉快な口調の救いの神が現れた。その場の全員が声の主を探る。
すると、彼らは呼ばれてもいないのにステージのすぐ近くまで歩み寄ってきていた。

砂原『あの、お客様。イベントの最中ですので、どうか――――』

『あぁっ！？グダグダとうるせーんだよ！オレたちはオキャクサマだぞコルァ！』

どこかで見た連中だと思ったら、入場口で似非野郎に絡んでいたチンピラどもか。

『アタシらもウエディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど～？』

砂原『で、ですが――――』

『ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルァ！
オレたちもクイズに参加してやるって言ってんだボケがっ！』

『うんうんっ！じゃあ、こうしよーよ！アタシらがあの二人に問題出すから、

答えられたらあの二人の勝ち、間違えたらアタシらの勝ちってコトで！』

慌てるスタッフや貴浩たちをよそに、そのカップルはズカズカと壇上に上がり、
設置してあるマイクの一つをひったくる。これはチャンスだ。
この連中が相手なら間違えられることができる。
あとは翔子の妨害を邪魔しておけば・・・・！

翔子「・・・・・・ゆ、雄二・・・・・・？」
解答者席の陰で翔子の手を握る。これで目潰しは出来ない。
あとは向こうの問題に間違えるだけだ！

『じゃあ、問題だ』
チンピラがわざわざ巻き舌の聞き取りにくい発音で言う。

『ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ！』

雄二「・・・・・・・・・・・・・・・」
言葉を、失った。

『オラ、答えろよ。わかんねぇのか？』
確かにわからないと言えばわからない。俺の記憶では、
ヨーロッパは国というカテゴリーに属していたことは一度もないのだから。
その首都を答えるなんて不可能だ。

砂原《・・・・・・坂本雄二さん、翔子さん。おめでとうございます。

【如月グランドパークウエディング体験】をプレゼントいた

します》

『おい待てよ！こいつら答えられなかっただろ！？
　オレたちの勝ちじゃねぇかコルァ！』

『マジありえなくない！？この司会バカなんじゃないの！？』
バカップルがぎゃあぎゃあと騒ぎ立てる中、ステージの幕が下りてくる。
前の明久以上、またはＦクラス以上のバカがいるとは世界って広いもんだな・・・・。

「おメデとうございマス。ウェディング体験が当たるなんテ、ラッキーでスね」

翔子「・・・・・・凄く嬉しい」

雄二「そういえば翔子。お前の持ってきた鞄は何が入っているんだ？
　随分と大きいが」

翔子「・・・・・・別に、なんでも・・・・・・」
翔子が少し困ったように答える。何かあるのだろうか？

「翔子サン、ウェディング体験の準備があるノデ、
　このスタッフについていってもらえマスか？」

いきなり似非野郎の後ろから女性のスタッフが歩み出て頭を下げる。
いかにも業界人といった風貌の人だ。

「初めまして。貴方のドレスのコーディネートを担当させて頂きます。
　一生の思い出になるようなイベントにする為、お手伝いをさせてください。」
そう言ってスタッフは翔子に笑顔を向けた。おいおい、随分と本格的だな。
まさかスタイリストまでつけてくるとは。
となると、如月ハイランドの狙いはアトラクションじゃなくて最初から
このウェディング体験だったってことか。
どうやら今からの時間を目一杯使って結婚式の擬似体験をさせてくるようだ。

雄二「ってことは、俺は長い時間待たされるのか？」
ドレスを着てメイクをするってことは数時間もかかるような大作業になるだろう。
その間俺は何していればいいんだ？

「ご安心下サイ。如月グループの誇る新しい技術を使うノデ、
　メイク等にアマリ時間は掛かりませーン。それに・・・・・」
新技術？そんな物使って大丈夫なのか？
それになんだ！？嫌な予感がする。

「坂本雄二サンは逃亡を考えるだろうカラ、
　コレで気絶させてカラ着替えさせるように、とある方らの指示デース」
そういって野郎が取り出したのは、スタンガン

雄二「た、たかひろぉぉぉぉぉ！！」

「少しガマンして下サーイ」

首の後ろでバチンッと大きな音が響き、俺は意識を失った。

如月グランドパーク編3　～ウエディング体験～

砂原《それではいよいよ本日のメインイベント、ウエディング体験です！
　皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎えください！》
ここで盛大な拍手が聞こえる

刀麻「坂本雄二さん、お願いします」
舞台袖でスタッフ（刀麻）が耳打ちしてきた。
コイツをブチのめして逃げてやろうか。

刀麻「抵抗したら、海栗とタワシの活け作りを雄二の実家に送るぞ」
くっ。そんな物を送られたら、
あの母親はきっと全部海栗だと勘違いしてタワシにも手を出してしまう……！

雄二「やれやれ・・・・・。まぁ、あくまでもただの体験だしな。
　適当に付き合ってさっさと終わらせるか・・・・・」
油断を誘うため、刀麻に聞こえるように諦めの言葉を呟く。
恐らくこいつらの狙いは、指輪交換から誓いのキスまでの一連のシーンだ。
それらを大々的にメディアに発表することで、
俺と翔子を世間的に結婚させるつもりだろう。
確かに世間でそういった目で見られてしまえば、
違うやつと歩いているだけで何を言われるかわかったもんじゃない。
いやらしいが巧いやり方だ。
だがそれなら、俺は誓いの言葉に入るまでの間に脱走したらいい。
好都合にも衆目の前だ。ちょっと大げさに仮病でも使ってやれば、
相手側も式を断念せざるを得ないだろう。

この場を逃れたらあとはどうとでもなる。

刀麻「さァ、どうぞ」

雄二「あいよ」

小さな階段を昇る。そのままステージに上がると、その光景に一瞬眩暈がした。

雄二「おいおい・・・・・。なんだよこのセット・・・・・」

数え切れないスポットライトにライブステージのような観客席。スモークの設備はおろかバルーンや花火の用意までしてあるように見える。

向こうにある電飾なんていくらかかってるか見当もつかん。

砂原《それでは新郎のプロフィールの紹介を――――――》

ん？俺のプロフィール紹介か。まるで本物の結婚式だな。

目的のシーン以外の部分もきちんとしているようだ。さっきのクイズもそうだが、

きっと貴浩たちにでも聞いて細かく下調べを――――

砂原《――――省略します》

手ぇ抜きすぎだろ。

『ま、紹介なんていらねぇよな』

『興味ナシ～』

『ここがオレたちの結婚式に仕えるかどうかが問題だからな』

『だよね～』

最前列に座っている連中からそんな声が聞こえてきた。
声の主は・・・・さっきクイズ会場で騒いでいたチンピラどもか。
しかし、最前列に座っているのに大声で会話とは。
外観に相応しいマナーの持ち主だな。

砂原《・・・・他のお客様のご迷惑になりますので、
大声での私語はご遠慮頂けるようお願い致します》

『コレ、アタシらのこと言ってんの～？』

『違ぇだろ。オレらはなんたってオキャクサマだぜ？』

『だよね～っ』

『ま、俺たちのことだとしても気にすんなよ。
要は俺たちの気分がいいか悪いかってのが問題だろ？
それに俺はあの有名な羽鳥グループの社員だぞ！！これ重要じゃない？』

『うんうん！リョータ、イイコト言うね！』
調子に乗って下卑た笑い声が一層大きく響きわたる。
主催側のイベントの邪魔になる要因は排除したいだろうに
――――やっぱりあれだけ騒ぐ連中だと手を出せないだろうな。
宣伝目的でやっているのに悪評を流されたら意味がないから仕方ないな。
ってか羽鳥の社員か。それはご愁傷様だな

砂原《――――それでは、いよいよ新婦のご登場です！》
心なしか音量が上がったＢＧＭとアナウンスが流れ、
同時に会場の電気が全て消えた。シモークが足元に立ちこめ、

否応なしに雰囲気が盛り上がる。・・・・・・ははっ。
コレで翔子に花嫁衣装が似合っていなければ興さめもいいところだな。
脱出はもう少し待つとしよう。折角来たんだ。
翔子のドレス姿くらい見ておくのも一興だ。
そんなことを考えながら待っていると、目が暗がりになれるよりも早く、
一条のスポットライトが点された。

砂原《本イベントの主役、霧島翔子さんです！》
アナウンスと同時に更に幾筋ものスポットライトが壇上の一点のみを照らし出す。
暗闇から一転して輝き出す壇上に、思わず目を瞑ってしまう。
そして、再び目を開けた時に飛び込んできた姿に俺は一瞬、言葉を失った。
幼い頃からの知り合いでありながらも今日この場で初めて出会ったような、
そんな感覚を抱かせるほどの見違えた姿。
彼女は花嫁と呼ぶに相応しくたおやかに佇んでいる。あれは・・・・・誰だ？

『・・・・・・・綺麗』
静まり返った会場から溜息と共に洩れ出た、誰のものともわからない台詞。
だが、その言葉は何にも阻まれることなく壇上の俺のところまで届いてきた。
余程入念に制作したのか、
純白のドレスは皺一つ浮かべることなく着こなされている。
スカートの裾は床にすらない限界の長さに設定されているようで、
アイツがステージの中央まで歩いてくる間、一度も床に触れること

はなかった。

翔子「・・・・雄二・・・・・・」
ヴェールの下に素顔を隠し、シルクの衣装に身を包む幼なじみが、
どこか不安げにこちらを見上げている。
胸元に掲げている小さなブーケが所在なげに揺れた。

雄二「翔子、か・・・・・・・？」

翔子「・・・・・・うん」
頭の中が真っ白になり、いわずもがなの質問が口をついて出た。
あまりの変わりように、確認せずにはいられなかったのかもしれない。
動揺する俺に、翔子は恥ずかしげに問いかける。

翔子「・・・・・・どう・・・・・？私、お嫁さんに見える？」
コイツが見知らぬ少女に見えたせいか、会場の雰囲気に飲まれたのか、
それとものかの要因か。
俺は考えを巡らせることもなく勢いで返事をしてしまった。

雄二「ああ、大丈夫だ。とても似合ってるぞ、翔子」
先ほど頭に浮かんだ言葉なんて既にどこかへと飛んでいた。
似合っている、なんて言葉を付け加えられただけでも上出来だと思う。

翔子「・・・・・雄二・・・・・・」
翔子は小さな声で俺の名を呼び、ブーケを抱え直した。
そして、その場で動きを止める。

雄二「お、おい。翔子・・・・・・？」
なんだ？様子がおかしい。俺の返事が何かマズかったか？
駆け寄るべきか、一瞬迷う。
すると、俺が迷ってる間に、翔子は再び言葉を紡いだ。

翔子「・・・・・嬉しい・・・・・」
目の前で少女が俯き、ブーケに顔を伏せる。
そして、それ以上は言葉を発することなく静かに震え出した。

砂原《ど、どうしたのでしょうか？
　花嫁が泣いているように見えますが・・・・・・？》
仕事を思い出したかのようにアナウンスが入る。泣いている？
言われてみて初めて気づく。俯いて肩を震わせて
――――翔子は静かに泣いていた。

雄二「お、おい。どうした・・・・・？」
ヴェールとブーケが邪魔で表情が見えない。なぜ急に泣き出したんだ？
会場から静寂が消え、観客の間に少しずつざわめきが生まれ出す。
そんな中、彼女は小さな、だがはっきりと聞き取れる声で呟いた。

翔子「・・・・・・ずっと夢だったから」
涙混じりのかすれた声。

砂原《夢、ですか？》

翔子「・・・・・小さな頃からずっと・・・・・・夢だったから
・・・・。私と雄二、２人で結婚式を挙げること・・・・・。
私が雄二のお嫁さんになること・・・・。
私１人だけじゃ、絶対に叶わない、小さな頃からの私の夢・・

・・・」

口数の少ない翔子が懸命に紡ぐ言葉は、俺に形容し難い何かの感情を喚起した。

幼い頃のある出来事がきっかけで抱かれた、コイツの俺への想い。

それは罪悪感と責任感からくる勘違いなはずなのに

――――――コイツはどうしてここまで強い気持ちを抱けるのだろうか。

翔子「・・・・・だから・・・・・本当に嬉しい・・・・・。

　他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが・・・・」

そこまで言って、あとは言葉にすることができずに翔子は静かに泣いた。

砂原《どうやら嬉し泣きのようですね。花嫁は相当に一途な方のようです。

　さて、花婿はこの告白にどう応えるのでしょうか?》

どう応える?そんなものは決まっている。場所がどこであろうと、時間がいつであろうと、俺がやるべきことはただ一つ。

コイツの勘違いを正してやることだ。頭ではそう考えている。

それなのに――――――不思議なことに俺の口はあの言葉を紡ぐことが出来ずにいた。

雄二「翔子。俺は――――――」

『あーあ、つまんなーい!』

何かを言いかけたところで、観客から大きな声があがる。

俺は慌てて口を噤んだ。よくわからないが、どこかでホッとしている自分がいる。

ということは、これは俺にとって天の助けなのか。

『マジつまんないこのイベントぉ～。人のノロケなんてどうでもいいからぁ、
早く演出とか見せてくれな～い？』

『だよな～。お前らのことなんてどうでもいいっての』
どうやら俺の窮地を救ってくれたのは最前列に陣取る馬鹿二人組みのようだ。
会場が静まり返っていたおかげで発言者がはっきりとわかる。

『ってか、お嫁さんが夢です、って。オマエいくつだよ？なに？キャラ作り？
ここのスタッフの脚本？バカみてぇ。ぶっちゃけキモいんだよ！』

『純愛ごっこでもやってんの？
そんなもん観るために貴重な時間割いてるんじゃないんだケドぉ～。
あのオンナ、マジでアタマおかしいんじゃない？
ギャグにしか思えないんだケドぉ』

『そっか！コレってコントじゃねぇ？あんなキモい夢、
ずっと持ってるヤツなんていねぇもんな！・・・・・ゲフッ！、
てめぇ何しやがる！』

『リュ、リュータ、大丈夫！いきなり何すんのよアンタ！』
口々に文句を言い、翔子を指さして笑い始める2人組み。すると、
そこに男の方を殴りかかった奴が1人。
それは俺が知ってる限り最も馬鹿なヤツ・・・・・・・明久だった
明久「・・・・・・・に・・・・・・・・・・・のか？」

『ああん？何言ってんだよお前。』

明久「てめぇらに霧島さんの夢を笑える資格があるのかって言ってんだよ！」

それだけ言って、明久はもう一回起き上がった男を殴る

明久「霧島さんはな、この時をずっと待ってたんだぞ！
あっちの馬鹿な新郎に心の中でずっと積もってた思いを打ち明ける日を！
何年もかけて育っていったその大切な夢をお前らが馬鹿にして霧島さんを
傷つけたんだ！」

『ハッ、用はここが俺達に使えるかどうか、それさえ確認できりゃあそれで良いんだよ！
あんな女の事情なんて知った事か！』

明久「なんだと！」

砂原《お、お客様、落ち着いてください！》

命「落ち着いてよ、明久君！」

貴浩「今はひとまず落ち着くんだ明久！」

あの野郎・・・俺と翔子の間に何があったかも知らないで・・・・・・。

・・・・・・・・・・あの時からだな、俺が変わったのは。

ただ学力だけがすべてじゃない。

それを証明するために俺は神童から悪鬼羅刹になった。

そんなことのために学力であろうが、地位であろうが、
・・・・翔子への気持ちであろうが俺はそれまでのすべてを捨てた。
・・・・・なんだ、俺があいつから逃げているだけじゃないか。
あいつは俺に気持ちを伝えたいために追いかけてくる。
それから逃げ続けているだけ、ろくに向き合ってやらないで。
そしてあいつは今、俺に気持ちを伝えた。だったら俺は・・・・・・

砂原《は、花嫁さん?花嫁さんはどちらに行かれたのですかっ?》
チンピラどもと明久が暴れている席から翔子の方に目を向ける。
だが、この短い時間の間に翔子は壇上から姿を消していた。
さっきまで立っていた場所にブーケとヴェールを残して。
ヴェールを拾い上げる。それは羽根のように軽いはずなのに、
涙で湿って少し重くなっていた。

雄二「・・・・・・・・俺が翔子に言わなくちゃならない事・・・・・・
・・・・。
・・・・・そんなもん決まってる!」

如月グランドパーク編４　～ウエディング体験　その時明久は～

～　ＳＩＤＥ　ＩＮ　明久　～

命「ねぇ、明久君、会場ってここで良いんだよね？」

命「うん、貴浩から聞いたんだけどここのはずだよ・・・・・・・・・・・・多分」

僕らが不思議そうにそこをみている・・・・・・・・・・・・クイズ会場？

でも、他のお客さんも来ているのでここで間違いはなさそうだ。

「いらっしゃいませ、お２人様でよろしいでしょうか？席へご案内します」

明久「あ、はい」

僕と命は案内人に連れられて会場の中を移動する。

光一「お客様は未成年だと思いますので、こちらを用意させて頂きました」

席に着くと、ボーイの格好をした光一がグラスにノンアルコールのシャンパンを

注いでくれる。おお、しっかりラベルが見えるように持っている。

凄いな光一はこれも勉強したのかな。

光一「オードブルでございます」

グラスを置くと、すかさず運ばれてくる料理。

それは豪華絢爛という言葉にふさわしい物だった。

ただナイフとかフォークってあんまり使い慣れてないんだよなぁ。

今度マナーとかもしっかり勉強しようかな

命「なんか食べにくいね」

明久「しょうがないよ、僕達高校生でこういう場所には
　特に縁とかも無いんだしさ。でも霧島さんや光一とかだったらなれてるかもね」
しばらく食べ続けていると・・・・・・・・

雄二『――――――――――――――――――――にしぎゃあああああああああああ！！！』

・・・・・・ん？

命「今の声・・・・・・・・坂本君だよね・・・・・・・・・」

明久「・・・・そうだね、きっと霧島さんが怒るような事でもやったんじゃない？」

命「・・・・そうかもしれないね」

ふう、食べた食べた。周りをよく見てみると、さっきの外国人たち、アトラクションに乗っていたカップル、と色々な人たちが集まっていた。

・・・・・・・ＦＦＦ団に関わりの持つ人や姫路さんや美波はいないみたいだ。

よかったぁ、僕達だけならともかく

霧島さんの邪魔なんて今回だけはさせたくないからね。おっ始まるみたいだ。

砂原《皆様、本日は如月グランドパークのプレオープンイベントにご参加いただき、誠にありがとうございます！なんと、本日ですが、
この会場には結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている
高校生のカップルがいらっしゃっているのです！――――――》

明久「ようやく始まったね命」

雄二たちは、スタッフの人たちに誘導されて解答者の席のようなところに登った。

砂原《――――正解です！それでは最終問題です！》

明久「・・・・・・・命どう思う？」

命「・・・うーん、これを考えた人は本当にこれで結びつくと思ってるのかな？」
はっきりいって同感だ。今までの問題はすべて出来レースだろう、結婚式場が鯖の味噌煮って・・・・・・・流石に雄二が不憫になってきた。
そして最後の問題に移ろうとしたとき・・・・・

『ちょっとおかしくな～い？アタシらも結婚する予定なのに、
どうしてそんなコーコーセーだけがトクベツ扱いなワケ～？』

砂原『あの、お客様。イベントの最中ですので、どうか――――』

『あぁっ！？グダグダとうるせーんだよ！オレたちはオキャクサマだぞコルァ！』

不愉快な口調のやつらがづかづかと、ステージに上がる。

あの時のバカップルだ・・・・・・

『アタシらもウエディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど～？』

砂原『で、ですが――――』

『ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルァ！
オレたちもクイズに参加してやるって言ってんだボケがっ！』

明久「・・・・・あのバカップル・・・・」

命「お、落ち着いて明久君」

明久「・・・・・・・・・分かったよ」

『うんうんっ！じゃあ、こうしよーよ！アタシらがあの二人に問題出すから、
答えられたらあの二人の勝ち、間違えたらアタシらの勝ちってコトで！』

なんだか勝手に話をどんどん進めていってるバカップル。

そもそも、お前らはそんなこと言える立場じゃねーだろうが。
・・・・・おっと危ない、声にでそうだった

『じゃあ、問題だ』
バカップルの男の方がわざわざ巻き舌の聞き取りにくい発音で言う。
・・・・・・・雄二絶対間違えるんじゃねぇぞ！

『ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ！』

明久「・・・・・・・・・・・・・・・」
言葉を、失った。

『オラ、答えろよ。わかんねぇのか？』
いや、その解答は百人中百人がわからないよね。
なぜなら僕の記憶では、ヨーロッパは国というカテゴリーに
属してはいないのだから、その首都を答えろだなんて不可能なはず
だ。

砂原《・・・・・坂本雄二さん、翔子さん。おめでとうございます。
【如月グランドパークウエディング体験】をプレゼントいたします》

『おい待てよ！こいつら答えられなかっただろ！？
オレたちの勝ちじゃねぇかコルァ！』

『マジありえなくない！？この司会バカなんじゃないの！？』
やばいこの人たち、多分だけど昔の僕より馬鹿だ・・・・・
早くなんとかしないと

砂原《それではいよいよ本日のメインイベント、ウエディング体験です！
　皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎えください！》
そうアナウンスが言うと、周りの人たちのほとんどが拍手をしていた。

砂原《それでは新郎のプロフィールの紹介を――――――》

命「へぇ、結構本格的なんだね。貴浩君たちにでも聞いたのかな？」

明久「多分そうだろうね。
　・・・・どんな風に捏造されてるかは分からないけど・・・・」

砂原《――――――省略します》
捏造以前の問題だった、手ぇ抜きすぎでしょ。

『ま、紹介なんていらねぇよな』

『興味ナシ～』

『ここがオレたちの結婚式に仕えるかどうかが問題だからな』

『だよね～』
前の方からこんな声が聞こえる。一応それにスタッフも注意は呼びかけているようだが・・・・・・

砂原《・・・・・他のお客様のご迷惑になりますので、
　大声での私語はご遠慮頂けるようお願い致します》

『コレ、アタシらのこと言ってんの～？』

『違ぇだろ。オレらはなんたってオキャクサマだぜ？』

『だよね～っ』

『ま、俺たちのことだとしても気にすんなよ。
要は俺たちの気分がいいか悪いかってのが問題だろ？
それに俺はあの有名な羽鳥グループの社員だぞ！！これ重要じゃない？』

『うんうん！リョータ、イイコト言うね！』
反省とかする気は全くないみたいだ・・・・・・・あいつらっ！
・・・・・・・・・・・・・・・と、手に力を入れたとたん
その手が命の手に押さえられる

命「だ、駄目だよ明久君。・・・・・・・確かに私も許せないけど、
　それで折角のイベントが中止になったら・・・・・・・・」

明久「・・・・・・・そうだね」
僕は少し手を緩める、それと同時にアナウンスがなる。

砂原《――――それでは、いよいよ新婦のご登場です！》
心なしか音量が上がったＢＧＭとアナウンスが流れ、
同時に会場の電気が全て消えた。シモークが足元に立ちこめ霧島さんがあらわれた

砂原《本イベントの主役、霧島翔子さんです！》
アナウンスと同時に更に幾筋ものスポットライトが壇上の一点のみを照らし出す。
暗闇から一転して輝き出す壇上に、思わず目を瞑ってしまう。
少しずつ目を開けるとその光の中央には花嫁と呼ぶに相応しい姿の霧島さんがいた。

命「・・・・・・・綺麗」
隣にいる命の口から言葉が漏れる。
霧島さんの来ているそのドレスは雄二のところに辿り着くまでの間、床に触れる事は無かった。・・・・・・・・・・・・・綺麗とか、麗しいとかぐらいじゃ言葉が足りないと、僕は思う。

砂原《ど、どうしたのでしょうか？花嫁が泣いているように見えますが・・・・・・？》

雄二『お、おい。どうした・・・・・？』
霧島さんが涙を流した事に少々不安になる雄二。

翔子『・・・・・・ずっと夢だったから』

砂原《夢、ですか？》

翔子『・・・・・・小さな頃からずっと・・・・・・・夢だったから・・・・。
私と雄二、２人で結婚式を挙げること・・・・・。私が雄二のお嫁さんになること・・・・。私１人だけじゃ、絶対に叶わない、小さな頃からの私の夢・・・・・・・・・・だから・・・・・本当に嬉しい・・・・・。他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが・・・・・』

砂原《どうやら嬉し泣きのようですね。花嫁は相当に一途な方のようです。
　さて、花婿はこの告白にどう応えるのでしょうか?》
普段口数の少ない霧島さんが雄二に伝えるため言った事。
雄二『翔子。俺は――――――』

『あーあ、つまんなーい!』
この言葉が一瞬この場を止めた
　早く演出とか見せてくれな～い?』

『マジつまんないこのイベントぉ～。人のノロケなんてどうでもいいからぁ、
『だよな～。お前らのことなんてどうでもいいっての』
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なに?
こいつらなに言ってるの?それじゃあお前らに映ってるのは霧島さんじゃなくて、
最初から演出だけだったと。・・・・・・・・・・・・調子に乗るなよ!

命「あ、明久君、ちょ、ちょっと」
ガタッと、席から立ち上がり、その2人に近づいていく。
命、止めようとしないで、こいつらが全部悪いんだから・・・・

『ってか、お嫁さんが夢です、って。オマエいくつだよ?なに?キャラ作り?
　ここのスタッフの脚本?バカみてぇ。ぶっちゃけキモいんだよ!』

『純愛ごっこでもやってんの?そんなもん観るために

貴重な時間割いてるんじゃないんだケドぉ～。
あのオンナ、マジでアタマおかしいんじゃない？
ギャグにしか思えないんだケドぉ』

『そっか！コレってコントじゃねぇ？あんなキモい夢、
ずっと持ってるヤツなんていねぇもんな！
・・・・ゲフッ！、てめぇ何しやがる！』

『リュ、リュータ、大丈夫！いきなり何すんのよアンタ！』
いつまでたっても罵声をはき続けるこいつら。まずは男の方を殴る。

明久「・・・・・・・に・・・・・・・・・・・・のか？」

『ああん？何言ってんだよお前。』

明久「てめぇらに霧島さんの夢を笑えるほどの夢があるのかって言ってんだよ！」
起き上がって近づいてきた男をさらにもう一発殴り飛ばす。

明久「霧島さんはな、この時をずっと待ってたんだぞ！
あっちの馬鹿な新郎に心の中でずっと積もってた思いを打ち明ける日を！
何年もかけて育っていった、
その大切な夢をお前らが馬鹿にして霧島さんを傷つけたんだ！」
許せない、人が今からつかもうとしてる幸せを踏みにじり、貶すなんて！

『ハッ、用はここが俺達に使えるかどうか、
それさえ確認できりゃあそれで良いんだよ！あんな女の事情なん

て知った事か！』

明久「なんだと！」

僕はもう1回殴ろうとするけど、それは貴浩や命に止められる

砂原《お、お客様、落ち着いてください！》

命「落ち着いてよ明久君！」

明久「放してくれ！こいつら、こいつらだけは！――――――クペッ！」

僕の意識はここで途絶えた。

貴浩「はぁ、全く。・・・・・少しは落ち着けよ明久」

如月グランドパーク編５　～雄二の行動～

～　ＳＩＤＥ　ＩＮ　雄二　～

《霧島さん?霧島翔子さーんっ!皆さん、花嫁を捜して下さい!》

スタッフがドタバタと駆け出す。

・・・・・・ふむ。どうやらこのイベントは中止のようだな。

「さ、坂本雄二さん!霧島さんを一緒に捜して下さい!」

スタッフが1人、息を切らせてこちらにやってくる。

俺にアイツの行き先に心当たりがないか聞きたいのだろう。

雄二「悪いが、パスだ。面倒だし、便所にも行きたいしな」

「え?ちょ、ちょっと、坂本さん・・・・・!」

俺はスタッフを無視して出て行く

『・・・・・・・・クソォ、あのガキども・・・・・・』

『リョータ、大丈夫だってすぐいいとこ見つかるよ』

『ああ、そうだな。俺ならすぐにいいとこ見つかるな』

それじゃ、とっとと用を済ませるか。
ゆっくりと歩み寄り、背後から声をかける。

雄二「なぁ、アンタら」

『ぁあ?ぁんだよ?』
2人組が真っ茶色な顔をこちらに向けてくる。
きちんと礼をしておかないとな。

『リョータ。コイツ、さっきのオトコじゃない?』

『みてぇだな。お前もさっきのガキどものお友達か?・・・・・・んで、
その新郎サマがオレたちになんか用か、あァ!?』
男の方が一歩前に出て、威嚇するような仕草を見せた。

雄二「いや。大したようじゃないんだが――――」
借り物上着を脱ぎ、タイを緩める。不思議なことに、
身体は準備運動を必要としないほどに温まっていた。

雄二「――ちょっとそこまでツラぁ貸せやぁ!!!」

雄二「よっ。随分と待たせてくれたな」

翔子「・・・・・雄二」

如月グランドパークの中にあるホテルの前で待つことしばし。

玄関から翔子がトボトボと俯きがちに出てきた。

雄二「さて。それじゃ、帰るとすっか」

似非野郎から受け取っておいた翔子の鞄を担ぎ直して、駅に向かって歩き出す。

翔子「・・・・・・・・」

翔子はなにも言わず、静かに俺の少し後ろをついてきた。

夕暮れの中、黙々と駅に続く道を歩く。どのくらいそうしていたのだろうか。

如月グランドパークを出てあえて人気のない道を歩いていると、

翔子が聞き取れるからどうかギリギリの小さな声で呟いた。

翔子「・・・・・雄二」

雄二「ん、なんだ？」

翔子「・・・・・私の夢、変なの・・・・・・？」
例のバカップルに笑われたことをずっと気にしているのだろう。
翔子は足を止めていた。俯いているから表情は見えないが、長い付き合いだ。
どんな顔をしてるかぐらい見なくてもわかる。

雄二「まぁ、あまり一般的ではないかもしれないな」
俺は少し言葉を選んでからそう答えた。

翔子「・・・・・・・・・・・・・・」
再び黙り込む翔子。さっきの言葉を鵜呑みにするなら、
こいつは7年という時間をずっと揺るぎない夢を抱いて生きていたということになる。
それがあんな大勢の前で笑われ、否定された。
今の心情がどのようなものなのか、正直俺には想像もつかない。
だが、どこにもコイツが傷つく必要なんてない。
おかしいのはコイツの勘違いだけで、
1人の人間を長い間想い続けるという行為は胸を張れる誇らしいことのはずだ。
だから、これくらいは伝えてやりたい。
全てが間違いなのではなく、気持ちを抱く対象を勘違いしていただけで、
夢自体はおかしなものではないということを。

雄二「けどな、俺は・・・・・・俺はお前の夢を絶対に笑わない。
お前の夢は、大きく胸を貼れる、誰にも負けない立派なものだ。

――――まあ、相手を間違えていなければの話だけどな？」

翔子「・・・・・・・・ゆう、じ・・・・・・・」

雄二「翔子、よく聞け。お前の俺に対する気持ちは、
過去の話に対する責任感を勘違いしたものだ。」

7年も前に起こった出来事。

翔子が俺に好意と勘違いした気持ちを抱くようになったきっかけ。

・・・・・・今でもずっと、あの時のことを後悔している。
もっとうまくやれたんじゃないか、と。あんなことがあったせいで、
コイツは俺のようなロクデナシに時間を費やすことになってしまった。

雄二「だからお前がそうなった責任は俺にある」

翔子「・・・・・・・雄二・・・・・・・？」
翔子が不思議そうにこちらを見上げる。そりゃあそうだ、
俺がこんな事言うなんてあまりないからな。
こいつはしっかり俺と向き合って本心を伝えてくれた。
だったら俺も向き合ってしっかり本心を伝えてやる。
・・・・・・それは俺が生涯こいつにしか言わない言葉！

雄二「翔子！俺と付き合え！！俺はお前のことが好きだ！！
その責任をしっかり取ってやる！」

俺の言葉に翔子は少し戸惑う。・・・・そして翔子の口が開く

翔子「・・・・・・ほ、本当？」

雄二「ああ。これは１つも嘘の混じっていない俺の本心だ」

翔子「・・・・・・・・」

翔子が黙る。あんな事が逢った後だから自分が傷つかないように言ってくれているとでも思っているのだろうか。

そう思われているとしたら心外だな。

・・・・・・そうだこれを渡すのを忘れてた。

翔子「っ！・・・・・これ・・・・・・さっきのヴェール・・・・・・」

会場で拾っておいた物を俯く翔子に被せてやる。

折角の体験だったんだ、これくらいの思い出は残しておいてやりたいよな。

っとそうだった、もう１つ――――

雄二「それと、翔子。・・・・・・弁当、旨かったぞ。

ただ俺は良く食うからこれだけだとお前の分がなくなっちまうからな、

今度はもうちょっと多めに作ってくれ。」

翔子「・・・・・私のお弁当・・・・気付いて・・・・・・くれたんだ・・・・・」

雄二「当たり前だ。さて。さっさと帰るぞ。遅くなると色々誤解されるからな」

俺はまた前を向いて歩き出す。・・・・・・・・今の顔はきっと真っ赤だろう／／／

良くあんなセリフを言えたな俺／／／／

翔子「・・・・・・雄二」

雄二「特におふくろの奴は、いくら言っても――――」

翔子「雄二っ！」

ここ最近では記憶にない翔子の大きな声を聞いて、思わず立ち止まってしまう。

雄二「な、なんだ？」

翔子「――――私、やっぱり何も間違っていなかった！」

俺は顔が赤くなったまま振り向く。

すると、満面の笑みを浮かべる幼なじみが俺に抱きついてきた。

～　ＳＩＤＥ　ＯＵＴ　雄二　～

貴浩「はぁ、全く。・・・・少しは落ち着け明久」

こいつはもうちょっと頭を使うとかしないのか。

こんなとこで暴れたって意味ねぇのに・・・・・

まあこれが明久の良いところなんだけどな

「ちょっと、ダレよ～、アンタ」

命「た、貴浩君。なにやってるの！？」

貴浩「ん？この馬鹿が何の意味も無くそっちの男を殴ったからな。

その制裁って事で」

といっても、こっちの馬鹿２人に手を貸すわけでもないからな。

それだけは分かっていてほしいな命

貴浩「優子、愛子、命と明久を連れて先行っててくれ。俺と光一はこいつらと話するから。
・・・・・さてと、そっちの男。
確か羽鳥グループで働いているんだったよな」

「はっ、俺はな天下の電機メーカーの羽鳥グループで働いてんだよ！いいか、お前らみたいなガキじゃぜってぇ入れねぇところだ」

「そうよ、リュータはねぇ羽鳥グループで働いているのよ」
それは日本でも五本指に入る大企業・・・・・羽鳥財閥。
また、その中の1つに霧島財団も存在する。
この馬鹿2人はとんでもないところ相手に凄い事やったな

貴浩「ちなみにさっきの新婦さんは、
今言ってた日本で5本指に入る霧島財閥の社長のお孫さんだぜ。
そして俺の隣にいる男はお前らがさっきから
言ってた羽鳥財団、社長の息子だぜ」

「「なっ！？」」

貴浩「お前も残念だよな。
さっき、注意してやったのに、お客様のご迷惑になりますって。
それをお前らは聞かなかったんだもんな。
それに、ビデオ撮る人もいるぐらいだから音源なんてすぐ採取できるし、
それを聞かせりゃあ、速達でクビの知らせが届くだろうな。
それにそんなことしなくてもここに光一がいたからそれを伝

えたらそれですむけどな」

俺の言葉を聞くとバカップルはそそくさと外に向かって行った。

ふぅ、とりあえずこれでこの男ももう終わりだな。

・・・・雄二がもういなくなったことを考えると外で待ち伏せか。

まあこいつらの自業自得だな

「くっそぉ・・・・・・・・・」

男は地面を叩いてから、とぼとぼと出口に向かって歩いていく。

女の方もそれについていく・・・・・・・・そっちは地獄の三丁目ですぜあんたら

貴浩「光一。後は頼むな」

光一「了解」

如月グランドパーク編５　～雄二の行動～（後書き）

ついに雄二と翔子をくっつけました。

そしてあのバカップルには社会的に削除しました（笑）

如月グランドパーク編６　～明久と秀吉のその後～

～　ＳＩＤＥ　ＩＮ　命　～

気絶した明久君を寝かせるために敷地内にあるホテルに来ています。
その１室で明久君をベットに横にさせたはいいものの、
一緒にきていたなのはちゃんとと土屋君はすぐ帰っちゃうし、
秀兄と楓ちゃんもさっきまでいたけど帰っちゃったし、
貴浩君や優姉、愛子ちゃんも帰っちゃった。
最後に貴浩君が『襲うなよ』とか言ってたけど・・・・・・
私がそんな事するわけが無いじゃないですか・・・・・・多分

明久「・・・・・・う、うーん」

命「明久君、起きた？」

命「・・・・・・み、命？・・・・・・・・・・そうだ、あいつら！」
さっきの事思い出したみたい・・・・・って早くとめないと！

命「落ち着いて明久君。もう大丈夫だから。それにもう私達以外帰っちゃったよ」

明久「そっか・・・・・・・じゃあ、もう帰ろうか。
　　居てもしょうがないし」

命「そうだね帰ろうか」
その後は明久君に手を繋いで帰りました。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ　命～

～ＳＩＤＥ　ＩＮ　楓～

兄さんたちとと別れた後、私と秀吉君ははジェットコースターや観覧車、
買い物を楽しみ、その後は結婚の衣装をきて写真をとられ
レストランで食事をたべ、雄二君と翔子ちゃんの体験ウエディングを見ました。
そこで秀吉君にマスコットのぬいぐるみを買ってもらいました／／
／／

秀吉「今日は楽しめたかの楓？」

楓「はい、秀吉君と一緒に遊べて楽しかったですよ。
・・・・・でも最後は少し残念でしたけど」
翔子ちゃんは大丈夫でしょうか？心配です

秀吉「そうじゃな。ワシも楓と一緒に遊べて楽しかったのじゃ」

楓「翔子ちゃんは大丈夫でしょうか？」

秀吉「おそらく大丈夫じゃろう。貴浩と光一が何かしておったし、

雄二もおるからの。
もしかしたらこれで雄二と霧島はカップルになっておるかもの」

そうですね。兄さんと光一君がいましたから大丈夫ですよね
それに坂本君がサポートしてますよね

楓「そうかもしれませんね」

しばらく秀吉君と歩いていると秀吉君が思いつめた顔をしていました

楓「どうしたんですか秀吉君？」

秀吉「な、なんでもないのじゃ！！」
秀吉君は慌てた様に手を振って誤魔化しています

楓「本当にどうかしたんですか秀吉君？　悩み事なら相談にのりますよ」

秀吉「本当に大丈夫じゃからの」

楓「そうですか。何かあったら私に言ってくださいね。相談にのりますから」

秀吉君が何も言わないならこれ以上は私は何も言いません。
秀吉君を困らせたくないですしね。

その後またしばらく歩いていると

秀吉「楓よ」

楓「なんですか秀吉君？」

秀吉「いきなりこのような事を言うと驚くかも知れぬが・・・・・」

楓「どうしたんですか？いきなり？」
秀吉君が決意を込めたような顔をしてますね

秀吉『楓よ！ワシと付き合ってもらえぬじゃろうか！！』

楓「へぇ！？／／／／」
私の聞き間違いでしょうか？
今秀吉君が私にこ、告白したみたいに聞こえましたが／／／／／

楓「す、すみません。もう一度言ってもらっても良いですか？
聞き取れなくて・・・・」

秀吉「も、もう一度かの・・・・」

私がそういうと再び秀吉君が決意を込めて

秀吉『ワシは楓の事が好きじゃ！ワシと付き合ってもらえぬじゃろうか！！』

やっぱり私の聞き間違いじゃなかったみたいです。
秀吉君が私のことを／／／／
本当に秀吉君が私のことを／／／／

秀吉「あの楓？どうかしたのかの？」

楓「え！？／／／／あ、はい」

秀吉「で、どうなのじゃ？」

楓「・・・・・・私なんかで良いのなら・・・・・・喜んで」

秀吉「ほ、本当かの！？う、嬉しいのじゃ！」

秀吉君がまるで子供のように喜んでいますね。
私も嬉しいですけど／／／／

楓「はい、不束者ですがこれからよろしくお願いします／／／／」

秀吉「こちらこそよろしく頼むのじゃ／／／／」

楓「あのそれで秀吉君。お願いがあるんですが良いですか？」

秀吉「ワシに出来る事ならなんでも言ってほしいのじゃ」

楓「これからヒデ君って呼んでも良いですか？」

秀吉「ヒデ君？」

楓「はい、私だけの呼び名が欲しかったので駄目でしょうか？」

秀吉「全然大丈夫じゃぞ！むしろそのほうが良いのじゃ！！」

楓「良かった。改めてこれからよろしくお願いしますねヒデ君／／／／」

秀吉「よろしくなのじゃ／／／／」

楓「ではこれから兄さんに今日の事を話さないといけませんね」

秀吉「うっ、そうじゃった。じゃが楓のためじゃ頑張るとするかの！」

楓「はい、頑張ってくださいねヒデ君」

そうして私はヒデ君の彼女になりました。
この後は兄さんに今日の事を話さないといけませんね。
大丈夫でしょうか？少し心配です

～　ＳＩＤＥ　ＯＵＴ　楓　～

今、俺の家には俺と優子、愛子そして明久に命、楓に秀吉がいる。
なのはは自分の部屋にいてもらっている。

貴浩「さて秀吉、何故俺に嘘をついてまで楓と出かけたのかな？
・・・・・・確かに秀吉は演劇部の部員と行くって言ってたから
楓も部員の1人だから嘘じゃないけどさ。
なんで正直に言わなかった？」

秀吉「そ、それは・・・・ワシが楓と行きたいとお主に頼んでも断られると思って言わなかったのじゃ」

貴浩「ふーん、そうか」

秀吉「お主に嘘をついて楓と遊びに行ったのは悪いと思っておる。すまなかったのじゃ」

貴浩「・・・・・・まあ今回は良いけど、今度からはちゃんと言ってくれよ。
・・・・・・色々心配だからな」

まあ秀吉だから他の男子とは違って楓に変な事はしないだろうからな

秀吉「わかったのじゃ。以後気をつけるのじゃ」

楓「良かったですねヒデ君」

貴浩「ヒデ君？」

愛子「あれあれ？何か2人ともいつもと雰囲気が違うような気がするけど？」

秀吉「え、えっとのぅ。ワシと楓は今日から付き合うことになったのじゃ」

全員『え?えっえええええええええ!?』

貴浩「な、なんだと!?か、か、楓!!その話は本当なのか!!?」

楓「はい、本当ですよ。私はヒデ君とお付き合いすることになりました」

ま、マジか・・・・・・・orz

明久「た、貴浩!?気をしっかり持つんだ!」

貴浩「あ、明久。俺、今何か幻聴が聞こえたような気が・・・・」

明久「・・・・・残念だけど幻聴じゃないよ」

貴浩「っ!」

向こうでは楓と秀吉は皆（俺と明久以外）から祝福されている。
み、認めるしかないのか

・・・・・・・

貴浩「少し2人で話がしたいんだが良いか？」

秀吉「わ、わかったのじゃ」

俺は秀吉を連れ自分の部屋に向かった

俺の部屋につくと

貴浩「率直に聞く。楓の事が好きなんだな？」

秀吉「当たり前じゃ！！
Aクラスの試召戦争の時、姉上に演劇の事を馬鹿にされた事を楓がワシなんかのために姉上に向かっていってくれたのじゃ。その時ワシは嬉しかったのじゃ。楓があそこまで演劇に対して怒ってくれたことに。ワシの選んだ演劇という道は間違っていなかったと感じさせてもらったのじゃ」

貴浩「・・・・・・そうか」

秀吉「た、貴浩？」

貴浩「・・・・・・・・・わかった。これから楓のことをよろしく頼むな！」

俺は秀吉に土下座をして頼む

秀吉「た、貴浩！顔を上げるのじゃ」

貴浩「楓は俺の双子の妹だ。だから妹の幸せを願っている。

秀吉なら楓のことを幸せにしてくれると思ったし、
楓が秀吉に好意を向けていたのは前からなんとなくではあるがわかってたからな。
だから、楓のことよろしく頼むな。
もし、楓の事を泣かせでもしたらどうなるかはわかるよな？」

秀吉「貴浩・・・任せるのじゃ！！楓のことはワシが幸せにするのじゃ！」

貴浩「よろしく頼むな。じゃあ皆のもとに戻るか」

俺は秀吉との話を終え皆のもとに戻った

優子「もう秀吉との話は終わったの？」

貴浩「ああ、終わったよ。今後の秀吉に期待するさ」

愛子「それって？」

秀吉「貴浩がワシと楓の交際を認めてくれたのじゃ」

優子「それ本当？良かったわね楓」

楓「はい！」

優子「でもよくあなたが認めたわね」

貴浩「・・・・まあ相手が秀吉だから大丈夫だと思ったからな。
まあ楓を泣かせでもしたらＯＨＡＮＡＳＩが必要だけどな」

愛子「そうなんだ」

貴浩「じゃあ次は明久たちの番だけど、優子どうするんだ？」

優子「・・・・・どうもしないわよ。それに貴浩が秀吉の事を許したんだから
私が明久君にどうこう言えるわけ無いじゃない！私はそこまで器はせまくないわよ」

貴浩「だそうだ明久」

明久「よ、良かった」

優子「でも、そうね、何も罰が無いのはアレだから、
何か夕飯でも作ってもらおうかしら」

愛子「それはいいかも！秀吉君と楓のお祝いもかねてだね」

貴浩「そうだな。じゃあ明久１人じゃ大変だから俺も手伝うぞ」

その後は俺と明久で料理を作り皆で盛り上がりながら過ごしていった。

如月グランドパーク編６　～明久と秀吉のその後～（後書き）

ついに雄二に続いて秀吉と楓もくっつけてしまった・・・・・・

残るは明久と貴浩だな・・・・・・

さて、どうしよう・・・・・・

全然話は変わりますが、皆さんの知恵をお借りしたいのですが、

最近ようやく合宿編を書き終えそうなんですが、

その後の『肝試し編』なんですが、

自分がそこまで考えずにオリキャラを作ってしまったんで

その妖怪をなんにするか全然決めてなかったんですよね（汗）

そして、あんまり妖怪の種類に詳しくもないんですよね・・・・・

なので皆さんから知恵をお借りしたいんですが・・・

とりあえず、

貴浩、楓、命の３名の妖怪の案を募集しています。

期限は合宿編の途中までとしています。

何卒、皆様の知恵をお貸しください。

如月グランドパーク編7　～その後～

それから週明けの学校で。

雄二「おい、貴浩！」

貴浩「ん？おはよう、雄二。どうしたんだ？」

雄二「如月ハイランドでは随分と色々とやってくれたな」

貴浩「あははっ。結果オーライだっただろ。
　ついに霧島さんに告白したみたいだしな（ボソッ）」

俺は雄二に近づき耳元でそう呟いた。

雄二「なぁ！？なんでそれをお前が知ってやがる！？」

貴浩「霧島さんから聞いた」

雄二「翔子からだと！？どうやって聞いたんだ？」

貴浩「電話で。最近は霧島さんにアドバイスとかしてたからな。
　その次の日に教えてくれたよ。大丈夫、皆には内緒にしとくから（ボソッ）」

雄二「……そうか」

貴浩「まあこれから頑張れよ」

雄二「ところで、お前にプレゼントがある」

貴浩「え？なになに？食べ物？ゲーム？」

雄二「違う、映画のペアチケットだ。
気になる相手がいれば（・・・・・・・・・）一緒に行くといい」

貴浩「ペアチケット？う～ん、そんなものもらっても、使い道に困るんだが」、

雄二「それじゃあな」

雄二は強引に俺の手の中にチケットを握らせて席から離れていった。

貴浩「これどうしようかな」

明久「どうしたの貴浩？それって映画のペアチケット？」

貴浩「そうなんだよな。俺が今見たい映画はナ○トとかハガ○ンとかのアニメだしな」

明久「あっ僕もナ○トとかハガ○ンは見たいな。面白そうだし」

貴浩「ただ、それを女子と見るのもなぁ」

明久「確かにそうだよね。ウチの女子でアニメ好きはいないだろうしね」

そうだよな。一応、ここは進学校な訳だしな・・・・・

貴浩「明久にあげてもな。お前行かずに換金するだろうしな・・・・」

明久「そうだね。僕が映画のペアチケットを持ってもね・・・・・」

俺が明久と映画のペアチケットの話をしていると
そこに凄い形相の姫路と島田がやってきました。

島田「あ、アキっ！　そういえば、ウチ週末に映画を観たいとおもっていたんだけど――」

姫路「あ、明久君っ！私も丁度観たい映画があったんですけど！」

明久「へぇ？なになに？どうして2人ともそんなに殺気だってるの！？

それにこのチケットは僕のじゃないよ！貴浩のだからね。
それに映画が見たいなら2人で行って来なよ。
僕は今はアニメの映画が見たいだけだし、それに今、金欠なんだよね」

貴浩「またか明久。お前浪費しすぎだろ」

明久「仕方ないじゃないか。僕の周りには誘惑が多くて・・・・・。
それにこの前のグランドパークで命に人形とかプレゼントしたから…」

貴浩「まあそれなら仕方がないか・・・」

姫路「あの、織村君。そのチケットどうするつもりですか？」

島田「もし使わないな――」

貴浩「そうだな。とりあえず誰か誘ってみるかな」

明久「頑張ってね貴浩」

貴浩「そうだな。最悪の場合は明久に女装してもらって映画に行くかな」

明久「いやだよ！そんなの！！」

貴浩「半分冗談だ。ところで島田。今何か言ってなかったか？」

明久「半分ってなに？ねぇ？」

島田「え？いや、なんでもないわよ」

貴浩「それならいいが」

さてなら誰を誘うかな。できればアニメのほうが見たいがそんな趣味の女子いないだろうしな。

俺はひとまずチケットを鞄にいれて明久たちと雑談を始めた。

如月グランドパーク編7　～その後～（後書き）

さて貴浩は誰と映画に行くのでしょうか？

A）優子　　B）愛子
C）なのは　　D）楓
E）命　　F）砂原
G）椎名　　H）その他
I）明久（女装）

皆さんどれだと思いますか？

ちなみに作者はナルトの映画は見に行きました。1人で・・・・・・・

でも、結構面白かったですよ！

プール編

“雄二＆霧島さん結婚大作戦”から1週間後。
いつも通りに平穏な週末の夜、
俺は久しぶりに雄二と明久の家に泊まりで遊びに来ていた。

明久「あれ？　雄二、何か買って来たの？」

雄二「食いものだ。お前の家にはろくなものがないからな
　最近は少しはマシになったがな」

貴浩「まあ確かに、あっても良くてパンの耳や白米、最低で砂糖と油だからな」

明久「少しずつだけど、生活は改善してるよ？
　いつまでも貴浩に迷惑かけるわけにもいかないし」

雄二は買って来た物をテーブルに置き、俺も自分で用意した物を準備し始める。
ちなみに俺のメニューは、

・午〇の紅茶
・親子丼

明久「へぇ～っ。差し入れなんて、随分気がきくね」

続いて雄二が取り出したのは、以下のメニュー

・コーラ

・サイダー
・カップラーメン
・カップ焼きそば

それを見て、明久は摂取できるカロリーに喜ぶ。
ちなみに明久の勘では、雄二はやきそばとコーラを選ぶと当たりを付けていた。

明久「それで、雄二はどっちにするの？」

雄二「俺か？　俺はコーラとサイダーとラーメンとやきそばだ」

貴浩「全部じゃねーか！」

明久「雄二キサマ！　僕に割り箸しか食べさせない気だな！？」

そのセリフに、流石に俺も雄二も若干引いた。

雄二「待て！　割り箸だけでも食おうとするお前の思考に一瞬引いたぞ！？」

貴浩「確かにビニール袋よりは、食べ物に近いのは事実だが……」

雄二「というか、割り箸がないと俺は素手でラーメン食うはめになるだろうが。
　心配せんでも、お前の分もちゃんと買って来てある」

と、１つ目の下敷きになっている、２つめのビニール袋に明久は気がついた。

明久「なんだ、やっぱり僕の分も買って来てくれてたんじゃないか」

雄二「まぁな。先週末は世話になったからな、感謝の気持ちだ」

明久「え？僕は何もしてないんだけどな。でもありがたく頂くよ」

下敷きになっていた袋を受け取り、その中にある物を喜々として取り出す明久。

・こんにゃくゼリー
・ダイエットコーラ
・ところてん

明久「僕の貴重な栄養源がぁぁーっ！」

全てカロリー０のダイエットメニューであった。

雄二「気にするな。俺の感謝の気持ちだ」

明久「くそっ！　全然感謝していないな！？」

明久がダイエットコーラを取り出し、構える。

雄二「うるせぇ！！」

対する雄二は、普通のコーラとサイダーを構える。

明久はそれを見て不敵に笑い、コーラを取り出す。

明久「・・・・・・やる気、雄二？」

雄二「ああ。お前とは決着を付ける必要があると思っていた所だ」

明久「僕もだ。日頃の恨み晴らさせてもらう」

互いに相手を睨みつけ、牽制し合っている。

ここで下手な動きを見せれば命取りになる、まさに一色即発の空気。

……ピチョン

明・雄「「……っ！！」」

その音をきっかけに、２人は一斉に動き出す。

静から動へ、にらみ合いから闘いへと動く。

ちなみに俺は食べ物を粗末に扱いたくないので離れて食事中・・・・

シャカシャカシャカシャカ（２人がペットボトルを振る音）

ブシャアアアアアアア（お互いに向けて炭酸飲料を射出する音）

バタバタバタバタ（２人が目を抑えてのた打ち回る音）

明・雄「「目が、目がぁぁぁああっ！」」

２人して、炭酸が目にしみるのか、苦しみにのたうちまわり始めた。

雄二「やってくれるじゃねぇか、明久！」

明久「雄二こそ、流石は僕がライバルと認めた男だ！」

そして雄二はやきそば、明久はところてんを武器にして闘いへと身

をゆだねていく。

――しばらくお待ちください――

明久「……雄二、一時休戦にしない？」

雄二「……そうだな。この戦いはあまりにも不毛だ」

貴浩「終わったのか？」

２人とも、互いの食べ物でべたべたになっていた。

雄二「明久、シャワー借りるぞ？」

明久「うん。タオルは適当なの使っていいよ」

雄二「言われなくてもそうする」

そう言うと、気持ち悪そうに来ているシャツをつまみながら雄二が脱衣所へと消えていく。

続いて、バサバサと景気良く衣服が脱ぎ捨てる音が聞こえてきた。

貴浩「ところで明久、ガスは大丈夫なのか？」

明久「あっ、払うの忘れてた」

雄二『ほわぁぁーっ！！』

ガチャッ！　ズカズカズカ

雄二「・・・・・・もっと早く思い出せやコラ」

腰にタオルを巻いた雄二は、寒さで全身に鳥肌を立てていた。

明久「ごめんごめん。えっとね、心臓に近い位置にいきなり冷水を当てると
　体に悪いから、まずは手や足の先にかけてから徐々に心臓へと……」

雄二「誰が冷水シャワーの浴び方を説明しろって言った！？」

明久「何熱くなってるのさ雄二。そうだ、冷たいシャワーでも浴びて冷静に」

雄二「浴びたから熱くなってるんだボケ！
　……くそっ、このままじゃ風邪ひいちまう」

貴浩「けど、湯が出ない事実は変わらないだろ？」

週末で、しかも時間は遅い。
だからガス会社はもうやっておらず、どんなに急いでも明日以降になる。

雄二「やれやれ……仕方ない、２人とも外へ出るぞ」

貴浩「外？　俺か雄二の家にでも行くのか？」

雄二「それでもいいけどな。どうせならシャワーだけじゃなくてプ

ールもある所に行こうぜ」

近くにそんな場所なんてあったか？

雄二「ああ。シャワーもプールもあって、ここから近くて、
　尚且つ金もかからないところがあるだろうが」

貴浩「え？そんな好条件が……ああっ、あそこか」

明久「オッケー、すぐに用意するよ。水着はどうするの？
　貴浩は僕のサイズが合うから貸すけど？」

雄二「トランクスで泳ぐさ。水着と大して変わらないだろ」

貴浩「じゃあ貸してくれ」

手早くすまして、３人は戸締りをした後に外へ。
そして目的地へと駈けだして行った。

その２時間後

西村「……で、何か言い訳はあるか？」

場所は文月学園の宿直室にて。

3人は揃いもそろって、鉄人こと西村教諭の説教を受けていた。

貴・明・雄「「こいつが悪いんです！」」

綺麗にハモる俺達3人の声。

明久「雄二がまともな差し入れを持ってこないからだろ！」

雄二「ガス代を払い忘れていたお前が悪い！」

明久「水が出るだけマシだろ！」

雄二「水すら出ない事もあるのか！？」

貴浩「おい落ち着けよお前ら！」

目の前でボルテージが上がっている鉄人を見て、
俺は焦って2人を止めようとする。

西村「……もういい。よくわかった」

と、その様子に呆れ果てた鉄人は、額に手を当てため息をついた。
2人は特に気にはしなかったが、
俺にはそれが嵐の前兆のように思えてならなかった。

明久「わかってもらえました？　それは良かったです」

雄二「んじゃ、わかって貰えたところでそろそろ帰るか。いい加減時間も遅いしな」

貴浩「そっそうだな。それじゃ、失礼しま……ぐえっ！」

頭を下げて出て行こうとした3人の首を、その太い腕ですごい力で締め付けられ、
3人は下手な抵抗をすれば首の骨を折られかねないぐらいだ。
自己防衛本能が弾きだした答えに、大人しくなる。

西村「そう急ぐ事もないだろう3人とも。
　帰るのは恒例のヤツをやってからでも遅くはないよな？」

貴浩「あっ……やっぱり……」

明久「そっそうですね……是非、そうさせてもらいます……」

雄二「お、俺も、そうさせてもらおう……」

こうして、3人は朝まで鉄拳付きの補習を受ける羽目になった。

明久「てな事があって、おかげで散々な週末だったよ」

週明けの教室、朝のＨＲが始まるまでの時間。
いつものメンバーで卓袱台を囲い、降りかかった不幸についての説明。

秀吉「そうじゃったか。それは災難じゃったのぅ……」

気遣うように柔らかな表情を浮かべる秀吉。

雄二「おまけに今週末はプールの罰掃除とくれば、気が滅入るな」

ムッツリ「……重労働」

ムッツリーニが明久の隣で、ボソリと呟いた。

明久「だよね。あんな広い所を掃除なんて、何か褒美が欲しい位だよ」

貴浩「褒美という程じゃないが、
“掃除をするのならプールを自由に使っても良い”と鉄人に言われたぞ？」

明久「え？　そうなの？」

貴浩「ああ。だから秀吉とムッツリーニも、今週末にプールに来ないか？」

折角の貸し切りなら、と早速2人を誘い始める。
まず最初にムッツリーニが頷こうとして……

貴浩「ただし、ムッツリーニにも掃除を手伝ってもらうけどな」

ムッツリ「……」

貴浩「なあ雄二、皆にも声をかけておくな。
それとムッツリーニ。ちゃんとなのはも呼ぶからな」

ムッツリ「……ブラシと洗剤を用意しておけ」

俺の言葉に動きを止めたが、後のフォローにあっさりと頷いた。

秀吉「うむ、そうじゃな。貸し切りのプールなぞ、
こんな時でなければ中々体験できんじゃろうし、
相伴させてもらうかの。無論、ワシも掃除を手伝おう
……それに楓の水着が見られるのじゃ（ボソッ）」

明久「え？　結構大変だと思うけど、いいの？」

秀吉「うむ、お安いご用じゃ」

と、快諾する秀吉。
でも最後、なんかおかしな事が聞こえた気がしたが気のせいだよな

光一「すみません。私は今週は用事がありまして……」

明久「それは残念だね。次回は一緒に楽しもうね」

光一「その時はよろしくお願いします」

貴浩「んじゃ、後は……おーい命に楓そして姫路に島田。ちょっといいか？」

命「どうしたの貴浩君？」

楓「兄さんなんでしょうか？」

島田「どうしたの織村？　何か用？」

姫路「呼びましたか、織村君？」

まずは命、楓、美波が、それに続いて瑞希もやってくる。

貴浩「４人とも今週末は暇か？
　学校のプールを貸し切りで使えるんだけど、良かったらどうかな？」

Ｆ女子「「「「え……？」」」」

プール、という単語で４人が一瞬ビクンと反応する。

明久「あ、もしかして４人とも予定があったりする？」

命「いえ、何も予定はないので参加させてください」

楓「私も予定はないです。・・・・・秀吉君が行くのなら行きますよ」

何気に仲良いな・・・・・兄さん少し寂しいよ・・・・・

島田「い、いや、別に予定はないんだけど。その、どうしようかな……？
　プールって言うと、やっぱり水着だし……」

姫路「そ、そうですよね。水着ですよね……その、えっと……」

美波は自らの胸部へ、瑞希は腹部へとそれぞれ視線を送った。
水着となれば、色々と見られる訳なので自身の悩みの個所が晒されるのに、
少々躊躇いを感じているらしい。

貴浩「ってことは命と楓は参加だな。島田と姫路はどうする？
　無理には誘わないが・・・・・・」

雄二「で、どうするんだ2人とも？」

島田「い、行くわ！　その、イロイロと準備をして……」

姫路「そ、そうですね。準備は大事ですよね」

複雑そうな顔をしつつ、2人は一応肯定の意を示した。

秀吉「貴浩よ、姉上を誘わんのかの？」

貴浩「一応誘うよ。Aクラスだと優子に愛子に霧島さん、なのは、刀麻は
　誘おうかなと思っている」

秀吉「それなら良いのじゃが……」

どうしたんだ？優子に何かあったっけ？
あっそうか！秀吉と命を呼ぶのに1人仲間外れにしたら可愛そうだもんな。
秀吉は命だけじゃなく優子にも優しいんだな。これぞ姉妹愛か！

秀吉「・・・・なにか勘違いされておる気がするが・・・」

貴浩「さて、雄二、霧島さんにはお前から声をかけておけよ？」

雄二「言われなくてもそのつもりだ」

明久「あれ？　随分と素直な返事だね？」

雄二が意外な返事をしたことに明久は疑問を感じている。
まあ雄二と霧島さんは正式に付き合う事になったのだから当たり前だろうな

雄二「とにかく、全員オッケーなようだな。んじゃ、
　土曜の朝１０時に校門前で待ち合わせだ、水着とタオルを忘れるなよ。
　Ａクラスには貴浩から話しておけよ」

雄二のシメの台詞と同時に、鉄人が教室のドアを開ける音が響いた。

プール編（後書き）

次回はプール編です。

どうなるのかをお楽しみに。

まだ、肝試しの案募集中です。

1人だけでもいいので知恵を貸していただけると嬉しい限りです

プール編　～着替え前～

そしてその週末。

明久「おはよー。絶好のプール日和だね」

雲1つない快晴の青空の下、明久は校門に立つ俺と楓と木下3姉妹と姫路、なのはと愛子。

貴浩「よう明久。今日は目いっぱい楽しもうな？」

秀吉「おはようじゃ明久、良い天気じゃな」

命「おはよう明久君。今日は楽しもうね」

楓「おはようございます明久君。今日は本当にいい天気ですよね」

姫路「おはようございます明久君、今日は良い1日になりそうですね」

なのは「おはよう明久君」

優子「おはよう明久君」

愛子「おはよう吉井君。今日はよろしくね」

明久「あれ？なんで優子さんや工藤さんが？」

貴浩「お前話聞いてたか？優子や愛子も呼ぶって言っただろうが」

優子「そういうことよ。折角だから連れて来て貰ったのよ」

明久「そうなんだ。じゃあ折角だし、目いっぱい楽しまないとね」

そして、或る人影に気がつく。

明久「ムッツリーニ、おは……」

康太「……！！（カチャカチャカチャ）」

鬼気迫る表情で、カメラの手入れをしているムッツリーニ。

彼にしてみれば、ここは絶好の撮影チャンスでもある。

明久に構う暇などないと言わんばかりに、カメラに集中していた。

貴浩「ムッツリーニ、準備は良いけど無駄になるだろ？」

康太「……なぜ？」

貴浩「いや。だってムッツリーニはどうせ鼻血で倒れるだろうし」

明久「そうだよね。チャイナドレスどころか、葉月ちゃんの着替えですら

　鼻血の海に沈む位だもん」

という明久の言葉に、ムッツリーニは肩をすくめて見せた。

そして大きなスポーツバッグを手に取り、２人の前に突きつける。

康太「……甘く見て貰っちゃ困る」

と言いながら、そのスポーツバッグを開けて2人に見せる。

康太「……輸血の準備は万全」

貴浩「どこで手に入れたかは聞かないが、ある意味準備が良いな？」

明久「うん、最初から鼻血の予防を諦めてる当たりが男らしいよね」

鞄いっぱいに入っていた携行用の血液パックをみて、
とりあえず救急車は必要ないなと思う2人だった。

優子「……つくづく、異常なメンバーね」

姫路「まあまあ。趣味は異様かもしれませんが、良い人たちですよ？」

優子「……姫路さんも、すっかりなじんでるわね？」

“朱に交われば紅くなる”

その言葉を実感した優子だった。

明久「準備と言えば、秀吉は新品の水着を買うとか言ってたよね？忘れずに買って来たの？」

秀吉「うむ。無論じゃ」

秀吉「ちなみに買って来た水着じゃが……」

康太「……！！（くわっ！）」

秀吉の言葉にムッツリーニが目をむく。当然明久も表にこそ出さないが、興味津々。

秀吉「……トランクスタイプじゃ」

明・康「「バカなぁぁぁあっ！！」」

優子「……何してるのかしら？」

貴浩「Ｆクラスは女子が４人しかいないから、ある意味飢えてる状態なんだよ。
　増して秀吉は優子と命と瓜二つの童顔の女顔で、しかもスリムと来てるんだから」

状況についていけない優子に、俺が呆れながら事情説明。

砂原「やぁ皆おはよう♪今日はよろしくね♪」

椎名「おはようございます。今日はよろしくです」

刀麻「おはよ。今日はよろしくな」

砂原さん、椎名さん、刀麻も到着したようだ

……タタタタッ！

葉月「バカなお兄ちゃん、おはようですっ！」

明久「わわっ！？」

島田「もう葉月ってば、アキがビックリしてるでしょ？」

明久の背中に、葉月が飛び付いた。

明久「あれ？　葉月ちゃんか、久しぶりだな」

天真爛漫を体現してるように笑う少女、島田葉月。

明久を好いており、婚約者を自称する少女。

葉月「バカなお兄ちゃんは冷たいですっ。酷いですっ。
　どうして葉月は呼んでくれないんですか？」

明久「あ、うん。ごめんね葉月ちゃん」

貴浩「呼んだら呼んだで、明久がどこぞのある人物に八つ裂きにされるだろうがな」

優子「……どうしてFクラスはこうも常識を足蹴にする人達ばかりなのかしら？」

なのは「にゃはははは」

ボソリと呟いた光一の台詞に、正直自分の常識を疑い始める優子だった。

なのはも苦笑いするしかないみたいだ

島田「家を出る準備をしていたら葉月に見つかっちゃって。

どうしてもついてくるって駄々こねて聞かないもんだから…
…」

と、島田がため息交じりに呟く。

貴浩「別にいいと思うけどな？　飛び入りがあって困る理由もないし」

島田「それもそうだけど……あれ？坂本はまだ来てないの？
ウチが最後だと思ったのに」

楓「いえ、もう来てますよ？今翔子ちゃんと一緒に職員室にかぎを借りに行って
……あ、丁度戻ってきたみたいです」

楓の説明の最中に、校舎の方から雄二と翔子が歩いてきた。

明久「おはよう雄二、霧島さん」

雄二「おう。きちんと遅れずに来たようだな」

翔子「……皆おはよう」

葉月「でっかいお兄さん、おはようです」

雄二の粗野な外見に物怖じもせず、元気よく挨拶をする葉月。

雄二「ん？　ちびっ子に砂原や椎名も来たのか？」

葉月「ちびっ子じゃないですっ、葉月ですっ！」

砂原「折角だからね♪」

椎名「鈴ちゃんが行くから私も」

雄二「んじゃ、早速着替えるとするか。
女子更衣室のカギは翔子に預けてあるからついて行ってくれ。
着替えたらプールサイドに集合だ」

雄二の言葉に従い、一旦メンバーは男女に分かれる。
楓と命、姫路と美波、優子と愛子、砂原さんと椎名さんは霧島さんに。
俺と明久とムッツリーニと秀吉と刀麻と葉月は雄二に。

明久「……ん？こらこら、葉月ちゃんと秀吉は向こうでしょ？
霧島さんについて行かないとダメだよ」

葉月「えへへ。冗談ですっ」

秀吉「ワシは冗談じゃないのじゃが……？」

完全に女として認識されてる事に、改めて実感した秀吉だった。

島田「ほら、遊んでないで行くわよ葉月、木下」

秀吉「し、島田！？　ついにお主までそんな目でワシを見るように！？」

優子「ちょっと島田さん！　秀吉は……」

姫路「あの……それなら、木下君は1人でどこか別の場所で着替えるっていうのはどうですか？」

と、おずおずと手を挙げて提案する瑞希。

というより、自分の常識がことごとく無視されてる事に、頭を抱える優子。

優子「……秀吉、あんた女って認識されてるって言う話、本当なのね？」

楓「ヒデ君……」

秀吉「なぜじゃ、最近は光一のおかげで男らしくなってきておるというのにＯｒｚ」

貴浩「……しょうがないな。
　なら俺と秀吉は別の場所で着替えるから先に行っておいてくれ」

雄二「それがいいな」

優子「さ、早く着替えましょ？　時間がもったいないし」

明久「そうだね。じゃあまた後で」

そこで皆と別れ着替えに向かった

プール編　～女子の水着、それはパラダイスです～

プールサイドにて。

貴浩「やっぱり女子はまだ着替え終わっていないか」

明久「そうみたいだね」

康太「……（コクリ）」

雄二「ま、女性が準備に時間がかかるってのは、当然だからな」

刀麻「ところで秀吉は？」

貴浩「まだ着替えてる。俺が着替えている時も落ち込んでいたからな。
　俺が着替え終わった時に何とか気を取り戻したみたいだから、俺は先に来たわけ」

雄二「・・・・秀吉も大変だな」

明久「ムッツリーニ、心の準備は良いかい？」

康太「……まかせろ。すでにイメージトレーニング５１２パターン済ましてある」

その言葉に俺と明久が、目を見開いて驚愕する。

康太「……そして５１２パターンの出血を確認した」

明久「……致死率１００％だね」

力強い康太の言葉に、明久の目が虚ろになる。

雄二「ん？　誰か来たみたいだな」

不意に雄二が呟き、全員が顔を向けると小さな人影が駆け寄ってくるのが見えた。

その姿は紺色の水着を着た少女、葉月が……

炭酸飲料の蓋を開けたような音と共に、康太の鼻下に、赤く細い線が刻まれる。

康太「……弁護士を呼んで欲しい」

鼻血を垂らしながら呟くムッツリーニ。それを聞いて俺と明久が苦笑いする。

葉月「お兄ちゃんたち、お待たせですっ」

息を弾ませ駆け寄ってきた葉月の姿を見て、明久が微笑む。

貴浩「懲役は2年で済みそうだな、ムッツリーニ」

康太「……実刑はやむをえない（ポタポタ）」

雄二「というかムッツリーニ、小学生相手に鼻血垂らすな」

雄二は康太にツッコむ。それを聞いて明久が苦笑い。

と、さらなる人影が更衣室から飛び出してくる。

島田「こ、こらぁあっ?!お姉ちゃんのソレ、
　勝手に持って行っちゃあダメでしょっ?!　返しなさい葉月っ!?」

明久「ソレ?　……何のことだろ?」

葉月「あぅっ、ズレちゃいました」

ムッツリーニを動揺させていた、小学生とは思えない胸のふくらみ。
それがいつの間にか、そのふくらみがおなかの方へ行っている。

明久「ん?　今美波が返しなさいって言っていたのは、葉月ちゃんが付けている胸パッ……」

島田「この1撃に、ウチの全てを賭けるわ……!」

貴浩「落ち着け島田。その1撃で明久の記憶諸共に存在すら消し去りかねない」

と、明久と島田の間に入って、俺は島田を宥める。

優子「そうよ島田さん、折角のプールで暴力沙汰なんて起こす物じゃないわ」

愛子「そうだよ島田さん」

明久「あっ、優子さん、工藤さん。その水着、似合うね」

優子「そっそう?」

愛子「ありがとう吉井君」

と、いつの間にか来ていた優子と愛子も同様になだめる。
ついでだが、明久に褒められて頬を赤らめた。
もしかしてこの2人も明久の事が？・・・・・明久はもてるな。
・・・・チクショーめ、羨ましい・・・・

島田「うぅ……折角用意して来たのに、葉月のバカ」

貴浩「スレンダーにはスレンダーの良さってものがある物なんだよ、そうだろ明久？」

明久「まあ、そうだね。手も足も胸もバストもほっそりしてて、
すごくきれいだと脚の親指が踏みぬかれた様に痛いいいい！！」

島田「今ウチの胸が小さいって2回言わなかった！？」

うっかり発言をした明久は、島田に思いきり足を踏みつけられていた。
俺はそれより、優子の薄い緑のワンピースと
愛子は下はジーンズを短くカットしたようなパンツで
上は普通の水着だけどおそらく水泳部の水着とサイズがだいぶ違うのか、
日焼けの境界線が見えてしまい目を奪われている。

優子「……何よ、じろじろ見て」

貴浩「え？あっ、悪い」

男というのは、特に女性の水着姿に見惚れる物である。

愛子「もしかして僕と優子の水着姿に見とれてたのかな？」

貴浩「●☆♪▼◇＄（２人共最高だっ）！」

愛子「貴浩君何言ってるのかわからないよ」

優子「……のよ？」

貴浩「え？」

優子「だからアタシの水着の……」

雄二「ぐあああああっ！　目が、目がぁっ！！」

優子の蚊の泣くような声を遮るかのように、雄二の悲鳴が響き渡った。

俺と優子、愛子が何事かと思い見てみると、そこには目を潰されのた打ち回る雄二の姿。

そして手をチョキにしている、大人しめな白のビキニに水着用のミニスカートを組み合わせた格好の霧島さんが立っていた。

島田「すごいわ……坂本の目を潰す仕草まで綺麗だなんて」

明久「うん……あの姿を見られるのなら、雄二の目なんて惜しくないね」

雄二「そりゃお前らに実害がないからな！」

優子「……代表まで」

Fクラスではなく、Aクラスの代表である霧島さんの行動に、尚更疑問を持つ優子だった。
しかしのた打ち回る雄二を見て、俺は霧島さんに駆け寄る。

貴浩「霧島さん、雄二の目を潰したら水着の感想が聞けないよ？」

翔子「・・・・・・・それは失敗だった」

貴浩「というか、目を潰さなくても塞げばよかったんじゃないか？」

翔子「・・・・・・・ふさぐ・・・・そう」

と、何か思いついたのか、頷いて雄二の元へ。

楓「すみません。お待たせしました」

命「ごめんね。待ちましたか？」

明久「●☆♪▼◇（２人共最高だよっ）！」

貴浩「●☆♪▼◇（落ち着け明久）！」

刀麻「お前ら２人とも落ち着けよ！」

明久「２人とも似合ってるよ」

命「ありがとう明久君」

楓「兄さん、ヒデ君は？」

貴浩「ん？ああ、お前の彼氏さんはまだ着替え中だ」

楓「に、兄さん／／／／」

貴浩「さて……後は姫路と秀吉、砂原さんと椎名さんってところか」

優子「……」

ふと、姫路の名を出してから落ち込む優子を見て、俺は疑問に思う。

貴浩「ん？　どうした優子？」

優子「“人生は戦い、力こそが正義”……この学園の正義を今日初めて呪ったわ」

貴浩「は？」

訳がわからない……といった表情で優子を見る俺。

そこへ……

姫路「すみません！　背中の紐を結ぶのに、時間がかかっちゃって……！」

なのは「ごめんね皆。ちょっと遅れちゃった」

駆け足でこちらに来る姫路の姿があった。

それを見て、大量の出血をして倒れるムッツリーニと、それと同様

に出血多量で倒れた明久。
そして……

島田「Ｗｏｒａｕｆ　ｆｕｒ　ｅｉｎｅｍ　Ｓｔａｎｄａｒｄ　ｈａｔ　Ｇｏｔｔ　ｊｅｎｅ　ｕｎｔｅｒｓｃｈｉｅｄｅｎ，ｄｉｅ　ｈａｄｅｎ，
　ｕｎｄ　ｊｅｎｅ．　Ｄｉｅ　ｎｉｃｈｔ　ｈａｂｅｎ！？
　Ｗａｓ　ｗａｒ　ｆｕｒ　ｍｉｃｈ　ｕｎｇｅｎｕｇｅｎｄ！
　（神様は何を基準に、持つ人と持たざる人を区別しているの！？
　　ウチに何が足りないっていうのよ！）」

貴浩「……えーっと、英語、じゃないな。ドイツ語か？」

優子「確か島田さんって、ドイツからの帰国子女だったわね？
　今度教えてもらおうかしら？」

聞き慣れない言語に戸惑うが、何となく言っている事が実感が出来た俺と優子だった。

貴浩「確かにあれはすごいな……さて、後は秀吉に砂原さんと椎名さんだな」

愛子「本当にアレは凄いね」

優子「……何だか遊ぶ前から疲れる展開ばかりね。
　これで秀吉まで妙な事したら、本気で骨の2、３０本は覚悟して貰わないと」

優子も十分非常識だ……と言ったら俺のの骨がやられてしまうんじ

ゃないかと
思い俺は口を閉じた。
秀吉もトランクスだと言ってた事を思い出し、まあこれ以上刺激する事はないはずだと……。

秀吉「遅れてすまぬ。着替えはさほど手間取らんかったのじゃが、
落ち込んでいた時間が長くてはの」

思っていたが、それは見事なまでに裏切られた。

明久「☆●◆▽□♪◎×（ううん、そんなに待ってないよ秀吉）」

刀麻「落ち着け明久、ここは地球だぞ」

秀吉の格好は、確かにトランクスである。
ただし、構成は美波と同じようなスポーツタイプであり、
上は肌に張り付く様なショートタンクトップ。
下は飾り気のない普通のパンツの上に、
ショートパンツのようなズボンを一番上のボタンを外した状態で重ねている。

・・・・・・つまりは、女物のトランクスタイプ。

貴浩「お前も落ち着け優子！秀吉に悪気はない筈なんだ！！・・・・・多分」

優子「離しなさい貴浩！あのバカの格好もそうだけど、何でアタシよりも評価が高いのよ！？」

明久の態度が火に油を注いだのか、今にも秀吉を血祭りにあげんば

かりに
優子が暴れだす。俺はとっさに優子を羽交い絞めにして、それを止めようとする。

貴浩「ちょっ、誰か抑えるの手伝ってくれ!!
　というか秀吉、お前男物と女物の区別位つけろよ!!」

秀吉「ち、違うのじゃ!ワシは本当に男物を買った筈なのじゃ!
　きちんと店員にも“普通のトランクスタイプが欲しい”と言ったのじゃぞ!?」

貴浩「上がある時点でおかしい事に気付けよ!……今度は俺も着いていくから」

雄二「何だ……？　一体、何が起こってるんだ？」

翔子「雄二」

雄二「わっ！　なっ、何だ!?この柔らかい感触は、一体!?
　……って翔子!?　お前、何してやがる!?」

翔子「目隠し」

雄二「何で抱きかかえてやるんだ!!?」

まだプールにすら入っていないというのに、カオスがその場を支配した。

そして、そのカオスもようやく落ち着いたころ。

砂原「ごめんねぇ皆お待たせ！」

椎名「お待たせしました」

そこへ砂原さんと椎名さんがやってきた

貴・明・雄・刀「・・・・・・・・・・・・」

ムッツリニ「・・・・・・・・・・・・・・・（ドバドバ）」

俺たちは砂原さんの水着をみて見とれていた。

椎名さんは薄い水色のワンピースの水着で砂原さんは赤のビキニだった。

色が色だけに凄く目についてしまう。

砂原「あらぁ？もしかして私に見とれていたのかな♪」

俺たちは一斉に顔を背けた。

砂原「でどうなのかな？ター君、アッキー？」

しかもよりにもよって俺と明久に照準をあわせてきやがった。

雄二と刀麻にしろよと思っていると刀麻の姿はなく（おそらく逃げた）

雄二は霧島さんにより捕まっていた。

島田「アキー覚悟しなさいよ！」

姫路「明久君少しＯＨＡＮＡＳＩが」

命「鈴歌ちゃんスタイル良くていいなぁ」

命は砂原さんのスタイルにみとれており、姫路と島田は明久に制裁を加えようとしていた。

砂原「で、どうなのかな？ター君？」

もうターゲットを俺に定めたか

貴浩「・・・・・・いいんじゃないか。似合ってると思うよ。椎名さんも似合ってるよ」

椎名「どうもです」

砂原「ありがとねん♪さてター君をからかった事だし泳ごうかな」

貴浩「はぁっ……」

俺はプールに入る前に大半の体力を費やす事となり（ツッコミとかで）

飛び込むことはせずゆっくりとプールに入った。

それを見て、勢いよく飛びこんだ明久は俺に近寄った。

明久「お疲れだね、貴浩？」

貴浩「そりゃあな……」

何となく俺の苦労を、身体（にしみ込まれた痛み）的に共感してしまう明久だった。

プール編　～水中鬼～

姫路「あの、明久君に織村君」

そこへ、梯子を使ってゆっくりと水に入ってきた姫路が近くにやってきた。

明久「ん？　なに、姫路さん」

姫路「2人は水泳は得意ですか？」

明久「あ、うん。僕も貴浩も、それなりに泳げるよ？」

姫路「実は私、全然泳げないんです」

明久「あ、そうなの？」

命「私もあまり泳ぐの上手くないんですよね」

楓「私もです」

俺たちにしてみれば、すごい速さで泳ぐ3人の姿は想像できなかった。

そもそも身体が弱いと知っているので、運動自体が出来る印象は持ってない。

島田「ん？　瑞希って水泳苦手なの？」

秀吉「楓よ、水泳が苦手なのかの？

優子「失礼だけど、確かに3人は運動ができるようには見えないわね」

姫路「はい、恥ずかしいんですけど、水に浮く位しかできなくて……」

命「私は少しは泳げるんですがあまり……」

楓「私も命ちゃんと同じぐらいです」

島田「そう言う事なら、いつも勉強を教えてもらっているお礼に、ウチが瑞樹に泳ぎを教えてあげよっか？」

ちょっと得意気に、美波が胸を張る。

常日頃より教わってばかりの為、意趣返しが嬉しいらしい。

優子「それじゃ、アタシも教えてあげるわ」

姫路「は、はいっ！　よろしくお願いします！」

そのやり取りを聞いて、2人はほほ笑んだ。

勉強ではAクラスの瑞希が、Fクラスの美波にいつも教えてあげている立場。

ちなみに優子も、Aクラスレベル。

明久「なら楓は秀吉に習ってきなよ。秀吉は彼氏なんだから。少しぐらい甘えたら」

秀吉「そうじゃな／／／／ワシでよければ指導するぞい」

楓「ではお願いしますねヒデ君」

貴浩「命は愛子が教えてあげなよ。・・・・・・・・厳しく」

愛子「良いよ。じゃあ頑張ろうね命・・・・・・・・厳しくやるからね」

命「はい、お願いします。って厳しくですか!?」

明久「頑張ってね命」

命「は、はい」

なぜ明久にその役を任せなかったのかは、
近くに姫路と島田がいるからここで血のプールに染めたくなかったからだ。

明久「こうしてみると、美波がAで姫路さんがFみたいだよね」

貴浩「当然、優子や愛子もAだな」

と、2人が何となくそう口走った処で……

愛・優・島「「「寄せてあげればB位ある（わ）よっ!!」」」

貴・明「「ぐべぁっ!?」」

明久は島田に、俺は優子に三角絞めをかけられ、
そこから互いの頭をぶつけるように捻りあげられた。

愛・優・島「「「……来年には、きっと」」」

貴浩「なっ……何の話？水泳の事なのに寄せてあげるって、意味がわからないんだが？」

愛・優・島「「「え？　……ああ、そう言う事？」」」

明久「3人とも、何だと思ったの？」

折り重なるように浮かぶ明久と俺の言葉に、3人は口を噤んだ。

翔子「……雄二、ちなみに私はCクラス」

雄二「？　何を言っているんだおまえは？」

その遠くでは、雄二と翔子は（2人にとって）不思議な会話をしていた

ちなみに2人どころか雄二にもわからなかったが、

ただ1人ムッツリーニは目を輝かせている。

向こうのほうでは秀吉が楓に教えてあげていた。

島田「……わかったわ瑞希。あんたが泳げない理由」

姫路「え？　何ですか？」

島田「その大きな浮き輪をずっと付けているから、いつまでたっても泳げないのよ！

外しなさい！　そしてウチに寄越しなさい！！」

優子「出来れば、アタシも欲しいわね」

姫路「え？　ええ！？」

俺と明久は、その様子を見て近くにいると危ない（色々な意味で）と判断し移動した

貴浩「そ、それじゃ俺達、向こうに行ってるから」

明久「頑張ってね」

姫路「あ、明久君に織村君っ。なんだか美波ちゃんと木下さんがとっても怖いですっ！」

島田「ふふふ……瑞樹、それは無駄な脂肪の塊なのよ？
だから、いっぱい運動して燃焼させましょうね？」

優子「ええ。脂肪は運動で燃焼するものだから、ね？」

姫路「み、美波ちゃんに木下さん。あまりいい事ばかりでもないですよ？
肩が凝って大変ですし……」

優・島「「それでもいいの！　肩こり位我慢するわ！」」

その2人のセリフには、魂が込められていた。

島田と優子は、互いの顔を見合って一言。

島田「木下さん、あなたとは良い信頼関係が築くことが出来そう」

優子「優子で良いわ。アタシも美波って呼ばせて」

今ここに、友情が結ばれた瞬間だった。

葉月「お兄ちゃん達っ」

明久「わぷっ！？あっ、葉月ちゃん」

そこへ明久の背に葉月が乗ってきて、明久はこらえきれず沈んでしまう。

明久「どうしたの？　一緒に遊ぶ？」

葉月「はい！　“水中鬼”をするです」

貴浩「水中鬼？　……水中でやる鬼ごっこか？」

聞いたことない遊びに、２人は首を傾げる。

名称から推測した考えに、面白さを感じる２人だった。

葉月「違うですっ。水中鬼は、鬼になった人がそうでない人を追い掛けるです。

それで鬼が他の人を水の中に引きずり込んで、溺れさせたら勝ちです」

貴浩「鬼だ！それは確かに鬼だ！」

明久「というか、溺れさせちゃダメだよ。危ないから」

葉月「あぅ……ダメですか？」

ちょっと不満そうに、葉月が頬を膨らませる。
俺と明久は互いに顔を見合わせ、
どれだけ危険かを教えてあげる必要があるなと伝え合う。

貴浩「じゃあ見ててね？　霧島さんー！」

明久「え？　霧島さんを？　……ああ、成程ね」

翔子「……何？」

俺が呼ぶや否や、すぐに来てくれる翔子。彼女は運動もできる為、
泳ぎも上手い。
とりあえず明久が前に出て、説明をすることに

明久「雄二と水中鬼って遊びをやって見せてほしいんだ。
　ルールは簡単で、雄二を水中に引きずり込んで、
溺れさせた後で人工呼吸をしたら霧島さんの勝ち」

翔子「……行ってくる」

小さくうなづくと、翔子は魚雷のように静かに、そして速く雄二に
水中から接近していく。
とりあえず、俺は雄二に向けて合掌した。

雄二「お？　何だ？　いきなり足が……おわぁっ！？　だ、誰だ！？
　誰が俺を水中に（ガボガボガボ）」

翔子「……雄二、早くおぼれて」

雄二「ぶはぁっ！　しょ、翔子!?　何をトチ狂って……！（ガボガボガボ）」

それを見ていた俺と明久は頷きあって、葉月に一言。

貴浩「ね？　危ないでしょ？」

葉月「はいです……葉月、水中鬼は諦めるです……」

砂原「なになに？何面白そうな事してるの？」

明久「あっ砂原さん」

貴浩「葉月ちゃんに水中鬼の怖さを雄二を使って教えてたんだ」

砂原「そっか、それは面白そうだねん」

貴浩「じゃあ砂原さんもやってくればいいんじゃない」

砂原「そうだねん♪」

明久「でも僕達を狙わないでよ」

砂原「あら残念♪」

貴浩「あ、危ないな・・・・・・」

明久「じゃあ砂原さんも葉月ちゃんと一緒に遊ぼうよ」

葉月「綺麗なお姉ちゃんよろしくです」

砂原「綺麗と言われちゃ断れないねん♪」

貴浩「じゃあビーチボール持ってきてるからとって来るな」

俺が早速プールサイドに向かおうとしたところで、騒ぎの中心が近づいてきた。

雄二「明久に貴浩っ！　テメェラの差し金だな!?」

明久「うわっ！　ダメだよ霧島さん！　きちんと捕まえておいてくれないと！」

貴浩「早くしてくれ！俺達がおぼれさせられて雄二に人工呼吸されちまう!!」

翔子「……ごめん。雄二、浮気は許さない」

葉月「わっ、お兄ちゃん達、泳ぐの取っても速いですっ」

俺と明久と雄二と翔子の水中鬼、スタート。

しばらくして

砂原「じゃあ私は日焼け止めでも塗ろうかな。　ター君手伝ってくれる？」

貴浩「なっ!?」

砂原「あははっ、冗談だよん。それじゃ、手伝いたかったらいつでも来てね？」

と言い残し、去って行った。

貴浩「何で俺が名指しだったんだ？（雄二、明久、刀麻聞いたか？）」

雄二「もしかして工藤って、貴浩に気があるとかじゃないか？（ああ、本人公認だしな）」

明久「良かったじゃない貴浩（うん。男として、行かない訳にはいかないよね）」

刀麻「うらやましいぜ貴浩（愚問だぜ）」

と、４人で笑いあう。そこへ、俺に迫る殺気。

優子「ねえ貴浩、さっき水中鬼がどうとかって言ってたわよね？」

愛子「そうだ貴浩君、水中鬼ってどんな遊びなのかな？」

貴浩「え？　ああ、そうだけど……え？ちょっと待て」

俺はすぐさま危険を察知して逃げようとしたが思ったより２人の反応が早くて水の中に引きずり込まれてしまった。

それを見て、明久と雄二と刀麻は……。

明久「ゆっ、優子さん、工藤さん本気でそんな事やったら貴浩が死んじゃうから！！」

雄二「俺には迷いもなく翔子を嗾けたよな！？　……まあいい。さて」

翔子「……雄二、今動いたら捻り潰すから」

刀麻「明久！今はしゃべってないで2人を止めないと！」

明久「わかってたよ！　優子さん、なんか動かなくなってるから落ち着いて！！」

その後、砂原さんが日焼け止めを塗り終わった時には、
ベンチで横になっている俺の姿があった。
そばでは明久や近くで休んでいた椎名さんを伴い、本気で心配そうな顔で看病していた。

貴浩「悪いな明久、椎名さん」

明久「これぐらいなんでもないよ。いつも貴浩には世話になってるからね」

椎名「……私もです。あまり体を動かすのは苦手ですから、ここでゲームをしてましたし」

貴浩「そうか・・・・・で何のゲームをしてるんだ？」

椎名「モン○ン3です」

明久「あっ椎名さんもしてるんだ。面白いよねモン○ン」

貴浩「そうだな。俺はモン○ン2Gからだけど面白いよな」

椎名「2人もされてるんですね」

明久「うん、学校に持ってきて昼休みとかにやってるよ」

貴浩「ああ、俺たちのほかにもムッツリーニや雄二、秀吉、命もやってるよ。
　　時々刀麻もきてやってるし」

椎名「学校でやってるんですか？」

明久「うん、昼休みだから先生達も来ないしね」

椎名「羨ましいです。私もやりたいです」

貴浩「じゃあ今度ウチのクラス来なよ。一緒にやろうぜ」

明久「そうだね同じＡクラスの刀麻も来てるんだしおいでよ」

椎名「そうですね。じゃあお言葉に甘えて今度行きますね」

貴浩「今度やるとき呼びに行くな」

そこに

雄二「おっ貴浩無事だったか」

貴浩「なんとかな」

雄二「チッ・・・・そういえば俺があげた映画のペアチケットどうしたんだ？」

優・愛「「え?映画のチケットがどうしたの?」」

貴浩「ああ、雄二から映画のチケットをもらったんだが俺が今見たい映画がアニメでな」

明久「ナ○トとハガ○ンだったよね」

貴浩「そうそう。俺の周りにアニメ好きな女子いないからな。
せっかく雄二からタダで映画が見れるんだからな。最悪明久を女装させていくかな」

雄二「そういや、お前はそういうヤツだったな」

明久「貴浩。僕、女装したくないんだけど……」

優子「そういえば貴浩はアニメとか好きだったわね・・・」

愛子「アニメとかは僕は見ないな」

椎名「ナ○トとハガ○ンの映画ですか?」

明久「あれ?椎名さん知ってるの?」

椎名「もちろんです!両方とも漫画も持ってますよ。それにハガ○ンの映画は見ましたよ」

貴浩「見たんだ。それって砂原さんと?」

砂原「いや一緒に映画に行ったけどユッキー1人でその映画は見たよ。

さすがの私もアニメは見ないからね」

椎名「駄目ですよアニメは素晴らしいですから！」

貴浩「そうだ椎名さん。ナ〇トの映画は見た？」

椎名「ナ〇トはまだ見てないです」

貴浩「良かったら一緒に見に行く？」

優・愛「「えっ！？」」

椎名「良いんですか？」

貴浩「良いよ。タダだしな」

椎名「ヤッホーです。最近グッズとか買って金欠で
映画はあきらめてたんですけど良かったです」

明久「そうだよねグッズとかゲームとかってお金かかるよね」

貴浩「そうなんだよな。俺もバイトしてないと買えないもんな」

椎名「では織村君。一緒に行っても良いですか？」

貴浩「もちろんだ」

明久「僕も自費で行っていいかな？映画見たかったんだよね」

貴浩「俺は良いけど椎名さんは？」

椎名「私もかまいませんよ。それにまさか近くにアニメ仲間がいるとは思いませんでしたし」

貴浩「俺もだよ。じゃあ今度の休日な」

椎名「はいです」

明久「了解」

俺たちがアニメの話をしている間

優子「アタシも見てみようかしら」

愛子「ボクも見てみようかな？貴浩君の趣味を知っておきたいし」

と2人が囁いていた事を俺は知らなかった。

プール編　～水中鬼～（後書き）

映画にはまさか椎名と行くことになりました。

プール編　～血に染まるプール～

貴浩「さて、これからどうする？」

明久「そうだね。少しお腹すいてきたし、何か食べない？」

雄二「じゃあ誰か何か買いに……」

姫路「あ、それなら……」

そこで姫路が、何かを思い出したかのようにポンっと手を打つ。
そして嬉しそうに、あるバスケットを取り出した。

雄二「っ！・・・・姫路、そのバスケットには何が入ってるんだ？」

姫路「実は、今朝作ったワッフルが４つほど」

優子「あら、おいしそうね」

愛子「うん、ボクも食べたいな」

なのは「美味しそうだね」

砂原「本当だねん」
と、何も知らないＡクラス４人は無邪気に喜ぶ。
だがしかし、その威力を知る者たちにとっては鬼門だった。
それからアイコンタクトを送って……

雄二「第１回っ！」

明久「最速王者決定戦っ！」

貴浩「ガチンコっ！」

刀麻「水泳対決っ！！」

秀・康「「イェーッ！！」」

雄二「明久、ルール説明だ」

明久「オッケー。ルールはとっても簡単、
ここのプールを往復して最初のゴールした人の勝ちという、
誰にでもわかる普通の水泳勝負だよ」

愛子「へぇ～、面白そうだね。それじゃ、ボクが判定してあげるよ。
優勝者は、ボクの保健体育“実践”講座って事で」

康太「・・・・・・・・・実践（ブシュー）！！」

ムッツリーニは鼻血を吹きだして倒れた。

もちろん敗者の４人は姫路の殺人ワッフルの餌食に

愛子「じゃあ、行くよ！」

１位と２位だけが殺人ワッフルを食べる事を逃れるという事になっている。

そこで、俺は考える。

ムッツリーニは出血で弱っており、秀吉に体力で負ける事はない。
おそらく雄二と明久も同じ考えだろう。なら2人は勝手につぶしあってくれる。
となると、残る脅威は……

愛子「よーい、スタートっ！」

貴・明・雄・刀「「くたばれぇぇっ！！！」」

愛子の合図と同時に、俺と明久と雄二と刀麻はとび蹴りを互いに放った。
俺は刀麻に明久は雄二に、雄二は明久に刀麻は俺に

雄・刀「「明久（貴浩）、テメエ卑怯な真似してくれるじゃねえか！　この恥知らずが！！」」

貴・明「「その言葉、そっくりそのまま返してやる！！」」

愛子「あのさ4人とも、取っ組み合いも良いけど、
　秀吉君、ムッツリーニ君はそろそろ折り返しだよ？」

ふと見てみると、秀吉、ムッツリーニの順ですでに折り返しが行われていた

雄二「そうは行くかっ！俺と刀麻はムッツリーニを止める、
　貴浩と明久は秀吉をやれ！！」

貴・明・刀「「「了解！」」」

4人はプールに飛び込み、雄二と刀麻はムッツリーニに、

俺と明久は秀吉を止めるべく立ちふさがる。

優子「……もはや水泳対決じゃないわね」

なのは「なんでこうなってるのかな？」

砂原「やっぱりター君やアッキーたちといると楽しくていいやぁ」

その様子を見ていた優子となのはは、呆れたようにそう言った。

砂原さんは笑っていたが

秀吉「な、何じゃ貴浩に明久！？　お主らは隣じゃろう！？」

明久「ダメだよ秀吉！　ここは通さない！」

貴浩「そうだ。お前も道連れにしてやる」

脇を抜けて先に進もうとする秀吉にしがみつく俺と明久。

水中だとうまく捕まえられず、難儀する。

秀吉「貴浩に明久、離すのじゃ！」

貴浩「お前も道連れじゃぁあ！」

明久「逃がすもんかぁぁあっ！！」

ズルッ！

明久「……？　なんだろう？」

明久その場に足をついて、手に残った物を確認し始める。

姫路「あ、明久君！　何をしているんですか！？」

明久「え？　……もしかしてこれって、秀吉の……？」

秀吉「んむ？　そう言えば胸元が涼しいのう」

ゆっくりと振り向いた先には、上に来ていた秀吉の水着が無くなっていた。
それもそのはず、その上の水着は明久の手にある。

康太「……死してなお、一片の悔いなし……！！」

上の水着が無くなった秀吉とムッツリーニを中心に朱に染まっていく水面

刀麻「うおっ！　大丈夫かムッツリーニ！？この出血量はマジでヤバくないか！？」

康太「……構わない。むしろ本望……！」

貴浩「おい、大丈夫かムッツリーニ！？気をしっかりもつんだ！」

なのは「わああっ！土屋君が大変な事に！？
　血がものすごい勢いで出ているんだけど！」

雄二「とっとにかく、俺は輸血パックを持ってくるから、
　明久は早く秀吉に水着を返してやれ！！」

明久「わ、わかったよ」

島田「き、木下っ！　早く胸を隠しなさい！　土屋の血が止まらないから！」

秀吉「いいいイヤじゃっ！　ワシは男なのじゃ！胸を隠す必要はないのじゃ！」

姫路「木下君、わがままを言っちゃダメです！　土屋君が死んじゃいます！」

優子「もう……最後の最後まで、どうしてこうなの」

楓「……ヒデ君」

翔子「……愛子。救急車の手配、頼める？」

愛子「わかったよ。すぐ連絡するよ」

砂原「さすがター君やムッツン達だね。一緒にいて飽きないよ♪」

葉月「バカなお兄ちゃん達、いつも楽しそうで羨ましいです」

結局、ムッツリーニは何度も峠を迎えながら、
皆と救急隊員の懸命な延命措置で命を取り留めた。

その週明けの朝

西村「……吉井、織村兄、坂本、ちょっと聞きたいことがある」

現れるなり朝の挨拶もせず、鉄人が3人を低い声で呼びとめた。

貴浩「だが断る」

明久「黙秘します」

雄二「言う事なんて何1つない」

3人はそれに対し、拒否の姿勢を取る。

すると、鉄人はプルプルと震え始めた。

西村「……どうして……どうして掃除を命じた筈なのにプールが血で汚れるんだ!?

鉄拳をくれてやるから、生活指導室で詳しい話を聞かせろ!!」

響くは、教室中を揺るがすような大音響。

それに対し、苦労した3人は心外と言わんばかりに抗議をする。

雄二「説教なんて冗談じゃねぇ!むしろ死人を出さなかったことを褒めてもらいたい位だ!」

貴浩「その扱いはあんまりだ!俺達は俺達で大変だったんだ!!」

明久「そうですよ!　本当に危ないところだったんですからね!」

西村「黙れ!お前達の日本語はさっぱりわからん!!」

雄二「この暴力教師め！逃げるぞ明久、貴浩！」

貴・明「「了解！」」

西村「貴様ら、今度は反省分とプール掃除では済まさんぞっ！！」

必死に逃げ出す３人。

愛子「あれ？またあの３人西村先生に追われてるよ」

優子「多分、あの事じゃない？まあ今回は事情を知ってるだけに同情するけどね」

翔子「……捕まった」

その様子を見るＡクラスの眼前では、鉄人に担がれ生活指導室へと連行される３人。
その後、殴りながら３人から事情を聴いた鉄人は一言。

西村「……今度の強化合宿の風呂は、木下を別にする必要がある様だな」

等と呟いた。

ちなみに映画には椎名さんと明久の３人で行きました。
見た映画はもちろんＮＡＲＵＴＯでした。
映画見た後は俺の家でモン○ン３ｒｄして遊びました。
モン○ン時は命も呼んで４人で狩りました。

プール編　～血に染まるプール～（後書き）

今回でプール編は終わりです

強化合宿編　～脅迫事件～（前書き）

今回から合宿編スタートです

強化合宿編　～脅迫事件～

～　ＳＩＤＥ　ＩＮ　雄二　～

雄二「翔子」

翔子「……隠し事なんてしていない」

雄二「まだ何も言っていないぞ？」

翔子「……誘導尋問は卑怯」

雄二「今度誘導尋問の意味を辞書で調べて来い。　んで、今背中に隠した物はなんだ？」

翔子「……別に何も」

雄二「翔子、手をつなごう」

翔子「うん」

雄二「よっと……ふむ、ＭＰ３プレーヤーか」

翔子「……雄二、酷い……」

雄二「機械オンチのお前がどうしてこんなものを……。何が入ってるんだ？」

翔子「……普通の音楽」

――ピッ　《優勝したら結婚しよう。愛している。翔子》

雄二「……」

翔子「……普通の音楽」

雄二「これは削除して明日返すからな」

翔子「……まだお父さんに聞かせてないのに酷い……。手もつないでくれないし……」

雄二「お父さんってキサマ――これをネタに俺を脅迫する気か？」

翔子「……そうじゃない。お父さんに聞かせて結婚の話を進めてもらうだけ」

雄二「翔子病院に行こう。　今ならまだ2、3発シバいてもらえば治るかもしれない」

翔子「……子供はまだできてないと思う」

雄二「行くのは精神科だ！――ん？ポケットにも何か隠してないか？」

翔子「……これは大したものじゃない」

雄二「え？、なになに！『私と雄二の子供の名前リスト』か……ちょっと待てやコラ」

翔子「……お勧めは、最後に書いてある私たちの名前を組み合わせたやつ」

雄二「『しょうこ』と『ゆうじ』で『しょうゆ』か……なぜそこを組み合わせるんだ」

翔子「……きっと味のある子に育つと思う」

雄二「俺には捻くれ者に育つ未来しか見えない」

翔子「……ちなみに、男の子だったら『こしょう』が良い」

雄二「『しょうゆ』って女の名前だったのか……」

～　ＳＩＤＥ　ＯＵＴ　雄二　～

次の日、めずらしく秀吉と2人でいつもより少し早い時間に登校していた。

貴浩「ん？今朝は早いな明久」

教室に足を踏み入れると、もう明久がいた

秀吉「おはよう貴浩。なんか早く目が覚めちゃってね」

秀吉「おはようじゃ。明日からの強化合宿で浮かれてるのじゃろ」

明久「あはは。そうかもしれないね」

俺は自分の席に鞄を下ろしながら明久と秀吉と話す

秀吉「学力強化が目的とは言え、また皆で泊まりがけなのじゃ。
楽しみになるのは仕方がないじゃろうな。
むろん、わしとて胸が躍っておるしの（楓に毎日会えるしのう）」

明久「やだなぁ。　胸が躍るって言うほど大きくないくせに」

秀吉「いや、わしの胸は大きくなっては困るのじゃが・・・・・・」

貴浩「明久、あまり秀吉をいじるなよ」

明久「わかってるよ。秀吉だって楓と付き合ってるもんね」

俺たちが荷物をロッカーに入れていると　カサ、と手の先に何かが触れる感触がした

貴浩「ん？何だ？」

とりだして見ると手紙らしきものが入っていた

≪織村貴浩様へ≫

宛て名の欄に俺の名前が書いてある

貴浩「っ！！」

ま、まさか・・・・・俺にラブレター？

明久も俺と同じような反応をしていた

秀吉「ん？どうしたのじゃ貴浩に明久？」

お、お、落ち着け、落ち着くんだ俺。
万が一俺がこんな手紙をもらっている事が発覚したら、
ここのクラスメイト達は嫉妬に狂って間違いなく俺を処刑しようとするだろう。
しかも最近は楓や木下姉妹、愛子と一緒に登校する事が多いから何かと
目につけられているし・・・・・ここはとにかく平静を装うんだ！

貴浩「ドウシタヒデヨシ？」

明久「Ｗｈａｔ'ｓ　ｕｐ,　Ｈｉｄｅｙｏｓｈｉ？　Ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ　ｇｏｅｓ　ｓｏ　ｗｅｌｌ」

秀吉「異常事態じゃな」

バカな！　一瞬でバレるとは！？

明久「さ、流石は秀吉・・・・・僕の完璧な演技を一瞬で見破るなんて・・・・・」

貴浩「さすが秀吉だな。楓の彼氏だけあるな」

秀吉「いや、演技以前に言語の問題なのじゃが・・・・・」

貴浩「と、とにかく大したことじゃないから、見なかった事にしてくれないか？」

俺と明久は秀吉の肩を軽く（・・）掴んでお願いする

秀吉「ふ、２人がそういうのであれば深くは問わんが・・・・・・」

秀吉は疑いの表情を浮かべるものの、この場は引いてくれた

さすが楓の彼氏だ。俺の目は間違ってなかったな。うん

明久「ありがとう助かるよ！　それじゃっ！」

貴浩「すまんな秀吉！じゃあな！」

俺達は見えないように手紙を懐にしまい、ダッシュで教室を後にした。

尾行の気配がないから、クラスの皆にはバレずにすんだと見て良さそうだ

貴浩「もしかすると、俺にもいよいよ春が・・・・・・！」

はやる気持ちを抑え、早足で階段を昇る

貴浩「よいしょっ――と」

屋上へと続く重い鉄扉を押し開くと、その向こうには澄み渡る青空が広がっていた。

なぜか明久もいたが今は気にしない。明久から少し距離を置くと

貴浩「これ、誰がくれたんだろうか？」

強い日差しから逃れるように涼しげな日陰に腰をおろし、懐から手紙を取り出した
差出人の名前は封筒には書かれていない。
一体どんな子が、どんな想いを込めて俺にこの手紙を送ってくれたのだろうか

ゆっくりと手紙の封に手をかける。
緊張しているせいか、中身を取り出すのに少しだけ手間取った

そして、手紙の内容を見ると――

≪あなたの秘密を握っています≫　↑明久

≪あなたの秘密を握り、天罰を下します≫　↑俺

俺たちを脅かす脅迫文だった

貴・明「「最悪じゃーーーーっっ！！」」

俺にとっての春は、まだまだ遠かった

秀吉「2人とも。一体何があったのじゃ？」

教室に戻った俺と明久を見て、秀吉が心配そうに声をかけてきた

明久「べ、別に何でもないよ。あははっ」

貴浩「そうだぞ、別に何でもない。ははははっ」

ラブレターだと思っていた手紙が実は脅迫状だったなんて、そんなの恥ずかしくて言えるか。
俺のプライドにかけて、ここは是が非でも隠し通しておきたいところだ

島田「ウソばっかり。さっき窓から妙な叫び声が聞こえてきたし、何か隠してるでしょ？」

明久「あ、美波。おはよう」

島田「おはようアキ。それで、何を隠しているのかしら？　まさか・・・・・」

島田の目がいつもより更に吊りあがる。攻撃態勢まであと一歩の状態だ

明久「やだなぁ美波。　本当に何も隠してなんか」

貴浩「そうだぞ島田。いきなり疑うのはよくないぞ」

島田「まさか、ラブレターをもらったなんて言わないわよね？」

明久「美波、言葉に気をつけるんだ。
　ラブレターという単語に反応して皆が僕に向かってカッターを構えている」

相変わらず恐ろしいクラスメイト達だ。
級友を刺殺するかのように構えるなんて普通じゃない。
俺は念のため光一から貰った仕込みトンファーを構えておく。

島田「で、アキ。何があったの？」

明久「じ、実は、今朝僕宛てに脅迫文が届いていたんだ」

貴浩「俺もだ」

島田「そうなの？大変じゃない・・・・・・」

秀吉「して、その脅迫状にはなんて書いてあったんのじゃ？」

怪訝に思っていると秀吉が声をかけてきた

明久「これには『あなたの傍にいる異性にこれ以上近づかないこと』って書いてあるんだ」

秀吉「ふむ。その文面から察するに、
手紙の主は明久の近くにおる異性に対してなんらかの強い気持ちを
抱いておるな。大方嫉妬じゃろうが」

貴浩「俺のは『あなたの傍にいる人、すべてにこれ以上近づかない事。
これを聞き入れてくれなければ天罰を下す』って書かれていた」

秀吉「それはなんじゃろうの？」

貴浩「だよな」

島田「それで何をネタに脅迫を受けてるの？」

明久「あ、そういえばまだ知らないや。えっと
　『この忠告を聞き入れない場合、同封されている写真を公表します』か。
　写真って、こっちの封筒に入っているやつかな？」

丁度写真が入るようなサイズの封筒が同封されていたので、その中身を改める。
そこに入っていたのは、３枚の写真だった
１枚目を手にとって確認する。写っていたのは――女性物の着物姿の僕

明久「こ、これは！？」

島田「アキ、可愛いわね／／／／／／（これ欲しいわ）」

明久「これって去年罰ゲームできた衣装だよね」

貴浩「そうだな。なんでその写真がここに？」

秀吉「で貴浩のには何が入っていたのじゃ？」

貴浩「えっと俺のには――」

明久と同じように写真が入っていた。
写っていたのは――清涼祭の時に来たセイバーのコスプレ姿の俺だった。

思わずため息が出てしまう。何なんだ、一体・・・・・・・
でも、こんなものが写されているのなら誰にも見えないようにした

方が良いだろう

そんなわけで、俺以外には見えないように隠しながら2枚目を見る。
2枚目に移っていたのは――涙目姿でいるコスプレした俺。
明久も俺と同じように2枚目を誰にも見せないように見ていたが

貴・明「「・・・・・・・・・・・・・」」

島田「アキ、織村？」

秀吉「どうしたのじゃ？」

貴・明「「・・・・・・・何これ、何これ、何これ、何これ、何これ・・・・・・」」

島田「あ、アキ、織村！？」

秀吉「自我が崩壊するほどのものが映っておったのか！？」

大丈夫！　これは偽造されたものだ！　強迫なんか怖くないさ！
気合を入れて3枚目。写っていたのは――コスプレを着替えている俺の姿

貴・明「「もういやぁぁぁっっ！」」

島田「何！？」

秀吉「一体何が写っておったのじゃ！？」

明久「見ないで！こんなに汚れた僕の写真を見ないでぇっ！」

貴浩「俺を見るなぁあああ！」

島田「よ、よく分からないけど落ち着きなさい！　皆が注目してるわよ！」

言われてみると周囲の視線が痛い。落ち着こう。今注目を集めるのはかなりまずい

貴浩「はぁ、はぁ、はぁ恐ろしい威力だった・・・・・・これは俺を死に追い詰めるための
　卑劣な計略と言っても過言じゃないな・・・・・・」

明久「そうだね・・・・・・」

島田「そんなに凄い写真だったの？」

秀吉「考えすぎではないかのう。着物姿くらい、人間一度は着るものじゃ」

イヤ、明久のは着物姿だが俺のはセイバーのコスプレだぞ。
これだけ見たらかなり痛い人じゃないか

姫路「明久君、木下君、美波ちゃん、織村君おはようございます」

後ろから姫路の声が聞こえてきた

明久「この声は――やっぱり姫路さんか。　おはよう」

島田「瑞希、おはよう」

織村「おはよう姫路」

秀吉「おはよう。　今朝は遅かったんじゃな」

姫路「はい。途中で忘れ物に気がついて一度家に帰ったので、ギリギリになっちゃいました」

秀吉「そうじゃ。先ほどの写真が騒ぐほどの物ではないと姫路に証明してもらうとしようかの。　姫路、少々良いか？」

姫路さんと島田を見て、秀吉が急にそんな事を言いだした

姫路「はい、何でしょうか？」

秀吉「うむ。姫路に質問なのじゃが、明久の女性物の着物姿の写真があったらどう思うかのう？」

正直、その切り込み方はどうかと思うが・・・

姫路「う～ん、そうですね・・・・・・」

姫路がここで嫌悪感を現すようなら、俺達の写真の公表は何としても避けないといけない。

最近下落気味な俺達の評価のためにも！！

姫路「もしそんな写真があったら――とりあえず、スキャナーを買います」

意気込む俺達をよそに、姫路さんの口から漏れた答えはちょっと変

わったものだった

明久「へ？スキャナー？何で？」

姫路「そうしないと、明久君の魅力を全世界にＷＥＢで発信できないじゃないですか」

島田「それはいい考えね」

秀吉「明久、落ち着くのじゃ！　飛び降りなんて早まった真似をするでない！」

貴浩「気持ちはわかるがまだ死ぬのは早すぎる！」

明久「放して２人共！僕はもう生きていける気がしないんだ！」

秀吉「そ、そうじゃ！ムッツリーニじゃ！
　ムッツリーニならばこの手の話には詳しいはずじゃ！事情を説明して――」

明久「ムッツリーニに笑われる？」

貴浩「全世界へＷＥＢ発信？」

秀吉「違う！事情を説明して脅迫犯を見つけ出してもらうのじゃ！」

明久「おおっ！　なるほど！」

そうか！まだ諦めるには早かった！
情報収集や盗撮のエキスパートとも呼ばれる

ムッツリーニなら脅迫犯を突き止められるかもしれない！
そうすればこの写真を取り戻すことだって・・・・・・
明久「ナイスアドバイスだよ秀吉！！」
貴浩「さすがは楓が選んだ彼氏なだけある」
早速相談しようとムッツリーニを探す。
すると、教室の隅で小さくなって誰かと話をしている奴の姿が見えた。
そこには光一の姿も見えた。
明久「それじゃ、僕たちはムッツリーニに話があるから！」
姫路と島田と秀吉に手をあげて教室の隅へと向かう
姫路「ところで、明久君の着物姿がどうとか・・・・・・」
島田「ちょっと、アキ」
秀吉「姫路と島田！　ワシと話でもせんかの！？」
後ろでは秀吉が姫路と島田を足止めしてくれていた。
明久「助けてムッツリーニ、光一！僕たちの名誉の危機なんだ！」
貴浩「そうなんだムッツリーニ、光一、俺達を助けてくれ！！」
ムッツリーニと光一のいる席に倒れこむように駆け寄る。

すると、僕の行く手を遮るように大きな身体が邪魔をしてきた

雄二「後にしろ。　今は俺が先約だ」

貴浩「あれ？雄二？」

目的地に先に陣取っていたのは雄二だった。
いつものツンツン頭が少し萎れているように見えるが何かあったんだろうか？

明久「ムッツリーニに光一何の話？」

康太「・・・・・・・・・・・・雄二の結婚が近いらしい」

明久「雄二と霧島さんの結婚？僕はてっきり婚前旅行もすんだから、もう子供ができた事にされているのかと」

貴浩「そうかもしれないな」

雄二「・・・・・・明久、貴浩。　笑えない冗談はよせ」

え？　何、笑えないの？

明久「僕達の方も大変だけど、一応雄二の方が先だからね。　雄二に何があったの？」

雄二「・・・・・・実は今朝、翔子がＭＰ３プレーヤーを隠し持っていたんだ」

貴浩「ＭＰ３プレーヤー？それくらい別に良いんじゃないのか？

雄二だって前に学校に持ってきてたし」

その後、鉄人に没収されてたけど

雄二「いや、アイツは結構な機械オンチだからな。
そんな物を持っていて、しかも学校に持ってくるなんて不自然なんだ」

霧島さんは光一と同じで機械オンチなのか。

雄二「そこで怪しく思って没収してみたんだが、
そこには捏造された俺のプロポーズが録音されていたんだ。
それに婚約の証拠として父親に聞かせるつもりのようだ」

明久「へぇ～、それは災難だったね」

雄二「ＭＰ３プレーヤーは没収したが、中身は恐らくコピーだろうし、
オリジナルを消さない事には・・・・・・」

貴浩「・・・・・・・・・・・・」

雄二「そんなわけで、ムッツリーニと光一にはその台詞を録音した犯人を
突き止めてもらいたい。さっきも言ったようにアイツは機械オンチだから、
きっと機械に長けた実行犯がいるはずなんだ」

光一「明久殿と貴浩殿は？」

と、光一とムッツリーニが俺達の方を向いてきた。
今度は俺達の事情を聞いてくれるみたいだ。
あまり長々と言いたい話でもないし、端的に説明しよう

明久「実は、僕の着物姿（女性物）とウェディングドレス姿の写真が全世界にＷＥＢ配信されそうなんだ」

光一「・・・・・・・・・・・・何があったのですか？」

貴浩「それはさすがにはしょりすぎだろ・・・・・・」

その疑問はもっともだ。

――――――――――――説明中――――――――――――

明久「そんなわけで、その写真を作った犯人を突き止めて欲しいんだ」

貴浩「俺も明久と同じだ」

雄二「何だ。２人も俺と同じような境遇か」

康太「・・・・・・・・・・・・脅迫の被害者同士」

光一「お２人にこんな事をするとは許さねぇ」

貴浩「こんな事で仲間ができてもな・・・・・・」

そうやってそれぞれの説明を終えたところで、

ガラガラと教室の扉が開く音が響いた。どうやら鉄人がやってきたみたいだ

西村「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。
ＨＲを始めるから席についてくれ」

そう告げる鉄人は手に大きな箱を抱えていた。
きっと今言っていた強化合宿のしおりが入っているのだろう

康太「・・・・・・・・・・・・とにかく、調べておく」

光一「俺の方でも調べておきます」

雄二「すまん。報酬に今度お前の気に入りそうな本を持ってくる」

明久「僕も最近、仕入れた秘蔵の写真を十枚持ってくるよ。光一には今度ご飯でも作るよ」

貴浩「俺もムッツリーニには秘蔵本を持ってくる。光一は何か飯でも作るさ」

康太「・・・・・・・・・・・・必ず調べ上げておく」

光一「必ず成し遂げます」

光一もムッツリーニも快く引き受けてくれたので、
鉄人に睨まれないうちに素早く席に戻る。

俺と明久と雄二は特に目をつけられているので、
こういった時くらいは目立たないようにしないと身体がもたない

西村「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、
だいたいのことは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので
確認しておくように。　まぁ旅行に行くわけではないので、
勉強道具と着替えさえ用意してあれば特に問題はないはずだが」

前の席から順番に冊子が回されてきた。

西村「集合の時間と場所だけはくれぐれも間違えないように」

鉄人のドスのきいた声が響き渡る。
確かに集合時間と場所を間違えたらシャレにならないな。
学力強化が目的とはいえ皆で泊まり込みのイベントに参加できないなんて寂し過ぎるしな

きちんとチャックしておくか。
パラパラと冊子を捲って集合時間と書かれている部分を探す

今回俺達が向かうのは卯月高原という少し洒落た避暑地で、
この街からは車だとだいたい４時間くらい、
電車とバスの乗り継ぎで行くから５時間くらいかかるところだ

西村「特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとでそれぞれ違うからな」

Aクラスはきっとリムジンバスとかで快適に向かうんだろう。
そうなると僕らはやっぱり狭い通常のバスだろうか。
もしかすると補助席や吊り革かもしれない

西村「いいか、他のクラスと違って我々Fクラスは現地集合――」

F『『『『案内すらないのかよっ！？』』』』

あまりの扱いに全級友が涙した

強化合宿編　～移動中での出来事～

電車に乗ってから大体2時間くらいで見慣れない景色になってきた。

光一「あと2時間くらいだそうです」

光一があとどれくらいで目的地につくかを教えてくれる。

本来なら光一がバスを手配してくれるはずだったんだが
急に不具合が発生し、俺達は急遽電車とバスを使って合宿所へと向かっている。
ただそのおかげで1本遅い電車に乗る事になり到着時間がかなり遅れることになった。
その件はすでに担任である鉄人こと西村先生に伝えたのでなんの問題もない。

貴浩「2時間か。眠くもないし、何をするかな」

いつもならP○Pとかのゲーム機を持ってきてるが今回は持ってきていない。
持って来たら確実に鉄人に没収されるからな。
でもトランプは持ってきている。

光一「すみません。こちらの不手際でこんな事になってしまいまして」

明久「気にしないでよ。これはこれで記念になるからね。帰りはよろしく頼むね」

光一「はい、任せてください。帰りはリムジンバスを頼みましたので」

雄二「本当に凄いな。光一は」

ちなみに今電車のの席は

命　明久　通　俺　光一
　　路
姫路　島田　　秀吉　楓
康太　雄二

という風になっている。

明久「あれ美波？何読んでいるの？」

島田が何かの本を読んでいることに気が付いた明久が島田に声をかける。

島田「ん、これ？これは心理テストの本。
　１００円均一で売ってたから買ってみたんだけど、意外と面白いの」

明久「へぇ～面白そうだね。美波、僕にその問題出してよ」

貴浩「あ、俺もいいか」

島田「うん。いいわよ」

島田はそう答え、適当にページを捲る。

島田「それじゃいくわよ。『次の色でイメージする異性を挙げて下さい。緑　オレンジ　青』
　それぞれ似合うと思う人の名前を言ってもらえる？」

明久「えっとって美波。そんな怖い顔で睨み付けられてると答えにくいんだけど」

島田「べ、別にそんなわけじゃ……！　いいから早く答えなさい！」

明久「……順番に『緑→美波　オレンジ→姫路さん　青→命　』って感じかな」

貴浩「俺は『緑→砂原さんと椎名さん　オレンジ→命と楓　青→優子と愛子かな』

ビリィッ！

島田の手元から凄い音がしました。

明久「み、美波……？どうしたの？」

島田「どうしてウチが緑で命が青なのか、説明してもらえる？」

明久「ど、どうしてと仰られましても……」

島田はなんか知らないけど凄く怒ってるな。

島田「怒らないから正直に言ってみて？」

明久「前に下着がライトグリーンだったから」

島田「瑞希、窓開けて」

明久「捨てる気!?　僕を窓から捨てる気!?」

雄二「島田。窓からゴミを捨てるな」

明久「雄二。美波を止めてくれてありがとう。でも、今サラッと僕をゴミ扱いしたよね？」

島田「いいのよ。ゴミじゃなくてクズだから」

明久「どうしよう。僕、ここまで酷い扱いを受けるのは久しぶりだよ」

雄二「クズはきちんてクズカゴに入れるべきだ」

明久「そして雄二もクズを否定しないんだね……」

命「2人とも流石に言い過ぎですよ。明久君が可哀想です」

明久「ああ！僕のことを心配してくれるのは命だけだよ！」

命「あ、明久君。顔が近いです／／／／」

そして突然、雄二が島田から本を奪い

雄二「どれどれ？緑は『友達』、オレンジは『元気の源』、青はーなるほどなぁ」

それを見てにやつく雄二

島田「か、返しなさいよ！」

島田が雄二から本を奪い返す。

楓「私は兄さんの元気の源なんですね」

貴浩「当たり前だろ！！」

命「私もなんですね」

貴浩「それは命を見てたら面白いからな」

命「それってどういうことですか！？」

貴浩「さあ？」

秀吉「それでは青はなんなのじゃ？」

島田「絶対に教えない・・・・・第2問目行くわよ。
『一から十の数字で、今あなたが思い浮かべた数字を順番に二つ挙げて下さい』だって。　どう？」

雄二「俺は5・6だな」

貴浩「俺は7・8だな」

秀吉「ワシは2・7じゃな」

明久「僕は1・4かな」

楓「私は3・8ですね」

命「私は2・9です」

姫路「私は3・9です」

それぞれの答えを聞いた後、島田はゆっくりとページを捲くった

島田「『最初に思い浮かべた数字はいつもまわりに
見せているあなたの顔を表します』だって。それぞれ――」

島田が順番に指を差しながら

雄二→「クールでシニカル」

貴浩→「冷静な常識人」

秀吉→「落ち着いた常識人」

僕→「死になさい」

楓→「温厚で慎重」

命→「落ち着いた常識人」

姫路→「温厚で慎重」

と、告げた

雄二「ふむ。　なるほどな」

秀吉「常識人とは嬉しいのう」

貴浩「俺もだな」

命「私もですね」

姫路「温厚で慎重ですか～」

楓「私は温厚で慎重なんですね」

明久「何で僕だけ罵倒されてるのさ！？」

口々に感想を述べている俺達

島田「それで、『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない本当の顔』
　だって。　それぞれ――」

さっきと同じように島田が順番に指を差して

雄二→「公平で優しい人」

貴浩→「努力家」

秀吉→「色香の強い人」

僕↓「惨たらしく死になさい」
楓↓「努力家」
命↓「意志の強い人」
姫路さん↓「意志の強い人」

雄二「秀吉は色っぽいのか」

貴浩「命と姫路は意志が強いそうだな」

明久「ねぇ、僕の罵倒エスカレートしてなかった？」

秀吉「楓と貴浩は努力家なんじゃな」

楓「坂本君は公平で優しいんですね」

そんな感じでその後も何問か心理テストをやっていると、

康太「……（トントン）」

明久「あ、ムッツリーニ。おはよう」

秀吉「目が覚めたようじゃな」

康太「……空腹で起きた」

貴浩「あれ？もうそんな時間？」

ムッツリーニに言われて携帯電話で時間を確認する。
時刻は１時４０分。　いつの間にかお昼過ぎになっていたようだ。

秀吉「確かに良い頃合じゃの。そろそろ昼にせんか？」

楓「そうですね。あまり遅くなると夕飯が入らなくなりますしね」

命「そうですね」

姫路「あ、お昼ですね。それなら――」

そういいながら姫路が傍らに置いてある鞄から何かを取り出そうとする。

姫路「――実は、お弁当を作ってきたんです。良かったら……」

雄二「姫路。悪いが俺も自分で作ってきたんだ」

康太「……調達済み」

貴浩「俺も自分で作ってきたんだ」

明久「僕も今日は作ってきたんだ。光一の分も含めてね」

光一「明久殿、かたじけない」

秀吉「すまぬ。ワシは楓に作ってもらっておるからの」

楓「はい。私は秀吉君の分も作ってきたので」

明久「楓は本当にいい彼女だよね。秀吉が羨ましいよ」

楓「ありがとうございます明久君」

姫路「そうなんですか」

島田「なら皆で弁当をわけない？」

島田の一言で俺達は震える。光一は何のことだがわからず首をかしげている。
俺は瞬時に俺の旅行バックからトランプを取り出すと明久たちと目をあわせる

雄二「第1回っ！」

明久「ガチンコっ！」

貴浩「トランプ大富豪対決っ！」

秀・康「「イェーッ！！」」

雄二「明久、ルール説明だ」

明久「オッケー。ルールはとっても簡単、
貴浩が持ってきているトランプで大富豪をするだけだよ。
もちろん8切り、11バックはありだよ」

これは男子強制参加のゲームであり、暗黙の了解で大貧民と貧民の2人が責任を持って

姫路の料理を食べなければならないというものだ。

勝負の結果・・・・・・大富豪は光一、富豪は俺、平民は雄二と秀吉
そして貧民はムッツリーニ、大貧民が明久となった。

姫路の料理を食べた2人はもちろん逝った。
明久は光一と席を変わり寝ているということにしている。

その後電車から降りた俺達は時間にあうバスがなかったので
女子達を先にタクシーで行かせて、俺達は遅れてバスに乗っていった。
気絶中の2人と共に

合宿所についた俺達は
雄二たちに明久たちの蘇生を任せ、俺は鉄人の元へ遅れた事を報告にしいった。

貴浩「すみません、鉄村先生。到着時刻が遅れてしまって」

西村「その事なら羽鳥と織村妹から連絡はあったから良いが、
今、鉄人と西村を混ぜて呼んだだろ」

貴浩「いえ、気のせいですよ」

西村「それならいいが」

貴浩「で、1つ疑問なんですが？　何でFクラスメンバーがここにいるんですか？」

西村「お前らが来るまで悪さをしないようここで監視をしていただけだ」

貴浩「それは大変ですね」

西村「お前らのおかげでな」

貴浩「なら自分は部屋に戻りますね」

西村「この合宿ぐらい大人しくしろよ」

貴浩「善処します」

俺はそういって

貴浩「さて、そうだ脅迫の件で砂原さんや刀麻にも協力してもらうか」

俺は携帯を取り出し2人にあとで部屋に来るようメールして部屋へと戻っていった。

強化合宿編　～移動中での出来事～（後書き）

少し本編と変えてみました。
次回もお楽しみに！

次回の更新は今日の２２時ぐらいを目標にしています

強化合宿編　～覗き事件！？～

～　ＳＩＤＥ　ＩＮ　明久　～

雄二「明久、起きたか！良かった……電気ショックが効いた様だな」

光一「これで一安心だな……」

光一と雄二は心底安心しきった顔で、ＡＥＤをしまい始める。

明久「所で雄二、ここは合宿所？」

雄二「ああ、そうだ。全く贅沢な学校だよな。
　この旅館、文月学園が買い取って合宿所に作り変えたらしいぞ」

８人位寝れそうな広い部屋だが、
この部屋にはいつものメンバー６人なのでより気楽に使える。

秀吉「明久、無事じゃったか！よかった
　……お主がうわごとで前世の罪を懺悔意思始めた時には、正直もうダメじゃと……」

雄二「あれは確かに焦った」

秀吉が胸をなでおろし、雄二がそれに同意を示す。

明久「あれ貴浩は？」

光一「貴浩殿は、西村先生の元にいっています」

明久「鉄人のところに？」

雄二「まあな。俺達は予定よりかなり遅れてやってきたからな。その報告だ」

明久「そうなんだ。でムッツリーニはどこに言ったの？　覗き？　盗撮？」

秀吉「友人に対してそんなセリフがサラッと出て来るのはどうかと思うのじゃが……」

ちなみにムッツリーニは明久より姫路の殺人料理を食べた量が少なかったので明久より早く目を覚ました。

ガチャッ！

康太「……ただいま」

そこへ、ムッツリーニが戻ってきた。

康太「……情報が手に入った」

光一「そうか。すみませんが自分のほうでは何にも」

明久「そうなの。気にしないで光一」

雄二「それでムッツリーニ、お前も随分早いな」

康太「……昨日、犯人が使ったと思われる道具の痕跡を見つけた」

雄二「へぇっ、流石だな。それで、犯人はわかったのか？」

康太「……（フルフル）」

雄二が尋ねると、ムッツリーニは申し訳なさそうに首を振った。

康太「……すまない」

雄二「気にするな。協力してくれるだけでも感謝している」

康太「……“犯人は女生徒で、お尻に火傷の痕がある”という事しかわからなかった」

雄・光「「お前は一体何を調べたんだ」」

雄二と光一が、ほぼ同時に突っ込みを入れた。

康太「……校内に網を張った」

雄二「網？　盗聴器でも仕掛けたのか？」

康太「……（コク）」

それから、ムッツリーニが用意した小型録音機が取り出され、

そこに収められた会話が流れ始める。

＜……らっしゃい＞

＜雄二のプロポーズを、もう1つお願い＞

＜毎度。2度目だから安くするよ＞

＜……値段はどうでも良いから、早く＞

＜流石はお嬢様、太っ腹だね。それじゃ明日……と言いたいところだけど、

　明日からは強化合宿だから、引き渡しは来週の月曜で＞

＜……わかった。我慢する＞

秀吉「片方は、霧島で間違いないじゃろうな」

明久「だよね。雄二のプロポーズを欲しがる上にお嬢様と来て、

　この独特の話し方とくればね」

雄二「もう動いていたのかって事も驚きだが、強化合宿があって助かった……」

光一「けど、タイムリミットが伸びただけだ。で、さっきの犯人のヒントは？」

ムッツリーニが機械を操作し、続いて録音機から声が。

＜相変わらずすごい写真ですね。こんな写真を撮っているのがバレたら、

　酷い目に遭うんじゃないですか？＞

＜ここだけの話、前に一度母親にバレてね＞

＜大丈夫だったんですか？＞

＜文字通り尻にお灸を据えられたよ。全く、いつの時代の罰なんだ

か＞

＜それはまた……＞

＜おかげで未だに火傷の痕が残ってるよ。乙女に対してひどいと思わないかい？＞

雄二「成程ね、それで尻に火傷のあとか」

康太「……わかったのはこれだけ」

確かに、特定できる情報である事は間違いない。……だが。

雄二「でも、有力でもないぞ？場所が場所だけに確かめようとしたら間違いなく犯罪だ」

明久「だよね。スカートを捲くってまわったとそしても、わからない可能性があるし」

康太「・・・・・・・・・赤外線カメラでも火傷の痕なんて映らない」

秀吉「事情を知っておっても、とんでもない会話じゃのう」

最もである。

光一「……夜中に俺とムッツリーニで忍び込むか？気配を消す術なら自信があるが」

康太「……任せておけ」

と言って、ムッツリーニはある物を取り出した。

雄二「……何だこれは？」

康太「……証拠を抑える為のカメラと、闇の中で近付く為の服。光一の分も用意してある」

光一「遠慮する！」

明久「……僕が警官だったら、迷わず逮捕してるね」

雄二「……言い逃れは出来ないな」

秀吉「……そうじゃの」

と、皆の意見で却下となった。ムッツリーニは、多少ショックを受けている。

明久「そうだ！　もうすぐお風呂の時間だし、秀吉に見てきてもらえば良いじゃないか」

秀吉「明久。何故にワシが女子風呂に入ることが前提になっておるのじゃ？」

雄二「それは無理だ明久」

雄二がしおりを放り投げ、明久に寄越した。

明久「どうして無理なのさ？」

雄二「見てみろ」

～　合宿所での入浴について　～

・男子ＡＢＣクラス…２０：００～２１：００　大浴場（男）
・男子ＤＥＦクラス…２１：００～２２：００　大浴場（男）
・女子ＡＢＣクラス…２０：００～２１：００　大浴場（女）
・女子ＤＥＦクラス…２１：００～２２：００　大浴場（女）
・Ｆクラス木下秀吉…２２：００～２３：００　大浴場（男）
※ただし木下秀吉が認めた男子なら一緒に入る事を許可する

明久「……コレじゃ秀吉に見て来て貰う事は出来ないね」

雄二「そう言う事だ」

秀吉「どうしてワシだけが扱いが違うのじゃ！？」

雄二「あー……そう言えば前、
　鉄人が強化合宿で秀吉は風呂をどうとか言ってたっけ？」

ふと、プール騒動で指導された時、そう言う事を言っていた事を思い出した雄二。

雄二「でも秀吉の許可があれば一緒に入る事ができるみたいだな」

秀吉「……」

光一「楓殿や命、それに姫路と島田に事情を話して探してもらえば良い気がするが」

明・雄「「そうか、その手があった！」」

秀吉「何故ワシより先に思い浮かばんのじゃ！？」

ドバン！

小山「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」

すごい勢いで部屋の扉があけ放たれ、女子がぞろぞろと入って来た。

秀吉「な、何事じゃ！？」

島田「木下と羽鳥はこっちへ！そっちのバカ3人は抵抗をやめなさい！」

中林「逃げられると思わないことね！　外ももう包囲はしてあるわ！」

先頭に立つ美波と確かEクラス代表が、
とっさに窓から脱出しようとした僕達の機先を制した。

秀吉「何故お主らは咄嗟の行動で窓に向かえるのじゃ……？」

光一「それで、一体何の様だ？こんな時間にいきなり」

雄二「全くだ。仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ？」

小山「よくもまぁ、そんなシラが切れるものね。
貴方達が犯人だってことくらい、すぐわかるというのに」

そこへ出て来て高圧的に言い放ったのは、確かCクラスの代表だ。
その後ろでは、大勢の女子たちも腕を組んでうんうんと頷いている。

明久「確か、Cクラス代表の小山さんだっけ？どうしたの？」

雄二「それより犯人って何の事だ？俺達は今さっきここに到着してからずっと部屋にいたが」

小山「そんな嘘が通用するとでも思ってるの！？　コレの事よ！」

小山が僕らの前に何かを突き付けて来た。

明久「……何これ？」

康太「……ＣＣＤカメラと小型集音マイク」

ムッツリーニが答えた。

島田「女子風呂の脱衣所に設置されていたの」

ふむふむ。　コレが女子風呂の脱衣所に――

明久「え！？　それって盗撮じゃないか！　一体誰がそんなことを」

小山「とぼけないで。あなたたち以外に誰がこんなことをするっていうの？」

この台詞を聞いて、秀吉が小山さんの前に歩み出た

秀吉「違う！ワシらはそんな事をしておらん！覗きや盗撮なんてそ

んな真似は――」

明久「そうだよ！　僕らはそんな事はしないよ！」

康太「・・・・・・・・・・・・・！！（コクコク）」

秀吉の反論に合わせて前に出た僕とムッツリーニを冷ややかに見る小山さん

小山「そんな真似は？」

秀吉「・・・・・・否定・・・・・・できん・・・・・・っ！」

明久「ええっ！？　信頼足りなくない！？」

僕とムッツリーニが同じ扱いだという事実に少しだけ涙が出た

康太「・・・・・・・・・・俺達はそんな事やっていない。
それにそんなショボイ物は使わない」

光一「おい康太、それじゃ逆効果だぞ」

姫路「まさか、本当に明久君達がこんなことをしていたなんて・・・・・」

殺気立つ女子の中から1人悲しそうな声をあげたのは姫路さんだった。
そうやって言われると信頼を裏切ったみたいで辛い。
でも、本当に身に覚えがないんだ！

島田「アキ・・・・・・信じていたのに、どうしてこんな事を・・・・・」

明久「美波。信じていたなら拷問器具は用意してこないよね？」

ちなみに彼女から信頼のかけらも感じられない

明久「姫路さん、違うんだ！　本当に僕らは――」

姫路「もう怒りました！よりにもよってお夕飯を欲張って食べちゃった時に
　覗きをしようなんて！い、いつもはもう少しそのスリムなんですからねっ！？」

島田「う、ウチだっていつもはもう少し胸が大きいんだからね！？」

明久「それはウソ」

雄二「し、翔子、俺を信じてくれ！俺はやっていない！」

霧島「・・・・・・本当？」

雄二「ああ、本当だ！！」

霧島「・・・・・・わかった。なら雄二を信じる」

中林「なっ、霧島さん！？どういうことよ」

霧島「・・・・・・織村が言ってた雄二が好きなら雄二の事を信じろって。

だから私は雄二のことを信じるだけ」

雄二「・・・・・翔子」

命「私も明久君のことを信じてます。だから美波ちゃんも瑞希ちゃんやめてください」

楓「そうですよ。翔子ちゃんと命ちゃんの言うとおりですよ」

中林「こいつたち以外に誰がこんなことをするっていうの？」

島田「そうよ」

姫路「土屋君もいますから否定できません」

小山「皆、やっておしまい」

素早い動きで周りを取り囲まれ、僕ら3人は石畳の上に座らされた。
これは大ピンチだ！
光一も秀吉も女子に抑えられているし雄二とムッツリーニは拷問を受けてる最中だし

島田「さて。　真実を認めるまでたっぷりと可愛がってあげるからね？」

美波のS気質が全開だ。　これはご機嫌を撮っておかないと命かかわる！

明久「あのね。　僕、今まで美波ほどの巨乳が見たことがぎゃぁあああああっ！」

島田「まずは1枚目ね」

褒めたのに！　頑張って褒めたのに重石が僕の膝の上にっ！

姫路「明久君。　まさか、美波ちゃんの胸、見たんですか・・・・・？」

明久「あははっ。やだなぁ。優しい姫路さんは
　そんな重そうな物を僕の上に載せたりなんてしないよね」

ドスッ

明久「ぎゃあぁあああ！！痛い痛い」

その後もしばらく美波と姫路さんたちからオシオキをうけていた

明久「うぅ、僕やっていないのに・・・・・」

やばい、意識が薄れてきたよ。
ムッツリーニはすでにボロボロの状態で倒れているし、
雄二も僕と同じでもう限界だ。

すると

ドカッ！！！

部屋の扉の方から何かが壊れるような音がした。
そちらも見てみると全身から何か物凄い量の黒いオーラをだしている貴浩が
壁を殴りつけて立っているのが見えた。
そして僕は意識から手を離した。

強化合宿編　～貴浩激怒～

俺は部屋に戻ると目を疑った。
最初は部屋の前に女子がたくさんいたので驚いたが、
その雰囲気が嫌悪の雰囲気なので女子をかき分けて部屋に入ると
明久と雄二、ムッツリーニがボロボロの状態で倒れている姿が目に
入った。

ドカッ！！！！

俺は思い切り左腕で部屋の壁を殴りつける。

強く叩き過ぎて壁にヒビが入った。

すると皆俺に気づいた様で俺のほうを見て何人かが後ずさった。

貴浩「・・・・・・・・おい、これはどういうことだ？
・・・・・・・・何で明久たちがボロボロの状態になっているんだ？」

俺は殺気をこめて質問する

小山「り、理由は簡単よ。こいつらがコレを使って覗こうとしたからよ」

小山がそういうとＣＣＤカメラと小型集音マイクを取り出して俺に見せ付けた

貴浩「コレは？」

中林「コレが女子のお風呂の脱衣所に隠されていたのよ」

島田「そうよ。だからそんなことするのは土屋しかいないでしょ」

貴浩「それが絶対康太のだという証拠でもあるのか？
　まさかソレが見つかっただけでこんな事しているわけじゃないよな」

俺は殺気を込めて再び質問するが、そこへ

砂原「さぁター君来てやったｙ――え？」

優子「どうしたの？え？何これ？」

愛子「コレどうしたの？」

そこへ先ほどメールを送った優子と愛子、砂原さんと刀麻がやってきた。
さすがの砂原さんもこの雰囲気を感じかしこまった

貴浩「で、どうなんだ！！」

小山「え、い、いえ、そうではないけど。
　で、でも同じクラスの島田さんがそう発言してるのよ」

貴浩「つまりは確信はないがソレが見つかったから
　それが康太のぽいからボコボコにしたってことか・・・・」

バキッ！！

俺は再び壁を殴りつける。
その衝撃で壁に穴があく。その拍子に俺の手から血が流れる。

貴浩「ふざけんなよっ！！！！　確証が無ぇのにやってんじゃねぇよ！！！！
それにそんな安物、買おうと思えば誰にも買える！！
俺だって持ってるし、そこにいる砂原さんだって持ってるよ。だろ砂原さん」

砂原「う、うん。私も持ってるよ」

貴浩「だそうだ。なるべく女子には手を出したくなかったが、
まだこれ以上やるというなら覚悟しろよ！！！俺も本気でやらせてもらう」

俺は光一からもらったさっき以上に殺気を出しながらトンファーをとりだす。

女子『ひっ！？』

貴浩「確かにFクラスということだけ疑うのは仕方が無いがな・・・・
だがここまでやるのはおかしいだろうが！！
それにな俺達はついさっきここに到着したんだ！！
それは鉄人に聞けば教えてくれるさ！！！
そして他のFクラスのヤツラも今まで鉄人に監視されてたからそんな事できねえよ！！」

光一「た、貴浩殿落ち着いてください」

楓「に、兄さん落ち着いて」

秀吉「た、貴浩。落ち着くのじゃ」

刀麻「さすがに手を出すのはマズイって」

光一と秀吉、刀麻が俺の手足を掴んで押さえつける。

翔子「・・・・・・鈴歌。先生呼んできて」

砂原「わ、わかった」

貴浩「で、島田!!姫路!!」

島・姫「「は、はいっ」」

貴浩「お前らは俺達が遅れてきている事知ってるはずだろうが!!!
それを何だ!!お前らが率先して明久たちに手を出してんじゃねぇよ!!
明久を信じてないのか!!」

俺がそういうと今さら気づいたように2人は下を向く。

貴浩「・・・・・そうか、普段は照れ隠しで明久をボコボコにしてるんだと思ったが
・・・・・・・・俺の勘違いだったようだな」

島・姫「「えっ？」」

貴浩「お前らは明久を殺したいほど憎かったんだな。
だから信じていないんだな！それなら納得だな。なら俺は命の応援に専念できる。
今まではお前らが明久に好意を寄せているんだと思い、少し遠慮してたが、もう遠慮はしねぇ！！」

姫路「ど、どうしてそうなるんですか！？」

島田「そ、そうよ。ウチ達はアキの監視をしてるだけよ」

貴浩「今のお前らを見てそうしか思えねえよ！！！
明久はお前らの何だ！！所有物か？違うだろうが！！
何が監視だ！！明久が何しようとお前らには関係ねぇだろうが！！！
前から思っていたが、今はっきり言わせて貰うけどお前らかなりウザい！！
今後俺や明久に近づくな！！目障りだ！！！」

西村「これはどういうことだ」

そこへ砂原さんが鉄人を連れて戻ってきた。

貴浩「光一、刀麻。悪い、鉄人に話しておいてくれないか。
命、楓、秀吉、悪いけど明久たちを頼む」

光一「貴浩殿は？」

貴浩「気分が悪い。外で風に当たってくる。
で、そこの女子は今回が初めてだからこれ以上は言わないが
明久たちには謝っておけよ。それで今回は許すが、
島田と姫路は知らん。勝手にしろ！！
俺はお前らを今は許す気がしない！！」

俺はそういうと部屋から出て行った。

強化合宿編　～貴浩激怒～（後書き）

貴浩がブチギレました。

で全然話がかわるのですが、
今までは毎日更新するよう頑張ってきたのですが
先週からある場所で正式に働く事になって頑張ってきたのですが
毎日更新するのがきつくなってきたので
誠に勝手ながら更新速度を少し落としていきたいと思います。
更新は『バカと俺たちの召喚獣』と『バカとマジ恋と召喚獣』を
一日毎交代で更新したいと思います。
今日までは一応両方更新しますが明日からは更新速度を変えていきます。
明日は『バカとマジ恋と召喚獣』を
明後日は『バカと俺たちの召喚獣』を更新したいと思います。

本当に作者の都合で変更した事はすみませんでした。

これからも応援よろしくお願いします

強化合宿編　～貴浩激怒後～

俺は1人芝に寝転がり風に当たっていると

優子「こんなところにいたのね」

愛子「やっと見つけたよ」

優子と愛子がこっちに駆け寄ってきた

貴浩「・・・・・どうした2人共」

優子「どうした、じゃないわよ。
部屋に行ったらあんななことになってるじゃない」

愛子「だから貴浩君が心配になって探してたんだよ」

貴浩「そうだったな。悪かったな」

優子「それにあなた左手怪我してるんでしょ」

貴浩「ん？本当だな。今まで気づかなかったな」

優子にそういわれ左手を見てみると血が流れ出ていた事に気づいた。

優子「じゃあ左手出しなさい。治療してあげるから」

優子は治療箱を取り出して治療を始める

貴浩「悪いな2人とも」

優子「いいえ、どういたしまして」

愛子「じゃあ僕は」

愛子はそういうと俺のほうに近づいてきて
俺の頭をあげると愛子は膝枕してくれた

貴浩「ん？な、何してんだ愛子！？／／／／／」

愛子「優子が貴浩君の手を治療してるからね。
僕は膝枕してるだけだよ」

貴浩「や、やめてくれ！はずかしい／／／／」

愛子「ダメだよ。優子が治療が終わるまでだね」

貴浩「……マジかよ…かなり恥ずかしいんだが…」

愛子「そういえば僕達を呼んでたけどどうしたの？」

貴浩「・・・・・話逸らしたな・・・・・まあそれは後で言うよ。
明久たちもそろそろ目を覚ますだろうから皆の前で言うさ」

愛子「そうなんだ。じゃあ部屋に戻ろう」

貴浩「そうだな、このままじゃ2人が風引いてしまうかもしれないな」

優子「アタシたちの心配もしてくれるのね」

貴浩「ん?当たり前だろ」

愛子「楓だけかと思ったよ」

優子「アタシもそう思ったわ」

貴浩「2人は大事な人（友達）だからな」

優・愛「「大事／／／／」」

そこで俺達3人は部屋へと戻った。
その途中優子と愛子の2人が嬉しそうな顔をしていたけど何故だったんだろう?

強化合宿編　～俺達の作戦～

明久や雄二たちが意識を取り戻したので、
優子や愛子、霧島さんたちもいるので話をする事にした。

話とは俺と明久の脅迫の件である。
雄二の件は何とか霧島さんを説得させた

優子「そう、そんな事があったのね」

貴浩「そうなんだ。今、ムッツリーニと光一にお願いして探ってもらってるんだが
　　手が足りないから砂原さんにも手伝ってもらおうかなと思ってな」

砂原「そういうことなら了解だよ！私に任せなさい」

秀吉「しかし、アレは本当に酷い濡れ衣じゃったのう
　……何故だかワシは被害者扱いじゃったのも解せぬが」

楓「ヒデ君、気にしないでください」

明久「ホント、酷い誤解だったよ」

康太「……見つかるようなヘマはしないのに」

刀麻「ムッツリーニその返事は危ないぞ」

光一「ん？雄二に貴浩殿、どうしたんだ？さっきから黙ってるが？」

光一が話しかけると、決意したかのように立ち上がる雄二。

雄二「……上等じゃねえか」

明久「え？　雄二？」

貴浩「だな」

突然雄二は、怒りを目に宿し怒鳴るように言い放つ。

貴浩も雄二に同調する

秀吉「どうするつもりじゃ」

雄二「真犯人を捕まえてやる」

貴浩「さすがにやられたままじゃな」

命「でもどうやるんですか？」

貴浩「今回の件だが光一どう思う？」

光一「……俺の考えじゃまだ女子風呂の更衣室に隠しカメラが隠されているはずだ」

女子一同『えっ！？』

雄二「やはりそうか」

貴浩「なら女子にはもう1つの隠しカメラを探しだしてもらうか」

雄二「俺達は女子風呂へと向かう」

明久「な、何言ってるの雄二！？」

雄二の一言に皆が驚愕する

雄二「まあ落ち着け。おそらく犯人は今回の事で逆上して俺達が女子風呂を
　覗くはずと考えているはずだ。ならそれを逆手に取る」

なのは「どうするの？」

雄二「まず、今から俺達がで女子風呂へと突撃する真似をする。
　実際はおそらく教師が見張ってるだろうからそこで進撃を停止し戦闘を行う。
　そうしたら明日にはこの噂を犯人が聞くだろう」

明久「それで？」

雄二「そこでおそらく向こうからもう1度覗きをしないかの誘いが来るだろうから
　それに乗りそこで光一、ムッツリーニ、砂原たちに犯人を突き止めてもらう」

明久「でもそれで犯人達がでてくるかな？」

光一「おそらく出てくるでしょう。犯人は俺達に罪を着せて
　自分達に非がでないようにしているし、犯人たちは覗くのが目的でしょうから」

貴浩「でもこのままだと俺達も危なくないか？」

雄二「それは先に翔子や木下姉たちに鉄人に話をしておいてもらう。
それと各クラスの女子の代表達にも話を通しておけば俺達の保身は無事だろう。
そして犯人は必ず姿を現す。そこで俺達は犯人が現れたら反旗を翻す。
先に教師に説明しているからそこは大丈夫だろう」

明久「でも女子には反感を買うんじゃない」

貴浩「それは事前に女子には話しておけばいい」

雄二「そういう事だ。なら行くぞ」

明久「了解」

貴浩「じゃあムッツリーニと光一、砂原さんは情報収集頼むな」

康太「・・・・・・・・・任せろ」

光一「任せてください」

砂原「了解だね」

貴浩「じゃあ霧島さん、優子、愛子、なのは、椎名さん、鉄人によろしくね」

優・愛・椎・な「「「「任せて（よ）」」」」

貴浩「あっそうだ。楓、命。このことは絶対姫路と島田に話すなよ」

楓「え？話さないの？」

貴浩「ああ、少し考えがあるからな」

命「うん、わかったよ」

楓「兄さんがそう言うなら」

明久「じゃあ貴浩行こう」

貴浩「了解！刀麻も行くか？」

刀麻「もちろんだ！協力するぜ」

そうして作戦のため俺達は女子風呂へと向かっていった

強化合宿　～VS教師陣？～

場所は女子風呂へと続く廊下。
音をたてない様に靴もスリッパもはかず、靴下でその場を駆け出していると

布施「君達、止まりなさい！」

レイブン「そこまでだ」

その前方から、化学教師の布施先生と世界史の烏丸先生ことレイブンが姿を現した。

布施「更衣室にカメラが設置されていたと聞いて警戒していたら……まさか本当に覗き犯がやってくるとは思いませんでした」

レイブン「さすがにここから先は行かせられないよ」

秀吉「どうするのじゃ？」

秀吉の言葉に、雄二は躊躇いもなく……

雄二「構わん！　ブチのめせ！」

布施「そこはかまいなさい坂本君！　私たちは一応教師ですよ！？」

刀麻「了解！」

布施「不知火君も、了解じゃないでしょう！
　しかもあなたはＡクラスでしょうが」

明久「この前の補習の恨み、受けて貰ういます」

布施「ひぃぃぃいいっ！　さ、サモンッ！」

そこで、突如現れた小さな体が明久の腕をはじいた。

明久「……っ！」

雄二「しょっ、召喚獣だと!?
　しかも今……教師用の召喚獣は、物に触れるのか!?」

あまり成績の良くない生徒が呼びだしても、人の数倍の力を持つ召喚獣。
教師の点でならその力は計り知れないが、
普通は“観察処分者”である明久の召喚獣以外は、
物に触れる事は出来ない筈である。

レイブン「そうだよん。吉井が観察処分者に認定されるまでは、
　雑用を自分達でやっていたからね。
　だから物質干渉ができる方が都合が良いのさ」

貴浩「なら、布施先生は雄二と刀麻と秀吉が、俺と明久がレイブンをやる。
　明久、俺が召喚獣を相手にするからお前はレイブンをぶちのめせ！」

明久「了解」

レイブン「了解じゃないよ！何怖い事言ってるんだお２人は！？」

貴浩「雄二、召喚獣が物理干渉できるって事はフィードバックも作用する。
　だから召喚獣を殺れば１石２丁だ」

雄二「そうか！わかった」

布施「いや、わからないでください！！」

そこはよくババアの実験の手伝いをしてたからババアから聞いた聞いたことだ。

布施「でも負けるわけにはいきません『試獣召喚！』」

レイブン「『試獣召喚！』」

雄・秀・刀「「「『試獣召喚！』」」」

貴・明「「『試獣召喚！』」」

≪　化学　≫

布施先生　５８９点　ＶＳ　坂本雄二　１

８２点　木下秀吉

９６点　不知火刀麻　２

５３点

≪　世界史　≫

烏丸先生　６５２点　ＶＳ　織村貴浩　４
００点　吉井明久　２
１５点

刀麻「げぇ！？なんだあの点数は？」

明久「まさか点数を操作したとか？」

雄二「レイブンならそうかもしれないな」

レイブン「・・・・・俺って信用ないのね」

秀吉「でもどうするのじゃ、点数で負けておるぞ」

雄二「人数はこちらのほうが上だ。数の差で押し通せ」

貴浩「なら行くぞ明久！」

明久「了解！」

貴浩「グラビトン！！」

俺は腕輪の能力を使いレイウンごと押しつぶす。
今回はたまたま世界史で４００点いったが・・・・・・次回は無理だろうな。

貴浩「今のうちだ明久」

明久「わかったよ！いくよレイブン！
舞い踊れ！桜花千爛の花吹雪！彼岸！霞！八重！枝垂！」

明久の召喚獣が一気に勝負をしかける

明久「これが僕のッ『殺劇舞荒拳（サツゲキブコウケン）』」

レイブン「ッ！痛いねこれは・・・・・」

明久はうまく俺のほうへとレイブンの召喚獣を飛ばしてきた

貴浩「なら俺も『殺劇舞荒剣（サツゲキブコウケン）』！！」

明久の技に続いて俺も技を繰り出す。

貴浩「おりゃりゃりゃりゃりゃ、おりゃぁ！！」

貴・明「「トドメッ！！」」

俺と明久は吹っ飛んだレイブンの召喚獣に前後から刀と木刀を突き刺した。
これでレイブンの召喚獣は消滅した。

レイブン「っ！！」

布施「烏丸先生!?」

貴浩「こっちは終わりだ。明久は雄二たちの援護を」

明久「うん、わかった」

明久にそういうと俺はレイブンい近づいた

貴浩「レイブン、なんで手を抜いたんですか?」

いかに俺たちでも教師相手だと普通はこうはいかない。
こう簡単にいったのは先生が手を抜いた以外考えられない

レイブン「うーん。今日は調子が悪くてね」

貴浩「・・・・・・・・そうですか。ならコレで」

俺は自分の召喚獣の腕にナルトの螺旋丸位の大きさの重力の玉を生成する

レイブン「え?それどうするつもり?」

貴浩「もちろん・・・・・くたばれ!!」

俺はレイブンの腹にその玉を殴りつけた。
その威力でレイブンは気絶した。

強化合宿　～VS教師陣?～

俺がレイブンを気絶させる

貴浩「レイブン。Fクラス、織村貴浩が討ちとった！」

布施「烏丸先生!?大丈夫ですか!?」

雄二「余所見して余裕だな」

布施「え?うわぁ！」

布施先生がレイブンに気を取られ、召喚獣が倒されてしまう

雄二「よし、明久トドメを」

明久「了解！」

明久がトドメをさそうとすると別の召喚フィールドが形成された。

その瞬間

???「リリスラッシュ！」

突然現れた召喚獣に明久の召喚獣が吹き飛ばされる。

雄二「誰だ!?」

召喚獣が現れたほうをみると

そこには生物のスタン先生、日本史のルーティ先生、家庭科のリリス先生、
英語のジュディス先生、物理の森田先生も5人の先生たちがいた。

森田「何やってるのよ烏丸先生は？情けないわね」

ジュディス「それだけこの子達が手ごわいってことでしょ」

スタン「へぇ彼らが俺と同じ技を使う事ができるんだ生徒か」

ルーティ「ちょっとスタン感心してないの」

リリス「大丈夫でしたか布施先生」

布施「はい、おかげ様でなんとか」

5人の先生は布施先生に近づく。

貴浩「・・・・さすがに5人の教師相手だときついぜ」

雄二「だがこれは逃げられないな」

刀麻「だな。ならやるしかないだろう」

貴浩「じゃあ難しいだろうが1人1殺を目標で」

明久「頑張らないとね」

秀吉「もう目的が変わってる気がするがのう」

雄二「今日の目的は達したからいいだろう。
それに貴浩と刀麻がやる気マンマンだしな」

秀吉「まあやれるだけやってみるかの」

ジュディス「あら？やる気満々ね。私そういう子好きよ」

森田「・・・・・メンドクサいわね」

スタン「俺、あの織村ってヤツとやりたいな」

ジュディス先生とスタン先生は好戦的だが森田先生はメンドクサそうだ

貴浩「自分をご指名ですか。なんか嬉しいですね。
スタン先生は教師の中でも操作技術が高いらしいですしね」

ジュディス「あら？スタン先生。その子は私も目をつけていたのに」

スタン「ジュディス先生もですか？」

ジュディス「でもスタン先生に譲るとするわ。私は吉井君をもらうとするわ。
彼も面白そうだし」

明久「僕の相手はジュディス先生ですね。
僕の相手がこんな綺麗な先生で光栄ですね」

ジュディス「嬉しい事いってくれるわね」

雄二「なら俺達もやるぞ」

スタン「ルーティ。日本史のフィールド展開してもらっていいか？」

雄二「俺達の得意科目でいいのか？」

ジュディス「そうじゃないと面白くないでしょ」

刀麻「あとでそれを後悔させてあげますよ」

貴・明・雄・秀・刀「「「「「試獣召喚（サモン）」」」」」

ス・ジュ・リ・森・ル「「「「「試獣召喚（サモン）」」」」」

≪日本史≫

織村貴浩	５９２点	スタン先生	５９２点
吉井明久	３７５点	ジュディス先生	５３２点
坂本雄二	３８４点	リリス先生	６３２点
不知火刀麻	４７３点	ルーティ先生	９５３点
木下秀吉	１３３点	森田先生	６０３点

貴浩「なら行きますよスタン先生」

スタン「来い！織村！！」

吉井「では行きますよ。ジュディス先生」

ジュディス「私を楽しませてね」

俺と明久は先生と戦う事に集中しているが・・・・

雄・刀・秀「「「なんだよ（じゃ）！！あの点数は！？」」」

雄二たちは先生達の点数に驚いていた

ルーティ「一応担当科目だしね」

森田「コレくらいとれてあたりまえよ」

リリス「では、いきますよ」

再び教師陣との戦いが始まった

強化合宿　～VS教師陣？～

離れたところでお互いに教師陣と戦闘が繰り広げられていた

貴浩「魔人剣！！」

スタン「魔人剣！！」

お互いに同じ技を繰り出し相殺していく。

スタン「さすが織村というべきかな」

貴浩「お褒め頂きありがとうございますっと」

何度かこれと同じ事を繰り返していく。

スタン「これじゃラチがあかないな・・・・・・なら」

そこでスタン先生は腕輪を発動させる

スタン「ファイアボール」

スタン先生がそういうと４つの火の玉がこちらに向かってくる

貴浩「げぇ！？」

俺はそれを銃を使って２発消し残りの２発はギリギリで避ける。

スタン「そこだ！紅蓮剣！！」

するとすぐ後ろにスタン先生が迫ってきており攻撃を防ぐが、
炎が纏われておりダメージを食らってしまう。

貴浩「熱っ！」

スタン「今のでやられないか」

貴浩「今度はこちらの番です」

俺は再び重力場を手のひらに形成する

貴浩「重力丸」

はい、螺旋丸のパクリです。

スタン「っ！！」

直撃はしなかったがかすりはした。

スタン「さすがだね。君以外の生徒は皆終わったというのにな」

スタン先生がそういうので俺は周りを見てみると

≪日本史≫

織村貴浩　５０１点　スタン先生　４９２点

吉井明久　０点　ジュディス先生　２２０点

坂本雄二　　０点　　ＶＳ　　リリス先生　　６０２点
不知火刀麻　　０点　　ルーティ先生　　９００点
木下秀吉　　０点　　森田先生　　５３２点

皆いつの間にかに戦死していた。

ルーティ「ジュディス先生随分点数が減ったわね」

ジュディス「何気に彼が手強くてね」

森田「私は一撃で片付けたわ」

リリス「いきなり奥義なんてだすんですもの。ビックリしましたよ。
おかげで私も少し点数が減ったじゃないですか」

森田「ごめんごめん」

ルーティ「で、後はスタンだけよ。まだ終わらないの？」

スタン「いや、彼思ってたより凄いよ」

森田「早くしなさいよね。じゃないと私がやるわよ」

スタン「ま、待ってよ。よしなら行くぞ、フィラフルフレア！」

上空から先ほどより大きな炎が数発迫ってくる。
あれはさすがに拳銃じゃ無理だな。なら。

俺は両手を胸の前におき迫ってくる炎に向けて手を伸ばすと

貴浩「グラビトンノヴァ！！」

俺の両腕から一直線に重力で精製されたビームを発射した。
その攻撃により先生の攻撃は消滅した。

これ、威力は高いけど点数消費が激しいんだよね

織村貴浩　　４０１点　　スタン先生　　４６２点

今ので差が開いたな。

なら今度は

貴浩「行きます！『殺劇舞荒剣（サツゲキブコウケン）』！！」

スタン「なら俺も『殺劇舞荒剣（サツゲキブコウケン）』！！」

お互い同じ技で対抗する

貴・ス「「おりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃ」」

少しずつ俺の召喚獣が押されてきた。
フィードバック作用があるからわかるが
スタン先生の技のほうが威力があるし、腕輪の力で炎を纏っている分こちらが不利だ。

スタン「これで終わりかな？」

貴浩「っ！！」

スタン「おりゃりゃりゃりゃりゃ、おりゃぁ！！」

俺はスタン先生の技に押し負け俺の召喚獣は消滅した。

織村貴浩　　０点　　スタン先生　　１４２点

貴浩「はぁ～負けたか」

スタン「お疲れ織村。勝負楽しかったぞ」

貴浩「自分もです。ありがとうございました」

鉄人「さて、勝負が終わったことで戦死者は補習だ。
　それに覗きをしようとするとはそんな生徒にはより厳しく指導してやる」

貴浩「げぇ！？忘れてた」

その後は鉄人につかまり俺達は補習室で指導をくらった。
まあ優子や愛子たちが先に説明しておいてくれたから覗きの件は何もお咎めがなかったが、
俺は部屋に穴を開けた件で皆とは別に説教をくらった。

強化合宿　～ＶＳ教師陣？～（後書き）

教師陣との戦いは生徒側の負けになりました。

これで貴浩は初負けになります。

今後どのようになっていくかお楽しみに

強化合宿編　～一応強化合宿ですから～

そして夜は明けて、強化合宿本番。

翔子「……雄二。一緒に勉強できてうれしい」

雄二「待て翔子、当然の様に俺の膝に座ろうとするな。
　クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

強化合宿ではＡクラスとＦクラスは同じ部屋で合同で勉強をしている。

明久「雄二も素直じゃないね」

貴浩「仕方がないさ。恥ずかしんだろうよ雄二は」

秀吉「そうじゃのう。
　しかし、折角のＡクラスとの合同学習だというのに何故自習なのじゃ？」

秀吉はふと疑問に思い口にする。

明久「それもそうだね」

ふと、秀吉が疑問を口にした。それに明久も賛同する。

貴浩「簡単な事だ。この合宿の趣旨は“モチベーションの向上”だ。
　分かるように言うと、Ａクラスは“Ｆクラスの様になるまい”、

Fクラスは“Aクラスの様になりたい”
と思わせて意欲を向上させるのが目的だろう」

明久「そっか。だから授業をやらないんだね」

貴浩「そう言う事。さて勉強するなら教えてやれるぞ？
一応名目は強化合宿だからな。
でも秀吉には楓がいるか。なら、おーい楓」

秀吉「なっ／／／／」

楓「何ですか？兄さん」

楓が俺に呼ばれやってくる

貴浩「今からさ秀吉に勉強教えてあげてくれないか？」

楓「ヒデ君にですか。良いですよ！じゃあヒデ君向こうで一緒に頑張りましょう」

秀吉「うむ、よろしく頼むのじゃ／／／／」

貴浩「あっ楓。後で少しいいか。昨日のことでな」

楓「はい、わかりました。その時は命ちゃんも呼びますね」

貴浩「よろしく。じゃあ雄二は霧島さんに教わるみたいだから
俺は明久とムッツリーニに教えるとするか」

ちなみに光一は羽鳥財閥の息子ということもあり、成績はAクラス

です。
そして今は情報収集中――――

康太「・・・・・・・・・・・・よろしく頼む」

明久「じゃあよろしくね貴浩」

貴浩「じゃあ今はとりあえず俺の得意科目の数学を教えるか。
まあ因数分解はさすがにわかるよな？」

明久「・・・・・・・・・」

康太「（プイ）」

貴浩「ま、まじか・・・・良く入学できたな！？
ってか待て！お前らの数学の点数はいくらだ！？」

そこへ

愛子「あ、貴浩君と吉井君とムッツリーニ君じゃない。代表もここにいる事だし
ボクもここにしようかな？」

愛子が近くの席に座った。

貴浩「愛子か。じゃあ一緒にやらないか？」

愛子「うん。それじゃあ何の勉強するの？パンチラの勉強でもする？」

明久「パンチラの授業ってなに？」

康太「・・・・・・・・・・パンチラ（ブシュー）」

明久の言う事も最もだ。
ってかムッツリーニお前大丈夫か？

愛子「あ、なんなら、ここで披露して見せよっか？
　貴浩君も居る事だし、サービスするよ？」

明久「えっえええ！！」

愛子が立ち上がり、スカートのすそをつまみ始める。
明久は手で顔を隠すが、指の隙間からソレを見つめる。

明久「あれ？どうしたのムッツリーニ。
　普段はエロが大好きなはずなのに、随分冷静だね」

貴浩「確かにそうだな。どうしたムッツリーニ？
　エロが大好物なお前が大人しいとは気味が悪いな」

明久「僕ですらこんなにドキドキしてるっていうのに」

貴浩「そうだぞ。俺だってドキドキしてるんだぞ」

康太「……騙されるな」

そこへ、ムッツリーニが意味深な言葉を告げて来た。

貴浩「本当にどうしたムッツリーニ？お前がエロが大好きなのに

こんな美味そうなイベントに乗らないなんて熱でもあるのか？」

康太「……奴はスパッツをはいている」

明久「そ、そんな!?工藤さん、僕を騙したね!?」

貴浩「そんな!?愛子俺たちの純情を返すんだ」

愛子「ごめんね。2人とも。お詫びに面白いもの見せてあげるよ」

といって、ある物を取り出した。

明久「何？」

康太「……小型録音機」

愛子「うん。コレ、すごく面白いんだ。たとえば……」

――ピッ！

＜工藤さん＞＜僕＞＜こんなにドキドキしている＞

明久「わあああああああっ！僕そんな事言ってないよ!?
変なものを再生しないでよ!!」

貴浩「ダメだぞ愛子。そんな事したら明久が可愛そうだろ」

愛子「ごめんごめん。じゃあ次は……」

ピッ！

＜愛子＞＜大好き＞＜俺＞＜こんなにドキドキしているんだ＞

貴浩「うわぁあああああっ！俺もそんな事言ってないよな！
だから今すぐに消すんだ！！」

優子「ねぇ貴浩。今、面白い事聞いた気がするんだけど」

貴浩「げっ！？優子」

優子「どういうことかしら」

ピッ

＜優子＞＜大好き＞＜俺＞＜こんなにドキドキしているんだ＞

貴浩「おぉい！！愛子！！もうやめて欲しいんだが」

優子「えっ／／／いきなりそんな事言われても」

――ピッ！

＜愛子＞＜優子＞＜が＞＜欲しい＞＜美味そう＞
＜だから＞＜今すぐ＞＜一緒に＞＜やらないか＞

貴浩「っておいいいいいっ！！」

なんだよコレ？変態発言じゃないか！？

明久「工藤さん、貴浩をいじめすぎだよ」

愛子「ね、面白いでしょ？」

面白いとかそういう問題じゃねぇ……

俺達のやり取りは、教室中の注目を浴びていた。

久保「君達、少し静かにしてくれないか？」

明久「あ、ごめん」

明久が久保をはじめ、この部屋にいる全員に頭を下げる。

久保「吉井君か。とにかく気を付けてくれ。
まったく、“織村貴浩”をはじめとして、姫路さんといい島田さんといい、
Fクラスは危険人物が多くて困る」

久保はそういうと自分の席へと戻っていった。

強化合宿編　～明久と康太の成績～

貴浩「さて、話が脱線しすぎだが勉強でもするか」

俺は久保に注意された事もあり話を戻す。

優子「ならアタシも一緒にいいかしら？」

命「あっ、貴浩君。私も一緒に良いですか」

なのは「わたしもいいかな」

貴浩「いいよ。そういえば3人とも数学とかの理系はどうなんだ？
理系なら教えられるが・・・・・・」

この合宿では各生徒に一番最近受けたテストの点数を書いた紙が配られている。

俺はそこで3人から成績表を見せてもらうことにした。

明久とムッツリーニは出し渋ったので無理やり奪い取ったが・・・・・

	織村貴浩	吉井明久	土屋康太	木下命
数学	７３９点	５４点	３２点	５５点
化学	４１５点	４４点	２１点	１２８点
物理	６２６点	６１点	４１点	１４１点
生物	４６８点	６６点	５１点	１３７点

	木下優子	工藤愛子	なのは
数学	３９２点	２５７点	４０１点
化学	３４１点	２４２点	３８５点
物理	３６３点	３１９点	６０１点
生物	３１１点	２９６点	３１２点

明久「やっぱり貴浩は凄いね。全部４００点台だ」

康太「・・・・・・・・凄すぎる」

命「私はもう少し数学を頑張らないと・・・・・」

なのは「私も理系で数学は得意なほうだけどタカ君と比べると・・・・・」

愛子「今度から理系は貴浩君に習おうかな?そしたら成績が伸びるかな?」

優子「アタシもそうしようかしら?」

貴浩「それは別にかまわないが・・・・・・まず一言。
明久、ムッツリーニ何なんだあの点数は!?
・・・・・・ちょっと待て。お前ら他の点数はどうなってんだ!?」

俺は2人の点数に驚きの声をあげる

康太「・・・・・・・・貴浩は凄い」

明久「貴浩が凄いんだ！」

貴浩「凄いじゃない！！なんだよ！あの点数は！？」

康太「・・・・・・・・・俺の全力だ」

明久「この時はたまたま僕のストライカーΣが不調で」

貴浩「ムッツリーニはあれが全力！？
　で、明久お前はまだそんなものを使ってんのか！」

ベキッ

明久「ああ、僕のストライカーΣがぁ！！」

貴浩「そんなもの使うな！実力で取れ」

俺は明久とムッツリーニの他の教科の点数も無理やり見ると

	吉井明久	土屋康太
現代国語	１２１点	７１点
古典	９点	１１点
日本史	３８６点	８７点
世界史	２２８点	６９点
現代社会	６４点	９１点
英語	６１点	６１点
保健体育	１１０点	５８１点

※家庭科は乗せていません

愛子「うわぁまたムッツリーニ君に保健体育で負けたよ」

命「明久君、日本史と世界史は点数が高いですね」

優子「アタシが明久君に日本史で負けてるなんて・・・・・」

貴浩「なんか色々凄いな。お前ら・・・・・」

康太「・・・・・・・保健体育なら誰にも負けない」

その後は、あきれながら明久とムッツリーニに数学を教えた。
もちろん他の皆にも教えてあげた。
ただ明久とムッツリーニに関しては厳しく教えてあげた。
途中で雄二と霧島も参加した。

愛子「そういえば貴浩君たち先生たち相手に大暴れしたんだって？」

貴浩「うーん、ただ、レイブンを気絶させただけだけど」

明久「布施先生はやり損ねたけどね」

雄二「まさか、あの後あそこで教師が5人も現れるとは思わなかったがな」

貴浩「スタン先生は強かったな、最後は押し負けたしな」

明久「そうだよね。ジュディス先生も強かったしね」

優子「貴浩でも負ける事があるのね」

貴浩「今度は勝ってやる」

雄二「貴浩あくまで作戦の事を忘れるなよ」

愛子「でも貴浩君たちが昨日覗こうとして先生達を倒した事、結構有名になって来てるよ」

雄二「それも作戦の内だからな」

貴浩「そろそろ各クラスの女子たちとの話し合いの時間か」

須川「おーい、坂本！今、Ｅクラスのヤツラから覗きに参加しないか、
　言われたんだが一応代表に報告しておいたほうがいいと思ってな」

雄二「そうか、なら俺が行くからＦクラスのメンバーを集めておいてくれ！
　貴浩そっちは任せるぞ」

貴浩「了解！」

俺は隠しカメラの犯人を捕まえるため女子にも協力してもらうために今から女子の代表を集めての話し合いとなる

強化合宿編　～俺達の作戦会議（女子との）～

優子「皆、揃っているわね。じゃあこれから隠しカメラの犯人を捕まえるための会議を行うわ」

今この場には、Aクラスからは霧島さんと優子、砂原さん、Bクラスからは一子に五十嵐さん、Cクラスからは小山に、Dクラスからは清水、Eクラスからは中林
Fクラスからは俺と明久、楓、命が集まっている。

清水「いったい何のための会議ですの？　隠しカメラは昨日見つけたはずですわ」

砂原「それがねぇ、あの後ター君たちの指示でもう一度脱衣所を調べたらね、
　隠しカメラが見つかったんだよん」

貴浩「だから昨日のはダミーだ」

一子「そういやなんで貴浩がいるんだ？」

貴浩「それりゃ昨日、女子達に犯人扱いされたからな。
　真犯人を見つめだしころｓ（ゲフン）反省させるためだ」

今の俺の発言に小山と中林が体を震わせる。
女子たちは朝一で明久たちに謝罪したらしいので今はもう許している。２度目は知らないがな

明久「だから僕達も協力して犯人を捕まえようとしているんだ。

犯人は今、覗き仲間を増やしているみたいだからね」

優子「だからFクラスの人たちは、犯人がわかるまで
覗きの手助けをするフリをして見つけてもらう作戦よ」

五十嵐「で、でも、犯人を見つけることができるのかな」

明久「そうだね。犯人は男か同姓愛者しかいないね」

貴浩「ん?同姓愛者」

明久「ん?どうしたの貴浩?」

貴浩「・・・・・なあ、清水って確か同姓愛者だったよな。
しかもウチのクラスの島田の事を愛してたはずだったような
気がするが」

明久「あっ!そうだね。確かDクラス戦の時も美波に迫っていたよね」

そこで皆の目線が清水へと向かう

貴浩「質問していいか?昨日カメラが見つかった時、お前何してた?」

清水「その時間は入浴時間だったので美春はお風呂場にいましたわ」

中林「そういえば、カメラを見つけたのも清水さんだったわね」

命「そういえばそうでしたね」

清水「み、美春を疑ってますの？」

貴浩「少しな。だから試させて貰う」

俺は持ってきていた鞄から機械を取り出した。

霧島「・・・・・・それ何？」

貴浩「ああ、嘘発見器だ。昨日光一に頼んで今日届いたものだ」

優子「それを使って調べるのね」

貴浩「ああ、じゃあまずは明久につけてみる。皆に信じてもらうためにな」

俺はそういうとその機械を頭と腕に取り付けた。

貴浩「これは脈波とかを受けて反応するんだ。反応したら音がなる仕組みになっている。
じゃあ明久、質問にはすべて『いいえ』で答えろ」

明久「うん、わかった」

貴浩「お前は料理ができる」

明久「いいえ」　ブー！！

貴浩「こんな風に嘘をついたら音がなる。次は、お前は男である」

明久「いいえ」　ブー！！

貴浩「昨日、俺と一緒にレイブンの召喚獣をたおした」

明久「いいえ」　ブー！！

貴浩「昨日女子の風呂場に隠しカメラをしかけた」

明久「いいえ」　シーン

貴浩「こんな感じだ。じゃあ今度は俺がつけるから質問してくれ」

明久「わかったよ」

そこで俺は明久から機械を受け取るとそれを装着する。

明久「じゃあ、あなたは女である」

貴浩「いいえ」　シーン

明久「楓に手を出した男でも許してあげる」

貴浩「いいえ」　ブーーーーー！！！

優子「凄い反応ね」

楓「に、兄さん・・・・」

明久「昨日、女子風呂にカメラを仕掛けた」

貴浩「いいえ」　シーン

明久「昨日僕と、レイブンを倒した後に、直接レイブンをぶっ飛ばした」

貴浩「いいえ」　ブーー！

一子「あの噂は本当だったのか」

優子「最後にいいかしら。あなた犯人を見つけたら本当に殺さないわよね」

貴浩「・・・・・いいえ」　ブーーーーーーーーー！！！！

貴浩「・・・・・・・・・・（プイ）」

楓「に、兄さん」

貴浩「・・・・・と、こんなものだ。なら清水これをつけてみろ」

清水「な、なんで美春がそんなものをつけないといけませんの」

貴浩「お前にかけられた疑いを無くすためだ。
それとも何か？やはりお前が犯人なのか？」

清水「ち、違いますわ」

貴浩「仕方ないな。なあ一子、清水さんにコレつけてあげて」

一子「わかった」

一子は俺から機械を受け取ると、清水に装着させた。

貴浩「お前は男である」

清水「いいえ」　　シーン

貴浩「よし、お前は島田を愛している」

美春「・・・いいえ」　ブーーーーー！！！

小山「凄い反応ね」

貴浩「なら本題だ。お前は昨日脱衣所にカメラを隠した」

清水「・・・・・・・・・いいえ」　ブーー！！

優子「し、清水さん」

貴浩「もう1つ。お前は明久に合宿が始まる前に手紙を送った」

清水「・・・・・・・・・いいえ」　ブーーー！！

貴浩「やはり、お前が犯人だったか」

清水「み、美春はやっていませんわ。
　そこの豚になんて脅迫状なんて送っていませんわ！！」

命「脅迫状？」

清水「あっ」

貴浩「墓穴をほったな。俺は手紙と言っただけで脅迫状とは一言も言ってないぞ」

清水「ひ、卑怯ですわ」

優子「清水さん、あなた最低よ」

霧島「・・・・・先生を呼んでくる」

その後、逃げ出すとした清水をスタンガンで気絶させてから鉄人たちがやってきたので清水を連れて行った。

西村「これで事件は解決だな」

砂原「それがその・・・・・」

貴浩「鉄人、実はな。あの後砂原さんたちにお願いして脱衣所をもう一度調べてもらったら2つカメラが見つかったんだ。機種が違ったことからおそらく犯人はもう1人いるはずだ」

西村「なんだと!?」

小山「嘘!?」

砂原「これがそのカメラです」

そこで砂原さんは昨日見つけたカメラを鉄人に渡した

貴浩「だから、俺達Fクラスはこのまま作戦を実行していくから
女子にも手伝って欲しいんだ」

小山「どうすればいいの？」

貴浩「簡単な事だよ。これはただ俺達の保身を守って欲しいだけだ」

命「保身？」

貴浩「一応、鉄人には優子たちから事情を説明してもらったが、
覗きの手助けみたいなことをするわけだからな。
このままだと俺達には処分が下るだろうから、
その時に助けて欲しいんだ」

西村「お前らは覗きはしないんだな」

明久「当たり前ですよ。なら試してみますよ」

明久がそういうと俺のほうに振り向いた

明久「もし、男達が楓の入浴を覗いたらどうするの？」

貴浩「殺す！地獄の先まで追い詰めてやる！！そして死ぬより恐ろ
しい事を・・・・・」

明久「これでどうですか鉄人」

西村「そ、そうか。なら俺からも手助けはしておいてやろう。
ところで吉井と織村兄。今また鉄人と言ったよな」

明久「気のせいですよ」

貴浩「・・・・・ドントマインド」

優子「そういうことだからアタシたちも手伝うわ」

霧島「・・・・・・・・織村には世話になってるから」

砂原「私にも任せてよん♪犯人を見つけてあげる♪」

命「私も手伝います」

楓「私も」

小・中「「私達も手伝うわ。それであの昨日の事を許してくれると・・・・・・」」

貴浩「昨日のこと？ああ、もう明久たちには謝ったんだろ。
ならもう俺は怒ってないよ。・・・・・2度目はないけどね」

五十嵐「私も微弱ながらお手伝いしますね」

一子「僕もだ。ところで貴浩？教師って強いのか？」

貴浩「ああ、強いぞ。点数もあるし操作技術もあるしな。
昨日見た中では特にスタン先生とジュディス先生が強かったな」

一子「そうなのか」

楓「兄さん、美波ちゃんと瑞希ちゃんにはこのことは」

貴浩「絶対言うな。少し考えがあるからな。・・・・・これが最後にチャンスだ」

楓「わかりました。兄さんがそういうなら黙っておきますね」

貴浩「じゃあ、明久。雄二たちの所に戻るぞ。
あっそうだ楓、悪いんだけど指輪貸してくれないか」

楓「はい、どうぞ兄さん」

貴浩「悪いな」

俺は楓から指輪をかりて皆の下に戻っていった

強化合宿　～VS教師陣？　貴浩ピンチ！？～

そして2日目の入浴時間

雄二「よし、Fクラスの皆集まってくれたな。
　これよりさっき言ってたとおり女子風呂を覗く真似をする」

F『了解っ！！』

雄二「ただし真似であって本当に覗くなよ！
　俺達は俺達に疑いをかけた犯人を捕まえるために動くんだ」

F『おおぅ！！！！！』

――ドドドドドッ！

F『おおおおおっ！障害は排除だーっ！』

F『邪魔するヤツは誰であれブチ殺せーっ！』

殺気だった状態のFクラスのメンバーは待ち伏せしていた女子や先生に向かっていく。

……凄いな、演技だと知っていても凄い迫力だな。これなら犯人を騙せるな

また、今回は雄二が他の男子を煽っている。
EクラスとDクラスの男たちも来ているので簡単には止められない。

布施「大変です！変態が編隊を組んでやってきました！」

教師「西村先生の言うとおり来ましたか・・・・・・承認します！
試獣召喚（サモン）！」

須川「ここは俺達に任せろ！！お前達は先進め！！」

貴浩「悪いな、須川！！」

須川「昨日レイブンと布施をやったんだろ。今日も頑張れよ」

貴浩「ああ、やってやるよ！」

俺達が先に進んでいると

高橋「そこまでですよ」

俺達の前に高橋先生が現れた。
そこには高橋先生だけじゃなく、ジュディス先生、リリス先生、
そして保健体育の鈴村先生、美術の千葉先生の５人の先生に加え、
霧島さんと優子に愛子、一子、五十嵐さん、楓、命、
そして、島田、姫路あと複数の女子が現れた。

F「ここで最終難関かよ！」

E「もう無理だ」

明久「皆！最後まで諦めずに戦うんだ！！」

島田「やっぱりアキ来たのね。オシオキ決定ね」

姫路「もう許しませんよ明久君。そんな明久君にはオシオキが必要です」

明久「美波、姫路さん・・・・・・・」

高橋「吉井君、織村君。あなたには失望しました。
少しは見所のある子だと思っていたのですが」

まあ先生たちには鉄人ぐらいにしか伝えてないからな。
あとで他の先生にも言ってもらわないとな。レイブンはおそらく知っているのだろうな・・・・

島田「さあ、アキ大人しくやられなさい」

姫路「そうですよ明久君」

貴浩「・・・・・・・・・・・・・・・不合格だな（ボソッ）」

雄二「どうした貴浩？」

貴浩「いや、なんでもない。じゃあ皆は姫路と島田を中心に殺ってくれ。
俺達が先生と戦うから時間を稼いでくれ！『試獣召喚（サモン）』！！」

F『了解っ！！』

ジュディス「あら？頼もしいわね織村君。
じゃあ今日は私と戦ってもらおうかしら『試獣召喚（サモン）』
！！」

明久「え？や、やばい！皆、貴浩を助けるんだ！！早く！！」

光一「どうしたのですか明久殿？」

雄二「慌ててどうしたんだ明久？」

秀吉「そうじゃぞ明久よ、貴浩がそう簡単には負けるわけないのじゃ」

Ｆ「そうだぜ吉井。織村は今や学年最強といっても良いほどの強さを持ってるだろ？」

明久「このままじゃ・・・・・」

刀麻「どうしたというんだ？」

優子「なんで明久君は慌ててるのかしら？」

愛子「僕にはわからないよ」

明久「だって・・・・・・」

≪　英語　≫

織村貴浩　　ＶＳ　　ジュディス先生
４３点　　７６５点

明久「・・・・・・英語って貴浩の苦手科目だもん・・・・・」

皆（明久以外）『えっ！？』

貴浩「やべっ！！」

優子「・・・・・・貴浩にも苦手科目あってのね」

愛子「でも少し安心したよ」

明久「安心しないでよ！」

F「今すぐ織村を助けるんだぁ！！！！」

島田「今のうちですよ先生」

島田を中心に複数の女子が俺に攻撃を仕掛ける。

貴浩「とぅ　やぁ　ほっ」

俺は得意の召喚獣の操作で攻撃をかわしていくが反撃に移ることができない。

ジュディス「・・・・・・・・」

皆が俺を助けようとする前にジュディス先生がフィールドを消す。

島田「先生どうしてフィールドを消したんですか！？」

ジュディス「だってそれじゃ面白くないんですもの、
高橋先生フィールド展開してもらって良いですか？」

高橋「・・・・しょうがないですね。わかりました」

高橋先生はため息をつきながらも総合科目のフィールドを展開する。

ジュディス「じゃあ楽しみましょう」

貴浩「良いんですかフィールドを変えて？英語なら簡単に俺を倒せますよ？」

ジュディス「いいのよ。そんなあなたを倒しても嬉しくないもの。
倒すなら全力のあなたを倒したいもの」

貴浩「ありがとうございますジュディス先生。でも簡単には負けませんよ」

明久「僕達も行くよ」

姫路「私達もです」

貴・明・雄・秀・康・刀・光　『試獣召喚（サモン）！！』

姫・島・霧・優・愛・楓・命・一・五　『試獣召喚（サモン）！！』

ジュ・リ・高・鈴・千『試獣召喚（サモン）！！』

≪総合科目≫

織村貴浩　４５３２点　坂本雄二　２１２４点　土屋康太　１０９８点
吉井明久　１７２３点　木下秀吉　１２７１点
不知火刀麻　３２１８点　羽鳥光一　４２７１点

ＶＳ

姫路瑞希　４４２１点　島田美波　８５１点　木下命　１５２１点
織村楓　４５１４点　獅子川一子　２０５１点　五十嵐きらり　２１７２点
霧島翔子　５１４２点　木下優子　３８４１点　工藤愛子　３６９４点

＆

高橋洋子　７７９１点　ジュディス　５３２１点　リリス　５４９１点
鈴村瀬名　４７２７点　千葉琥珀　４６７１点

これより激戦が始まるかも？

強化合宿　～ＶＳ教師陣？　仲間割れ！？～

俺達は互いに召喚獣を召喚する。
周りの女子も召喚を始める。
男性陣７人　ＶＳ　女性陣９人＋約５０人＆教師陣５人　の戦いが
今、始まる。

ジュディス「じゃあいくわよ織村君」

島田「手伝います先生」

姫路「私もです」

ジュディス「え？ちょ――――」

ジュディス先生が何か言う前に姫路と島田が俺と明久に攻撃を仕掛けてくる。
それに続いて回りにいた女子も攻撃を始める。

貴浩「ちっ、各自散開！！」

固まっていてはやられてしまうので
近くにいたＦクラスのメンバーたちも戦いを始める。

俺は姫路と島田、女子と戦っていると

貴浩「……これはやっかいだな」

明久「貴浩危ない！！」

貴浩「え？」

俺は明久の声で咄嗟に右によけるとそこには高橋先生の鞭での攻撃があった。

高橋「油断禁物ですよ織村君、あなたを倒せば指揮が下がりますからね」

高橋先生は俺に攻撃を仕掛けてくる。

他にも周りの女子からの攻撃がくるので避けるのだけで精一杯だ。

明久「貴浩！なら【白盾の指輪】『シールドリング』発動！！」

そこで明久の周りに某ガ〇ダムの白のシールドビットが１２基展開される。

明久はそれを操作して俺を助けてくれる。

貴浩「助かった明久！これなら！」

俺は銃を構えるとまずは周りにいた女子に攻撃して数人戦死させる。

雄二「そういえば指輪があったな」

秀吉「そうじゃったの、なら『シールドリング』発動じゃ！！」

雄二と秀吉は指輪を持っていたことを思い出し指輪を起動させる。

秀吉の周りに８基のビットが展開された。

雄二「女子生徒は強くないんだが教師と翔子たちがやっかいだな」

光一「なら周りの女子生徒は俺がやるから、教師と楓殿たちを頼む」

雄二「わかった」

刀麻「なら俺が霧島たちを抑えるだけ抑えてみる。そのスキに教師を頼む」

貴浩「すまない刀麻、雄二！！」

雄二「いくぞ！！」

俺と明久、雄二、秀吉、ムッツリーニはまずは教師を倒すべく向かうが、
やはり敵の数が多く簡単にはいかない。

雄二「それでもきついな」

光一と刀麻が大部分を押さえてくれてるとはいえ、
まだこちらにも大勢いるので苦戦している。そこで俺達は目線を合わせる。

鈴村「余所見は厳禁だ！！」

雄二「なっ！『フィールドリング』発動！！」

雄二は咄嗟に指輪の力を発動して鈴村先生の直撃の攻撃を防ぐ。

鈴村「まだだ、ジュディス先生！！」

ジュディス「ごめんなさいね」

今度は雄二の後ろからジュディス先生が槍を構えて突撃してくる。

雄二「や、やられる。……だが切り札はある。『明久☆フィールド』！！」

明久「え？」

明久の指輪が突然光りだすと

明久のビットが勝手に発動し雄二の下へと向かい、ジュディス先生からの攻撃を防ぐ

雄二「これがFクラス代表に与えられた『明久☆フィールド』だ！！」

明久「殴るよ雄二！！っ！敵がこっちに！？『シールドリング』！！」

明久が自分のところにビットを戻そうとするが

雄二「なに、逃がさん！」

明久「雄二ぃいいい！！！邪魔するなぁあああ！！！！！」

雄二によって妨害されてしまう。

貴浩「明久！！」

明久「え?うわぁ」

雄二の性で明久が敵の攻撃にかすってしまう。

秀吉「これはご愁傷さまじゃの」

康太「・・・・・（コクコク）」

雄二「だが、敵の数が多すぎる!なら『明久フィールド』!!」

明久「させるか!!」

雄二「なに!?強制解除されただと!?」

明久「なら僕の新装備『シールド雄二』!!」

雄二「なに!?」

今度は雄二の指輪が勝手に発動し明久の前でシールドを展開する。

明久はその間に『魔人剣』で攻撃する。

雄二「ぐぁあああ!!!」

明久「いけるねこの新装備」

雄二「明久ぁあああああ!!」

秀吉「何やっておるお主らは!」

貴浩「でも敵の数が減ってきたぜ」

姫路「油断は禁物ですよ」

高橋「そうですね」

そこに高橋先生と姫路が攻撃を仕掛けてきた。
しかも姫路は腕輪で

貴浩「はっ！『秀吉フィールド』！！」

秀吉「なんじゃと！？」

今度は秀吉のビットが勝手に発動し2人の攻撃を防いでくれる。

貴浩「あぶねぇ」

秀吉「貴浩！！許さないのじゃ『アサルトリング』！！」

秀吉が今のに怒り、ビットを攻撃モードに切り替え俺に攻撃してくる。
雄二も今は女子ではなく明久に攻撃を仕掛けている。召喚獣と本人に。
明久も応戦して対峙している。

島田「な、なに？、きゃあ！？」

島田が秀吉の流れ弾に当たる。

リリス「何してるのよあなた達は・・・・・」

リリス先生が俺達の行動にあきれる。

秀吉「早いのじゃ」

貴浩「この程度の攻撃」

俺は秀吉の攻撃を軽く避けていく。
ただ、その流れ弾が何故かすべて敵に被弾していく。

明久と雄二のほうも同じようで明久が『魔人剣』で攻撃するが
雄二に避けられてしまっいたが今、放った攻撃が雄二に直撃する。

雄二「明久ぁあああ!!!」

貴浩「ご愁傷様だな!はっははは」

先生たちは俺達の行動にあきれてはててしまい行動を停止している。

・・・・・・ってか俺達以外は皆攻撃をやめていた。

優子「何やってるのかしら・・・・」

愛子「なんだろうね、仲間割れかな?」

翔子「……わからない」

優子や愛子、霧島は俺達の行動がわかっていない模様。
こんなの簡単だろ・・・・・・・・仲間割れだぁ!!!

今の現状、俺&明久　ＶＳ　雄二&秀吉

雄二「うるせぇぞこの野郎!!」

貴浩「そんな攻撃当たるかよ!」

雄二「っ!」

明久「雄二は召喚獣の操作は全くの素人だね」

貴浩「俺達に勝てる訳ねぇだろうぉおおお!!!!」

秀吉「なんじゃと!」

再び秀吉がビットで攻撃してくる。

明久「秀吉、そんな攻撃あたらないよ」

俺と明久は秀吉の攻撃をかわして行く。
その反れた攻撃が本当に何故だかわからないが俺達に当たらず敵に当たっていく。
今度は俺が『魔人剣』で雄二に攻撃する。
そして雄二は俺の攻撃を避け高橋先生の前に移動する。

貴浩「ちっ!当たらねぇ。なら『ブラスト』発動!!」

俺の召喚獣が薄いピンク色に染まる。

愛子「あれって!?」

優子「召喚獣の体の色が変わった?」

貴浩「雄二行くぞ！！」

雄二「来い！」

俺は身体能力が向上した召喚獣を雄二の召喚獣の方向へ向けて突撃する。

俺ＶＳ雄二　その結末は・・・・・・・・？

強化合宿　～ＶＳ教師陣？　仲間割れ！？～（後書き）

教師や女子たちと戦っていたのに途中から仲間割れに発展しました。

貴浩と雄二の戦いの結末がどうなるのか次回をお楽しみに

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・これで目的は達した。
雄二は俺の攻撃をかわすと、俺の攻撃は雄二の召喚獣の後ろにいた
高橋先生の召喚獣に直撃した。

貴浩「『グラビトン』！！」

俺は腕輪を発動させそのまま高橋先生の召喚獣に重力をかけ動きを
封じる。

貴浩「今だ！！ムッツリーニ！！」

康太「……了解！！」

そこでムッツリーニの召喚獣が高橋先生の召喚獣の真上から
降りてきて高橋先生の右腕を切り落とした。

高橋「っ！！」

貴浩「作戦通りだな雄二！」

雄二「ああ！良くやってくれたムッツリーニ！」

康太「……皆が気を引いてくれたからだ」

高橋「今までの仲間割れは演技だというのですか！？」

そう今までの行動は演技だったのだ。

敵の数が多い上に高橋先生のあの点数だ！まともにやっても勝ち目が薄い。
そこで途中で俺達にのみできる目線での会話で
俺と明久、雄二、秀吉の４人で仲間割れをしてるフリをして、
その途中で明久が楓からビットを繋ぎ合わせてムッツリーニの召喚獣を
それに乗せ、高橋先生の召喚獣の真上に配置する。
ムッツリーニは隠密行動を得意とするから影を薄くする事ができるのでこの作戦が成立する。
後は雄二か秀吉が高橋先生の召喚獣のまん前に立てばいい。
その後は俺が攻撃するフリをして後ろにいる高橋先生に攻撃し、
腕輪の力を発動し高橋先生の召喚獣の周りの重力をかける。
そしたらムッツリーニの召喚獣が真上から降りてきて高橋先生を攻撃すればいい。
ムッツリーニの点数が低かろうと真上から無防備な状態な相手に、
しかも重力も加わった攻撃だ。その威力はハンパではないからな。

≪　総合科目　≫
　高橋洋子　２７１９点　※右腕なし

雄二「今だ！貴浩！トドメをさせ！」

貴浩「任せろ！『重力丸』！！」

俺はすぐ近くにいる高橋先生に攻撃を当てる。
高橋先生は防ごうとするが右腕がムッツリーニによって切り落とされているので
防ぐ事ができず、俺の攻撃が直撃した。

≪　総合科目　≫

織村貴浩　４２００点　ＶＳ　高橋洋子　０点
土屋康太　１０９８点

貴浩「Ｆクラス、織村貴浩！高橋先生を討ち取ったぁ！！！！」

Ｆ『おおぉお！！！凄ぇえええ！！！！！』

Ｆ「本当に先生を倒したぞ！！」

Ｆ「しかも高橋先生だぞ！！」

貴浩「俺達の武器は！」

秀吉「愛と」

明久「勇気と」

雄二「地位と」

康太「謀略と」

貴浩「だまし討ち！」

優子「……最後は最低ね…」

楓「に、兄さん…」

高橋「・・・・・すみません皆さん。油断してしまいました」

鈴村「仕方ない。まさかアレが演技だとは思わなかった」

リリス「そうですよ。あとは私達に任せてください」

貴浩「よし、この調子で先生達を倒すぞ!!皆は他を抑えてくれ!!」

F「任せろ!!」

F「俺達だってやってやる」

F「やってやるぜぇえええええ!!!」

貴浩「明久、雄二。少し俺は別の相手をやるから先生達を抑えていてくれ」

雄二「わかった」

明久「了解」

鈴村「そう簡単にはいかないぞ」

康太「……俺が相手だ」

鈴村「土屋が相手か。良いだろう、お前の得意としている保健体育でやってやる。
ついて来い!!」

≪　保健体育　≫

鈴村瀬名　６９８点　　ＶＳ　　土屋康太　５８９点

鈴村「教師に挑む度胸は買ってやるが……あまり教師を――舐めるなよ」

康太「……負けない」

鈴村先生とムッツリーニは高橋先生のフィールドから出ると保健体育で戦い始めた。

千葉「なに鈴村先生は勝手にやっているんだよ」

明久「先生の相手は僕ですよ。せっかくですし先生の教科でやりましょうよ」

千葉「なんだとぉ！生意気だよ！いいよ、受けて立つよ！！」

明久と千葉先生も高橋先生のフィールドから出ると美術・家庭科で戦い始めた。

≪　家庭科・美術　≫

千葉琥珀　５８９点　　ＶＳ　　吉井明久　４９１点

秀吉「では、ジュディス先生とリリス先生はワシらがお相手いたす」

雄二「この前みたいに簡単にはいかねえぞ」

≪総合科目≫

坂本雄二　２１２４点　　ＶＳ　ジュディス　５３２１点
木下秀吉　１２７１点　　リリス　５４９１点

それぞれで戦いが始まっていく。

その時、俺はというと

貴浩「お前らの相手は俺がしてやるよ姫路、島田！！」

≪　総合科目　≫

織村貴浩　４２３０点　ＶＳ　姫路瑞希　４２２１点
島田美波　４５１点

島田「ウチら相手を１人でやるっていうの！」

姫路「いくら織村君でも私達相手に勝てるわけないじゃないですか！」

貴浩「余裕だよ！お前らごときを相手するのは」

俺はすぐ様島田に攻撃を仕掛ける。

島田「そう簡単にはやられないわよ」

島田は応戦しようと武器を構えて突進してくる

貴浩「……」

俺は島田の攻撃を余裕でかわしそのまま胸を貫いた。

貴浩「そう簡単には何だって？」

島田「う、うそ、こんなあっさり」

姫路「み、美波ちゃん！！」

俺は今度は姫路に攻撃を仕掛ける。
さすがに真正面から行ったので受け止められるが

貴浩「『重力刀』！」

俺は刀自身に重力を加え、攻撃力を上げる

姫路「えっ！？」

姫路はその攻撃に耐えられず武器を落としてしまう。

貴浩「終わりだ」

俺はすぐ様、重力を解除して姫路の召喚獣の首をはねた。

貴浩「……弱いな」

島田「何なのよアンタは！」

姫路「そうです。なんで私達の邪魔をするんですか？」

島田「ウチらは覗きをしようとしたアキにお仕置しないといけないのに！！」

貴浩「……完全に不合格だな」

姫・島「「えっ！？」」

貴浩「お前らもう今後明久に近づくな」

島田「な、なんでよ！？」

姫路「そうです。理由を教えてください！」

貴浩「理由？良いよ。教えてやるよ！
今回の事は最終確認だったんだがお前らは見事に期待を裏切ってくれたよ。
お前らは今回の件で、何故明久に事情を聞かなかった。
それどころかお前らがやったことは事情を聞くどころか先に攻撃を仕掛けてきた。
ってことはお前らは明久の事を全然信用してないって事だ。
そんなヤツが明久の近くにいて欲しくない！
いや、俺達の近くにいて欲しくない！！」

島田「っ！で、でも」

姫路「でも、それなら翔子ちゃんや木下さんだって同じじゃないで

すか!?」

貴浩「あいつらは俺達の事情を知っているからな。
それとあいつらをお前ら2人と一緒にするな!!
あいつらはまず先に事情を聞いてきたし先に手を出していない。
霧島にいたっては雄二を信じ守ろうとしたんだ!
それと今回の件であいつらが誰かに手をあげたか?
上げてねぇだろうが!!召喚しただけで攻撃は一切していないだろうが
そんなヤツらとお前らを一緒にすんじゃねぇ!!」

島・姫「「ひっ!!」」

俺は声を上げ怒鳴る。

貴浩「目障りだ!!今後俺達に近づくな!!さっさと目の前から消えろ!!」

姫路「そ、そんな…」

俺は泣き出した2人を放って雄二たちの元へ向かう。

強化合宿　～ＶＳ教師陣？　愛と勇気と地位と謀略とだまし討ち～（後書き）

前回の行動は作戦の１種でした。
どうだったでしょうか？

皆さんの感想お待ちしております。

強化合宿　～ＶＳ教師陣？　それはそれとして～

俺は苦戦しているであろう雄二と秀吉を助けるため２人の元に向かった。

雄二「待ってたぜ貴浩」

秀吉「なんとか持ちこたえたのじゃ」

雄二と秀吉はＦクラスのメンバーと共に戦っており
何とか２人の教師の攻撃を防いでいた。

≪総合科目≫

坂本雄二　１６９１点　　ＶＳ　　ジュディス　４８００点

木下秀吉　９５６点　　リリス　４７４９点

織村貴浩　４２００点

Ｆクラス　平均６００点×１０人

貴浩「凄いじゃないか！
　耐えてるだけじゃなく点数も少し減らしているじゃないか」

雄二「指輪の力のおかげだな」

秀吉「ワシらもお主らばかり活躍させられないからの」

須川「俺達の存在も忘れるなよ！」

貴浩「じゃあこれから反撃だな」

近藤「俺達も行くぜ！！」

そこへ周りの女子をなんとか抑えたＦクラスメンバー１０人も参戦した。

Ｆ「お前達ばかり活躍させないぜ！！」

そこですぐさまＦクラスメンバーが教師に向かって突撃したが、

リリス「そう簡単にはいきませんよ！」

Ｆ「この数だ！負けやしないぜ！！」

Ｆクラスメンバー１０人が勢い良くリリス先生の召喚獣に向かっていく。

リリス「それはそれとしてとりあえず超奥義！」

リリス先生が突撃してくるＦクラスメンバーの前に立ち、腕輪を光らせると

リリス「『サンダーソード』！！」

すると、目の前のＦクラスメンバー１０人の召喚獣を全て消滅させた。

数人腕輪の力に直撃したヤツもいたが・・・・・まあＦクラスのヤツだから大丈夫だろう。

F「う、嘘だろ！一瞬でか！？」

リリス「もう一発！！」

F「や、やばい」

F「今のもう一発かよ！」

貴浩「迎え撃つ！」

さすがにもう1発喰らうのはまずいので俺は皆の前に立つ。

リリス「『サンダーソード』！！」

貴浩「『グラビトンノヴァ』！！」

お互い腕輪を発動し攻撃する。その攻撃は相殺され消えていく。

雄二「よくやった貴浩！」

貴浩「だが、今ので点数がかなり減ってしまったぞ」

雄二「それは向こうも同じだ」

≪総合科目≫

坂本雄二	１６９１点	ＶＳ	ジュディス　４８００点
木下秀吉	９５６点		リリス　４５４９点
織村貴浩	４０００点		

ジュディス「織村君、私と戦いましょう！」

そこへすかさずジュディス先生が俺に攻撃を仕掛けてくる。

貴浩「っ！！」

俺はたまらずに距離をとろうとするが、

ジュディス先生は逃がしてくれず壁に追い込まれてしまった。

よほど俺と戦いたいのか？まあイヤではないけど・・・・

秀吉「貴浩！」

リリス「あなた達の相手は私よ」

雄二「チッ！」

貴浩「こっちは何とかしてみる！雄二と秀吉はリリス先生を頼む」

正直、腕輪と召喚獣の操作でこちらも集中力が限界に近い

ジュディス「私を楽しませてね」

貴浩「ご期待に添えられるかわかりませんがね」

貴浩ＶＳジュディス先生、雄二＆秀吉ＶＳリリス先生の戦いが今始まる。

強化合宿　～VS教師陣？　貴浩VSジュディス先生!?～

俺とジュディス先生はお互いに武器を構え対峙する

貴浩「『魔人剣』！！」

ジュディス「甘いわよ、『尖月』！！」

ジュディス先生は槍を突き上げ飛びあがり

ジュディス「『残月』！！」

空中から膝から落下して攻撃してきた。

貴浩「っ！なら『風牙絶咬』！！」

高速の踏み込みで、威力の高い一突きを浴びせる。

貴浩「そこからの『封神雀華』！！」

払い、納刀しながらの打撃へと流れるような連撃を食らわせる。

ジュディス「ッ！」

貴浩「まだまだ！」

俺はそのまま攻撃を続けていく。

ジュディス「甘いわよ」

ジュディス先生も負けずと攻撃をしてくる。

貴浩「魔人剣連牙！！」

ジュディス「やるわね！なら本気で行くわよ。
我に仇なす者を…冥府へ送りし、朧月の棺！」

ジュディス先生は腕輪を発動し攻撃を仕掛けてくる

貴浩「っ！！」

ジュディス「『覇王（はおう）！籠月槍ぉ（ろうげつそう）！！』」

貴浩「ぐはっ！」

俺はジュディス先生の攻撃を食らい膝をつく。
こういう時、フィードバックがあるからかなりきつい……

≪総合科目≫

織村貴浩　９点　ＶＳ　ジュディス　５８１点

ジュディス「あら？まだ残っていたのね。本当に面白いわ！！
なんとか直撃は防げたけどもう体がボロボロだ……
もう次で勝負がつくな……

ジュディス「次で最後かしら？」

貴浩「そうですね……『ブラスト』」

俺は召喚獣とは別の腕輪を発動させる

9点　↓　11点

ジュディス「それは確か清涼祭の時の腕輪だったかしら」

貴浩「そうですよ。なら最後の攻撃いきます！」

俺は瞬時に先生に近づいていき

貴浩「全てを切り裂く！『獣破（じゅうは）！　轟衝斬（ごうしょうざん）！！」

抜刀状態の居合いから横に薙ぎ払い剣を持ち直し、勢いよく斬り上げた

ジュディス「これは驚いたわね」

俺の攻撃は武器で塞がれてしまった。

だが何とか武器は真っ二つに斬れることができた。

ジュディス「今のは危なかったわ。でもこれでおしまいね！」

ジュディス先生は刃があるほうでトドメをさそうと突き刺そうとしてきた。

貴浩「まだだ！！『フルブラスト』！！」

俺はもう一段階、腕輪を発動する。

すると俺の召喚獣の体が真っ赤に染まる。

ジュディス「何をするかわからないけど、コレで終わりよ！」

突き刺そうと攻撃をするが、すでにそこに俺の召喚獣の姿は無かった。

貴浩「これで決める！
　閃け、鮮烈なる刃！　無辺の闇を鋭く切り裂き、仇為すモノを微塵に砕く！
　これで！！『漸毅狼影陣（ざんこうろうえいじん）！！』」

俺は四方から斬撃の刃を食らわせる。

貴浩「お、俺の、か、勝ち、です、ね」

≪総合科目≫

織村貴浩　１８点　ＶＳ　ジュディス　０点

強化合宿　～VS教師陣？　決着～

ジュディス「最後の最後で油断したわね。本当に凄いわね。
でも楽しかったわ。また次もやりましょうね」

貴浩「……もうしばらくはいいですね。
そういえば皆はどうなったんだ？」

俺は周りを見てみると

ムッツリーニは鈴村先生に負けたみたいだ。
明久は点数は減っているが千葉先生に勝ったみたいだな。

ムッツリーニと千葉先生は負けたことが悔しいみたいで
肩を落とし落ち込んでいた。

雄二と秀吉は

リリス「これで終わりよ！『サンダーソート』！！」

雄二「今だ！」

リリス先生が腕輪を発動させ攻撃を放つ。
雄二はその攻撃を待っていたと言わんばかり前にでて攻撃が当たる
直前に指輪を発動させる。

雄二「今だ秀吉！！」

秀吉「わかったのじゃ！！」

秀吉は雄二の後ろから飛び出し指輪を発動させリリス先生に攻撃を放つ。

決着がついたようだな。

≪総合科目≫

坂本雄二　1点　VS　リリス　0点
木下秀吉　6点

どうやら、雄二と秀吉が勝ったらしい。

雄二が指輪の力で攻撃を防いで、秀吉がビットを上手く使って勝ったみたいだな。

貴浩「残りは鈴村先生だけだな」

教師陣の中で残るのは鈴村先生だけだ。
俺達は勝利を確信していると

西村「お前らそこまでだ!!」

明久「げっ!?鉄人!?」

そこで鉄人こと西村先生とスタン先生、森田先生が現れた。

雄二「ここで鉄人かよ!」

秀吉「それに森田先生とスタン先生もおるぞい」

貴浩「さすがにこれはヤバ過ぎるな」

森田「随分と暴れたみたいじゃない！試獣召喚（サモン）！！」

≪総合科目≫

坂本雄二　１点　ＶＳ　森田璃香　６９７６点
木下秀吉　６点
織村貴浩　１８点

森田「いくわよ。万象を成しえる根源たる力…太古に刻まれしその記憶
我が呼び声に応え、今、此処に蘇れ！『エンシェントカタストロフィ』！！」

森田先生が召喚と同時に腕輪を発動させる。
その攻撃により、俺達の召喚獣は一瞬で消滅した。

貴浩「ぎゃあぁあ！！！何コレ？凄い体が熱くて痛いんだけど！？」

明久「だ、大丈夫！！貴浩！！」

俺の召喚獣はまだ自身の腕輪の能力が続いていたので
腕輪の欠陥によりフィードバック効果が通常の４倍になっていたことで
今の森田先生の攻撃により、体が悲鳴を上げている。

そしてあまりの痛さに俺は意識を手放した。

森田「あれ？やりすぎたかしら？」

スタン「やりすぎです。今すぐ織村を救護室へ連れて行かないと」

その後俺は救護室で治療されて、部屋へと戻っていった

合宿の朝

そして朝。

明久が目を覚ますと寝てる秀吉が目の前にいて、その衝動で口付けしようとして……。

明久「夢オチ!?　がっかりだよ畜生!」

・・・・・・・・・という生殺しな夢を見たショックで大声を挙げた。

しかも目の前には秀吉ではなく雄二の顔があった。

今の明久の声で秀吉やムッツリーニ、光一も目を覚ました

秀吉「んむ?……なんじゃ?雄二はまた自分の布団から離れた場所で寝ておったのか?」

明久「秀吉、またってどういう事?」

秀吉「いや、別に大したことではないのじゃが
……雄二は寝像が大層悪い様でのう。
明け方はワシの布団の中に入ってきておって
……やめるのじゃ明久!花瓶を振りかざしてどうするつもりなのじゃ!?」

明久「殴る!コイツの耳からドス黒い血が出るまで殴り続ける!」

ガチャッ！

西村「おいお前ら！　起床の時間だ……ぞ……？」

明久「死ね雄二！　死んで詫びるんだ！　あるいは法廷に出頭するんだ！」

雄二「な、何だ！？　朝からいきなり明久がキまっているぞ！？持病か！？」

雄二は秀吉たちに起こされ目を冷ました。

光一「明久殿落ち着いてください！」

秀吉「明久も落ち着くのじゃ！
　西村先生、すまぬがこやつを取り押さえるのを手伝って頂きたい！」

康太「……！（コクコク）」

西村「……お前らは朝から何をやっているんだ」

花瓶を雄二にたたきつけようとする明久と、
それを取り押さえようとする光一と秀吉とムッツリーニ。
その光景に、朝から呆れてものが言えなくなった鉄人だった。

西村「で、そこの男はこの状況で眠っていられるんだ」

貴浩「Ｚｚｚ…」

そこにはまだ爆睡中の貴浩の姿があった。

明久「まだ寝てたんだ貴浩は」

西村「おい、さっさとおきんか織村兄!!」

鉄人が貴浩の布団を剥ぎ取るが貴浩はまだ起きていなかった。

秀吉「凄いの貴浩は、先ほどまでの騒ぎなどがあったのに起きないとは」

西村「コラっ!!おきんか織村!!」

雄二「凄いなコイツは。鉄人がアレだけやって起きないとはな」

光一「これはさすがに驚くな・・・・・・」

康太「（コクコク）」

明久「西村先生、今のままじゃ貴浩は当分起きませんよ。
今から専門家を呼ぶんで少しまってくださ い」

そこで明久は携帯を取り出しある人物へと電話した。

その人物とは――――

楓「失礼します」

そこへやってきたのは貴浩の妹の楓だった。

秀吉「おはようなのじゃ楓よ。ところでどうしたのじゃ部屋まで来て」

楓「おはようございますヒデ君に皆さん。それは明久君に呼ばれたので」

明久「楓、じゃあ貴浩をよろしくね」

楓「…はい、わかりました。もう兄さんには困ったものね」

西村「織村妹は何をするつもりだ?」

明久「見てればわかりますよ。あと皆、心の準備をしてたほうがいいですよ」

明久はそういうと耳を塞いでいた。
光一も明久と同じように手で耳を塞いでいた。

雄二「明久、これから何が――」

楓「では、いきますね」

楓はそういうといつの間にかにフライパンとお玉をどこからか取り出し

楓「死者の目覚めっ!!!!!」

ジャンジャンジャンジャン!!!!!!!!!

お玉とフライパンを叩きあわせた。

激しい爆音の音が部屋に鳴り響く。

貴浩「ん？……おはよう楓、皆」

するとのっそりと貴浩が目をさました。

秀吉「す、凄い音じゃの……」

雄二「ああ、耳鳴りが凄いんだが」

明久「だから言ったでしょ心の準備をしてたほうがいいって」

雄二「それだけで分かるか！！」

楓「兄さんおはようございます。では私はこれで失礼しますね」

明久「楓ありがとうね」

秀吉「このために楓を呼んだのじゃな」

西村「……本当にお前達は……」

鉄人はもうあきれるしかないのであった。

強化合宿編　～最終決戦前～

自習時間、

俺達は朝の貴浩の件で話していた。

愛子「朝からそんな事があったんだね。本当に面白いな貴浩君は」

秀吉「あの音はもはや攻撃なのじゃ」

貴浩「そうか？俺はいい目覚ましになんだがな」

優子「楓も朝から大変ね」

楓「もう慣れましたよ」

明久「僕は最初のころは本当にあの音には驚いたよ」

雄二「ってか俺は明久に朝から襲われそうになったんだが…」

刀麻「何やったんだ雄二？」

雄二「わからん」

刀麻「なぜ襲ったんだ明久？」

明久「僕が目を覚ましたら目の前に雄二の顔があったんだよ！
　直前までいい夢を見てなのに起きたらこんなブサイクの顔だよ！

殴りつけるしかないじゃないか！！」

貴・刀「「なるほど！！それはそうだ！！」」

雄二「納得するな！！」

翔子「……大丈夫。雄二がカッコいいのは私が知ってるから」

雄二「ん、そうか／／／」

いきなり翔子に言われた雄二の顔が赤く染まる。

貴浩「雄二、顔真っ赤だぞ」

明久「いいよね雄二は。そんな事をいってくれる人がいて。
僕にはそんな人いないからね」

貴浩「俺もだな。そんなヤツがいたらいいな」

明久「そうだね」

雄二「お前らそれ本当にそう思ってるのか？」

雄二が驚いたように俺達に聞く。

明久「え？当たり前じゃないか！僕にそんな人いるわけないじゃないか！」

貴浩「いたら会ってみたいな」

俺と明久は同時に返答した。

明・貴「「えっ？」」

明久「貴浩にはいるじゃない。まさか気づいていないの？」

貴浩「明久にだっているだろ。まさかまだ気づいていないのか？」

貴・明「「誰が俺（僕）に好意を向けているって言うんだ！？」」

貴浩「明久にはみｋ――」

明久「貴浩には優――」

俺達が同時に相手の名前を言おうとすると

優・愛・命「「うわぁアアあああああ！！！！！」」」」

優子と愛子、命の３人の声によってかき消された。

そして俺は命に、明久は優子と愛子によって連れて行かれた。

貴浩＆命

命「貴浩君は何言おうとしているの！？」

貴浩「悪ぃ。つい口が滑りそうになった」

命「もう気をつけてよ」

貴浩「ああ、気をつけるよ。

…ってか命が明久に告白したらいいんじゃないのか？」

命「こ、告白！？わ、私にはまだ早いよ」

貴浩「早くしないと他のヤツに明久を取られるぞ。
明久のヤツ、清涼祭の時から人気が出ているからな」

命「え？そうなの？」

貴浩「ああ、明久は料理が上手いし顔も悪くないからな。
今まで人気がなかったほうが不思議なんだよ」

命「そうなんですか」

貴浩「急かす訳じゃないが命も早く決めたほうがいいぞ」

命「うん・・・・」

そうして俺と命は雄二たちの元へと戻った。

明久＆優子＆愛子

愛子「吉井君は何言おうとしてたの？」

明久「え？何って。それは優子さんと工藤さんが貴浩のことが好きだって事を」

愛子「うわぁあああ。もういいよ！そこでストップ！！」

優子「明久君はいつからその…私達が・・・あの…貴浩の事を好きってことに気づいたの？」

明久「僕が気づいたのは清涼祭の時、貴浩たちが休憩から帰ってきたときからかな」

優子「結構前から気づいていたのね」

愛子「なんだか恥ずかしいね」

明久「で、２人は貴浩に告白しないの？」

愛子「告白はまだかな。まずは貴浩君に僕達の気持ちに気づいて欲しいからね」

優子「それとなくは少しずつ行動はとってるのだけど…」

明久「気づいてくれないんだね。でも早くしないと他の人に取られるかもよ」

優・愛「「え？」」

明久「貴浩は昔から女子に人気があるからね。ただ貴浩が鈍感なだけで気づいていないだけだけど。
だから早めに行動したほうがいいよ。
僕でよかったら応援するから」

優子「え？そう、ならお願いしようかしら」

愛子「吉井君これからよろしくね」

明久「僕も貴浩が幸せになるなら手伝うよ」

明久たちも話を終え雄二たちの元へと戻った。

貴浩「で雄二、本題だが作戦のほうはどうなっているんだ？」

雄二「今、ムッツリーニと光一、砂原に探らせている。それを今は待っている」

しばらくすると、

光一「今、戻った。昨日、高橋先生やジュディス先生たち教師陣を倒した噂が広まって
全学年の男子が覗きに参加するらしい」

雄二「なに！？もう全員男子参加なのか？」

光一「ああ、昨日の戦闘が思ってたより、好評でな。皆、乗り気らしい」

明久「まあ、一昨日から女子生徒だけでなく教師も倒してるからね」

秀吉「そうじゃな」

雄二「で、犯人の方はわかったのか？」

光一「それは康太と砂原が突き止めたらしい」

貴浩「それは本当か？」

康太「……（コクン）」

砂原「うん、犯人はね（ごにょごにょごにょ）だよ」

雄二「あいつらが犯人か。よくもやってくれたな」

康太「・・・・・・ただ、それは覗きの犯人であって貴浩の脅迫の犯人ではない」

貴浩「・・・そうか、でも覗きの犯人が見つかっただけよしとするか」

雄二「なら砂原。翔子たちを呼んできてくれ」

その後、Ａクラスから霧島さんと優子、愛子、なのは、刀麻、砂原、椎名さん、
Ｂクラスから一子と五十嵐さん、Ｃクラスから小山、
Ｄクラスは玉野、Ｅクラスからは中林、
Ｆクラスは俺、雄二、明久、秀吉、ムッツリーニ、、楓、命を呼び作戦会議を開いた。

そして今夜、決戦が始まる。

強化合宿編　～最終決戦前2～

雄二「よし、じゃあこれから最後の決戦を仕掛けるぞ。
　光一は例の犯人たちの動向を探ってくれ、動いたら連絡を頼む」

光一「わかった」

雄二「そして、今回は途中で裏切るからあまり女子や先生を倒しすぎるなよ。
　今から部隊を５つに分ける。
１班は俺に２班は明久に３班はムッリーニに４班は秀吉に５班は貴浩にだ。
そして、２Ｆを俺と秀吉の部隊が、１Ｆを貴浩の部隊が、
大浴場に続く廊下を明久とムッツリーニの部隊が
まずは攻めるフリをして途中で反旗を翻す」

明久「３Ｆはどうするの？」

雄二「３Ｆは他の男子たちに任せる」

明久「わかったよ」

雄二「１番貴浩がきついかもしれないが、俺達がたどり着くまで耐えてくれ」

貴浩「雄二、別に倒してしまっても構わないんだろ？（ニヤッ）」

雄二「ああ、かまわないぜ（ニヤッ）」

秀吉「反旗を翻すのは、その犯人が姿を現した時で良いのじゃな」

雄二「ああ、あいつらは自分の保身を大事にしているだろうからな。
おそらく、明久とムッツリーニが１Ｆを抜けたら姿を現すだろう。
その時が反撃の時間だ！」

刀麻「なあ雄二？俺は誰を援護すればいいんだ？」

刀麻は唯一Ａクラス男子の協力者なので、俺達みたいに指揮する部隊がいない。

雄二「本当は貴浩についてほしいが刀麻は明久たちの部隊についてくれ。
一応女子生徒の代表核には話を通して入るが、
話を聞いていない女子もいるだろうし、
教師にも鉄人以外には話していないからな。
まず、第１目標としては明久とムッツリーニの部隊を
大浴場前の廊下にたどり着かせる事だからな」

刀麻「わかった」

雄二「それで教師の布陣だが、おそらく
３Ｆを布施先生や遠藤先生が固めているだろう。
２Ｆは森田先生やレイブン、ジュディス先生、
１Ｆは高橋女史にスタン先生、ルーティ先生、リリス先生、
そして、大浴場前に鉄人や鈴村先生が固めているはずだ」

秀吉「それを聞くと貴浩の部隊が一番きついじゃろうな」

明久「いや、２Ｆもきついと思うよ」

貴浩「そうだけど、今回は教師を倒す事が目的じゃないからな」

雄二「そうだ。さっきも言ったが倒しすぎてもダメだし
倒さなすぎてもいけない。犯人に疑われたらアウトだからな。
それに明久とムッツリーニを大浴場前に連れていかないといけないからな」

明久「ねえ雄二。どうやって犯人が現れた事を僕達に知らせるの？」

雄二「なあに、それはちゃんと準備してある。
ヤツらが現れたら放送を流してもらう手はずになっているからな」

貴浩「じゃあ、その放送が流れるまで耐えればいいんだな」

雄二「そうだ。それじゃあ、真犯人退治に行くぞ！」

貴浩「そして明日はゆっくり風呂に入りたい・・・・・」

秀吉「まぁの。最後位はゆっくりしたいの」

雄二「そのためにも今日ケリをつけるぞ」

貴浩「そうだな。さてとやりますか！」

秀吉「皆、準備は良いかの」

明久「皆、頑張ろう！」

刀麻「仕方ないな」

光一「覚悟しろよ！」

康太「・・・・・・頑張る」

雄二「野郎共ぉ出陣だぁ！！！！！」

F男子「「「「「「「「おぉおおお！！！！」」」」」」」」

強化合宿編　～最終決戦開始～

俺達が２Ｆへと向かうと
すでにＤクラスの男子と女子達が戦闘をしていた。

女子「やっぱりきたわね覗きの主犯格！」

女子「ここは通さないわ！」

明久「予想通り守備部隊がいるね」

森田「悪いけどここは通さないわよ！」

ジュディス「ごめんなさいね」

レイブン「これも仕事だからね」

雄二の予想通りここには、森田先生とジュディス先生、レイブンがいた。

１つ予想外だったのは何故か霧島さんがいたことだが、
おそらく霧島さんは大丈夫だろう。
雄二が心配で来たんだろう。・・・・・・・・なんて羨ましいんだ。

雄二「よし、ここは作戦通り俺と秀吉の部隊で抑える。皆は先に行けっ！！」

そういうと雄二と秀吉の部隊が盾となって俺達に道を作ってくれる。

貴浩「行くぞっ！！」

明久「頼むよ雄二、秀吉！」

森田「そうはさせないわ！レイブン先生！！」

そこで俺達の前にレイブン先生が現れる。

貴浩「レイブンに構うな。突っ込め！！」

俺の指示通り、皆レイブンと戦闘することなく通り抜ける事ができた。

俺も通り抜けようとすると、レイブンが俺の横までやってきて

烏丸「犯人見つかる良いな（ボソッ）」

貴浩「なっ！？」

突然、俺にそんな事を言ってきた。俺は脚を止める。

なんで、知っているんだろうか・・・・教師には鉄人しか言ってないはずだが

烏丸「偶然聞いてしまってね・・・・まあ応援するよ（ボソッ）」

俺達は小声で会話する。

貴浩「……先生は俺達の味方ってことですか？」

烏丸「今回はね」

貴浩「……そうですか」

烏丸「早く行きなよ」

貴浩「わかりました」

俺はレイブンに軽く頭を下げると１Ｆへと降りていった。

１Ｆに降りてみるとすでにＡ・Ｂ・Ｃの男子と女子達が戦闘を繰り広げていた。

高橋「やはり来ましたね織村君」

スタン「待ってたよ織村」

ルーティ「ここまでよ」

リリス「あなた達は厳しく指導してあげるから」

そこには雄二の予想通り４人の教師がいた。

明久「教師勢ぞろいだね」

刀麻「そうだな。さすがにこれはきついな」

貴浩「明久！ここは俺たちに任せて先に行け！！」

俺は明久たちの前にたち先に進むよう促す。

明久「わ、わかったよ」

康太「・・・・・・・・頼む」

刀麻「頼むぞ貴浩！」

リリス「簡単には行かせないわよ『サンダーソード』！！」

明久たちが抜けようとすると
リリス先生の攻撃で盾となっていたCクラス男子が数人やられた。

姫路「行かせませんよ明久君！」

島田「そんなに覗きたいのねアキ！」

そこへ今度は姫路と島田が姿を現す。
優子と愛子の姿も見える。ちなみに楓と命は入浴中だ。
２人も最初は作戦に参加すると言っていたが俺と秀吉が猛反対した。
理由は危ない目に会わせたくないから。
風呂は誰にも覗かせないから大丈夫だろうしな。

明久「っ！！」

明久たちが足を止めようとすると

貴浩「そのまま進め！！『試獣召喚（サモン）』！！」

≪　総合科目　≫

織村貴浩　４８９２点

ＶＳ

高橋女史　８２１７点　＆　スタン　４８９２点
ルーティ　５７９１点　＆　リリス　５４８６点
姫路瑞希　４４７２点　＆　島田美波　９３１点
木下優子　３９９２点　＆　工藤愛子　３７２９点

貴浩「行けっ！！明久、ムッツリーニ、刀麻！！」

明久「う、うん」

貴浩「行って（俺達の）未来を切り開いてくれ！！」

姫路「そうはさせません！！」

姫路が明久たちに腕輪を発動させようとする。

貴浩「須川！！」

須川「了解！！ＫＭＦ団シールド！！」

須川がそういうと数人のＦクラスメンバーが盾となり
明久たちへの攻撃を身をもって防いでくれた。

リリス「なら、『サンダーソード』！！」

今度はリリス先生が腕輪を再び使い襲い掛かってくる。

貴浩「やらせない！！『グラビトンノヴァ』！！」

俺も腕輪を発動させ攻撃を相殺させる。

明久「ありがとう貴浩！！」

そこでようやく明久たちが大浴場へと続く階段を下っていく。

貴浩「須川、近藤！！これ以上敵を通すなよ！！」

須・近「「了解！！」」

これから各階で激戦が始まる。

強化合宿編　～最終決戦～

姫路「邪魔ですよ織村君！！」

島田「そこをどきなさい織村！！」

島田と姫路が俺に攻撃を仕掛けてくる

貴浩「・・・・・・」

俺は2人の攻撃を軽くかわしていく

貴浩「まず島田から、封神雀華（ふうじんじゅっか）！！」

俺は島田の召喚獣に向かって刀を払い、
納刀しながらの打撃へと流れるような連撃をあびせる。
そこで点数差もあり一瞬で島田の召喚獣が消滅する。

島田「え！？うそ！？」

貴浩「次は姫路、紫電滅天翔！」

俺は前進しながら連続突きを繰り出し斬り上げる。
（ちなみに本当のテイルズの技なら電撃を帯びていますがこの技にはないです）

貴浩「とどめ、すべてを切り裂く『獣破轟衝斬（じゅうはごうしょうざん）』！！」

俺は抜刀した状態で姫路の召喚獣に近づき、

居合いから刀で横に薙ぎ払い刀を持ち直し、勢いよく斬り上げた。
さすがに姫路の点数でも攻撃が直撃したので消滅した。

貴浩「よし、まず2人討ち取った！！」

B「すげぇ、一瞬で2人をやったよ」

A「しかもあの姫路相手だぜ」

C「これで理想郷（アガルタ）に近づけるな」

A「ああ、確かコイツらは昨日高橋女史を打ち倒したらしいからな」

あちこちで男子達が声を上げる。
これで一応男子達の指揮は上がったな。

須川「良かったのか？あの2人を倒して、作戦に支障はないのか？（ボソッ）」

貴浩「大丈夫だ。あの2人は敵だからな。さあ皆、踏ん張るんだ！！」

ABC『『『おお！！！』』』

高橋「これ以上の失態はしませんよ」

A・B・C男子たちと教師・女子連合が戦いが激しくなる。

貴浩「よし須川、近藤。俺達の部隊を少し下がらせろ（ボソッ）」

近藤「わかった（ボソッ）」

須川「戦力を温存するんだな（ボソッ）」

貴浩「さて、あとは現れるのを待つだけか・・・・・」

～　2F　～

雄二「皆、粘れ！！粘れば俺達の勝ちだ！！」

DEF『『『おお！！！』』』

ジュディス「簡単にはやられないわよ」

2Fでも3Fからやって来たEクラス男子達が加わり激戦と化している。

雄二と秀吉はお互いコンビーネーションで上手く立ち回っている。

秀吉「雄二よ、あとは犯人が現れるのを待つだけじゃな」

雄二「ああ、頼むぞ明久」

～　女子大浴場前　～

明久「よし、目的地に到着したね」

西村「吉井よくここまで来れたな」

明久「鉄人！」

僕達の前には鉄人と鈴村先生、それになのは、数人の女子生徒がいた。

刀麻「どうする明久？まだ連絡はないが・・・・」

明久「…連絡があるまで戦うよ」

刀麻「わかった！」

康太「・・・・・鈴村先生の相手は俺がやる」

明久「わかったよムッツリーニ。じゃあ僕は鉄人だね」

刀麻「なら俺はなのはの相手――」

康太「・・・・八神を相手にしたら後ろから刺す」

刀麻「・・・はやめて、まわりの女子を相手するか・・・・・」

康太「・・・・・・ならいい」

明久「ムッツリーニ完全になのはの事好きだよね」

康太「・・・・そんな事実はない」

なのは「えっ！そうなの・・・・ガッカリ」

康太「！？」

明久「あっ、なのはを落ち込ませたよ」

康太「・・・・・・・（オロオロ）」

なのは「なんて嘘だよ土屋君♪」

康太「・・・・・・・心臓に悪い」

鈴村「ゲフン・・・・・・・もういいか？」

明久「あっ！？忘れてた！よし、行くぞ鉄人！！」

康太「・・・・今度は負けない『試獣召喚（サモン）』」

鈴村「教師が生徒に負けるわけにはいかないからな『試獣召喚（サモン）』」

≪　保健体育　≫

土屋康太　７７４点　ＶＳ　鈴村瀬名　６９８点

鈴村「なに！？」

土屋「・・・・・・言ったはずだ。負けないと」

鈴村「っ！」

そこでムッツリーニと鈴村先生の戦闘が始まった。

明久「鉄人いきますよ『試獣召喚（サモン）』！！」

≪　総合科目　≫

吉井明久　２９６２点

西村「ほう、かなり点数が伸びたじゃないか」

明久「それは貴浩たちのおかげですよ」

今度は僕と鉄人の戦闘が始まった。

鉄人は色々あって今は自分の召喚獣を持っていないらしいので自分の体で戦っている。

召喚獣の動きについてこれるなんて化け物だよ！

刀麻や他のＡクラスの男子と一緒に女子と戦っている。

あとは連絡を待つだけだ・・・・・・

強化合宿編　～最終決戦　作戦の時～

～大浴場前～
康太ＶＳ鈴村

鈴村「確かに昨日のお前と比べたらは点数は高いが教師が負けるわけにはいかない！」

康太「……俺もなのはの前では負けられない。昨日の借りは返してやる」

ムッツリーニと鈴村先生の召喚獣が激しくぶつかり合う。

鈴村「確かにお前の動きは早い。目では追いきれない。
だが、直線的だから真正面に立たなければどうということはない！」

ムッツリーニは今まで腕輪の能力を発動させた時は直線的な動きでしか動いていなかったのだ。

その事を鈴村先生に知られているので腕輪の力を発動しても動きが見切られてしまっている。

徐々にムッツリーニの召喚獣が押され始めてきた。

康太「…確かにそうだ。俺は今まで直線的な動きしかしてこなかった」

鈴村「だろうな。ではこれで終わりにしよう！」

鈴村先生はこれで終わりだと言わんばかりに召喚獣を特攻させてきた。

康太「……だが、俺は昨日までの俺とは違う！」

康太が再び腕輪を発動させる。

鈴村「その腕輪は俺にはきかない！」

康太「…甘い」

康太の召喚獣が鈴村先生の召喚獣の左腕を切り落とす。

鈴村「なっ！？」

康太は腕輪を発動させているが、今までとは違い直線的な動きではなく
急停止や曲がって見せたのだ。

康太「俺がいつまでも同じ戦法をすると思うなよ」

康太は今までは直線的な動きしか出来なかった。
だが、昨日の教師との戦いでこのままではいけないと思い、
明久と貴浩の２人に操作を学んでいたのだ。

康太「…これで終わりだ」

今までの康太の動きとは違い四方八方に動いて見せ鈴村先生をかく乱し

召喚獣を押し倒し首元に小太刀を当てた。

康太「…俺の勝ちだ」

鈴村「…お前を甘く見すぎたか。さあトドメをさせ」

康太「…それはしない。そろそろ合図がくるだろうしな」

鈴村「合図だと？」

康太と鈴村の勝負は康太の勝ちで収まった。

～　1F　～

今、俺は優子と愛子の対峙していた。

優子「さすが貴浩ね。攻撃が当たらないわ」

愛子「2人がかりなのにね」

貴浩「前より召喚獣の操作が上手くなってるよ。そこのバカ2人よりは凄いな。
　でもそれじゃあ俺には勝てないよ」

といっても本気で戦ってないけどねお互い・・・・

早く合図が来ないのか　と待っていると

≪ピンポンパンポーン≫

そこで放送のチャイムがなる

F「「「「来たぁあああああ！！！！！」」」」

チャイムがなると待ってましたと言わんばかりに
Fクラス男子メンバーが叫んだ。

砂原≪皆ぁ！お待たせしたねん♪作戦開始だよん♪≫

高橋「・・・この声は砂原さんですね。
　あなた達は今度は何を考えているのですか？」

貴浩「これからすぐわかりますよ」

俺はそういうと優子と愛子から離れて

貴浩「行くぞぉ！！全軍突撃ぃ！！」

男子「「「「うぉおおおお！！！！！」」」」

全男子の咆哮の声が聞こえる。
おそらく雄二や明久も同じことをしたのだろう。

男子達はこれが何の作戦かも知らずに我先へと突破しようとする。

そして・・・・・

貴浩「今だ！」

俺が合図すると無防備になっている男子の背中からFクラスメンバーが攻撃を加える。

A・B・C「「「なっ!?」」」

いきなりの俺たちの攻撃にA・B・Cクラスの男子と教員達、また事情を知らない女子達が驚きを見せる。

貴浩「これより俺達Fクラスは女性軍の味方をする!!」

F「「「うおぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!」」」

A男子「なんだと!?」

B男子「裏切るつもりか!」

貴浩「裏切るも何もこれが俺達の最初からの目的だからな。
・・・・・さて、須川、近藤。こいつらは今からここを突破して
我らが女神であられる楓と命の入浴を覗こうとしているんだがどうする?」

近藤「ふっ、そんなこと言わなくてもわかるだろ」

須川「我らが女神に手を出そうとするものは何人たりとも許しはしない。
それが俺達――」

F『異端審問会!!!』

いつもの黒いコートを着た集団が男子達の前に現れる。
・・・・・なぜか釘バットや鎌などの凶器を持って。俺は仕込みトンファーを。

正直、楓と命を入浴させた理由の1つにコレも含むんだが・・・・

貴浩「さあ皆！異端者をコロs(ゲフン)こらしめるんだ！！」

F「「「おおぉおお！！！！」」」

C「今、コロスって言わなかったか！？」

B「それに危ないモノもってるだろうが！？」

貴浩「気のせいだ。なあ須川？」

須川「気のせいだな」

貴浩「これは聖書だよな？」

近藤「ああ、これは俺達の聖書だな」

貴浩「よし、やれ！」

A「え？ちょっ、待て！？」

俺の掛け声によりFクラス男子がA・B・C男子に突撃していく。

・・・・・・・・・・・・生身で

優子「な、なんか本当に凄いわねFクラスは・・・・・」

愛子「う、うん。さすがというべきかな」

貴浩「2人ともなに呆けてるんだ?俺達も行こうぜ」

俺が突撃しようとすると

高橋「待ってください。これはどういうことか説明してください」

貴浩「優子、愛子頼む。俺は少し用事があるからな」

俺は教師達の説明を優子に任せると
少し場を離れ犯人の1人の元に向かった。

強化合宿編　～それぞれの戦い～

貴浩「よぉ！そんなところで何をしてるんだ？」

俺は物陰に隠れているヤツに向かってそう言った。

貴浩「お前の正体はもうわかってるんだよ。
さっさと出て来い久保利光！！」

久保「ばれていたのか」

俺が名を呼ぶと久保が俺の前から姿を現す。

貴浩「まさか俺への脅迫状の犯人がお前だったとはな。少し驚いたよ」

久保「何故僕だと思ったのかな？」

貴浩「最初は俺の周りには美女が多いからな。
だから最初は普通に男子からの嫉みによるものだと思っていたが、
それならそばにいるもの人に近づくなと書かず女子に近づくなと書くはずだ。
でもそうしなかったのは女子ではなく男子に近づいて欲しくなかったんだ。
で、次は女子が俺に送ったのかとも思ったが
他の男子にはなく俺にしか手紙が来なかったから分からなかったんだが、
この合宿での隠しカメラの事件で1人目の犯人が清水だった

んだ。
　それで気がついた。もしかしたら同姓愛者のヤツが犯人じゃないかってな。
　それで以上のことが該当するのがお前しか見つからなかったんだよ。
　お前には明久の写真を売った事があるからな」

久保「・・・そうかい。それで・・・・」

貴浩「じゃあおとなしく捕まれ」

久保「いやだね。僕は君を倒して吉井君の隣には僕が立つんだ」

貴浩「お前は・・・明久のことが好きなのか？」

久保「ああ、好きだ！この気持ちに偽りは無い！
　吉井君のそばに居たいんだ。それなのに吉井君の隣にはずっと君がいる。
　僕が吉井君のパートナーになるんだ！
　だから僕は君を倒すんだ！『試獣召喚（サモン）』！！」

貴浩「チッ『試獣召喚（サモン）』！！」

≪　総合科目　≫

織村貴浩　　ＶＳ　　久保利光
３０９２点　　３９７６点

久保「先ほどの戦いまでで点数が減っているようだね」

貴浩「そうだな。だが俺は負けやしねぇよ！！」

そして俺と久保が戦闘を開始する。

～　2F　～

チャイムが鳴って

雄二「秀吉。部隊のほうは任せるぞ。俺は犯人のところに挨拶にいってくる」

秀吉「任せるのじゃ。頑張るのじゃぞ雄二」

雄二「ああ」

俺は隠しカメラの犯人の1人の前まできた。

雄二「よう根城」

根城「貴様は坂本！」

雄二「さて、ここで大人しく捕まってくれるとありがたいんだけどな」

根城「そうはいくか！」

根城はそういうと隠し持っていた木刀をとりだし構えた。

雄二「・・・・・・やれやれ、丸腰の相手に武器か？」

根城「貴様にはこれぐらいじゃなきゃ敵わないからな」

雄二「・・・・・・まぁ良い。さて殺ろうか！」

根城「ク・・・・・・ッ！い、　行くぞ！」

雄二「ああ、来な」

根城「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

そして雄二と根城の戦いが切って落とされた

～　大浴場前　～

？？？「もう少しだ・・・・・・」

もう少しで女子の裸が見れるぜ！

俺はまわりにいる男子達を押しのけ進んでいくと

明久「そうは問屋が卸さないよ根本君」

根本「!?　よ、吉井・・・・・・」

大浴場の一歩手前に吉井が目を瞑って佇んでいた。

明久「・・・・・・根本君、何故こんな事をするんだ?
　なんで僕達と陥れようとしたんだ」

根本「決まっている。俺はお前らに復讐するためだ!
　お前らのせいで俺は友香と別れてしまったんだ!!」

明久「それは根本君が卑怯な真似をしたからだよ」

根本「う、うるせぇ!!お前らが悪いんだ!!
　おい、お前ら!吉井を殺るんだ!そしたら女子風呂までもう少しだ!」

なのは「ここから先にはいかせないよ」

そこでなのはが現れ、男子達の召喚獣を倒していく。

根本「相手は女だ。殴るなり蹴るなりしてから通れ!!
　そしたら目的地はすぐそこだ!!」

男子「「「おお!!」」」

明久「な、なのは危ない!」

なのは「え?」

なのはが他の男子の召喚獣を倒しているところへ
根本の言葉を聴いた男子達がなのはに殴りかかろうとする。
なのはは自分が殴られると思い目を閉じる。
だが、時間がたっても殴られはしなかった。
なのはが目を開けてみるとそこには
康太「・・・・・なのはに手をだすな！」
ムッツリーニがなのはの前に立ち、殴りかかろうとした男子を倒していた。
刀麻「おいおい、女子に手を出そうとするなんて最低だな」
西村「お前らは厳しく指導したほうがいいな」
鈴村「教育的指導が必要なようだな」
そして横から刀麻と鉄人、鈴村先生が現れ男子達を倒していく。
明久「ここまでだよ根本君」
根本「何だと！！」
明久の言葉に根本は明久に殴りかかる。
しかし、明久は召喚獣で受け止めたがフィードバックが
起こるはずの明久には何一つダメージが起きない。

根本「何だと!?」

明久「・・・・・・君の拳なんて僕にフィードバックを起こさせるだけの
ダメージはないみたいだね?」

根本「クッ!」

根本は一歩下がって体制を整える。

明久「根本君・・・・・・君は僕の友達を陥れた!だから僕が君を倒す!!」

根本「何ぃ!」

そして明久と根本の戦いが切って落とされた。

アンケート？（前書き）

今回は皆さんの知恵をお貸しいただいたらなと思っております。

アンケート？

先ほども言いましたが皆さんの知恵をお借りしたいのですが、
自分、まさかこの小説がここまで続くとは思っていなくて
いつの間にかにお気に入り登録が１３３件もありました。自分でも
驚きです。
今までは自分の妄想で書いてきましたが少しピンチ気味なので力を
貸して欲しいです。
２つアンケート？がありまして
１つは
Ａ）この『強化合宿編』の後に行うであろう
『肝試し編』の主要キャラの妖怪の案をだして欲しいなと思い
まして、
自分がそこまで考えずにオリキャラを作ってしまったんで
その妖怪をなんにするか全然決めてなかったんですよね（汗）
そして、あんまり妖怪の種類に詳しくもないんですよね・・・・
・
なので皆さんから知恵をお借りしたいんですが・・・・
これは１度『如月グランドパーク編』の時に貴浩、楓、命の３
人は募集したのですが
もう１度しておこうと思いまして、
≪貴浩≫≪楓≫≪命≫≪翔子≫≪刀麻≫≪砂原≫≪椎名≫
の７人の妖怪の案をだしていただけたらなと思っています。
ちなみに今出ている案は
貴浩・・・トリグラフ、鬼
楓・・・ティターニア、雪女
命・・・ウンディーネ、座敷わらし
という案が出ています。

２つ目は
Ｂ）腕輪の能力について
主要キャラの腕輪の能力について
こんな能力だったらいいなと言うのがあれば教えてください。
≪明久≫≪雄二≫≪秀吉≫≪翔子≫≪優子≫の
５人の腕輪の能力を募集しています。

以上の２つのアンケート?を行っています。
皆さんの知恵をお貸しくださると嬉しい限りです。

締め切りにつきましては
Ａは強化合宿が終わるまでにはと考えています。
Ｂにつきましては期限はまだ考えていませんが
明久の腕輪の能力だけは強化合宿が終わるまでには欲しいなと思っています。

これからもよろしくお願いします。

強化合宿編　～貴浩ＶＳ久保～

～　１Ｆ　～

カン！　キィン！　キィン！

久保「ふん！」

貴浩「はっ！」

俺と久保は数度、打ち合うとお互い距離を取る。

貴浩「さすがＡクラスだな。でもお前には負けられない！」

俺は久保の召喚獣に足を引っ掛けて倒すと左手で銃を構えた。

貴浩「久保、お前の負けだ」

久保「・・・・・ああそうだねっと言うと思ったかい！」

貴浩「何！？　ッ！！」

久保が懐から何かを俺の目に向かって投げてきた。　目潰しか！？

久保「ふふふはははは。　油断したね、織村君！！」

貴浩「っ！！」

そこで俺は胸に痛みを感じる。

今ので俺の召喚獣が攻撃を受けたみたいだ。

≪　総合科目　≫

織村貴浩　　ＶＳ　　久保利光
７２５点　　１７６１点

久保「さてこれで終わりだよ。これで吉井君の隣は僕のものだ」

貴浩「っ油断したぜ。まさかこんな手まで使ってくるとわな。
だがまだだ！言っただろ俺は負けねえよ。
こんな卑怯な手を使ったお前にはな」

久保「くっ」

貴浩「久保、こんな勝ち方をして明久の隣にいたいのか？
それに明久の隣は俺のもんでもねえし、お前のものでもねえよ！」

久保「・・・・」

貴浩「それになこんな方法で明久の隣にいることが本当にお前が望んでた関係なのか！？
違うだろ。お前が望んでいる関係は対等な対場で笑い合える関係だろうが！
それにな別に俺がいたからお前が明久の友達になれねえんじゃねえよ！
お前が明久のところに向かっていかないからだろうが！いい加減に目を覚ませぇ！！」

俺は召喚獣の持っていた刀を前に向けて、久保の召喚獣の心臓部に突き刺した。
それと同時に久保の召喚獣は消える。

≪　総合科目　≫

織村貴浩　　ＶＳ　　久保利光
７２５点　　０点

久保「・・・・すまないことをしてしまったね織村君」

貴浩「自分の間違いに気づいたんだそれでいい。
・・・・・・それより、久保、あの写真誰から買ったんだ？」

久保「こういうのは言ってはいけないんだけど・・・・・Ｄクラスの清水さんだよ」

・・・清水か。あいつもムッツリーニみたいに隠し撮りをしているのか。

久保「もちろん、あの写真は全て処分するよ」

貴浩「ああ、頼むぜ」

久保「・・・・・・・・・では、僕はこれで・・・」

貴浩「…待てよ久保。今度明久とＡクラスに遊びに行くからな。
そこでお前がどう行動するかは任せる・・・・」

久保「ありがとう。今回は本当にすまなかったね」

さて、これで終わったかな。後は明久と雄二たちだな。

俺は残りの男子達を始末するかな・・・・・

強化合宿編　～雄二の戦い～

～　2F　～

貴浩が久保と戦っていた時・・・・・・

根城「はっ！」

雄二「よっと」

俺は根城の攻撃をよけながら苦笑していた。

根城「クッ！　ニヤニヤしやがって！」

雄二「ん？　ああ、すまんな。お前の攻撃が遅くてな、つい」

根城「うるせぇ！お前のそういうとこが昔から嫌いだ・・・・・・」

雄二「はは、分かっているさ」

根城と俺は中学校からの知り合いだ。

こいつは中学時代、翔子に惚れており何かと俺に喧嘩を売ってきたんだ。

……まあ全部返り討ちにしてるがな。

根城「今度こそ霧島を俺のものにしてやるんだ！」

雄二「翔子の気持ちを確かめずにか？」

根城「ふん！　そんなのは関係ないな！」

雄二「・・・・・・クソが（ボソッ）」

根城「何か言った――クッ！！」

殺気をただ漏れにすると、根城はたじろぐ。

おっと、危ない危ない。　昔の自分に戻るところだったぜ。

根城「・・・・・・さすが悪鬼羅刹と呼ばれた坂本だな・・・・・・」

雄二「でもな、お前は俺には勝てないし、翔子もお前のものにはならない（ニヤッ）」

根城「何だと！？」

雄二「もう翔子は俺の女でな。他の男なんかにはやらねえよ！」

根城「っ！？　だ、黙れぇえええ！！」

雄二「じゃあな根城！」

俺は全神経を集中して拳をヤツの腹に叩きこんだ。

根城「グハッ！　な、何故俺がお前に・・・・・・（バタリ）」

雄二「・・・・・・・・・・・・中学生時代の自分に戻っただけだ

（ボソッ）」

根城は壁に叩きつけられ気絶した

雄二「やれやれ、悪鬼羅刹は卒業したんだがな・・・・・よっと」

俺は苦笑しながら気絶した根城を引きずって
秀吉たちと合流した。

翔子「・・・・・・・雄二」

雄二「翔子か？」

翔子「・・・・・終わった？」

雄二「こっちはな」

根城を倒した後、翔子がやってきた。

翔子「・・・・・・ゆう（ポン）――？」

雄二「大丈夫だ・・・・・中学校の頃の俺には戻ってない」

翔子「・・・・・・うん」

雄二「さて秀吉、貴浩たちと合流だな（ぐいぐい）――ん？」

俺の隣で翔子が腕の裾を引っ張る

翔子「・・・・・・雄二、話がある」

雄二「ああ、分かった・・・・・秀吉、すまんが根城を頼む」

秀吉「ああ、任せるのじゃ」

俺は秀吉にそういうと翔子についていった

雄二「それで話ってなんだ？」

翔子「織村にね。雄二をもう少し信じてあげてって言われたの」

雄二「・・・・・・それで？」

翔子は如月ハイランドで見せた弱々しい表情をする

翔子「・・・・・・今まで酷い事してたこと謝ろうと思って」

雄二「・・・・・・・・・・・・・」

翔子「・・・・・・・それで（ぽん）――？」

雄二「酷い事してたか？　俺は何の事だか分からんぞ？」

翔子「・・・・・・・で、でも」

雄二「俺は酷い事をされた覚えがない。それでいいんじゃないのか」

翔子「・・・・・・・う、うん」

雄二「！！」

翔子は俺の言葉に笑顔でそう言う。
おっと、危ない、危ない・・・・・・理性が跳ぶかと思った。

雄二「よし、貴浩たちと合流するか」

翔子「・・・・・・雄二」

雄二「ん――んん!?」

翔子「・・・・・・許してくれてありがとう／／／／／／　先に行く」

雄二「あ、ああ・・・・・・」

翔子に呼ばれて振り返るといきなりキスをされた。俺は唖然となってしまう。
そして、翔子が恥ずかしそうに１Ｆへと向かっていくのを見ることしかできなかった。

強化合宿編　～明久の戦い～

～　大浴場前　～

貴浩と雄二が戦っている時・・・・・・・

根本「この！」

明久「甘いよ！」

根本君が僕の召喚獣目掛けて拳を振り下ろそうとするが
僕はそれを少ない動作で避ける。

明久「・・・・・・根本君、もう諦めたらどうだい？」

根本「ぬかせ！
　お前の後ろには俺の理想郷（アガルタ）が待っているんだ！誰が諦めるか！」

明久「僕は君を止めて見せる！この先にはいかせない。命や楓がいるからね」

根本「止めてみろ！　ハッ！」

根本君は蹴りで召喚獣を倒そうとするが、
僕は少ない動きでかわして木刀で軸足を叩きつける

根本「グッ！　おら！」

明久「よっと」

軸足を叩くと根本君はのけ反るが
それを利用して召喚獣に拳を叩きこもうとしたが僕はそれを避ける。

明久「根本君、もう一度言うよ。諦めたらどう?」

根本「ハァ、ハァ、ハァ。　ぬかせ・・・・・・」

根本君は息を切らせながらもその姿勢は崩さない

根本「吉井・・・・・・お前は見たくないのか?」

明久「・・・・・・何をだい?」

根本「織村妹や木下三女の裸だ・・・・・・!」

明久「・・・・・・見たくないというのは嘘だね
・・・・・・でも、覗きなんてまねはしたくない!」

根本君がそう尋ねたので僕は目を瞑りながら自分の考えを述べる。

しかし、それがいけなかった

根本「・・・・・・ふ、ふふ、ははははははは」

明久「しまった!!」

僕の召喚獣を掴んだ根本君は高らかに笑った。

くっ、油断した

根本「吉井・・・・・・・そこをどけ！」

明久「・・・・・・いやだ」

根本「そうか・・・・・・・では！（ドカッ）」

明久「グハッ！」

召喚獣を盾に根本君が命令したが僕は拒否した。
すると、根本君は口端を持ち上げて召喚獣目掛けて
メリケンサック（いつの間にか付けていた）で殴ってきた。
僕はそのフィードバックにより膝をついてしまう

根本「さぁ、そこをどけ！」

明久「・・・・・・いやだ！」

根本「そうか・・・・・・なら、倒れるまで殴るまでだ！」

そういうと根本君は召喚獣を殴っていく。
僕はフィードバックで青痣を作っていった。

ふと根本君の後ろを見ると、
このフィールドを展開している鉄人やムッツリーニが助けようとし
ているのが見えた

明久「〈僕は大丈夫です〉」

西村「〈・・・・・・そうか・・・・・・なら頑張ってみろ！〉」

明久「〈はい！〉」

僕は鉄人たちにアイコンタクトで大丈夫というと、分かってくれたみたいだ

明久「根本君、僕は何度叩かれても倒れるつもりはないよ・・・・・・」

根本「何・・・・・・？」

明久「僕はね・・・・・・こんな卑怯な事をしたくないんだ。
特に命の前では！『二重召喚っ（ダブル）』！」

根本「！！」

喚び声に応じて現れた分身に驚いて根本君が召喚獣を手放す

明久「根本君、勝負はこれからだよ」

2体の召喚獣に構えを取らせ、挟み込むように移動させる。
主獣（メイン）は右から、副獣（ダブル）は左からそれぞれ木刀を繰り出した

根本「ちっ、くぅっ・・・・・・！」

まったく逆の方向から訪れる攻撃に対して根本君の体勢が崩れる。
すかさず2体同時にガラあきの膝にローを放つ

根本「ぐうっ！」

拳、蹴り、木刀を駆使して左右から根本君に攻撃を加える僕の召喚獣

根本「く、くそーーーーーっ！」

明久「根本君、僕はこれからある部分を狙っていくからね」

根本君が2体目掛けて拳で攻撃するが、
それを避けながらローと見せかけて金的狙いに変化するキック。
足元を狙ったと見せかけて股間を突きにいく木刀。
鳩尾狙いから下腹部狙いに軌道を修正した拳。
これら全ては、たった一度の急所攻撃の為に・・・・・・

根本「ちっ！それはしゃれにならねぇぞ！」

根本君の表情がゆがむ。
脇腹狙いから金的蹴り、肘を取ると見せかけて股間に肘鉄、
ストレートに急所突きなど

気がつくと、向こうは防御に手一杯になっていた。

明久「悶絶しろ、根本君！」

副獣（ダブル）が力を溜めて大きく拳を振う。

根本「や、やめろーーーーっ！」

根本君はその動きを見て股間のガードを固めた

明久「何て、ウソだよ」

その瞬間、主獣（メイン）を動かして副獣（ダブル）を踏み台に根本君の背後へと跳ばせる。
今の予備動作はフェイク。　本命はこっちの主獣（メイン）だ！

根本「しまっ――」

明久「もらったぁぁーっ！」

下段防御に回した腕は頭部に至るまでに時間がかかり間に合わない。
僕の召喚獣の手刀が服部君の無防備な首へと吸い込まれて

根本「ぐぅ・・・・・・っ！」

ドサリ、と重い音を立て、根本君はゆっくりと床に倒れ伏した。

明久「はぁ、はぁ、はぁ」

よ、良かった。これで命のほうは大丈夫だね。

康太「・・・・・・お疲れ明久」

明久「うん、ムッツリーニも刀麻もお疲れ」

刀麻「もうここの男子達は制圧したからあとは貴浩たちのところだな」

明久「うんそうだね。あっそうだムッツリーニ。
　根本君と根城君にはプレゼントが必要だと思うんだけど（ニヤっ）」

康太「・・・・・・任せろ（ニヤッ）」

しっかりお礼はしないとね。

僕達は根本君を連れて貴浩たちの元へと向かった。

強化合宿編　～貴浩暴走!?～

～　1F　～

俺は久保を倒した後、優子や愛子たち女性陣と教師達と力を合わせ男子達を倒していると、不意に殺気を感じて俺は瞬時にその場から後ずさった。

優子「どうしたの貴浩?」

愛子「そうだよいきなり飛びのいて」

貴浩「・・・」

西郷「待ちわびたぞ少年!!」

貴浩「誰だお前は?」

西郷「私の名は西郷武(さいごうたけし)。貴様に1度敗れた男だ!」

貴浩「で、俺に負けたヤツがなんのようだ?
女子風呂でも覗くつもりか?」

西郷「そんなものには興味は無い!!」

貴浩「えっ?」

そこへ明久や雄二たちが合流した。

明久「これどういう状況なの？」

雄二「わからねぇ。俺も今来たばかりだからな」

明久と雄二たちは今の状況がわからず首を傾げていた。

西郷「私は君という存在に心を奪われたものだ！！」

貴浩「はぁ？」

皆「「「「「えっ！？」」」」」

西郷「逢いたかった！逢いたかったぞ！織村貴浩！！」

貴浩「え、い、いや、俺、そんな趣味は持ち合わせていないんだが・・・」

俺は君が悪くなり召喚獣を攻撃するが避けられてしまう。

≪　総合科目　≫

Ｆクラス　織村貴浩　　ＶＳ　　Ｅクラス　西郷武

６００点　　１２５１点

秀吉「貴浩、かなり点数が減ってるのじゃ」

愛子「そうだね。犯人を倒した後に大勢の人数相手に戦ったからね」

西郷「卑怯者と罵られようがかまわない！　貴方は私がヤるんだ！」

貴浩「ひっ！」

明久「・・・・・なんか変な意味に聞こえるんだけど」

雄二「・・・・・俺もだ」

西郷「清涼祭で敗れたあの日から貴様の事を考えていた。
これはまさしく愛だ！！！」

貴浩「キモい！！近寄るな！！」

お互い武器を構え攻撃していき鍔迫り合いになる。

西郷「私は純粋に貴方という――」

貴浩「お前は歪んでいる」

西郷「だから私は貴方という存在に――」

貴浩「絶対違う！！ってか違ってくれ！！」

西郷「何度言えばわかるコレが恋で――」

貴浩「そんなのが恋であるもんかぁあああああ！！！」

1度距離をとる。もとい離れる。ってか近寄りたくない。

西郷「ラチがあかんな。では私が勝って証明させてもらう！」

貴浩「近寄るなぁあああ！！！！！！
うわぁぁあああああああああ！！！」

俺は無意識に2つの腕輪を発動させ、
『フルブラスト』状態で、特大の『グラビトンノヴァ』を
前方に向けて放とうとした。

明久「た、貴浩！ストップ！！」

雄二「やめろぉ！！」

明久と雄二は前方にあるものに気づき貴浩に攻撃を停止するように
うながすが、
動揺している貴浩にはその言葉が聞こえず西郷に向けて攻撃した。

西郷「なんだと！？またこの私が・・・・・」

その攻撃は西郷の召喚獣に直撃した。

ドカーーン！！

そしてそのままその後ろにある柱に直撃してしまった。
攻撃が直撃した柱は音を立て崩れた。

貴浩「あれ？」

明久「あああああああ」

秀吉「こ、これはまずいのではないか？」

雄二「ああ、これはまずいな」

康太「・・・・・まだ教師にはばれていない」

貴浩「いやはやこれは凄いな・・・・・」

俺は壊れた壁をみてそういうと

刀麻「罪の意識すら持つ気がないのか！？」

貴浩「俺が悪いみたいに言うな！！あいつがキモいことを言うからだろ！！」

優子「これはどうしようもないわね」

愛子「・・・・うん」

翔子「・・・・・・どうしよう」

強化合宿編　～貴浩暴走！？～（後書き）

さてこれをどう対処するのかお楽しみに

強化合宿編　～明久の作戦～

明久「・・・・・・そうだ！」

そこで明久が皆に見合わせする。
貴浩が壊した柱を見ていた明久が何かをひらめいたようだ。

貴・雄・秀・康「「「「！！！！！！！！」」」」

雄二「なるほど、そういうことか。明久ナイスな発想だ！！」

康太「・・・・・・・・さすが明久」

秀吉「このような策を思いつくとは明久も悪知恵が働くのう」

刀麻「どうしたんだ雄二？」

刀麻や優子たちAクラスの面々は訳もわからず首を傾げていた。
これは俺達Fクラスメンバー（男子）だけが使えるアイコントクトでの会話だ。

≪自作自演タイム≫

貴浩「了解！
うわぁあああああ！！！！
よくも、よくも、こんな事をしてくれたな根っこコンビ！！」

根っこ「へっ？」

丁度気絶していた2人が目をさます。

明久「覗きが上手く行かなかったからって西郷君と一緒に合宿所の柱を壊すなんて」

根っこ「なっ！？」

西郷「なんだと！？」

秀吉「最低の輩じゃのう」

根城「この惨状はお前らが――」

明久「雄二！」

雄二「了解」

根城「――が引きお（バキッ）クベラッ」

喋ろうとした根城を雄二が制裁！

雄二「手間をかけさせるな」

必殺口封じ☆

雄二「人のせいにしようとするとは最低だな。ムッツリーニ！！」

康太「・・・・・・任せろ」

ムッツリーニはどこからか持ってきたパソコンを取り出し、
何故か先ほどの映像を撮って少し修正？して
貴浩が壊した壁をまるで根っこコンビが壊したように映像を作り変えた。

しかも・・・・・・

根本（秀）「覗きが上手くいかなかった腹いせだぁ！！」

西郷（秀）「私も加勢しよう」

と秀吉のものまねで音声も収録。

雄二「この情報を教師たちや生徒達にに流せ」

貴浩「本当にナイスだ明久！」

雄二「あとはこいつらを気絶させて反抗しないようにしないとな」

根っこ「や、やめろ」

西郷「やめたまえ」

俺達はジリジリと3人に近寄っていき、近くの部屋につれこみ少しした撮影会を開いた。
西郷だけは軽くボコって気絶出せただけだが。

・・・・・だってあまり近寄くにいたくないし。

その後、教師達に映像つきで3人を引き渡した。

貴浩「ふぅ～」

明久「危なかったね」

雄二「ナイス発想だったぞ明久」

秀吉「そうじゃな。これで貴浩は安心じゃな」

明久「貴浩を守るためだもん」

康太「・・・・・・・映像も完璧」

刀麻「・・・・・お前らは本当に凄いな」

優子「・・・・・あ、あなたたち・・・・あんなことをして何も感じないの？」

貴浩「感じてはいるさ」

明久「そうだね。恨んでもらってもかまわないよ」

秀吉「だがの、友達は見捨てられぬのじゃ」

なのは「でも・・・・・これは・・・・」

愛子「ねぇさすがに・・・・」

翔子「・・・・・・少しやりすぎ」

康太「・・・・けど」

貴浩「これが俺達」

貴・明・雄・秀・康「「「「「『Fクラス』だぁ！！！！！」」」」」

刀麻「・・・・・・・最低だな」

優子「それなら納得ね」

刀麻「え！？」

翔子「・・・・・・それなら納得できる」

なのは「そうだね」

愛子「なんか少しずつ慣れて来たしね」

刀麻「おい、お前ら正気に戻れ！」

こうして今夜は男子達を退治して覗き事件は終了した。

柱の件はあの３人に押し付けて・・・・・・・

そして明日は４日目、明日こそはゆっくり入浴ができるか？

強化合宿　～クッキング～

次の日、今日で合宿最後の勉強となる。
といっても昨日の覗きの件でFクラス男子と刀麻以外の男子は別の校舎で鉄人監視のもと自習が行われている。
もちろん清水も同じ扱いである。

明久「脅迫状の犯人も見つかったし覗きの犯人も捕まったからもう安心だね」

雄二「そうだな。翔子の件も貴浩のおかげでなんとかなったしな」

秀吉「今日はのんびりお風呂に入れるのじゃ」

貴浩「そうだな。最後ぐらいゆっくり入りたいぜ」

康太「・・・・・・秀吉とお風呂（ブシュー）」

秀吉の風呂という単語でムッツリーニが鼻血をふきだす。

貴浩「おーい！ムッツリーニ大丈夫か？雄二いつもの頼む」

雄二「ああ、わかった」

俺達はすぐさま救急セットを持ち出し輸血を始めた。
はじめて数分でムッツリーニが意識を取り戻す。

刀麻「いつみても見事な手際だな」

貴浩「まあ、日常茶飯事だからな」

明久「そうだね。ほぼ毎日倒れてるから慣れちゃったよ」

刀麻「そんな状況に慣れたくないな・・・・・ってか本当に凄いな」

優子「Fクラスだもの」

愛子「そうだねFクラスだから不思議じゃないね」

刀麻「・・・・・お前らも順応してきたな」

すると雄二が俺のほうを手招きしている姿が見えたので俺は雄二に近寄る。

雄二「で、お前これから姫路と島田に対してはどうするんだ？
　一応お前が任せて欲しいと言ってたから放置しておいたが・・・」

貴浩「ああ、あの2人か。まあ勝手にすれば良いと思うぜ。
もう俺からは呆れて何も言いたくない。
これからはただの同級生という事で俺は扱っていく。
雄二たちがどう扱うかは任せるがな。
ただ、明久に手を出そうとした時は遠慮なく殺らせてもらう」

雄二「・・・わかった」

雄二はそれを聞くと皆の元へと戻った。

雄二「そういえば今日の昼は外でカレーを作るんだったか？」

明久「そういえばしおりにそんな事書いてあったね」

秀吉「そういえばそうじゃったな」

貴浩「で、確か合宿で俺達も騒いだからＦクラスメンバー（男子）で作るんだったな」

これがこの合宿で騒ぎを起こした俺達への罰だった。

さすがにあれだけの事をしておいたので罰が何もないということはなかった。

雄二「なら人数も多いことだしそろそろ準備に取り掛かるか」

食事は２年全女子（清水を除く）と俺達Ｆクラスメンバーと刀麻、そして教師分を作らないといけないのでかなりの量になる。

覗きメンバーは自分達で作らされるらしい。

調理場

楓「あの兄さん。私達も手伝いますよ」

命「うん、そうだよ。私達だってFクラスだし」

明久「気持ちだけで充分だよ。
ただ2人が手伝ったら姫路さんまで手伝っちゃいそうだからね」

秀吉「それは勘弁して欲しいのじゃ」

貴浩「だから2人はゆっくりしてていいぞ」

雄二「さて、量が多いから分担して作るぞ」

貴浩「じゃあ具材を切り分ける班と調理する班、
火をおこし、皿などを準備する班の3つに分かれるか」

秀吉「ワシは楓に少し習った事があるから切り分ける事はできるのじゃ」

光一「すみません。自分料理は全然で・・・・・・」

刀麻「俺は料理は出来るぞ」

雄二「なら、具材を切り分ける班が秀吉を中心に、
準備する班が光一を中心に、
調理のほうは、甘口を貴浩に、中辛を明久・康太に、
辛口を俺と刀麻を中心に別れて作るぞ」

刀麻「ってか甘口っているか？やっぱカレーは中辛からだろ？」

雄二「まあ俺は辛口派だな」

明久「僕は中辛程度かな」

康太「・・・・・・俺も」

光一「俺も中辛かな」

貴浩「いや、カレーは甘口で充分だろ」

秀吉「ワシも甘口のほうが好きじゃの」

刀麻「ってか貴浩は甘口派なのか？てっきり辛口派かと・・・・・」

貴浩「辛口も食べれない事はないが、俺って甘党なんだよね」

刀麻「そうなのか？少し意外だな」

雄二「さておしゃべりはここまでにして準備に取掛かるぞ！」

皆『了～解！！』

じゃあ作るとするかな。

近藤「なあ貴浩。作り方教えてもらってもいいか？
お前の作ったヤツはおいしいからな」

須川「俺も！中華は得意だが、カレーはあまり作らなくてな」

貴浩「いいぜ。じゃあ作りながら言うからな。
まずは秀吉たちが切ったにんじん、玉ねぎ、じゃがいもを、
フライパンでニンニクと一緒にいためてる。
もちろん焦がさないようにな。
それでいためた野菜を水をいれたカレー鍋に入れるっと」

近藤「うん、それで」

貴浩「次は豚肉は小麦粉をまぶしてサラダ油をひいたフライパンでいためる。
少しカリカリ感が出来る感じに」

須川「こんなものか？」

貴浩「そうそう。それぐらい。で、豚肉をカレー鍋にいれ弱火で１時間煮込む。
蒸発した水分の量だけ水を足しすのを忘れないように」

１時間後

貴浩「で最後にルーをいれて弱火で２０分煮て完成なんだけど。
隠し味にコレとソレを入れる」

須川「え？コレとソレを入れるのか？」

近藤「おいしいのか？」

貴浩「なら少し味見してみるか？」

俺はお玉でルーを少し掬い味見用の小皿にのせ味見をさせた。

貴浩「どうだ？」

須・近「「う、うめぇ！！」」

近藤「甘口ってバカにしてたけどコレはうまいな」

須川「さっきの隠し味を入れただけでこんなに変わるのか！？」

貴浩「だろ。甘口派カレー本来の味を楽しめるからな」

俺達ができたと同じくらいに皆のほうでもできたみたいだな。

俺達はみなの前にカレーを並べていく。

西村「ほう。これをお前らが作ったのか？」

明久「そうですよ。っていっても鉄人のは雄二と刀麻が作ったのだけど」

リリス「これはたのしみですね」

貴浩「なんかリリス先生に食べてもらうのか緊張しますね」

リリス先生は甘口を食べるので少し緊張する。
先生が家庭科の教師であるって言うのもあるが、
リリス先生の料理の腕はプロレベルだからな。

リリス「大丈夫！ちゃんと評価してあげるから」

貴浩「お手柔らかに」

明久「じゃあ僕達も席に着こうよ」

俺達は全員に配り終えると自分達の席についた。

貴浩「じゃあ食べるか」

皆『いただきます！』

楓「やっぱり兄さんのカレーはおいしいですね」

命「明久君たちが作ったカレーも美味しいですよ」

翔子「・・・・・・雄二が作ったのもおいしい」

あちこちで美味しいという声が上がっている。

愛子「美味しいけど何か凹むね」

優子「そうね。ここまでおいしいとね」

美味しいという声が上がると同時に各所で女子が落ち込んでいる。

なんでだろ？

なのは「康太君もかなり料理上手いんだね」

康太「・・・・・・コレくらい一般常識」

秀吉「うッ！」

楓「ヒデ君はこれから一緒に頑張ろうね」

康太の一言で少し落ち込んだ秀吉を楓が励ます。
仲むつましいな・・・・・・ってか羨ましい。

カレーを食べ終わると（ちなみに3杯食べました）

リリス「織村君。おいしかったよ。
　コレ隠し味にチョコレートとパイナップルを入れなかった？」

貴浩「さすがですね先生。そうですよ。
　チョコレートとパイナップルを切り刻んで入れてコクを出してみました」

明久「貴浩はチョコレートとパイナップルを入れたんだ。
　僕は無難にりんごを入れたよ」

雄二「俺はコーヒーだな」

リリス「皆、一工夫してるのね。これは次の試験も楽しみにしてるわ」

その後は食後という事もありゆっくり休んでいたら
何故か女子達がやってきた。
料理についてのアドバイスをしてほしいという事らしい。

まあ、別にかまわないけど・・・・・・
ということで結局ゆっくり休めなかったな。

強化合宿　～最終日～

夜

貴浩「さて、今日はゆっくり風呂に入るかな」

秀吉「のう貴浩よ。ワシと一緒に入ってくれぬか？
　1人ではさすがに寂しくての」

貴浩「そういや、秀吉だけ時間帯は違ったな」

秀吉「そうなのじゃ。せっかくの合宿じゃから友達と入りたいのじゃ」

雄二「なら楓と入れｂ――」

貴浩「何か言ったか雄二？」

俺は雄二にトンファーを向ける。

雄二「な、なんでもない」

貴浩「・・・・・・それならいい」

俺は雄二からトンファーを下げる。
いくら恋人同士であろうとそんな事はさせない。

秀吉「で、どうかのう？」

貴浩「ああ、いいぜ。なら明久たちも一緒に入ろうぜ」

明久「え？どうせ男子は僕達しかいないから当たり前じゃない」

雄二「それは少し違うぞ明久。
俺達の他にもＦクラスのメンバーがいるだろうが、
それを秀吉と入ったら暴動が起きるぞ」

明久「そうだね。最後くらいゆっくり入りたいしね」

貴浩「だからムッツリーニも鼻血出すなよ」

康太「・・・・・・大丈夫」

ちなみにもう明久とムッツリーニは秀吉を男として見る様になった。

方法は簡単、秀吉の下半身を見せただけだ。

その時の２人は凄く絶望していたがな。

そして俺達の入浴時間。

先にＦクラスメンバーに入ってもらい、後の時間俺達の貸切というわけだ。

雄二「じゃあ、入りに行こうぜ」

貴浩「そうだな」

秀吉「了解じゃ！」

浴場につくと

貴浩「今にしても思うとここの風呂ってこんなに広かったんだな」

明久「そうだね。昨日まで目的のためにゆっくり入れなかったしね」

雄二「まぁ最後ぐらいゆっくり入れそうだな」

刀麻「そういえば隣は女湯だったな」

康太「・・・・・・女湯」

貴浩「鼻血出すなよムッツリーニ」

康太「・・・・・ま、まだ大丈夫」

光一「ま、まだって・・・・・・」

秀吉「確かこの時間帯じゃと姉上や工藤たちが入っておるのう」

明久「そうなんだ」

刀麻「なら向こうも俺達が入ってるの知ってるんじゃないか？」

貴浩「もしかしたら呼んだら返事したりしてな」

雄二「まさか、さすがに返事するヤツいないだろ」

貴浩「じゃあ、やってみるか」

刀麻「え？マジか？」

貴浩「誰の名前呼んでみようか？無難に霧島かなのは、砂原あたりか？」

明久「なんでその３人？」

貴浩「砂原は呼んだら面白がって返事しそうだし、
なのはと霧島は彼氏がこっちにいるからな」

明久「あ～それなら納得」

雄二「翔子はやめてくれ頼む」

康太「・・・・・俺も」

刀麻「さすがに呼ぶのはやめようぜ」

貴浩「わかったよ」

結局今回は悪ふざけせずゆっくり風呂に入った。

最終日は光一が頼んだリムジンバスに乗り帰宅した。
もう乗る機会なんかないだろうが・・・・・・

―　処分通知　―

文月学園第２学年全男子生徒（Ｆクラス男子とＡクラス不知火を除く）と

2年Dクラス清水

上記の者達全員を1週間の停学処分とする

文月学園学園長　藤堂カヲル

ついムラッと来てやった。
今は心の底から後悔している

システム異常編　～プロローグ～

文月学園学園長室。

学園長「あのクソガキ共め！　やっぱり騒ぎを起こしたじゃないか！！」

高橋「そうですね。でもFクラスの生徒のおかげで覗きについての件は解決しましたが……」

学園長「全く……吉井と織村の校舎の壁の破壊に教頭室爆破に続いて、
　今度は2年男子の学年全体での覗き、それに清水の隠しカメラに、
　合宿所の柱を破壊とは、あいつらは何かバカやらないと気が済まないのかね！？」

すごく不機嫌の学園長と、ソレを宥める高橋女史。

それもその筈である。

学園長「全く……まあ、もうすぐ学会に試験召喚システムのお披露目がある訳だし、
　ここで何とか挽回したいねえ」

高橋「……心中お察しします」

学園長「そう言う意味じゃ、ほとんどの男子を停学処分にして正解だったよ。

まあ吉井と織村がいれば何か問題がおきても大丈夫かもしれないしね……」

高橋「それは彼らが観察処分者と特別処遇者だからですか？」

学園長「そうさね。……まあ大人しくしてくれたらの話だがね」

ヴィーッ！　ヴィーッ！

高橋「何事ですか！？」

学園長「……何かあった様だね」

高橋「っ！　フィールドが！？」

学園長「やれやれ、バカ共なしでもトラブルは等しくやってくるか」

？？？

？？？「……清涼祭での目論見は潰された物の、校舎の破壊に爆破、そして学年全体の覗きとくれば評判は下落の一途。

ここで召喚システムに問題を起こせば、学園長の失脚は確

実になる」

1人の男が、サーバールームを目指していた。

???「さて、パスワードは……」

厳重な電子ロックが解除され、サーバールームの扉が開く。

そしてその中に入り……

???「くそっ、手間をかけさせてくれるじゃないか」

中枢の端末を操作し始めるが、そこでパスワード認証画面が。

???「っ！　またセキュリティか。パスワードは……」

軽快な手さばきで入力するが、次の瞬間エラー画面が。

ソレを受けて警報が鳴り響き、その男はその場を走り去ろうと……。

パキンッ！

走り去ろうした所で、ケーブルに足を引っ掛けてしまい、それが外れてしまう。

男はそれに構わず、その場を立ち去ると同時にサーバールームの扉が閉まる。

???「……作戦は失敗か」

そこで、召喚フィールドが学園全体を覆い尽くした。

システム異常編　～男子停学処分1日目～

2年の男子（一部を除く）停学処分1日目

教室にて。

貴浩「これから1週間、男子って俺達しかいないんだよな」

明久「そうだね。って言っても僕達はFクラスだからあんまり関係ないよね」

貴浩「まぁな。俺達のクラスのほとんどが男子だからな」

光一「でも、人数が少ないから授業は2クラス合同で行うみたいだがな」

秀吉「とういうことはワシらはEクラスと授業と言う事じゃろうか？」

雄二「いや、確か俺達はAクラスと合同みたいだぞ」

貴浩「へぇ～Aクラスとか・・・・・・・・・・・・なんで？」

明久「そうだよね。普通はEクラスなのになんでAクラスなの？」

雄二「理由は強化合宿の時と同じだな」

貴浩「ああ、そういうことか」

明久「だったらムッツリーニと雄二は良かったね。

好きな人と一緒に勉強できるんだもんね」

雄二「なっ！？」

康太「フルフルフルフル」

明久の発言に驚きを見せる雄二とムッツリーニの２人。

光一「そういう点だったら秀吉と楓殿はいつも幸せだよな」

秀吉「そうじゃの。楓がいつもおるからワシは幸せじゃな」

楓「ひ、ヒデ君／／／／」

貴浩「聞いててなんだが少しムカツクな」

明久「まあまあ貴浩落ち着いてよ。
Ａクラスと一緒ってコトは強化合宿みたいに自習なのかな？」

雄二「そうだろーな。さすがに半数近くの生徒がいない間に授業は進めないだろう」

明久「なら貴浩。また勉強教えてよ」

貴浩「んー、今回は断る」

明久「え？なんで？」

貴浩「今回は命にでも文系を教えてもらえ」

命「わ、私ですか！？」

貴浩「合宿の時は理系中心だったからな。文系なら楓か命が適任だ。
だが楓は秀吉に教えるだろうからな」

明久「あれ？それなら姫路さんでも――」

貴浩「命のほうが適任だ！」

明久「貴浩がそう言うなら…なら命。よろしくね」

命「は、はい！よろしくです明久君」

雄二「（やはり姫路と島田の事を許していないか。まあ仕方ないか）」

俺は命の方に近づいて

貴浩「チャンスはやったんだ。頑張れよ（ボソッ）」

命「はい、いつもありがとうございます」

そこへ、朝のＨＲの時間になり鉄人がやってきた。

西村「皆も知っていると思うが今日から1週間半数近くの
2年の生徒が停学処分となっているので、授業のカリュキュラムを変更する。
Ｆクラスはａクラスにて合同で授業を受けてもらう。
基本的に自習となるがしっかり勉強するように」

鉄人の話のあと俺達は豪華設備のＡクラスへと向かった。

システム異常編　～貴浩の苦難～

Ａクラスにて各自、好きな席に座り勉強を始めた。
明久は命と、雄二は翔子と、秀吉は楓と、康太はなのはと
姫路と島田は明久の席から離れて座っている。（俺の睨みにより）

俺は・・・・

貴浩「……なんでこうなった……？」

なぜか俺の周りには明久や雄二たちではなく

Ａ女子ａ「あのー織村君。ここ教えて欲しいんだけどいいかな？」

Ａ女子ｂ「ねえぇ織村君。ここの数式なんだけど―」

Ａ女子ｃ「この間の料理についてなんだけど―」

砂原「ねーター君。何か面白そうなネタ無い？」

Ａ女子ｄ「私はここなんだけど―」

Ａ女子ｅ「今度は私の番よ！。で、織村君。ここの計算なんだけど―」

Ａクラスの女子に囲まれていた。
１人おかしいのがいたが・・・・・・・・

明久「なんか貴浩Aクラス女子に囲まれているね」

命「大変そうですね」

雄二「大方、合宿の時の点数を皆が知ったんで教えてもらおうってとこだろうな。
それに貴浩は顔も悪くないし、基本誰にでも優しいからな」

秀吉「それは言えておるのじゃ」

雄二「でトドメに。合宿最後の料理だ。あれで人気が出ないほうがおかしい」

明久「そうだね。
で、優子さんと工藤さんは貴浩のところ行かなくて良いの？
このままだと貴浩、誰かに告白されちゃうよ」

優子「うっ」

愛子「やっぱりそうだよね」

秀吉「逃げてばかりでは行かんぞ姉上と工藤。
今は大丈夫じゃが。いつ貴浩の心が動くか分からないのじゃ」

楓「そうですよ2人とも」

命「頑張ってお姉ちゃん、愛ちゃん」

優子「う、うん・・・・・・・・って
あなたたちもアタシたちの好きな人・・・・・」

秀・楓・命「「「知って（おる）るよ」」」

愛子「僕達ってそんなに顔に出てたのかな？」

明久「顔っていうか、行動に出まくりだったよ」

優・愛「「／／／／／／／／／／」」

明久「鈍感な貴浩だから気づいてないけど、皆気づいているよ」

雄二「お前が言うか？」

明久「え？」

雄二「まあ明久たちの言うとおりだな。
振り向いて欲しければ行動あるのみだ！」

翔子「…私のように」

刀麻「なんか説得力あるな」

明久「ってか今の貴浩危ないんじゃ――」

明久が貴浩の身を案じていると

須川『諸君。ここはどこだ?』

F『『『最後の審判を下す法廷だ』』』

須川『異端者には?』

F『『『死の鉄槌を!』』』

須川『男とは』

F『『『愛を捨て、哀に生きるもの!』』』

須川『宜しい。これより、ＫＭＦ団による異端審問会を開催する』

貴浩「ないぃ!?」

F『とりあえす・・・デストロイ』

いきなりそんなことを言いだし殴りかかってきた。
俺は身の危険を案じて、ひとまず距離をとった。

貴「いきなりなんだ!俺達は同士だろ!?」

近藤「だまれ男の敵め!」

須川『こいつの罪状を読み上げよ』

F『はっ。須川会長。えー被告、織村貴浩は
我が文月学園第2学年Fクラスの生徒でありながら、

この者は我らが教理に反した疑いがあります。
現在この者は我が文月学園のＡクラス女子生徒数十名と一緒に勉強するという――』

須川『御託はいい。結論を述べたまえ』

Ｆ『女子に囲まれているので羨ましいであります』

須川『うむ。実にわかりやすい報告だ』

貴浩「いや、ま、待ってって」

（シュッ）

今、何かが横を通り過ぎて行った。ゆっくりその方向を見てみるとカッターが壁に突き刺さっていた。

須川『判決の時間だ』

貴浩「チクショー」

そう言い、俺はすぐさまＡクラスから逃げ出した。

須『追え！逃がすな』

Ｆ『我らＫＭＦ団の名にかけて貴浩を捕まえろ』

明久「やっぱりか」

雄二「大変だな貴浩は」

刀麻「いつもああなのかFクラスは？」

明・雄「「うん（ああ）」」

刀麻の質問に即答する2人。

優子「って、悠長に話しているけど貴浩君は大丈夫なの！？」

愛子「そうだよ。早く助けないと！」

雄二「ああ、それなら大丈夫だろう」

秀吉「そうじゃな」

明久「あと10分もすれば戻ってくるよ」

優・愛「「え！？」」

10分後

貴浩「ハァハァ……疲れた」

楓「お疲れ様です兄さん」

雄二「いつも大変だな」

貴浩「お互いな」

雄二「だな」

俺と雄二、明久の3人はFクラスのヤツらに追いかけられているからな。

優子「本当に帰ってきたわね」

愛子「でも疲れているみたいだよ」

明久「2人とも。はい、これを貴浩に持っていってあげなよ」

明久は優子と愛子にスポーツドリンクとタオルを渡した。

明久「貴浩は走り回ったり応戦したりして疲れているからこれでも渡してきなよ。
これで少しでも好感度をあげるといいと思うよ」

愛子「え？」

優子「良いの？」

明久「うん、前言ったじゃないか。僕も手伝うって」

愛・優「「ありがとう吉井君（明久君）」」

そうして2人は明久から物を受け取り貴浩の元へと向かっていった。

システム異常編　～息抜き～

命「明久君優しいんですね」

明久「まあ、貴浩のためかな。でもこれで好感度上がるかな」

命「少しは上がるんじゃないかな？」

明久「そうだよね」

雄二「でも明久が良くこんな事思いついたな」

明久「ああ、これは前に僕が皆に追われてた時、
命がやってくれたからね。それを真似しただけだよ」

命「／／／／／」

明久「（あれ？それなら命の行動って……
ま、そんなことあるわけないか）」

明久が命の行動に疑問を持つと思いきやいつもの天然でスルー。

貴浩「はぁ～マジで疲れたぜ。優子に愛子2人共ありがとうなコレ。
本当に気が効くな」

優子「別にいいのよ。気にしないで」

愛子「そうだよ」

貴浩「ってせっかくの自習なのに勉強なんてもったいな。
　なぁ明久ゲームやろうぜ」

俺はそういうと鞄からＰ○Ｐを取り出した。

明久「あっ！いいね」

俺に続いて明久もゲームを取り出す。

雄二「俺も混ぜろよ」

秀吉「ワシも休憩がてらやるのじゃ」

明久に続いて雄二と秀吉もゲーム機を取り出した。

そしてやるゲームはモン○ン３ｒｄ

雄二「で、何を狩りに行くんだ？」

貴浩「俺はアルバに行きたいな。アイツの翼膜が欲しいんだ。
　何回も行くんだが出なくてな」

秀吉「ちゃんと部位破壊しておるのか？」

貴浩「当たり前だ」

明久「物欲センサーだね」

雄二「だな。アレは本当にやっかいだよな」

貴浩「だろ。で、皆は何に行きたいんだ？」

秀吉「ワシは火竜じゃな。紅玉が欲しくてのう」

雄二「俺はディアブロ黒の上質な黒巻き角だな」

明久「僕はジョーかな？素材が全体的に欲しくて」

貴浩「今のだけ聞くとどれもメンドイな」

そこへ

優子「ってあなたたち何普通にゲームをしようとしてるのよ」

刀麻「一応自習中だぞ」

明久「まぁいいじゃない。息抜きだよ」

刀麻「いや、よくないだろ」

明久「それにＡクラスの人だって……」

刀麻は明久の視線の先を見てみると

貴浩「椎名さんもやるだろ？」

椎名「もちろんです！」

なのは「私もする！」

康太「……俺も忘れてもらっては困る」

命「私も少し息抜きに……」

明久「ね？」

刀麻「椎名に八神……」

優子「命まで……」

結局、優子と刀麻の意見を押し切り
８人でゲームをすることになった。

システム異常編　～息抜き～（後書き）

貴浩「おい、作者！何故更新が遅れた？」

作者「ええっと…この3日間風邪で寝込んでまして…」

貴浩「それでも更新ぐらい出来るだろ？」

作者「えっと・・・すみません」

貴浩「次回からは気をつけろよ」

作者「・・・・・・はい。これからも応援よろしくお願いします」

システム異常編　～修理の手伝い～

しばらくゲームをして遊んでいると

≪ピンポンパンポーン≫

放送のチャイムがなった。

《2年Fクラス。織村貴浩君、吉井明久君、至急学園長室までお越しください》

何故か俺と明久が呼び出しを食らった。

楓「兄さん何したの？」

貴浩「え？なんだろう？見に覚えがありすぎてわからねぇ。
今さっきFクラスのヤツらから逃げ回っている時窓割った事か？
それともドアを壊した事か？それとも…」

命「やりすぎだよ」

明久「まさかこの前の合宿所でのことがバレたのかな」

雄二「それは無いだろう。

もしそうなら俺や秀吉、ムッツリーニも呼ばれているだろうしな」

貴浩「まぁいいや。とりあえずババアのところまで行ってみるか。行こうぜ明久」

明久「了解。でもババアの顔なんて見たくないなぁ」

貴浩「それは言うな明久。俺だってババァのところに自分から行きたくねぇよ」

愛子「学園長をババア呼ばわりって…」

優子「さすがにそれは学園長に失礼でしょ」

とりあえず俺と明久は学園長室まで向かった。

学園長室

貴浩「で、俺と明久をいきなり呼びだしたのはなんでだ?」

いきなりの呼び出しで学園長室へと訪れたのは、5名の男子生徒。

織村貴浩と吉井明久、坂本雄二、木下秀吉、土屋康太。

学園長「…確か織村と吉井しか呼んでないはずだがまあいいかね。
問題が発生したからあんた達に働いて貰おうって事さね」

雄二「どういうことだ？」

高橋「それは――」

と、一歩前に出たのは高橋女史。

高橋「実は先程、学園内に侵入者があったのです」

明久「侵入者！？」

貴浩「まさか、召喚システムのデータでも盗みに来たのか？」

学園長「そうじゃないさね。
実は清涼祭での校舎破壊にこの前の合宿での覗き騒ぎで、
学園の評判がガタ落ちでね」

その言葉に、俺と明久、雄二は目をそらした。
ついでに言うと、学園長も3人を刺す様な眼で見ている。

貴浩「ん？って覗きの件は俺達が防いだじゃねえか！？」

学園長「でもそれを1番最初に行動に起こしたのはお前らじゃないかい！」

明久「うっ・・・それをいわれると」

学園長「だからその汚名返上として、
学会に召喚システムのお披露目をする事になってたのさ」

雄二「イメージアップ戦略か。涙ぐましいな」

貴浩「ご苦労様です」

学園長「……このガキどもにはもう1度、この学園の最高権力者が誰かという事を、
教えてやる必要がある様だねえ」

学園長は高橋女史になだめられて話に戻る。

高橋「それでは、話に戻りますよ?」

貴・雄「「……はい」」

キラリとメガネを光らせ、睨みつける高橋女史。
それには流石に2人も肯定をもって応えるほかなかった。
高橋先生は意外と怖かった。

貴浩「じゃあこの状況は、その学会のお披露目を狙った奴の仕業ってことか?」

明久「えーっと、どういう事?」

雄二「学会にシステムのお披露目をして、
イメージアップを謀ろうってのがババァ長の……」

高橋「坂本君？」

雄二「……学園長の狙いってことだから、
それを邪魔しようって奴等が居るってことだろ。
学園祭の時の様に」

学園祭において、腕輪の暴走を一般観衆の前で引き起こし、
文月学園存続を脅かそうという動きがあった。
……が３人の活躍によって、それは免れたが。

明久「じゃあこの状況は、その侵入者の仕業って事ですか？」

森田「そうね。まあシステム自体には問題はないけど、
ハードの方に問題が発生したみたいでね」

そこで森田先生が事情を説明する。

貴浩「じゃあ修理すれば元に戻るって事じゃないか。
何で俺達を呼び付けるんだよ？俺達にそんな高度な修理をさせようってか？」

学園長「あんたたちなんかにそんなことさせないよ。
サーバールームの防犯システムにアクセス出来なくて、
扉が開かないんだよ。
電源を落とそうにも、無停電電源装置があるから１月は機能するさね」

となると、壁を壊して中に入るしかない……が。

雄二「その学会のお披露目とやらがあるから、派手な事は無理って

わけだ」

明久「壁に穴があいてるなんて、いくらなんでも非常識だよね」

森田「だから、その修理の為にアンタ達を呼んだのよ。
システムのコアに近い教師用召喚獣は、
完全にフリーズしていて召喚ができないのよ、
生徒の召喚獣は暴走状態にあって制御ができないの」

高橋「ですから、吉井君と織村君に頼むしかないのです」

明久と貴浩が、顔を見合わせる。
その他の3人も、疑問符を浮かべた。

森田「観察処分者、特別処遇者のベース召喚獣はシステムの別領域で走ってるから、
他の生徒と違って暴走の影響を受けてないのよ」

貴浩「じゃあ、現状で唯一召喚獣を使える俺達に召喚システムの修理をやれってことか？」

学園長「その通りさね。不具合のある教師フィールドじゃまともに召喚は出来ないから……」

学園長は腕輪を1つ机の上に置く。

学園長「これはそこの坂本がもっている腕輪とほぼ同じ能力の腕輪だよ」

雄二「ってことは俺の腕輪とこの腕輪を使うんな」

学園長「そういうことだよ」

秀吉「じゃが、この腕輪は使用しても大丈夫なのじゃろうか？」

森田「それは大丈夫よ。さすがにそれは実験済みよ」

そして話し合いの結果、机に置かれた腕輪は秀吉が使用することになった。

明久「その前に、回復試験を受けさせてもらえますか？
僕達覗き騒動で点数消費したままなので」

高橋「では、こちらへ」

貴浩と明久と秀吉の3人は高橋女史に連れられ外へ出た。。

雄二とムッツリーニは学園長室に残った。

システム異常編　～各役割～

そして、空き教室へと向かう途中。

愛子「あっ！貴浩君に吉井君に秀吉君！」

明久「あっ、命に楓に皆！どうしたの？」

命「大丈夫ですか明久君」

島田「アキ！」

姫路「明久君！」

貴浩（ギロッ）

島・姫「「ひっ！」」

皆は俺と明久が心配で来たらしい。
何故島田と姫路が来たのかは分からないが

刀麻「で、どうだったんだ？」

明久「えっと、詳しくは高橋先生から聞いてくれるかな。
　僕達これから試験を受けないといけないから」

貴浩「それじゃ、俺たちは回復試験受けないといけないから、これで」

と、高橋女史に伴なわれて去る3人

島田「……ねえ、瑞希」

姫路「はい……やっぱり誤解はすぐ解きたいです」

2人を見送った姫路と島田は、どこかへと駈けだした。

一方、学園長室にて。

雄二「それで学園長。侵入者の処分はどうするんだ？」

森田「内密に処理するしかないわね。セキュリティの問題まで暴露されたら、
お披露目以前の問題だからね」

学園長「森田先生の言うとおりだよ」

雄二「それは教師の中に内通者がいるかもしれないからか？」

雄二の進言に、学園長と森田先生は表情を変えた。

雄二「召喚システムのサーバールームは学園の中枢同然だ。
なのにどうして侵入者が、誰にも見つからずに簡単にサーバールーム内部に入れた？
しかもお披露目とやらが控えた時期と重なっている辺り、手際があまりにも良過ぎる」

学園長「……本当にアンタは頭が回るねえ」

どの道、密告者の存在自体もスキャンダルとしては十分。
ただでさえ評判が下がってきてるのだからな。

雄二「となると、急いだ方が良いな。内通者が居るとしたら、この状況は格好の餌食だ」

学園長「そうさね。まぁ一応手は打ってるけどね
それにあのコンビなら、上手く行くんだろ？」

雄二「ああ。明久と貴浩のコンビなら、上手くいく。断言しても良い！
一応俺のほうでも人を使って調べておく。
だがこういう時に光一が休みなのが痛いな。
あいつの情報収集力はかなり頼りになるのに」

そう光一は今日に限って家の用事で学校に来ていない。
光一がいればもう少し簡単に内通者を見つけ出す事も可能だろうし、
学園のシステム回復にも少しは協力できるのだが

雄二「・・・・・まあいないのなら仕方がないか。
まだこちらにはムッツリーニがいるからな」

森田「頼むわね」

雄二「了解。さーて俺も試験受けてくるかね」

雄二の指示によりムッツリーニには内密に内通者について調べてもらう事にした。

そして、作戦が始まる

システム異常編　～作戦開始～

サーバールーム前にて。
補充テストが終わり、俺と明久、雄二と秀吉が配置につく。

明久「じゃあ行こうか」

貴浩「ああ。指定は数学で頼む」

雄二「了解、『アウェイクン』」

秀吉「了解じゃ『アウェイクン』」

雄二と秀吉のキーワードを受けて、白金の腕輪が起動。
ソレを中心に、数学の召喚フィールドが展開される。

貴浩「さて、行くぞ明久！『試験召喚獣召喚！！』

明久「うん！『試験（サモン）召喚獣召喚！！！』」

Ｆクラス　≪　数学　≫
織村貴浩　＆　吉井明久
７９９点　　１３９点

貴浩「悪いな明久。俺の得意科目にして」

明久「別にいいよ。それにしても点数高いね」

貴浩「そうか？まぁいい。じゃ、行くぞ」

作戦内容はいたって簡単。
システム冷却用の通気口から侵入して故障個所を探しての修復という単純な作業

……だが。

明久「っ！」

俺達が先を進んでいくと突如召喚獣が数体現れた。

Eクラス　≪　数学　≫
　中林宏美　＆　三上良子
　９９点　　８７点

Bクラス
　菊入真由美　＆　岩下律子
　１７９点　　１６３点

貴浩「どうやら中に入って欲しくないらしいな」

明久「そうみたいだね」

お互い武器を構え、暴走召喚獣と相対する明久と貴浩の召喚獣。

明久「でも」

そして明久の召喚獣が駆け出し、貴浩の召喚獣も後に続く。

貴・明「「俺（僕）達のコンビは最強だ！」」

貴浩と明久の召喚獣がお互い1体を真っ二つに切り裂さいた。
これでEクラスの2人を倒した。

貴・明「「魔人剣！」」

お互いに魔人剣を放つ。

貴浩「明久！」

明久「うん！」

貴・明「「魔人連牙斬！！」」

2人の魔神剣を交互に繰り出した後、
とどめの一撃で2人同時に衝撃波を発生させた。

この攻撃によりBクラスの2人を切り裂いた。

明久「上手くできたね」

貴浩「正直ぶっつけ本番だから、不安だったが出来るもんだな」

明久「この調子で攻撃合わせて行こうね」

これは明久と貴浩だからできる技だ。
お互いの召喚技術も高く、意志を通じ合う事が出来るからこその技

である。

雄二「２人共凄いな」

秀吉「さすがと言うべきじゃな」

優子「本当に凄いわね２人は」

愛子「本当に凄いよ。普通あんな事できないよ」

すると、また奥から召喚獣が現れる。

≪　数学　≫

Ｂクラス　金田一祐子　１６２点
Ｃクラス　入江真美　１３６点
Ｅクラス　手越夢　１０１点

Ｄクラス　玉野美紀　１１３点
Ｅクラス　今野梓　９４点

貴浩「チッ！数が多いな」

明久「だけど」

貴・明「「獅子戦吼！！」」

お互いに獅子の形の闘気を発射し、敵をはじき飛ばす。

貴・明「「獅子爆撃！！」」

先ほどより大きい闘気を発射し、敵をはじき飛ばした。

貴浩「負けないな！」

明久「負けるはずないよ」

俺と明久は息を合わせ次々と暴走召喚獣を倒しながら進んでいく。

システム異常編　～疲れ～

俺と明久は息を合わせ次々と暴走召喚獣を倒しながら進んでいくが、

貴浩「コレじゃキリがないな。
　明久、一旦別れて中にもう一度落ち合おう！」

明久「うん！じゃあサーバールームで！」

俺と明久の召喚獣は、それぞれの追手を振り切って通気口の中へ入っていく。
それを追う暴走召喚獣達だが、魔人剣で追い払う。

俺と明久は、ムッツリーニの用意したカメラの
映像受信装置を装着し、起動させた。

毎度ながら何故そんなものを持っているのかは聞かない。

貴浩「さて、ならナビを頼むぞ？」

愛子『了解！任せてよ』

優子『アタシと愛子に任せなさい』

ここからは完全に自分の目では見えないので
別室で待機しているメンバーに誘導してもらう。
俺の通信機器から聞こえてくるのは、愛子と優子の声。
俺のナビゲートはこの２名で、

明久のは……

姫路『よろしくお願いします』

島田『ナビゲートしてあげるんだから、しっかりしなさいよアキ？』

明久「もちろんだよ」

姫路と島田であった。……正直不安だな。

高橋「本当に大丈夫なのでしょうか？」

森田「任せるしかないわよ。現状でどうにか出来るのもあのバカ共だけなんだからね」

そして敵をドンドン倒していくと

そして……

≪数学≫

Ｆクラス　吉井明久　ＶＳ　Ａクラス　安東知美
１５９点　３１４点

Ｆクラス　織村貴浩　ＶＳ　Ａクラス　斉藤理子
６５６点　２９５点

たった2体で全暴走召喚獣と戦う様な状況だけに、
少しずつ点数も体力も消耗していた。
しかもAクラスの暴走召喚獣も現れ始めた。

カメラを通しての戦い、観察処分者の処理によるフィードバック。

明久や貴浩も長時間におよぶフィードバックによる疲労にはまだ慣れてはいない。
合宿の時でもそこまで長く召喚していないし、あっても1対1の状況だった。
しかし、今回は今までと全く違う感覚内での戦いの分もあるし、相手も複数いる状態だ。
しかもいつ出てくるのかも分からない状況だ。
2人に疲労も蓄積されていく。

貴浩「ふぅ」

優子「大丈夫、貴浩？」

貴浩「ああ……さすがに少し疲れてきたな」

愛子「あともう少しでサーバールームのフロアだよ。頑張って」

貴浩「ああ、さてもう一踏ん張りだな。頑張るとしますかね」

点数こそ勝っていたものの、先へ進むにつれ徐々に精度も落ちてきていた。

貴浩「これで霧島や姫路らAクラスレベルが

どんどんでてきたら、勝てる自信ないぞ？」

今までの戦いではＢ～Ｅクラスのメンバーが中心で出てきたので何とかなったが、
まだあまりＡクラスとＦクラスの暴走召喚獣とは出会っていなかったのが気がかりだ。
しかもまだ成績トップ１０に入るメンバーが出てきていない。

明久「あっ、僕の召喚獣はもうすぐサーバールームだ」

貴浩「俺もだな……って何！？」

２人して別々の場所からサーバールームへと進入したのだが、

≪数学≫

Ｆクラス		
織村貴浩	６０１点	
	ＶＳ	
Ａクラス		
霧島翔子	５９１点	
木下優子	３９９点	
工藤愛子	３５２点	
八神なのは	４０５点	
不知火刀麻	４００点	
砂原鈴歌	３３１点	
椎名雪	３１９点	

久保利光　３２０点
Ａクラスモブ×２０人　平均３００点

Ｆクラス
吉井明久　１０９点

ＶＳ

Ｆクラス
坂本雄二　２９８点
土屋康太　４５点
木下秀吉　５５点
木下命　１９８点
織村楓　３５４点
影沼光一　４９３点
姫路瑞希　４２５点
島田美波　２７９点
Ｆクラスモブ×３０人　平均　５０点

そこには最悪の状況が発生していた。

今、俺達の前には最悪の状況を目のあたりにしていた。

貴浩「げぇ！？待ち伏せだと！？
しかも２年成績トップ１０総勢じゃねぇか！？
それにＡクラスのヤツラが固まってでてくるだと！？」

明久「こっちはＦクラスの皆だよ！」

雄二「よりにも寄って、こんなところで！」

ＡクラスとＦクラスの暴走召喚獣が俺と明久の召喚獣目掛けて突進してくる。

お互い迎え撃つべく武器を構え迎撃するしていく。

優子「貴浩！右から久保君が武器を振りかぶってくるわ」

貴浩「了解、右だな！」

愛子「今度は後ろから代表が迫ってきてるよ」

貴浩「了解！」

俺は優子と愛子のサポートにより上手く敵の攻撃を回避していく。
ムッツリーニから小型のカメラを借りてつけてはいるが、
真正面しか見えないので、苦戦するかと思われていたが、
優子と愛子の２人のサポートのおかげで上手く立ちまわれている。

そのおかげでAクラスのモブを2人倒すことができた。

だが、明久のほうは……

姫路「明久君左です」　島田「アキ右よ！」

明久「え？え？ちょっ、同時に言わないでよ！っ！」

明久は姫路と島田と息が合わずギリギリの戦いをしていた。

それを見かねた俺は

貴浩「だから不安だったんだよ！」

俺は明久の援護に向かおうと急に方向転換する。

優子「貴浩！そっちは危ないわ！」

貴浩「え？」

そこで少し周りを見ていなかったのが悪かった。

ザクッ！

貴浩「ぐあっ！」

俺の召喚獣は後ろから攻撃を受けてしまう。

普段ならこんな事にはならないだろうが、今回は戦い方が違う上に相手もやっかいだ。

さすがにAクラスとあって今までの敵とは動きが違う。
Fクラスも今まで激戦を繰りぬけてきただけありAクラス並の動きをしている。

貴浩「だが、そう簡単にやられるかよ！『グラビトン！』」

俺は腕輪を発動させサーバールーム全体に重力を発生させる。

貴浩「明久今だ。一気にいくぞ！『フルブラスト』」

明久「うん」

貴浩「まずは霧島からだ。さすがにあの点数はキツいからな」

明久「僕は姫路さんだね『ダブル』！！」

俺はもう1つの腕輪を発動させ、一気に勝負を決めようとした。
明久も武器を構えそして腕輪を発動させ、点数の高い姫路の召喚獣へと迫っていく。

その時だった。

パキィン

俺が発生させた重力場が突然かき消された。

貴浩「なぁ！？俺の重力場が消えただと！？」

優子「何が起きたの？」

突然の事で俺は動揺してしまう。
その瞬間、霧島の召喚獣の攻撃を食らってしまう。

貴浩「ぐぅ、しまった！だがなぜだ！？
俺の重力場も消えてるし『フルブラスト』も消えてるぞ」

重力場だけでなくフルブラストも消えていた。
俺の腕輪の力が消えているようだった。

明久「僕のもだ」

明久のほうを見てみると明久の腕輪の能力も消えていた。

刀麻「しまった！」

そこで刀麻が突然声をあげる。

雄二「どうしたんだ刀麻？」

刀麻「おそらく俺の召喚獣の力だ。
俺の召喚獣の腕輪の力は『能力封じ』なんだ。
だから貴浩が発生させた腕輪の能力は消えたんだ」

秀吉「なんじゃと！？」

愛子「それなら貴浩君は腕輪なしで戦わないといけないの？」

貴浩「それは本当か刀麻！」

刀麻「ああ」

雄二「まさか暴走召喚獣が腕輪を発動させるとはな」

刀麻「それにこちらは腕輪が使用不可能で、
向こうは使用可能だとするとかなりキツいな」

その間にも貴浩と明久は窮地に追いやられていた。

貴浩の召喚獣の左腕が霧島の召喚獣に刺し貫かれ、
刀麻の攻撃により切り裂かれる。

そして、貴浩の腕にフィードバックが

貴浩「グゥウウウ！！！！」

優子「貴浩！？」

愛子「貴浩君！？」

明久「貴浩大丈夫！？」

秀吉「明久よ！余所見をするでない！」

明久「え！？」

明久のほうには姫路と島田を中心に襲い掛かってきた。

明久「ひっ、姫路さんに、美波……」

命「島田さんなんとかコントロールできないんですか？」

島田『ダメ！　コントロールできない！』

命「そっそんな……」

美波の召喚獣が突進し、明久の召喚獣の武器を弾く。
姫路の召喚獣がガラ空きとなった腹を大剣で刺し貫いた。

明久「ぐあああああああっ！！」

姫路『明久君！？』

そして姫路の召喚獣は刺したままの状態で横に大きく振り回し、
壁のほうへと投げつけた。

バン！

明久の召喚獣は剣が刺さったまま壁に激突し、床に落ちる。
それに続く様に、島田の召喚獣が明久の召喚獣を踏みつけ殴りつけていた。

それからはわざとトドメをささなかったかのように殴る蹴るの攻撃が続いていく。

明久「うああっ！　ぐっ、あああああ！！」

貴浩「明久！　うぐっ！？」

俺はなんとか片腕でＡクラスモブたちを数人片付け、
明久を助けに行こうとしたが、砂原と椎名の召喚獣によって両足を

撃ち抜かれた。
運の悪い事に2人の召喚獣の武器はライフルと拳銃であり、
今の俺にとって相性最悪の武器だった。
そこへ久保の召喚獣と霧島の召喚獣が迫ってくる。

攻撃を防ぎたくても片腕はすでになく両足も撃ち抜かれ身動きが取れない。

雄二「……姫路、島田、本当にお前らコントロール出来ないのか？」

島田『ちょっと坂本、何でウチ等を疑うのよ！？』

姫路『そうです！　私達はあんな酷い事なんてしません！！』

秀吉「……思いきり普段の光景とデジャヴがあり過ぎるぞい」

雄二「……俺もそう思う」

雄二や秀吉ですら、暴走召喚獣の行動にデジャヴを感じ取っていた。

ドサッ！

雄二「あ、明久！？」

命「明久君！？」

刀麻「やべえ、すぐに保健室へ！！」

明久は姫路と島田の攻撃によるフィードバックに耐えきれず、その場で崩れ落ちた。

優子『あれって、姫路さんの腕輪!?」

命『明久君!逃げて!!」

雄二「だ、だめだ。明久は気絶していて動かねぇ」

貴浩「チッ」

俺は明久を助けに行きたいがAクラスの暴走召喚獣が
俺のまわりを固めているので動くに動けない。
そして姫路の召喚獣が腕輪をつけた手を掲げ、明久の召喚獣を狙う。
腕輪が輝き熱線が放たれ、明久の召喚獣を消し飛ばした。

そして俺の召喚獣もAクラスの暴走召喚獣たちによって串刺しにされ消えた。

貴浩「うっ……無念」

0点になると同時に、意識を手放した。

高橋「……作戦失敗、ですね」

学園長「……やれやれ、仕切りなおしだね」

システム異常編　～失敗～

試験召喚システム修理作業、暴走召喚獣の妨害により失敗

織村貴浩、吉井明久の召喚獣2体による撃破合計、８０体

内訳は、Ａクラス１０名、
Ｂクラス１２名、
Ｃクラス１３名、
Ｄクラス１５名、
Ｅクラス１０名、
Ｆクラス１０名。

高橋「以上が、作戦の結果報告です」

学園長「ああ……しかしあのバカ共、たった2人でよくここまで倒せたね」

森田「まぁ仮に教師を倒していないわね。
条件を限定したら1クラスは簡単に制圧できるわね」

撃破した暴走召喚獣の名簿を見て、呆れつつも感心する学園長。

高橋女史と森田先生も、そのスコアに多少満足そうな表情を見せる。

学園長「で、あのガキ共は？」

高橋「貴浩君は先ほど目を覚ましましたが
吉井君はまだ意識を取り戻してはいません」

学園長「その辺りは無理ないさね。あれを見ればね」

揃いもそろって、Ａクラス級のリンチともいえる猛攻を受けた以上、
そのフィードバックで多々で済む訳がない。
明久については、フィードバックに慣れてるとは言え、
気絶した状態で腕輪での攻撃を受けているだけに尚更だった。

学園長「……しかし暴走してたとは思えないほど、
　　個人を狙ったかのような猛攻だったねえ」

高橋「……見ていて痛々しい事この上ありませんでした」

森田「さすがに見ていて気分がよくないわ」

学園長「やれやれ……今から延期して貰う為の言い訳でも考えておくかね」

時は放課後、学会へのお披露目は明日の午後２：００からになっている。
修理や準備などの時間を考慮した場合を考えると、時間は刻一刻と迫っていた。

～保健室～

雄二「貴浩大丈夫か？」

貴浩「……ああ、なんとかな。ここは？」

秀吉「保健室じゃ。お主の召喚獣が暴走召喚獣に襲われて、
　　今まで気絶しておったのじゃ」

楓「兄さん…本当に大丈夫？」

貴浩「……そうか、でも今は大丈夫だな」

優子「本当に大丈夫なの？」

愛子「気分悪くない？」

貴浩「ああ、大丈夫だって、まぁしいて言えば
少し小腹が空いて喉が渇いたぐらいかな」

雄二「今の状況で腹が減るか……まぁそれは正常ってことか……」

貴浩「そういうこと」

優子「それなら何か飲み物買ってくるわね」

愛子「僕も一緒に行くよ」

貴浩「ああ、悪いな2人共」

そういうと優子と愛子は保健室から出て行った。

楓「兄さん。本当に大丈夫なの？」

貴浩「ああ、大丈夫だって心配しすぎだ」

秀吉「心配したのじゃぞ？」

貴浩「悪い。だがもう大丈夫だ」

雄二「で、起きていきなりで申し訳ないがどうする？続けるのか？」

貴浩「……」

秀吉「雄二よ。今その話は酷ではないのかの」

雄二「そう思うのは仕方がないが時間がないんだ。
で、どうする？」

貴浩「俺は続行する。
戦いの中で少し突破の糸口を見つけたかも知れないしな。
ただ明久がどうするのかはわからないが……」

雄二「そうだな。あれだけの攻撃を受けたんだ。
明久は難しいかもな」

俺達は明久が目を覚ますのを待った。

システム異常編　～自業自得だろ～

明久「うっ……うぅ……ここは……」

命「あ、明久君!?気がついたんですね!よ、良かった」

島田「あっ、気がついたアキ?」

姫路「よかった……心配してたんですよ?明久君」

明久が気がつくと、看病していた命と島田と姫路が安著の声を挙げる。

そこで、何があったかを思い出した明久は……。

明久「うっ、うん。ありがとう……」

明久は先ほどの件があり島田と姫路から少しだけ距離をとる。

島田「……予想していたとは言え、やっぱりこうなるのね」

姫路「……何だか明久君の私達への評価は酷くなる一方です」

貴浩（仕方ないだろ。自業自得だ）

秀吉（そうじゃの。自業自得じゃの）

雄二「おう、目が覚めたか明久」

貴浩「大丈夫か?」

明久「貴浩！大丈夫だった？」

貴浩「俺は大丈夫だ。お前ほど残酷じゃなかったからな」

秀吉「なにはともあれ、目が覚めて良かったぞい」

なのは「明久君も、どういう訳かトドメが腕輪での攻撃だからね」

雄二「……さすがにあれはいくらなんでも、
暴走してるにしては不自然な事だから仕方ないな」

疑われた姫路と島田にしてみれば、不本意この上なかったのだが、
今までの行動を見てみても『自業自得』という言葉しか皆には思い浮かばない。

貴浩「で、明久。起きていきなりで悪いがどうする？作戦続行するか？」

明久「もちろんだよ。このままじゃ終われないよ」

命「あ、明久君大丈夫なんですか？」

明久「うん、大丈夫だよ命。それにまだ諦めたくないしね」

貴浩「なら、寝起きですぐはきついだろうが、回復試験受けるぞ？
さっきババァ長に聞いたけど、
学会へのお披露目とやらは明日の午後2時からしい」

雄二「で、準備や修理の時間を含めると

１２時までがタイムリミットだな」

明久「じゃあ、それまでに何とかしないと」

雄二「ああ。ババァは最悪キャンセルも考えてるだろうが、
そんな事すれば評判は更にガタ落ちだ」

貴浩「最悪、俺等全員が転校という事になるだろうな」

事が事だけに、全員が深刻な表情となる。

貴浩「で、もう今日は時間が遅い」

明久「え？」

明久が窓の外を見てみるともう夕方になっていた。

雄二「だから、今から４人は回復試験を受けて、
明日の朝からもう一度作戦開始になる。
そしてそれがラストチャンスだ」

４人というのは俺と明久のことはもちろんのこと、雄二と秀吉も含まれる。

２人は戦闘はしていないが腕輪を長時間発動しているので、
徐々に点数が減っていっていたのだ。

明久「うん、わかった」

貴浩「じゃあ、受けに行くか」

そして俺たち４人は試験を受け今日は帰宅した。

システム異常編　～明久のナビゲーター～

～そして翌日の朝～

森田「さぁアンタたち準備はいい？」

明久「はい、大丈夫です」

貴浩「ああ……ってちょっと待った。
　忘れるところだった」

森田「何を忘れてたのよ？」

貴浩「姫路と島田、明久のナビゲーター代われ」

姫路・島田「「えっ？」」

２人は明久のナビゲートをしようと準備していたが、
俺の言葉で、動きが止まる。

貴浩「明久のナビゲートは違うヤツに頼むから、お前らはやらなくていい」

島田「な、なんでよ？」

姫路「そうです！納得できません！！」

貴浩「もちろん理由はある。それはな昨日のナビゲートしている所をムッツリーニに頼んでいて録画してもらっていて帰ってから

見たんだがな。
正直お粗末すぎる。優子と愛子は俺のことを考えて、
俺にわかるようサポートしてくれたが、
お前らのは……正直サポートは言えないな」

森田「まぁ確かにそうね」

姫路「も、森田先生!?」

森田「昨日の見てたけどアンタたちのはスポーツ観戦と同じよ。
で、アナタたちがサポートしてから
吉井の操作技術は低下したのがわかったわ。
合宿の時の吉井ならあそこまで簡単にはやられないわよ。
だてに学年１の操作技術をもっていないわね」

明久「え?僕今、森田先生にほめられたの?」

雄二「ああ、そうだな。褒められたな」

島田「じゃ、じゃあウチら以外に誰がアキのサポートするのよ!」

貴浩「まぁ１人は命だな」

命「え?えっ?私ですか?
む、む、無理ですよ。私じゃ明久君のサポートなんてできませんよ」

命が俺に近づいてきて首を振る続ける。

貴浩「大丈夫だ。命はよくウチで俺達と一緒にゲームしてるだろ?」

命「してますけど……」

貴浩「それと同じように明久をサポートしてやればいい」

命「大丈夫でしょうか？」

貴浩「大丈夫だ。命ならできるさ」

命「……出来る限り頑張ります」

貴浩「おう、頑張れよ」

姫路「もう1人はどうするんですか？
まさか命ちゃん1人でやらせるわけないですよね？」

貴浩「当たり前だ。さすがにそんな事はしないさ」

島田「なら――」

貴浩「だからスケットを呼んでる」

ガラッ

そこへ誰かが扉を開けて入ってきた。

貴浩「遅かったな久保」

そう、ここへ入ってきたのは久保利光だった。

久保「遅れてすまない。だがいいのだろうか停学中の僕が来ても」

貴浩「大丈夫だ。ちゃんとＯＫはもらっている」

森田「そうね。今日の朝、学園長から許可をもらってるから問題ないわ」

久保「で、いきなり僕を呼び出して何のようだい？
　電話でサポートしてほしいと言っていたけど？」

貴浩「ああ、久保には明久のナビゲーターをやってもらいたい」

久保「ナビゲーター？」

そこで俺は久保の簡単にこの件について説明した

久保「なるほど。なら僕は吉井君のサポートをすればいいんだね」

貴浩「そのとおりだ」

久保「だが織村君。本当に僕で良いのかい？　僕は合宿で君を――」

貴浩「良いに決まってるから呼んだんだ。
　チャンスやるって言ったからな。
　それを生かすかは殺すかはお前に任せる」

久保「ありがとう。なら精一杯頑張らせてもらうよ」

貴浩「というわけだ。明久のサポートには命と久保が入る」

雄二「……おい貴浩良いのか？久保で？
　アイツは明久のことを（ボソボソ）」

そこで雄二が俺に近づいてきて耳元で小さく囁いた。

貴浩「それは大丈夫だ。今のアイツが求めてるのは友情だからな」

雄二「そうか。ならいいが」

システムダウン編

そしていよいよ、２度目にして最後の作戦が始まる。

楓「数学フィールド……アウェイクン！」

楓の腕輪が、召喚フィールドを展開。

今回は前回の反省点を生かすため
まずは楓が秀吉から腕輪を借り、召喚フィールドを形成する。
サーバールームにたどり着く前あたりで
雄二と秀吉が日本史の召喚フィールドを形成する作戦だ。

それなら、いくら行くまでに点数が消費していようが、
サーバールーム前で科目を変えるので、
点数は高いままで戦闘を望む事ができる。

そして、行動開始！

≪数学≫　Ｆクラス
織村貴浩　　＆　　吉井明久
８１３点　　１５２点

貴浩「さて、明久行くぞ」

明久「うん！早速きたみたい」

Ｂクラス　根本恭二　１８７点
根城敦　　１８１点

貴浩「なんだ?根っこコンビか」

明久「なら楽勝だね」

俺達はそういうと一気に駆け出していき、一閃し消滅させた。

・・・・・・・・・・・・

俺と明久は暴走召喚獣を倒しながら進んでいく。

貴浩「さて、そろそろサーバールームだ」

雄二「こちらの準備は出来てるぞ」

明久「じゃあ、お願いね」

そして当初の作戦通り、
まずは雄二が日本史のフィールドを形成する。

そして俺達が雄二のフィールドに入ったのを確認して、
楓がフィールドを閉じ、腕輪を秀吉に渡し秀吉がフィールドを形成する。

サーバールーム内は意外と広いので2人分の
フィールドがないと戦うのが狭くてきつくなるので、

雄二と秀吉のフィールドが必要となる。

≪日本史≫
織村貴浩　＆　吉井明久
７１２点　　４２３点

雄二「……明久なんだ？その点数は？」

秀吉「４００点越えじゃと！？あの明久が！？」

島田「あのアキがあんな高い点数出すなんて！？」

命「凄いです。さすが明久君です！！」

優子「アタシよりも点数が高いなんて……」

久保「さすが吉井君だね。僕も頑張らないと」

愛子「久保君の言うとおりだね。僕達も頑張らないといけないね」

優子「そうね。勉強も……恋愛も（ボソっ）」

明久「アハハハ、さすがにこの作戦は失敗するわけには行かないからね。
だから昨日の試験では数学と日本史以外のテストは捨てて、この２科目だけに集中したんだ」

命「それでもその点数は凄いですよ」

貴浩「俺も驚いたな」

雄二「明久がそこまで頑張ったんだ。俺も頑張らないとな」

翔子「……雄二ならできる」

雄二「ああ、そうだな。
　明久があそこまでの点数なら先に刀麻を片付けたほうがいいな」

貴浩「そうだな。刀麻の腕輪は凄い邪魔だからな」

ここまで来るのに、
前回サーバールームにいたヤツらの召喚獣はいなかった。

貴浩「……まぁサールームの中で待ってるわけか」

明久「だろうね」

俺と明久は前回敗れた場所である召喚獣はサーバールームへ入り、
そして、周りを見回した。
そしたら予想通り、昨日の召喚獣たちが勢ぞろいしていた。
ただ少し違ったのは、昨日俺が倒した召喚獣はいなかったことだ。

貴浩「じゃあ、行くぞ明久！ラストミッションだ！！」

明久「うん！狙うは刀麻の召喚銃だね」

≪日本史≫

Aクラス
霧島翔子　６５６点
木下優子　３８９点
工藤愛子　３３２点
八神なのは　２９５点
不知火刀麻　５６１点
砂原鈴歌　２９１点
椎名雪　２５９点
久保利光　３９１点
Aクラスモブ×１０人　平均２８０点

Fクラス
坂本雄二　２８８点
土屋康太　５５点
木下秀吉　６５点
木下命　２１８点
織村楓　５５４点
影沼光一　４４４点
姫路瑞希　３９５点
島田美波　３９点
Fクラスモブ×２０人　平均　５０点

貴浩「俺が援護するから明久は狙っていけ！
　優子、愛子、久保、命、俺と明久のサポート任せた！」
４人「「「「任せて（ください）！」」」」

そして、戦いの火蓋が落とされた。

システムダウン編　～作戦1～

俺は刀を構え明久を援護していく。
明久は俺の援護を背に受け刀麻の召喚獣へ向かっていく。

相手の召喚獣もこちらが刀麻の召喚獣を狙っているのが分かっているようで
刀麻の召喚獣を後ろに下がらせ、他のヤツらが前を固めている。

まぁある3体の召喚獣はここから少し離れたところにいるが……

貴浩「明久！1度俺の後ろに下がれ！」

俺は明久に指示を出すと明久はすぐに俺の後ろに下がる。

貴浩「行くぞ『グラビトンノヴァ』っ！！」

俺は腕輪を発動させ、相手に向かって攻撃を放つ。

だが、それはすぐに刀麻の腕輪によってかき消される。

……作戦通り

秀吉「どうして貴浩は腕輪を発動させたのじゃ？」

優子「不知火君がいるから腕輪を発動させても意味がないじゃない。
それにその発動させた分の点数も引かれるじゃない」

雄二「いや、これには意味がある。そうだろ刀麻」

刀麻「ああ、俺の腕輪の弱点は2つあって、
1つは発動に100点消費する事、
2つ目は発動させたらフィールド内全てに効果が発生するわけだ。
だから、相手が腕輪を発動させたい時は俺の腕輪を
1度消さないといけないからな」

雄二「それに点数を見てみろ」

＜　日本史　＞

織村貴浩　702点

不知火刀麻　461点

愛子「不知火君の点数が100点減っていて、
貴浩君の点数は10点しか減っていないね」

雄二「そうだ。貴浩はさっき少ししかチャージしていない攻撃をしたんだ。
しかもこれで俺達もだが相手も腕輪を発動する事ができない。
ならあとは単純な戦いだ。まぁそれでもきつい事は代わりないが……

あとは貴浩が言っていた賭けにかけるしかないが……」

命「賭け？」

雄二「ああ、俺も聞いていないがな」

・・・・・・・・・・・・・

貴浩「明久、俺の背中を踏み越えていけ！」

明久「わかった！」

明久は俺の背を足場にして刀麻の召喚獣がいるところまで暴走召喚獣たちを飛び越えて行った。

明久「よし、じゃあこのまま刀麻の召喚獣を倒す！」

そこから明久と刀麻の召喚獣の戦いが始まった。

システムダウン編　～明久ＶＳ刀麻～

貴浩「明久のところには行かせないぜ」

俺は右手に刀を左手に銃を構え敵を蹴散らしていく。

まずはモブ達からだ。

人数を減らさない事にはどうにもならないからな。

俺は敵の攻撃をしゃがんだり横に跳ねたり、

刀で防ぎながら徐々に敵の急所を狙ってを倒していく。

この人数差だと普通はまず倒す事さえ難しいが、

今回に限ってはそれができている。

その理由は２つ

１つ目は優子と愛子のおかげだ。

敵の位置や攻撃方法を逐一教えてくれるので、

集中して敵を倒す事ができている。

さすがＡクラスといったところかな。指示が的確で分かりやすい。

２つ目は、おそろくこれが大きいだろう。

それは、暴走召喚獣と暴走召喚獣同士が争っているからだ。

いや、言い方が少し違うか……
暴走召喚獣の中に俺と明久を援護してくれる召喚獣がいることだ。

それは光一と楓、命の召喚獣である。
この3人の召喚獣は昨日の戦闘でもそうだったのだが、
俺と明久の召喚獣にまったく攻撃をしていなかったのだ。
それは俺の召喚獣がたまたま3人の召喚獣に近づいたときに気づいた。

3体の召喚獣は攻撃せずにずっと停止していたので、
俺はもしかしたらと思っていたら今の状況だ。

3体の召喚獣が俺と明久の召喚獣を守るかのように、
暴走召喚獣の前に立ちふさがり相手をしてくれている。

しかもそれに伴い、秀吉の召喚獣も加わり、相手してくれている。
その後も優子の召喚獣も味方と言うわけではないが、
命の召喚獣が狙われそうになったらすぐに助けに行っている。
暴走召喚獣は召喚者に似るんだろうな。
これを見てるとそう思えてくる。
でもそのおかげで今は助かってるんだがな。

・・・

そしてようやくモブたちを片付けることができた。

貴浩「さて、ここからが大変だな。
今までのヤツラと違って動きが段違いだからな」

明久は刀麻の召喚獣と対峙しているから、
光一、楓、命、秀吉の４人の召喚獣と協力しながら倒していくしかないか。

～明久ＳＩＤＥ～

僕は今、刀麻の暴走召喚獣と戦闘を繰り広げていた。

今のところほぼ互角の勝負を繰り広げていた。

召喚技術では僕のほうが勝っているが、点数と武器の差では僕が負けていた。

何度か刀麻の暴走召喚獣と打ち合い
お互い少しずつ点数が引かれていく。

≪日本史≫

吉井明久　４０５点

ＶＳ

不知火刀麻　５３９点

明久「さすが刀麻の召喚獣だね。物凄く強い。
……このままじゃラチがあかないね」

僕は貴浩のほうを見てみてると、
貴浩は周りのザｋ――――モブたちを倒して、
今は、楓や命、光一、秀吉たちと協力して何とか対峙していた。

明久「貴浩も頑張ってるんだ僕も頑張らないと。
それに正直刀麻も強いけど合宿で戦った先生達のほうが強い！」

僕は再び刀麻の召喚獣のほうを見て武器を構え、腰を落とす。

明久（一瞬で終わらせてみせる）

僕は１度深呼吸すると

明久「一気に終わらせてやる！！」

僕は木刀を構え一気に切り抜ける。

明久「刹那斬」

木刀をしまうと、刀麻の召喚獣が切り裂かれていた。

明久「よしっ！刀麻の召喚獣討ち取ったぁ！！」

システムダウン編　～貴浩最強技～

貴浩「よし、明久が刀麻を討ち取ったか。
　なら腕輪が使える」

そこで俺は1度暴走召喚獣から距離をとる。

明久「貴浩！こっちは終わったよ」

そこへ明久が駆け寄ってくる。

貴浩「明久は俺の後ろに下がってくれ。
　一撃ですべてを終わらせる」

明久「えっ、わ、わかった」

雄二「貴浩そんなことできるのか？」

貴浩「できるはずだ。俺のこの腕輪なら。よしっ行くぞっ！！」

俺はそういうと腕を前に出し2つの腕輪を発動させる。

貴浩「これが俺の腕輪の最強の技だッ！！
　『ブラックホール』！！」

俺は技の名前をいうと暴走召喚獣の付近に
ブラックホールを生成した。

雄二「ブラックホールだとっ！？」

優子「そんなこともできるの！？」

これをスウリーンで見ていた人たちは俺の行動に驚いていた。

森田「確かにブラックホールは、きわめて高密度で大質量で、
きわめて強い重力で出来てるって説もあるから出来なくはない
いかもしれないけど……
まさか召喚獣の力で出来てしまうなんて驚きね」

これにはさすがの森田先生も驚いていた。

そして技の効力がきれるとそこには暴走召喚獣の姿は見えなかった。

≪日本史≫
織村貴浩　＆　吉井明久
１点　４００点

明久「あれ？貴浩の点数が……しかも腕輪の効果も……」

そこで明久が見たのは
俺の召喚獣の点数が１点なのと、
腕輪の効力で赤く染まっているはずの召喚獣が元の色に戻っていた
のだった。

貴浩「ああ、今の技の副作用だな。
あの技の使用条件は残りの点数が４００点以上あることと。
しかも、『ブラスト』の腕輪を最大まで効力を上げていないと
使用できないんだ」

雄二「っていうことは2つの腕輪がないと使用できないってことか」

貴浩「そういうこと。1度召喚獣の腕輪だけでやってみたことがあるんだが、
　　技に負けて俺の召喚獣まで飲み込まれてしまった」

愛子「ってことは。あの腕輪は踏ん張るために必要ってことだね」

貴浩「そういうことだな」

明久「でも、これで作戦は成功だね。あとは修理をするだけだね」

貴浩「そうだな」

俺たちはそこで一安心かと思っていたが

久保「吉井君っ危ないっ!!」

久保の咄嗟の言葉に反応し明久が後方へと回避すると、
明久がいたところには2つのクレーターが出来ていた。
そしてそのクレーターにはある2つの召喚獣の姿があった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8092t/

バカと俺たちの召喚獣

2011年12月29日18時47分発行